

師權律師寛長樂寺律師是也。白河准后宮女房、故別當

入道惟方孫不知實名、鎌倉尼念阿彌陀佛、坂東尼、

東山一經谷住僧大進公、三條小川陪從信賢、祇陀林寺

經師、四條京極薄師太郎正家或眞清歟、西山の水の尾峯

賣炭老翁荷薪樵夫、紫雲聳見之

〔殘缺十九〕于時建曆二年壬申正月廿五日午遷化行年滿八十

伏以釋尊圓寂之月にすゝめる事一月、茶毘之煙に異也

といへども、彌陀感應之日にしりぞく事十日、利生の

風これに同哉。觀音垂跡の勝地、勢至方便善巧如此。

然後門弟等世の傍例にまかせて遺骨を奉納、中陰の報

恩ををくりたてまつる

法然上人傳法繪 下卷

七箇條の起請文

一あまねく予が門人の念佛上人等に告玉はく、いまだ一句の文をうかどはず、眞言止觀を破し、餘佛菩薩を謗じたてまつる事を停止すべき事

右道を立破するにいたつては、學生のふるところ也。愚人の境界にあらず。しかのみならず誹謗正法は彌陀の願に免除せられたり、その報まさに那落到墮すべし。豈癡闇のいたりにあらずや

一無智の身をもて有智の人にむかひ、別行のともがらにあふて、このみて諍論を致すことを停止すべき事
右論義は智者の有なり、さらに愚人の分にあらず。
又諍論のところにはもろくの煩惱起る。智者これを遠離すること自由句なり。いはむや一向念佛の行人においておや

一別解別行の人にむかふて愚癡偏執の心をもて、まさに本業を棄置し、しゐてこれを嫌喧すべしといふことを停止すべき事

右修道のならひ、おの／＼つとむるにあえて餘行を遮せず。西方要決にはく、別解別行のものにはすべて敬心をおこせ、もし輕慢を生ぜば、つみをえむこときわまりなしと云云。何ぞこの制をそむかむや
一念佛門において戒行なしと號して、専ら姪酒食肉をすゝめ、たま／＼律儀をまもるものを雜行となづく、彌陀の本願をたのむもの説て造悪をおそるゝことなかれといふ事を停止すべき事

右戒はこれ佛法の大地なり。衆行まち／＼なりといえども、おなじくこれをもはらにす。これをもて善導和尚めをあげて女人をみす。この行狀のおもむき本律の制淨業のたぐひにすぎたり。これに順せずばすべて如來の遺教をわすれたり、別しては祖師の舊跡にそむく、かたがた據なきもの歟

一是非をわきまへざる癡人、聖教をはなれ師説にあらす、おそらくはわたくしの義を述し、みだりに評論をくわだて智者にわらはれ、愚人を迷亂する事を停止すべき事

右無智の大天魔、この朝に再誕してみだりがはしく邪義を述す。すでに九十五種の異道に同じ、もともこれをかなしむべし

一癡鈍のみをもて、ことに唱道をこのみ、正法をしらすして種々の邪法をとき、無智の道俗を教化することを停止すべき事

右さとりなくして師となるは、これ梵網の制戒なり。黒闇のたぐひ、おのれが才をあらはさむとおもふて、淨土の教をもて藝能として、名利を貪し、檀越をのぞむ。おそらくは自由の妄説をなして世間の人を誑惑せむ。誑法のとがことにおもし。このともがらは國賊にあらずや

一みづから佛敎にあらざる邪法をときて正法とし、師

範の説と號する事を停止すべき事

右おのく一人なりといえども、つめるところ予一身のためなりととく、衆惡をして彌陀の敎文をけがし、師匠の惡名をあぐ、不善のはなはだしきこと、

これにすぎたる事なきもの也

以前七箇條甄録かくのごとし。一分も敎文をまなばむ弟子等はすこぶる旨趣を知りて、年來のあひだ念佛を修すといえども、聖敎に隨順してあえて人心にたがはず。世聽をおどろかすことなかれ。これによていまに三十箇年、無爲なり。日月をわたりて近王にいたるまで、この十箇年より以後、無智不善のともがら時々到來す。ただ彌陀の淨業を失するのみにあらず。又釋迦の遺法を汚穢す。何ぞ炳誠をくわへざらむや。この七箇條のうち、不當のあひだ、巨細の事等おほし。註述しがたし。すべてかくのごときらの無方つつしんでおかさべからず。このうへなほ制法をそむくともがらは、これ予門人にあらず。魔

の眷屬なり。さらに草庵にきたるべからず。自今以後おのゝききおよばむにしたがふて、かならずこれをふれらるべし。餘人あひともなうことなかれ。もししからずば、これ同意の人なり。かのとがなす

ごときものは同法をいかり、師匠をうらむることあははず。自業自得のことはり、ただおのれが身にありならくのみ。このゆへに、今日四方の行人をもよおして一室にあつめて告命すらく、風聞ありといえども、たしかにたれの人のとがとしらす。沙汰(しだ)にて愁歎す、年序をおくる、とどめもたすべきにあらず。先ちからのおよぶにしたかて、禁退(アキ)のはかりごとをめぐらすところ也。よてそのおもむきを録して門葉等にしめす狀如件

元久元年十一月七日

沙門 源空

見佛 聖遊 行西キ 源智 證空 尊西
感聖 善信 導亘 導西 寂西 西縁

幸西 西意 源連 行空 宗慶 親西
信蓮 佛心 蓮生

元久二年四月五日九條殿にまいりて退出の時、頭光を現じ蓮花をふみて、はるかに地をはなれてあゆみ給れば、入道殿下にわにありて拜奉給けり。さて人々にかゝる事ありつ。おのゝみつるかど仰ありければ、隆信入道戒心房、中納言の阿闍梨尋玄おがまざるよし申けり。これよりいよゝ御歸依はなはだしかりけり
元久三年正月四日、三尊大身を現じ給ふ。又五日おなじく現じ給ふと云々

元久三年七月に吉水をいでて、小松殿におはしましける時
こまつとはたれかいひけむおぼつかな
くもをささふるたかまつのを

權律師隆寛こまつどのへいられたりけるに、御堂のうしろどにて、上人一卷の書を持って隆寛のふところにおしれ給ふ。月輪殿の仰によりてつくり給へる選擇

集これなり

上西門院の女院にて上人七日の説戒ありけるに、からかきのうえに一の蛇くまなあり。夏の事なれば目おどろかずといえども、日ごとにかくる事もなくしてわだかまりて、すこぶる聴聞の氣色見へければ、人々目もあやに見けり。第七日の結願にあたりて、このくちなわからかきのうへにて死にけるほどに、そのかしら二にわかれて中より蝶のやうなるものいづとみる人もあり、又かしらばかりわれたりとみる人もありけり。又天人のぼるとみる人もありけり。昔遠行するひじり、その日くれにければ、野中つかあなのありけるにとどまりて、日もすがら無量義經をそらに誦しけるほどに、かのつかあなの中に五百の蝙蝠ありけり、この經を聴聞しつる功德によりて、このかはほり五百の天人となりて切利天にうまれぬといへり。今ひとすぢのくちなはあり。七日の説戒の功力にこたへて、雲をわけてのぼりぬるにやと人々隨喜をなす。かれは上代なるうへ

に大國なり。これは末代にして又小國なり。希代の勝事なり。凡人の所爲にあらずとぞ、ときの人々申ける。

わざわい三女よりおこるといふは本文なり。隱岐の法皇御熊野詣のひまに、小御所の女房達つれくをなくさめんために、上人の御弟子藏人入道安樂房は日本第一の美僧なりければ、これをめしよせて、禮讃をさせてそのまぎれに燈明をけして、これをとらへて、種々の不思議の事どもありけり。法皇御下向のちこれをきこしめして、逆鱗のあまり、住蓮安樂二人おばやがて死罪におこなはれにけり。その餘失なほやまずして上人のうえにおよび、建永二年二月二十七日、御年七十九つひ、おほしめしもよらぬ遠流の事あり。權者の凡夫に同ずる時、かくのごとくのならひなり。唐には一行阿闍梨、白樂天、わが朝には役行者、北野の天神、おどろくべからずといえども、おろかなるわれらがごときは、時にあたりては、しのびがたきなげきなるべし

同日大納言の律師まむら公金のちには嵯峨の正信上人と申

き。ことにたふとき人にて慈覺大師の御袈裟ならびに天台大乘戒等上人の一の御弟子、信空にこれをつたへ給へり。おなじく西國へながされ給とて御ふねにのりうつりてなごりをおしみ給けり。いとあはれにぞおぼゆる

攝津國經のしまにとまららせ給ければ、村里の男女大小老若まいりあつまりけり。その時念佛の御すめいよ／＼ひろく上下結縁かすをしらす。この鳴は六波羅の大相國一千部の法華經を石のおもてにかきて、おほくのほりふねをたすけ、人のなげきをやすめんために、つきはじめられけり。いまにいたるまでくだるふねには、かならず石をひろひておくならひなり。利益まことにかぎりなきところなり

播磨のむろにつき給ければ、君たちまいりけり。昔小松の天皇八人の姫宮を七道につかはして、君の名をとどめ給中に、天皇寺の別當僧正行尊拜堂のためにくだられける日、江口神崎の君達、御ふねちかくふねを

よせければ、神歌をうたひ出し侍りけり

うろちよりむろちにかよふしやかだにも

らごらがはははありとこそきけ

とうたいし侍りければ、さま／＼の總頭し給ひけり。

又おなじき宿の長者老病にせまりて最後のいまやうになににわがみおいぬらん、思へばいとこそかなしけれ。いまは西方極樂のみだのちかひをたのむべしと、

うたひて往生しけるところなり。よて上人をおがみたてまつりて縁をむすばむとて、くもかすみのごとく、

まいりあつまりける中に、げに／＼しける修行者とひ奉る。至誠心等の三心を具し候べきやうおぼ、いかが思ひさだめ候べき。上人答ての給く、三心を具する事はただ別のやうなし。阿彌陀佛の本願にわが名號を稱念せば、かならず來迎せむとおほせられたれば、決定して引接せられまいらすべしと、ふかく信じてころくに念じ口に稱するに、ものうからず。すでに往生したる心地して、最後の一念にいたるまで、おこたらざれ

ば、自然に三心具足するなり。又在家のものどもは、さほどに思はぬとも、念佛申すものは極樂にうまるるなればとて、つねに念佛をだに申せば三心は具足するなり。さればこそいふかひなきものの中にも神妙の往生はする事にてあれ。ただらく／＼と本願をたのみて南無阿彌陀佛とおこたらずとなふべき也

同三月二十六日讃岐國しほあきの地頭駿河の權の守高階の時速入道西仁がたちにつき給ふ。さま／＼のきらめきにて美膳を奉り、湯ひかせなどして、こころざしいとあはれなりけり。これを御覽じて上人の御歌

ごくらくもかくやあるらむあらたのし

とくまいらばや南無阿彌陀佛

あみだぶといふよりほかにつのくにの

なにはの事もあしかりぬべし

又云、名利は生死のきづな、三途の鐵網にかかる。稱名は往生のつばさ九品の蓮臺にのぼる

時速入道西仁問奉て云く、自力他力の事はいかがこ

ころえ候べき。答て云く、源空は殿上へまいるべききりやうにてはなけれども、上よりめせば二度までまいりたりき。これはわがまいるべきしきにはなけれども、上の御力なり。まして阿彌陀佛の御力にて、稱名の願にこたへて來迎させ給はむ事おば、なにの不審かあらむ。自身のつみおもくして無智なれば、佛もいかにしてかくすくひ給はむなど、思はむはつや／＼佛の願をしらざる人なり。かかる罪人をやす／＼とたすけむれうに、おこし給へる本願の名號をとなへながら、ちりばかりもうたがふ心あるまじきなり。十方衆生の中には有智無智有罪無罪善人惡人持戒破戒男子女人三寶滅盡ののちの百歳までの衆生みなこもれり。この三寶滅盡の時の念佛者と當時のわ入道まうだなどは佛のごとしかの時は人壽十歳とて戒定慧の三學の名をだにもきかず。いふばかりもなきものどもの來迎にあづかるべき道理をしりながら、わが身のすてられまいらすべきやうおば、いかがして案じいたすべき。ただ極樂のねが

はしくもなく、念佛の申されざらむ事のみこそ、往生のさわりにてはあるべけれ。かるがゆへに他力の本願とも超世の悲願とも申也。時遷入道いまこそこころえぬれとて、てをあはせてよろこびけり

讃岐國小松の庄は、弘法大師の建立、觀音の靈驗のところ、生福寺につき給ふ。そもく當國に同じき大師の父のために名をかりて善通寺といふ伽藍おはします。記文にいはく、これにまいらん人は、かならず一佛淨土のともなるべきよし、侍りければ、このたびのよろこび、これにありとてすなわちまいり給けり

同行遠名にきこへたるところ也。いさや、さぬきの松山みむといひければ、われもゆかむとて上人もわたり給たりけるに、人々おもしろさにたえずして、一首づつあるべきよし、いひければ上人

いかにしてわれごくらくにむかるべき
みだのちかひのなきよなりせば

人々この御落座に候。松山遠流のけしき候はずと、

なんじ申ければ、さりとはところのおもしろくて、こゝろのすめばかくいはるるなりと、おほせられければ、みななみだおとしてけり

建曆元年八月かへりのほり給べきよし、中納言光親の卿のうけたまはりてありけるに、しばらく勝尾の勝如上人の往生の地いみじくおぼえて、御逗留ありけるに、道俗男女まいりあつまりけり

かくて恒例の引聲念佛聽聞のおはりに、僧の衣裳ことうなりければ、信空上人のもとへこのやうおほせられて、装束勸進のありければ、ほどなく法服十五具すすめ出してもちてまいり給けり。感にたへて住僧等臨時の念佛七日七夜勤修する也

當山に一切經ましまさざりければ、上人所持の經論をくだし給けるに、寺僧七十人ばかり蓋をさし、香をたき、花をちらし、おのく歡喜して迎へ奉り、あまさへ聖覺法印を唱道として、開題讚嘆し奉ける。その言にいはく、夫以れば智慧は諸佛の萬行の根本、廢立

參差して天地懸隔なり。これすなわち大聖の善巧利生方便なり。常途の教義をもてみだりがはしく難すべからず。それ愚痴にかへるといふは、法藏比丘の昔の時成就衆生の願をたて給しあり、すべて罪障深重のたぐひ、濁世末代の愚鈍のやから、生死の盡期ならむ事をふかく悲て、五劫思惟の室のうちに、觀念坐禪布施持戒等のわづらはしき諸の行をさしおきて、易行易修の稱名をもて、本願として、普く一切の下機に應じ給へり。一念なほ得生の業也。況や多念おや。五逆むねと正機なり、況や輕罪の人をや。これによりて超世の誓願となづけ、又は不共の利生と稱す。ふかくその願を信じて名號を稱念すれば、愚痴を論ぜず持戒破戒を簡す、十は十ながらむまれ、百は百ながらむまる。しかのみならず、釋迦愍の付屬、諸佛一味の證誠は、たゞ名號にかぎりて觀佛に通ぜず。指方立相してあへてふかきことほりをあかさす。無智の義文ことほり必然なり。たゞ信じて行するよりほかには義なきをもて

は義とす。但もとより智慧ありて彌陀の内證、外用の功德、極樂の地下地上の莊嚴等を觀せんおば、必ずしも遮せず。いま論するところは、義理觀念をもて宗として、但信稱名の行者をかたくなはしく、これを非するを解する也。かの聖道門の先德明哲、淨土門に入て宗意をあきらめて其心をうれば、本願の奥旨往生の正業、併ら口稱念佛也と見ひらきぬる上は、淨土經の所説の觀佛三昧すらなほもて廢す。いかにいはむや、他宗のふかき觀においてをや。只稱名のほかにはその他事をわする。かるがゆへに、淨土の機は愚痴にかえるとはいふ也。夫八萬の法藏は八萬の衆類をみちびき、一實眞如は一向專稱をあらはすところなり。用明天皇のまうけのきみ、御誕生に南無佛と唱へ給ふ。その名をあらはさすといえども、心は彌陀の名號なり。慈覺大師の傳燈は經文を引て寶池のなみに和し、空也上人の念佛、常行はこゑをたて、徳をあらはし、永觀律師の往生の式は、七門をひらいて一偏につかす。良忍上

人の融通念佛は神祇冥道にはすゝめ給へども、凡夫のぞみはうとくし、こゝにわが大師法主上人行年四十三より念佛門に入てあまねくひろめ給に、天子のいつくしみ玉冠をにしに傾け、月卿の賢き金劔をにしたゞしくす。皇后のこひたるは韋提希のあとをおひ、傾城のことんなき五百の侍女をまなぶ、而間、とめるはおごりてもてあそび、まづしきものはなげきてともとす。農夫は鋤をもてかすをしり、驛路は念佛をもて鳥に擬し、驛をたゞく海上には念佛をもて魚をつり、鹿をまつ木本には念佛をもてひづめをとる。雪月花をみる人は西樓に目をかけ、琴詩酒に耽暱はにしのえだの梨をおる。彌陀をあがめざる人をば瓊瑾とし、すゞをくらざるときおばはちとす。花族英才なりといゑども、念佛せざるおば、おとしめ、乞丐非人なりといゑども念佛するおばもてなす。かるがゆへに八功德水の上には念佛の蓮す池に滿、三尊來迎のいとなみには紫臺にさしおくひまなし。しかのみならず、われらが念

佛せざるはかの池の荒廢なり。われらが欣求せざるはその國の愁訴也。くにのにきわひ佛のたのしみ、稱名をもてさきとす。人のねがひわがねがひ、念佛をもてとゞす。よて當座の愚昧公請につかへてかへるよは念佛を唱て枕とし、私宅をいでゝわしる日は、極樂を念じて車をはす。これみな上人の教誡過去の宿辨にあらずや。たづねみれば彌陀はすなわち應聲來現の如來受用智慧の眞身也。名號は又五劫思惟の肝心、願行所成の愍体也。かるがゆへに、これを信じて稱念すれば念々に八十億劫の生死の惡徳を滅し、こゑくは無上の大利を獲得す。このゆへに念佛の衆生は一世に即ち相好の業因をうへ、現身にあくまで福智の資糧をたくわへて、愚痴暗鈍の凡夫なれども、うちには六度の萬行を修する菩薩とおなじ。もししからばいかで有漏の穢土をいでゝ、無爲の報國にまいりて凡夫の性をすて直に法性の身を證せむや。定てしりぬ。彌陀の本願といふは萬機を名號の一願におさめ、千品を口稱の十念

にむかへ、同じく寶池の蓮に託生せしめ、ともに無生の益を證得す。五逆をもきはらず、謗法おもすてず、しりぬべしとてはなをかみとどこほりなくの給ければ寺僧結衆戒成王子大般若供養には草木ことごとくなびきけり。いま上人念佛の勸進には道俗みな淨土をねがひけり。ほどなく歸京のよしきこへければ一山みなおくり奉る

昔釋迦佛忉利の雲よりくだり給ければ、人天大會よろこびしがごとく、いま上人南海よりのぼり給へば、人々面々に供養し奉る。一夜のうちに一千餘人と云。あければ上下くもかすみのごとくあつまりて御物語ありけるに、仰られけるは、決定往生の人に二人のしなあるべし。一には威儀をそなへ口には念佛を相續し、心には本誓をあおきて、四威儀のふるまひにつけて遁世の相をあらはし、三業の所作出要にそなへたり。ほかに賢善精進の相あれどもうちに愚痴懈怠の心なく、行儀をもちかず、渡世おもうかどはず、心かたましく

して利養をへつらふ事もなく名聞の思もなく貪瞋邪僞もなく奸詐百端もなく、雜毒のけがれもなく、不可の失もなく、まことに外儀も精進に、内心も賢善に内外相應して一向に往生をねがふ人もあり。これ決定往生の人なり。かゝる上根の後世者は末代にもまれなるべし。二にはほかにたふとくいみじき相をもほどこさずうちに名利の心もなく、三界をふかくうとみていとふ心ろ肝にそみ、淨土をこひねがふ心る髓にとほり、本願を信知して、むねのうちに歡喜し往生をねがひて念佛をおこたらず、ほかに世間にまじはりて世路をわしり、在家にともなひて利養にかたどり、妻子に隨逐して、行儀更に遁世のふるまひならず。しかりといえども、心中には往生の心ざし片時もわすれがたく、身口の二業を意業にゆづり、世路のいとなみを往生の資糧とあてがひ妻子眷屬を知識同行とたのみて、よはひの日々にかたぶくおば、往生のやうやくちかづくぞとよろこび、命の夜々におとろふるおば、穢土のやうや

くとおさかると心ろゑ、命のおはらむ時を生死のおはりとあてがひ、かたちをすてむ時を苦惱のおはり時期し、影向を紫のとぼそにたれ、行者はこの時ゆかむと期して結跏を觀音の蓮臺の上にまつ、このゆへに、いそがしきかな往生。とくこの命のはてねかし。こひしきかな極樂。はやくこの命のたへねかし。くやしきかなわが心ろ、生死の人やをすみかとして惡業のためにつかはるゝ事。うれしきかなわが心、無爲のみやこにかへりゆきて四生のあるじとおおがれむ事。かやうに心のうちにすまして廢忘する事なく、たとひ縁にあへばよろこびもあり、うれへもあり、おしき事もあり、うとましき事もあり、はづかしき事もあり、いとおしき事もあり、ねたき事もあり。かやうの事あれども、これは一旦の文のあひだの穢土のならひくせと心えてこれがためにまぎらはされず、いよ／＼いとはしく、たびのみにちにあれたるやどにとどまりて、あかしかねたる心地して、よそめはとりわき後世者ともしられず

よの中にまぎれて、たゞ彌陀の本願にのりてひそかに往生する人あり。これはまことの後世者なるべし。時機相應したる決定往生の人なり。この二人の心たてを彌陀は至心とおしへ、釋迦は至誠心と説、善導は眞實心と釋し給へり

つぎのとし上人満八十、正月二十日より老病の上に不食ことに増して、おほよそ兩三年耳もきゝ給はず、心も毫し給へり。しかるをいまさらに昔のごとく明々に下して、念佛つねよりも熾盛なり。仁和寺に侍けるあま、御往生をゆめみてまいり侍けり

ある時つけての給はく、この十餘年、念佛功つもりて佛菩薩極樂の莊嚴をおがむ事これつねなり。末座の僧とひ奉ていはく、このたびの御往生は決定なりや。答ての給はく、極樂にありし身なれば、かへりゆくべし。觀音勢至等の聖衆あなこのまへにましますよしをたび／＼の給ふ。紫雲の現するをきゝ給て即ちかたりての給く、わが往生はもろ／＼の衆生のため也。又そ

の期にのぞみて三日三夜、或は一時或は半時、高聲の念佛をし玉ふ、きくものみなおどろく。廿四日とりの尅より以去、稱名鉢をせめて無間なり。無餘也。助音の人々は窮餽におよぶといへども暮齡病惱の身、會猛にしてこゑをたゞざる事未曾有の事なり。明日の往生のよし、夢想のつげによておどろききたりて終焉にあふもの五六許輩なり。かねて往生の告をかふる人々

前權右大辨藤原兼隆朝臣 權律師隆寛 白河准后

の宮女房 別當入道ナラシラズ 尼念阿彌陀佛侍

坂東尼 侍從信賢ユキ 祇陀林の經師 一切經谷住侶大

進公 薄師眞清 水尾山樵夫 紫雲をみたるもの

どもあり

彌陀の三尊紫雲に乗じて來迎し給をみる人々

信空上人 隆寛律師 證空上人

空阿彌陀佛 定生房 勢觀房

廿五日の最後には慈覺大師の袈裟をかけて四句の文を唱ふ。光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨これなり。

頭北面西にしておはり給ぬ。普聲とゞまりてのちなほ唇舌をうごかす事十餘反ばかりなり。面色ことにあざやかにして、形容えめるににたり。時に建曆二年正月廿五日午正中なり。春秋八十にみつ。釋尊の在世におなじ。ひとりの雲客ありて七八年のさきにゆめにみて上人の臨終に光明遍照の文を誦し給べしと。往日むかしのゆめいまに符合す。たれか歸信せざらむや。命つき魂さりぬれば、むなしく名號をとめて自のため、他のためなんの益かあるや。しかるに、淨土の宗義につきて凡夫直往の往路をしめし、選擇本願をあらはして、念佛の行者の龜鏡にそなふ。餘恩没後にあたりていよいよさかりに、遺徳在世にひとしくして變ずる事なし。朝野遠近おなじく寶刹の月をのぞみ、貴賤男女ともに檀林のくせをねがふ。このゆへにあるいは紫雲に乗じあるいは蓮臺に坐し、あるいは異香をかき、或は光明をみ、或は化佛を拜し、或は聖衆にまじはりてながく娑婆をいで、たちまちに淨土にうつる事、視聽にふ

るゝところ、目にみち耳にみてり。ながれをくみて、みなもとをたづぬるに、先師の恩徳なり。すゑのよのわれらが大師、この人にあり。恩やまよりもたかく徳うみよりもふかし。萬劫億劫にも謝しがたく、報じがたし。しかしつねに名號をとなえて、かの本懐に願ぜむにはしかじ云々

御中陰御佛事の事

初七日	不動尊	御導師	信蓮房
二七日	普賢菩薩	御導師	求佛房
三七日	彌勒菩薩	御導師	住信房
四七日	正觀音	御導師	法蓮房
五七日	地藏菩薩	御導師	權律師隆寛
六七日	釋迦如來	御導師	法印大僧都聖覺
七七日	兩界曼荼羅阿彌陀如來	御導師三井 僧正公胤	

法地房の法印在世のあひだは、若大衆たび／＼おこるといゝども、證眞法印 上人の徳に歸して奏狀をかゝざるあひだ、ちからおよばずしてすぐるほどに、後

高倉院御宇に 僧正圓基持山の時、嘉祿三年^亥（ヒノトノキ）六月廿一日山の所司專當くだりて上人の墓所をほりすつべきよしきこゆ。こゝに京師守護修理の亮平の時氏内藤五郎兵衛入道盛政法師をさしつかはして子細をたづねらるゝあひだ、問答往復して晚陰におよぶによりて、使等かへりおはりぬ。よりて信空上人弟子並に念佛に心ろざしある道俗等棺をになひて嵯峨の二尊院にかくしおきて、つぎのとし火葬しておの／＼御骨を、えくびにかけて如來の舍利をうやまうがごとし。こゝにしりぬ。これ聖人の大悲の方便なり。またく邪魔外道の障難にあらざる也

入道隨蓮といふものありけり。四條までのこうちはいゝなり。出家ののちつねに上人にまいりて念佛の事をうけ給けり。上人仰られて云く、念佛はやうなきをやうとす。たゞつねに念佛すれば、臨終にはかならず佛きたりてむかへて、極樂にはまいるなりとの給ひ、こはこの御ことを信じて、餘念なきところに、ある

人の云く、念佛申て往生するには、かならず、三心といふ事あり。これをしらでは、往生かなはずといふ。隨蓮申すやう、上人の御房はたゞやうなしとこそ候しかと申すところに、かの御房いはく、それはうましきものゝためには、おほせられけるなりと申けり。まことにさる事もあるらんとして、この事おぼつかなく心ろみだれておぼへけるに、ある時、ゆめにみるやう法勝寺の阿彌陀堂に人々あまた法門さたあるとおぼへてまいりてみれば、上人みなみむきに、きたの座におはします。ちかくまいりて候へば、隨蓮を御覽じて仰られての給はく、汝このほど心におぼつかなく思ひつる事あり、それはおぼつかなく思ふべからず。たとへばこの池に蓮花あり。この蓮花をひが事いふ人ありてこれは蓮花にはあらず、むめなり、さくらなりといはむおば、汝はいかゞ思ふべき。答申ていはく、現に蓮花にて候はむおば、いかに人むめさくらと申候とも、いかゞむめさくらとは思ひ候べき。その時上人の給はく

いかに人いふとも、それは蓮華をむめさくらといはむがとし、信すべからず。わがやうなきをやうとす、たゞ念佛すれば往生すといひしを信じて念佛申すべしとの給へり。そのうち不審ことくはれて心あきらかになりぬといへり。さればたれくもこの定に心ゑてやうもなき念佛して往生すべき也

建永二年の春、上人配所におもむき給ふ時、信空ひそかに申ていはく、御年たかくなりて、とおきさかひにおもむき給事、いたはしくかなしくこそと申されければ、上人無實にてとおきさかひにおもむく事、そのたぐひおほし。われこれをなすべきとせず。たとしおそらくは天衆地類知見あらば、もし天下のため大事やいできたらむすらむとの給へり。又もし因縁つきずば又あひあふ事もなかなからむとの給ふ。信空のの給はく、先師のことばたがわす承久三年に君はおきの國にとしをへて御なげき、臣は東土のみちに命をうしなう。又おほかた念佛沙汰ある事に、必ず世間おたしか

法然上人傳法繪(高田本)

らず。因果の道理むなしからず、たれかこれをおそれ
ざるべきとさへり

南無阿彌陀佛 十反

草本云 永仁四年十一月十六日云云

永仁四年 丙申十二月下旬 第六書寫之

法然聖人繪

蓋以三世に多の佛出給て若干の衆生をすくいまします
滅劫の千佛の第四番南州中印土淨飯王の御宇癸丑歲七
月十五日、キヤキ後の御夢に、金色の天子白馬に策亭、右脇
に入給とみて、次の年甲寅四月八日佛出胎の時、寶蓮御
足を承て七步行給。偈云、天上天下唯我獨尊、三界皆
苦、我當安之云云これ晨旦には周昭王、日本には彦波
瀲武鸕草葺不合尊八十三萬四千三十六年甲寅相當れり。
再往事を願は、悉達太子十九にして踰城、三十にして
成道し給て、一代五時の説法しげしといえども、聞は
きけども達するものはすくなく、傳ものはあれども悟
ものはまれなり。この遊へに末代の我等のために、阿
難を唱導として佛教を復せしむるに、面如淨滿月、眼
若青蓮華、佛法大海水、流入阿難心云、生身の佛にか
はらず三十二相を具足し、四辯八音あざやかにして、

辯泉露をもらさず、懸河早漲、これを梵王字を製して
一千の羅漢筆をそめて一點をも不落記し給へるを、正
法千年は五天竺にさかりにして晨旦國には漢明帝に摩
騰迦竹法蘭等、擾陀演王宮に現じ給ひ、白氈びやんたんの佛像を
迎たてまつるに、佛像大光明をはなち給、永平七年甲申
なり。同十年丁亥白馬寺を立。然後四百八十餘年すきて、
欽明天王の御時既戸王子甲申十月、百濟國の聖明王釋迦
の金銅の像經卷を奉造之刻四天王寺を建立す。それよ
り以降聖武天王東大寺を鑄造して佛法興隆始如來の在
世にことならずしてやゝひさしくなりにける。いま先
師聖人念佛すすめたまへる由來を畫圖にしろすことし
かなり
如來滅後二千八十二歲、日本國人王七十五代崇徳院長
承二年癸丑美作國久米押領使漆間朝臣時國、妻は秦氏、
夫妻ともに子なきことを愁て佛神にいのる。ことに觀
音に申してはらめるなり。いのりてまうけたる子はみ
なたゞ人にあらず。勝尾の勝如、横河の源信僧都みな

母これを祈てまうけたる也。この上人も観音のあたへ給へる子なるがゆへに、かくたうとき人なりけり。佛菩薩の衆生を利益し給事も、時にしたがひ、機をはかるがゆへに、釋迦如來出世し給て、乃ち正法千年もすぎ、佛法またすぎて末法ひさしくなりぬれば、顯教もさとる人なく、密教も行ずる人まれなり。これによりて上人さとりやすき念佛をひろめて、衆生を利益せんがために、この淨土宗を建立し給へり

時國夫妻佛神祈願の圖

時に長承二年^{癸丑}四月七日の午の正中、母は何の苦痛なし。この時そらより幡二流ふりくだる。これ不思議の瑞相なり。みるものめをおどろかし、きく人みみをおどろかさすといふことなし。とし五六歳にもなり給ければ、さとり成人のごとし。又つねにやくもすれば西にむかふくせありけり。人これをあやしむ

産室、二流懸る圖

保延七年^{辛酉}春、時國かたきのために害せらる。上人とし九歳わりはきの小箭をもて、かたきを射。まゆのあひだに其疵あり。ことあらはれんことうたがひなきゆへにげかくれぬ。うらむる心は、時國當庄の庄官たりながら、預所をかるめて對面せざる遺根^{遺根}なり。其かたきは伯耆守源長明男、武者所定明也。明石の源内武者といふなり。堀川の院の瀧口なり、逐電しをはりぬ

敵人夜討の圖

時國ふかき疵をかふりて、いまはかぎりになりければ九歳の幼童に、われこのきすにてみまかりなんす。ゆめくかたきをうらむる事なかれ。猶この報答をおもふならば、生々にあらそひたゆべからず。願は今生の妄縁をたち、極樂に生まれんといひて念佛してをはぬ。あだをば恩をもつてむくうべし。あだをもんてむくへば、あだつきすといへり

時國臨終の圖

慈母追善の圖

小兒ふかく父の遺言を心にそめて、母にいとまをこいで云、昔釋迦は十九にして、ひそかに淨飯王の宮をいでて、三十にして佛にならせ給へり。我は比叡山にのぼりて二親の後世をとぶらひたてまつるべし。ゆめゆめ悲しともおぼつかなしとも、おぼしめすべからず云云母理におれていと涙ばかりぞ頂にそそぎける

信とてはかなきおやのとゞめおきし

子のわかれさへまたいかにせん

母子訣別の圖

其後當國菩提寺の院主智鏡房得業觀覺、ことに愛して弟子とす。觀覺佛法をおしふるに、性はなほだ俊にして、聞ところをわすれず。觀覺その器量の俊なることを感じて、叡山にのぼせて一宗の長者になるべきことをはからふ。爰觀覺その俊なることをよろこびて等侶にかたりていはく、この兒の器量を見るにただ人にあ

らす。惜よろこばしずな哉なげいたすらに邊國におかんことはと、ひて上洛すべきになむ、母このよしをききてなごりををしみけり

觀覺得業の許へ入幸、叡聖の圖

月日にそへては器量のふしきを、觀覺いよ／＼感じて一宗の長者となさんと思て叡山へのぼする狀云く、進上大聖文殊の像一躰と云云叡山の師この狀を見てあやしとおもふ所に、少兒來ぬ。そのとし十三才也。時に源光文殊の像と云にしりぬ。この兒の器量をほむる詞なりと。則その容白を見るに、頭くぼくしてかどあり。眼黄にしてひかりあり。みなこれ髮垂聰賢の勝相なり

上洛の圖

田樂の圖

黒谷上人繪傳一

釋弘願

法然聖人繪

時機相應せん事を不審してねぶり給へるに善導告てのたまはく、汝念佛をもんて人をたすけんともへり。これわが願にかなへりとの給へり。このゆへに彌ひとへに念佛し給へり。案する所の邪正自然にあきらめられぬといえり。紫雲靈變として日本國におほへり。雲の中より無量のひかりをいだす。ひかりの中より百寶色の鳥とびさる。雲の中に僧あり。上は墨染、下は金色の衣服なり。予とふて云、これ誰とかせん。僧答云、われこれ善導なり。汝専修念佛の法をひろめんとするがゆへに、其證とならんがために來なりと云云

善導と上人夢中對面の圖

建久七年正月十五日より、東山靈山にて如法念佛三七日ありけり。其間の種々の不思議おほし。先第三日丑の時異香薫じ、第五日の夜勢至菩薩同行道し給。第

二七日の夜光明來てらし、同丑の時燈明きえたるに光明ことにあきらかなり。又音樂きこへけり。人々見聞不同なり。或人上人に問たてまつりければ、答てのたまはく、淨土に九品の差別あり。皆衆生今生不同なるによるかと云云上人六十六の御年、三昧發得し給と自記給へり。しかれども、今年六十四なり。これらの不思議もとより權者にて在事うたがひなし

勢至行道の圖

鎮西の聖光房かたりて云、我もと法地房の弟子にて天台宗をばならひたりしかども、出離生死の様をばおもひよらで過し程どに、三十三のとしおと、の阿闍梨病によりて絶入して、ひつじの時よりいぬの時までありしに、生死の無常はじめておもひしられて、遁世したりしかど、いかなるべしともおはして法然上人にまいりたりしかば、念佛申べしとて、摩訶止觀の念佛、往生要集の念佛、善導の御念佛、三重に分別して微々細々に仰られき。智慧の深事大海にのぞめるがごとし。

又釋尊の御說法を聽聞するがごとし。これより一向專修の義となれりと云云 又おほせられて云、源空が念佛もあの阿波の介の念佛に全くをなじことなり。もしさりともすこしはかはりたるらんと、おもはん人は、つやつや念佛をしらざる人なり。金はにしきにつつめるも、わらつとにつくめるも、おなじこがねなるがごとし。

聖光房開法の圖

上人かわやにて御念佛ありけるを、ある御弟子いさめ申ければ

不淨にて申念佛のとがあらば

めしこめよかし彌陀の淨土へ

上人圖にて念佛の圖

治承四年十二月廿八日、東大寺炎上の後、大勸進の御沙汰あり。當世源空聖人の外その仁あるべからずとて後白河の上皇より勸進せられて、造營をとげらるべきよし、右大辨行隆朝臣を勅使として仰下さる。聖人辭

退申さる。其詞云、貧道もとより山門の交衆をやめて

林泉の幽栖をよみすることは、しづかに佛道を修行して今度順次に生死をいでんとなり。然に若大勸進の職に侍ば、劇務萬端にして、自行さだめてすゝめがたからんか。自行すゝまずば、化他なんぞやすからん。いまにおきては、他のためには偏に淨土の法文をのべ、自のためには專願力をあふぐ。この二事の外は他事をまじえじと云云

行隆朝臣このよしを奏聞す。かさねて

仰下さるゝ様、若門弟の中に其器用あらばあげまうさるべしと。これによりて則修乘房重源を招引して、院宣のおもむきをのべらる。重源左右なく領狀、ほどなく大功を終をはりぬ。修乘房はかりことに日本國の貴賤炎魔の廳廷にして、たづねとはれんとき、各々身づからの名字をなのらんちちなむで、自然として念佛するにおなじかるべきによりて、せめて物ごとに、法花經の文字のかずを阿彌陀佛の御名にそへて、道俗男女に賦せけり。これ日本國の阿彌陀佛名のはじめなり

大佛供養の圖

或時高野明遍僧都、善光寺詣のついでに、上人にまいりて云、いかにして今度生死をはなれ候べきと。上人のたまはく、念佛申して極樂へまいるばかりこそしゑつべき事に候へ。僧都のたまはく、さればこれにもさ存候。それにとりて念佛の時、心の散亂し候をばいかゞし候べき。これは源空もちからをよび候はずと云云僧都又言く、さてそれをばいかゞし候べきと。上人のたまはく、心はちれども、念佛だに申は、佛の本願にて往生すべしとこそ心えて候へ。僧都これを承候はんためにまいりて候つるなりとて、やがて返り給けり。後に御弟子達目出たき法問聽聞せんとて、あつまりたりけるに、上人のたまはく、この僧都の心のちるをばいかゞすべきとのたまへるこそ、心得ぬ。欲界散地の衆生は心のちること目鼻のむまれつきたるがごとし。いかにもとりすつべからず。散心ながら、願力にて往生すればこそ念佛の不思議にてあれと仰られて、勢觀

房にさづけてのたまはく、もろこしわか朝にも諸の智者達の沙汰し申さるゝ觀念の念にもあらず、又學問をして念の心をさとりて申念佛にもあらず。たゞ往生極樂のためには南無阿彌陀佛と申てうたがひなく、往生するぞと思とりて申外には別の子細候はず。只三心四種など申ことの候は、みな決定して南無阿彌陀佛をもて往生するぞとおもふうちにこもり候也。この外におくふかきことを存せば、二尊の哀にはづれ、本願に漏候べし。念佛を信ぜん人は、たとひ一代の法をよくく學したりとも、一文不知の愚鈍の身になりて、尼入道の無智ともがらに同して、智者の振舞をせずしてたゞ一向に念佛すべきなり

高野明遍の法問、勢觀房に法語授與の圖

或時上人物語云、當世の人機教の分際をしらずして、たやすく生死をいでがたしとおもへり。わが師肥後阿闍梨皇圓、智慧あるがゆへに生死いでがたしとする。道心あるが遊へに佛の出世にあはんと思故に、遠江國

笠原の庄に櫻池といふ池あり。其池に龍となりて住さんとかいて、臨終に水をこいて手に入れて、願のごとく龍となりて住せり。人これをしれり。其願書をも上人をして、社頭にてよ見あげさせまいらせられけり

上人龍身の阿闍梨に對面の圖

其時遠江國蓮花寺の禪勝房まいりて、同宿したてまつりて後井中へ下られける時、京つと、めさせんとて被仰ける。聖道門の修行は智慧をきわめて生死をはなれ、淨土門の修行は愚痴にかへりて極樂にむまる。罪は十惡五逆なをむまると信じて少罪もおかさじとおもへ。行は一念十念にたりぬとしりて、一形にはげむべし。又我むすべる文なりとて授給ふ

願我一念彌陀

一々稱名皆合集

臨終決定生極樂

利益一切衆生界

禪勝房と對談の圖

常州の敬佛房まいり給へりけるに、上人問云、何處の修行者ぞ。答申云、高野よりまいりて候。又問云、空

阿彌陀佛はおはするか。答さ候。其時被仰云、なにゆへに是へは來給へるぞ。只それにこそおはせめ。源空は明遍の故にこそ念佛者にはなりたれ。我も一代聖教の中よりは、念佛にてそ生死ははなるべきと見さだめてあれども、凡夫なればなをおぼつかなきに、僧都の二向念佛者にておはすれば、同心なりけりと思故に、うちかためて念佛者にてはあるなり。人多念佛宗建立すとてなんすれども、其はものともおぼえずと云云又同時鎮西の修行者問たてまつりて云、念佛の時、佛の相好等に心をかけん事いかゞ候べき。上人いまだものゝ給さる前に、一の御弟子云、尤しかるべしと

上人名號授與の圖或は修乘房重源の阿闍梨授與の圖ならんか

かくてやうやく東大寺すゝめつくりて、修乘房入唐して唐より善導の御影、極樂の曼陀羅わたくして、半作の東大寺の軒のしたにて、三部經並善導の御影を、上人に供養させまいらせられけるに、興福寺東大寺の大衆

涙をながして、隨喜讚嘆したてまつりけり

（第二卷止）

普告于予門人念佛上人等

一可停止未窺一句文、奉破眞言止觀謗餘佛菩薩事

右至立破道者學生之所經也、非愚人之境界、加之誹

謗正法除却彌陀願、其報當墮那落。豈非癡闇之至乎

一可停止以無智身對有智人、遇別行輩好致諍論事

右論義者是智者之有也。更非愚人之分、諍論之處諸

煩惱起、智者遠離之自由句也。況於一向念佛之行人

乎

一可停止對別解別行人、以愚癡偏執心、當奇置本業強

嫌之事

右修道之習、各勤自行敢不遮餘行。西方要決云、別

解別行者惣起敬心、若生輕慢得罪無窮、何背此制乎。

加之善導和尙大呵之、未知祖師之誠、愚闇之彌甚也

一可停止於念佛門、号無戒行、專勸姪酒食肉、適守律

儀者名雜行人、惡彌陀本願者、說勿恐造惡事

右戒者是佛法大地也。兼行雖區同專之、是以善導和

尙舉目不見女人、此行狀趣過本律制淨業之類、不順

之者惣失如來之遺教、別背祖師之旧跡、旁無據者駸

一可停止未辨是非癡人、離聖教非師說、恐述私義妄企

諍論、被咲智者、迷亂愚人事

右無智大天狗、此朝再誕猥述邪義、既同九十五種異

道、尤可悲之

一可停止以癡鈍身、殊好唱導不知正法說種々邪法、教

化無智道俗事

右無解作師是梵網經之制戒也。黑闇之類、欲顯己才

以淨土教爲藝能、貪名利望擅越、恐成自由之妄說、

誑惑世間人。誑法之過殊重。是報非國賊乎

一可停止自說非佛教邪法爲佛法、僞号師範說事

右各雖一人、說所積爲予一身、衆惡汚彌陀教文、揚

師匠之惡名、不善之甚無過之者也

以前七箇條甄錄如斯、一分學教文弟子者頗知旨趣、年來之間、雖修念佛、隨順聖教、敢不違人心無驚世聽。

因茲于今三十箇年無爲、涉日月而至近王、此十箇年

以後、無知不善輩時々到來。非啻失彌陀淨業、汚穢

釋迦遺教、何不加勵誠乎。此七箇條之内、不當之間

巨細事等多、具難註述、愍如此等之無方、慎不可犯。

此上猶背制法輩者、是非予門人。魔眷屬也。不可來草

庵。自今以後各隨聞及、必可被觸之、餘人勿相伴、若不

然者是同意人也。彼過如作者、不能嗔同法恨師匠、

自業自得之理、只在己身而已。是故今日催四方行人

集一堂告命、僅雖有風聞、慥不知誰人失。據于沙汰

愁歎、逐年序非可點止。先隨力及、所迴禁遏之計也。

仍錄其趣、示門葉等之狀如件

元久元年十一月七日

沙門源空

源空上人

信空 感望キヤウ 尊西ソウサイ 證空 源智 行西 聖蓮

見佛 導豆ドウジュ 導西ドウサイ 寂西シヤクサイ 宗慶ソウケイ 西縁 親西

幸西 住蓮 西意 佛心 源蓮 蓮生
善信 行空 成覺房 三十三人

己上二百餘連署畢

七箇條制戒連署の圖

後白河法皇諸宗の碩學をめして、往生要集をよませられるに、聖道の人はこの文の心をえず。これによりて上人をめしてよませられるに、往生極樂の教行は濁世末代の目足なり。道俗誰かこれに歸せざらんと侍りけるに、今はじめて聞つる様に、法皇よりはじめまいらせて、心肝に銘じて隨喜感嘆す。其時に末代惡世の罪人、稱名念佛ならでは、出離いかにもかなうまじきむね、心えて感嘆しめひけり。よりに大上法皇院勅を下し、右京權大夫藤原隆信朝臣に眞影をうつさしめて、將來のかたみにそなへまします。蓮花王院の寶藏におさめ給けり。これらの次第みな九條の入道殿下の御はからひなり。天台宗は傳教大師桓武天皇の御ちからにて比叡山にのぼり、この宗を興し給へり。眞言

宗は弘法大師嵯峨の天皇の御力にて、東寺給はりて、高尾高野山などをつくらせ給けり。この念佛宗は一高九條殿の御ちからにて上人御建立ありけり。選擇集も九條殿御勸進、遠流の時ことさら九條殿の御沙汰にて土佐へは御代官をつかはして上人をばわが所領讃岐におきまいらせ給ける。めしかへされ給事も、九條殿御病惱の時、善知識のためなり。しかるを勝尾にましまして、其ほどに九條殿御入滅にて勝尾には御逗留ありけるなり

往生要集講説の處並寫影の圖

漢家には覺道純善導懷感、本朝には空也惠心永觀珍海、專彌陀に歸してひとへに念佛をすゝむ。しかれども學者聖道淨土の難易になづみ、行人自力他力の是非にまどへり。上人肝をくだきて往生の要をたづねて、聖道をすてゝ淨土門に入、難行道をすてゝ易行道におもむき、自力の心をあらためて、他力の願に歸して、選擇集をあらはして、他力をすゝめ給へり

捨聖歸淨の説法圖

承安四年^{甲午}春、上人とし四十二はじめて黒谷をいで、吉水に住し給。これひとへに他を利せんためなり。ひろむるにこの教をもてし、すゝむるにこの行をもてす。道俗ことごとく歸す。草の風になびくがごとし。これを信じ是を仰に、感應かならずあらたなり。上人ひとにむかひて唱給ける文、佛告阿難汝好持是語持是語者即是持無量壽佛名、ことさらにこの文を常に唱給けり。罪人なを往生す、いはんや善人をや。行は一念十念に往生すと信じて一期退轉することなかれ、一念猶往生す、いはんや多念をや。阿彌陀佛は不取正覺の誓成就して現に彼國にましますば、定命終の時には來迎し給すらん。釋迦如來は善哉わが教にしたがひて生死をはなれんとすと知見し給らん。六方の諸佛は慶哉、我等が証誠信じて、不退の淨土に往生せんことをと照給らん。天に仰でも悦、地に臥ても悦べき物なり、此度彌陀の本願に遇事を。行住座臥にも乖るゝ事なく、惡て

も猶可憑は、乃至十念の誓、信ても猶可信は、必得往生の文なり

吉水禪房にて念佛を勧むる圖

其後上人のたまはく、只衆生稱念必得往生の文をたのみて名号を唱なり。我等が分際にて觀念すべく、如説なるべからず、稱名の一事假令ならざる行なり

稱名の一行を勧むる圖

文治二年法印顯眞大原に籍居の時、法印永辨出離生死のはかりごと、頓証菩提の入門、談じて永辨歸山のきざみ、如是次第くはしく法然上人を囑して御尋あるべきよし申て後、龍禪寺に僧都明遍已講貞慶重源和尚印西上人凡諸處の遁世の人々、當所には湛與蓮契師弟の上人等十餘輩招て淨土の教文沙汰あるべきよし聞て、

山門の久住者念佛往生の義聞とて、智海法印靜嚴僧都覺什僧都証眞堯禪等、各々集りけるに、淨然法眼仙基律師等はもとより坐せられける。面々に諸宗入立て深

義論談決釋侍りけるに、上人散心精をぬきいて、自香呂をとりて持佛堂に於、逸行道高聲念佛を唱給に、南北の明匠西世の教に歸し、上下諸人中心の誠を凝して各々一口同音に三日三夜間斷なし。是を六方恒沙の証誠にたとふ。すべて信男信女三百余人參禮の聽衆かすをしらす焉。然間湛與上人の發起にて來迎院勝林院等に不斷念佛をはじめむ。それよりこのかた洛中片々の道場に修してつとめざる所なし。如是してのち、顯眞めしいださせて天台座主に補し、僧正（ついで）に仁し給。末代の高僧本山の賢哲也。諸宗の碩德率して上人に歸せざるはなしといへり。一天四海併念佛をもて口あそびとしけり

大原談義並行道念佛の圖

建久元年の秋、又清水寺にて拾因をよ見て念佛を勸進し給けるに、これより京田舎處々の道場に、不斷念佛をはじめ修する事かぎりなかりけるなり

清水寺説法の圖

建久三年の秋大和の入道親盛は、嵯峨にて七日不斷念佛ありけるに、禮讚などはじめける時、後白河の法皇の御ためなりければ、捧物少々とりだしたりければ、上人大に御氣色かはりてあるべからざるよし、いましめ仰ありけり。是念佛のはじめなりけり。念佛は自行のつとめなり。たとひ法皇に廻向したてまつるとも、布施におよぶべからずとなり

不斷念佛の圖

黒谷上人繪傳第三

釋 弘 願

法然聖人繪

元久二年四月五日、九條殿にまゐりて退出の時、頭光を現じ蓮花をふみて、はるかに地をはなれて拜し給へ

り。さて人々にかゝることありつ、各々おがみつるか
と仰ありければ、隆信入道戒心房、中納言阿闍梨尋玄
をがまさるよし申けり。これよりいよく御歸依はな
はだしかりける

九條殿退出の御頭光踏蓮奇瑞の圖

元久三年の七月に吉水をいで、小松殿におはしまし
ける時

小松とはたれかいひけむおぼつか

雲をさゝふるたか松の木を

権律師隆寛小松殿へまいられたりけるに、御堂のうし
ろどにて、聖人一巻の書を持って隆寛のふところにおし
いれ給。月輪殿の仰によりて造給へる選擇集これなり

小松殿にて隆寛に選擇集付屬の圖

右の御目より光をはなち又口よりひかりましくけり

上人右の御目より放光の圖

又高昌の少將見參の時、丈六の面像現じ給けり

上西門の女院にて上人七日の觀戒ありけるに、からかきの上に、一の蛇あり。夏のことなればおどろかずといへども、日ごとにかくることなくしてわだかまりをりて、すこぶる聽聞の氣色見へければ、人々目もあやに見ける。第七日の結願にあたりて、此くちなは唐垣の上にて座りて死する程に、其頭二にわかれて中より蝶の様なる物いづと見る人もあり。又頭はりわれたりと見る人もありけり。又天人のぼると見る人もありけり。昔遠行する聖り、其日くれにければ、野中に塚穴のありけるにとまりて、夜終無量義經をそらに誦する程に彼塚穴の中に五百の蝙蝠ありけり。是經を聽聞しつる功德によりて、この蝙蝠五百の天人となりて初利天に生ぬといへり。今一すちの蛇あり、七日の觀戒の功力に答て、雲を別て上りぬるにやと、人々隨喜をなす。彼は上代なる上に、大國也。是は末代にして少國也。

希代の勝事、凡人の所爲にあらずとぞ時々の人申ける

過三女よりおこるといふは本文なり。隱岐の法皇御熊野詣のひまに、小御所の女房速つれんをなくさめんために、聖人の御弟子藏人入道安樂房は、日本第一の美僧なりければ、これをめしよせて禮讃をさせて、そのまぎれに燈明をけして是をとらへ、種々の不思議の事どもありけり。法皇御下向の後、是をきこしめして逆鱗の餘に、重連安樂貳人はやがて死罪に行れけり。その餘失なをやまずして、上人の上に及て、建永二年三月廿七日、御年七十九(つとむ)、思食よらぬ遠流の事ありけり。權者の凡夫に、同時如是の事定る習なり。唐に一行阿闍梨、白樂天、我朝に役の行者、北野天神、おどろくべからずといへども、我等がごときは時に當ては難忍類なるべし

同日、大納言律師公全、後に嵯峨の正信上人と申き、誠に貴き人にて慈覺大師の御袈裟并に天台大乘戒等、

上人の一の御弟子信空にこれをつたへ給へり。同く西國へ流れ給とて御船にのりうつりてなごりをおしみ給ける。いと哀にこそ

上人花浴を出で、配所に赴き給ふ圖

攝津國經のしまにとゞまらせ給ければ、村里の男女大小老若まゐりあつまりけり。其時念佛のすゝめ彌ひろく、上下結縁かすをしらす。この嶋は六波羅の大相國一千部の法花經を石の面にかきて多の上船をたすけ、人の類をやすめんためにつきはじめられけり。今にいたるまでくだる船には、かならず石をひろひておくならひなり。利益まことにかぎりなき所なり

上人經ヶ島にて教化の圖

播磨の室につき給ければ、君達まいりけり。昔小松の天皇八人の姫宮を七道につかはして、君の名をとらしめ給中に、天皇寺の別當僧正行尊拜堂のためにくだられける日、江口神崎の君達、御船ちかく船をよせける

時、僧の船に見苦やと申ければ、神歌をうたひ出し侍りける

有漏地より無漏地へかよふ釋迦だにも

羅護羅か母はありとこそきけ

とうちいだし侍りければ、さまざまの纏頭し給ける。又同宿の長者、老病にせまりて最後の今様に成にして我身のおいぬらん、おもへばいとこそかなしけれ。いまは西方極樂の、彌陀のちかひをたのむべしとうたひて、往生しける所なり。上人をおがみたてまつりて縁をむすばんとて、雲霞のごとくまゐりあつまりける中に、げにくしげなる修行者、問たてまつる。至誠心等の三心を具し候べき様をばいかゞ思定め候べきと。上人答てのたまはく、三心を具することは、只別の様なし。阿彌陀佛の本願には名號を稱えばかならず來迎せんと仰られたれば、決定して引接せられまゐらすべしと深信して心に念じ、口に稱するにものうからず、既に往生したる心地して最後の一念にいたるまでおこ

たらざれば、自然に三心具足するなり。又在家の者共はさ程におもはぬとも、念佛申ものは極樂に生るなればとて、常に念佛をだに申は三心は具足するなり。さればこそいふかひなきものの中にも、神妙の往生はすることにてあれ、只うらく木願をたのみて南無阿彌陀佛とおこたらず唱べきなり

上人室の遊女化導の圖

同三月二十六日に讃岐國鹽秋の地頭するがの權の守高階の時遠入道西仁が館に付給。さまざまのきらめきにて美膳をたてまつり、湯たかせなどして心ざしいとありがたけり。是を御覽じて上人の御歌

極樂もかくやあるらんあらたのし

とくにまゐらばやな無阿彌陀佛

阿みだ佛といふよりほかは攝津國の

なにはの事もあしかりぬべし

又云、名利は生死の木網、三途の鐵網にかゝる。稱名は往生の翼、九品の蓮臺にのぼる

時遠入道西仁問たてまつりて云、自力他力のこといかゞ心得べき。答云、源空は上へまゐるべき器量にてはなけれども、上よりめせば二度までまゐりたりき。是はわがまゐる式にてはなけれども、上の御力なり。まして阿彌陀佛の御力にて稱名の願に答て、來迎させ給はん事をば何の不審かあらん。自身をもければ、無智なれば佛もいかにしてかすくひ給はんなど思はん事はつやつや佛の願をしらざる人也。かゝる罪人をやすやすとたすけん折にをこし給へる本願の名號を唱ながら塵ばかりも疑心あるまじきなり。十方衆生の中には、有智無智、有罪無罪、善人惡人、持戒破戒、男子女人三寶滅盡の後の百歳までの衆生みなこもれり。三寶滅盡彼の時の念佛者にくらぶれば、當時の主入道殿などは、佛のごとし。彼時は人壽十歳とて戒定慧の三學の名をだにもきかず、いふばかりもなきものどもの來迎にあづかるべき道理をしりながら、わが身のすてられまゐらすべき様をば、いかゞして案じいだすべき。只

極樂のねがはしもなく、念佛申されざらん事のみこそ往生のさばりにてはあるべけれ。かるがゆへに、他力の本願とも超世の悲願とも申なり。時遠入道いまこそ心得候ぬれとて、手合て悦たり

上人時遠入道が箱にて饗願をうけ給ふ圖

同行達名に聞へたる所なり。いさや讃岐の松山みんと云けるに、我もゆかんとて上人もわたり給たりけるに人々面白さにたへずして、一首づゝあるべきよしいひければ

いかにしてわれ極樂にむまれまし

みだのちかひのなきよなりせば

人々この御歌落題に候、松山遠流のけしき候はずと難じ申ければ、さりとは所の面白て心のすめば、かくいはるゝなりと、仰せられければ、みななみだをとしてけり

上人松山観櫻の圖

讃岐國小松の庄は弘法大師の建立、観音靈驗の所生福

寺に付給。抑當國同き大師父のために名をかりて、善通寺と云伽藍をはします。記文に云、是にまいらん人はかならず一佛淨土のともなるべきよし侍りければ、今度のよろこび是にありとて、すなはちまいり給けり

上人生福寺に参詣の圖

建曆元年八月歸登給べきよし、中納言光親卿承てありけるに、しばらく勝尾勝如上人の往生の地、いみじくをばえて御とうりうありけるに、道俗男女まいりあつまりけり

上人勝尾寺に御逗留の圖

かくて恒例の引聲念佛聽聞のおはりに、僧の衣裳こと様なりければ、信空上人のもとへこの様を仰られて、装束勸進のよしありければ、程なく法服十五具すゝめいだして、もちてまいり給けり。感にたえずして住僧等、臨時の念佛七日七夜勤修す

勝尾寺にて引聲念佛勤修の圖

黒谷上人繪

釋弘願

法然上人傳繪詞

卷 一

蓋以三世におほく佛出給ひて、若干衆生をすくひまします。賢劫の千佛第四に南州中印度に淨飯王の御宇癸丑七月十五日に、きさきの夢に金色の天子白馬に乗て右の脇に入給と見て、次年甲寅四月八日佛出胎のとき寶蓮御あしをうけて七歩を行し給て唱て云、天上天下唯我獨尊、三界皆苦、我當安足と。震旦には周昭王、日本には鷓鴣草葺不合の御こと八十三萬四千三十六年甲寅に相當。ふたゝび往事をかへりみれば、悉達太子十九にして城をこへ、三十にして成道し給て、一代五時の説法し給ける事は、聞ものはおほけれども達するものはすくなし。つたふるものは、おほけれ共さとするものはまれなり。此ゆへに末代の我等がために阿難唱導して復説せしむるに、相好あらたに如來のごとし。

四辨八首鮮にして、辨泉ながれみなぎり、五百の羅漢筆をそめて一點をおとさず記し給へるを、正法千年五天竺に盛にして、尸那國には漢の明帝に摩騰迦竺法蘭優陀演王宮に現じ給し、白鬚の佛像をむかへたてまつり給に、佛像大光明を放給き。漢の永平七年甲申にあたり給。同十年丁亥白馬寺をたてられ、それよりこのかた四百八十餘歳を過て、本朝の欽明天皇の御時むまやどの王子四天王寺を建立し給へり。そのうち聖武天皇東大寺を建立し給て佛法興隆す。あたかも在世にことならずして、良久しくなりにけり。如來滅後二千八十年人皇七十五代 崇徳院の御宇に、父美作國久米の押領使漆間朝臣時國、母秦氏子なき事をうれへて夫妻心をひとつにしてつねに佛神に祈る。妻の夢に剃刀をのむと見てはらみぬ。夢みるところをもつて夫にかたる。夫のいはく、汝がはらめる子さだめて男子にて、一朝の戒師たるべき表事也。今よりこのかた、その母ひとへに佛法に歸して出胎の時にいたるまで、輩

暈ものをくはず。長承二年癸丑四月七日午正中におぼへずして誕生するとき、二のはた天よりふる。奇異の瑞相也。權化の再誕なり。みるものたなごゝろをあは

す。四五歳より後、其心成人のごとし。同稚の黨に違樂せり、人皆之を歡嘆す。又やゝもすればにしのかたにむかふくせあり。親疎みてあやしむ。いま法然上人と號する是也。上人十三にして、叡山の雲によちのぼりて天台の金花にほひをほどこし、二九にして黒谷の流をくみて、佛法の玉泉に心をすます。みづから經藏に入て一切經をひらきみること五遍、爰に智證大師將來の善導の觀經の疏四卷を見給ふに、男女貴賤、善人惡人きらはす平生臨終行住座臥をゑらばず、心を極樂にかけて口に彌陀を唱もの、必往生すといふ釋の心をみて、生年四十三より一向專修に入、自行化他ひとへに念佛をこととす。仍南都北嶺碩德みな上人の教訓にしたがひ、花洛砂塞の緇素あまねく念佛の一行に歸す。この故に世こそりて智惠第一の法然、得大勢至の化身

とぞ申ける。上人誕生のはじめより遷化の後に至るまで繪をつくりて九卷とす

座室、色旗二隨齋る圖

諸佛の世を利し給ふ機を鑿て益をほどこし、日月の州をてらす時をはかりてひかけをめぐらす。北州に日赫突たれば、南州に影ちかづくより須彌の峰なる鶏、可見路かけるとなくは、くらきやみやうやくはれて、みち見へぬべしと唱なり。佛敎も正法千年は印度に盛にして、像法のはじめに漢土につたはり。本朝 用明天皇の儲君御手に舍利をにぎりむまれ給ふ。佛の御誕生になぞらふべきか。其ゆへは舍利現身に說法し、神變を示し給ふこと、佛の如くなるをもつて、我國の正法のはじめとすべし。たとへば父は都にして世をはやくし、子は他國にまよひてほどをへておどろく。亡日は年序をへにけれ共、禁忌聞よりおこり、孝養はあらたなれ共、中陰はふるきあとなり。爰に一切衆生の父、十萬里の西にかくれ、其子三ヶ國の東にしのみしより

ふち衣俄に色をかへたるさま、多羅葉のおもてに書給へる遺教、ひろしといへども西方淨土の寶樹寶池の水木、宮殿樓閣の有様、飯食經行ゆたか也。衣はそめはりぬはねども、春夏秋冬のかざり、薬は服しつけねども心になやみ患なし。かゝる都へさそはむと、金烏雲の上よりかけり、銀子の菟、野の外にほとばしる。此地に襁褓の中より出で竹馬にむちうちてあそぶところ

竹馬・戯遊の圖

保延七年辛酉春の比、時國の朝臣夜うちのためうたる。その敵は伯耆守源長明が男武者所定明是なり。人よはて明石源内武者といふ。是すなはち堀川院御在位の時のたきぐち也。殺害の造意は、定明いなをかの庄の執務年月をふるといへども、時國廳官として是を蔑如して面謁せざる遺恨也。彼夜討のとき、母この少人をばいだきて、後齒の竹の中へわけかくる。わりはさみのこやもちて敵の中へいられたるに、敵人明石武者のつらにしもたちぬ。其疵露顯のあひだ、逐電し

ぬ。人のちになづけてこやちこといふ

敵人夜討時國遺難、敵人負傷の圖

時國ふかき疵をかうぶりにて、今はかぎり成にければ九歳なる子にしめして云、我はこのきすにておはりなんす。しかりとはいへども、敵人をうらむることなかれ。これ先世のむくひなり。なを報答おもふならば流轉無窮にして、世々生々にたがひに在々所々にあらそひて輪廻たゆることは有べからず。凡生あるものは死をいたむ。われ此疵をいたむ、人またいたまざらむや。われ此命をおしむ、あにおしまざらんや。我身にかへて人の思を知るべきなり。むかしはからずしてものゝ命をころす人ありけり。つぎの生にそのむくひをうくといへる。願は今生の妄縁をたちて、彼宿意を忘ん。意趣をやすめずは何のよにか、生死のきづなはなれむ。汝もし成人せば、往生極樂を祈て自他平等の利益を思ふべしといひおはりて、心をたゞしくして、西方にむかひて、高聲念佛し眠が如くにしておはりぬ

遺 誠 臨 終 の 圖

葬送中陰の間、念佛報恩をおくりし刻、廟塔をたて、
佛鐘をならし、烏瑟妙相をあらはして、鶯嶺の眞文を
開題して、鶯子か知辨をむかへて西方の寶池におくら
んことをいのる

追 善 の 圖

卷 一

向福寺琳阿彌陀佛

師匠の命によりて比叡山にのぼるよし侍けるとて、母
儀に暇をこひて云、むかし大師釋尊とて十九の御とし
父の大王に忍てひそかに王宮を出給き。今の小童は十
三にして生母にいとまを申て、二親を佛道に入たてま
つらむ。それ流轉三界中恩愛不能斷、棄恩入無爲眞實
報恩者とうけたまはれば、けふよりのちこひかなしみ
うらみおぼしめすべからず。三河のかみ大江定基は、

出家して大唐にわたり侍し時、老母にゆるされをかふ
むりてこそ、彼國にして圓通大師の號をかふぶり、本
朝に名をもあげしか、ゆめくおしみおぼしめすべ
からずなど、かきくどきの給しかば、母ことはりにおぼ
してみどりなるかみをかきなで、なみだばかりぞい
たゞきにそゞぎける。今おもひあはずれば秘密灌頂と
かやにぞ。物はいはずして頂に水をばそゞぐと申は、
か様の事にや侍らん

かたみとてはかなきおやのとゞめてし

このわかれさへまたいかにせん

此ことはりを觀覺こそ申さまほしく侍を、こまくと
ありくしくおほせこと侍るめれば、それにつけても
かしこくのみ御學問のよしをももひより侍ける。む
かし晉の叡公いとけなくして法花經翻譯の時、師匠の
人天接のこと葉かきわづらひ給ける。さかしら思合ら
れてあはれにこそ侍れ。母うめる子にをしへらると。
悉達母のために摩耶經をとき給ひけむも、さこそとよ

ろづをしのびて、ちかくはあたか人とならん事をまち、
とをくは佛にならむまでをこそ、なき人のためには、
つちのあなをほりても申入侍らめ。されども有爲の習
しのびがたく、浮生のわかれまよひやすし。昔釋尊の
御わかれには、得道の羅漢、深位の菩薩、悲歎の色に
たへず。まして女の身にていかに申のべかたく侍にや

母子訣別、上洛登途圖

夫以天台山は桓武の聖主に傳教大師ちかひを鶯嶺の月
にをこし、法を馬臺の風にひろめ、天皇平安城ををし
ひらいて百王の社稷を泰し、大師延曆寺をたて、一乘
の垂迹を專にしき。佛法王法互に衛護をいたし、一乘
萬乘共に同遍を期す。故人いへる事あり。まつりごと
しげくては神よろこび、芝かれては蘭なく、物のあひ
感する事、草木もしかなりといへり。仍山門には一す
ちに君と國とを祈たてまつり。皇帝ふた心まします
法と人とをはごくみをはします。因縁靈山のむかしよ
りふかく、芳契朝野のいまにあつし。爰こやちこ登山

のとき、つくりみちにして月輪殿の御出にまいりあひ
たてまつりて、かたはらにたちより給ひけるを、御車
よりいかなるおさなきものにかと、御尋ありければ、
小童のをくり侍りける僧、美作の國より學問のため
に比叡山へまかりのぼる小童にて侍よし申ければ、ち
かくめしてよくよく學問せらるべし、學生になり給は
ゞ師匠に頼おぼしめすべきよし念比に御契ありけり。
まことに御宿縁のふかき程もいとあはれにこそ

童兒入洛殿下邂逅の圖

はじめて登山の時、ひさしの得業觀覺が狀云、進上大
聖文殊の像一體、天養二年乙丑月日觀覺が上西塔北谷
持法房の禪下。源光この消息を披閱して文殊の像を相
たづぬるところに、生十三の少人ばかりをさきにたて
てのぼる、よて奇異の思に住して、一文をさづくるに
十義をさとの次第、誠にたゞ人にあらず

登山、源光對面の圖

源光の云、われは是愚鈍の淺智也。此奇重の提撕にたらず。すべからく業を碩學にうけて圓宗の義をきはむべしとの給て、則功徳院の阿闍梨はあはたの關白四代のうち、三河權守重兼が嫡男少納言資隆朝臣の長兄隆寛律師伯父、皇覺法橋の弟子。一寺の名匠緇徒の龍象なり。阿闍梨この兒の器量拔群にて、天下の法燈たるべき事を悦て殊愛翫す。奇重おしへをうけてしるところ日々におほし。つゝに久安三年丁卯中冬に生年十五にして登壇受戒。十六歳の春初て本書をひらきて夜を日につきもゝをさしねぶりをわすれて、十八歳の秋に至るまで、三箇年の籠居ををくりて、六十卷の披覽をきはむ。惠解天性にして、をとく師の授にこへたり。阿闍梨いよく感嘆して云、まけて講説をつとめ、まさに大業をとげて圓宗の棟梁たるべしと。度々念比にすゝむれども、さらに承諾のこと葉なくして、忽に遁世の色有。師此こゝろざしの深き事を知て云、汝しからば黒谷に住して慈眼坊を師とせよ。彼慈眼房寂空、眞

言と大乘律とにをきては當時たぐひなき明匠なりといひて、則あひ具して寂空上人の室にいたりぬ。つぶさに彼素意をのぶ。寂空聞て隨喜す

判 要 の 圖

件の阿闍梨自身の分際をはからふに、輒此たび生死をいづべからず、若度々生をかへば、隔生即忘の故に定て佛法を忘れなむ歟。しかし長命の報をうけて慈尊の出世にあひたてまつらむと思ひて、命ながきものをかむがふるに、鬼神よりも蛇道はまされりとて蛇にならむとするに、大海は中天あるべし。しづかに池にすまむと思ひて遠江國かさはらの庄さくら池といふ所あり領家にかの池を申こひて、ちかひにまかせて死期の時水をこひて掌に入てをはりにけり。然に彼池風ふかすして俄に大浪たちて、池の中のちりことくくはらひあく。諸人は是を見て則此よしをしるして、領家にふれ申。その時日をかながふるにかの阿闍梨逝去の日也。智恵あるがゆへに、生死のいでがたき事をしり、道心

あるが故に佛の出世にあはん事をねがふ。然といへども、今に淨土の法門をしらざるゆへに、かくのごとくの意樂に住するなり。我其時に此法門をたづねえたらましかば、信不信はしらず、申すなまし。その故は極樂往生の後は、十方の國土心にまかせて經行し、一切諸佛思ひにしたがひて供養す。何ぞ強に穢土に久處する事をねがはむや。彼阿闍梨は遙に慈尊三會の曉を期して、五十六億七千萬歳の間、此池に住給はむとて、上人常に悲給き。當時にいたるまで靜なる夜は、振鈴のをときこゆとぞ申傳はべる。上人後に彼池に尋て、御渡ありけるに、蛇うきいで、物語ありけりと云云

阿闍梨堂に水を入れて遷化、上人蛇身の闍梨に對面の圖

久安六年庚午九月十二日、上人生年十八にして初て黒谷の寂空上人の深窓にいたる。時上人出でむかひて發心の由來を問給ふに、親父の夜うちのために世をはやうせしよりその遺言にまかせて通世のよし、思たちたる

次第、つぶさにかきくとき給ければ、さては法然具足のひじりにこそおはすなれと侍しより、法然といふ名をばつき給けり。いみ名は源空、是すなははじめの師の源光の初の字と、後の師寂空の後の字とをとられたる也。夫黒谷の體たらく、谷ふかくしてたかねきよし、ながれにくちすして人すみぬべし。道ほそくしてあとかすか也。あとをくらくする輩なんぞをらざらむしかのみならず、春の花夏の泉、秋の月、冬の雪、四季の感興一處にをのづから備へたり。又甘菓あり、かうばしき香あり、うへをさふるに煩なし。本尊あり聖教あり、罪を懺するにたのみあり、名をのがれみちをたのしむ人、爰をすて、又何の所にかすまむ云云

寂空上人と對面の圖

華嚴經披覽の時、あやしげなる蛇いで來を見て、圓明善信上人是ををそれ給ひける夜の夢に、われは是上人守護のために青龍の現する也。更にをそれ給べからず法花三昧修行の時、普賢白象道場に現す

華嚴披覽法華修行の現瑞、一僧感夢の圖

眞言の教門に入て道場觀を修し給しに、五相成身の觀行忽にあらはし給ふ

道場觀修行瑞相

鈴、鉢、の圖
杵三箇

向福寺琳阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

卷 三

向福寺琳阿彌陀佛

保元元年^{丙子}上人生年廿四の春、倩天台の一心三觀の法門を案するに、凡夫の得度たやすからば、衆生の出離だにもゆるさば、縱小乗の俱舍婆沙なりとも學せむと思て、求法のために師匠叡空上人に暇をこひて、修行に出給ふとて、先嵯峨の釋迦堂に七日參籠す。是則一

切衆生の生死をはなれ、罪惡凡夫の淨土に生ずべき蓋筋を大師釋尊のこの方の發遣、彌陀如來の彼方の來迎の教門、この時にひろまり、本願われらに熟すること上人の開悟によりてあらはれ侍べきにや

嵯峨清涼寺參籠の圖

嵯峨より南都の僧正藏俊の許にて法相宗を談じ給に、其義深妙にして不可思議なりければ、僧正かへりて上人に歸して佛陀と稱して毎年供奉をのべ給ふ

僧正と對談の圖

小乗戒は中河の少將の上人にしたがふて鑿真和尚の戒をうく。慶雅法橋にあひて華嚴宗の法門の自解義を述するに、慶雅はじめには懦弱して高聲に論談す。後には舌をまきて調枕をす。又大納言の法印寬雅にあひて三論宗を談じ給ふに、宗のをぎろをさぐり、師のふかき心を達するに、法印泪をながし、二字してかの宗の血脉に、わが名のうへに上人の名を書給。時の人こと

わざかに云、智惠第一の法然房といへり。まことなるかなや

法印血跡書相承の圖

凡南都北嶺にして、諸宗の心をうかゞふに、天台の一心三觀の法にいでず。みな凡夫たやすく生死を出べき法にあらず、よて本山黒谷に還住して報恩藏に入て一代五時の諸經はじめ、花嚴の法界唯心、阿舍の四諦緣生、方等の彈呵褒貶、般若の染淨虛融、法花の唯一佛乘、醍醐拈捨の妙藥惣じて自他諸宗の經論章疏眞言止觀のをぎろ心を三觀の彌陀にあらわして、こゝろざしを九品の淨界にすまし給ふことのはじめは 高倉院の御宇安元元年乙未行年四十三の時、凡夫出離の要道のため經藏に入て、一切經五遍披見之時、善導觀經の疏四卷披見し給に、極樂國土を高妙の報土と定て、往生の機分を垢障の凡夫と判ぜられたり。爰に奇異の思をなして、別して又彼の疏を三遍ひらき見るに、第四卷にいたりて一心專念彌陀名號、行住坐臥不問時節久近、

念々不捨者是名正定之業、順彼佛願故と云へる文に付て、年來所修の餘宗をなげすて、ひとへに一向專修に歸して、毎日七萬遍の念佛をとなへて、あまねく道俗貴賤をすゝめ給へり

閑談、善導來現の圖

阿彌陀佛稱名を本願とたて給へる故をもつて、この故に稱名にすぐるゝ行あるべからずと上人たて給とき、師範寂空上人云、觀佛はすぐれ、稱名はおとればなりといふ。上人なを念佛すぐれたる義をたて給ふ。寂空はらたちて拳をにぎりて上人のせなかをうちて先師良忍上人も觀佛はすぐれたりとこそ仰られしかとの給。上人云、良忍上人もさきにこそむまれ給たれと。爰に寂空上人いよくはらたちて、くつぬぎにおりてあしだをとりて、又うち給。聖人云、聖教をばよく御覽候はでと、あはれなりしこと也

觀稱優劣論談、寂空足駄を以て打たんとするの圖

かくて叡空上人臨終の時、讓狀を書て、上人聖教往來等をゆづりてをはり給ぬ。やゝ久しく有てよみかへる、讓狀をこひて、別紙に進上のことばをくわへて、ゆづられおはりぬ。さだめて冥途にさた侍けるかと、申あはれける

叡空上人臨末讓狀書き與ふるの圖

暗夜に經卷を見給に、灯明なけれども、室のうちをてらすこと、ひるのごとし。信空上人おなじくそのひかりを見る

（此處班圖を缺く）

治承四年庚子十二月二十八日東大寺炎上の後、大勸進の

さたのあひだ、當世におきては法然房源空かの精撰にあたりと、人おほくのゝしる。後白河法皇此事をきこしめされて、勸進たるべき旨、先右大辨藤原行隆朝臣をもて内々仰らるゝに、上人じたいして云、貧道もとより山門の交衆をやめて、林叢の幽栖をよみする事は、しづかに佛道を修行して順次に生死をはなれむが

ため也。もし大勸進の職にをらば劇務萬端にして自行さだめてすゝみがたからむか。自行すゝまずば往生とげがたからん。いまにおきては、ひとへに淨土の法をのべ自のためは專稱名の行を修して、この二のほかには他のいとなみなからむと思ふと云云。行隆朝臣その志をしりてかの詞を奏す。法皇重て仰せて云、若然者器量の仁あらは奏申されべし。上人申給はく、しばらく案じてすなはち春乘重源上人、醍醐におはしけるをよびくだして云、法皇より東大寺の大勸進の器量の仁御尋あり。召にかなひてむや、いなや。重源左右なく領承によりて、奏達せらる。法皇きこしめし、よろこびて大勸進職に補せられおはりぬ。補して後上人の給はく、重源大勸進にたる事一定の權者かなと云云

朝臣來問並重源來謁の圖

文治二年の比天台顯眞座主の御許より、使者を法然上人へつかはされて云、登山の次に必見參をとげて申承べき事侍り、音信せしめ給へと。仍坂本にいたるよし

しめず。座主くだりて對面せしめてとて云、今度いか
でか生死を解脱し侍べき。答云、何様にも御斗にはす
ぐべからず。又云、まことにしか也。但先達におはし
ませばもし思ひ定給へる旨あらばしめし給へ。その時
自身のためには聊思ひ定たるむね侍り。たゞはやく往
生極樂をとげむと也。又云、順次往生とげがたきによ
て、此尋をいだす、いかゞやすく往生をとげむや。答
云、成佛はかたしといへども、往生はえやすし。道綽
善導の御心によらば佛の本願をあふひで強縁とするが
故に、凡夫淨土に生すと云云。其後さらに言説なくし
て上人歸給ひて後に、座主の御詞に云、法然房は智慧
深遠なりといへども聊偏執のとがありと云云 又人來
て是をかたる。わがしらざることいふには必疑心をお
こすなり。座主此事を聞てまことにしか也と云く、わ
れ顯密の教におきて稽古をつむといへども、併名利の
ためにて淨土をこゝろざゝりけり。かるがゆへに、
道綽善導の釋をうかゞはず。法然房にあらすば誰人か

かくのごとき事をいはむ。此こと葉をはちて、大原に
隠居て百日のほど淨土の章疏を見給へり。しかうして
のちに、われすでに淨土の法門をみたて侍り來臨し給
へ、談じたてまつるべしとて、座主かねて只我一人聽
聞すべきにあらず。處々の智者請じあつめんと、さだ
めて大原龍禪寺に集會して後、法然上人を囑請するに
左右なく來給へり。喜悅きはまりなし。上人の御方に
は東大寺の上人ゐながれ給へり。座主の御かたには光
明山の僧都明遍、東大寺三論宗の長者なり。侍從已講
貞慶笠置の解脱房なり。印西上人大原本生房湛暎。こ
の人々をばいひくちにさだめらる。嵯峨の往生院の念
佛房、天台宗の人なり。大原の來迎院の明定坊蓮慶、
天台宗の人也。蓮契上人弟子十餘人、山門久住の人々
には法印大僧都智海法印、權大僧都證真共に天台の碩
學也。靜嚴法印覺什僧都淨然法印仙基律師等の外、妙
覺寺上人菩提山の藏人入道佛心長樂寺定蓮坊八坂の大
和入道見佛松林院の清淨房、さくらもとの究法房つぶ

さなる數三百餘人なり。その時上人淨土宗義理、念佛の功德、彌陀本願の旨を明にこそ説給ふに、いひくちとさだめたる本生房默然として信伏しをはりぬ。集會の人々ことごとく歡喜の涙をながしひとへに歸伏す。

法藏比丘のむかしより彌陀如來の今に至るまで、本願の趣往生の子細くからず。是をとき給とき、三百餘人一人として疑ふ事なし。人々虚空にむかへるが如し言語を出す人なし。碩德達ほめて云、かたちを見れば源空上人、まことは彌陀如來の應現かとうたがふ。座主みづから香爐をとりて持佛堂にして旋遶行道して高聲念佛を唱へ給ふに、南北の明將、西土の教に歸し、老若の諸人心中のまことをこらして、をのく異口同音に三日三夜の間たゆることなく、高聲念佛す。座主一の大願をおこし給へり。此寺に五の坊をたて、一向專念の行を相續せむ、稱名のほかにさらに餘行をまじへず。一度はじめてよりこのかた今に退轉せず。此門に尋入て後に、妹の尼御前をすすめむがために、念佛

勸進の消息といへる是也。湛歎上人の發起にて來迎院勝林院等に不斷念佛をはじめらる。是よりこのかた洛中邊土處々の道場に修し勤ざる所なし。大佛の上人一の意樂をおこして云、此國の道俗閻魔宮にひさまづかむとき、交名をとれば其時佛名を唱へしめむがために、あみだ佛を、まづ我名をば南無阿彌陀佛云云。我朝に阿彌陀佛名の流布する事は此時よりはじまれり

大原談義並行道念佛の圖

高野の明遍僧都上人御造の選擇集を見て、よき文にて侍れども偏執なる邊ありと云云。其後夢に見給。天王寺の西門に病者かずもしらずなやみふせり。一人の聖ありて鉢にかゆを入れて貝をもちて病人の口々ごとにいる。誰人ぞと問へば、ある人答云、法然上人也といふと見てさめぬ。僧都おもはく、われは選擇集を偏執の文なりと思ひつるを夢にしめし給へるべし。この上人は機をしり時をしりたる聖にてましける。病人の様ははじめには柑子橋梨子ていのものを食すれ共、はてに

はそれもとゞまりぬ。後にはうき／＼をもて喉をうるをすばかりに命をひかへて侍なり。この様に一向に念佛を勧められたる。これにたがはず。五濁濫漫の世には佛の利益も次第に減ず。この頃はあまりに世に於て我等は重病のもの、如し。三論法相の柑子たちばなもくはれず、眞言止觀の梨子もくはれねば、念佛三昧のうき／＼にして生死を出べきなりけりとて、上人に參て懺悔し、專修念佛門に入給にけり

明通感夢の圖

またある時明遍僧都善光寺參詣のついでに、小松殿の坊に參じて上人に問て云、末代惡世の罪濁の我等いかにして生死をはなれ侍べきや。上人答云、彌陀の名號を稱して淨土に往生をする。これをもて其肝心とするなりと。明遍愚案、如此信心を決定せむがために、かさねて此問をいたす也。そも／＼念佛の時、心の散亂するをば如何し侍べきや。上人の給く、欲界の散地に生をうけたるもの、心、あに散亂せざらむや。其條は

源空も力をよばず。唯心は散亂すれども、口に名號を稱すれば、佛の願力に乗じて、往生疑なし。所詮唯念佛の功をつむべき也。明遍悦て則退出。後に上人の給はく、あなこと／＼の御房や、生得の目鼻を取捨るやあると云云

明通小松殿參向の圖

卷 四

向福寺琳阿彌陀佛

上西門院にて上人七日說戒の時、前戒の草むらの中に大なる蛇有て、日々にかくる事なくわざかまり居て、頗聽聞の氣色見へければ、人々目もあやに見けり。第七日の結願にあたりて、この蛇からかきの上にのぼりてやがて死にけるほどに、其頭の中より蝶の様なる物出と見る人もあり。天人のぼると見る人も有。昔遠行するひじりその日くれにければ、野中につかあなあり

けるにとゞまりて夜もすがら無量義經をそらに誦するに、塚穴の中に五百の蝙蝠ありけり。此經聽聞の功德によりてかうむり五百の天人となりて、初利天に生ずとこそ夢に告侍けれ。今一の蛇七日説戒の功力にこたへて蛇道の報をはなれて雲をわけてのぼりぬるにやと人人隨喜をなす。彼は上代なるうへに大國なり。これ末代にして小國なり。勝事たり凡たゞ人にあらず

説戒、小蛇解説の圖

高倉の天皇御受戒、その戒の相承南岳大師より傳れるところいまだたへず。世間流布する戒體是なり。彼慈覺大師 清和天皇に授たてまつられしとき、男女の受者百餘人利を得益をかうぶる。今上人 當帝に十戒を授たてまつらしめ給事、陳隋二代の國師天台大師大極殿にして仁王經を誦し給しに、殿上階下稱美讚嘆に殿かまひすくそ侍し。是も月卿雲客より后妃采女に至るまで、粉々たる禁中に唱々たるいきさし、堂々たる宮人面々たる信敬、もろこしのいにしへにもはぢすや。

まとの中ころをしたふ故に、九帖の附屬の袈裟福田を我國にひらき十戒の血脈の相承種子を秋津島にまく。抑安然和尚の戒品を傳し、いまだ袈裟の附屬をばうけず。相應和尚念佛をひろめし、又いまだ戒儀をばとかさりき。彼此を兼たるは今の上人也。これによりて戒品をうやまひて帝珠をみがき、彌和尚の位にすゝみ給べし。それ榮啓期が三樂をうたひしいまだ常樂の門にいたらず。皇甫謐が百王をのべしなを法皇の道にくらかりき。唯今源空上人こそめされてまいられ侍れ。何事にか侍らむ。大乘戒とかるべしとこそ承れ。剋限よく成てや侍らむ。聽聞に參侍ん、いづれの殿にてか侍らむ。清涼殿とこそうけたまはれ。凡この山上洛中近國遠き郡の道俗翕然としてかうべをかたぶけ戒をうくるもの一朝につもるところ稱計すべからず。昔剃刀をのみし夢いまさら符合す

高倉帝御受戒の圖

後鳥羽院御宇建久元年 庚戌の秋清水寺にして上人説戒の

座に念佛すゝめ給ければ、寺家の大勸進沙彌印藏瀧山

寺を道場として、不斷常行三昧念佛はじめける。開白

發願して能信香爐をとりて行道しはじめむ。願主印藏よ

りはじめて比丘比丘尼其數をしらす。仁和寺の入道法

親王の御夢想と云云。このたき、過去にもこれありき

現在にもこれあり、未來にもこれあるべし、すなはち

大日如來の鑊字の智水なりと示して、おなじく詠じ給

ふ

清水の瀧へまいればをのづから

現世安穩後生極樂

御使者大威儀師俊縁

清水瀧並瀧山寺説法の圖

清水寺にて上人説戒の時、念佛すゝめまし／＼ければ

南都の興福寺に侍る小舎人童出家發心して、松苑寺の

邊に草庵をむすびて往生をとぐ。能信如法經のかうそ

をこしながら往生人に結縁せむとて、入棺のさき火の

やくをつとめてかへるに、異香衣のうへに薫す、奇異

の思ひをなす

小舎人往生の圖

靈山にて三七日不斷念佛のあひだ、燭なくして光明あ

り。第五の夜、各行道し給に、まじはりて大勢至菩薩

つらなりてたち給へる事を、ある人夢の如くに拜して

上人に此よしを申に、さる事侍むと返答あり。是より

始て人々恠をなしはべりき

勢至菩薩列にかり給ふ圖

後白河の法皇にめされて説戒、再往生要集を談ぜしめ

給に、往生極樂の教行は濁世末代の目足也、道俗貴賤

たれか歸せさらむと侍けるより、各心肝に銘じていま

はじめて聞けるやうに隨喜感涙抑がたし。仍 太上天

皇院宜をくだして左京權大夫藤原隆信朝臣に眞影をう

つさしめて、將來のかたみにとて蓮花王院の寶藏にこ

めらる

講説の處並寫影の圖

念佛の人おほしといへども、關東には熊谷、鎮西には

聖光房、淨土の教門に入しより、他家をのぞまざる人なり。就中聖光房は一山の同侶猶契あり。況證眞法印の門人なり。かの法印は源空が甚深の同侶、後世菩提を契たりし人の弟子にてありしが、源空が弟子になりて八ヶ年があひだ受學せし人也と云云。後白川院の御菩提のために、建久三年の秋やさかのやまとの入道見佛、やさかの引導寺にして七日念佛勤行侍けるに、禮讚の先達に心阿彌陀佛、助音には沙彌見佛安樂住蓮なり。これは同音六時禮讚のはじめなる

御道善禱讚修行の圖

卷 五

春乘房唐より觀經の曼荼羅ならびに、淨土の五祖の影をわたして東大寺の半作の軒のしたにて供養あるべしと風聞しければ、南都の三論法相の學佔敷をつくして

あつまりけるに、二百餘人の大衆をのゝはだに腹巻をき、高座のわきになみゐて、自宗等をとひかけてこたえんに、糺繆あらば耻辱にあつべきよし僉議して相待たてまつるところに、上人すみぞめの衣に高野ひがさうちきて、いとこともなげなる體にて、かさうちぬぎて禮盤にのぼりて、やがて説法はじまりぬ。三論法相の深義をとゞこほりなくのべて、凡夫出離の法、口稱念佛にしくはなし。念佛そしらむ輩は、地獄に墮在すべきよし講説し給ければ、二百餘人の大衆よりはじめて覆面をしのけて隨喜渴仰きはまりなし。經藏へいらせ給ければ、各御供して後生たすけさせ給上人とおがみたてまつる中に、惡僧一人上人にたちむかひたてまつりて云、抑念佛誹謗のもの地獄におつべしとは、いづれの經にとかれて侍やらむと。上人答云、大佛頂經説これなり云云又件の僧ふくめむをしのけて、手を合せて後生たすけさせ給へ、上人とてあふらくらへ入たてまつる。それよりこのかた南都北嶺かしなが

ら、淨土の教に歸し、念佛せずといふ事なし。又當寺の古徳の中に、兼夜靈夢を感ずる事ありけるあひだ、件の次第さきだちて披露し侍れば、いよく歸依をなし侍れとぞ、申侍ける

東大寺説法の圖

無品觀王靜思御所勞の時、門徒の高僧共大般若經轉讀したてまつり、をの／＼祈請申されけれども更に御平愈なかりければ、上人を招請したてまつりて臨終の次第ども御尋ありける。令旨にいはいはく、如何にしてか今度生死をはなれ侍るべき。後生たすけさせ給へと。上人御返事にいはいはく、往生極樂の御願、御念佛にはしかず候。まさしく光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨と説かれ侍ると、其後御念佛をこたらずして、御臨終正念にておはらせ給き。大般若衆には僧正行舜僧正公胤僧正賢實座主顯眞法眼圓豪法印遺嚴法印察觀等也

大般若轉讀、臨終問答の圖

上人自筆の記に云、生年六十有六、建久九年正月一日

やまものゝ法橋教慶がもとより歸て後、未申の時ばかり恒例の正月七日念佛是を始行、一日明相すこしく現す。例よりもあきらかなりと云云。二日水想觀自然成就すと云云。惣て念佛七ケ日のうち地想觀の中に、瑠璃の相少分これを見る。二月四日のあした地分明に現すと云云。六日後夜に瑠璃の宮殿の現す。七日の朝かさねて又現す。則この宮殿をもてあらはれてその相現す。すべて水想地想寶樹寶池寶殿の五觀はじめて正月一日より二月七日にいたるまで、三十七ケ日のあひだ毎日七萬返念佛不退にこれをつとむ。是によりてこれらの相現すと云云又別傳に云、紫雲廣大にしてあまねく日本國におほへり。雲中より無量の廣大の光を出す。白光の中に百寶色の鳥とびちりて虚空にみたり。善導和尚のもすそよりしもは、金色にて現じての給はく、汝下劣の身なりといへども、念佛興行一天下にみたり。稱名專修衆生におよぶが故に、われ爰にきたる。善導すなはちわれなり

五 觀 現 前 の 圖

無量壽佛化身無數與觀世音大勢至當來至此行人之所といへり。上人つねに居し給ところをあからさまに立出で歸り給ひければ、阿彌陀の三尊の木像畫像にも非ずして、かきをはなれいたしきをはなれて、天井にもつかずしておはしましけり。それより後長時に現じたまふ

三 椽 出 現 の 圖

建久九年戊午正月四日上人聖光房に示ていはく、月輪の殿下教命によりて選擇集一卷を作。ふかく秘すべきよし仰を蒙りて流布するにあたはず。世にきこゆる事あれどもうつす人なし。汝は法器の仁也。我立するところ此書をうつしてよろしく末代にひろむべし。聖光すなはち命を請て自委細にうつして、うやまで提撕をうく。函杖をえたるがごとし。水を器にうつすに似たり。それよりのち、日々に受學すゝめて指誨をうく

選擇集受寫の圖

元久元年仲冬比山門の衆徒の中より念佛停止すべきよし、大衆蜂起して顯眞座主に訴申。是によりて上人へたづね申さるゝにつゐて、上人起請文を進ぜらる。叡山黒谷の沙門源空敬白、當寺住持の三寶護法善神の御寶前、右源空壯年のむかしの日は粗三觀のとぼそをうかゞふ。衰老のいまの時は一とへに九品のさかひをのぞむ。これ先賢の古跡なり。さらに下愚が行願にあらず。しかるに近日風聞にいはく、源空ひとへに念佛の教をすゝめて餘の教法を謗す。諸宗これによりて凌遲し諸行これによりて滅亡すと云云。此旨を傳聞に心神を驚す、ついに則事山門にきこへ議衆徒に及べり。兩誠をくわうべきよし、貫首に申されをはりぬ。此條一には衆勤をおそる。一には衆恩をよるこぶ。おそるゝところは貧道が身をもて忽に山洛のいきどをりに及む事。謗法の名をけちてながく花夷のそしりをやめむ事若衆徒の糺斷にあらずば、いかでか貧道が愁歎をやす

めむや。おほよそ彌陀の本願にいはいはく、唯除五逆誹謗正法と云云。念佛をすゝむるともがらいかでか正法を誘ぜむ。又惠心要集には、一實の道をきゝて普賢の願海に入と云云。淨土をねがふたぐひあに妙法をすてむや。就中源空念佛の餘暇にあたりて天台の教釋をひらきて信心を玉泉の流にこらし、渴仰を銀池の風にいたす、舊執なを存す。本心なんぞ忘む。唯冥鑿をたのむ、たゞ衆察をあふぐ。たゞし老後遁世のともがら愚昧出家のたぐひあるひは草庵に入てかみそり、或は松室にのぞみて心ざしをいふ。つゝに極樂をもて所期とすべし。念佛をもちて所行とすべきよし、時々もて説諫す。是則よはひをとるへて研精にたへざるあひだ、暫く難解難入の門を出、心みに易行易道をしめすなり。佛智猶方便をまうけ給ふ、凡愚あに斟酌なからむや。あえて教の是非を存するにあらず、ひとへに機の堪否を思ふこの條もし法滅の縁たるべくは、向後よろしく停止にしたがふべし。愚疎ひそかにまどへり。衆斷よろしく

さだむべし。いにしへより化導をこのます、天性弘教をもはらにせず、このほかに僻説をもて弘通し、虚誕をもちて披辭せば、もとも糺斷あるべし、尤炳誠あるべし。のぞむ所なり、ねがふ所。よし此等の子細先年沙汰のとき起請文を進じおはりぬ。又其後今に變ぜずかさねて陳するにあたはずといへども、嚴誠すでに重疊のあひだ、誓狀また再三。かみくだむの子細一事一言虚誕をくはへ、會釋をまうけば毎日七萬遍の念佛その利をうしなひて、三途に墮在して現當二世の依身、常重苦にしづみてながく楚毒をうけむ。ふしてこふ當寺の諸尊満山の護法證明見し給へ。源空うやまで申す。元久元年十一月十三日源空敬白御判在

九條禪定殿下大原の大僧正顯眞におくらるゝ自筆の御消息を被副進。其詞に云、念佛弘行の間の事、源空上人の起請文消息等山門に披辭してより動靜いかむ、尤不審に候。抑風聞のごときは、上人淺深三重の過によりて炳誠一決僉議に及と云云。一には念佛を勸進する

惣じてしかるべからず。是すなはち眞言止觀にあらず
 口稱念佛の權説もてさらに往生をとくべからざるが故
 にと云云此條におきては定て滿山の談評にあらず、も
 しこれ一兩の邪説歟。他の謗法をとがめむために、み
 づからかへりて謗法をいたす。勿論といひつべし。二
 には念佛の行者諸行を毀破するあまり、經論を焚燒し
 章疏をながしうしなう。或は又餘善をもちては九品の
 因とすと云云。これをきかむ緇素たれか驚歎せざらむ
 や。諸宗の學徒專醇陶するにたれるか。たゞしこの條
 にをきては殆信をとりがたし。すでにこれ會昌天子守
 屋の大臣等の類歟。如是の諸過はまことならずと云云
 たしかなる説について眞僞を決せられむに、あへてそ
 のかくれあるべからず。事もし實ならば科斷またかた
 しとせず。ひとへに浮説をもちてがを上人にかくる
 條、理盡の沙汰にあらざるか。三には如是の逆罪に及
 ばずといふとも、一向專修の行人餘行を停止すべきよ
 し、勸進の條なをしかるべからず。此條におゐては進

退相半たるか。善導の意にこのむねをのぶるに似たり
 しかれども旨趣甚深也。行者おもふべし。今上人の弘
 通はよく疏の意をさぐりて謬訛なし。しかるを門弟等
 の中に奥儀をしらず、みだりがはしく偏執をいたすよ
 し、聞へあるか、是はなはだもて不可なりとす。上人
 遮きてこれをいたむ。小僧いさめてこれを禁ず。當時
 すでに數輩の門徒をあつめて七ヶ條の起請をしるし、
 をのく連署をとりてながく證據にそなふ。上人もし
 謗法をこのまば禁遏めに如是ならんや。事ひろく人を
 ほし。一時に禁止すべからず。根元すでにたちぬ。舊
 執の枝葉むしろ繁茂する事をえんや。是をもちてこれ
 をいふに、三重の子細一つとしても過失なし。衆徒鬱
 憤なによりてか強盛ならむ。はやく滿山の停止とし
 て來迎の音楽を庶幾すべきか。抑諸宗成立の法各自解
 をもはらにして餘教をなむともせず。弘行のつねのな
 らひ先徳の故實なり。是を異域にとぶらへば、月氏に
 はすなはち護法清辨の空有諍論。震旦にはまた慈恩妙

樂の權實の立破なり。これを我國に尋るに、弘仁の聖代戒律大小のあらそひ有り。天曆の御宇には諸宗淺深の談あり。八家きをいて定準をなし、三國つたえて軌範とす。しかれども、あらかじめ末世の邪亂をかゞみて諸宗の討論をとゞめられしよりこのかた、宗論ながくあとをけづり、佛法それがために安全たり。就中淨土の一宗をきては古來の行者ひとへに無染無着の淨心をおこし、專修念佛の一行にまかせて他宗に對して執論をこのます。餘教に比して是非を判ぜず。ひとり出離をねがひて、必往生の直道をとげむとなり。たゞ弘教嘆法のならひ、いさゝか又その心なきにあらざるか。源信僧都の往生要集の中に、三重の問答をいだし、十念の勝業を讚す。念佛の至要此釋に結成せり。禪林の永觀智德惠心に及ずといへども行淨業をつげり。えらぶところの十因にその心また一致なり。普賢觀音の悲願をかむがへ、勝如教信先蹤を引て念佛の餘行にすぐれたる事を證せり。彼時に諸宗のともがらは惠學

はやしをなし禪定水をたゞふ。しかりといへども惠心をも破せず、永觀をも罰せず。諸教も滅する事なく念佛もさまたげなし。是則世すなをに人うるはしき故也。しかるを今世澆季にをよび、時閑靜に屬して能破所破とも邪執よりをこり、正論非論みな喧嘩にをよぶ。三毒内にもよをし、四魔外にあらはるゝがいたす所なり。また或人のいはく、念佛もし弘通せられば、諸宗たちまちに滅盡すべし。爰をもちて過妨すと云云。この事しかるべからず、過分の逆類にをきては實によりて禁斷せらるべし、また淨土宗のいたむところにあらず。末學の邪執にいたりては上人嚴禁をくわへ、門徒すでに服膺す。かれといひこれといひ、なむぞ佛法の破滅に及ばむや。凡顯密の修學は名利によりて破滅す。これ人間のさだまれる法なり。淨土の教法におきては名にあらず、利にあらず、後世を思人のほかに、たれか習學せんや。念佛弘行によりて餘教滅盡の條、戲言歟、狂説歟いまだ是非をわきまへず。もしこの沙汰

熾ならば、念佛の行におきて一時に失墜すべし。因果をわきまへ患苦をかなしむ人、あに傷嗟せざらむや。寧悲泣せざらむや。爰に小僧行年のむかしより衰暮のいまにいたるまで、自行おろかなりといへども、本願をたのむ罪業おもしといへども、往生をねがふにものうからず、おこたらずして四十余廻の星霜をくぐる。いよくもとめいよいよすゝめて、數百萬遍の佛號をとなふ。頃年よりこのかた病せまり、命もろくして黄泉に歸せむ事、ちかきにあり。淨土の教跡このときにあたりて滅亡せむと。これを見是を聞いていかでかしのばむ。三尺のあきのしもきもをさす、一寸の燈むねをこがす、天にあふぎて嗚咽し、地をたゞきて愁苦す。いかに云や上人小僧にをきて出家の戒師たり、念佛の先達たり、歸依これふかし、尊崇尤切也。しかるをつみなくして濫刑をまねき、つとめありて重科に處せられば、法のためには身命をおしむべからず。小僧かはりてつみをうくべし。よて師範のとがをすくはむとお

もふをもて、淨土の教をまほらむとおもふ。おほよそその佛道修行の人自他ともに罪業をかへり見べし。しかるをあなたがちに諮諍隨事の偽論を訛して、いよく無明迷理の障に墮せむ事、いたましき哉や、かなしきかなや、こゝ學侶の心あらむ理に伏て執を變じ、法に優してつみをなだめよならくのみ死罪云云

うやまで申。十一月十三日 專修念佛沙門圓昭 前大僧正御房

上人、圓昭對坐の圖

卷 六

あるとき上人瘡病し給ふ事あり。種々の療治に一切かなはず。時に月輪の禪定殿下おほきに是をなげきての給はく、我善導の御影を圖繪す。上人の前にしてこれを供養せむとおもふ。このよし安居院の僧都のもとへおほせらる。御返事にいはく、聖覺も同日同時に病病

つかうまつる事に候。しかりといへども師匠報恩のためにも參勤つかまつるべし。たゞし早且に御佛事はじめらるべしと云云。辰時より説法はじめて未時に説法をはりぬ。導師ならびに上人ともに瘡病をちをはりぬ。又其説法の大師釋尊も衆生に同する時は、常に病惱をうけ療治をもちひ給ふべき。いはむや凡夫血肉の身いかゞそのうれへなからむ。しかりといへ共、淺智愚鈍の衆生はこの道理をかへりみず、定不信のおもひをいたさむか。上人化道すでに佛意にかなひてまのあたり往生をとぐるもの千萬云云。しかれば諸佛菩薩諸天龍神いかでか衆生の不信をなげかさらむ。四大王佛法を守護すべくばかならずわが大師上人の病惱をいやし給べきなり。善導の御影の前に異香薫すと云云。僧都云、故法印は雨をくだして名をあぐ、聖覺が身にはこの事も奇特を云云。世間の人おほきにをどろきて不思議のおもひをなすと云云

導師の御影供養の圖

元久二年^丑四月五日上人月輪殿に參りて淨土の法門御談のち退出のとき、地のうへより高く蓮花をふみてあゆみ、御うしろに頭光赫奕たり。禪定殿下くづれをりさせ給て稽首歸命したてまつりて、なみだ千萬行なり。しばらくありて茫然としておどろきをきての給はく、上人の頭上に金色の圓光顯現せり、希有事、各々これをおがみたてまつるか。時にかたはらにはむべるは戒心房^{左京權大夫}、大蓮房^{中納言阿}二人なり。ともに容す見たてまつらず。歸依としふりたりといへども、このちはいよく佛のおもひをなしたてまつる

頭光顯現の圖

上人はじめは戒をとぎ、人にさづけ、後には教をひろめて信をなし給ふ。日域におきては無畏をほどこす。觀自在王の蒼天をてらすがごとし。月輪にして光明をしめす。しりぬ得大勢至の白毫なるべしといふ事を。諸佛菩薩の大悲利生おほくましますも、安立世間のはじめより劫末壞劫のすへまでに、日月の光にふれざ

る有情非情あるべからず。是故にいざなぎいざなみの尊觀音勢至の垂迹、日月としてよをてらしめます。又二菩薩の化をほどこして九品蓮聲をひらき給。末代なりといへども誰人かうたがひをなさむ。あふひて信すべし。如是善因しからしめ業報これあらたなるころに、南北の碩徳顯密の法燈あるひは我宗を謗すと號しあるひは聖道をさまたくと稱して事を左右によせとがを縦横にもとむ。源空が門弟等不思議をしめしてとがを大師にをほせて遠流に處せらる。凡往生極樂のみちまぢくなるあひだ、名號の一門をひらきてよにしたがひてひろめ、機にかふらしめてさづく。みづから邪義をかまへてもて師説と號するきざみ、予が一身におほせてはるかに萬里の浪にたゞようべし。たゞし此事をいたむにはあらず。昔教主釋尊は因行のとき檀施のあまり、父の大王にいましめられて幽山にこめられ給しかども、その心さしこりすして、ますく修し給しかば、彼山を釋迦山と號して遂に正覺のにはとなり

にけり。忍世一人衆生を度せさらむや。諸佛菩薩またまたかくのごとし。さらにうらむる所なし。あへてなげく事なかれ。そもく縁は順逆にわたる。引接人をきはす來迎に前後あり。遲疾は人の心なるべし。文に云、佛告阿難汝好持是語、持是語者即是持無量壽佛名。上人和していはく名號をきくといふともこれを信ぜずばきかざるのごとし。是を信するといふ共となへずば、信ぜざるのごとし。唯常に念すべしと云云。かかるほどに、小松殿へうつり給に、禪定殿下おほきかなしみなげきまします

上人小松殿に移り殿下と對坐の圖

元久三年七月よし水をいで、小松殿にうつりて明月を詠じ給けるに、權律師隆寛小松殿に參向の時、上人御堂のうしろとに出むかひて、一卷の書を隆寛律師のむねのあひだにさしいれたまふ。月輪殿の仰によりてえらぶところの選擇集これなり

選擇集授與の圖

建永二年^卯二月廿七日還俗の姓名源元彦、配所土佐國に侍りけれども、月輪禪定殿下の御沙汰として法性寺の小御堂に逗留をなして三月十六日都を出給ふ。しなの、國角はりの成阿彌陀佛沙彌隨蓮力者の棟梁として惣じて我も／＼と參勤の人々六十余人なり。この次第を見るに人々なげきかなしみ付ければ、かれらをいさめんがために驛路はこれ大聖のゆくところなり。漢には一行阿闍梨、日本には役行者、謫所は又權化の栖砌なり。震旦には白樂天、我朝には菅丞相なり。在纏出纏みな火宅なり。眞諦俗諦しかしながら水驛なり。ここに角はり俗性もいやしからず、王家をまほり朝敵をとりひしぐ。伊州の玄孫なれども本師上人に隨て又奴となり僕となれり。ことさらちからをつくして御こしをか。菜つみ水くむ役をいとはず、身をすて、つかへむとす。爰に一人の弟子に對して一向專念の義をのべ給。西阿彌陀佛といふ弟子推參していはく、如是の御義ゆめ／＼あるべからず候。をの／＼御返事を申さ

しめ給べからずと云云。上人の給はく、汝經釋の文をみずや。西阿がいはく、經釋の文はしかりといへども、世間の機嫌を存するばかりなり。上人の給はく、我首をきらるとも此事いはずはあるべからずと云云。御氣色もとも至誠なり。見奉る人々なみだをながして隨喜す。時に信空上人ひそかに啓していはく、衰邁の身をもて遠境のたびに出給ふは、師といきながら別離す。あひさる事いくばくぞ、各々天の一座にあり、山海へだてまたながし。音容ともにいまにかぎれり。再會なむぞしるべき。又うれうらくは、師所犯しなすでに流刑の宣を蒙れり。あとにとゞまる身のためひとりなむのおもひてのあつい事あらむといひて、むねをうちて嘆息す。上人の給はく、予よはひすすでに八旬にせまれり。おなじ帝畿にありともながくいきてたれかみむ。但因縁はつきず。なむぞ又今生の再會なからむ、うれへされ。この時にあたりてまた遊鄙の群類を化せむ事、是莫大の利生なり。但いたむ所は源空が興する所の淨

土の法門は濁世衆生の決定出離の要道なるがゆへに、守護の天等常隨すらむ。わが心には遺恨なしといへども、かれらの天等さだめて冥敵弟子が住蓮 斬刑かくのごとし。前代いまだきかず。事常篇にたえたり。因果のむなしからざる事いきて世に住せらればおもひあはせらるべきなりと云云。信空上人のいはく、先師の事はたがはずはたしてそのむくひあり。なにをもてしるとするとならば、承久の變亂に東夷上都にかちし時、きみは北海の島の中にましまして多年心をいたましめ、臣は東土のみちのかたはらにして、一旦いのちをうしなう。先言のしるしある後生よろしくきゝとるべし。つぎに又云、およそ念佛停廢の沙汰あることに凶厲ならずといふ事なし。人皆是を知り、靦縷にあたはずと云云。此事筆端にのせがたしといへども、前事のわすれざるは、後事の師なりといふをもちてのゆへに、よのため人のため、はゞかりながらこれを記す

門弟悲嘆上人垂誠、上人花落を出給ふ圖

同日大納言律師公全も西國へながされ侍りけるが、律師の船はさきに出けるが、上人くだらせ給とききて、しばらくをさへて、上人の御船にのりうつりひとめ見あげて上人の御ひさにうつふしなくといへども、上人はなみだもとさず、念佛しておはしける程に律師の舟よりとくくと申ければ、いよくなごりおほくてもとの舟にのりうつりにけり

律師公全別れを惜むの圖

攝津の國經の島にとまらせ給ければ、男女老少まいりあつまる事そのかずをしらす。其なかに往生の行をすすむとて上中下の三品のはちすは念佛のなにはらなし轉妙法輪かちはせば、平生にあがむるほとけなり。こころは此界一人念佛名のいひなり

經の島説法の圖

むろのとまりにつき給ければ、遊君どもまいり侍りけり。むかしこまつ天皇八人の姫宮を七道につかはし

卷七

向福寺琳阿

てけるより、君といふなをとどめ給ふ。ある時天皇寺の別當僧正行尊拜堂のためにくだられける日、江口神崎の君達舟にちかくよせけるとき、僧の御船にみぐるしくと申ければ、かぐらをうたひ出侍けるに、有漏地より無漏地へかよふ釋迦だにも羅ごらの母はありとこそきけと、うたひければ、さまざまの纏頭し給けり。又同宿の長者病にしづみて最後のいまやうに、なにしにわがみのをひにけむ、おもへばいとこそかなしければいまは西方極樂の、彌陀のちかひをたのむべしと、うたひければ紫雲うみの浪にたなびきぬ。音楽みぎりの松にかよひ、蓮花そらにふり、異香身にかほりつゝ往生をとげ侍りけるも、この上人の御すゝめにしたがひたてまつるゆへなり。われも上人おがみたてまつりてその縁をむすばむとてまいり侍りけり

遊女化導の圖

同三月廿六日讃岐國しあくの地頭駿河權守高階の保遠入道西仁か館に寄宿、種々にきらめき、溫室いとなみ美饌などそなへたてまつる。心ざしあはれにこそ。それにつけても天魔波旬のいはするか、外道邪鬼の思はするか、たとへば鸚鵡のよくものいへる人のいはざる事をばいはず。山母のよく人のおもひをしるも思はざる事をさとらず。凡大天狗こひてもよき刻限に生たる衆生をさまたげとらかして大菩薩のたねをうへざるがごとし。不輕大士のごとく罵辱にたえてすゝむべし。杖木をしのびても、かまへてもむかへばやと、ちかひしがごとく、いかなるはかりごとをもめぐらし侍べきと、此心に住して、各々末代まで人々をこしらへて念佛をすゝめ給へ。あえて人のためには侍らぬ事ぞと、返々付屬し給、念佛の法門をひろめたまへり。爰諸宗

の學者我宗を執して吹毛の科をもとむるところに、弟子等が不思議を本師におぼせて、流罪の後邊州にくちなむ事、冥鑑のはゞかり有。いそぎめしかへさるべきよし申あはれければ、龍顔逆鱗のいましめをやめて、めしかへさるべきよし宣下せらる

塩飽地頭供養の圖

讃岐國小松の庄は弘法大師の建立、觀音靈驗の所也。生福寺につき給。抑當國おなじき大師父のためになをかりて善通寺といふ伽藍おはします。記文云、是にまいらん人はかならず一佛土のともたるべきよし侍りければ、このたびのよるこび、これに有とて則參り給けり

善通寺參詣の圖

上人讃岐國にて三年をへて承元三年^己八月にめしかへされ給けり。宣旨の狀云、左辨官くだす土佐の國、はやくめしかへすべき流人源の元彦が身の事、右件の元彦にしへ建永二年二月廿七日土佐の國に配流、しか

るにいま念訴するところあるによりてめしかへさるところ也。者某宣奉勅くだむのめしかへさしむるにいたりては國よろしく承知すべし。宣によりて是をおこなふ。承元三年八月日左大史小槻宿禰國實辨

赦免宣下、宣旨到達、出發歸洛の圖

此時稱名のこゑいよ／＼たかし。やまびこ五須彌山にもひゞくらん。往生の願念いたりてゆかしきこゝち、功德池にもあまらんや。かるがゆへに、極樂世界には常に菩薩聖衆をもよをして上人來迎の雲をこしらえて我等が往生をさきとす。かくていまだ入洛にをよばずかちおの山に勝如上人往生の地いみじくおぼへて暫おはしければ、華夷の男女道俗貴賤參あつまり侍り、住侶等臨時に七日七夜の念佛動行し侍りけり

勝尾寺留錫諸人參拜の圖

當山に一切經ましまさざるよし聞召ければ、上人所持の經論をわたし給ふに、寺内の老若上下七十餘人を遣

はして、さかむかへに、上人の弟子殿法印御房古藤の住侶等花を散し香をたき蓋をさしてむかへたてまつる住侶各隨喜悅豫して、法印聖覺を唱導として開題讚嘆の詞に云、夫八萬法藏は八萬の衆類をみちびき、一實眞如は一向專修をあらはす 用明天皇の儲君御誕生に南無佛と唱給ふ。其名をあらはさずといへども、心は彌陀の名號也。慈覺大師の念佛、傳燈は文をひきて寶池の波にこゑをたて、空也上人の念佛はこゑをたて數をばしらす。惠心僧都の要集には二の道を作りて一心散心の得失を判す。永觀律師の往生十因には十門をたて、一偏にはつかず。良忍上人の融通念佛は神祇をば勸給へ共、凡夫の望はうとし。爰に我が大師法然上人行年四十三より念佛門に入て、あまねくひろめ給ふに天子のいつくしき玉冠を西にかたぶけ、月卿のかしこき金笏を東にたたくす。皇后のこひたるいだいけの跡をこひ、傾城のことむなき五百の侍女をまなぶあひだ、とめるはをこりてもてあそび、貧しきはなげきて

友とす。農夫が鋤をふむ念佛をもて田調とし、織女がいとをひく念佛をたてぬきにし、鈴をならす驛路には念佛をもちて馬に擬し、ふなげたをたたく海上に念佛をもちて魚をつり、雪月花を見る人は西樓に目をかけ琴詩酒のともがらは西の枝の梨子をゝる。是みな彌陀をあがめざるをば瓊瑾とし、念珠をくらざるをば耻辱とす。爰をもて花族遊妾といへども念佛せざるをばおとしめ、乞匄非人といへども念佛するをばもてなす。かるがゆへに八功德池のうへには念佛のはちすの池にみち、三尊來迎の砌には、紫臺をさしをくひまなし。しかれば我等が念佛せざるは彼池の荒廢なり。我等が欣求せざるは此國のうれえ也。國のにぎはひ佛のたのしみ念佛をもちて本とす。人のねがひ我がのぞみ、念佛をもちてさきとす。仍當座の愚昧公請につかふまつりてかへる夜は、念佛を唱て枕とし、私宅を出てわしるひま、極樂を念じて車をはず。これ上人の教誡、過去の宿善にあらずやとて、鼻をかみこゑをむせび舌を

まきてとゞこほるきさみ、法主なみだをながし、聴衆袖をしぼる。ことごとく念佛門になびきてしかしながら上人のすゝめにかなふ

一切經の寄興を迎える圖

さて住侶は十餘人面々に上人の興隆を悦て一山のため萬代のかため、いかでかその廣恩を報ぜむと思へり。むかし戒成皇子金泥の大般若の供養のみぎりに、山上の草木ことごとくなびく、南なるは北にふし、西なるは東になみよりしがごとく、西基のまつ、いま西谷に侍り、その谷を上人御經廻のあひだ廻向したてまつりて、茶つみ水くむわづらひなく、このみをひろいつま木をこるたよりあるべきよし、申あはせけるに、いくほどなくして歸京のよしきこへければ、一山なごりをおしみて九重の雲にをくりたてまつる

一切經開題供養の圖

源空上人一念停止の書狀そへたり。聖覺法印の書狀、當世念佛門におもむく行人等の中に、おほくもて無智誑

惑聾有。いまだ一宗の廢立をしらず、一法の名目に及ばず、心に道心なく、身に利養をもとむ。是によりて恣に妄語をかまへて諸人を迷惑す。偏に渡世のはかりごとのためにしてまたく來世の身をかへりみず。かたましく一念の偽法をひろめて無行のとがを謝せず。剩無念邪儀をたてゝなを一稱の小行をうしなふ。微善なりといへども善根にをひてあとをけづり、重罪なりといへども罪障におひていよくいきをひをます。刹那五欲の樂をうけむがために、永劫三途の業を恐す。人を教化して云、彌陀の願をたのまむものは五逆をはかる事なかれ、心に任て是をつくるべし。袈裟を着すべからず、よろしく直垂を着して姪肉を斷すべからず。ほしきまゝに鹿鳥を食すべしと云。弘法大師異生羶羊の心を釋しての給はく、たゞ姪欲を思ふ事かの羶羊のごとしといへり。此ともがらたゞ弊欲にふける事、ひとへに彼たぐひの十住心の中に、三惡道の心なり。誰かかなしまざらむや。たゞ、餘教をさまたぐるのみに

あらず。かへりて念佛の行をうしなふ。懈怠無慚の業をすゝめて捨戒還俗の縁をしめす。この本朝には外道なし。是すでに天魔のかまへなり。佛法を破滅し世人を惑亂す、此教流にしたがはんものは、痴鈍のいたす所也。いまだ教文を學せずといふとも心あらむともがらは何ぞ信すべきや。善導和尚所造の觀念法門に云、すべからく持戒念佛すべしと云云。和尚弟子三昧發得の懷感法師の群疑論にいはいはく、兜率を志求せむものは西方の行人を毀事なかれ。たゞ各性欲にしたがひ心にまかせて修學すべしと云云。安養の行人この教にしたがはむと思はゞ祖師の跡をふみて隨分に戒品をまもりて衆罪をつくらず餘教を妨す餘行をかろしむる事なかれ。惣て佛法におひて恭敬の心をなして、更に三萬六萬の念佛を修し、まさに五門九品の淨土を期すべしと云云。しかるに近日北陸道の中にひとりの誑法のものあり。妄語をかまへて云、法然上人の七萬遍の念佛はたゞ是をしらず、いはゆる彌陀の本願をしれば身かな

らず極樂に往生す。淨土の業に満足しぬ。此うへなんぞ一遍なりといふとも重て名號を唱ふべきや。彼の上人の禪房にして門人等に三十人ありて秘義を談ぜし所に、淺智のたぐひ性鈍にしていまださとらず、利根のともがらわづかに五人あて、此深法を得たり。我そのひとり也。彼上人すでに心中の奧義也。たやすく是をさづけず、機をえらびて傳授せしむべしと云云。風聞の説もし實ならばみなもて虚言なり。迷者をあはれまむがためには誓言をたつ、貧道もし是を秘して偽て此旨をのべ、不實の事をするさば十方三寶まさに知見をたれて、毎日七萬遍の念佛をしかしながらむなく、その利益をうしなはむ。圓頓行者のはじめ實相を緣する六度萬行を修して、無生忍にいたる、いづれの法か行なくして證をうるや。こひねがはくはこの疑網に墮せむたぐひ、邪見の稠林をきりて正直の心地をみがき將來の鐵城をのがれて終焉の金臺にのぼれ。胡國程遠し、思ひを鴈札に通ず。北陸さかひはるか也、心を像

教にひらく。山川雲かさなりて面を千萬里の月にへだつれども、化導縁あつくして久し。一佛土の風にちかづけむ。しかのみならず誑惑のともがらひまだ半卷の書をよまず、一句の法をうけず、弟子と號する甚そのいひなし。をのが身の智德かけて人をして信用せしめむがために、ほしきまゝに外道の法をときて師匠の説とし、或はみづから稱して弘願門となづけ、或は心に任て謀書をつくり、念佛要文集と號す。此書の中にはじめて偽法を作て、あしたに證據をそなふ。念佛秘之經也。花嚴等の大乘の中に本經になき所の文を作て云諸善をなすべからず、唯專修一念をつとむべしと云云彼書いま現に花夷に流布す。智者みるといふともわらふべし。愚人是を信受する事なかれ。かくの如くの謀書前代にもいまだきかず。なを如來にきて妄語をよす、況や凡夫にきて惡言をあたえんをや。此猛惡の經、一を持って萬を察すべきもの也。是癡闇の輩也。いまだ邪見とするに及ず。誑惑のたぐひ也。名利のため

に他をあやまつ。抑貧道山修山學のむかしより五十年のあひだ、諸宗の章疏等披閱して嶺岳になき所をば之を他門にたづねてかならず一見をとぐ。鑽仰としつものり聖教殆つくす。しかのみならず。或は夏の間四種三昧を修し、或は九旬のうちに六時懺法を行す。年來長齋して顯密の諸行を修練す。身すでにつかれて老の後に念佛をつとむ。今稱名の一門に付て易往の淨土を期すといへども、猶他宗の教文に悉く敬重をなす。況やもとより貴ぶところの眞言止觀をや。本山黒谷の法藏傳持する。かくる所有聖教をばなをかさねて書寫したてまつりて、是をおぎなふ。然に新發道意の侶愚闇後末の客、いまだその往昔をみず、此深奥をしらず、わづかに念佛の行儀をきき、みだりがはしく偏愚の邪執をなす。嗚呼哀哉、いたむべし。かなしむべし、有智の人、是をみて旨を達せよ。その趣を先年の比、しるすところの七箇條の教誠の文にのせたり。子細はしおほし毛舉するにあたはず而已。一念停止の書狀承元三

年六月十九日沙門源空在判

越後の國より上洛せらるゝ上人の申さるゝ旨委承畢。彼國に披露する念佛の義承がごとくば悲涙をさへがたく候者也。そのうちに愚僧をもつて惡僧勸進の證人にもちゐらるゝ條、甚いたみおもひたてまつるもの也。

披露のごとくは法然上人の御もとに、隆寛律師再會合して此儀をなすと云云。此條大無實也。彼上人はこと存知の旨あり。菩薩十重禁戒を傳受し奉り畢。仍授戒の師範也。其條うたがひなし。念佛の業にいたりては一文一義全以是を傳受せず。況や隆寛律師あひともに會合談儀の事、すべてもて無實也。小僧說法の頃に時々普通の解釋の事を述釋する事有、粗是を傳聞て直に彼上人に對して是を傳受せず。そのうへ或は一念往生の義をかまへて念佛往生の義を廢退し、或は本願を信すと號して衆惡を行じ此等の義心中に是を存ぜず、口言に是をのべず。かなしきかなや、いたましきかなや末世の邪僻たれ人か此重罪をひらかむ。惡鬼その身に

入ともがらにあらずば、此事をわきまへがたきか。今此申のぶるところ、もし矯筋あらば、ながく佛種をたちてよろしく闡提のたぐひたるべし。有心の道俗ゆめゆめ彼邪教に隨順する事なかれ。此趣をもちてつたえひろめしき給べき狀件のごとし

承元三年六月廿三日

前權大僧都聖覺在判

聖覺書狀を認むるの圖

卷 八

向福寺琳阿彌陀佛

建曆元年辛未十一月廿日 龍顏逆鱗のいましめをやめて

烏頭變毛の宣旨を蒙れり。勝尾隱居の後鳳城に還歸有るべきよし、太上天皇順德天皇院宣をうけしめ給へば、よし水の前大僧正慈鎮御沙汰として大谷の禪坊に居住し

給と云云

大谷禪房に歸還の圖

むかし釋尊切利の雲よりをり給しを、人天大會よろこびおがみたてまつりしがごとく、今聖人南海のなみをさかのぼり給へば、道俗男女面々に供養をのべたてまつること、一日夜のうちに一千餘人と云云。幽國の地をしむといへども、貴賤高卑のあつまり参事さかりなる市のごとし。權中納言光親卿の奉行にて、歸京のよしをほせ下され侍りける時、人々本望やすまりぬ。或雲客の夢に、上人内裏御参の時、天童五人雲に乗て管絃遊戲す。天蓋をさし覆奉る。夢醒て聞に上人内裏へ参し給り、不思議なりしと也

夢中参内天童遊戲の圖

建曆貳年壬申正月一日よりは老病そらに期して蒙昧身にいたれり。待ところたのむことまことよろこばしきかなやとて、高聲念佛不退なり。或時は弟子に告ての

給はく、われもと天竺にありて聲聞僧にまじはりき。頭陀を行じき。今日本國に来て天台宗に入て又念佛をすむ。身心に苦病なく蒙昧忽に分明なり。抑我往生は一切衆生の結縁のため也。われもと居せし所なれば歸行べし。唯人を引導せんと思ふ

病床御物語の圖

十一日の辰の時上人をきいで高聲に念佛し給き。愚人みな涙流す。弟子等につけてのたまはく、高聲念佛すべし。阿彌陀佛きたり給へるなりと。この佛の名號をとなうれば一人も往生せずといふ事なしといひて念佛の功德を讃嘆し給事、あたかも昔のごとし。上人又の給はく、觀音勢し等の菩薩聖衆現前し給へり。おのおのがみたてまつるにやいなやと。弟子等おがみたてまつらずと云云是を聞いていよく念佛せよとすゝめ給ふ。其後弟子等臨終のために三尺の彌陀の像を病床のみぎりにむかへたてまつりて云、此佛を拜し給べしと。時に上人ゆびをもて空をさしての給はく、この佛

のほかにも又おはします。おがむやと、すなはちかたりていはく、凡この十餘年よりこのかた、念佛の功つもりて極樂の莊嚴をよび佛菩薩等の御身を見たてまつることつねのことなり。しかれども年來秘していはす。いま没期にのぞめり、かるがゆへにしめすところなり。又弟子等佛の御手に五色のいとをつけてすゝむれば、これをとり給はず。上人の給はく、如此のことは是つねの人の儀式なり。我身にをひてはいまかならずしといひて、つゝにこれをとり給はず。廿日巳の時紫雲鬘鬘として坊の上に垂布せり。ながくたなびきて又圓形の雲あり。圖繪の形、像の圓光のごとくして五色鮮潔なり。路次往反の人處々にこれを見る。弟子申さくこのうへに紫雲まさにつらなれり。往生のちかづき給へるか、上人きゝての給はく、あはれなるかなゝわが往生はたゞ一切衆生をして念佛を信ぜしめむがためなりと。未時ことに目をひらきて西方へ見をくり給こと五六遍、看病の人聞いていはく、佛のきたり給かと

こたへての給はくしかなり

紫雲鬘鬘の圖

抑七八年のそのかみ、ある雲客兼隆朝臣夢に見云云 上人御臨終の時は光明遍照の四句の文を唱給べしと云云 上人廿三日以後三日三夜或は一時或は半時、高聲念佛不退のうへ、ことに廿四日酉刻より廿五日の巳刻に至る迄は高聲念佛體をせめて無間也。弟子五六人番々に助音す。助音の人々は窺屈にをよぶといへども老體病腦の身高聲念佛勇猛にしておこたらず、參集せる道俗見聞せる老少讚嘆せずといふ事なし。午時に至りてその念佛の聲漸かすかにして高聲は時々あひまじはる。正しく最後にのぞむ時は年來所持の慈覺大師の袈裟をかけて頭北面西にして光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨の文を誦して、念佛していきたえ給ぬ。聲やみてのちなを唇舌をうごかすこと十餘へんばかりなり。時に春秋滿八十夏藹六十六、身體柔軟にして容貌常のごとし。惠燈すでにきえ法舟又没しぬ。貴賤哀勵して

考妣を喪せるがごとし。爰弟子等憂悲啼哭しながら、彼砌に葬したてまつる。季節いかなる比ぞや、釋尊滅をとなへ給ひ上人滅をとなふる、かれは二月中旬の五日也。是は正月下旬の五日なり。八旬いかなるとしぞや、釋尊も滅をとなへ給、上人も滅を唱ふ、かれも八十なり是も八旬なり

御往生の圖

このとき建曆二年^{壬申}正月廿五日午の正中に遷化^{行年滿八十}

伏惟釋尊圓寂の月にすゝめる一月、茶毗の煙ことなりといへども彌陀感應の日にしりぞくこと十日、利生の風これおなじきをや。觀音垂迹の勝地、勢至方便の善巧かくのごとし。然して後門弟に世間の風俗にまかせて遺骨をおさめ中陰の孝行をいたす。初七日御導師信蓮房不動尊を供養す。大宮の入道大臣家の御諷誦の文云、夫おもむ見れば先師存在のむかし弟子遁朝の夕、一心精誠をこらして十重戒をうく。かるがゆへに濟度を彼岸にたのみてうやまて諷誦をこの砌に修す。小善

根ときらふことなかれ、必大因縁とならむ、よて蓮臺の妙業をかざらんがために、早覺鐘の逸韻を叩て、別當さきの因播守源朝臣盛親敬白。二七日普賢菩薩の御導師求佛房と云云。建曆二年二月三日夜別當惟方入道のむすめ粟田口の禪尼の夢に見て上人殯葬のところに詣たれば、八幡宮の御戸をひらくかとおぼゆ。御正體等もそのうちにおはします。ときにこれは上人の葬の所にはあらず、八幡宮なりと思へばかたはらの人その御正體をさして云、あれこそは法然上人御房の御體よといふ。是を聞て身の毛いよだちてあせをながしてさめぬ。この夢また奇特なり。抑神功皇后元年^{辛巳}大菩薩御誕生のとき、八のはたふりき、かるがゆへに八幡大菩薩と號したてまつる。いま上人誕生の時ふたつの幡ふれり。大菩薩の御本地を行教和尚みたてまつらむと祈願し給しかば、たもとのうへに阿彌陀如來うつり給ひき。三七日彌勒御導師住眞房、弟子湛空誦經物をささぐ。義之がすり本一紙をもて十二行八十餘字

にしへよしゆくべきみちのしるべせよ

むかしもとりのあととありけり

初七日二七日追善、禪尼夢
に八幡宮を拜する圖

四五七日しげきによりて是を略す。六七日法印大僧都
聖覺、無動寺の大僧正慈圓、御諷誦あげらるゝ。七々
日御導師園城寺の長吏法務大僧正公胤、信空の願文に
云、先師廿五歳のむかし弟子十二歳のとき、かたじけ
なく師資約契をむすび、久しく五十の年序をつむ。一
且の生死をへだてて九廻の腸をたゝむとす。叡山黒谷
の草庵に宿せしより、東都白川の禪房へうつりしにい
たるまで、其間撫育の恩といひ提撕の志といひ、報謝
の思昊天をのづからきはまりぬ。こゝをもて彌陀迎接
十一軀の形像をあらはして胎藏金剛兩部の種子を安す
又摺寫の妙法蓮華經、書寫の金光明經各一部開眼開題、
一心懇志三寶知見し給と云云。凡この間佛事いとなみ
諷誦行する人これおほし。僧正唱導をのぞみ給へる故

は、上人所造の選擇集を破せむがために、淨土決疑抄
三巻をつくる。上人面謁の時、重々の問答に悉くつが
へされて悔かなしみて、見づから焼すて、歸伏しぬ。
猶々そのとがをかなしみて没後の導師を勤られけり

七々の追善の圖

その夜の夢に上人公胤に告て云、往生の業の中に一日
六時刻一心不亂念功驗最第一、六時稱名者往生必決定
雜善不決定、專修決定善、源空爲孝養公胤能說法、成
善不可盡、臨終先迎接、源空本地身大勢至菩薩、衆生
教化故來此界度々

公胤夢に上人の告を蒙る圖

卷 九

向福寺琳阿彌陀佛

建保四年 丙子 閏六月廿日種々の瑞相を示して僧正公胤
七十二

禪林寺の邊にして往生をとぐ。于時紫雲はるかにたなびきて姑射山槐門に見へて太上天皇院使山つかはされ准後の宮土御門の内大臣家方々より車馬をとほし、花洛邊土の貴賤上下耳目を驚し侍けり

公胤往生の圖

延曆寺のなしもとは實相圓融の坊、青蓮院は黃門皇胤の跡なり。各々四明一山の貫主にそなはり、兩門三千の棟梁にてまします賢哲なり。或は在世のむしろには上人をもて念佛の先達とし、或は歿後の庭には諷誦を捧て往生の後會をちぎる。縦楞嚴の衣は墳墓をかたぶくべくとも、彼此果後なかれ。いかでか遺骸をおろそかにする事をえんや。本山のためいかなるあやまりかきこへけむ。後堀河院の御宇金剛壽院座主僧正圓基治山の時、嘉祿三年六月廿一日に山の所司專當をつかはして大谷の廟堂をこぼちすつべきよし侍りけるに、東隅の入道出向て問答す。又右兵衛尉藤原の盛政法師はせ向て問答して云、事の子細あらば、すべからく天聽

を驚したてまつり、別しては武家に相ふれて是非に隨て左右すべき處に、みだりに狼藉をいたすこと自由、速に悪行をとどむべし。是關東御下知の趣なり。もしこの制法にかかはらずば法にまかすべし。更にうらむる事なかれと云に、とどまらず

廟堂破壞制止の圖

兼てそのよしを申侍しうへは、醫王山王もきこしめせ念佛守護の赤山大明神にかはりたてまつりて四魔三障うちはらはむ。偽て四明三千の使と號して魔縁のむらがり來る。もとよりは主君のために、そのかみきりにき、命は唯今師範の爲にすつべし。縦萬騎の兵むかふとも争か一人當千の手にかゝるべき。思きや武勇のみにちにして師匠の恩を報じ、往生の門出せんとははかりきや。凶惡の輩をもて善知識の因縁にすべしと云事を各南無阿彌陀佛と稱すべし。唯今汝が命を一々にほろぼしてむ。自他もろともに九品蓮臺の同行也。善惡不二のをしへ、邪正一如のをきては山門の使ならば、聞

知ぬらん。顯には關東の御家人弓箭をとりて狼藉をふせぐ。冥には西土の念佛者魔軍を争かはらはざらむ。死人には宣命をふくむとも、遺骨には誰か威勢をほどこさむと云て、子息一人郎等をあひぐしてかけけるに面をむくるものなし。くものこをちらすがごとくうせにけり

狼藉者を追拂ふ圖

件の夜の改葬に、宇津の宮の入道守護のために、遁世の身なれどもいでにし家の子郎等を招て、俄の事なれば五六百騎の兵等をもて宿直すとて、哀哉、昔は死生不知の譽をほどこさんとおもひしかども、今は往生極樂の名をとゞめむと願す。宿習のたするところたゞ事にはあらず。御廟はこぼちて御棺ばかりに成て御弟子等并兵士等めぐりけり。倩往事を思へば、祖父金吾朝綱は東大寺の脇土觀世音菩薩を造立し奉りて、かたみを東海にとゞめ、孫子頼綱は西方界の教主阿彌陀如來に歸依して神を西刹にすましむ。宿縁契ふかく前途頼

あり。しかうして御棺を荷て洛中をとをしたてまつるに、面々に涙をながし各々袖をしぼる。おそらくは雙樹林の夕の色、拔提河の曉の浪もかくやと哀にぞみへける。惣じて但念佛の行人一向欣求のともがら千餘人なり。かの月氏梅檀の尊容をぬすみ奉りし時、若干の軍兵をおこしてうばはんと企き。此日域本師遺骸を改葬したてまつる時、災難なからむや。嗟峨にて火葬し奉るに、さまざまの奇瑞共あり。靈雲そらにみち異香庭にかほる。其後眞影をうつして遠忌を修し、禮贊をまうけて月忌をいとなむに、門々戸々に誰人か三五夜中の光をおしまざる。國々處々に何の塚か、六八弘誓の雲をのぞまざらむや。遺弟の一念をあらそふ、遙に末法萬年の命をつぎ、累葉の六字を唱ふる、すみやかに本願三心の旨をあらはす

遺骸奉移の圖

上人修行の初、先當伽藍に詣て給ふ。定て御祈請の旨待けむ。釋迦彌陀契ふかく此土他土縁あさからずして

遂に遺骨を件の地におさむ。初從此佛菩薩結縁還前此佛菩提成就と云へり、まことなるかなや、抑栖霞館は嵯峨天皇の御跡なり。則阿彌陀堂を建立して栖霞寺と號す。かたはらにおなじき御まやを食堂とし、雁屋を鐘樓とし泉殿を閻伽井とす。いまの釋迦堂はいづみのなをかりて清涼寺とす。聖骨をおさめ奉らむがために敬て寶塔一基を建立し、念佛三昧を勤修して阿波院の御骨おなじく是をおさめ奉るをくら山のふもと中院の靈場は大乗善根の場なり。今二尊院と號する是なり

遺骸茶毘變壞阿塔の圖

凡上人の徳行、自他諸宗ゆゑしき事、勝計すべからず。まづ法相には贈僧正藏俊、三論には大納言法印寬雅、天台には座主顯眞、園城寺には長吏僧正公胤、花嚴には法橋慶雅、眞言には少將の上人實範、はじめは謗じてのちには歸す、仁和寺の法親王歸依尤ふかし。竹林房の靜嚴は上人にあふて、念佛の信をとる。誰の人か慈覺大師の御袈裟を相傳せんや南岳大師相承也 誰人か帝王の御

ため御受戒の師となるや。誰人か法皇の御ため眞影をうつしとどめらるゝや。誰人か他門のため歸敬せらるるや。誰人か現身に光を放や。是則かしこに彌陀の智用をみがき勢至菩薩とこゝに勢至をほめて無邊光と申す。智惠の光をもちて一切を照が故也。上人を譽るに智惠第一と稱す。碩徳の用をもちて七道をうるほす故也。彌陀は勢至に勅して濟度の使とし、善導は上人を遣して願縁の機をとゝのへ給へり。はかりしりぬ、十方三世無央數界有性無性和尙の興世にあひてはじめて五乘齊入のみちをさとり、三界空居四禪八定、天王天衆上人の誕生によりて忝五衰退没の苦をぬぎいでむ。何況末代惡世の衆生、彌陀稱名の一行によりて悉往生の素懷をとぐる事、源空上人傳説、興行の故なり。仍未來弘通のために、錄之。又上人御没後に歸依いよいよ盛にして明禪法印は偏に上人勸化のこと葉を信じて臨終の時政信上人を善知識として、極重惡人無他方便の四句の文を唱へしめ念佛祈て往生をとげらると云。

又沙彌隨蓮は上人の配所へ御供したりしものなり。出家の、ち常に上人の御坊へ参りけり。そのあひだに諸人のまいりたるにむかふごとくに、常におほせられて云念佛はたゞ様なきをもて様とする也。只常に念佛の行をもちて詮とすべしと云。隨蓮偏に此仰の旨を信じて二心なく念佛を申けり。上人御往生の後は彌念佛のほかすこしも餘念なくて、三箇年をへける程に、世間の念佛者共、いかに念佛申とも學問して三心をしらずば往生すべからずと云。爰に隨蓮その人にむきて云、故上人の御房は念佛は様なきをもて様とす。只偏に佛語を信じて念佛すれば必往生するなりとて、全三心の事をもおほせられざりきと申せば、彼仁の云、それは一切こゝろうましきものゝために方便して仰られけるなり。御存知の旨とて經釋の文を少々ゆゝしげに申聞せければ、隨蓮が心に誠にさもやありけん、聊疑心をおこして誰人にか此事をたづね申べきと思て、一兩月の間此事心にかゝりて、念佛も申されずして過る程に

或夜の夢に、法勝寺の西門をさし入てみれば、池の中にやう／＼の蓮華ひらけてよにめでたかりければ、西の廊のかたへあゆみよりにみあげたれば、僧徒あまたならびゐて、淨土の法門談らせらるるを、隨蓮きた桶にのぼりあがりてみれば、故上人の御房北なる座に南むきにましますと、隨蓮みつけまいらせてかしくまるに上人隨蓮を御覽じてまぢかくまいれと、めしければ御かたはらにまいりぬ。しかるに隨蓮が存する旨、いまだ申さざるさきに、上人おほせられて云、汝この程心におもひなげく事あり。ゆめ／＼なげくべからずと云。此事一切に人にも申さず。如何にして知食たるにかと思ながら、上件の様を申ければ、上人仰に云、縦若僻事を云ものありて、あの池なる蓮花を蓮花にはあらず、梅ぞ櫻ぞといはむをば、汝はその定に蓮花にはあざりけりと思はんするか。隨蓮申云、現に蓮花に候はんものをば、いかに人申候とも、いかゞ信候べきと云。上人の給はく、念佛の業もみな／＼かくの如し

源空が汝に念佛して往生する事はうたがひなしといひしことを信じたるは、蓮花を蓮花と思はんが如し。ふかく信じて念佛を申べきなり。惡儀邪義の見を梅櫻をばゆめゆめ信すべからずと仰事ありと見て夢さめぬ。其時隨蓮むかしの御詞を深く信じて、すこしのふしんもなし。日來の疑心のこりなく散じ畢て、二心なく念佛して終に往生をとげ畢

隨蓮夢境の圖

法然上人傳

上 卷

そのうち鴈塔をたて、鳧鐘をならし、又烏瑟の妙相をあらはして、鷲嶺の眞文を開題し、鷲子か智辯をむかへてとりの方にをくらむことをねがひ、僧衆を招請して九品の妙果をいのり、施行をいとなみて非人の餓をやすむ。これ即過去幽靈成等正覺のためなり

建塔、施行、中陰供養の圖

とどまらぬ月日なれば中陰もやうやくすぎぬ。わかれのみみだはかはくときなけれども、なき人のおもかけはいやとをさかりゆくにつけても、かなしさはなをせんかたなし。小兒はちゝの遺言をわすれず、入學のためにとて當國菩提寺の院主觀覺得業が坊におかしぬ。得業うけとりて内外典の文をうしうるにさとく、ならへること心やすし

母子訣別、登途、菩提寺修學の圖

得業この小兒をみるたびに、聰明利智にして、一をしうるに萬をしる。たゞ人にあらずとて、天養二年の比生年十三のとし、比叡山延曆寺へのぼせつかはすべきよしを、得業小兒を母のもとにぐしてゆきていとまをこはするに、なき人のなごりとて、またなきかたみなれば朝夕まほしく、身をはなつべき心ちもし侍ぬに、はるくくと雲井のよそになりなば、なき人のわかれにうちそひて、さらになからふべき心地もし侍らじとて、ゆるさぬもことほりながら、大師釋尊は王宮をいで、檀徳山にいらたまふ。眞如親王は宮城をはなれて西海のなみにしづみ給き。是皆業恩入無爲眞實報恩者のことほり也など、觀覺もるともになぐさめ侍けることはりにまけて、なくくゆるしてければ、兒もみやこへのぼり侍ことは、心つよくおもひたちながら、またならばぬたびなれば、かねても心ぼそくあはれに侍けり。母もゆるしながらも、とをさがるべきなごり

袖よりあまる涙の露は、をき所なくぞみへ侍ける。觀覺もなごりををしみつゝ、本山にをくるところに、つくりみちにて殿下鳥羽殿への御出にまいりあり。小童下馬したりけるを、御覽するに、たいはいまなじりよりはじめて、凡たゞ物にあらず。いかなるものぞと御たづねありければ、しかんゝのものゝ子にてなん侍る。學問のために登山するよしをぞ、おそるゝところなくまうしける。殿ふしぎのものにおぼしめして、御あしやくありてすぎさせ給ぬ。得業叡山にをくる狀には、大聖文殊像一躰をくりたてまつると、かきたりければ、かの像をたづぬるに、小童なり。奇異のおもひに住しぬ

邊通殿下、登山、入室の圖

下 卷

近衛院御宇久安三年仲冬のころ、延曆寺にして出家、

則大乘戒をうけて比丘僧となり給。其後功德院の阿闍梨皇圓に天台六十卷を傳受して、止觀の義理をさとりたまひぬ

剃髮出家の圖

おなじき六年、生ねん十八のとしより、道念やうやくおこるあひだ黒谷の上人叡空の禪室にたづねいたる。上人發心のはじめをとひ給に、先考已卒のときより、多年住山の今にいたるまで、世上の無常をみきくに、かなしみ銘肝など申つゝけらるれば、さては法然具足のひじりにこそこのたまふけるよりぞ、名はつき給にける。かくしつゝ通世したまふにければ、しづかに華嚴經を轉讀せらるゝに、蛸いできたるをみて、弟子(伯)源空上人あやしみおそるゝ夜のゆめに、なむちおそるゝ心なかれ、われは上人守護の青龍なりといふ。又暗夜に經論みたまふに、光明室内をてらすことひるのごとし。末代の不思議上古にもありがたくや侍べき

青龍出現の圖

後白河院御宇保元元年、求法のために嵯峨栖霞寺に参籠、藏順贈僧正に法相宗を學し給に、師範かへりて上人に歸す。又大納言律師寛雅に三論宗を學したまふ。また眞言教にいりて道場觀を修したまふ。五相成身の觀行たちどころにあらはし給けり。かやうのことどもを法皇きこしめされて御招請ありて、終日の御談儀あり。法門さとりのもむき、御かむあさからず、卿相雲客も心ある人は感涙をさへがたし

法皇殿御談儀の圖

上人諸宗のむねをさくり見給に、諸教所讚多在彌陀の妙偈をえてより、濁世の凡夫生死をはなるゝ教、たゞ淨土の要門にしかずとおもひさだめて、高倉院御在位安元元年御とし四十三より、毎日七萬遍の念佛をこたりになくつとめ給。また門弟にもこの行をさづけらる。道俗にもおなじくこれをすゝめ給。それよりのち善導

和尚御こしよりも金色にて、夜なくきたりたまひてのりをとき給を、畫師にあつらへて影像をうつしとゞめ給けり

上人道俗教化の圖

善導和尚來現を拜寫せしむる圖

上人あるゆふぐれの事なるに、ひろえんにむかひ念佛して有けるに、みだの三尊繪さうにもあらず、木像にもあらず、垣をはなれて天にもつかず地にもつかずしておはしましける。其後拜見したまひ御こと葉をかしたまふ事度々なりけり

三尊形現の圖

法眼眞實おほはらに居住のとき、諸宗の學者をのゝ群集して、たがひに自宗のむねをのべほこさきをあらそふきさみ、上人諸教まこと殊勝なりといへども、濁世の凡夫のため散心念佛もとも機にあひかなへるよしを談し申さるゝに、眞眞涙をながして身づから香爐を

とり、行道して高聲念佛、諸宗の人々おなじく三晝夜
勤行のついでに、湛叡上人來迎院に不斷念佛を始行せ
らる。これおほはらの念佛のはじめなり

大原談義、行道念佛の圖

上西門院の御所には大原の念佛の事をきこしめされ、
殊勝におぼしめし、源空上人をめされ淨土の勘文を御
物がたりありければ、上下かんるいをながしける。其
後七日の御說法有べきよし、御けいやくありけり。實
に有がたかりける事どもなり

上西門院御談義の圖

上人上西門院の御所にめされて、七ヶ日説戒のとき、
前栽の草むらのなかにおほきなるくちなはありけり。
日ねもすにはたらかず殆聴聞の氣色なり。みる人あや
しみ思ほどに、七ヶ日のあひだあからさまにもはたら
かず、結願の日にあたりてこのくちなはからまきのう
へにのぼりて死にけり。そのかしらふたつにわれにけ

るなかより、蝶のごとくなる物とび出とみる物も侍け
り。或はまた天人のまぼるとみる人もありけり。たゞ
かしらばかりわれて死にたりとみるものも侍けるとか
や。凡かの戒法聴聞の薰修によりて、則畜生の苦患を
はなれ、たちまちに天上の果報を得けるにやと覺え侍
こそ、末代といへどもことにたたく侍れ

上西門院説戒、小地得益昇天の圖

拾遺古德傳繪黒谷源空 聖人

一

伏以諸佛の世にいづる時をまち、機をはかる時機これあひそむけば、感應もともあらはれがたし。進て故事をとぶらへば、西天雲くらし。釋尊圓寂の月とをくへだくる。退て當時をかへりみれば、東漸露暖なり。彌陀邊方の花匂を發す。彼在世の正機に漏たるはこれ恨なれども、今滅後の遺法にあへる、又たれりとす。矧亦二尊の教門に入て一宗の正旨を得たり。佛恩肝に銘じて報じがたく、師孝源に還て謝しがたし。因茲いさゝか其譽を述て、彼德をあらわさんとす。爰如來滅後二千八十四年、人王七十五代崇徳院の御宇に當て美作國久米南條稻岡庄に一人の押領使號漆間あり。年來のあひだ孝子のなきことを愁て、夫婦心をひとつにして佛神にいのる殊觀音。或時、妻秦夢に剃刀を吞と

みて、懷妊す。みる所の夢を夫にかたる。夫云、汝がはらめるところの子、さだめて男子にして、一朝の戒師たるべき表示也云云。其後母ひとへに佛法に歸して出生の時にいたるまで、魚鳥のたぐいをくはず、長承二年癸丑四月七月午時に、おぼえずして誕生す。于時奇異の瑞相おほし。知ぬ、權化の再誕なりといふことを昔世尊の誕生には、珍妙の蓮、足を受けて七歩を行ぜしめ、今聖人の出胎には、奇麗の幡、天に飄て二流くだりけり。みる人掌をあはせ、きくもの耳をおどろかさずといふことなし。四五歳以後その性成人のごとし。同稚の黨に卓礫せり。また動ば西の壁にむかうくせあり、人これをあやしむ

時國夫妻神佛祈請、誕生、童稚の圖

保延七年辛酉春の比、父時國、敵のために害せらる。于時、聖人九歳。その敵は伯耆守源長明の男、武者所定明也號明石源内武者。殺害の意趣は、定明稻岡の庄堀川院御在位瀧口

の執務として年月を經といへども、職掌の身たりながら、これを輕蔑して面謁せざる遺恨也。父の害せらるゝ夜、母いだきて竹の中にかくる。九歳の小兒、小矢をもて定明を射る。その矢、目のあひだにあたりぬ。件の疵をしるしとして、のがるべきかたなきゆへに、すなはち逐電し畢ぬ。見聞の親疎感嘆せずといふことなし

夜討と小矢兒の圖

時國ふかき疵をかうぶりて、かぎりなければ、九歳の幼童示て云、我はこの疵にて身まかりなんとす。雖、然ゆめ／＼敵をうらむることなかれ。是先世のむくひなり。猶報答をおもふならば、流轉無窮にして世々生々にたゝかひ、在々所々にあらそひて、輪廻たゆることあるべからず。凡生あるものは死をいたむ。われこの疵をいたむ。人またいたまさらんや。われこの命をおしむ。人あにおしまさらんや。我身にかへて人のおもひをしるべきなり。昔はからずしてものゝ命をころ

す人、後生にそのむくひを得といへり。願は今生の妄縁を斷て、かの宿意をわすれん。意趣をやすめずば、いづれの世にか生死のきづなをはなれん。汝もし成人せば、往生極樂をいのりて、自他平等の利益をおもふべしと。云をはりてこゝろをただしし、西方に向て高聲念佛しつゝ、眠がごとくにしてをはりぬ

時國命終の圖

葬送中陰の間、念佛報恩の營、ふたごころなし。廟塔をたて、鳧鐘の逸韻をうちならし、本尊を安じて驚嶺の眞文を開題す。佛庭にちかづく道俗、隨喜の涙をもよほし、法筵にのぞむ老少、渴仰の色ふかゝりけり

念佛報恩の營みの圖

同年のくれ、當國菩提寺の院主智鏡房得業觀覺寵愛して弟子とす。はじめ佛書を授るに、性はなはだ岐嶷にして、一度聞て二度問ことなし。爰觀覺その俊異なることを感じて等侶に語て云、此兒の器量をみるに

凡人にあらず。惜哉いたづらに邊國にをかんことを、
といひて上洛すべきにさだむ

小兒觀覺の室に入るの圖

觀覺得業の命によりて、叡山にのぼるべきになりければ、母儀にいとまをこひて云、昔釋尊十九にして王宮をいで、つゝに正覺をなりました。今小質十三にして、叡山にのぼり、はじめて學窓に入なんとす。凡聖ことなりといへども、そのころさしひとし。これひとへに二親出離生死證大菩提のためなり。更になごりおしとおもひ給べからず。流轉三界中、恩愛不能斷、棄恩入無爲、眞實報恩者なればこれ孝道の初也。されば三河守大江定基出家のち大唐國に渡しにも、老母在堂と書き、さこそおぼつかなくもおもひをきけども、母いとまをとらせてければ、萬里の波濤もところづよく凌て、つゝに圓通大師の號をえ、本朝までも名をあげき。ふるきためし耳にあり。努力々々ころよはく思給べからず、など様々にかきくどきたまへ

ば、母ことはりにおぼえけれども、なを別の涙にのみぞむせびける

信とてはかなきおやのとゞめてしこのわかれさ

へまたいかにせん

得業の云、このことはりは觀覺こそ申さまほしく侍つるを、おとなしくあり／＼しくおぼせられ侍れば、それにつけてもかしこくぞ學問のよしをも思寄けるとおぼえ侍り。いにしへ晋の叡公、幼して法華經翻譯の席にして師範の人天交接の言かきわづらひたまひける、さかしらおもひあわせられて、哀にこそ侍れとて、なみだぐみけり。たらちめも、身をわけたるみどり子にいさめられ侍りぬれば、まして後の世すはれんおひゆくすゑも、いつしかたのもしくおぼゆる中にも、なを有爲のかなしみ忍がなく、浮生のわかれまよひやすくして、たちはなれん餘波のみぞせんかたなかりける

母子訣別の圖

久安三年丁卯の春 延曆寺西塔北谷法地房源光の許へ

をくりつかはす。登山のとき造路にて月輪殿の御出に
 參會しければ、かたはらへ立寄に、番頭をもて、これ
 はいづくより何方へおもむく人ぞとたづねさせられけ
 れば小兒にしたがへる僧、美作國より學問のために比
 叡山へなんのぼるなりとぞ答申ける。さらなり、學問
 のこころざし隨喜し思給侍り。よくく稽古鑽仰ある
 べし。いかにもたゞ人にあらじ。容貌爲體、智者の相
 あり、再覲大切也など、慮外に約諾の芳言にをよぶ。
 その因縁殆ゆかしくぞおぼえける

上 洛 の 圖

垂髮に相副てをくる狀に云、進上、大聖文殊像一體云云
 書狀披覽の處に文殊の像はみえず、小兒于時十一
三歳一人來
 入せり。于時源光、文殊の像といふは、知ぬ此兒の器
 量を褒美する詞なんめりと。すなはちその容顏をみる
 に、頭くぼくして廉あり、眼黃にして光あり。皆是拔
 粹聰敏の勝相也。

小兒登山と源光への入室の圖

源光云、我はこれ愚鈍の淺才也。この奇童の提撕に
 たへず、すべからく業を碩學に受て圓宗の奥義をきは
 むべしとて、すなはち功德院の阿闍梨皇圓につけて、
 法文をならはしむ。彼闍梨は粟田の關白四代の後胤、
 三河守重兼嫡男、少納言資隆朝臣の長兄、隆寛律師の
 伯父、皇覺法橋の弟子、一寺の名匠繼徒の俊人也。闍
 梨この兒の神情を感悅して、殊以愛翫す。奇童訓を稟
 て、しるところ日々におほし

皇圓阿闍梨の弟子となるの圖

一一

同年夏の比、聖人出家のいとまきこえむとて、日吉
 の社に詣たまひけるに、人々あまた題をさぐりて、歌
 よみ連歌などしつゝ、なごりおしみけるに、社頭夏月
 といふことを、聖人よみ給ける

しめのうちに月はれぬればなつの夜も

秋をぞこむるあけのたまがき

諸人もてなしめであひけり。同じ仲冬出家登壇受戒

于時十五歳

日吉社前の鉢頭と出家の圖

或時師に申て云、すでに出家受戒の本意を遂畢ぬ。

於今者、跡を林藪にのがれんとおもふと。師これを聞てすゝめ誘て云、たとひ遁世すべしといふとも、六十卷を學して後、その志にしたがふべしと。答て云、我今閑居をねがふことは、ながく名利の望をやめて、しづかに佛法を修學せんとなり。貴命本意也といひて、十六歳の春はじめて本書をひらく。十八歳の秋にいたるまで三ヶ年の間に六十卷の玄蹟をきわむ。惠解天蹤にして殆師の授にこえたり。師彌感悦して狂て講説をつとめ、まさに大業を遂て、圓宗の棟梁たるべしと。度々ねんごろにすゝむれども更に承諾の色なかりけり

聖人と皇圓と對談の圖

件の閻梨のありさま、自身の出要にわすらひて、佛これを案するに、いかにもたやすく、今度生死を出べからず。若度々生をあらためば、隔生即忘のゆへに、さだめて佛法をわすれなん。不如、長命の報をうけて慈尊の出世に遇たてまつらんにはと思て、命ながきものを案するに、蛇身はなを鬼神にもまされりとして蛇身をうけんとするに、住所またやすからず。大海は中天あるべし。すべからく池にすまんと思給つゝ、これをたづぬるに、遠江國笠原庄に一の池あり櫻池と號す。領家にかの池をこひうくるに左右なくゆるしてければ水底をしめんと思定ぬ。さて誓にまかせて死期にいたりて、水を乞て掌に入てをはりぬ。しかるに彼池、風ふかすして俄におほなみたちて、池の中の塵ごとくくはらひあぐ。人みな目もあやに見けり。事のありさまをしかんくと註して領家にしめす。その日時をかぞふれば、彼閻梨逝去の日也。のちに上人おほせられけるは、智惠あるがゆへに生死のいでがたきことを知り

道心あるがゆへに佛の出世にあはんことをねがふ。しかりといへども、いまだ淨土の法門をしらざるゆへにかくのごときの意巧に住するなり。われその時、この法門をたすね得たらましかば、信不信はしらず、教訓し侍りなまし。そのゆへは極樂往生の後は十方の國土こゝろにまかせて經行し、一切の諸佛おもひにしたがひて供養せん。なんどあながちに穢土にひさしく處することをねがはむやと云云。かの閻梨はるかに慈尊三會の誕を期して五十六億七千萬歳の空をのぞむ。いとたうとくも又おろかに侍るものかな

皇圓の臨終と櫻池の龍
身感見の圖

師よりくいさむれども、いかにも遁過のいろふかかりければ、閻梨そのこゝろさしのうばひがたきことを知て云、汝爾者黒谷の慈眼房を師とすべし。彼慈眼房寂空は、眞言と大乘律とにをきては當時無雙の英髦なりと云云。すなはち寂空上人の室にいたりて、つぶ

さに彼素意を述す。寂空これを聞て隨喜して云、汝少年にして出離のこゝろをおこせり。實是法然道理の聖人也と云て、すなはち法然をもて房號とす。諱は源空これはじめの師源光の初の字と、のちの師寂空の後の字とをとるなり。夫黒谷の爲體、深谷流きよく人跡道かすかなり。加之、四季の感興一處にそなへ、六情の懺悔、三業をひそむ。聖人この地の超勝なることを好して、浮雲こゝろながくつながれぬ。于時生年十八歳久安六年九月十二日よりこゝに住して、寂空上人に奉仕し、密と戒と歲月いくばくならず、二宗の大乘を一身に兼學す。そのうち一切經論、飢を忍で日々にひらく。ひらくごとに文字を誦す。自他宗の章疏、眠を忘れて夜々にみる。見るに隨て義理を得たり。又古今の傳記日記、和漢の祕書祕傳、手にとり眼にあてすといふことなし

聖人慈眼房寂空上人の
弟子となるの圖

或時法華三昧修行の道場に、白象すなはち現す。聖人ひとりこれをみたまふ。餘人これをみず。また華嚴經披覽の時、青蛇机の上にわだかまる。信空これをおどろきたまふ。其の夜の夢に、われはこれ華嚴守護の龍神なり。おそるゝことなかれと云云

普現來現の圖

暗夜に經卷をみたまふに、燈明なくして室内をてらすこと、ひるのごとし。如此の光明照輝することつねのことなり。餘人みるところにあらず、聖人自筆にて此等の奇特を記したまへり。在生の間、披露なし。門弟等滅後にひらきみると云云

聖人暗夜に經卷を見給ふの圖

眞言の教門に入て道場觀を修したまふに、五相成身の觀行忽にあらはれけり

五相成身感見の圖

保元元年、聖人生年二十四の春つら／＼天台の一心

三觀の法門を案するに、凡夫の得度たやすからず、凡夫の出離をだにもゆるさば、たとひ小乗の俱舍婆娑なりとも學せんと思給て、求法のために師匠寂空上人にいとまを乞て、修行に出たまふ。まづ嵯峨の清涼寺に七ヶ日參籠す。是則和國の靈場、嚴重の本尊にましませば、十方の淨土にきはるゝ罪惡の衆生、三世の諸佛にすてらるゝ生死の凡夫、このたび流轉の本源をつくし、輪廻の迷倒をたゝんことを祈請のためなり

嵯峨清涼寺に參籠の圖

嵯峨より南都の藏俊僧都贈僧正の坊に行たまふ。僧都すなはち出會て對面す。于時聖人法相宗の法門の自解の義を述べたまふに、藏俊しば／＼聞て手を打て云、我等が師資相承せる、いまだこの義を存せず、禪下は凡人にあらず、若是佛陀の境界歟。不可思議々々々々と云て、甘心の餘、一期の間供養をのべんと。はたして毎年に供物をゝくりけり

南都の藏俊僧都と對面の圖

三

また醋醐寺の三論宗の名匠法印寛雅に會て、かの法門の自解の義をのぶるに、名匠聽受して汗をくだしてものいはす、隨喜の餘文櫃數合を取出て云、自宗の章疏附屬すべき仁なし。貴禪ゆゑしくこの法門に達せり。悉附屬し畢ぬと云云

又慶雅法橋にあひて、華嚴宗の法門の自解の義をのぶるに、慶雅はじめは侮慢して、高聲に問答す。後には舌を巻てもものいはす。他門自解の義、自宗相傳の義にこえたるを感嘆して、華嚴宗の章疏を白馬に負て黒谷へをくる。聖教を白馬におほする事は、摩騰迦葉竺法蘭のふるきたためしを慕けるにやとおぼゆ。西天の佛敎漢土にわたりしはじめなり

小乗戒は、中川の少將の上人實範にしたがひて、鑿眞

和尚の戒をうけたまふ。實範受者の神情を感じて云、藍よりいでゝ藍よりも青しと云云

三論の寛雅、華嚴の慶雅と對談の圖

聖人、みづから淨土門にいる濫觴を語て云、我昔出離の道に煩て、寢食やすからず、多年心勞の後、往生要集を披覽するに、序曰、夫往生極樂之教行、濁世末代之目足也。道俗貴賤、誰不歸者。但顯密教法、其文非一。事理業因、其行惟多。利智精進之人、未爲難。如予頑魯之者、豈敢矣。是故依念佛一門聊集經論要文披之修之、易覺易行云云。序は略して一部の奥旨をのぶ。まさしく依念佛一門云云。文に入て委探に、此集に十門をたつ。其中に厭離穢土、欣求淨土、極樂證據等の三門は、行體にあらず。しばらくこれををく。のこる所の七門は念佛の助成也。第四の一門はすなはち正修念佛也。これをもて此宗の正因とす。此故に予、往生要集を先達として淨土門に入也と云云。其後黒谷の報恩藏に入て、一切經披覽五遍云云のとき、光明寺の觀經義をひらきたまふに、極樂國土を高妙の報土とさだ

めて、往生の機分を垢障の凡夫と判ぜられたる義理を
みるに、奇異の思やうやく動て、別してまた彼疏を三
遍披覽したまふに、第二遍にいたるまでは、いまだそ
の宗義を得ず、斯廼本宗の執心を挿て、聖道の教相に
なづむ故也。第三遍に至て、つぶさに本宗の執情を捨
て一心詳覈の時、ふかく淨土の宗義を得たり。但自身
の往生はすでに決定し畢ぬ。他のために此法を弘通せ
んと思給に、若佛意に合哉否、心勞の夜、夢に見らく
紫雲瓊璽として日本國におほへり。雲の中より無量の
光をいだし。光の中より百寶色の鳥とびちる。雲の中
に僧あり、上は墨染、下は金色の衣服也。予問て云、是
爲誰。僧答て云、我是善導也、專修念佛の法をひろめ
んとす。故に其證とならんがためにきたれる也と云云
善導は則是彌陀の化身なれば、詳覈の義、佛意に協け
りとよろこびたまふ

黒谷報恩疏にて開覽と半
金色の善導和尚來現の圖

或時黒谷の幽栖にして、寂空上人、往生要集を談ぜ
られるに、觀稱の二をたて、稱名を觀佛にいれて、
觀佛すぐれたるよし、義を成ぜられければ、上人末座
に列て、この義不可然。稱が家の觀なり、されば序に
かへりて其意を得べし、依念佛一門云云。如何が此文
を消して觀佛によるといふ義を立哉とのたまふ。こゝ
に房主腹立して云、先師良忍上人も觀佛すぐれたりと
こそおほせられしか。御房はいづくより相傳して稱名
すぐれたりという義をばたてらるゝぞやと。聖人云、
此條にをきては貴命にしたがひがたし。そのゆへは、
經論章疏をみるに、一部始終を序題にかへし料簡する
是故實也。而にさきにのぶるがごとく、その文にむか
ふに義理いよく明けし。よく聖教をば御覽候は
でと云云。其時寂空上人、こさかしき小僧かなとて、
木枕をとりてなげうちにしたまふ、聖人かたはらへた
ちかくれたまひけり。後によく文をみるに、聖人
の立義、文にかなひ理をふくめり。觀佛はまことに稱

名にはあらずふべきにあらざりけりと見なをされければ、後日に聖人を讀師の座に囑せらる。しかれども聖人固辭の禮ふかし。そのとき座をたち手を引て、狂て此書を談じたまふべしと。このうへは禪命にしたがふとて、座になをりて、此集のこゝろ、往生極樂の正因濁世末代の目足、念佛の一行にありとみえたるよし、文をあさかへし、義をわきまへて、いみじく講じたまひければ、寂空も感涙にむせび、所化も歸伏の思あさからざりけり。あはれにたうとかりしことどもなり

寂空上人と親稱の勝劣
討論の圖

かくて寂空上人臨終のとき、讓狀をかきて、聖人に本尊聖教等ことごとく附屬す。良久ありて蘇生して、別紙に進上の詞を載て、さきの狀に相副べしと云云。冥途にその沙汰、傳りけるかとぞ、時の人申あへりける

寂空上人の臨終と聖人
へ讓狀進上の圖

諸方の道俗を化せんがために、承安五年甲午の春、行年四十二にして黒谷を出て、吉水に住したまふ。感神院東頭北斗それよりこのかた偏に淨土の法を談じ、ねんごろに念佛の行をすゝめたまふ。これによりて華夷の白、遠近の貴賤、晨暮に歩をはこび、門前市をなす。義をとひ行をたづぬるもの、濟々焉たり煌々焉たり。したがひつきたてまつるもの、百川の巨海に歸し、鱗介の龜龍に宗がごとし

吉水の庵室の圖

天台圓頓菩薩大乘戒は、釋尊十九代の法葉、相承一身にあり。この故に高倉院、一日萬機の政を聞て、この一心の妙戒をうけさせ給ふ。陛下の股肱、簾中の后妃、ともに戒徳をたうとび、おなじく戒香に薰す。又上西門院にして七日説戒あり、其時唐垣のうへに一の蛇あり、蟠て七ヶ日のあひだ、更にうごかずして聽聞の氣色あり。結願の日、忽に死す。頭われて二分になり。そのわれたる中より蝶のごとくなる物とびさると

みる人もあり、或は天人のごとくなるすがたにて虚空にとびのぼるとみる人もありけり。昔一人の僧あり、遠堺におもむくことあり。日くれにければ、野中に夜をあかさんとす。かしこに一塚あり、かの穴にとまりぬ。僧終夜無量義經を誦す。かの塚の内に五百の蝙蝠ありけり。この經聽聞の功によりて、則ち利天に生ずると夢に入て告げり。先蹤すでにかくのごとし。さればこれも説戒聽聞のちからにこたへて、蛇身忽にまぬがれて天上に生ずる歎とおぼゆ。凡洛中郡外近國遠邦の在家出家、頭をかたぶけこゝろざしを專にす。いにしへ剃刀を吞し夢、いままさに符合せり

上西門院の説戒と蛇の得脱の圖

治承四年 庚子 十二月廿八日東大寺炎上のち、造營あるべきよし議定あり。大勸進の事、當世にきては法然聖人の外、誰の輩にかあらん。豫精選に當て、世其仁をす。大勸進たるべき旨、右大辨行隆朝臣、勅使

として禪室に向てこれを仰す。聖人辭退して云、貧道もとより山門の交衆をやめて、林家の幽閑を好するとは、靜かに佛道を修行して、順次に生死を出過せんがためなり。もし大勸進の職に居せば、劇務萬端にして自行化他なんぞやすからん。おもへらく、他のためにはひとへに淨土の法をのべ、自のためにはもはら稱名の行を修しつゝ、その營のほか他事をまじへじと。乞、天憐を垂て、貧僧が素願、寂察をくだしませと。勅使そのこゝろざしを酌て、かの言を奏す。かさねて被仰下云、然者器量の仁を舉申さるべしと。上人その條にきてははやく祕計をめぐらすべしと云云。仍俊乘房重源、上の醍醐に侍りけるを召請して、院宣のおもむきをのぶ。重源左右なく領狀す。仍そのむねを奏せらる。すなはち俊乘房をもて彼職に補せられけり。重源領狀、まめやかかの權者かなとぞ聖人はおほせられける

東大寺隆管大勸進の勅詔
と重源の阿訖授與の圖

四

やうやく東大寺すゝめつくりて俊乘房入唐す。歸朝の時、極樂の曼荼羅五祖の眞影をわたしたてまつりて東大寺半作の筈の下にて、聖人を導師として供養あるべきよしきこえければ、興福東大寺兩寺の學生惡僧等各三論法相のはたほこをときまうけて、かねて高座の傍になみゐたり。大衆等僉議しけるは、説法の次をもて、或は因明内明の奥義、或は八不中觀の深理を問懸べし。答に紕繆あらば、惡僧等をはなち合て、恥辱にあつべしと。而に聖人、こき墨染の衣に高野ひがさきつゝ、いとこともなげなる體にて入堂あり。笠うちぬきつゝ、禮盤にのぼりて、やがて説法はじまりぬ。形像等の讚嘆禱訖て、三論法相の法門滯なく問難に遮て智辨玉をはく。次に出離の道にきては、淨土にあらすば生死をはなれがたく、念佛にあらすば淨土に生じ

がたし。初末代に至てをや。況凡夫にをいてをや。然者彌陀稱名の一行は諸佛おなじくすゝめ、三國ともにもてあそぶ。就中、疏をつくり釋を儲る、多はずなはち貴寺の高僧、二宗の先達歟。然者當寺の禪徒、何強にこれを貶せん。今試に靈場に蹤て、恣に文を釋し義をのぶ。且は眞鑑をおそれ、且は衆勤をおそる。凡此念佛は、信する者は極樂に生じて永劫に樂果を證し、謗する漢は地獄に墮して長時に苦惱をうく。孰かこれを誹謗せん。誰かこれを信ぜざらんとて、言をかざり理をつくしたまひければ、數百人裏頭の僧綱已下惡僧等、袈裟をしのけて、ひた貌になりつゝ、隨喜渴仰きはまりなし。或は再釋迦尊の出世に逢かとうたがい、或は忽に宮樓那の辯説をきくかと嘆ず。をのく嘲弄の先言を懺悔し、信順の後會をぞ有痕ける。禪訖て油藏に入ましくければ、面々に扈從しつゝ、後生たすけたまへ聖人とぞおほやうにおがみたてまつりける。その中に惡僧一人聖人に立向たてまつりて問て云、抑

念佛誹謗の者、地獄に墮すとは何の經の説ぞやと。聖人とりあへず、大佛頂經の説是也と答たまふ。又、件の僧、袈裟をしのけて、掌を合つゝ、後生たすけたまへと禮す。殆鼻うそやきてぞみえける。自爾以來、南北二京の幔幢ながく摧て、西方一實の法輪とこしなへに轉す。ゆゝしかりしことなり。又、當寺古老の學徒さきだちて瑞夢を感ずることありけり。後日に披露しければいよゝ靈寺こぞりて歸依をいたしけり

次に三部經に付たる事

佛說無量壽經卷上

將釋此經、有大意釋名入文判釋三門。初大意者、此經明能化古今之本末、說所化往生之首尾。乃役過去昔、久遠發心古、拋十善之王位、詣世饑王佛之寶前、棄四海之寶國、得法藏沙門之尊號。選二百億之莊嚴、發四十八之弘誓修六度四攝之行因、證三身萬德之佛果。五劫思惟普密意願、十劫已來今妙果。修諸功德水、浮三輩修行之影。本願往生月、照一向專念之窓。教主釋尊說、橫截五惡、高

祖和尙釋、超斷四流。經初阿難承聖旨起莊嚴淨土之由、序經終彌勒受附屬募念佛往生之流通是一經之元意、二佛之素懷也。大意如此。

次題目者、佛者娑婆教主。說者、如來口音。無量壽者極樂能化。經者佛說都名。卷上者、有上下兩卷之故也。次文段者、從如是我聞至願樂欲聞序分也。從佛告阿難乃往過至至略說之耳。正宗也。從佛語彌勒其有得聞至經終、是流通分也。

彌陀如來、本行菩薩道之時、修檀捨劫海經云、所施目、如一恒河沙。如乞眼婆羅門有飲血衆生、乞身分生血、所施生血、如四大海水。有噉完衆生、乞身分脂肪肉、所施完如千須彌山。加之取捨舌、如大鐵圍山。所捨耳如純羅、所捨鼻、如毗布羅山。所捨齒、如耆闍崛山。所捨身皮、如三千大千世界所有地云云。加之或時成肉山、被食、噉衆生、或時成大魚與身分衆生。菩薩慈悲以之、可知云云。衆生食欲以之可知云云。飲血噉肉之衆生、無情破菩薩利生之膺、求食著味之凡夫、無憚食、薩埵慈

悲之肉如是非。一劫二劫。兆載永劫之間。流四大海水之血。竭于須彌山之肉。難捨能捨。難忍能忍。滿檀度滿。足尸羅波羅密。忍辱精進禪定智惠六度圓滿。萬行具足云云。又同經四十八願中。第十八念佛往生願有二意。出離生死是拔苦也。往生極樂是與樂也。生死衆苦一時能離。淨土諸樂一念能受。若彌陀無念佛願。衆生不乘此願力者。五苦逼迫衆生。云何可離苦界。過去生々世々不值彌陀誓願者。于今在三界皆苦之火宅。未至四德常樂之寶城。過去皆以如此。未來亦空可送。今生有何福值此大願。設雖遇。若不信者如不值。既深信之。今正是值。但說心雖信之。若不行之。又如不信。既行之。正是信。願力不空。行業有誠。往生無疑。既離生死。可離衆苦。卽是大悲拔苦也。次往生極樂之後。身心受諸樂。眼拜見如來瞻仰聖衆。每見增眼根樂。耳聞深妙法。每聞增耳根樂。鼻聞功德法香。每聞增鼻根樂。舌嘗法喜禪悅味。每嘗增舌根樂。身蒙彌陀光明。每觸增身根樂。身緣樂之境。每緣增意根樂。極樂世界一々境界。皆離苦得

樂之計也。風吹寶樹是樂也。枝條華菓韻常樂。波洗金岸是樂也。微瀾廻流。演四德洲鶴鳴是樂也。根力覺道法門故。寒鴻鳴是樂也。念佛法僧妙法故。步寶地是樂也。天衣受跣。入寶宮是樂也。天樂奏耳。是則彌陀如來慈悲御心。發念佛之誓願我等衆生拔苦與樂心也。次別約女人發願云。設我得佛。其有女人聞我名字。歡喜信樂。發菩提心。厭惡女身命終之後。復爲女像者。不取正覺。付此有疑。上念佛往生願。不嫌男女。來迎引接互男女。繫念往生願又然也。今別有此願。其心云何。倩案此事。女人障重。明不約女人者。卽生疑心。其由者。女人過多障深。一切處被嫌。道宣引經云。十方世界有女人處。卽有地獄云云。加之內有五障。外有三從。五障者。一者不得作梵天王。二者帝釋。三者魔王。四者轉輪聖王。五者佛身云云。一者不得作梵天王者。色界初禪之主。梵衆梵輔之王也。彼尙生滅之境。輪轉之質。無量梵王更居。全以女身無登高臺閣者。無刷三鉢之襍者。此尙難。何況往生哉。可疑之故。別發女

人往生願。二者帝釋者、欲界第二天須彌八萬之頂、三十
三天王、殊勝殿主也。彼又五衰之形、魔滅之境。若干
帝釋替移云、未以女身登帝釋寶座者。三者魔王者、
欲界第六天、他化自在王也。尙業報之質、遷變之處。
百千魔王移居云、未有女身魔王云事。四者轉輪聖王者、
東西南北四州之王、金銀銅鐵四輪之王也。其中未一人
有女輪王。五者佛身者、成佛男子尙難。何況女人哉。大
梵高臺閣被嫌無望梵衆梵輔之雲帝釋柔軟床被下、無
翫三十三天之花。六天魔王之位、四種輪王之跡、望永絕、
影不指。天上天下尙賤生死有漏果報、無常生滅拙身不
成。何況佛位哉。申有憚。思有恐。三惑頓盡、二死永
除、長夜之明、覺月正圓也。四智圓明之春苑三十二相
之花鮮發。三身即一之秋虛。八十種好之月清澄。位妙
覺高貴之位、四海灌頂之法王也。形佛果圓滿之形、三
點法性圓融之聖容也。實男子如善財大士一百一十城求
如雪山童子四句半偈身投、佛可成申候。緩行疎求、全
不可叶候。されば五千上慢是男子、去成佛座而起、

五闍提羅沙門、結無間之業而落。凡佛道被嫌、佛家被
棄者、不可勝計。何況女人身、諸經論中被嫌、在々所
々被損出。非三途八難、無可赴方、非六趣四生、無可受
形。然則富樓那尊者成佛國、云無有諸女人、亦無諸惡
道、等三惡道、永削女人跡、天親菩薩往生論中、云女人
及根闕、二乘種不生、同根毀敗種、遠絕往生之望云云。
諸佛淨土不可思、寄此日本國、貴無山靈地靈驗砌、皆
悉被嫌云云。先比叡山、是傳教大師建立、桓武天皇之
御願也。大師自結界、堺谷局峯、不入女人形。一乘峯
高立、五障之雲無聳、一味之谷深湛、三從之水無流。
藥師醫王靈像、聞耳不視眼。大師結界靈地、遠見近
不臨。高野山者、弘法大師結界峯、眞言上乘繁昌之地。
三密之月輪雖、普照、不照、女人非器之闕。五瓶之智水雖、
等流、不灑、女人垢穢之質、於此等所、尙有其障。何況於
出過三界道之淨土哉。加之又聖武天皇御願十六丈金銅
舍那前、遙雖拜見之、尙不入扉內。天智天皇之建立五丈
石像彌勒前、高仰雖禮拜之、尙壇上有障。乃至金峯雲

上、醒酬假底、女人不指影。悲哉、雖備兩足、有不
登法峯、有不踏佛庭、恥哉、雖兩眼明、有不見靈地、有
不拜靈像、此穢土瓦礫荆棘之山、泥木素像、有障。何

況衆寶合成之淨土、萬德究竟之佛乎。因茲往生、可有

其疑故、鑒此理、別有此願云云。善導釋此願云、乃由

彌陀大願力故、女人稱佛名號、正命終時、即轉女身、得

成男子。彌陀接手、菩薩扶身、坐寶花上、隨佛往生、

入佛大會、證悟無生。又一切女人、若不因彌陀名願力

者、千劫萬劫恆河沙等劫、終不可得轉女身。或有道俗

云、女人不得生淨土者、此是妄說也。不可信也。是

則拔女人苦與女人樂、慈悲御心誓願利生也

又云、念佛利益之文

無量壽經下云、佛語彌勒、其有得聞彼佛名號、歡喜踊躍、

乃至一念、當知此人爲得大利、則是具足無上功德

善導禮讚云、其有得聞彼彌陀佛名號、歡喜至一念、皆

當得生彼

末法萬年後、餘行盡滅、特留念佛之文

無量壽經下卷云、當來之世、經道滅盡、我以慈悲哀愍、
特留此經、止住百歲、其有衆生值此經者、隨意所願、
皆可得度

佛說觀無量壽經

將釋此經、有大意釋名入文判釋三門。初大意者、此經明

三世諸佛淨業正因、說五濁凡夫往生功德、凝十三妙觀

修三九行因、禪定水靜、依正浮彫、散善花綻、薰修結

菓。經初且約隨他意語之機、廣說定散二善。經終特擇隨

自意語之人、只說持名一行。如來出梵音和雅音、讓決定

往生之佛名、阿難促憶持不忘頂受、退代流通之付屬、望

佛本願、意在衆生一向專稱彌陀佛名。此經大意如斯。

題目者、佛者三覺之教主。說者、定散之諸善觀者、依

正之二觀。無量壽者、念佛之本尊。經者、金口之實語

也

文段者、大師約五門明之。今且存略以四段釋之。

從如是我聞至云何見極樂世界、是序分也。從佛告韋提

女及衆生至下品下生終、是正宗分也。從說是語時至

諸天發心得益分也。從阿難白佛至經終是流通分也。

經云、若念佛者、當知此人、是人中分陀利華。觀世音菩薩、大勢至菩薩、爲其勝友、當坐道場生諸佛家。

同經疏云、若能相續念佛者、此人甚爲希有、更無物可以方之。故引分陀利爲喻。言分陀利者、名入中好

華、亦名希有華、亦名人中上華、亦名入中妙好華。此華相傳、名蔡華。是念佛者、即是人中好人、人中妙好人、

人中上々人、人中希有人、人中最勝人也。四明專念彌陀名者、卽觀音勢至常隨影護、亦如親友知識也。五

明今生既蒙此益捨命卽入諸佛之家、卽淨土是也。到彼長時間法、歷事供養、因圓果滿。道場之座豈除。

同經云、佛告阿難、汝好持是語。々々々者、卽是持無量壽佛名。

同經疏云、從佛告阿難汝好持是語以下、正明付屬彌陀名號流通於後代。上來、雖說定散兩門之益、望佛本

願、意在衆生一向專稱彌陀佛名。

佛說阿彌陀經

將釋此經、有大意釋名入文判釋三門。初大意者、初明極

樂依正二報之莊嚴、後說末代行者往生之行相。所謂法性眞如大地、黃金瑠璃鏡寫影、第一義諦虛空、曼陀曼殊

花吐匂。林樹分七寶、花菓色々穠。池水灌八德、風波聲々流。珠玉宮殿並臺、異化樓閣重窠。是依報莊嚴也。

六十萬億身量、如金山高々。八萬四千相好、似珂月明々。觀音如日光跪左面、勢至齊月輪侍右脇。品々賢

聖、如星步集、彼々菩薩、如花飛來。是正法莊嚴也。七日口稱念佛、顯上品信心之光。六方舌相證誠、移下

根疑惑之闇。彌陀弘誓雖六八、行者至要在二二。至心信樂者、第十八願。住正定聚者、第十一願之故也。大意

如此。題目者、佛者、諸佛之中教主釋尊。說者、五種之內如來巧言也。阿彌陀者、以佛號爲經名經者、常也。先

聖後賢同說同行。文段者、從如是我聞至諸天大眾俱序分也。從爾時佛告長老至是爲甚難正宗也。從佛說

此經已至作禮而去流通也。

付經正宗、觀念法門釋云、又如彌陀經云、六方各有恆河沙等諸佛皆舒舌遍覆三千世界、說誠實言、若佛在世、若佛滅後、一切造罪凡夫、但廻心念阿彌陀佛、願生淨土、上盡百十年下至七日一日十聲三聲一聲等、命欲終時、佛與聖衆自來迎接、即得往生。如上六方等佛舒舌、定爲凡夫作證。罪滅得生。若不依此證得生者、六萬諸佛舒舌、一出口已後、終不還入口自然壞爛。又云、此人當得六方恆河沙等佛、共來護念故、名護念經。護念意者、亦不令諸惡鬼神得便、亦無橫病橫死。橫有厄難、一切災障自然消散。除不至心。經云、佛說此經已、舍利弗及諸比丘、一切世間天人阿修羅等、聞佛所說歡喜信受、作禮而去。法華讚釋此文云、世尊說法、時將了、愍愍付屬彌陀名。五濁增時、多疑謗、道俗相嫌不用聞。見有修行起瞋毒、方便破壞競生怨。如此生盲聞提鞞、毀滅頓教永沈淪。超過大地微塵劫、未可得離三塗身。大衆同心皆懺悔、所有破法罪因緣。

次に五祖に付たる事

今又此五祖者、先曇鸞法師、道綽禪師、善導禪師、懷感禪師、小康法師等也

曇鸞法師は梁魏兩國の無雙の學生也。初は壽長して佛道を行ぜんがために、陶隱居にあひて仙經を習て、其仙方によりて修行せんとしき。後に菩提流支三藏にあひたてまつりて、佛法の中に長生不死の法の、此土の仙經に勝たるや候と問たてまつり給ければ、三藏唾を吐て答給やう、同言をもて、いひならぶべきにあらず、此土何所にか長生の方あらん。命ながくして、暫しなぬやうなれども、つゝに返て三有に輪廻す。但此經によりて修行すべし。則長生不死の所に至べしといひて、觀經を授給へり。其時忽に改悔の心をおこして仙境を燒て自行化他一向に往生淨土の法を專にしき。往生論註、略論、安樂土義等の文造之。并州玄忠寺に三百餘人の門徒あり、臨終の時、其門徒三百餘人集て、自は香爐をとり、西に向て弟子とともに聲を等しくし

て高聲念佛して命終しぬ。其時道俗、おほく空の中に音楽を聞と云云

道綽禪師は、本は涅槃の學生也、并州玄忠寺にして疊鸞の碑文を見て、發心して云、彼疊鸞法師、智徳高遠なる、なを講説をすて淨土の業を修して、己に往生せり。況我所解所知おほしとするにたらんやといひて即涅槃の講説をすて、一向に專念佛を修して相續してひまなし。つねに觀經を講じて人をすゝめたり。并州の晋陽大原汝水三縣の道俗七歳已上は、悉念佛をさとり往生をとげたり。又人を勸て涕唾便利、西方にむかはす。行住坐臥、西方にそむかず。又安樂集二卷、これをつくる。凡往生淨土の教弘通、道綽の御力也。往生傳等を見るにも、おほく道綽の勸を受けて、往生をとげたり。善導も此道綽の弟子也。然者終南山の道宣の傳に云、西方の道教のひろまることは是よりおこるといへり。又疊鸞法師、七寶の船に乗じて空中にきたれるをみる。又、化佛空に住すること七日、其時天花雨

て、來集の人々袖にこれをうく。かくのごとく不可思議の靈瑞おほし。終時に白雲西方より來て、三道の白光と成て房中をてらす。又墓の上に紫雲三度現する事あり

善導和尙いまだ觀經をえざるさまに、三昧をえたまひけるとおぼえ候。其故は、道綽禪師に値て觀經をえてのち、此經の所説、我所見におなじといへり。善導和尙の念佛し給には、口より佛出給ふ。疊省の讚に云、善道念佛々從口出云云。おなじく念佛をまふすとも、かまへて善導のごとく、口より佛出給ばかり申すべきなり。欲如善導、妙在純熟と申て、たれなりとも念佛をだにも實に申て、其功熟しなば、口より佛は出給べき也。道綽禪師は師なれども、いまだ三昧を發得せず、善導は弟子なれども、三昧をえ給たりしか。道綽我往生は一定か不定か、佛にとひたてまつり給ふべしとのたまひければ、善導禪師命を受けて、即定に入て阿彌陀佛にとひたてまつるに、佛の言、道綽に三の罪あり、

速に懺悔すべし。其罪懺悔して定で往生すべし。一には佛像經卷をばひさしに置いて我身は房中に居す。二には出家の人をつかふ。三には造作の間、虫の命をころす。十方の佛の前にして第一の罪を懺悔すべし。諸僧の前にして第二の罪を懺悔すべし。一切衆生の前にして第三の罪を懺悔すべしと。善導即定より出て此旨を道綽につぐるに、道綽の云、靜に昔の過を思に、これみな空からずといひて、心を至て懺悔すと云云。しかれば師に勝たるなり。善導はことに火急の小聲念佛をすゝめて、かすを定給へり。一萬二萬三萬五萬乃至十萬と云云

懷感は法相宗の學生也。ひろく經典をさととりて念佛をば信ぜず。善導に問て云、念佛して佛をみたてまつりてんや。導和尚答て云、佛の誠言なんぞうたがはむや。懷感此事に付て忽に解をひらき、信をおこして道場に入て、高聲に念佛して佛をみたてまつらんと願するに、三七日までその靈瑞をみず、其時感禪師みづか

ら罪障のふかくして佛をみたてまつらざることを恨て、食を斷じて死せんとす。善導制してゆるさず。のちに群疑論七卷をつくと云云。感師はことに高聲念佛をすゝめたまへり

小康は本は持經者也。十五歳にして法華楞嚴等の經五部をよみおぼえたり。これによりて高僧傳には、讀誦の篇にいれたれども、但持經者のみにあらず。瑜伽唯識の學生也。後に白馬寺に詣で、堂内を見れば、光をはなつ物あり。これを探取てみれば、善導の西方化導の文也。小康これを見て、心忽に歡喜して願をおこして云、我若淨土に縁あらば、此文ふたゝび光をはなてと。かくのごとく誓畢てみれば、重てひかりをはなつ。其光の中に、化佛菩薩まします。歡喜やすめがたくして、つゐに又長安の善導和尚の影堂に詣で、善導の眞影をみれば、化して佛身と成て小康にのたまはく汝我教によりて衆生を利益し、おなじく淨土に生ずべし。これをきゝて小康所證あるがごとし。後に人をす

ゝめんとするに、人その教化にしたがはず。然間、錢をまうけて、まづ小童等をすゝめて、念佛一遍に錢一文をあたふ。後に十遍に一文、かくのごとくするあひだ、小康のありくに小童等付て各念佛す。又小童のみにあらず、老少男女をきはらず、みなことごとく念佛す。かくのごとくしてのち、淨土堂を造て、晝夜に行道して念佛す。所化に隨て道場に來集する輩三千餘人也。又小康高聲に念佛するをみれば、口より佛出給こと善導のごとし。是故に時の人、後善導となづけたり。淨土堂とは唐の習阿彌陀佛をすへたてまつりたる堂をば、みな淨土堂となづけたる也。五祖の御徳、要をとるにかくのごとし

大佛殿にて淨土五祖像
供養の圖

文治二年の比、天台座主僧正顯眞、使者をたてゝ聖人に示て云、登山の次にならず見參を遂て申承べき事侍り、音信せしめ給べしと。仍或時、坂本にいたれ

るよし示たまふ。すなはち座主僧正下山しつゝ、對面して云、今度いかにしてか生死を出過し侍るべきと。聖人答て云、何様にも御計にはすくべからずと。又云、其條所存なきにあらずといへども、先達におはしませば、若思定たまへる旨あらば、示たまへとなり。其時聖人云、自身のためにはいさゝか思定たるむねあり。たゞはやく往生極樂をとげんとなり。座主云、身にきては順次の往生いかにも途がたくおぼえ侍るによりてこの問をいたす。いかゞたやすく往生をとげんやと。聖人云、成佛はかたく、往生は得やすし。道禪善導等の御意によらば、佛の本願を仰て強縁とするがゆへに凡夫淨土に生ずと云云。そのうち平に言説なくして聖人たちまじくけり。後日に座主云、法然房は智慧深遠なりといへども、いさゝか偏執ありと云云或人のことを聖人にかたる。聖人云、わがしらざるを云には、かならず疑心おこるなりと。僧正またこれをかへり聞て云、まことに爾なり。それ顯密の教にきて稽

古を積といへども、偏名利のためにして涅槃の一道に
うとし。故に道綽、善導等の釋をうかゞはず、法然房に
あらずば、誰人かかくのごときのことをいはむとて、

自宗の行法を聞つゝ、やがて大原に隱居して百日の間、
淨土の章疏を涉獵してのち聖人に示て云、我粗淨土の
法門を得たり。來臨したまはゞ精談すべしと。僧正か
ねて所々の智者を召請しつゝ、勝林院の文六堂に集會
して聖人を囑請す、すなはち重源已下の弟子三十餘人
を相具してわたりたまひぬ。聖人の方には重源をはじ
めとして次第にゐながれたり。座主僧正の方にも諸宗
の碩德僧綱已下并に大原の上人等又著座す。その内光
明山僧都明遍東大寺、己講貞慶興福寺、笠置の解脫房是也。
山上久住の僧綱には法印大僧都智海天天台宗、法印權大僧
都證眞同法印靜嚴、法印淨然、僧都覺什、權律師仙基、
印西上人、念佛上人天台宗、明定房蓮慶同、本生房湛
往生院來迎院、馨發妙覺寺上人、藏人入道仙心善提山、定運房長樂寺
大和入道見佛八坂清淨房勝林院究法房櫻本等、彼是兩方

三百餘人、二行に對座す。その時聖人云、源空發心已
後、聖道門の諸宗に付てひろく出離の道を訪に、かれ
もかたく、これもかたし。是則世澆季にをよび、人癡
鈍にして機教あひそむける故也。然則有智無智を論ぜ
ず、持戒破戒をきはらず、時機相應して順次に生死を
はなるべき要法は、たゞ淨土の一門念佛の一行也と、
一日一夜、理をきはめ詞をつくして述べたまふ。座主僧
正これを聞て始には問難をいたすといへども、後には
嘉納信伏のいろふかくして、かつて疑殆の一言にをよ
ばす。いひくちとさだめたる本生房も嘿然としても
いはす。みな人感情を動し歸敬をいたすほか他なし。
その形容にむかへば、源空聖人智惠高妙也。その述義
をきけば彌陀如來應現したまふかとおぼゆ。論談す
にをはりて、隨喜のあまり、僧正みづから香爐を取て
入堂して旋遶行道して、高聲念佛す。南北の明匠、顯
密の諸德、異口同音に稱名すること三日三夜無間無餘
也。剩一の發願あり、この寺に五箇の房舎をたて、

不斷の念佛を修せむ。是則妙行を相續して遐代にをよ
ばさんがためなり。是我朝不斷
念佛最初也 また重源一の意巧あ

り、吾國の道俗、閻魔の廳庭にひざまづかんととき、其
名字を問れんに、佛號をとなへしめんために、阿彌陀
佛名をつけんと、仍先我名をば南無阿彌陀佛とつきた
まへり。阿彌陀佛名これよりはじまる

大原問答と念佛行道の圖

靜嚴法印、吉水の坊に來て、聖人に問て云、云何が
してこのたび生死をはなるべきと。聖人答て云、源空
こそたづね申たく侍りつるに、この命如何。靜嚴云、
決擇の問は誠に然也。出離の道にをきては、智者道心
者遁世久して、かたく案立する義によるべしと。聖人
すこしうちゑみて云、源空にをきては彌陀の本願に乗
じて往生を期す。其外をばしらすと、靜嚴云、我所存
これなり。人の義意をきかんがために、このうたがひ
をいたすといひて、すなはち座をたち侍りぬ

靜嚴法印と對談の圖

高野の明遍僧都、聖人所造の選擇集をみて、よき文
にて侍が、但偏執なる篇ありと云云。其後明遍夢にみ
たまふ様、天王寺の西門とおぼしき所に、病者數をし
らず平臥せり。一人の聖ありて、鉢に粥を入れて貝をも
て病者のくちく／＼にすくひいる。これ誰人ぞとへば
或人、源空聖人也と云とみて覺ぬ。僧都情これを案す
るに、選擇集を偏執の文也と非しつるを、夢に入て告
示よなとおもふより、懺悔の心や／＼す／＼みつゝ、この
聖人はたゞ人にあらず、時をしり機を量たる智者にて
まし／＼けりと、いみじく貴おぼえけり。病人とみえ
つるは、無明淵源の病にしづめる五濁濫漫の我等にこ
そ、甘子梨風情の菓子を受用することも、はてにはと
ゞまりぬ、たゞおもゆ粥などをすくひ入て、喉をうる
ほすばかりに、命をかけたる病者のごとくに、末法濁
亂の今時は、四重五逆の病興盛なり。これを治せんこ

と、中道府藏の薬にあらすば救がたし。而今念佛三昧はこれ中道一乗の靈藥、深妙醍醐の頓味也、然者聖道諸教の梨甘子にをきては、その味勝劣なしといへども鈍根無智の罪惡凡夫の器量いたりて淺弱なれば、開悟受用甚以かたし。故に時機相應するに付て、五逆謗法重病難治の類に、念佛三昧醍醐甚深の粥をすゝめたまひけるなりと符合して、そのうち専念佛の行を修したまひけり。この僧都、或時善光寺にまうでんとおもひたちたまひけるに、おなじくは聖人に謁して淨土の法門の不審を決してこそ、如來前にもまうでめと思給て聖人の禪房にいたりて問たてまつりて云、宋代惡世の罪濁の我等、いかにしてか生死をはなれ侍るべきやと聖人答て云、彌陀の名號を稱して淨土に往生する、これをもてその肝府とする也と。僧都云、愚案またかくのごとし。信心を決定せんがためにこの問を致也と。僧都又問て云、念佛の時、心の散亂するをばいかゞし侍るべきと。上人答て云、其條源空もちからをよばす

欲界散地の凡夫、心の散亂すること人の目鼻の生得なるがごとし。いかにもしづめんことかなふべからず。さればこそ、たゞ他力の本願に任て、機不堪をおもんばからず、心の散不散を論ぜず、罪の重輕をとはず、行の多少をさだめず、不取正覺の誓約、虚設ならずば往生も不可不遂と、ゆるくと仰つゝ、念佛せんにはすぐべからずとは申候へ、當世の人みな機教の分際をしらず、佛願の攝持すべきをたのますして、この身にて輒生死いだがたしと、卑下の思をなす。まことに自力の出離は一大事の因縁也。然而他力の願船にのりぬれば、一念に横超して苦海ものならずこそおはえ侍れと。僧都耳をそばだて心をおさめつゝ、はな抃悦をいだきて歸たまひにけり。

天王寺西門にて病者に
粥を與ふの圖

河内國みてぐらじまに年來すみ侍る一人のをのこあり、世の人なづけて耳四郎とぞいひける。天性もとよ

り奸してまたする態もなく、たゞ臍惡をのみことゝして世をわたる媒とす。或時聖人白河の房姉小路白河號二階房信空上人宿也にて終夜法談あり。件の耳四郎、都にのぼりて所々ためらひありくに、便宜よかりければ、彼貴坊にいたりぬ。縁の下にはひかくれて人のしづまるほどを待けるほど、聖人の御房いつもの事なれば、凡夫出離の要道、淨土の一門、念佛の一行にしくはなし。其機をいへば十惡五逆四重謗法闍提破見破戒等の罪人、其行を論ずれば、十聲一聲、いかなる嬰兒も唱つべし。其信をいへば又一念十念いかなる愚者もおこしつべし。もとより十方衆生のためなれば、いづれの機かもれ、いづれの輩かすてられん。十方衆生のうちには、有智無智、有罪無罪、凡夫聖人、持戒破戒、若男若女、老少善惡の人、乃至三寶滅盡の時の機までみなこもれり。たゞこの本願にあひ、南無阿彌陀佛といふ名號をきゝえてむもの、若不生者の誓のゆへに彌陀如來遍照の光明をもて、これを攝取して不捨、つみをもく、さはり

ふかく、心くらく、さとりすくなからんにつけても、いよ／＼佛の本願をあふぐべし。そのゆへは彌陀の本誓はもと凡夫のためにして、聖人のためにあらずといふ文によりてなり。あふぐべし、信すべしなど、さまざま易往易行の道理、他力引接の文證、み／＼ぢかにころえやすくのべたまふに、耳四郎さらになにのわざもわすられて耳をそばだて、聽聞す。こゝろに思樣、これほどにわがためみ／＼よりにたうときこと侍らず。かゝるところにおもひよりけるも、しかるべくて後生たすかるべきにて、佛の御をしへにも侍らん。たゞいまはひ出で、かつはおもひきざしつる意趣をも憐しかつはなをもよくたうときことをも問たてまつらんとおもひつゝ、夜もあけにければ、やをらむなしくはひ出で庭上に躡居す。御弟子たちあやしみて、ことのよしをとふ。耳四郎、しか／＼とありのまゝに申ければ聖人出會たまひて、宿縁もともありがたしとて、罪惡重罪の凡夫の出離、ことに彌陀雜思の願力によらずば

かなひがたしとて、手をとりにてねんごろに説きかせたまふ。耳四郎いよくよろこびをなして退出す。そのち貳なく念佛す。されども生得の報なれば、日來の態すつすることもなし。たゞたのむところは、かゝる悪業はげしき身なりとも、念佛せば彌陀如來の大慈大悲の因位の誓約をたがへず、むかへたまふぞときゝし聖人の御ことばばかりなり。かくて年月をふるに、或時かたへのをのこ、耳四郎が悪事に長じたるをや妬おもひけん。なをちかくむつびけるともだちをかたらひえて、耳四郎を害せんとたくむ。酒をくみ盃をめぐらし、てしめければ、耳四郎沈醉して、ものをひきかつぎ、先後をわきまへず臥にけり。そのとき敵かたなをぬきつゝ、うへにかつぎたるものをひきのけてみるに、耳四郎にはあらで、全金色の佛體也。加之、出入の息のをと、すなはち南無阿彌陀佛々々々々ときこゆ。爰敵奇異の思に住して、まづ劍をおさめて情これを案するに、年來のあひだ、行任坐臥時處諸縁をきはす

念佛しつるゆへに、この相現するにこそといみじくたうとおぼえて、隨喜のおもひをきどころなきあまり、しばしこれをおどろかすに、耳四郎こえに付て、睡眠忽におどろき、酩酊醒悟す。その時、敵のをのこ云やう、なにをかかくしきこへん。しかく、なにがしのぬしが語侍りつれば、はかなくそこをうしなひたてまつらんとてたばかりつるに、その姿、金色の佛像とあらはれ、その息の呼吸、彌念佛の音ときこえつれば、耳もあやに目もめづらかにおぼえて、且は謝し且は尊がために左右なくおどろかしつるなり。われもとより汝にむけて遺恨なし。只をろかに語をえつるばかりなり。更にいきどおりおもふことなかれとて、慚謝のあまり鬢をきりてみせけり。これをきくに彌信力強盛におぼえて、耳四郎ももとよりきりてけり。二人こゝろさしをひとつにして、傍に蒞しめつゝ、しづかに念佛して、終に素懷をとげにけり。されば返々も淨土宗の正意は、機の善惡に目をかけて、佛の攝不攝を慮こと

なかれとなり。この耳四郎は至極の罪人、悪機の手本といひつべし。今時の道俗たれの輩かこれにかはるところあらんや。凡この身にきて、内に三毒をたゝへ外に十悪を行す。つくるに強弱ありといふとも、三業みなこれ造罪也。をかすに淺深ありといふとも一切ことごとくそれ妄惡也。然者たれの輩か罪惡生死の名をのがれん。いづれの類か煩惱成就の體にあらざらん。

つくるもつくらざるも、みな罪體也。おもふもおもはざるも、ことごとく妄念也。而に當世の人みなおもへり、わが身にさほどの罪業なければ、本願にはすくはれなん。わが心にさほどの妄念なければ、往生の願ははたしつべしと、このおもひ不可然。そのゆへは、たとひ身心ともに起惡造罪なくとも、念佛をたのますば極樂にむまれがたし。たとひ、逆謗闡提なりとも願力に乗ぜば往生うたがひなし。罪業の有無によるべからず。本願の信不信にあるべきなり。抑かの耳四郎は、山賊強盜竊盜放火殺害、如斯の惡行をもて朝夕の能と

し、妻子をたすくる支としけり。就中殺害にきては幾千萬といふことをしらざりけるとかや。かゝるものゝ、そのわざをしつゝも、念佛を修し本願を懇ける、ことにたうとくも侍るものかな

耳四郎縁の下にて聰闇と
全金色の佛体奇瑞の圖

五

聖人、清水寺にして説戒の時、淨土の法門をのべ、念佛の一行をすゝめ給。聽聞の輩おほかりける中に、南都興福寺に侍りける大童子ねんごろに法筵にのぞみて耳を傾けるが、其後法師になりて松苑寺の邊に草庵を占て、閑に念佛しつゝ往生の素懷を遂けるとなん。凡聖人説法の砌に縁をむすぶ信男信女、證をあらはし益をうることを稱計すべきにあらす

清水寺にて脱戒、大童子の出家と往生の圖

靈山にして三七日不斷念佛勤行あり、その間、燈明

いまだかゝげざるほどに、光明忽然として堂中を照耀することあり。また第五日の夜、各行道のうしろに大勢至菩薩、諸共に行道したまふ。或人これを拜す。聖人にかくとしめす。さること侍るらんと答たまふ。これよりして粗大勢至の化身といふことを知ぬ

大勢至菩薩共に行道し
給ふの圖

聖人、院宣によりて、後白河法皇にまいりて往生要集を談ぜられけるに、夫往生極樂教行、濁世末代目足也。道俗貴賤、誰不歸。と侍りけるより、そのことゝなくたうとく心肝に銘じければ、今はじめて聞ことのやうに覺て、公卿侍臣隨喜のおもひを同し、堂上堂下感情抑がたかりけり。太上天皇、叙感の餘、左京權大夫藤原隆信朝臣に仰て、聖人の眞影をうつさしめまします。後代の信にとゞめられんがためときこゆ。蓮華王院の寶藏にこめられて、于今秘せらると云々

往生要集の御披講と眞
影寫さるの圖

建久三年秋の比、後白河院の御菩提のために、大和入道見佛引導寺にして、七日念佛勤行し侍りける。聲明の先達に、心阿彌陀佛、共行の結衆に、見佛房、住蓮房、安樂房等、あまた人々ありけり。聲明を興行せられけることは、聲佛事をなすいはれあれば、極樂の寶樹寶池の浪のをと、風のこえも、みな苦空をとなく常樂をしらぶ。これになすらへて、本願の妙理をあらはし、念佛の氣味をまささんがために五音をととのへ七聲をたゞしくして、彼依正二報を嘆すべし。然者聽聞隨喜のたぐひ、入宗の方便となりぬべし、利益などかなからんとて、聖人とりたてたまひけり。住蓮安樂この二人は、時の宗匠ときこゆ。ゆゝしくたうとかりけるとぞ

住蓮・安樂等の聲明興
行の圖

無品親王靜忠違例獲鱗にましくければ、門徒の僧綱僧正、行舜僧正、公胤僧正、賢實座主、顯眞法印、

遺嚴法印、譽觀法眼、圓豪等、祈禱のために、大般若
轉讀ありけれども、更に其驗もましまさざりければ、
聖人を召請したてまつりて、出離の一大事談じましま
しけり。其禪命に云、このたびはいかにしてか生死を
はなるべきと、聖人云、往生極樂ののぞみ、御念佛に
はしかず、まさしく光明遍照十方世界、念佛衆生攝取
不捨とときたまへるうへは別に子細あるべからずと。
其後意念口稱相續して、往生の素懷を遂まし／＼けり

靜忠親王の御遠例に念
佛談義の圖

聖人自筆の記に云、生年六十有六、建久九年正月一
日、楊梅の法橋救慶がもとよりかへりて後、未申の時
ばかりより恆例の正月七ヶ日の念佛始行。其間、初日
に當て明相すこしき現す。第二日水想觀自然成就云云
すべて念佛七ヶ日のうち、水想觀の中に、瑠璃の相、
少分これを見る。二月四日の晨、瑠璃の地、分明に現
すと云云。六日後夜に、瑠璃宮殿相現す。第七日の晨

重て又現す。則この宮殿おもてあらはれて、その相現
す。すべて日想水想地想寶樹寶殿の五觀をはじめとし
て、正月一日より二月七日にいたるまで、三十七日の
あひだ、毎日にこれらの相現すと云云

瑠璃宮殿の明相現する
の圖

無量壽佛化身無數與觀世音大勢至常來、至此行人之
所といへり。聖人常に居給所を白地に立出てかへり給
ければ、阿彌陀の三尊、木像にもあらず、畫像にもあ
らずして、壁をはなれば敷をはなれて、天井にもつか
ずしておはしましけり。それより後、長時に現じたま
ひけり

阿彌陀三尊來現の圖

元久元年仲冬の比、山門の衆徒の中より、念佛停止
すべきよし大衆峰起して、座主僧正顯眞に訴申、依之
座主僧正、聖人にその尋あり。其時上人、起語文をよ
くらる。其狀に云、叡山黒谷沙門源空敬白。當時住持

三寶護法善神御寶前。右源空、壯年の昔の日は、粗三觀の樞をうかゞひ、衰老の今の時は、偏に九品の堺をのぞむ。此又先賢の故跡也。更に下愚の行願に非ず。而に近日風聞して云、源空偏に念佛の教を勸て、餘の教法を謗す。諸宗此に依て凌遲し、諸行因茲滅亡云云。此旨を傳聞に、心神をおどろかす。終に則、事山門にきこえ、議衆徒にをよべり。炳誠を加べき由、貫首に被申訖。此條一には衆勘をおそれ、一には衆恩をよろこぶ。おそるゝところは貧道が身をもて忽に山洛の醜にをよばむ事、悦ところは謗法の名を削て、ながく花夷の誹をやめん事、若糾斷に非ば、争か貧道の愁歎をやすめんや。凡彌陀の本願に云、唯除五逆誹謗正法と云云念佛をつとめん輩、争か正法を謗ぜん。又惠心の集には、一實の道を聞て、普賢の願海に入と云云。淨土をねがふ輩、豈妙法を捨んや。就中、源空念佛の餘暇に當て天台の教釋を開て、信心を玉泉の流にこらし渴仰を銀池の風にいたす。舊執なを存す。本心何忘ん。

たゞ冥鑿をたのみ、たゞ衆察をあふぐ。但老後遁世の輩、愚昧出家の類、或は草庵に入て髪をそり、或は松室に望て心ざしを云、次に極樂をもて所期とすべし。念佛をもて所行とすべきよし、時々もて説諫す。是則齡衰て研精にたへざるあひだ、暫難解難入の門を出て、誠に易行易往の道をしめすなり。佛智猶方便を備給、凡愚豈斟酌なからんや。敢て教の是非を存するにあらず、偏に機の堪否をおもふ。この條もし法滅の縁たるべくは、向後よろしく停止に隨べし。愚蒙潛にまどへり。衆斷よろしくさだむべし。いにしへより化導をこのまず、天性弘教をもはらにせず、このほかに僻説をもて弘通し、虚誕をもて披露せば、最糾斷あるべし。尤炳誠あるべし。のぞむところなり、ねがふところなり。此等の子細、先年沙汰の時、起請文を進じ訖ぬ。其後いまに變ぜず、かさねて陳するにあたはずといへども、嚴誠すでに重疊の間、誓狀又再三、上件の子細一事一言、虚誕をくはへ會釋をまうけば、行住坐臥の

念佛、其利をうしない、三途に墮在して現當二世の依
身常に重苦に沈て、ながく楚毒をうけん。伏乞、當寺
の諸尊滿山の護法、證明知見し給へ。源空敬白。元久
元年十一月十三日源空敬白とぞかゝしめたまひける。
九條禪定殿下、大原大僧正顯眞に自筆の御消息ををく
らる。其詞に云、念佛弘行の間の事、源空聖人の起請
文、消息等、山門に披露の後、動靜如何最不審に候。
抑風聞のごときは、聖人淺深三重の過に依て、柄誠一
決の僉議に及と云云。一には念佛の勸進總じて不可然
此則眞言止觀にあらず、彌陀念佛の權説をもて、更に
往生を不可遂故と云云。此條にをきては定て滿山の談
評にあらじ。若は一兩の邪説駁。他の謗法をとがめん
がために、みづからかへりて謗法をいたす。勿論と可
謂。二には念佛の行者、諸行を毀破する餘、經論を焚
燒し、章疏をながしうしなふ。或は又、餘善をもては
三途の業と稱し、犯戒をもては九品の因とすと云云。
これをきかん緇素、誰か驚歎せざらんや。諸宗の學徒

專譚陶するにたれり。但この條にをきては、殆信を取
しめがたし。既にこれ會昌天子守屋大臣等の類駁。如
是の説、過半まことならずと云云。慥なる説に付て眞
偽を決せられんに、敢て其隱あるべからず。事若實な
らば科斷またかたしとせず。ひとへに浮説をもて、咎
を聖人にかくる條、理盡の沙汰にあらざる駁。三には
如是の逆罪にをよばずといふとも、一向專修の行人、
餘行を停止すべきよし、勸進の條なを不可然と。此條
にをきては進退相半駁。善導和尚の意に、この旨を述
るに似たり。然而旨趣甚深也。行者可思。今聖人の弘
通は、よく疏の意を探て謬訛なし。而に門弟この奧義
をしらす、宗旨をさとらざるたぐひ、恣に妄言をはき
猥く偏執をいたす由、聞ある駁。是甚以不可也とす。
聖人遮て是をいたむ。小僧諫てこれを禁ず。當時すで
に數輩の門徒をあつめて七箇條の起請を註し、各連署
を取て、ながく證據にそなふ。聖人若謗法をこのまば
禁退豈如斯ならんや。事ひろく人おほし、一時に禁止

すべからず、根元すでにたちぬ。舊執の枝葉寧繁茂することゝえむや。これをもてこれをいふに、三重の子細一として過失なし。衆徒の辭憤なにも、よりては強盛ならん。はやく満山の停止として、來迎の音樂を庶幾すべき歟。抑諸宗成立の法、各自解を專にして餘教を不奈。弘行の常の習、先徳の故實也。これを異域にとぶらへば、月氏には則護法清辯空有の評論、晨旦にはまた慈恩妙樂權實の立破也。これを我國にたづぬるに弘仁の聖代に、戒律大小の論あり、天曆の御字には諸宗淺深の談あり、八家競て定准をなし、三國傳て軌範とす。然而、豫末世の邪亂を鑿て、諸宗の討論をとゞめられしよりこのかた、宗論ながく跡をけづり、佛法それがために安全たり。就中、淨土の二宗にをきては古來の行者偏に無染無着の淨心をおこし、專修專念の一行に任て、他宗に對して執論をこのます、餘教に比して是非を判ぜず、單に出離を願す、必往生の直通をとげんとなり。たゞし弘教歎法の習、いさゝか又その

こゝろなきにあらざる歟。源信僧都の往生要集の中に三重の問答をいたして、十念の勝業を讚す。念佛の至要この釋に結成せり。禪林の永觀、智徳惠心にをよばすといへども、行淨業をつけり。選ところの十因に、その意また一致なり。普賢觀音の悲願を考、勝如教信の先蹤を引て、念佛の餘行にすぐれたる事を證せり。彼時に諸宗の輩、惠學はやしをなし禪定水をたゞよ。雖然、惠心をも破せず、永觀をも耐せず、諸教も滅する事なく、念佛も妨なし。是則世すなほに、人うるはしきゆへなり。而今、世濶李にをよび時鬪諍に屬して能破所破、共に邪執よりおこり、正論非論みな喧嘩にをよぶ。三毒内に催し、四魔外にあらはるゝが致ところなり。又或人云、念佛若弘通せられば諸宗忽に滅盡すべし。是以遏妨すと云云。この事不可然。過分の逆類にをきては、實によりて禁斷せらるべし。またく淨土宗の痛ところにあらず、末學の邪執に至ては、聖人嚴禁をくはへ、門徒すでに服膺す。かれといひ、これ

といひ。なんぞ佛法の破滅にをよばんや。凡顯密の修學は、名利によりて破滅す。これ人間の定法なり。淨土の教法にをきては名にあらす、利にあらす、後世を思人のほかにたれか習學せんや。念佛弘行に依て餘教滅盡の條戲言歟、誑説歟。いまだ是非をわきまへず。若この沙汰熾盛ならば、念佛の行にをきて一時に失墮すべし。因果をわきまへ患苦をかなしむ人、豈傷嗟せざらんや、寧悲泣せざらんや。爰小僧壯年の昔の日より、衰暮のいまに至まで自行おろそかなりといへども本願をたのむ。罪業をもしといへども、往生をねがふものうからずして、四十餘廻の星霜ををくり、いよ／＼とめ、いよ／＼すゝめて、數百萬遍の佛號をとなふ。頃年より以來、病迫命脆して、黃泉に歸せんことと在近。淨土の教跡このときに當て滅亡せんとす。見之聞之、争かしのびん。三尺の秋の霜肝をさし、一寸の夜の燈胸をこがす。天に仰で嗚咽し、地を叩て愁苦す。何況聖人、小僧にをきて出家の戒師たり。念佛の

先達たり。歸依これふかし。尊崇もとも切也。而を罪なくして濫刑をまねき、つとめありて重科に處せられば、法のためには身命をおしむべからず。小僧かはりて、罪をうくべし。仍師範の咎を救て淨土の教をまもらんとおもう。おほよそその佛道修行の人、自他ともに罪業をかへりみるべし。而を強に諍論隨事の僞論を誑して無仰迷理の重障に墮せんこといたましきかな。かなしきかな。乞學侶の心あらん理に伏て執を變じ、法に優して罪をなだめよ而已。死罪々々、敬白。十一月十三日、專修念佛沙門圓照 大僧正御房へとぞ侍りける

座主への起請文を認め
らるの圖

六

おほよそ聖人淨土の法門弘通、先規蹤すくなく當世比なし。信をとぶらひ行をたづねて門蹟につらなり、禪局にちかすく衆その數をしらす。或は蘭省鷲鷲の露

名を遁て、九品三輩の臺に望をかけ、或は荆溪香象の學窓を出て、三心五念の床に跏をむすぶ。賢人もこれに歸し、愚昧もこれをあふぐ。爰一人の貴禪于時絕望今善信聖親鸞本慈鎮親鸞本慈鎮 叡岳の交衆をやめ、天台の本宗を少納言公人は是也和尙門弟和尙門弟 叡岳の交衆をやめ、天台の本宗を開て、かの門下に入て、その口決をうく。その性岐嶮にして、聖人甘心きはまりなし。于時建仁元年辛酉春の比也。今年聖人六十九歳、善信上人二十九歳

善信聖人と對談の圖

七箇條起請文詞云

普告于予門人念佛上人等

一 可停止未親一句文奉破眞言止觀一句文奉破眞言止觀誘餘佛菩薩誘餘佛菩薩

事

右至立破道者學生之所經也。非愚人之境界。加之誹謗正法、除却彌陀願、其報當墮那落。豈非癡闇之至乎

一 可停止以無智身對有智人以無智身對有智人退別行輩退別行輩好致諍論好致諍論

事

右論義者是智者之有也。更非愚人之分。又諍論之處

諸煩惱起。智者遠離之自由句也。自由句也。況於一向念佛之行人乎

一 可停止對別解別行人以愚癡偏執心稱以愚癡偏執心稱當棄置本業強嫌之事當棄置本業強嫌之事

右修道之習、各勤自行、敢不遮餘行。西方要決云、別解別行者、總起敬心。若生輕慢、得罪無窮。云云。何背此制乎。加之善導和尙大呵之之。未知祖師之誠、愚闇之彌甚也

一 可停止於念佛門號無戒行於念佛門號無戒行專勸姪酒食肉專勸姪酒食肉適守律儀者適守律儀者名雜行人名雜行人憑彌陀本願者憑彌陀本願者說曰勿恐造惡事說曰勿恐造惡事

右戒者是佛法大地也。衆行雖區同專之同專之。是以善導和尚舉自不見女人。此行狀之趣、過本律、制淨業之類。不順之者、總失如來之遺教。別背祖師之舊跡、旁無攝者歟

一 可停止未辨是非癡人離聖教癡人離聖教非師說非師說悉述私義悉述私義

妄企諍論被咲智者迷亂愚人

右無智大天拘此朝再誕猥述邪義既同九十五種異道尤可悲之

一可停止以癡鈍身殊好唱導不知正法說種々邪法教化無智道俗事

右無解作師是梵網之制戒也愚闇之類欲顯己才以淨土教爲靈能貪名利望禮越恐成自由之妄說誑惑世間人誑法之過殊重是輩非國賊乎

一可停止自說非佛教邪法爲佛法僞號師範說事

右各雖一人說所積爲予一身衆惡汗彌陀教文揚師匠之惡名不善之甚無過之者也

以前七箇條甄錄如斯一分學教文弟子等者頗知旨趣年來之間雖修念佛隨順聖教敢不逆入心無驚世聽因茲于今三十箇年無爲涉日月而至近年此十ヶ年以後無智不善輩時々到來非皆失彌陀淨業

又汗穢釋迦遺教何不加炳誠乎。此七箇條之内、不當之間、巨細事等多。具難註述、總如此等之無方慎不可犯。此上猶背制法輩者、是非予門人魔眷屬也。更不可來章庵。自今以後、各隨聞及、必可被觸之、餘人勿相伴。若不然者是同意人也。彼過如作者、不能噴同法根師匠、自業自得之理只在己身而已。是故今日催四方行人、集一室告命。僅雖有風聞、慥不知誰人失、愁歎逐年序、非可默止先隨力及、所廻禁遏之計也。仍錄其趣、示門葉等之狀如件

元久元年十一月七日

沙門源空

源空聖人

- 信空 感聖 尊西 證空 源智 行西 聖蓮 見佛
 - 導亘 導西 寂西 宗慶 西緣 親西 幸西 住蓮
 - 西意 佛心 源蓮 蓮生 善信 行空
- 已上二百餘人連署畢

聖人と起請連署の門人の圖

或時、聖人瘡病の事まします。種々の療方一切に驗なし。于時、月輪禪定殿下、おほきに周章したまひて安居院の僧都聖覺に仰て云、予善導大師の御影を圖畫して、聖人の貴前にして、供養をのべんとおもふ。願は嘯請に應じて唱導に赴と云云。彼請文に云、聖覺彼聖人同日同時瘡病仕事あり。雖然何不隨召。早扶病身、可致參勤。且師匠報恩の勤、可在此事。同者早且に可被行事、云云。仍辰一點に説法はじまりて未尅に締訖。聖人并導師、卽座に瘡病平復す。その講讃の大意に云、夫光明寺和尚、仰討本地者四十八願之法王也。十劫正覺之唱、有憑于念佛俯訪垂迹者、專修念佛之導師也。三昧正受之語、無疑于往生。本迹雖異、化導是一也。然我大師聖人、慕其遺風、興此眞宗、爰病患頻逼迫嚴體、劇苦忽惱亂正心、忻樂邦之徒衆、厭穢域庶類、孰不愁之。誰不憐之。就中、大法主禪定太閤殿下、聞彼舉動、寸心焦胸、愁其衰憊寢食既倦。因茲圖聖像、請平安。悉知丹誠、必垂哀愍、云云。諸天も隨喜し、

三寶も納受ありけるにや。啓白の時に當て、大師の御影前に異香薫す。尋常の匂にあらざりけり。事體嚴重也。僧都云、故法印澄慈は、雨をくだして名をあぐ。聖覺は此事奇特也とぞ。時の人不思議の思をなしけり

聖覺僧都の善導御影供養の圖

選擇本願念佛集者、月輪禪定博陸の救命に依て、元久元年甲子の春、聖人撰集したまふ。眞宗の簡要、念佛の奥義、攝在之者易諭。誠是希有最勝之華文、無上甚深之寶典也。涉年涉日、蒙其教誨之人、雖千萬、云、親云疎、獲此見寫之徒、甚最難。爾元久二年乙丑、聖人之恩恕兮、書寫選擇集。選擇以後是最初也 同年初夏中旬第四日、選擇本願念佛集内題字、并南無阿彌陀佛往生之業、念佛爲本と釋綽空外題下字とをば、聖人眞筆をもて令書給て、被奉授與之。善信聖人、同日、聖人の眞影を申預て圖畫す。依三允容也

選擇集を善信聖人に授
くの圖

又同年閏七月下旬第九日、彼眞影の銘は、これも聖人眞筆をもて、南無阿彌陀佛と、若我成佛、十方衆生稱我名號、下至十聲、若不生者、不取正覺、彼佛今現在、成佛當知本誓重願不虛、衆生稱念、必得往生の眞文とを令書給。又夢告あるによりて、綽空の字を改めて同日これも聖人眞筆をもて、名の字を令書授給。自爾已來、號善信云云。善信上人云、已書寫製作、圖畫眞影、提撕在耳、諷諫銘肝とて、恆に往事を慕たまひけり。總て門侶これひろしといへども、面授の芳言最慇懃也。相承の義勢、等倫に超たり。黒谷の遺流を酌と稱し、聖人の口授を稟とつゝの諸家、此一宗にをきて其自義を混す。殆今案と可謂。宛も往哲を忘たるに似たり。爰信聖人、獨嘉蹤に步で、かたく師教をまもる。他力發起の眞心、專先師説諫の義にまかせ、凡夫即往の眞行、豫末法濁惡の機をはぐむ。念佛往生の

髓腦相承心中にたくはへ、彌陀他力の骨目血脈一身にあり。厭穢欣淨の道俗、願は古賢連續の正義を憑べし。崇信耽行の老少、必自由無窮の邪執を捐よとなり

自らの眞影に題せらる
の圖

園城寺の碩學法務大僧正公胤、選擇集を破せんが爲に二卷の書を造て、淨土決疑鈔と題す。彼書にことに一向專修の義を難じて云、法華に即往安樂の文あり、觀經に讀誦大乘の句あり、法花を轉讀して極樂に往生せんに、なにの妨かあらん。然に讀誦大乘を廢して、たゞ念佛を附屬すと云云。これ大なる謬也と。聖人これを披つゝ、こゝにいたりてみはてたまはず。闕て云此難非也。まづ難破の法、すべからく其宗義を知て後に難すべし。而今、淨土の宗義にくらくして僻難をいたさば、誰か敢て破せられん。夫淨土宗の意は觀經前後の諸大乘經を取て、みなことごとく往生の行の内に攝入せり。其中に、なんぞ法花經ひとりもれんや。觀

經にあまねく攝入する意は、念佛に對して廢せんがためなりと。公胤これをつたへ聞て、唇を閉てものいはず

國城寺公胤大僧正、淨土
決疑鈔を造るの圖

順徳院處胎の間、或時、公胤は加持のため、聖人は説戒のために、おなじく參す。奉行人遅參によりて、事いまだをこなはれざる以前に、不慮に二人一處に參會して、しばし淨土の法門を談じ、兼て諸事にわたる

公胤大僧正と共に參内
邂逅の圖

公胤、坊に歸て後、弟子等に語て云、今日法然房に對面して二の所得あり。一にはいまだきかざることをきく。二にはもとしれることのひがめるをあらたむ。實の宏才也けり。見立たる所の淨土法門聖意に違すべからず。彼聖人の義をそしれるは大なる過なりといひ

て、すなはち淨土決疑鈔を燒をはりぬ

公胤淨土決疑鈔を燒くの圖

抑一向專修の義を難することは公胤のみにあらず。餘人又難じて云、たとひ諸行往生をゆるすとも、往生のさはりとなるべからず。何強に一向專念といふや。おほきなる偏執也云云。聖人これを聞て云、如斯難する者は、淨土の宗義をしらざるものなり。其故は、釋尊は一向專念無量壽佛ととき、善導和尚は一向專稱彌陀佛名と釋したまへり。經釋如此。源空もし經釋をばなれて、わたくしに義をたてば、まことに責るところのごとし。若人一向專念の義を難ぜんとおもはゞ、釋尊善導を難すべし。その過またく我身にあらずと云云又人難じて云、諸教所讚多在彌陀なるがゆへに、諸宗の人師かたはらに彌陀をほめ、あまねく淨土をすむ。このゆへに前代往生の人おほし。此宗をたてずといふとも、念佛往生をすゝめんに、なにの不可あらん。ひとへにこれ勝他也と云云。聖人聞て云、淨土宗をた

つる意は、凡夫の報土に生ずることをあらはさんがためなり。其故は、天台の教相によらば、凡夫の往生をゆるすといへども、身土を判すること至てあさし。若法相によらば、身土を判することふかしといへども、凡夫の往生をゆるさず。諸教の所談、まことに巧なりといへども、總て凡夫の報土に生ずることをゆるさず。若善導和尚の釋義によりて淨土宗をたつるとき、僅に一世の念佛力によりて、界内魚淺の凡夫忽に報土に生ずる義、こゝにあきらけし。このゆへに別して淨土宗をたつと云云

聖人說法の圖

若又人ありて、いまたつるところの念佛往生の義、いづれの教、いづれの師の意ぞといはゞ、答べし。眞言にあらす、天台にあらす、華嚴にあらす、三論にあらす、法相にあらす、たゞ善導和尚の意に依て淨土宗をたつ。和尚はまさしく彌陀の化身也。所立の義、あふぐべし。信すべし。またく源空が今案にあらすと云云

蓋聞、上人黒谷の松扉を辭して吉水の草庵に住したまひしより以來三十餘年、ひろむるところは彌陀淨土の法門、つとむる所は本願稱名の妙行也と。上一人椒房よりはじめて、下、國宰黔首にいたるまで、みな他力往生の教風にそみ、聖衆來迎の瑞雲に乗ぜずといふことなし、まさにしるべし、唐家には導和尚、和國には空聖人、それ淨土宗の元祖也。凡聖人在世の間、諸人靈夢これおほし。或人は、聖人釋迦如來也とみる。或人は聖人彌陀如來也とみる。或人は聖人大勢至菩薩也とみる。或人は聖人文殊師利菩薩也とみる。或人は聖人道綽禪師也とみる。或人は善導大師也とみる。或人は聖人大なる赤蓮華に坐して念佛したまふとみる。或人は天童四人、聖人を圍遶して管絃遊戯したまふとみる。或人は聖人の吉水の禪房をみれば、瑠璃の地にしすきとあり、瑠璃の橋をわたせりとみる。取レ詮 註レ之

如斯の奇特、夢にも覺にもこれおほし。不可稱計

聖人亦蓮華に坐し天蓋に圍繞せらる奇瑞の圖

聖人或時月輪殿に參じて、淨土の法門閑談數刻、座をあたくめられて退出の時、禪定殿下、庭上にくづれおりさせたまひて、稽首禮拜、暫ありて大に蕭然として驚おきあがりてのたまはく、をのくみずや、聖人地上たかく、蓮華をふみて歩たまふ。又頂上に金色の圓光あらはれて、赫奕たりと。于時傍に侍る戒心房右京大夫入道 本蓮房 中納言阿闍梨尊玄 二人ともにみたてまつらずと啓す。歸依年ふりたりといへども、彌陀想をなしたまひけり

頭光踏遊の奇瑞を月輪殿拜するの圖

七

聖人、淨土眞宗の興行ますく、築昌し、貴賤上下の

歸依いよく純熟す。爰太上天皇號三後鳥羽 今上號三上 院諱 聖曆承元丁卯 仲春上旬の比、南北の學徒、顯密の

爲仁 爲仁 爲仁 爲仁 爲仁 爲仁 爲仁 爲仁 爲仁 爲仁

棟梁、淨土の一門弘興、聖道の諸宗廢滅の因縁、この事にあり。すべからくその根本に付て空聖人を坐すべしといふことを會議しつゝ、奏聞にをよぶ。そのうへ門弟の中に不慮の無實、内々その聞ありければ、事の計會ありふしあしくて、南北の學徒の奏事左右なく勅許。すでに罪名の議定に及で、はやく遠流の勅宣をくだされけり。聖人の罪名藤井元彦男、配所土佐國備後 春秋七十五、この外門徒、或は死罪、或は流罪、流罪の人々淨聞房備後 禪光房伯耆 澄西伊豆 法本房佐渡 成覺房阿波 幸西阿波 俗姓物部云云 善信房親鸞 越後國 罪名藤井善信、善惠房但無勤寺前大僧正被申預之 已上流罪師弟共八人。善綽房於攝津國 西意判官、不知實名沙汰 性願房、住蓮房、安樂房已上 近江國馬淵一誅、二位 法印尊長沙汰云云 已上死罪四人。この人々誅せらるるとき、面々に不可思議の奇瑞をあらはす。或はながれいづる所の血より青蓮華出生す。或は頭おちて後、合掌を改て念珠をくること百八の念珠をもて三反と云云 或は頭より光をはなち、おつるところの頸、高聲念佛

十餘遍、これをとなふ。或は口より蓮華出生す。種々奇特の事等ありけりとなん

往蓮安樂の處刑と其の
奇瑞の圖

承元々年三月上旬の比、聖人すでに配所に赴ましますべきになりければ、月輪禪定殿下の御沙汰として、法性寺の小御堂にわたしたてまつりて逗留。をなじき三月十六日都をいでたまふ。信濃國の住人角おりの成阿沙彌隨連等、力用器重ありければ、力者の棟梁として、われもくと六十餘人、御輿にしたがひたすけてまつる。既に進發のとき、信空上人密に申て云、衰邁の身をもて遠境の旅に出給事、忽に師といきながらわかれなんとす。相去事幾許哉。各天の一涯にあり、山海を隔て又ながし。音容共に今にかぎれり。再會安相憑ん。愁らくは師、所犯なしといへども流刑の宣をかうぶれり。跡にとどまる身のため、ひとり何の面かあらんと云て、胸を打て歎息す。聖人云、齡すでに八

旬にせまれり。おなじ帝畿にありとも、ながくいきて誰かみむ。但因縁つきずば何又今生の再會無らんや。

驛路はこれ聖者のゆく所なり。唐家には一行阿闍梨、和國には役優婆塞、謫所は又權化の栖砌也。晨旦には白樂天、吾朝には菅承相、上古の英聖猶爾なり、況末世の愚惑哉。先蹤耳にあり、恥とするに足らず、愁とするによばず。この時に當て邊鄙の群衆を化せんと莫大の利生也。但いたむ所は、源空興する淨土の法門は濁世衆生の決定出離の要道なるがゆへに、守護の天等定で冥瞰をいたさん歟。若爾者、貧道が流罪、弟子が住蓮安樂斬刑、如是の事、前代いまだきかず。事常篇にたえたり。因果のむなしからざること、いきて世に住せば思合べき也と云云。又率爾をかへりみず、一人の門弟に對して一向專念の義をのべたまふ。御弟子西阿、推參して云、如此の御義不可然おぼえ侍りと。聖人云、汝經釋をみずやと。西阿申て云、經釋はしかりといへども、世間の機嫌を存するばかりなりと。聖

人又云、我たとひ死刑にをこなはるとも、更に變ずべからずと云云。其氣色最熾盛也。みたてまつる諸人、涙をながし隨喜せずといふことなし。又後に信空上人云、先師の言相違せず、はたしてその報あり。如何者、承久の騒亂に、東夷上都を靜謐せしとき、君は北海の島の中にましゝて、多年心をいたましめ、臣は東土の路の邊にして一時に命をうしなふ。先言不違、後生宜聞云云。凡念佛停廢の沙汰あるごとに凶事きたらずといふことなし。人みなこれをしれり。羅縷にあたわず、筆端に載がたし。然共前事のわすれざるは後事の師也といふをもてのゆへに、世のため人のため、憚あるに似たれども、聊これを記す

力者法性寺小御堂に參勤と遠流への首途の圖

聖人都を出たまふ日、公全律師聖信上人も、配所肥後國是也。におもむきけるが、律師の船はさきに出けるが、聖人

くだらせたまふと聞て、しばらくをさへて、聖人の御

船にのりうつりて恩顔にむかひて落涙千行萬行なり。聖人は念佛して詞もいだしたまはず。たゞうちをみたまふばかりなり。さるほどに律師の船よりとくゝとすゝめれば、餘波おほくて、もとの船にのりてけり

聖信上人と共に船出の圖

住蓮、安樂等の四人は、物恩の沙汰にて左右なく誅せられをはりぬ。其外なを死罪あるべしなときこえける中に、普信聖人も死罪たるべきよし風聞す。それ彼聖人は、いまだ宿老にをよばずといへども、師の提携にもたへ、宗の興義をも傳て、世譽等倫にこえ、智徳諸方にあまねかりければにや、兼て天聽にそなはり、先て雲上にきこゆ。まめやかに徳用やはたしけん、君臣ともに猶豫のうへ、六角前中納言親經卿、年來一門の好を通ぜられけるが、おりふし八座にて、議定の砌に列て申有られけるによりて、遠流にさだまりにけり。則配所越後國府に赴まします。彼黃門侍郎は家門累代

の正統、朝廷無雙の忠臣にて、才藝和漢にわたり、勤勞寄をもし。内外の兩典をかんがへ、古今の蹤跡を訪て、諸卿の意見を申破られる。ゆゑしくきこえける
となん

宮中會議の圖

聖人、攝津國經島に一宿したまひければ、村里の男女老若まいりあつまりけり。其時、念佛のすゝめいよ／＼ひろく、上下結縁かすをしらす。この島は、六波羅の大相國濟盛公一千部の法華經を石の面にかきて、おほくの上船をたすけ、人のなげきをやすめんためにつきはじめられけり。いまにいたるまで、くだる船にはかならず石をひろひてをくならひなり。利益まことにかぎりなき所なり

經島にて庶民教化の圖

室の泊に付給ければ、遊君どもまいりあつまりて、往生極樂の道、われも／＼とたづね申けり。昔小松天

光孝天皇
皇是也 八人の姫宮を七道につかはしけるより、遊

君いまにたえず。或時、天王寺の別當僧正行尊拜堂のためにくだられける日、江口神崎の遊女、船をちかくさしよせければ、僧の、御船にみぐるしくといひければ、神樂をうたひいだし侍りける。有漏地より無漏地

にかよふ釋迦だにも羅睺羅が母はありとこそきけと。

僧正めで／＼さま／＼の纏頭し給けり。中比の事にや。

少將の上人中河本願
實範ときこえし人、彼泊をこぎすぎたまふことありけるに、遊女船をさしうかべてくらきよ

りくらきみちにぞ入ぬべき、はるかにてらせ山のはの月と、くりかへし／＼三遍うたひて、こぎかへりけるこそ哀におぼえ侍れ。又同泊の長者とねぐる、病に沈けるとき最後の今様に、なにしに我身のおひにけん、おもへばいとこそかなしけれ、今は西方極樂の、彌陀のちかひをたのむべしと、うたひければ、紫雲海にそびき、音楽松にこたへて、往生を遂けり。古もこの泊には、かゝるためしども侍れば、いまもこの聖人にみ

ちびかれたてまつらんことうたがひなしとて、よろこびつゝまいりける中に、修行者一人あり、問たてまつりて云、至誠等の三心を具し候べきやうは、いかゞおもひさだめ侍るべきと。聖人答て云、三心を具するこ

とは、たゞ別の様なし。阿彌陀佛の本願に、我名號を稱念せば、かならず引接せんとおほせられたれば、決定して攝取せられたてまつるべしとふかく信じて、ころに念じくちに稱するに、ものうからず、すでに往生うちかためたるおもひをなして、歡喜のしるしには南無阿彌陀佛々々々々となへゐたれば、自然に三心具足のいはれあるなり。三心とはたゞ本願をうたがはざる一心をいふなり。わづらはしく三の心をほかにもとむべきにはあらざるなり。また在家無智の輩はさほどまでおもはねども、念佛申ものは極樂にむまるなればとて、つねに念佛をだにまふせば、三心は具足するなり。さればこそ、いふにかひなきものどもの中にも、神妙の往生はする事にてあれ、たゞうらくと

本願をたのみて、南無阿彌陀佛と稱すべきなりと、修行者領解しつゝ、隨喜ふかゝりけり

室の泊にて遊君など教化の圖

聖人の配所は、土佐國とさだめられけども、讃岐國塩飽庄は御領なりければ、月輪禪定殿下の御沙汰にてひそかに彼所へぞうつしたてまつられる。彼庄の預所、駿河守高階の時遠入道西仁の館に寄宿、御教書の旨、等閑ならざれば、なじかは疎にしたてまつるべき。きらめきもてなしたてまつる。温室結構し、美膳調味しつゝ、其間の經營いかにかなとぞ振舞ける。近國遠郡の上下、傍庄隣郷の男女群集して、世尊のごとくに歸敬したてまつりけり。一向事念なるべきやうをよみたまひける歌

阿彌陀佛といふよりほかは攝津國のなにはの

こともあしかりぬべし

又法門のついでに、くちすさびたまひける句に云、

名利は生死のきづな、三途の鐵網にかゝる、稱名は往生のつばさ、九品の蓮臺にのぼる

時遠入道西仁、問たてまつりて云、自力他力といふこといかゞ心得侍るべき。答て云、源空は殿上へまいるべき器量にてはなけれども、上よりめせば二度までまいりたりき。これは、わがまいるべき式にてはなけれども、上の御力なり。まして阿彌陀佛の御力にて稱名の願にこたへて引接せさせたまはむ事を、なにの不審かあらん。自身の罪をもければ、無智なれば佛もいかにしてすくひたまはんなどおもはんは、つや／＼佛の願をしらざる人なり。かゝる罪人をやす／＼とたすけんれうにおこしたまへる本願の名號をとなへながらちりばかりもうたがふこゝろあるまじきなり。十方衆生の願の中には、有智無智、有罪無罪、善人惡人、持戒破戒、男子女人、三寶滅盡ののちの百歳までの衆生みなこもれり。かの三寶滅盡の時の念佛者にくらぶれば、當時のわ入道などは佛のごとし。かの時は人壽わ

づかに十歳、戒定惠の三學、名をだにもきかず。いふばかりもなきものどもの來迎にあづかるべき道理をしりながら、わが身のすてられたてまつるべきやうをばいかゞしてあんじいだすべき。たゞ極樂のねがはしくもなく、念佛の申されさらむのみこそ、往生のさはりにてはあるべけれ。かるがゆへに、他力の本願とも、超世の悲願ともまふすなりと。時遠入道、いまこそ心得侍りぬれとて、手をあはせてよろこびけり

塩佃庄高階邸にて歌待
うけらるの圖

八

御弟子等、いざや當國にきこゆる松山みんとてゆきければ、聖人もわたり給けり。眺望のいとおもしろさに、人々一首の歌よみけるに、聖人

いかにしてわれ極樂にむまれました彌陀のちかひのなき世なりせば

人々この御詠こゝろえられず、當所の景氣、若はひ

なのすまひなどこそ、あらはしたく侍れ、これは其儀もなしと難じ申ければ、さもあらばあれ、地形其興をもよほすに、心のいみじくすめば、かくいはるゝなりとおほせられければ、みな泣にけり

松山にて観櫻の圖

聖人、淨土の法門興行に付て、諸宗の學者、邪幢をさゝげて吹毛の咎をうたへ、萬乘の至尊、虚名によりて師弟の斷罪にをよぶ。然共、智徳四海にうるほひ、行學一朝にあまねかりしかば、片州に身ををへんこと佛陀の冥鑿そのはゞかりありとて、いそぎ召かへさるべきよしきこえけり。されどもやがて其沙汰もなし。そのうち承元三年八月の比、まづ攝津國勝尾山にうつさる。かしこは勝如上人往生の瑞地、幽閑無雙の靈寺也。當山の住侶念佛を修し、諸方の老若淨土に歸しければ、このところの利生又大切なりとて、をのづから二とせの春秋をぞくりたまひける

恩免を蒙り攝津勝尾山へ隠棲の圖

當山に一切經ましまさるよきこえければ、興隆のためにとて、聖人所持の經論をわたしたまふに、寺内の衆徒上下七十餘人、むかへたてまつらんに參向す。古老の住侶等、隨喜悅譽して、寶蓋をさゝげ花香を供して、賞翫きはまりなかりけり。剩安居院の法印聖覺を囑請して、唱導の師として開題供養ありけり。其詞に云、今一代を分別するに二種あり、一には聖道、二には淨土なり。彼聖道門といふは、智恵を極て生死をはなる。今淨土門といふは、愚癡にかへりて極樂にむまる。二門共に一佛の所説也といへども、廢立參差し、天地懸隔也。是則大聖の善巧利生方便也。常途の教義をもて、狠く難すべからず。それ愚癡にかへると云は、法藏比丘の昔の時、成就衆生の願を立たまひしおり、都て罪障深重のたぐひ、濁世末代の愚鈍の族、生死の盡期なからんことをふかく悲て、五劫思惟の室

の内に觀念坐禪布施持戒の煩しきもろく、の行を聞て
行易修の稱名をもて本願として、あまねく一切の下
機に應じたまへり。一念なを得生の業なり、況多念を
や。五逆むねと正機なり、況輕罪の人をや。因之超世
の誓願となづけ、又は不共の利生と稱す。ふかく其願
を信じて名號を稱念すれば、智惠愚癡を論ぜず、持戒
破戒をきはらず、十は十ながらむまれ、百は百ながら
むまる。加之釋迦感勸の附屬、諸佛一味の證誠は、た
ゞ名號にかぎりて觀佛に通ぜず。指方立相して、敢て
ふかきことはりをあかさず、無智の義文、ことはり必
然也。只信じて行する外には、義なきをもて義とす。
但もとより智惠ありて、彌陀の内證外用の功德、極樂
の地下地上の莊嚴等を、これを觀ぜんをば、かならず
しも遮せず。いま論するところは、義理觀念をもて宗
として、但信稱名の行者を、かたくなはしくこれを非
するを解するなり。かの聖道門の先徳明哲、淨土門に
入て宗の意をあきらめて、その心をえては、本願の奥

旨、往生の正業、徧口稱念佛なりとみ披たるうへは、
淨土經所説の觀佛三昧すら、なをもて廢す。いかにい
はむや他宗のふかき觀にをきてをや。たゞ稱名の外に
は、その他事をわする。その體、惘然として、すなは
ち愚癡に似たり。かるがゆへに淨土の機は愚癡にかへ
るとは云也。それ八萬法藏は八萬の衆類をみちびき、
一實眞如は一向專稱をあらはす所也。用明天皇の儲君
御誕生に南無佛ととなへたまふ。その名をあらはさず
といへども、心は彌陀の名號也。慈覺大師の傳燈は、
經文をひきて寶池の波に和し、空也上人の念佛常行は
聲をたて、徳をあらはし、永觀律師の往生の式は、七
門を開て一偏につかす。良忍上人の融通念佛は、神祇
冥道には勸たまへども、凡夫の望はうとくし。爰我
大師法主聖人、行年四十三より念佛門に入て、あまね
くひろめたまふに、天子の嚴き玉の冠を西にかたぶけ
月卿のかしこき金の釵を西にたゞしくす。皇后の媚た
るは、韋提希の跡ををひ、傾城の好は、五百の侍女を

まなぶ。しかるあひだ富はをこりてもてあそび、貧はなげきて友とす。農夫は鋤をもて敷をしり、驛路は念佛をもて鳥に擬し、舷をたゞく海上には念佛をもて魚をつり、鹿をまつ木下には念佛をもてひづめをとる。

雪月花をみるひとは、西樓に目をかけ、琴詩酒にふける輩は、西の枝の梨をおる。彌陀をあがめざるをば瓊瑾とし、念珠をくらざるをば恥辱とす。花族英才なりといへども、念佛せざるをばおとしめ、乞丐非人なりといへども、念佛するをばもてなす。故に八功德水のうへには、念佛の蓮池にみち、三尊來迎のいとなみには、紫臺をさしをく隙なし。加之我等が念佛せざるは彼池の荒廢也。我等が欣求せざるは、その國の愁訴也。國のにぎはひ佛のたのしみ、稱名をもてさきとす。人のねがひ我ねがひ、念佛をもて職とす。仍當座の愚昧公請に仕てかへる夜は、念佛を唱て枕とし、私宅をいでゝわする日は、極樂を念じて車をはす。これみな聖人の教誡、過去の宿善にあらずや。たづねみれば彌陀

はすなわち、應聲來現の如來、受用智恵の眞身也。名號は又五劫思惟の肝心、願行所成の總體也。故にこれを信じて稱念すれば、念々に八十億劫の生死の罪障を滅し、譬々に無上の大利を獲得す。このゆへに念佛の衆生は、一世に則相好の業因をうへ、現身に飽まで福智の資糧を蓄て、愚癡暗鈍の凡夫なれども、裏には六度萬行を修する菩薩とおなじ。もしゝからずば、争か有漏の穢土をいでゝ、無爲の報國にまいりて、凡夫の性をすてゝ、直に法性の身を證せんや。定で知ぬ、彌陀の本願といふは萬機を名號の一願におさめ、千品を口稱の十念にむかへ、おなじく寶池の蓮に託生せしめ共に無生の益を證得す。五逆をもきはらず、謗法もすてず、しるべしとて、鼻をかみとゞこほりければ、寺僧結衆、涙をながし袖をしぼりけり。昔戒成王子の大般若供養には、草木悉靡けり。今聖人念佛の勸進には道俗みな淨土をねがひけり

龍顏逆鱗の爵をやめて、鳳城還住の宣を下されければ、建暦元年^{辛酉}十一月十七日に入洛す。宣旨に云、左

辨官下、土佐國、早可歸流人藤井元彦男、右件元彦、

去承元々年三月日、配流土佐國、而今依有所念行被

召歸者某奉勅宣宜承知依宣行之。建暦元年八月日

左太史小槻宿禰國實辨云云。院宣は權中納言藤原光親

或岡崎中納言
甘範光卿

書下されけり。これによりて、聖人歸京

のよしのしりければ、一山みななごりをおしみつゝをくりたてまつりけり

京洛へ還歸の圖

聖人京着のちちは、洛陽東山大谷に居たまひて、な

お淨土の法門興行、いにしへにたがはず。諸方の歸依

いやめづらなり。吉水の前大僧正慈圓慈鎮
和尚是也の御沙汰に

てすへたてまつられけるとぞ。昔釋尊、切利の雲より

下たまひしかば人天大會よろこびをがみたまつりき。

いま聖人、南海の浪にさかのぼりたまへば、道俗男女

供養をのぶ。貴賤群集すること一日一夜のうち一千餘人と云云。このとき人ありて、法門たづね申けるに、

おほせられて云、決定往生の人にとりて、二人のしな

あるべし。一には身に威儀をそなへ、口には念佛を相

續し、心には本誓を仰で、四威儀の振舞に付て遁世の

相をあらはし、三業の所爲出要に備たり。外に賢善精

進の相あれども、内に愚癡懈怠の心なく、行儀をまか

らず、渡世をもうかはず、心かたましくして、利養

をへつらふこともなく、名聞のおもひもなく、貪瞋邪

偽もなく、奸詐百端もなく、雜毒のけがれもなく、不

可の失もなく、まことに外儀も精進に、内心も賢善に

内外相應して一向に往生をすかふ人もあり。これ決定

往生の人なり。かゝる上根の渡世者は末代にまれなる

べし。二には外にたうとくいみじき相をほどこさず

内に名利の心もなく、三界をふかくうとみて、いとふ

ころ肝にそみ、淨土をこひねがふころ髓にとおり

本願を信知して胸のうちに歡喜し、往生をねがひて念

佛をよこたらず。外には世間にまじはりて世路をわしり、在家にとまひて利養にかたどり、妻子に隨逐して、行儀さらに遁世のふるまひならず。しかりといへども、心中には往生のころさし片時もわすれがたく身口の二業を意業にゆづり、世路のいとなみを往生の資糧とあてがひ、妻子眷屬を知識の同行とたのみて、よはひの日々にかたぶくをば、往生のやうやくちかづくぞとよろこび、命の夜々におとろふるをば、穢土のやうやくとをさがるぞとこゝろえ、命のをはらん時を生死のをはりとあてがひ、形をすてん時を苦惱のをはりと期し、佛はこの時に現前せんとちかひて、影向を柴の樞にたれ、行者はこの時ゆかんと期して、結跏を觀音の蓮臺にまつ。このゆへにいそがしきかな往生、とくこのいのちのはてねかし。こひしきかな極樂、はやくこの命のたえねかし。くやしきかなわが心、生死のひとやを栖として、惡業のためにつかはるゝこと。うれしきかなわが心、無爲の城にかへり行て、四生の

あるじとあふがれんこと。かやうに心のうちをすまして廢忘することなく、たとひ縁にあへば、よろこびもあり、うれへもあり、おかしきこともあり、はづかしき事もあり、いとおしきこともあり、ねたきこともあり、かやうの事あれども、これは一旦の夢のあひだの穢土の習と心えて、これがためにまぎらかされず、いよゝゝいとほしく、旅のみちにあれたるやどにとどまりて、あかしかねたる心地して、よそめはとりわき後世者ともしられず、よの中にまぎれて、たゞ彌陀の本願に乗じて、ひそかに往生する人あり。これはまことの後世者なるべし。時機相應したる決定往生の人なりこの二人の心だてを彌陀は至心とをしへ、釋迦は至誠心ととき、善導は眞實心と釋したまへりとぞ

吉水の庵室に入らるの圖

聖人或時大谷の坊にて、西の方はるかに眺望したまひつゝ、くちすさせたまひける歌

しばの戸にあさゆふかゝるしら雲をいつむら
さきのいろとみなさん

大谷の坊にて詠歌の圖

同二年正月二日より、老病不食、ことに増氣せり。
すべてこの三四年、耳目懵暗として、色をみこるをき
くこと、ともにつまびらかならず。而に終焉の期にの
ぞみて二根明利なること昔にたがはず、餘言をまじへ
ず、ひとへに往生の事を談じ、高聲念佛たゆることな
し。同三日、或御弟子問て云、今度の往生決定歟。答
て云、我もと極樂にありし身なれば、定てかへりゆく
べしと。或時弟子に告て云、我本天竺にありて、聲聞
僧に交て、頭陀を行じて化度せしめき。今粟散片州の
堺に生を受て念佛宗を弘む。衆生化度のために此界に
たびく來き。十一日の辰尅に、聖人起居て高聲念佛
したまふ。聞人みな歡喜の涙をながす。弟子等に告て
のたまはく、高聲念佛すべしと。阿彌陀佛顯現したま
ふなり。この佛の名號を稱すれば本願力によるがゆへ

に、一人も往生せずといふことなしと云て、念佛の功
徳を讚嘆し、彌陀の本誓を宣説したまふこと、宛も昔
のごとし。聖人又云、觀音勢至等の菩薩聖衆、現前し
たまへり。をのくおがみたてまつるやいなやと。弟
子等おがみたてまつらずと云云。これをきよていよいよ
念佛すべしとすゝめたまふ。又三尺の彌陀の像を病
床の右にすへたてまつりて、此佛拜したまふべしと。
ときに聖人、指をもて空をさしてのたまはく、この佛
の外にまた佛おはします。おがむやと。すなはちかた
りていはく、凡この十餘年より以來、念佛功積て極樂
の莊嚴をよび佛菩薩をみたてまつることこれ常恆の事
なり。然共人にこれを云す。いま終焉ちかきにあり、
故にこれをしめす。又御弟子等、佛の御手に五色の糸
をかけて、これとりたまへと。聖人云、かくのごとき
のことは、これ常の人にとりてのことなり、我身にを
きては不可然とて、つゐに取たまはず、廿日の巳時に
紫雲房の上に垂布せり。其中に圓形の雲あり、繪像の

圓光のごとくして五色鮮潔なり、路次往反の人、處々にこれをみる。弟子まふさく、このうへに奇雲まさにつらなれり。往生のちかづきたまへるか。聖人きゝてのたまはく、哀哉々々、我往生の瑞相は、たゞ一切衆生をして念佛を信ぜしめんがためなりと。未時にあたりて、ことに目をひらきて西方へみをくりたまふこと五六遍、そのとき看病の人、問て云、佛のあらはれたまふかと。答て云、爾也と。おほよそ明日往生のよし、夢想の告によりて驚來て終焉にあふもの五六許輩也。かねて往生の告をかふる人々、前權右中辨藤原兼隆朝臣、權律師隆寬、白河准后宮女房、別當入道惟方卿、尼念阿彌陀佛、坂東尼、陪從信賢、祇陀林經師、一切經谷住僧^{大進}、薄師眞清、水尾山樵夫、このほか紫雲をみる人、數をしらす。又彌陀の三尊、紫雲に乗じて來現したまふをみる人々、信空上人、隆寬律師、證空上人、空阿彌陀佛、定生房、勢觀房。又七八年さきだちて兼隆朝臣夢にみる。聖人御臨終には、光明遍照

の四句の文を唱たまふべしと。爰聖人廿三日以後三日三夜、或は一時、或は半時、高聲念佛不退のうへ、ことに廿四日の酉尅より廿五日の巳尅にいたるまでは、高聲念佛體を責て無間なり、無餘なり。弟子五六人、番々に助音す。助音の人々は窮屈にをよぶといへども暮齡病惱の身、勇猛なることは奇特の事也。まさしく最後^{廿五日}午正中^中にのぞむとき、年來所持の慈覺大師の九帖の袈裟をひきかけて、光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨の文を誦して頭北面西にして念佛の息絶畢ぬ。音聲止て後、猶唇舌をうごかすこと十餘遍也。于時春秋滿八十、夏臘六十六、身體柔軟にして容貌つねのこととし。惠燈すでにきえ、法舟又没すとかなしみあへることかぎりなし。音樂窓にひびく。歸佛歸法の耳をそばだて、異香室にみてり。信男信女の袂に薫ず。或は紫雲を拜する人、或は靈夢を感じる輩不可勝計。筆墨にひまなく、委註にあたはず。三春何なる比ぞ、釋尊滅をとなへ聖人滅をとなふ。彼は二月中旬の五日、是

は正月下旬の五日。八旬何なる年ぞ、釋尊滅をととなへ
聖人滅をととなふ。彼も八旬也、是も八旬也

聖人の病臥、臨終來迎
と諸奇瑞を仰ぐの圖

伏以釋尊圓寂の月にすゝめること一月、茶毗の煙こ
となりといへども、彌陀感應の日にしりぞくこと十日
利生の風これ同哉。觀音垂迹の濟度、勢至方便の善巧
以如斯。悲哉貴賤哀慟して考妣を喪せるが如し。弟子
等哽絶して坊の東に埋畢ぬ

遺骸を埋葬の圖

九

門弟等、常の式に任て中陰の勤行心肝をくだき、七
日ごとに供佛施僧のいとなみ傍例のごとし

初七日、不動尊、導師信蓮房、施主大宮入道、前内府
被_レ樺諷誦云、夫以先師在生之昔、弟子遁朝之暮、擬一
心精進之誠、受十重清淨之戒、故憑濟度於彼岸、敬修誦
誦於此砌、莫嫌小善根、必爲大因緣、早爲飾蓮臺之妙果、

茲所仰、浦年之逸韻矣。敬白。建曆二年二月日とぞ
かゝれける

二七日普賢菩薩導師求佛房

建曆二年二月三日の夜、入道別當惟方卿の娘粟田口
の禪尼の夢にみるやう、聖人殯葬のところに詣れば
八幡宮の御戸を開くかと覺ゆ。御正體等その内におは
しますとみるに、さては聖人の葬送のところにはあら
ず、八幡宮なりけりとおもふほどに、傍の人云、彼御
正體をさして、あれこそ法然聖人御房の御正體よとい
ふ。これを聞て身毛いよだち、汗ながされてさめぬ。

此夢又奇特也。抑神功皇后元年^{辛巳}大菩薩誕生の昔、八
の幡ふる故に八幡大菩薩と號す。聖人誕生の今、兩の
幡くだる。尤その表示ある歟、彼大菩薩の本地を行教
和尚みたてまつらんと祈請ありしかば、袂の上に阿彌
陀如來うつりたまひき。然者彼をもてこれを思に、聖
人彌陀如來の應跡といふこと明也

三七日彌勒菩薩導師住眞房、弟子湛空、嚙囁をさゝ

く。義之が石摺一紙面十二枚八十餘これに一首の歌を
相副けり

にしへよしゆくべきみちのしるべせよむかし

も鳥の跡はありけり

四七日正観音導師法蓮房、弟子良清願文云、先師當
末法萬年之始弘彌陀一教之勝智惠提劍、莫耶之鋒非
利。戒行瑩珠、摩尼之光比明。抑尊靈先逝川兮四五
日、遠人望來迎之雲。樂新墳兮兩三句。遺弟聞梅檀之
匂。爰飾誠諦之言。偏祈菩提之果。揭焉旨意彌以服膺云云
五七日地藏菩薩道師權律師隆寬。弟子源智願文云、
彩雲掩軒、近見遠見而來集。異香滿室。我聞人間、共
嗟嘆云云

六七日釋迦如來導師法印權大僧都聖覺、大法主無動
寺前大僧正慈圓被捧諷誦云、佛子聖人存日之間、時々
談法文常用唱導。結縁之思不淺。濟度之願是淵。因茲
當六七日之忌辰、聊修諷誦、祈三菩提之果位、敬鳴華籥。
加之擎法衣、送往生之家、解脫之衣是也。調法食、備化

城之門、禪悅之食是也。然則幽靈答彼平等之願、必往生
上品之蓮臺、佛子依此丹誠之志、預最初引接之得益矣。
敬白

七々日彌陀如來并兩界曼荼羅導師三井僧正公胤、法主信空願文云

先師廿五歲之昔、弟子十三歲之時、忝結師資之約契、久
積五十之年序。一旦隔生死、五廻之腸欲斷。自宿寂山
黑谷之草庵、至移東都白河之禪房、其間云、撫育之恩云、
提携之志、報謝之思、昊天罔極。是以顯彌陀迎接一軀之
形像、安胎藏金剛兩部之種子、又摺寫妙法蓮華經、書寫
金光明經、各一部以開眼以開題。一心懇志、三寶知見矣
敬白。とぞかゝれける。凡此間、佛事をいとなみ諷誦
を捧る人、敷をしらず。彼僧正唱導をのぞまれける事
は、先年淨土決疑鈔をやくといへども、聖人嚴重の往
生を聞き、かさねて彼罪咎を懺悔せんがためなり。佛
經講讀の、ち、具に決疑鈔の元起をのべ給て云、公胤
今日參勤の本意は、偏に聖人を謗難せし重罪を懺悔せ
んがためなりと云云。座下の聽衆隨喜せずといふこと

なし。然後、建保四年^{丙子}四月廿六日の夜、聖人公胤に告たまふ夢想に云

往生之業中 一日六時尅 一心不亂念 功驗最第

一 六時稱名者 往生必決定 雜善不決定 專修

決定業 源空爲孝養 公胤能說法 感喜不可盡

臨終先迎接 源空本地身 大勢至菩薩 衆生爲化

故 來此界度々

聖人中陰中の法要の圖

彼公胤僧正 同四年閏六月廿日、禪林寺の邊にして往生を遂畢ぬ。種々の瑞相これをしめす。紫雲はるかにそびき。音楽ちかくきこゆ。諸人目を驚し、親疎耳をそばだつ。謳歌すること仙洞後宮にをよび、歸敬すること京洛邊土にあまねかりけり

公胤僧正の往生と瑞相の圖

延暦寺の梨本は、實相圓融の房舎、青蓮院は皇胤譜代の貴跡なり。各四明一山の貫首にのぼり、皆兩門三

千の棟梁にそなはる。いづれもやんことなき高僧賢哲也。或は歸敬をいたして往生の後會をちぎり、或は諷誦を捧て滅後の菩提をいのる。これみな念佛を賞し、聖人をあがむるゆへなり。餘恩をわすれざる輩、遺骸をなんぞ輕とせんや。而にいかなる邪魔外道の所爲にか聖人往生十五箇年の後、後堀川院の御宇、嘉祿三年の夏、山僧僉議して云、專修念佛を停廢すべし。但其根本たるによりて、まづ源空の大谷の墳墓を破却して彼死骸を鴨河にながすべしと云云。奏聞をふるに勅許あり。攝政猪熊太政大臣家實 座主淨土寺大僧正圓基 六月十二日、山門の使者等おりきたりて、清水坂の亂僧に仰付て、廟堂をこぼちとる處に、京師守護修理亮平時氏、内藤五郎兵衛尉盛政法師法名 西佛をさしつかはし、制止を加て云、縱勅免ありといふとも、武家にあひふれず、左右なく狼藉をいたす條、甚以自由也。すべからくあひしづまりて、穩便の沙汰を致べしと。問答時をうつすあひだ、晚陰に及で山門の使者、坂の亂僧、各歸畢ぬ

廟堂破却と狼藉鎮壓の圖

爰信空上人、妙香院僧正良快に申て云、事いたりて興盛也。山僧の企定て黙止ざらん歟。答て云、今の仰同心す。改葬尤可然と云云。これによりて信空上人、夜ふけ人しづまりて後、遺骸を掘出て擔去つゝ、嵯峨の二尊院にかくしをく。件の夜、宇都宮の彌三郎入道頼綱法師、守護のために五六百騎の兵士を引率して屢從す。而後聖棺を荷て洛中をとおしたてまつるに、面々に袖をしぼる。おそらくは櫻樹林の晩の色かはり、跋提河の浪むせびけんも、かぎりあればこれにはすぎじとぞみえける。總じて但信念佛の行人、一向欣求の道俗、御供すること千餘人也

遺骸を深更に移すの圖

この事にあひしたがふ僧侶等、口外にいたすべからざるむね、佛前にして各誓狀をたて、退出し畢ぬ。其後猶あなぐりもとむべきよし、その聞あるあひだ、五箇日をへてのち、又二尊院より廣隆寺の來迎房圓空が

もとにうつしをきたてまつる

御遺骸を嵯峨より太秦へ再び移すの圖

明年正月廿五日の曉、又西山の粟生^{今光明寺是也}にむかへ入て、法蓮上人、聖信上人、覺阿彌陀佛等來會して其夜すなはち火葬し畢ぬ。そのとき種々の靈瑞あり、奇雲太虚にみち、異香庭前にかほる

粟生野にて火葬するの圖

善信聖人も、勅免のうへは、やがて歸京あるべきに侍りけるほどに、聖人入洛の後、不幾してのち入滅のよしきこえければ、いまは古京に歸てもなにかせん不如、師訓をひろめて滅後の化義をたすけんにはとていそぎものぼりたまはず、東關の境、こゝかしこに多の星霜をぞかさねたまひける。良久ありて入洛、五條西洞院わたりに、一の勝地を占てすみたまふ。このとき先師聖人没後、中陰の追善にもれたること恨也とてその聖忌をむかふることに、聲明の宗匠を屈し、緇徒

の禪襟をととのへて、月々四日夜禮讃念佛とりをこなはれけり。是備先師報恩謝徳のためなりと云云

善信聖人の追善供養圖

諸宗の碩才、聖人の威徳に歸すること右に載をはりぬ。その外法印明禪、公請勞闡け稽古年舊たる名匠也。

而に聖人の没後に當て、其宗義をうかゞひ、彼勸化を信じて終に往生を遂ぎ。臨終には極重惡人無他方便の

四句の文をとなふと云云。又沙彌隨蓮在所四條英里 小路西四條面出

家の後、つねに聖人御房に仕て配所へもしたがひたてまつりけり。御臨終のとき、隨蓮を召て云、念佛は様

なきを様とするなり。たゞ平に稱名の行を専にすべしと云云。隨蓮ひとへに禪命を信じて、貳なく念佛しけ

り。聖人往生以後三箇年をふるあひだ、遺弟等云、念佛はすれども三心具足せずば往生かなふべからずと云云

爰隨蓮云、故聖人は、念佛は義なきを義とす、たゞ平に佛説を信じて念佛せよとて、またく三心のことおほせられざりきと。彼人答て云、それは一切に心得まじ

きものゝための方便なり。御存知のむねはよなとて、

文釋のこゝろゆるしくまふしきかせけり。隨蓮まこと

にさもやありけん、おほきに疑心をおこして、誰人

にかとはましとおもひて、一兩月をふるあひだ、心勞

かぎりなくして、念佛もまふされず。或夜の夢に、法

勝寺の西門を差入てみれば、池の蓮華いろ／＼にひら

きて、よにめでたかりけり。西の廊の方へ歩よりてみ

れば、僧衆あまたならびゐて、淨土の法門談ぜらる。

隨蓮階をのぼりあがりて見れば、故聖人、北なる座に

南向にゐたまへり。隨蓮みつけまいらせてかしこまる

聖人隨蓮を御覽じてまぢかくきたれとおほせられけれ

ば、おそれ／＼かたはらにまいりぬ。隨蓮が存する旨

をいまだ申のべざるさきに、聖人云、汝このほど心に

なげくことあり、ゆめ／＼わづらふ事なかれと云云。

此事一切に人にもまふさず、争か知食べきとおもひて

上件のむねをつぶさにまふしのぶ。其時聖人云、たとへば僻事をいふものありて、あの蓮華を、蓮花にはあ

らず、梅ぞ櫻ぞといはゞ、汝は信じてんやと云云。隨蓮申て云、現に蓮華にて侍り、いかに人申とを争か梅さくらとはおもひ侍らん。その時聖人云、念佛の義、またかくのごとし。源空が汝にをしへし詞を信せば、蓮華を蓮華といはむがごとし。ふかく信じて念佛を申べしとなり。惡義邪義の梅櫻をば、ゆめ／＼信すべからずとおほせらるゝとみてさめをはりぬ。不思議のおもひをなすときはまりなし。日來の不審こと／＼く散じ、疑心忽にはれて、むかしの御をしへすこしも相違なかりけりと符合しつゝ、念佛のほか、ふたごゝろなくして、八句にをよびて往生の素懷をとげにけり

聖人隨蓮へ諭さるの圖

凡聖人在生之德行、滅後之化導、不可稱計。誰暗夜無燈照室内哉。誰傳持慈覺大師之袈裟哉。南岳大師相承

孰奉爲國家爲戒師哉。孰於是芝砌、貽眞影乎。誰爲他門被歸敬乎。誰現身放頭光哉。誰現身發得三昧哉。是皆聖人一身之德也。測知十方三世無央數界有性

無性、遇和尙與世始悟五乘齊入之道、三界九居四禪八定天王天衆、依聖人誕生忽免五衰退沒之苦和漢雖異利生惟同者歟。矧亦末代罪濁之凡夫、因彌陀他力之一行、悉遂往生素懷併上人立宗興行之故也。漚願力樂往生之輩、孰不報其恩、歸念佛願極樂之人、何不謝彼德。因斯聊披傳記粗錄奇蹤者也

元亨三歲癸亥十一月十二日

奉圖畫之

願主釋正空

(別本奥書)

于時正安第三辛丑歲從黃鐘中旬九日至大呂上旬五日首尾十七箇日、扶寤忍眠草之、緯旣卒爾、短慮轉迷惑、糺繆胡靡斯、俯乞披覽之宏才要加取捨之秀逸耳

衡門隱倫釋覺如

三十二歲

法然上人傳 卷第一

一、夫以我大師釋迦如來普爲救流，浪三界迷徒，深發平等一子悲願，忽捨無勝莊嚴土，忝出娑婆濁世國，給以來，非生現生給。故無憂樹下花開，非滅唱滅給。故雙樹林間風痛，在世八十年化導如雲之如霞。滅後二千餘迴衆生慕恩慕德，但八萬教法區大小根機雖種々也，皆是穢土勵自力有濁世期，得道只是聖道難行教未淨土易行道。爰漢家善導和尚彌陀化身弘本願稱名。我朝法然聖人勢至來現勸化往生給。然則濁世導師授但信稱名行，如來使者出離解脫教述。時機相應得往生者，不擇道俗貴賤，不云男女老少，平生濟度。夢後利益云，恩德誠難謝者也。依之今於此道場，大師聖靈濟生利物新影曼陀開，展讚嘆梵筵，仰願上人垂哀愍納受給。乃至法界平等利益敬白。

一、又云蓋以諸佛利世給，鑿機施益日月照州給計。

時廻光，爰以正法千年月氏佛法盛像法千年震且佛法弘加之摩騰後漢來時依舍利神驗創建白馬寺，僧會入吳國，剋以佛骨威光造建初寺云。本朝欽明天皇御宇佛教始渡，最初聖德太子御手學舍利產既三國佛法將來如此。爰聖人重形叡山雲分漸天壹金花眼開，僧體黑谷流酌屢顯密玉泉心澄，入經藏見諸經給事五返，文句臨深理得給事拔群。然智證大師將來觀經疏披，一僧指授玄文見，當今劫末衆生時處諸緣不嫌，一向專念往生遂，一切善惡凡夫行住坐臥不論，專修稱名證無生云。得此心自行化他勸進偏以念佛利益，南都北嶺碩德忽以聖人先達，故花洛邊土老少悉念佛一行歸，山林隱居道者同稱名一法不歸云事無。爰以智慧第一法然得大勢至化身也。舌鳴音學讚嘆恭敬奉，依之誕生始遷化後至傳作讚嘆奉者也。

一、又云竊以眞如幽玄，四乘五乘不測其邊，法性深微三賢十聖不窮其際，無盡法界凡聖齊圓之旨，輒難明之，恒沙功德寂用湛然之理，誰人解之。我等皆爲垢障覆深

凡夫衆生悉非淨體顯照之機，是以聖道自力諸教即施即廢，妙道遠不沾，淨土他力一門久住久留利益通。退代，誠知佛性真因難顯，不依他力久沉生死，菩提妙果難證，不值此門，豈可證入。爰源空聖人爲釋尊使者，示彌陀本願，爲善導後身成我等知識，三有胞胎因茲永絕，六趣嶮岨依之忽隔，此化不限在世，其益彌盛。滅後恩德高於山深，於海者乎。抑尋釋尊興出者，淨飯王御宇癸歲七月十五日始託摩耶胎內，翌年甲寅四月八日出胎，外七步經行即唱云：天上天下唯我獨尊。三界皆空我當安之云云。是則震旦當于周第四主昭王元年，我朝當地神五代彥波劍武鸕鷀草葺不合尊八十三萬六千三十二年。伏惟一代諸教皆難可攝，我當安之言佛意所志，正是當淨土一教。所以者何，諸佛大悲專於苦者，自力得道爲岸上機，他力出離爲常沒者也。測知安苦衆生者，偏是爲五濁五苦凡夫，可說往生淨土教也。凡如來滅後一千年之後，佛法漸衰，得道人希，諸比丘等如世俗人，嫁娶行淳毀穢毘尼經，千十五年西天佛法傳震旦，即後漢明帝

永平十年丁歲也或七年或甲申。勘合我朝時代當入皇十一代帝

垂仁天皇治天九十七年，其後過四百八十六年，我朝三十

代國王欽明天皇十三年壬申。歲如來教法傳來我朝。自爾以

來至七十五代帝王崇德院御宇長承二年癸丑。歲計年記滅

後二千八十一年也。凡唐朝善導和尙爲彌陀化身立淨

土一宗，專勸他力往生，即橫定古今，改百餘家執見，分別

專難二修顯。本願稱名正行，訪其在世。大唐高祖神堯皇

帝代誕生，太宗高宗二代廣施行化。及高宗末，永隆二年

三月入滅。以我朝時代謂之，自卅五代國王舒明天皇

以後，皇極孝德齊明天智天武已上時人也。今源空上人

者，即彼善導和尙後身也。原夫長承第二曆孟夏第七日，

當法壽漸減，慧刀既衰，末法之初，受德委於苦域，導兇頑

於樂邦，峻節如普賢，懿德似往昔，器宇奧邃，浩浩焉。度量

廣大，汪洋焉。仰之彌高，鑽之彌堅。安以牛濟淺才，測鵬

溟深識，佛家智龍也。吐法雨，露菩薩芽，釋門義虎，扇惠

風，拂煩惱之塵，夫濟衆生患難，正像賢聖尙痛其難，沉於

末法乎。然聖人當今循々然，善誘人我等，教以念佛。我

等益以起行閑聞平生靈瑞、情思臨終勝相。聖人正是大聖權迹也、勿謂小凡實業濁世無如此之人。我等出離其何恩德廣大、拾塵頭難謝利益甚深播沙身何報。須非飯食惡衣服忘羸廢加砥礪眞實勤行。如此往生更無疑師資素懷唯斯一事而已

一、聖人誕生事

聖人諱源空、俗姓漆氏美作國久米南條稻岡庄人也。彼聖人尋先祖者、人王五十二代平城天皇七代後胤也。其次第考第一高岳親王又號眞如親王第一義見親王諱號大伴大納言美作國下國任國司第三恒見中將第四保規民部卿此三代美作國司也第五國平刑部卿大夫第六金藏、懷妊漆飲母夢見、即懷妊誕生時、漆木三本下生畢。即男子也、色黑如漆、時人喚漆男公云。甚異體、依其母彼所生子相人卜。相人云此子後三代當可生貴人云云。有人云孔子周靈王御宇槐木下誕生、槐文公云。老子李木下出胎李老君名云云。居易唐三代仕賢臣也。松木下生、十八公。又三代松臣太宗仲宗玄宗三代仕依、三良君名。先蹤如此今又漆木下生、漆男公名、第七眞

人介父金藏諱漆男公云。其子即俗姓漆晨國號。舍弟漆時氏云、舍兄美作國大伊介廳宦懸、稻岡北庄住。或時晨國妻語云、我已年漸傾、爲滿四十員、然而即家門跡可弔當來菩提一人子無願往事如夢、行末又不幾、沉命五更之露、向日易消、身一行之煙伴風難駐、昨日語友今日白光骸曝、朝伴聾暮青草之下隱形、見人命無常知我身有限、聞他人不定覺自體不堅、爾晨國存日間爭一人子儲思、過去因業闕故、今生本望空成悲云、妻妾答云、何好色遊人相馴一人子儲妾預給、即乳母成奉養育、晨國云同汝胎一人子儲。雙鷺栖並養鴟兩鳥連翼、如覆卵汝與晨國二人中於養育成人見事本意云。

秦氏女云、酬因感果理世間通法、定業能轉教佛陀悲願也。設雖闕過去舊因、何以現世行功歸佛陀所望空哉。爾如花春梢非可待、類月不可見秋山端、懸憑於觀音大悲利生、可祈此事云。晨國尤其謂諸佛大悲平等雖無偏頗、可懇觀音薩埵本誓也。近尋觀音靈地、菩提寺是國中第一靈場也。然者菩提寺詣可祈彼事夫婦共沐浴

精進彼寺參詣、七日夜精勤無懈、盡終日讀誦積功懣、卅三身金言、夜終夜至禮拜、運志十九種尊教、行業漸積爲滿七日祈願、其夜非夢非覺、老僧一人來、氏女枕間、立栖右手剃刀、廣二寸、長八寸持告云、夫妻信心不輕、大悲誓約空、是可飲則汝申所子可成云云。時氏女云、女身是不淨、障不少、剃刀又大日覺王御舌也。爭胎內可奉納。其上給飲之、口中忽破申。老僧重云、汝勿恐、飲必可成、子云云。爾時氏女僧言隨口開剃刀飲云夢見畢。打齋卽事由夫語。晨國夢聞大悅云、汝夢相實是懷妊瑞也。但法師子。其故秦始皇帝母懷妊夢想、衣冠正三尺劍持來、汝是飲云、卽請取、飲是有身備子。始皇帝號、彼帝武王隣國三千餘國打隨。爾汝太刀給飲、是決定男子、累代家族繼子。然今剃刀給飲、是此子法師成、一朝戒師、表夢也云。互悅禮拜至下向畢。此夢無相違、長承元年壬子歲秋七月中旬比遂以有身懷妊。以後其母偏歸佛法、至出胎之時不加童腥是則、胎內子厭之所致也。拾遺傳云、善仲善算兩聖人攝津守藤原致房之二子也。母紀氏

慶雲四年正月十五日夜夢、敷蓮花二莖從空飛入口、覺後胸中如吞物、遂以有身。自爾以降母常歸佛法、不食童腥和銅元年正月十五日平旦誕生、母心無苦痛、室有異香、一胞之中二兒竝生、敢無啼音、常有咲色。同傳云、延曆寺座主安惠者、俗姓大泊氏、河內國大縣郡人也。其母夢吞明星、遂有娠矣。其後不食童腥有期生男矣。同傳云、大法師淨藏者、俗姓三善氏、右京人也。父參議宮內卿三善清行卿、母嵯峨上皇帝孫也。昔母夢天人來入懷中、覺後有身。誕生時母無苦痛、歲及二三性太岐嶷、僅及四歲讀千字文、聞一知二、至七歲不留俗境、好赴佛庭、登壇受戒矣。サテモ氏女懷妊月滿、崇德院御宇長承二年癸丑四月七日午正中、不覺誕生。其母更無苦痛、男子合兩手、當胸敢無啼音、自觀音給處子。晨國名蓮花王云云。如此先師黑谷上人託胎靈夢、出胎奇瑞幼稚之俊異、長大之弟名敢不下于先哲、全相似古賢者哉。又當聖人誕生之時、兩幡自空曳降、翩翻屋上、村里老少群集以見之。

案此奇瑞幡是三身四德十波羅蜜也、以之爲所表、今聖人爲釋迦彌陀使、通達此等法門、可成聖道淨土二門法將之表示也。或又先師聖人者、應神天皇之再誕、八幡大菩薩之應迹也。彼三所大菩薩者昔號磐田天皇、欽明天皇御宇豐前國宇佐郡馬城峯始顯給矣。後移菱形小原山、今宇佐宮是也。天平三年公家奉幣帛給。本名廣田大明神今號護國靈驗威力神通大自在王菩薩。養老四年大隅日向兩國合戰祈申此大神與官軍俱相向平賊徒、有託宣爲懺悔被行放生會云云。開成皇子夢想云、得道來不動法性示八正道、垂權迹皆得解脫共衆生、故號八幡大菩薩已上。抑先師聖人知爲八幡應迹事、當聖人沒後有夢告之故也。況又聖人者彌陀化身也。八幡大菩薩又爲彌陀三尊、本地是一垂迹豈異哉。仰可信者哉。然則爲示現爲八幡再誕當誕生之時兩幡天雨降敷

一、幼稚異相事

保延元年乙卯 天下有飢饉疫病之災、有人夢惡鬼百千流行、每家人來、見晨國家門小兒立向禦之不入鬼恐逃退。

于時聖人三歲也。此年彼家內一人爲疫病無被相侵者矣。此小兒口嫌酒肉、父母知其心、飲食時不羞之。五六歲以後其心如成人、卓犖同稚黨、南庭見花折西枝供佛、北山詠月拂西雲、傾心觸事、對自動有向西壁之癖。親疎見恠之故、號面西童子矣。其性岐嶷聞一知二、不異淨藏法師幼稚之時、其心精進厭酒嫌肉、相似相應和尙稚童之相。況又其爲人之後、自行化他之得益、王臣都鄙之歸依、何事耻于豈何以劣于古相應和尙者、一生不過中食。生前度者一百餘人、受法之者十六人。蒙印信者五六人也。先師聖人又一生長齋堅具、足圓戒國王大臣以下受戒得度之人附法傳法之輩、如稻麻竹葦不可勝計矣。聖人六歲或時父晨國夢想、着淨衣俗人告云、津州中津葦原觀音誕生所作州南條稻岡勢至出胎、初示畢去夢心君誰人哉。問我是所地主、高峯權現也答給。其來晨國我子勢至菩薩化現也、知得

一、晨國爲敵所害事

保延七年辛酉 三月四日夜、伯耆守源長明、明石源內武者

定明、押寄晨國館殺害之。彼定明者、堀川院御在位時瀧口也。殺害之趣意定明爲稻岡庄執務雖經年月晨國爲職堂身輕蔑之、不面謁之遺恨也。父所害之夜、適以免出隱而視之、定明唯獨立外。于時聖人、生年九歲以小矢自暗處射之、中定明目間驗此疵可顯無疑。故即逐電不復入來。見聞衆庶莫不歎異。人後呼云小矢兒。敵已退忿出、父有樣尋、晨國大事疵蒙不辨。前後其時小兒申給、敵慥手負侍、其行末尋侍。晨國云、我敵不知、汝爭可辨、小兒申給、敵正伯耆守源長明男明石源內武者所定明見侍。時國云、定明親敵思打云歟。努々不可。然。我爲敵失命、是併先業所感也。思此報答展轉無窮世々互譁輪迴無期、凡有生者必死、痛人又不痛哉。我命惜、人豈不惜哉。我依先業所感今打定明、汝又定明打當來必定明汝可打、此過只時國身可留。今度意趣止何世生死絕離、汝若成人往生極樂所、自他平等利益思、云畢心正西方向、高聲念佛、如眠終。抑聖人是權化也、幼稚失父定是爲化導之方便歟。然厭世間之名

利、赴道心門、偏是不思、忘父時國最後遺言之故也。經云如來今者爲未來世一切衆生爲煩惱賊之所害者、說清淨業云。時國爲夜討被殺害是表煩惱所害之機也。聖人爲敵被打漏以小矢射敵、是自無明長夜暗處磨備一念無上之鉢、射定明貪瞋二日間也。具足煩惱之衆生、依他力本願名號、可往生極樂之旨、令弘通事、兼表置之給可成。私云、是因果不朽表示也。惡因行惡果感、善因行善果感。又他非他自非自他是他自是、因果不空、是非相違事無、是則善惡兩所於不果云事無。然時國今定明蔑故、還定明被打、自是非他罪報、難遁故也、一切衆生如是示可成。又貞觀政要云、我身損瞋恚也。又史記云、依自身之瞋恚滅自身之命。又漢書云、前利望考後害咎不顧愚輩。前後考後害遁賢人。明石武者後害考爭可及逐電哉。然葬送中蔭之間、念佛報恩無懈、捨淨財而營黃金八尺之色像、勵精勤而寫經帙數軸之花文、卽屈賜紫之淨侶專致啓白之懇誠、王儉故池之蓮擎之供、世尊、孟宗荒籬之笋、抽之施禪侶、傾心開題方今

汲一滴之水，遙添真如海之浪，叩九乳之鐘，遠和菩提樹之風，聖靈增進行法，日々夜々無懈。別傳云，此兩句依時可用和也。葬送中蔭間，念佛誦經報恩，送剎剛塔立鬼鐘，鳴顯烏瑟妙相，開題驚嶺真文，迎益子智辨，祈送西方寶池也云云。私云凡茶毘事涅槃經云，阿難復白佛言，佛涅槃後一切大眾依何法則，茶毘如來而得舍利，深心供養。佛告阿難，我涅槃汝等大眾當作轉輪聖王茶毘方法，其轉輪聖王命終之後經七日乃入金棺，既入棺已，即以微妙香油注滿棺中，棺門令密，復經七日從棺中出，以諸香水灌洗沐浴，既灌洗已，燒衆名香，而以供養，以兜羅綿編體，身然後即以無價上妙白氈千帳，次第相重編纏，王身既已纏訖，以衆香油滿金棺，聖王身爾乃入棺，密閉棺已。載以香木七寶車上，其車四面垂諸瓔珞，一切寶交以其車莊嚴。無類花幡七寶幢蓋一切妙香，一切天樂圍繞供養，爾乃純以衆妙香木微妙香油奉茶毘轉輪聖王身。茶毘已訖，取舍利於都城內四衢道中，起七寶塔，開四門安置舍利，一切世間共所瞻仰已上。依之佛奉。

茶毘自爾以來，佛教傳火葬所也。佛教無時土葬等也。付孝養世間出世二種世間孝者，論語云，父在其志，觀父沒其行，觀三年父之道，改無孝謂。又孝經云，父母生則此則以愛敬死則此事則以哀感，爾虞舜云人，父打杖大時，忽逃去，不近杖少，即父前進出。會參云者，父瓜草取剋，誤根引枯。父瞋即杖打殺。彼虞舜杖恐退父惡名，慎哀故也。此會參杖前近，父忿怒安心故也。打不打共無雙孝行也。但孔子言打殺不孝，判給。然今少兒父怨敵打，親命訓蒙，已世間孝養勤，出世報恩爲備。嗚呼！人親誰子不思。其子爭親不敬。山禽野獸物不知，猶酬其恩。林鳥水魚至愚，亦彼德思。依之跪母乳飲。仰父養待鳥。爾烏鳩反哺孝致，泉願祭魚禮勤。此等世間孝云，又出世孝養中雖善根多，惣奉請三寶境界，勤孝行者也。建廟塔顯妙相佛寶也。真文開法寶也。智辨迎僧寶也。凡三寶者四種，一住持三寶，今云所三寶是也。二別體三寶，是彌陀等諸佛淨土其主以佛寶，其佛說以法寶，其土菩薩等三乘五乘人僧寶。三一體三寶，是一心於理所佛。

寶智所法寶、但理智不二所僧寶事。四化相三寶是、安然而尙外道三寶立、依而一三寶立給。如是四種三寶非、無盡三寶、彌陀三寶中一切三寶攝、而彌陀三寶無量三寶開故、釋一切三寶我今稽首禮云。他力至極三寶敬禮也。然此三寶彌陀超世名號、具足六八誓願他力備三寶也、稱名則三寶也。此意得供所佛事報所追善者也

一、成寬覺弟子事

美作國善提寺院主智鏡房得業寬覺、是聖人伯父也。保延七年冬比、彼得業乞取聖人爲弟子、初授佛書、性甚岐嶷、所聞之事憶持不忘、宛似顏回之昔、可謂樂天之幼稚寬覺喜其俊異、相語門侶云、見此兒器量匪直人、惜乎徒居邊國云可登比叡山之由、連々談之、此兒聞之心中悅思給

一、爲登山向母暇乞事

久安三年卯春比、寬覺相具此兒行向母堂許談登山事。母不許之、少兒云、流轉三界中、恩愛不能斷、棄恩入無爲、眞實報恩者、云世間孝養非眞孝業、恩入佛道、是

眞實孝養也。然釋迦如來背父命偷出王宮入檀特山、修行佛道。寂照聖人殘置老母渡大宋國、欣求佛法。從此童父形見御覽雖被思召無定世中、親子別給之習也。

狂登山奉導二親身罷成思云云。母理折書撫翠髮、又不出詞。淚許頂灌。秘密灌頂物不云頂水瀝申加樣事。寬覺聞之云、吾申存事、所存差過加樣聞、其付賢學問由思寄侍。昔晋叔公幼列法華經翻譯座之時、羅什三藏

書煩人天交接之句之處、叔公教之此事被思召、最哀侍衣袖ヌラシケル。生子教、教主釋尊爲母說摩耶經給事也。今如此細々在々承付、此兒近立身顯名事思遠入佛道濟二親事存。此志掘無人土穴申入侍共、有爲之習難忍浮世之別易迷、昔釋尊御別、得道羅漢深位菩薩悲歎色不堪。增女人御意難忍思召誠理被察侍共、

コハ早々可有登山御計也勸、母心中思連給

形見トテ
墓ナキ親

ノト、メテシ子ノワカ
レサハ又イカニセン
トテ、落涙千行也。心中悲何計。

私云、毛詩云哀哉、我母我生劬勞給、此恩報欲昊天極罔云云。恆河女忽波底沈、提波女強火炎責、皆是悲母

子思阿孃恩悲故也。加之鶴子思普龜子悲聲、悉又母思子悲也。爰以世尊摩耶恩謝爲、報恩經說、目蓮尊者青提女德報爲、盆供料備、爾賢聖佛祖覺母恩不背、一切凡夫智短爭母惠忘。然小兒母別情、悲母一子遠慕、恆河女恩如、提婆女愁似、雖然彼終三界輪廻苦招歎也。此又安養淨刹樂受喜也。悲歎是同云共、昇沈迥異者也。正登山之時路之處、終母堂暇得登山給。于時 近衛院治天養二年^{乙丑}春三月十三日、生年十三歲也。私云太子鶯泥駒乘檀特山登、道教求遂摩耶與。周穆八疋駒鞭、月氏國飛妙法聞還繼子傳。親恩子思故也。又摩騰竺法白馬聖教負渡事、聖德太子黑駒乘雲路飛、衆生濟度群迷利益故也。而今小兒騎馬舁登山給。彼古跡學弘法利生給。出立可成爾恩愛家出、求法旅立、有爲里捨、無爲都入給表示

一、殿下御出參會之事

已小兒上洛作道月輪殿御出參會奉。然間傍小河打寄給奉過處、御車何少童御尋、從僧美作國學問爲比叡山罷

上少童侍由申、近召御覽、能々學問學匠成給師匠可憑思召由、勲御契、其時供奉人々田舎兒如此御事申、殿下仰云、此兒眼金光放、非直也人云云。誠御緣深程米哀不思議也事共也。私云此御契朽御事、頻婆娑羅王釋尊契給、遂果給如。弗沙迦王經意依、頻婆娑羅王未太子御座時、五願發一我少年王位登、二我國佛有奉事得、三我常佛所往來、四我常經法聞、五速須陀洹位得、此五大願成就、釋尊供養師檀可爲、契結給、然遂果師檀成給。而今御契不違、後師檀成給、月輪殿御所望依經釋集選擇集號一卷書進上聞、角花洛過已山上至。夫天台山延曆寺者 桓武御願、最澄興隆也。峰在根本中堂鎮耀、日光月光光明、麓在山王七社併垂天長地久之衛護、十二神將者防四魔之群賊、七千夜叉者覆三塔之衆徒抑東湖上竹生島謬蓬萊宮、西海內姑射山、疑安養界、南三井之鐘聲相似迺愛寺、北大原之宸遊如香爐峯也。就中玄義文句止觀之春花、梨子木惟觀、釋籤疏記弘決之秋月、青蓮院最明也。凡眺望殊勝遠視都鄙之萬里、行

學秀逸廣兼、顯密兩宗、戒諍燭滅、園城、法水愛流灌、延曆
 矣。抑彼聖人叔父寬覺、本山門住侶也。隨分修學者得
 業望成思外沉淪恨依、南都移學道旨遂、無程成得業、
 久得業申、彼得業山門送狀云、松門之風遠吹、紫蘭之
 語芳面貌久絕、禪公幾年芝枯蘭泣、因緣契深靈山之雲
 上、幸改蓬來宿昔在貴重大聖文殊像一體進上、天養二
 年^{乙丑}三月十三日沙門寬覺狀西塔北谷持法房御足下書、
 境節源光剃頭給。忽出送文披見、文殊像不見、少兒來
 入、時源光以爲文殊像者識、此兒之器量語也。心得其夜
 彼兒俱舍頌六百行取出、日比彼頌習給、問未見侍。答
 是今夜內讀覺明朝聞給云承、云仍一遍讀聞。此間遠路
 苦又復事無、睡臥給。師匠驚夜部覺給申物何問給、暫
 案少々覺侍本控給、荒と可讀殘燈挑、源光本控諸一切
 諸種冥滅拔衆生出生死泥有漏無漏法至、一字不落誦給。
 是聞誠六聖文殊再誕也。設日比覺當時難辨、何決二返
 開物喜、即返狀書葱嶺雲厚隔、流砂霧難、知月支越、唐朝
 非、法照禪師不登臺山、日域慈覺大師昔難、值大聖時、

及澆季身獨荷、世爲歎送年月之處、親得值大聖、三世
 覺母九代祖師轉法輪上座仁大聖文殊像一體所奉請取
 也。天台沙門源光法師返報、然相見其容顏頭圩有塵
 眼黃有光、皆是拔萃聰敏之好相也。此兒純粹可爲釋
 梁不疑。吾魯鈍淺才也、不足此奇童提撕、須請業於碩
 學窮國宗奧義。即托功德院皇國阿闍梨、令學法門、彼
 阿闍梨是粟田關白四代之後胤、三河權守重兼嫡男少納言
 齊隆朝臣長兄隆寬律師伯父皇覺法橋弟子、一時名匠縮
 徒俊人也。皇國感悅斯兒神精、爽拔爲法器、殊以奧觀奇
 童承訓所知日々多。或時彼奇童出家之由被申。師匠
 今四五年垂髮可有更不許出家、其時重申給、伺佛在世、
 童形修行無之承、先佛御子、羅睺羅云七歲出家、阿難
 十二出家也。サレバ佛我小出家得阿耨多羅三藐三菩提
 名乘給。同佛弟子成、羅云等如申給。皇國舌卷我未此
 等事勘、來秋比必可許出家定畢。然間六月中申日懸暮、
 至坂本詣日吉社、通夜出家暇申給。更闌夜靜燈籠火幽
 也。倩案神體法宿權現五百尊、點久成之如來、耀影

於叡岳之麓、三千世界能化主垂迹於湖上之浪、梵宮雖年
舊、利生于今新也。夜猿叫月、曉鳥鳴風。月明々折物哀
也、念誦留和クル神ノ光ノ影ミチテ秋ニカハラヌミシカ夜
ノ月、我カ祈ル日吉ノ神ヨカイアラハ思ノ事ニ
サハリア 別傳云、社頭夏月題シメノ内ニ月晴ヌレハ夏ノ夜
ラスナ 終久安三年丁卯仲冬、生年十五歲登壇受戒、其名圓明房
善弘付給

一、天台六十卷所學之事

竊以無明長夜以戒光爲炬、滅後軌範木叉爲師、受生
昇沈依戒持毀見佛有無任乘緩急、所以離雲不可覓、雨
避池不可尋、蓮、叶佛果計必爲尤道心、取菩提發定
在學佛法。是故聖人或時啓師云、已以遂出家受戒畢。
欲遁跡於林藪云云。闍梨聞之勸誘云、縱雖可遁世、
先須聽學六十卷然後從其意、其人云、我今羨閑居全
非他事、爲永止名利望、靜而修學佛法也。貴命本意也
云云。十六歲春初披本書、以夜續日、勤學無懈、秋澤
邊拾螢、冬窓集雪、刺股忘眠、稽古功積迄十八歲秋、
送三年居諸、究六十卷秘願、惠解天縱殆超師授矣。止觀

座曉燈挑、本理不生念照、三諦相即暮嵐聞、迷妄六塵
床拂。凡闍梨、彼機分見給、行業年闌、薰修日積、傳
教慈覺等惠行滿越悅給。史記云、蘇秦者東周洛陽人也。
閑室不出讀書欲眠。用錐自刺其股、血流至踵、遂依勤
學佩六國之印、楚國先賢傳云、孫敬好學不倦、閉戶讀
書至睡眠之時、着繩於髮繫於屋梁、敢無怠矣。今聖人
勤學不違、先哲不劣、昔賢者歟

一、隱居黑谷事

學六十卷事已畢。重遁世之由啓師々云、欲報佛恩、
過供百千億那由佗佛善根、勝千俱月劫智者禪定、狂動
講說、方遂大業、可爲圓宗棟梁、如是度々叮嚀、激勸、更
無承諾之詞、忽有遁避之色、闍梨知其心難奪云、實遁世
志、思立給事、不可有子細、但遁世年闌、身衰後事也。若
盛程暫山上止住、勤公請營論議、我山莊嚴可成云、仰
去事侍、更不思寄事也。其故五千上慢起、無上世尊等
慢橋、薩央彌忝思懸、百福莊嚴、摩竭調達、親打損千幅
魚形、跌見者無厭德、值須達老婢、破厭惡、惡黨能伏用、

爲善星俱伽利被失、在世如此、況滅後哉。所以五濁亂漫境、凡聖雜居棲、六趣四生依所心、淵詔曲所也。

雖紅顏含笑、心中豈三毒劍雖之蘭語芳、思外十惡失愛見羅刹計間求戒品之浮蕪疵、結業商客滿市、善根油鉢

易傾、懦弱八鳥高、遊邪見之林、曠悲蛇深騷、隨眠之叢、邪見外道背如來聖教、放逸尼乾至三寶誹謗、爾決擇延

赴時、人是可云曲、論談期望他理非可云成、如是存交衆之志、片時更無之申給。皇圓聞之左樣慢心住論談事實

然也。衣座室三住修行何可苦哉。卽入廣大慈悲之室、着柔和忍辱衣、坐諸法空座、可好般若婆羅密道也。更

不許遁世、善弘申給。我有三望、叶給遁世可思留、若此所望一不叶給者、遁世可許、闍梨聞三所望者、坊舍

聖教坊領也心最安事哉。思給早々何事所望問給。淚流申、春花盛無落花恨者、可遁世思留、若風花空散世間

不定可許遁世。是一月半秋彫滿無尤傾者、不可有厭世之恩。晚秋半闌庭前草枯、霜、篔竹虫露可弱者、彌可

發心之便。春草暮秋葉落四序之易移、猶餘所事可思成。

眼前無常人皆難免者也。夫如來萬德之像、猶隱沙羅林之曉烟、釋提十善之響遂萎歡喜園之夕露、凡生者滅之理、會者定離之悲、凡聖共難免者也。爾則朝煙欲尋歌仙

之居跡、山宮上之霞幽々曉風欲訪先賢之去廟、故鄉砌之風亡々、誠無常轉變身高不留。生者必滅之質下爲去火

燒麗質、登烟化東位之雲、春霞片々土埋、俗骨變性、成北芒之草、秋露瀼々今日死終。明日命際思、兼不知者死

期也。加々留危世中何々思、可成貪着狂許遁世給。勸泣々申給。皇圓不及力、汝爾住黑谷慈眼房爲師。彼

叡空上人者、於眞言與大乘律者、當時少染英髦也云。久安六年九月十五日皇圓許得、慈眼聖人之御坊參給。

左手茶筒茶箋持參給。叡空折節大乘戒律談給。所化衆老若有其數、有僧彼善弘見、是來小僧當時山上知法能器

譽有學匠也。恐可爲圓宗棟梁、聞仁也。定爲法談來也云。慈眼上人聞此事、不然僧有樣見遁世志歟覺也。其

故天台大師遁世初、茶箋持出給。彼茶筒持參其先蹤也云云。善弘緣畏給。慈眼聖人尋子細給。遁世志也申。

慈眼聖人聞之、汝少年早發、出離心、實是法然具足聖也云云。仍以法然爲房號、諱源空此乃取初師源光之初字、後師寂空後之字也。夫黑谷之爲體也。谷深流淨、漱流可栖、路細跡幽絕、晦跡之徒。蓋坐加次有春花夏泉、有秋月冬雪、四季感興一處自備。又有甘菓有香茶、無煩于支飢、有本尊有聖教、有愆于懺罪、逃名樂道之人、捨此亦栖何處、聖人好此地勝興、浮雲心永繫時事十有八也

上人傳第一之終

大永六年^丙二月十四日

厭欣智湛判

彼傳記一部十卷令成就畢

法然上人傳卷第二

一、參籠嵯峨釋迦堂事

保元^壬年^丙夏比、上人倩案佛道非可信外思懸道。大通結緣之輩、親見佛開法、猶送三千摩點劫數。久廻五

道生死險衢、今日始開悟得道、我等衆生有滅後二千餘年時、僅奉拜遺教五餘軸、思彼時結緣非此事、敷紫摩金尊容不見、遙送二千餘年星霜、伽陵頻音不聞、遠隔後五百歲春秋、受生五濁繁昌時、感報末法不信比、設適有發心修行心、不退事又可難、哀哉、從闔入闔、何挑苦提之燈悲哉。自深至深、爭登涅槃之山、凡一心三觀法門案、凡夫得度不輒、衆生出離許設少乘俱舍婆娑也、學思求法爲、師匠寂空暇乞修行出給。是上人第二重遁世也。爲恩德報謝、先一夏之間參籠嵯峨釋迦堂、于時上人行年廿四歲云云。然七月二日鳥羽禪定法王崩御、年五十四。法王堀川天王第一御子、御母大納言藤原實季卿御女也

康和五年御歲一歲立春宮、嘉承二年七月十九日五歲即位。保安四年正月奉讓位於第一御子崇德院。其後經廿四年隱給、雖爲末代賢王、美福門院御寵愛之故。永治元年冬比、奉退崇德院御位、奉付第八御子近衛院。有深御恨、遂成世亂、抑崇德院者大納言公實卿御女待賢門

院御腹王子也。近衛院申贈左大臣長實公御女美福門院御腹也。近衛院保延五年御歲一歲立春宮、永治元年十二月御年三歲得讓、在位僅十五年、久壽二年七月崩御。

夢中御榮花無程御事也。王位高顯勢力自在。無常已至誰得存文。此事誠乎。爰爲一院御計後白河院奉付位給。此君新院同腹也。御歲廿九歲受讓一院、康治元年

御出家、東大寺延曆寺御受戒。此時知足院入道殿下同有御登壇保元元年七月之比法王御歲五十四隱給。即新院與主上御合戰、七月九日太上天王潛出城南離宮、忽

洛東舊院有御幸。卜戰場於其處結軍陣於其中。主上遣官軍征凶徒流失之所紀、左府失命。同廿三日奉移新院於讚岐國其餘黨或仰刑官召取之或販王化降來。

吾朝王法自此時衰微矣。此則第五々百歲、鬪諍堅固時分也。先師上人當此時弘通淨土一教、可濟度惡世惡時衆生給者也。上人出黑谷幽栖、適宿居帝都西、折節天下騷動國土不安穩、彌隱居之恩深增、厭離之志切也。

古歌云、山里ハ物サヒシカルコト、(アレトコソ) 誠乎。此事因茲

九旬參籠畢。即還在黑谷三密行法四種三昧、讀誦念誦觀念觀法勇猛精進如拂頭燃矣

一、信空成弟子事
保元二年春比、有人相具一童子於黑谷來云。此兒雖幼少天性有佛道修行之志、仍具來所也。願爲弟子教授佛法給。上人悅令出家教經論尤聰敏也。時上人御歲廿五歲、信空十二歲也。上人御門弟敢輩之中、此人最初御弟子也。謂宗行中納言兄實進房者此人也

一、法華三昧修行事
永萬元年^乙四月之比、限三七日修法華三昧、夢普賢菩薩乘白象現道場摩頂矣。爰知、六情罪消、五品位隣云。山林樹下獨座、靜法華誦白象王乘行者前見給。罪障本所有無。妄想顛倒起。心性源淨。衆生即佛也。一乘法華勝用遠及後五百歲末、末法初大利不無。聖言不墮地可憑者也。于時上人生年三十三歲也

一、眞言教門入五相成身觀成就事
眞言教門入道場觀擬給、五相成身觀早成就、言語非及

處仁安三_子秋比、於黑谷披覽華嚴經之時、小蛇蟠
机案上、法弟信空見之怖畏。當夜夢我是守護華嚴經之
龍神也。勿怖云云。于時上人行年三十六歲。凡龍神守
護教事、雖不限此經、於華嚴法華者、殊以甚深大乘也。
龍神恭敬守護事不可疑者矣

一、始入淨土事

上人煩出離道、寢食不安、多年心勞、承安四年比御歲
四十二歲時、委披覽往生要集、彼序云、夫往生極樂教行
濁世末代目足也。道俗貴賤誰不販者乎。但顯密法其文
非一。事理業因其行惟多。利智精進人未爲難。如予
頑魯者、豈敢矣。是故依念佛一行聊集經論要文、披之
修之、易覺行云云。序者略述一部奧旨、而序正云、依念佛
一門、因茲文委採此集立十門於中、厭離穢土欣求淨
土極樂證據等之三門、非行體者、斬置之。其餘五門正
就念佛、立之第九諸行往生門爲任行者樂欲。一旦雖明
之更無慙懃之勸進、第十門是助道入法亦非行體、就念佛
五門料簡之、第四是正修念佛也。以之爲念佛體、第五

助念方法也。以上念佛爲所助、以此門爲能助。故以念
佛爲本意、第六是別時念佛也。長時勤行不能勇進者、
限日數勸上念佛、更非別體、第七是念佛利益也。爲勸
上念佛、勘舉利益文、第八是念佛證據也。爲勸上念佛、
引諸經論證據、然者此集本意只在念佛明矣。是故上人
此集爲龜鑑、入淨土門給畢。但此集中處々引善導釋以
爲規。披覽彼釋至第二反、未得宗義、此則排本宗執心、
泥滯聖道門教相之故也。至第三反、都捨本宗執情、一心
詳覈之時、深得淨土宗義、所謂佛土報身報土、定亂想愚
鈍凡夫、破戒造罪迷徒、依本願稱名強緣、可往生淨土
也。依之年信所修餘行餘善拋、偏一向事修販、勤念佛
行給。然間希問津者、示以西方通津、適尋行者誨、以念
佛別行信之者多、不信者尠。當知淨土之教、叩時機、而
當行運也。念佛之行感水月、而得昇降也云云

一、寂空上人觀佛念佛問答事

或時往生要集談次、師寂空上人云、法然御房念佛三昧
勝云、爭可及、觀佛三昧哉云云。法然答云、觀佛三昧是

爲顯念佛三昧方便也。仍第九眞身觀佛體能觀人不照、而念佛衆生攝取不捨照給。至流通文、汝好持是語持是語者即是持無量壽佛名說、不付屬觀佛。選念佛附屬阿難給。況又定散念佛勝劣判、念佛三昧功德超絕、實非雜善得爲無比類云。然觀佛功德非類念佛申給。寂空腹立以拳法然奉打、先師良忍上人觀佛勝被仰給。法然答、法門義理伺事誰不依申給。爰寂空彌腹立法然追立奉、履脫下足駄取又打給。立返上人能々聖教御覽候哀後可、被思召合逃給。其境節淨嚴法印座師杭當弟子法門印契云

一、廣可弘通淨土法夢想事

上人於自身往生者、已以決定。欲爲恢弘此法、所詳要義合佛意否、心勞之。爰安元々年三月十四日夜夢、紫雲變瓊覆日本國、雲中出無量光光中百寶色鳥飛散充滿。又有高山險阻對西、有長河浩汗無畔。峯上紫雲聳河原孔雀鸚鵡等衆鳥遊。自白雲中有僧來下。上黑染下金色衣服也。問云、是爲誰、僧答云、我是善導也。

汝欲弘通專修念佛法故、爲成證來云云。善導即是彌陀化身也。詳要義喜合佛意、爲化蒙孳行年四十二出黑谷住吉水、感神院東北斗堂北也。自爾以降慨然發憤、談淨土法勸念佛行。由是花夷黑白遠近貴賤晨暮輻湊。問津者濟々焉煌々焉。其從付者譬猶百川之皈巨海鱗介之宗龜龍也。以之謂之、所見夢一々附合。高山者表彌陀名號無上功德相也。長河者念佛淨土水可洗罪障垢紫表土也。紫雲廣大者日本國衆生者皈淨土可乘來迎雲相也。光明無量者攝取衆生可施三緣益相也。周禮云夢者事之詳也云云。此事誠乎。抑紫雲者是慶雲也。念佛行者最後終焉之刻、俄逢聖衆來迎樂住歡喜踊躍正念可往生極樂、最上吉事表。佛乘紫雲垂迎接給之儀式也。然不必限臨終有悅之時紫雲立也

一、上人常向人々唱給文事

上人常向人々唱給文云、佛告阿難汝好持是語、持是語者即是持無量壽佛名文。上人和給語名號聞云不信者、如不聞、縱雖信不唱者、如不信、只常可念佛

一、母儀並本國師上洛事

上人自登山之昔，迄于遁世之今，偏重佛道修行之志，殆忘水菽報恩之儀。此則存棄恩人無爲眞實報恩者理也。

非不知孝養父母奉事師長調愛生國師範并母堂歷數年之後，相伴而京上對面之處，相互咽淚，良久不言。小時寬覺納淚云，上人爲佛家之棟梁名施遠近，爲釋門之英聖德被仰貴賤，是併愚昧之秘計也。生前之本望何事如之，而路遠堦隔，無見無聞齡傾餘七旬，生離侍後會，間携杖而行步，勵力而上洛。就中在堂母儀孤獨而無恃怙縱難可訪，夢後覺路，何亦不顧晨昏定省，上人早致反哺之報亦引導菩提之道給。抑老邁之身遙思立之志者非他。上人與淨土法門教念佛往生行給由承及間，出離要路欲承之云，咽淚無言說。上人云，生死解脫者是一大事因緣也。自行暗妙宗不能益他，依之拋萬事求佛道，掘世路欲入眞門之間，知恩之恩如忘，報謝之志似無。但心中非不懸，連々所歎存也。然者罷下欲遂面拜之處，遮有來臨，爲恐爲悅。抑往生極

樂事，尤可令決定信心給。末代凡夫皆是罪惡衆生也。

眞言止觀深法，一生難證入故，以口稱念佛一行，爲出離解脫要門。此偏依他力之本願，亂想凡夫造罪迷徒，必遂往生者也。云云寬覺聞之深以信受，即於吉水邊結一草庵爲母堂居所，朝暮備膳且夕致孝矣。

一、高倉天皇御受戒事

治承元年^{丁酉}高倉天皇奉請上人令傳受天台圓頓菩薩大乘戒。此戒相承華藏世界盧舍那佛奉授釋迦牟尼佛。釋迦授彌勒々々授龍樹々々授羅什々々來至晨旦之後陳南岳大師傳受此戒。南岳觀音應跡靈山聽衆也。故南岳直授釋尊云，儀有之。南岳授天台自天台至道邃六代也。然者天竺晨旦傳受自釋迦如來至道邃九代也。傳教大師入唐求法之時，大唐貞元廿一年^{乙酉}三月二日，初夜時於台州臨海縣龍興寺西廓極樂淨土院，屈請天台第七代附法弟子道邃和尚傳受此戒，飯朝之後大同元年冬十一月廿三日於比叡山延曆寺止觀院，圓澄大和尚爲上首百餘人授此戒。次弘仁元年三月六日傳教大師又授慈

覺大師、其後長意和尙延昌僧正尋禪座主源信和尙禪忍阿闍梨良忍上人、寂空上人、源空上人、次第傳受。我朝相承十

代也。然先師上人自釋迦如來以降十九代法葉相承在

一身、無二亦無三矣。昔慈覺大師、清和天王被奉授此

戒之時、男女受者五百餘人、得利蒙益、追彼古跡。高

倉先帝一日闕其萬機政務、數剋受此一心妙戒、陳隋二代

之國師、天台智者大師於大極殿對御、講仁王般若給之

時、如殿上陛下稱美讚歎殿喧。自月卿雲客至皇后采

女、魏々禁中唱々氣堂々宮人面々信敬、異朝古跡不耻。

吾朝上代不少者乎。陛下股肱、簾中妣嬭共貴、戒德同服、

戒香矣。夫以九條付屬袈裟、開福田日本國、十戒血脈

相承、蒔種子於秋津洲、安然和尙之傳、戒品未受袈裟之

附屬、相應和尙之弘念佛、未說圓頓之戒儀、兼此彼吾先

師上人而已。榮啓期之歌三樂、未到常樂之門、皇甫謐之

述百王猶暗法王之道、昇殿是蒙外之選也。俗骨不可以

踏蓬萊雲、尙費亦天下之望也。庸才不可以舉、蓋聞之月

翫其積礫不親玉淵者、易知颯龍之所、蟠習其莖邑不

視上邦者、未知英雄之所宿文選

一、於上西門院說戒事

治承三年己夏比、於上西門院七日有說戒、于時唐垣上

有一蛇、蟠七日之間、更不動搖、有聽聞之氣、當結願之日、

忽以死去、頭破作二分、於其破中、機見不同也。或有見

如蝶飛去之人、或有見如天人上昇之人、今案若爲天

龍受戒影向歟。將又蛇龍聞圓戒功德上生天歟。凡歟

山上洛中近國遠郡道俗翕然傾首、貴賤群集受戒之者、

一期所積不可勝計。昔吞刺刀之夢、今方以符合焉。于

時上人四十七歲

昔信州長官某甲一任事終、即以京上途中、有蛇長三尺計

守俱到來。件蛇夜宿御衣櫃下、豈立前復來、人々奇思事

由、申守或人云、可殺此蛇、守即制止不令殺之。守

發祈詞若信州神歟。若靈界生祟歟、付人託宣夢中示

現。其夜守夢著班水干男、跪居守前、年來怨敵籠居衣

櫃中、爲害彼敵日來副來、若得件敵從此罷還、守夢覺

畢則知、蛇所害明朝見衣櫃底、有老鼠怖長形屈伏、

人々申云、此鼠放捨、守有慈心若捨此鼠、爲蛇所吞故不可放。守爲救蛇鼠、忽於一日中、書寫法華經開講供養。其夜夢中二男着鮮白妙衣、形貌端敬啓守云、我等生々結怨心互以殺害、今依貴殿善根、免我等罪報、可生初利天、廣大恩生々世々可奉報謝、作是言畢、二人昇天、妙音樂滿虛空界、夢覺明朝蛇鼠俱死矣。

一、寂空上人入淨土門事

聖人師範寂空、來吉水坊告法然上人云、寂空求出離雖久未決定之然間預上人教誘爲思定往生要路故來也云云。上人示云、師是一乘圓戒和上、三密寫瓶大阿闍梨也。弟子久侍座下、恭蒙慈訓數々記淳教風、多改惡味過何以愚僧智分還成明師知識乎。是併以小指如搜大海以短梗如汲井底、努力々々寂空云、昔後秦羅什三藏逢般豆達多尊者雖受小乘、後以羅什三藏爲大乘師、寂空縱本雖授戒學密、今何還成弟子、不問往生極樂道莫辭。勿遁云云。上人退焉良久云、三勸懇懇違拒來命當傾渴微管標往生安心、盡涸拙蟲陳起行梗

概、示本願稱名行、寂空立所改自力難行執見、歸他力易往直道乎

一、寂空上人臨終事

寂空歸淨土門、其後無二心念佛給、及臨終之時、法然上人被讓一切經後命終玉。良久有蘇息、奉向法然上人、三度作禮言、源空本地身歸命大勢至云云。而後流淚言、寂空王宮至閻魔王床下、日本國大勢至菩薩御再誕、源空本師寂空拜、三度禮敬而問、法然御房寂空不奉知大勢至菩薩御再誕、罵打奉罪爲慚愧慚悔、蘇生來也。別帝誓讓狀被置進上字、其時十念成就遂往生素懷、畢、不思議成事供也。

一、本三位中將奉逢上人事

治承四年庚子十二月廿一日、平家本三位中將重衡父太政入道依命吉南都之時、東大寺懸火大伽羅忽灰燼成。其後元曆元年二月七日、一谷合戰之時、本三位中將被生取郡上、被渡大路樣々事共有時、招請法然上人、被申合後生事、上人中將御座處指入見給、サシモ花清

氣見給人其不覺、疲衰裝束紺村子直垂、小袴折鳥帽子引立着給、被當目有様、上人弱淚浮角惡思閑、去様持成有對面。三位中將泣々被申、今度乍生取今一度可入上人見參故侍。重衡必大佛殿奉燒不所存、故入道命依難背、向南都侍時、何者近邊坊舍懸火侍、時風劇大伽藍奉成灰燼事、不及力次第也。重衡不發心事ナレハト存共、時大將軍侍上、責歸一人事侍。重衡一人積罪業無間之重苦不有疑存知、一門人多侍、重衡一人乍生取、此彼耻曝併其酬覺侍、角命終火血刀苦果敢無疑。出家心指處、無許者不及力、只本鳥乍付受戒候事、何可侍。カ、ル惡人可助方法有示給。打クトキ申サレケレハ、上人淚流暫物不言、良久ノ玉ヒケルハ、誠御出家功德莫大ナレドモ、無御許者四部御弟子ナレハ、御本鳥乍付持戒サセ給ン事、不可有子細奉授戒給。粗存知旨說給、難受乍受人身、空歸三途給事、悲有尙餘歎又不可盡。而今厭穢土欣淨土、捨惡心發善心給事、三世諸佛定可隨喜、其取出離道區也

云共、末代濁亂機以稱名爲勝、罪業深重輩愚癡闇鈍族唱不虛者、彌陀本願也。罪深ケレハトテ卑下不可給。十惡五逆廻心往生、一念十念至心來迎。縱何罪業御座彌陀本誓不誤、淨刹往詣在憑。經四重五逆諸衆生、一聞名號引必接說。釋忽遇往生善知識勸專稱彼佛名判設無間重罪也云共、稱名功德不可勝、利劍即是彌陀名號持、魔緣不近、一聲稱念罪皆除、唱罪業無殘消滅罪障、遂極樂往生事、他力本願無如。御榮花昔今モタメシ無御身也。シカレドモ有爲塚悲、未生ヲ替ヘサルニ、カ、ル憂目御覽上、穢土ウタテシキ處ゾト、永思召捨深彌陀本願憑ミマシマサハ、御往生不可疑。是全源空私詞非彌陀因位悲願釋尊成道時說置給經教也。一念無疑心二心稱名因給由、細々ト教給。中將掌合泣々聽聞、自冥入冥心地侍、此仰承侍ニコソ去共憑敬侍喜古都昵侍人許變紙篋忘給事有、入御事送遣ケル折節、喜覺中將自取出、御戒布施覺上人御前指置被申、御要物タルヘキ物ニ非ネ共、人必形見申事、御目近所置給、且

重衡餘波御覽、且何不_レ退御念御目懸候ヘン度コトニ、取分重衡カ爲_レト御廻向有由被_レ申志感上人懷中被出ケリ

一、東大寺勸進事

治承四年_{庚子}十二月廿八日東大寺炎上。爲_レ修造有大勸

進仁沙汰日、於_レ當世者法然上人當_レ彼清撰之由、多推薦。後白河法王納_レ其薦言可_レ爲_レ勸進之由、以_レ右大辨行

隆朝臣内々被_レ仰下。上人辭遁云、貧道本止_レ山門交來好_レ林泉之幽栖、靜修行佛道、順次爲_レ離生死也。若_レ爲_レ大勸

進之職者劇務萬端自行定難進賊。於_レ今者爲_レ他偏宣淨土之法爲_レ自專修稱名行、此三事外欲_レ無_レ他涉云云。行隆

朝臣知其志確乎難拔、具_レ以_レ力辭言奏達法王。重仰云、若爾者門弟等中有器量仁者啓之云云。上人唯然暫案乃

喚來俊乘房重源_{時在醍醐}。自_レ法王爲_レ東大寺勸進有器量仁御尋_レ叶召哉否。重源無_レ左右領狀ス、依_レ即奏達法

王召見悅早被_レ補_レ大勸進職畢。上人謂云、重源若勸進早速成就者一定權者哉云云。重源上人追昔行_レ甚菩薩跡、

普勸進都鄙道俗令_レ致知識奉加思、先伊勢太神宮詣可_レ

遂願成就者示_レ其瑞相給祈請ケルニ當_レ三七日及_レ五更之天、唐裝束シタル貴女自_レ御手賜_レ方寸玉蒙_レ示現、夢覺

後是見夢所見玉袖上在、重源悅被_レ懸頸、其後不_レ勸綾羅金繡錢貨米穀任_レ心事、甚_レ於_レ草靡風如_レ雲隨龍然聞

無_レ程金銅本尊奉移治、爰本三位中將御戒布施上人被_レ進雙紙宮鏡、爲_レ後孝養トテ自_レ上人俊乘房被_レ送遣ケレハ

本尊奉齎ケル鑪中人給_レ躍返涌不_レ合、然而モ三度入ケレトモ爐中吹出遂ニタマラサリケレハ、且中將罪障懺

悔爲_レ、且爲_レ開_レ未來不信_レ件鏡大佛殿正面坤柱被打付畢。目蓮尊者所持鏡三世事照、百鍊鏡光世超移影鮮也。此

重衡卿鏡只罪業影計浮覽、身毛堅計也。重源上人以此勸進之次、爲_レ令_レ一切衆生結_レ往生極樂之緣、廻_レ一方便

案自_レ出度支度云、定_レ善惡生處事必依_レ蒙_レ炎王裁斷間、閻王問_レ其名字_レ紀_レ善惡二業以_レ阿彌陀佛爲_レ名而奉_レ答_レ于

炎者、王定可_レ隨_レ喜_レ豈非_レ滅罪生善之計哉、如此思案先就_レ我名云、南無阿彌陀佛。仍重源和尙從_レ大佛勸進以_レ降

阿彌陀佛爲_レ名事日本國始矣

法然上人傳卷第三

一、大原談儀事

天台座主顯真僧正者、三條大僧正明雲弟子、顯密兼學、知法高行碩德也。明雲僧正、源平亂逆之時、於法住寺殿、爲凶黨被失命之間、顯真忽發道心、未大僧都、去時承安三年^巳、生年四十三官職辭菩提求大原箱居、先師大僧正村上天王御子、具平親王五代、後胤太政大臣雅實孫權大納言顯通子也。出王種六代去槐門不幾、居四明三千之貫首爲一乘三觀之棟梁、花族過人英才餘身、然今不慮依凶徒之狼戾、逢存外之天死、三界無安猶如火宅、誰不厭離乎云云。然顯真大原箱居之後、十廻春秋送壽永二年九月、日吉御幸時座主明雲黨讓法印叙卜云、^庚共、堅松門閑敢事不隨、只生死難出事歎給。其後衆徒推舉申依、文治六年^庚三月七日天台座主難、被補、請ガウ氣色無間、勅使大原向宣命下座主職授。終被召出

同五月二十四日最勝講證儀勤、同廿八日權僧正任。然而助猶隱遁思深。文治元年春比顯真對面永辨法印出離解脫之計互被相談之處、永辨云委事可有御尋于法然房也。依此言座主^{于時}差使呼相換阿^{法印}聞裂云、登山之次、必令音信給面調欲擊淨家矣。因茲上人先到坂下被示其由、顯真法印折節住山之間、卽下山而問云、何今度可離生死乎。上人答云、佛道事大豈過博覽智解哉。座主云實然也。天台一心三千觀道真言三密同體修行、心之所及修之力之所堪行之。然而未思定決定出離之要術。貴禪通世先達也。若有思得已證義者、開示之給。上人云爲自身者往生淨土徑路以之爲最、此外又無異途。座主云、何輒遂順次往生乎。上人云、自力得道尤難、難得之、他力往生甚以爲易。所以然者、若依善導意者彌陀願力爲強緣。故凡夫卽生淨土泥聖道一途義道勿致此疑矣。座主更無言語歸山之後語人云、法然房智慧雖深遠、太有偏執失云云。人來語此由上人聞云、於不知事者每人皆起疑心、非今適也。座主返聞云、此

事誠爾。吾於顯密法門、雖積稽古併爲名利、不志淨土。此故不親善導釋義、非法然房者誰人如斯可言乎。卽範居大原、數日涉獵淨土章疏之後、又示上人云、吾粗見立淨土法門、今來臨欲法談云云。爰上人欣喜被相、向大原之刻、知東大寺勸進重源和尚未決、定出離道之旨、令其聞要津被示此由。重源率弟子卅餘人來至。上人乃相具令赴大原、顯真又相觸山門南都碩德并所々遁世上人等云、屈法然房可談淨土法門。必令來臨云云。仍來集人々山門惠光永辦法印、石井智海法印、竹林院靜嚴權大僧都、寶地房證眞權大僧都、南都明遍僧都、長慶侍從已講也。又覺什僧都、靜然法眼、仙基律師自元參住大原。其外當所本成房湛敷上人、其弟子蓮契上人、來迎院明空上人、勝林院清淨上人、長樂寺印西上人、定善聖人、往生院念佛聖人、佛心房唯一房以下處々遁世輩、彼此惣三百餘人、集會勝林院文六堂。并龍禪寺其外山門衆徒雲霞如集。見聞男女貴賤不知其數、各蓄杖支度所立若邪義、則可降伏之由也。上人於、

其中淨土一宗法門極淵底、面々諸宗立入深義論談侍。上人天台華嚴法相三論等諸宗付、凡夫初心佛果極位至修行方軌機法相貌具述說、後是等深法皆義理巧妙、利益最勝也。機法相應得益不可廻踵、取證如返掌、金言實也、全無所疑。但如源空、頌魯類、更非其然。然間源空發心後、附聖道門諸宗、廣出離道訪、彼難是難。則世下人愚機法相背故也。此外有智無智不論、不選持戒破戒、時機相應順次生死可離、要法只是淨土一門念佛一行也。一日一夜間法藏比丘普彌陀如來至于今、本願趣往生道不闕、極理盡詞只是自證德分述計也。全其洪器受用非妨給。座主始萬座衆徒皆信伏、一人無疑問者被定。本成房空向如。碩德達褒美云、形見法然上人實彌陀如來應迹也。隨喜餘、座主自香爐取行道高聲念佛唱給。顯密明匠實凝、異口同音三日三夜無間也。凡信男信女三百餘人參禮聽衆數不知。則一願發云此砌五坊立、一向專修行修、稱名外餘行不交、今無退轉。重源上人同淨土法信、念佛行立畢。自其以降洛中貴賤邊土

道俗所々道場念佛勸進セサル無所也。座主上人勸化後、妹禪尼爲被勸書念佛勸進消息、世間流布顯真消息云是也。又湛敷上人發起、來迎院勝林院等始置不斷念佛、凡我朝列時念佛不斷念佛等自此始矣

一、光明照室事

上人闇夜披見聖教、雖無燈明、室內照耀、或時弟子信空恠之見室內、全無燈火於室外見之、光明徹照成奇異想流、隨喜淚矣

一、於東大寺說法事

俊乘房重源善導和尙眞影大唐渡上人奉給。道俗男女始是拜奉、念佛歸依彌深。其外觀經曼陀羅並淨土五祖影奉、渡於東大寺大佛殿雨下、立高座奉請上人於唱導、被供養讚歎之。南京衆徒頗雖無許容之氣、已重源爲大勸進之身、謂定間衆徒不及憤怒爲聽聞。三論法相碩德等數盡集三百餘人。大衆各ハタニ腹卷著、高座際並居、自宗等問懸答ヘンニ訛謬アラハ可與恥辱之由、倉儀成用意所、上人先讚歎供養五祖眞影、以三論法相深

義無滯言後、末代凡夫出離要法口稱念佛無如。念佛謗輩可墮地獄由、吐無得辨說解說給ケレバ、三百餘人大衆ヨリ始、隨喜渴仰無極。サテ其次天台十戒解說給。吾山大乘戒、此寺小乘戒トノ給ケレハ、大衆存外氣色共也ケレドモ、當寺古老中兼日示靈夢事有、件次第先立披露シケレバ、衆徒各閉口隨喜、嗚舌即稱美云、見形者法然上人也。謂才智恐是釋迦如來歟可貴云云トテ無別事說法畢。油藏人給ケルニ、惡僧一人上人ニ向奉、抑念佛誹謗者可墮地獄者、何經說侍哉ラント申ケル間、上人大佛頂經是也、分明答給ケレバ、彼僧手合後生助給、上人則御共油藏奉入

一、於清水寺七日說戒事

建久元年庚戌秋比於清水寺七日說戒、衆又令稱揚淨土法門。子時有左衛門入道法阿耆、龜居仁和寺奥鳴瀨夢參詣吉水處內陣種々莊嚴舞臺廻廊敷疊迎、其砌貴賤充滿其中、上下群集其砌。又大門有著赤衣之人其數十餘人、其體似檢非違使、車馬多頭立。又天童二人差

幡向西自廻廊步來矣。時法阿闍憐人云當寺有何法會乎。答云是法然上人於此御堂七日可有說法之間、彼御迎相向天童也云云。夢覺恠思處、明朝上人御弟子眞阿彌陀佛來告云、此程右馬入道西念勸進、於清水法然上人說戒之次、被演說淨土法門、何不被聽聞哉云云。爰法阿思合昨夜夢隨喜、仍相伴眞阿彌陀佛、即詣清水寺三日之程令聽聞處、重感夢想云、自舞臺下蓮華多生出、一高大餘微少。上人折取小蓮華與諸人給見覺畢。案此夢依上人發導信念佛之者、皆以可往生極樂之相也。法照釋云、此界一人念佛名還迎文思而可知者也

又仁和寺入道親王御室夢想云、上人於高座上瀧水方差指、告聽聞諸人云、瀧過去有之、現在有之、未來可有之。是則大日如來鑿字智水也云テ令詠一首哥云
清水ノ瀧ヘマイレバオノツカ
ヲ現世安穩往生極樂ト云云。法親王感此夢即以「大威儀師俊緣爲御使、被注送上人」七日說戒最中也

一、於瀧山寺常行三昧勤行事

寺家大勸進沙彌印藏於瀧山寺道場、始行常行念佛三昧、能信範義等手執香花、唱佛號行道周遍迺一心勤修。上人爲導師七日說法。聽衆不知數、隨喜百千萬。爰自南京興福寺一人童來、日々聽聞、其名云石金丸。心中念言、吾受人界生下賤而愚癡也。出離生死道曾無辨知事、沉輪惡道、更以無疑、今幸逢上人化導、聞得往生要道、懇彌陀本願稱念名號、可預來迎、接事決也。思定下向畢、終發心出家、東山松苑寺邊依有所緣、寄宿之所、俄身心不例之間、緣者相勞之經三日及獲麟、被扶起人之水漱口、端座向西合掌、念佛聲漸微氣將絕、開目舉頭最後宣一言云、嗟呼穴貴穴貴、其後又續氣念佛十餘返唱畢、如眠往生。于時有一聚雲紫白相交西來西歸。又有微妙樂絲竹調吟幽而空鳴。驚此奇瑞來集之者不知其數。然間清水寺々僧能信植、如法經紙草雖爲千日縮山之身、依思往生人之結緣來松苑寺訪、聞臨終有樣爲言語道斷之次第之間、不堪感歎、供奉葬途之庭、勤棺前火役、還來于本坊處、異香染衣數日更不消矣

一、耳四卽事有別紙之

一、靈山寺三七日念佛事

建久元年九月比於靈山寺三七日勤行別時念佛。第五日夜半聽衆中有睡眠輩一兩、如夢見道場內行道衆中勢至菩薩列廻。驚覺看之猶以如菩薩形、良久瞻仰之見成上人御質、明朝兩人共奉語此夢於上人、默然無返答。至第七日夜、及曉更道場燈明消、雖然堂內猶不暗、時衆不作意之、聽衆中思念道場無燈火何光哉。時性良久時衆灯明消タル由告示、其時佛前俄暗奇特事也

一、西山善惠聖人事

善惠上人天曆聖王御後入道加賀權守親季法名息也。一

門ヨシミ深幼稚昔久我內府通親公猶子タリキ。漸元服

沙汰侍、童子菩提心住偏出家望。父母更是不許、于時生母忍一條返橋々占問、一人僧有真觀清淨觀廣大智慧觀悲觀及慈觀常願常瞻仰誦、東西行。生母是聞落淚甚。內府此由聞給宿善內催事感出家許。時師範沙汰侍シニ童子申、願法然上人弟子不然者出家其詮無、仍建久元

年十四歲遂上人室入常隨給仕弟子、淨土法門殘所無人心得安爲、白木念佛云事、常仰レキ、自力人念佛色取也。或大乘悟以色取、或深領解以色取、或戒以色取、或身心調以色取覽思也。定散色取アル念佛仰ラレタル也。往生無疑悅也。色取無念佛ヲ往生失歎也。歎悅共自力迷也。大經法滅百歲念佛、觀經三品念佛、何色取無白木念佛也。本願文中至心信樂稱我名號釋給ヘルモ、白木成返心也。所謂觀經下品下生機、佛法世俗一種善根無善凡夫ナル故、何色取一無、沉死苦責ラレテ忙然トナル上、三業共無正體機也。一期惡人故、平生行ノサリテ惡ベキモ無、臨終死苦逼ラル故、止惡修暴心、大小權實悟返心不置、起立塔像善、此位不可叶、捨家棄欲心此時發難、誠極重惡人也。更他方便有無、若他力領解有。名號不思議念ヘキト苦逼ラレテ、次第失念間、轉致口稱、汝若不能念應稱無量壽佛云時、意業忙然トナリナガラ、十聲佛稱スレバ、聲々八十億劫罪滅、見金蓮華猶如日輪益預也。此位機道心一無、定散色取一

無、只知識教隨計。別ノサカシキ心無、白木唱往生也。噯少物手取物書セシガ如シ。是少兒高名哉。下々品念佛又如。只知識彌陀御心繞口唱往生遂也。彌陀本願分五逆深重人爲難行苦行願行故、失念位白木念佛佛五劫兆載願行ツ、マリ入無窮生死一念ツ、メテ僧祇苦行一聲成也。又大經三寶滅盡時念佛白木念佛也。其故大小乘經律論皆龍宮納三寶悉滅ナン。閻浮提只冥々衆生惡外善云名ダニモ更不可有。戒行教律滅何教依止惡修善心有ベキ。菩提心說經先立滅、何經依菩提心可發。此理知人世無、習知スベキ道無、故定散色取皆失ヘテタル白木念佛、六字名號計世住也。爾時聞一念皆當得生彼ト説、此機一念十念往生佛法外人只白木名號カ往生也。然當時ヘ大小經論盛ナレバ彼時衆生事外勝タル機也ト云。人有下機我等三寶滅盡時人替事無、猶佛法流布世、身獨三學無分機也。大小經論有愛敬思志無シ。カ、ル無道心機ヘ佛法逢甲斐無身也。三寶滅盡世ナラバ力及方有ベシ。佛法流布世生乍戒不持、定慧修行

セザルコソ機拙、道心無程顯レヌレ。カ、ル愚ナル身ナガラ、南無阿彌陀佛唱處、佛願行悉圓滿故、此白木念佛忝ナキニテヘ有也。機於安心起行實少、前念皆愚ナリ。妄想顛倒迷日逐深、寤寐惡業煩惱ニノミホダサレ居タル、身内ヨリ出念佛最煩惱替ルベシト覺ヘヌ上、定散色取一無、稱名ナレト前念名號諸佛滿足攝故、心水泥濁不染、無上功德生也。中心不副申生信ジテ、ホレポレト南無阿彌陀佛唱本願念佛有也。是レラ白木念佛云也云云。當時自力根性人、念佛付色々採色加行指南トスル人々可有也。是併上人弘通正義不知故也。善惠上人如此化導年舊後、行年七十一寶治元年十一月廿六日午刻、種々奇瑞顯端坐合掌念佛二百餘返唱往生遂ラレケリ。當時西山義小坂義號彼善惠上人門流也

一、後白河法皇被摸上人眞影事

建久二年春比、依後白河法王敕喚、上人參仙洞、説大乘戒、奉授法王、以其次令談往生要集、法王御隨喜之餘、召右京權大夫隆信朝臣、被摸上人眞影。件御影者被納

蓮華王院寶藏畢。其後處々圖之人々敬之

一、熊谷入道發心事

熊谷入道連生ハ宇津宮入道同名也。智心傳也或傳云戀西或傳云法力云云。

始伊豆國走湯山參籠シケルガ、上人念佛弘通次第自京都下ケル尼公語申ケルヲ聞、則上洛、先澄憲法印許可入見參之由、申入對面相待程手スサミニ、刀ヲトギケルヲ何ニ事ノ料ゾト人申ケレバ、是參ル後生事ヲ尋申サン爲也。若腹ヲモ切命ヲモ捨テテ後生助カラントスルト承バ、ヤガテ腹ヲモ切ン料也トゾ申ケル。法印此事聞給、サル豪者ナレバ定存知有ラントテ後生助道法然房可被尋申。使副上人引導セラレケレバ、上人參後生事尋申ケルニ、念佛ダニ申セハ往生ハスル也。別事無被仰ケルヲ承テ、早面々々ト泣ケレバ、ケシカラヌト思召物モ不被仰、暫有後何事泣給ゾト被仰ケレバ、命モ捨テ手足ヲモ切りテゾ後生ヲ助ランズルゾト承ランズラント存ズル處、其義相違只念佛ダニ申セバ往生遂ルゾト、安くト仰ヲ蒙レバ、餘リ嬉シクテ

泣シ侍由申ケレバ、一文不通之荒武者也ト云ヘテ、實ニ後生恐氣顯ケレバ、無智罪人念佛申往生スル事本願正意也トテ、口稱念佛凡夫直往之要路ナル由、常示給ケレバ、無二心專修行者ニテゾ有ケル。若命ヲモ捨テ後生助カレトナラバ、腹ヲ切ラン爲用意ニ持タリケル刀ヲハ念佛申可往生ニ由、承定メタル上トテ、奉上人ケレバ上人ヨリ津戸三郎給テ秘藏シケリ。或時上人月輪殿參ラセケルニ、熊谷入道推參ケルヲ止バヤト被思召ケルニ、サル曲者ナレバ中く惡カリヌト思召、無破仰ケレバ、月輪殿マデ參リテクツヌギニ伺候縁ニ手ヨリ懸侍ケルガ、御談義音幽聞ケレバ、此入道申ケルハ、哀穢土程口惜キ處アラジ、極樂ヘカ、ル差別ヘ有マジキ物ヲ、談義御音聞ヘバコソトシカリ高聲申ケルヲ、禪定殿下聞召、コヘ何物ゾト被仰ケレバ、熊谷入道トテ武藏國ヨリ罷上タル曲者候ガ推參ニ供ラシテ候ヒキト覺候ト、上人申ケレバ、ヤサシク何ニカ苦シカルベキ、只召トテ御使出サレテケルニ、一言辭退ニモ不及、

ヤガテ召隨テ圓座給、近伺候聽聞仕ケリ。往生極極當
來果報、猶遠忽昇殿許、今生果報感ケルヲ、本願念佛
不行者爭此位可及哉ト、耳目驚テゾ見ケル。角テ三心
具足專修專念行人也。行住坐臥忘不背西、涕滯便利假
不向西。若關東下向時側身行歩、逆乘進馬念々相續畢
命爲期外他之無リケルガ、建永元年蓮生明年二月八日
往生スベキ也ト申處、若不棄殘サン人へ、來臨可見知
由

武藏國村岡市庭札立ケル間、傳聞輩遠近不分武藏相模
甲斐信濃越後上野等國々ヨリ熊谷宿所群集スルコト幾
千萬云事不知。已其日成ケレバ蓮生未時沐浴禮盤登高
聲念佛體資事醫物無、暫有蓮生目開、今日往生延引ス
ベシ、來九月四日必本望可逢、其日各來臨有ベキ由ヲ
示ケレバ群集諸人謗成歸。蓮生妻子眷屬等人嘲悲ミ、
蓮生ガ無實歎ケレバ、彌陀如來御告依來九月契處也、
全蓮生私計非、九月往生若猶延引セバ、彌陀如來御處
言ナルベシ。更ニ蓮生ガ不實ニハ不可處ト事々シゲニ

ノ申ケル。切隙行駒足早ケレバ、九月四日ニモ成ヌ。
後夜沐浴ノ漸臨終用意。諸人又群集スルヲ盛ナル市ヲ
成ス。蓮生洛陽ヨリ武州下ケル時、來迎彌陀三尊無數化
佛菩薩上人之意樂書セラレテ祕藏セラレケル、京ツト
ニ給リタリケルヲ、臨終佛ニハ奉懸。禮盤ニ登テ端坐
合掌高聲念佛熾盛已剋念佛共息止リニキ。時口ヨリ小
光放ツ。長五六寸也。紫雲目澄音樂耳驚ス。異香室滿。
天地震動セリ奇瑞非一。諸人詞絶。翌日子剋入棺ス。
此時マテ異香音樂等瑞相如元。同卯時至迄紫雲西ヨリ
來家上止事一時餘有テ後、西天指上リニケリ。此等瑞
相等遺言任セテ聖覺法印許注送ケリ。本願稱名不思議
諸佛證誠々言實、言語及所非、貴云ヘンモ返テ愚ナル
者哉

一、御室奉請上人事

建久二年夏比、仁和寺法親王爲御受戒被請上人之處
辭退之。源空遁世隱居之身也。不足御受法器世嘲人々
謗旁以有共憚、其後内々被仰下云、御受法之條者非眞

實、御本意御心中只往生極樂安心爲被尋聞召也云々。

上人喜參入委ク被宣法門之間、御室殊以御隨喜矣

八條院 殷福門院 宣陽門院 七條院准后宮

奉始、大臣諸卿戒文受者、念佛歸依天下充滿セリ

法然上人傳卷第四

一、禪勝入淨土門事

遠江國蓮華寺禪勝房、依熊谷入道之勸參吉水禪房、無

智ノ惡人往生極樂淨土事侍ルナルヲ承ラント申ケレバ、

上人被仰ケルヘ其極樂主ニテ御座阿彌陀佛コソ、何事

ヲモ不知罪人共諸佛菩薩ニモ捨ヘテラレ十方淨土門指

タル輩、安々ト助救云願ヲ發シ、十方世界衆生ヲ來迎

給佛ケヨ。賢コソ思ヒ寄給ケル心ヲ閑能々可聞。唐土

日本奉渡一切經五千餘卷也、其中往生極樂爲トテ雙卷

無量壽經觀無量壽經小阿彌陀經是淨土三部ト名ク。無

量壽經昔法藏比丘ト申入道四十八願ヲ發ノ極樂淨土建

立ノ眞實ニ往生セント思フ衆生ヲ迎置テ、終ニハ佛成

給フ也。佛成ラント思人へ、先ヅ極樂可願也。法藏比

丘一切衆生ヲ平等ニ往生セサセン料、我佛成タラン時

ノ名號ヲ稱念サセント云願發給ヘリ。四十八願中第十

八願是也トテ、本願由來念佛可往生趣、委ク仰聞セラ

レテ後、一百餘日伺候シテ條々不審上人ニ尋申ケル中

ニ、一ノ疑云、三心ノ事ヲ尋ネ申ケルニ、上人言三心

ヲ具スル者へ彼國ニ生ト説給ヘリ、此三心ハ本願ノ至

心信樂欲生我國ノ文ヲ成就スル文也。然則念佛セン人

へ、此ノ三心ヲ具シテ可念佛也。一至誠心ト云ヘ阿彌

陀佛奉頼心也、二信樂心ト云ヘ常名號頼後生無疑心也、

三回向發願心云往生衆生利益思也。譬以云、人有一太

刀持此太刀御身作給、人問、我手デ何事モセヌ者ニテ

候人ノタビテ候也ト答ヘバ、人モ奉セタレ和殿爲ニハ

財カト又問ヘ、サ候ト答フ。太刀ヲ儲ルヘ至誠心也、

此太刀大事物也アダニセジト思深心也、サテ希ニモモ

チ物切ランヘ回向發願心也。如此本願逢至誠心也。名

號持當唱餘行云、壞レザルハ深心也。往生セント思フ
ヘ回向心也。又女人三心教時、御前袋一儲御座。開見
萬財入、袋儲至誠心也。此袋大事物入タリアダニセジ
ト思深心也。中有物取出々々要事仕回向心也。如爾遇
本願袋儲タルガ如シ。此ノ名號中阿彌陀佛初發心乃至
佛成給六度萬行一切功德作集名號納、衆生與給ヘル名
號ナレバ、愚カニセジトテ別解別行人不云破、南無阿彌
陀佛唱バ不思議本願ナルニ依テ罪人共淨土迎ヘラレ生
死ヲ離レンズランウレシサヨト思ヒ堅テ、若手フサカ
ラハ數不取、命終セン迄口ニ常唱深心云也。又云樣譬
人敵持敵剛物、我弱クシテ打及ザランニ、我敵勝タル
ツワ物我ヲ恐バ打テ取セント云ヘンニ、喜憑官仕セハ
約束不違敵打也。打物頼至誠心也。官仕深心也。敵打
回向發願心也。如爾我等衆生無始以來惡業煩惱敵責メ
ラレテ六道四生輪廻生死可離樣無、阿彌陀佛我歸我憑
煩惱敵打得サセント御誓有佛頼奉ヘ至誠心也。名號唱
無懈、佛官仕奉深心也。最後臨終來迎預生死離廻向發

願心也。三心具計易事無人教被仰ケル。又一疑云、三
心具スベキ次第ヲカヤウニ習奉侍ヌレバ、此身三心具
侍。在家人三心義不知、習候ヘデ只念佛計申侍ランニ、
此三心具スマジク侍哉ラント。上人言、三心云ハ一向
專修念佛者成道教也。無智罪人也凡一向專修念佛者成
皆悉三心具足往生事、決定也。故習知一向專修成人有、
三心云名知ラザレバ、一向專修念佛者成人有、一向佛
願憑奉至誠心也。深信名號唱念々相續畢命期退轉無深
心也。往生欣回向發願心也。譬手ツ、ナル者手キ、タ
ル物ヲ得タルガ如シ。衆生手ツ、ニテ萬ツノ功德作ザ
レバ、阿彌陀佛萬功德作集名號納、衆生ニ與ヘ給ヘル
也。又人子幼ケレバ、親慈悲重萬財儲子護如。三心教
又多レバ、如此得心被仰。又一疑云、本願一念平生
機、臨終機、可通乎ラント申ケレバ、一念願命ツマ
リテ二念不及、機爲也。上人一形凡釋念々不捨者是名
正定之業判給、是則平生機也。本願值遲速不同アレバ
上盡一形下至十聲一聲發給也。必一念佛本願云不可。

一念十念本願ナレバ、強勵スル有ナンナト云人有大誤也。設我得佛十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正覺云、本願文中平生機臨終機、乃至平生機十念へ臨終機也。平生機乃至十年申生、乃至一年申生、乃至一月申生乃至一日申生、乃至一時申生。是皆壽命長短發心遲速依也。此等皆一度發心後淨土申ベキ尋常機也。臨終機ト云ヘルハ、命一念十念促後、知識教依テ始本願ニ逢機也。臨終機爲發一念十念平生引上一念十念生念佛也。往生不定不可思、申人ユ、シキ謬也。念々不捨者は名正定之業、順彼佛願故釋本願中乃至機上盡一形數返勵、本願相應スベキ道理釋給也。一念ニ往生定リヌト信ジテ、念佛懈怠ナラン人、信以行妨タグルナリ。又數返功ツンデコソ生ルレ、一念十念不可生云人行ヲ以信妨タグル也。然則信一念生信行一形勵ベシトゾ被仰ケル。又一疑云、持戒者念佛數返少候ト、破戒者念佛數返多候、往生後位淺深何候ベキゾト申ケレバ、疊指言、疊有付コソ破タルト不破ノ論也。全疊無如此、

破不破ヲ論ゼンヤ。其様末法中持戒破戒無、只名字比丘有。傳教大師末法灯明記委此旨明給。其故持戒破戒沙汰不可有、如此凡夫爲發處本願也。急急名號可稱トゾ被仰ル。又一疑云、念佛行者毎日所作聲立人有、亦口唱心念同名號ナレバ、何皆往生業可成。但佛本願稱名立給故ニ、聲可立也。經令聲不絕具足十念說、釋稱我名號下至十聲判給ヘリ。我耳聞ケル程高聲念佛スル也。但機嫌ヲ不知非可高聲地體聲出可思也。又一疑云、餘佛餘經付結緣助成センコトハ雜行可成候ラント申ケレバ、決定往生信取、我身佛本願乘ジテノ上。他善根結緣助成事、全雜行不可成。往生助業可成也。善導釋中已他善根隨喜自他善根以淨土回向判給ヘリ。此釋以可知也。又一疑云、自力他力申事何様心得侍申ケレバ、源空無云甲斐邊國土民也、昇殿スベキ器非云共、君ヨリ被召カバ、二度殿上參リタリキ。是全可參非器眞上御力也。此之定極重惡人無他方便ノ凡夫、會テ報身報土極樂世界詣器アラネハ阿彌陀佛御力ナレバ、

稱名本願ニ酬、來迎預事、何不審可有、我身罪重無智者ナレバ、何往生遂不可疑。左様疑者、未佛願不知者也。如此罪人渡爲發所本願也。此名號唱ヘナガラ、努力疑事不可有。十方衆生願中、有智無智有罪無罪、善人惡人持戒破戒、男子女人乃至三寶滅盡後百歲間衆生漏事無、彼三寶滅盡時、念佛衆生當時汝等是並、當時人佛如也。彼時人命長十歲也。戒定惠三學其名不聞云ヘリ。此等衆生迄念佛スレバ來迎預ルベシト、乍知我身捨ラルベシト云フ事ヲバ如何心得可出哉。但極樂不欣、念佛申サレザラン計リ、往生障トナルベシ。念佛ニモノウキ人へ無量寶ヲ可失也。念佛勇アル人へ無邊ノ悟ヲ可開人ナリ。相稱テ願往生心念佛可相續也。我力デハ思寄ルマジキ罪人、念佛故本願乘、極樂詣他力願ニ超世願ニ云也ソ被仰ケル。又上人言、案内不知人機疑不往生也。道心者智者ナンドノ念佛コソ往生シ給フラメ、明暮罪ヲノミ造リ一文字ヲダニモ不知者、念佛申ニ往生不定也ト疑フ。本願善惡機兼發給ヘリト不

知人也。念佛機只生付儘ニテ申テ生ル、也。先世業依生タル身ヲバ、今生中へ改メ直サヌ也。女人男子ト成ント女思ヘニ、今生内ニハ不叶如シ。只生付マ、ニテ念佛ヲバ申也。智者々々ナガラ申生、愚者愚者ナガラ申生、道心有人申生、道心無人申生、邪見生タル人申生、富貴者貧賤者、欲深者腹惡者、慈悲有者モ、無慈悲者、本願不思議念佛ダニモ申セバ皆往生スルナリ。噫日出地高位不躡皆照、月明水淺深不簡影浮如。念佛一願萬機攝發給本願也。只コサカシク機沙汰ヲバセスシテ、勸申セバ皆悉往生スル也。サレバコソ佛十方衆生ト手廣願發給、念佛人時雨如極樂生、佛説玉ヘリ。若心調身慎念佛生ルトナラバ、ヤワトキ雨如、可生、又カ、ル願ナレバトテ態トフテカ、ツテ惡口カレトニヘ非ズ。本願手廣不可思議ニマシマス様ヲ申計也。念佛往生ノ義ヲ堅ク深ク申ヲバ、ツヤ／＼本願不知人可心得。源空身ニモ檢校別當申位ニテゾ往生セシズル。本然房ニテヘエン候ハジ。年來習タル智恵往生爲要不

可立、サレテ習タル甲斐ニハ如此知タルハ無量事也ト
 ソ被仰ケル。又一疑云、臨終一念百年業勝タリト申候
 下ハ、平生中ハ臨終一念程念佛申出マシク候哉ラント。
 上人答云、具三心者必生彼國被仰タレバ、三心具足念
 佛百年之業モ勝レタル、臨終一念同事也。必文字有故
 トソ被仰ケル。又一疑云、八宗外淨土宗立事自由任事、
 餘宗人申候如何申ベキト。上人云、宗名立佛說非自志
 所經相付存タル義ヲ悟極宗判事也。諸宗習以如此。今
 淨土宗之名立淨土正依經付、往生極樂義悟極給先達宗
 之名立給也。宗起不知愚者、左様事云也。抑淨土一宗
 諸宗超、念佛一行諸行勝云事、萬機攝方云。理觀菩提
 心讚誦大乘眞言止觀等何レモ佛法愚マシマスニ非ス、
 皆生死滅度法ナレテ、末代成ヌレバ不及力、行人不法
 ナルニ依、機不及也。時云末法萬年後、人壽十歲促、
 罪云ハ十惡五逆罪人也。老少男女輩一念十念類至皆是
 攝取不捨誓コモレル也。故諸宗超諸行勝タリトハ申也
 トソ被仰ケル。又奉問云、後生彌陀如來本願奉馮候

バ、往生無疑候。現世何思存ベク候哉ラン。上人答言、
 可過現世様念佛申サレン方ニ依可過。念佛妨可カラ
 ンコトバ可捨。一處不申者修行可申。修行不申一所
 住可申。聖不申者在家成可申。在家不申者遁世可申。
 獨籠居不被申者同行共行可申同行不申者一人籠居可
 申。自力衣食不叶不申者他力被助可申。他人助不申
 者自力可申。念佛第一助業米過無、衣食住三念佛助業
 也。能々可因、妻孥事自身助念佛申爲也、念佛妨可成
 努力々々不可持、從類眷屬如此、可知領所儲事惣念
 佛助業大切也。可成妨者努力不可持。凡是云、自身
 安穩念佛往生途爲何事皆念佛助業也。三途歸ルベキ事
 スル身ダニモ難捨者願育。増往生スベキ念佛申サン身
 ヲバ何々育可願。假染忽緒スベカラス。能々可痛也。
 念佛助業ナラスシテ、今生爲身食求スルハ三途業成被
 仰ケル。禪勝房條々不審共承開後暇申、明日下向スベ
 キ由申ケレバ、京ツトニセントシテ名句被仰ケルハ、
 聖道門修行智惠極生死離、淨土門修行愚痴還極樂生可

生心得トソ被仰ケル。本國歸後、偏上人勸化旨信、無二心念佛行年八十五歲正嘉二年十月四日寅刻、念佛相續種々之靈異施、端坐合掌往生ヲ遂ラレキ

一、後白河法王崩御事

建久三年壬子三月十三日法王崩御^{六十}、宿善開發君也。

御駕御逆修高野詣御登山勝地名所極^三寂覽^三驗佛靈社盡臨幸、四明即受大乘戒三井又傳密教、東大寺追聖武帥創跡開眼金銅靈像、法勝寺齋、白河院御願建立九重寶塔、普天雨苦行名、四海浮慈悲影、三密護摩觀行二萬二千餘座、一乘法華轉讀七萬八千部也。此外被造寫一切經三部、被止御魚貝被禁殺生六齋、凡事理善根不知其數、自利々人爾許多哉。往生極樂朝暮仰望也シカバ、臨終正念不亂、瑜伽振鈴響限其曉、普天晝悟率土露滋シテ、草尙愁容、沉西蒨陵松哉、邊雀猶哀聲也。沉洞庭霍大宮櫻宮染袂引替卯月松敷懸藤衣成リニシ仁流秋津洲之外、惠茂筑波山之影、淵變爲瀨之聲寂々閑口、砂長爲巖之頰洋々滿耳^{風吹又御代ニモ花ソ思ヒ出ル入ニモ月ノ春ノヲモカケ}

同年秋比前大和守親盛入道見佛於八坂能引導寺、爲法王御菩提修七日念佛。時衆住蓮安樂眞阿彌陀等也。六時禮讚聲名其比迄人未知之、仍住蓮等成評定之處、能信感夢想云、自西方六羽鳥飛來、其形似孔雀鸚鵡等、其音微妙哀宛雅亮也、此鳥嚶六時禮讚、起居禮拜行道旋遶、此夢語住蓮等各隨喜云、是諸衆鳥皆是阿彌陀佛變化所作鳥也、佛我等加被令調其音曲給也云、能信投法則住蓮作聲名。六時禮讚聽聞自此念佛始之矣

一、無品親王被請上人事

無品親王靜惠御所勞火急之間、門徒高僧爲御祈禱被轉、諷大般若經、然而猶無御平愈之氣、仍招請上人、臨終次第往生極樂安心委有御尋。法親王仰云、如何今度可離死哉。上人願後生助玉ヘト云。上人啓云、出離要路不如往生々々正行正在念佛、本願有願引接無疑也。然者佛說云、光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨云ヘリ、其後念佛不懈御臨終正念住給。當座參會人々、行舜僧正^幸相公胤僧正^大覺實僧正^{左大}顯惠法印公雅法印^幸相

道嚴法印信觀法印圓蒙法眼大綱皆以所見聞也。法印公雅法印道嚴法印信觀此三人之法印、障子中其形貌不見、後交名見是注所也、大般若轉讀人々也

一、津戸三郎入淨土門之事

津戸三郎菅原爲守生年十八歲、治承四年八月右大將家于時石橋合戰時、武藏馳參房州越時、同參向、所々兵衛佐合戰忠至重々御感預、以來關東御家人號、東大寺供養爲建久六年二月暮下御上洛時、生年卅三歲供奉シタリケルガ、三月四日入洛。同卅一日法然上人參ノ合戰度々罪障懺悔念佛往生道承。後在京間常參下向後更他門不望、但信稱名行者成念佛行不懈ケルヲ、人有熊谷入道津戸三郎無智者餘行依雜叶、念佛計勸ラレタレ、有智者必不可限念佛申ケレバ、津戸三郎其子細上人尋申ケル時、此一事不限、條々不審尋申サレケルニ付テ、同年九月十八日上人御返答詮取載之。一、熊谷入道津戸三郎無智者ナレバこそ但念佛ヲバ勸メタレ。有智人必念佛不可限申由聞候ラン、極タル僻事候。其故念佛

行自本有智無智不限、彌陀普誓給本願、普一切衆生爲也。無智爲念佛願、有智爲餘深行願給事無、十方衆生內廣有智無智有罪無罪善人惡人、持戒破戒貴賤男女若佛世衆生若佛滅給後此比衆生、若釋迦末法萬年後三寶皆失折衆生皆攝給也。又善導和尙彌陀化身、專修念佛玉ヒツルモ、廣一切衆生之爲勸無智之人限事候ズ。廣彌陀願馮普善導勸弘者、何無智人限有智人隔、若然者彌陀本願背善導御心不可叶。サレバ此邊詣來往生道問候人、有智無智不論皆念佛行計申也。然虛言搆左様念佛申留ムル者、先世念佛三昧淨土法門不聞、後世又三惡道歸ベキ者可然。左様事巧申事ニテ候也。其由聖教皆見候也。見有修行起瞋毒、方便破壞競生怨、如此生盲闍提輩、毀滅頓教永沉淪、超過大地微盡劫、未可得離三途身、申也。此文意淨土願念佛行者見、瞋起毒心深含、計事廻、様様方便成、念佛行破、諍怨成、是止メントスル也。如此人生以來佛法眼盲、佛種失闍提輩也、此彌陀名號唱、永生死忽切、常住極樂往生云、頓

教御法謗滅、此罪永三惡道沉ト云ヘル也。如此人大地
微塵劫過、三惡道身離事不可得云也。サレバ左様虛言
巧申候ラン人へ、返テ哀ムベキ者也。左程物申依念佛
疑成、不信發者云足程事コソ候ヘメ、大方彌陀緣淺、
往生時至者聞不信行、見腹立願合妨ニスル事ニテ候也。
其心得何人申御心計ユルガセ給ベカラズ。強信ゼザラ
ンハ佛猶力及給ヘジ。何況凡夫力及候マジキ事也。カ
、ル不信衆生爲、慈悲發利益思付、疾極樂詣悟開、生
死還誹謗不信者渡、一切衆生普利益思ベキ事ニテ候也。
此由御心得御座、一家人々善願結緣助成事、左右及候
ヘズ。尤可然事ニテ候。念佛行妨事コソ專修行制シタ
ル事ニテ候。人々或堂作供養力加、緣結念佛妨專修ヲ
障程事ニテ候マジ。此世祈佛神申事其苦ク候マジ。
後世之往生念佛外ニアラヌ行ヲスルコソ、念佛ヲ妨レ
バ悪シキ事ニテ候ヘ、此世爲スル事ハ、往生爲ニハ候
ヘネバ、神佛祈更苦カルマジク候也。念佛行本行住坐
臥時處諸緣不嫌行候ヘバ、縦身穢口キタナク共、心清

メ申サセ給ハン事、返シ神妙ニ候、隙無左様申サセ
給マフ、返々難有目出度候ヘ。何かナラン處、何ナル
時也_レ、不忘申サセ給ヘ、往生業必成リ候ハンズル
也。其由御心得同心人教サセ給ベシ。何かナル時ニモ
申サ_レランコソ、心ロシテ申サバヤト思候ベキニ、申
サバヤト思候ベキニ、申サレンヲネラシテ、申サセ給
ヘヌ_レハ、何かデカ候ベキ。只何かナル折モ、不嫌申
サセ給ベシ。一、念佛行強信ゼザラン人論ジアイ、又
アラヌ行異悟人ニ向テ、イタクシイテ被仰事候マジ。
異解異學人見是恭敬輕嘲事勿レト申タル事ニテ候也。
サレバ同心極樂願念佛申サン人ニハ、縦塵刹外人也、
同行思成一佛淨土生可思事候也。彌陀佛緣無、極樂淨
土契少候ヘン人信不起、願無候ヘンニハ不及力、只心
任何勤、後生助三惡道離事、人心隨勸候ベキ也。又サハ
候ヘ_レ、塵計叶候ベカラン人ハ、阿彌陀佛ヲ勸、極樂
願ベキニテ候。何申_レ、此世人極樂生、生死離念佛ニ
非、極樂生事候マジキ事ニテ候也。此間事人心隨可計

候也。何様ニモ物諍事努力候マジ。若誘信ズザラン物、久ク地獄在、又地獄へ歸ベキ物ト、能々心得、後還誘ベキニテ候。又ヨモトハ思奉候へテ、何ナル人申申念佛ノ御心ナンドタチロキ思召事有ルマジ。縱千佛世出親教サセ給レ、是釋迦彌陀始恒沙佛證誠セサセ給事ナレバト思召、志金剛ヨリモ堅シテ、此度必阿彌陀佛御前詣ナント思召ベク候也。如此事何端申ニ、御心得我爲人爲行給。穴賢々々 津戸三郎殿御返事云云

一、選擇集記事

建久八年^{丁巳}上人六十五聊不例事有、平愈給ケルニ、月輪禪定殿下御形見淨土要文集可賜之由、清兵衛尉經重以御使、就被仰送。選擇集被書時、安樂房執筆要文被集ケルニ、我若翰墨堪身無カラマシカバ、豈此佛法棟梁役勤哉申間、此僧僑慢心深惡道可墮トテ、是退ケテ進士入道眞觀以被執筆ケリ。建久九年功終選擇集月輪殿被持參ケレバ、上人存日之間可被秘藏、更不可及。披露、依被禪定殿下仰門弟件集被授之時者、或此書ヲ

寫シ末代可廣哉云、或源空存生間不可及披露シテ、只滅後流行志、深存日披露被痛申ケルハ、偏月輪殿仰ヲ被揮申ケル故也

一、三昧發得事

上人行業歲積、念佛功闌、建久九年正月以來極樂莊嚴化佛菩薩拜給事常有。彼三昧發得次第秘藏人不被^レ知、沒後深流布所也、高野僧都明遍遁世後號空阿彌陀佛 披見、隨喜淚被流ケリ。彼自筆記云、生年六十六建久九年^{戊午}正月一日恒例正月七日念佛是始行、一日明相少現自然甚明也。二日水想觀自然成就、都七日中地想觀中瑠璃地少分現。二月四日朝瑠璃地分明現矣

第六日後瑠璃宮殿現、第七日朝重復現、自正月一日至二月七日惣三十七日之間、水想地想寶樹寶池宮殿等五觀現矣。此則毎日七萬遍念佛不退勤修故、依此等行所現也。自二月十五日於明處開自自眼根出、生赤髮見瑠璃臺、先是閉自見之、開自失之。自二月廿八日、依病退念佛、或一萬返或二萬行之。其後右目放光明、

如瑠璃靈々々々有赤花如寶瓶。又日沒之後出見四方
每方有青赤寶樹其高無定、高下隨意或四五丈、或八二
十丈也。自八月一日如元七萬返始之。九月廿二日地
想分明現矣。周圍可七八段也。同廿三日後夜及朝且又
分明現矣。正治二年庚申二月之比地想等五觀、行住坐臥
隨意任運現

建仁元年辛酉正月五日西持佛堂勢至菩薩御後ニ、丈六計
ナル御面三度現矣。推之此菩薩既以念佛爲所證法門
故、爲念佛者示現其相不可疑矣。六日座處下四方一
段計青瑠璃地現、於今者依經釋往生無疑。地想文云、
心得無疑故可思之。二月八日後夜聞鳥音琴音笛音等
其後又隨日自有聞種々音聲。同年壬戌十二月廿八日午時
於持佛堂調高昌少將、其間如例修念佛見阿彌陀佛御
後障子透徹佛面現、大如丈六佛面、忽以隱畢。元久三
年丙寅正月八日念佛之間三尊現大身、五日復三尊現大身
已上記文。右三昧發得記者上人給仕弟子勢觀房源智相傳
之、而源智存生之間神祕不被露、沒後所流布也。上人

常口付誦給文云、上來雖說定散兩門之益、望佛本願意
在衆生、一向專稱彌陀佛名文

如此心靜、稱名念佛給時、忽三昧發得、極樂莊嚴及佛
菩薩眞身拜給也。或時上人念佛御ヘシケルニ勢至菩薩
來現

誠哉歸於淨土誓、惡哉令離三途說、是偏三昧成就獲得
證也。仍此聖容一丈六尺示給。白髭一鋪寫留奉、永世
本尊奉。是眼前降臨也。夢幻非若念佛者。當知此人是人
中芬陀利華、觀世音菩薩大勢至菩薩爲勝友、當座道場
生諸佛家文無違。上人常居所白地立出歸給ケレバ、阿
彌陀佛三尊繪像ニモアラズ、木像非垣離、板敷不付天
井不付御座。其後常現給、無量壽佛化身無數與觀世音
大勢至、常來至此行人之所文。彌其惡深者也已上
大永六年正月廿七日

法然上人傳卷第五

一、聖光房事

鎮西聖光房辨阿本名辨長者山門住侶也。證眞法印門弟天台

宗奧義究メシカレ、卅三歲舍弟三明坊阿闍梨頌死セシ

ヲ親見給、眼前無常驚身後資糧求、忽ニ所學法門擱極

樂往生願。建久八年五月始上人參、淨土法門學。翌年

建久九年選擇集被授、其詞是月輪殿請依所集也。汝法

器仁也。此書末代可弘。上人室人後先豫州被遣、弘通

念佛、鎮西歸一寺建立號善導寺。爰淨土宗學者法然上人

相傳稱、鏡像圓融譬舉、金剛寶戒名以淨土宗甚深祕義

由申間、元久二年三月法然上人尋申 聖光聖人狀云、

淨土宗小僧辨長 上人御房法座前 誠惶誠恐謹言

二箇條疑問事(一)、鏡像圓融疑問事
(二)、金剛寶戒疑問事

一、鏡像圓融疑問者、所謂或淨土宗學者向天台宗學者

相語云、天台宗與淨土宗其義是一致也。所以天台宗以

鏡像之譬顯圓融之法、淨土宗亦復如是。以此鏡像圓融

之義爲淨土宗之最底、是則淨土宗甚深祕義也。誓善導

和尚爲誘引初心之人制止雜行勸進專修、理實以鏡像

圓融之譬得其心爲後心之人天台宗淨土宗是即一同

也云云。天台謗家之人云、以鏡像圓融之譬用淨土宗最

底者、以淨土宗不可立別宗只以天台摩訶止觀等可

爲淨土宗、何故以天台之外可立淨土宗哉。又小僧辨

長跪上人御房法座前常々雖蒙淨土教訓之條、於此義

者未曾聞也。但依根機未熟不蒙此御教訓歟。於況

小僧善導所造和國到來西方化導八卷文證之中、於鏡像

圓融之文更以未見之所云云。又自本依不存此義不

示此義給哉。又小僧辨長自幼穉之昔稟天台之流於

鏡像圓融之法門者、或時口誦文證、或時心推義理、但於

長大之今列淨土之座、承上人御房御義之時、和國漢朝

先賢先哲於淨土法門、各出義之時其義蘭菊也。但於其

中善導禪師之御義、往生之甘露也。所謂分別專雜二

行選擇正助二行乘雜取專嫌助直正、吾淨土宗尤爲

元意、如此御教訓常蒙之於鏡像圓融之義爲淨土宗骨

目云事、未蒙其仰。若爾者且爲專修堅固且爲謗家對治、欲蒙其義決之狀如件

二、金剛寶戒疑問者、或淨土宗學者云、付淨土宗有一戒品所謂金剛寶戒是也。於諸宗戒品是異也、密々口傳所傳之也、是吉水上人御房傳也云云

小僧辨長救云、吉水上人御房御義全以不然。淨土宗者只彌陀本願專修正行、以此一行爲往生正路、全以不令兼餘行。何以於此宗可令付金剛寶戒哉云云。以前二箇條一爲決斷弟子之疑問、一爲對治諸宗謗難又爲停止一家狼藉、又爲印持末代專修上人御房御在世之時、錄子細言上者、早住哀愍慈悲之心、決斷左右進退之是非、賜御證判、停止彼狼藉之僻見、欲立此專修之一行、子細言上如件、沙門辨長誠慎誠恐謹言

元久二年三月 日

就之上人以自筆被勸付云、二箇條以外僻事也。源空全以如此事不申候。以釋迦彌陀爲證、更々如然僻事所不申也云云。上人常仰、一山住侶尙契有沉辨阿證眞法印門人也。彼法印源空甚深同侶、後世菩提契人弟子有、源空弟子成、八年受學人也、稱美セラレタル上、

淨土之法門於、所存不殘條被知暗、何況已番文被誡、往生淨土業因於、專修行ナルベシト云事仰之、可信聖光上人黒谷上人教誠傳正義。化導年古後種々奇特顯、嘉禎四年閏二月廿九日未刻、年來所願依一字三禮自筆書寫阿彌陀經乍持、端坐合掌稱名相續、最後光明遍照一句唱、眠如往生。當時筑紫義號彼聖光上人流也

一、或時月輪殿條々御不審御書載上人被尋仰、委請文載上人被申、所謂一御疑云、一度起信心更無疑心者、一念十念以決定往生業、其後稱念云順次往生更不審有ベカラザル歟。又信心決定後、四重五逆等重罪犯云トモ往生障不可成歟トナリ

上人請文云

設決定往生之信心起候ト云レ、其後稱念事無并小罪也是犯後懺悔敢往生難遂候歟。何況四重五逆重罪犯候、於往生不及返惡趣難免候。近來諸衆徒都鄙道俗喧嘩不絕皆此義起候歟

又一御疑云、設深信發專稱至、重罪犯後更懺悔念佛、

順次往生遂難候歟

上人請文云、此義神妙候、乃至一念無有疑心、釋上盡一形下至十聲一聲等迄、決定往生スベシト信ズベキ文也。雖然一念後又稱名并犯罪、猶決定往生非可信、如此信候、一重深心似云_レ、還邪見成候歟。近來此邪見住輩多候也云云

又一御疑云、一生不退念佛者不慮重罪犯後未懺悔不念佛命終者、前念佛功依往生スベキ歟、將又後之犯罪咎依不可往生歟

上人請文云、不慮之犯罪其過頗輕云_レ、往生於猶不定候、其故已作懺悔不用善業不障云_レ無候故也已上

一、明遍僧都夢想事

高野明遍僧都上人所造選擇集見、吉文侍偏執過有云寢夜夢、天王寺西門病者數不知惱臥。一人聖有鉢粥入匙以病人口入。誰人問有人答、法然上人也云見覺。僧都思我選擇集偏執文思夢示給。此上人機知聖ニマシ_レケリ、病人初柑子柿梨子柿體物食、後其止リヌ、ウキ

〱ヲモテ喉ヲウルヲス計命サ、エテ侍也。此書一向念佛ヲ勸メラレタル、是、不違。五濁亂漫世佛利益次第滅。此比ヘアマリ代下我等重病者如、三論法相柑子橘食サレズ眞言止觀梨子柿食サレズ。念佛三昧ノウキ〱ニテ生死可出也。上人參懺悔專修念佛門入給ヒケリ。夢取分天王寺見ラレケルモ、由緒無非。此寺極樂補處觀音大士聖德太子生、佛法此國弘給最初伽藍也。彼鳥居額釋迦如來轉法輪所、當極樂土東門中心書。吾國生受人、尤此念佛門可歸也

一、大炊御門左大臣事

大炊御門左大臣經宗所勞時、或人方便上人知識請申サレケリ。念佛往生事、日比不及沙汰入無_レ左右勸進事

中々惡シキ様ニナルベキ體也ケレバ、上人計事屏風隔有僧ト何無法門被仰、天竺震旦我朝佛法傳次第ナンドユ、シク被仰立、次第念佛往生事及ケリ。左府是聞給信仰心發給、一筋其勸隨、生年七十一文治五年二月十三日出家遂ラレケリ
法名金剛覺爲寬平法王御名之由。所在茂申間命終之後改名法性覺。

勞次第危急間、廿七日ヨリ上人參住念佛勸申、翌日廿八日亥剋臨終正念往生遂給ケリ、上人御心へセ實賢

一、右京權大夫隆信朝臣事

右京權大夫隆信朝臣、深上人壽餘佛餘行擱、只彌陀一尊崇、偏念佛一行勤、常上人隨。建仁元年出家法名戒心號。一向稱名外他事無ケリ。生年六十四春、所勞危急間、上人キキ給、住蓮安樂二人門弟遺、知識セラレケリ。已終望、二人僧左右置病者知識同普念佛來迎讚唱、端坐合掌往生遂給。元久元年二月廿二日也。紫雲音樂以下奇瑞非、後正信上人彼墓所向念佛給、異香不失、日本往生傳被入注ケル也ト云

一、鎮西修行者問事

鎮西ヨリ來ル修行者、上人問奉云、稱名時心ヲ佛ノ相好懸事如何候ベキト申ケレバ、上人未言說給ザル前ニ傍ナル弟子可然申ケレバ、上人言源空不然、只若我成佛十方衆生稱我名號下至十聲、若不生者不取正覺、彼佛今現在世成佛、當知本誓重願不虛、衆生稱念必得往

生思計リ也。我等分齊以佛相好觀、更如說非。深本願憑只口名號唱計。假令ナラザル行ナリト言ヘリ。内外博覽上人猶如此。沉淺智愚鈍族哉、努力々々サカシキ心不持、口稱名可勵也

一、或人問雜事

又或人問奉云、人多持齊勸侍如何可存候哉覽ト、上人言尼法師食作法尤可然、但當世機已衰食又減、此分齊一食心偏食思、念佛心閑カナルベカラザレバ、菩提心經食不妨菩提心、能妨菩提ト云ヘリ。持齊非、往生正業只自身分齊隨念佛倦カラズ、懈怠無程相計念佛相續スベキナリト云云

又或人問奉云、上人申サセ給御念佛念々ゴトニ佛御心叶候覽ト申ケルヲ、何カナレバト上人反問給ケレバ、智者ニテ御座セハ名號功德ヲモ委ク知食シ、本願様明御心得有故ト申ケレバ、汝本願ヲ信ズルコトマダシカリケリ。彌陀如來本願名號木コリ草芥菜摘水波類ト如者之内外共闕テ、一文不通ナルガ唱レハ必往生信、眞

實願常念佛申最上機、若智恵以生死可離源空何聖道門捨此淨土門趣ベキ哉。當知聖道門修行智恵極生死離、淨土門修行愚癡還極樂生云云

又或人問奉云

毎日所作六萬十萬等數返當不法ナルト、二萬三萬當如法何正トスベク侍ル覽ト、上人言凡夫習、二萬三萬數返當云、更如法義不可有、只數返多カラシニハ不如、所詮心相續只常念爲ナリ、數ヲ不定懈怠因縁ナレバ數返ヲ勸也ト云云

一、明遍日課數返斥事

高野僧都明遍數返不實極リトテ不受セラレケルガ、有ル時修行者一人來毎日念佛幾程所作定ムベク侍哉覽ト尋申ケルニ、御房幾程被申ゾト返問ヘレケレバ、毎日百萬返ヲ申由答時、例不實モノヨト思ヘレケル間ダ、返答不及内入ラレケレバ、修行者歸ケリ。僧都チトマドロミ給ヘル夢、貴僧告テ言ク、毎日百萬返行者云妨事不可然。以外氣色惡シクシテ、我是善導ナリト被仰

見驚タレバ、徧身汗ヲ流、胸騒身心置所無存ゼラルレバ、彼修行者喚懺悔センガ爲、手分山中尋ケレモ見ヘザリケレバ、時剋不隔縦下向スモ幾程延ベカラズトテ使者共走散巡ケレ共遂ニ不見ケレバ、僧都申サレケルヘ、日來早クリノ數返ヲ不受スルヲ、佛意背問、告示サレルナリ。實之修行者非ザリケリトテ、其後百萬數返ヲセラレケルガ手ニテ念珠ヲ廻スヘ猶遲トテ、木以念珠ヲフリマワシテ數ヲ取ラレケレバ、明遍ノフリノ百萬遍トゾ人申ケル。所詮上人念々相續爲數返ヲ勸由被仰上者、仰可信者也

一、羅城門礎石事

正治二年四月十二日農夫侍ケルガ、羅城門礎石掘出事有ケリ。此石碑文アリ、農夫恠人語月輪殿是ヲ聞食シテ成信孝範爲長宗業等四人儒者遣被見ケルニ、三人一向是不識、孝範一人讒年號計讀。各還テ此文更文道事非佛法事ナリト申ケル間、法然上人ニ被仰ケレバ、上人是ヲ見給、落涙甚。扇是ヲ寫持參セラル彼文云、前

代所傳皆是聖道。聖人之教末弘我朝者此宗旨也。

大同二年中春

十九日執筆嵯峨云云。文意ヲ御尋有ケレバ上人申サレケルハ、聖道門對淨土門ヲ此宗旨ヘト書給、此國母草提

希夫人再誕也トゾ被申ケル。此石長六尺廣四尺文字八寸、古文之字也、宇治寶藏被納ケル、實不思議ニコソ此時上人退出給ニ、大勢至菩薩成地上三尺計虚空步給。月輪殿驚庭上拜給、本上人ナリ。門出給時又大勢至菩薩也

一、上人或所二勸化事

或時上人談義砌語テ云、淨土宗立意凡夫往生ヲ示サンガ爲ナリ。若シ天台教相依凡夫往生許似タリト云ヘ共淨土ヲ判ズル事至テ淺薄也。若法相教相依淨土判事甚俗也ト云ヘ共、全凡夫往生ヲ不許。諸宗談異也ト云共、惣ジテ凡夫淨土生云事不許。故善導釋義依淨土宗興時、則凡夫報土生云事顯也。爰人多誹謗云、宗義ヲ雖不立念佛往生勸ベシ。今宗義立事只勝他爲也。若別宗不立者何凡夫報土生義顯サン哉。若人來念佛往生云、是何

レノ宗何師意問、天台非三論非華嚴非何宗何教何師心答哉。此故道綽善導意依淨土宗立是全勝他爲非ト云ベシト云云。播磨信寂房吉水御房參タリケルニ、上人言

ケルハ良入道殿此宣旨ニ持テ取替、筑紫宣旨坂東下、坂東宣旨鎮西下シタランハ、人可用ヤト。信寂房暫案、宣旨ニテ侍レ取違テ候テハ何用侍ルベキト申ケレバ、御房ハ道理知人哉。即サソ帝王宣旨釋迦遺教也。宣旨ニ有ト云ヘ、正像末三時遺教也。聖道門修行正像時教故、上根上智輩非不可用。是西國中國宣旨、淨土門修行末法濁亂時教故下根罪惡之輩也。是奥州宣旨、然則三時相應宣旨是取不違教何行不成。大原聖道淨土論談有法門牛角論也、然レドモ機根比源空勝タリキ。聖道門雖深時過ヌレバ今機不叶、淨土門淺似ト云ヘ共當根契易法也、時末法萬年餘經悉滅、彌陀一教利物偏增道理折人皆承諾、念佛門歸。然今諸方道俗見聞、多有名無實行面立互嫉妬瓦礫荆棘充塞リテ、眞實白道抑ヘタリ、是豈悲切非哉ト云云

一、天台宗人奉問事

或天台宗人奉問云、佛教多門出生死道非一、其中天台須與聞之即得究竟共云ヒ、取證如返掌共云ヘル、一類頓悟類暫是擱、教オキテニ云ク、次位階級定修行方軌明メタルニハ、十信一萬劫修行送後、無生忍位叶談ゼリ。然淨土門十惡五逆作罪惡凡夫ナレ共、知識教受議一念十念口稱念佛依忽報土得生益。刹那間輒無生忍位叶云事、大不審候。抑六字名號何功力候萬行萬善趣テカ、ル不思議奇特備候哉覽ト。上人答云、彌陀因位時、一切衆生代兆載永劫間、六度萬行諸波羅蜜一切行修、其功德悉六字名號納ラレタル間、萬行波羅蜜三世十方諸佛功德六字名號ニ漏タルハ無。故是極善最上法名ク。サレバ惠心僧都因行果德自利他內證外用、依報正報恆沙塵數無邊法門、十方三世諸佛功德皆悉攝在六字之中、是故稱名功德無盡判給、此意也。彌陀本願此名號唱、極樂生欣衆生聖衆共來迎接。此願若成就スマジクンバ衆生共地獄墮、佛不成四十八誓言立給、此願

已成就故、成佛給、十劫以來也。故極惡最下罪人、此名號唱萬行萬善功德得、因位本願酬迎接給故、本願不思議力須與間報土生、刹那程無生悟開事、何疑可有哉。一念無上功德得名號也。更一念十念功少不可思ト云云

文明十九年丁未 霜月七日

法然上人傳卷第六

一、女房達聽聞念佛法門事

或時宮仕人思シクテ尋常尼女房達、數多友ナイ上人參罪深我等如五障女人念佛申極樂往生由仰候ハ實侍哉覽明承リタキ由申ケレバ、上人被仰ケレハ彌陀本願憑ムヨリ外ニハ女人更ニ往生望不可遂、本願辱ナキ事能々可聞、女人障重罪深故、一切所皆嫌ヘレタリ。是則內五障有、外三從有故。五障云ヘルハ一梵天王不成、二帝釋不成、三魔王不成、四轉輪聖王不成、五佛身不成云。已大梵高臺閣被嫌梵衆梵輔雲無望、帝釋柔軟床

被下三十三天花翫無、六天魔王位四種輪王跡望永絕影
不指、天上天下賤果報無常生滅拙身不成、況諸佛淨土
不可思寄。此日本國夕ニモ貴無止事靈地靈驗砌、皆悉
被嫌。比叡山是傳教大師建立桓武天王御願也。大師自
結界谷堺峰局女人影不被入。サレバ一乘峰高顯、五障
雲聳事無、一味谷深三從水流事無、藥師醫王靈像耳聞
目不見、大師結界靈地遠見近不臨、高野山弘法大師結
界峯眞言上乘繁昌地也。三密月輪普照云、女人非器、
闇ヲハ不照五瓶智水等流云共女人垢穢垢ヲバス、カズ
聖武天王御願十六丈金銅遮那前是拜見云へ共、猶扉内
不入。天智天王建立五丈石像彌勒前仰是禮拜、猶壇上
障有。乃至金峰雲上醍醐霞底迄女人更影不指、悲哉兩
足有ト云へ共不登、法峯アリ不見靈地アリ不拜靈像。
此穢土瓦礫荆棘山泥木素像佛ダニモ猶其障有程罪重身
諸經諸論中嫌在々所々擯出セラレテ三途八難非ルヨリ
へ、趣クベキ方無。六趣四生非ヨリへ受ベキ形無。道
遠經引十方世界女人有所必地獄有釋玉ヘリ。如此三世

諸佛捨、十方淨土門指、惡罪女人只彌陀助救云願發給。

實憑可者也。所謂四十八願中第十八念佛往生願、十方
衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正覺誓給、
一切善惡男女皆是漏タルハ無ケレ共、第卅五願別女人
往生願立給。是則女人一切事於疑成間、十方衆生誓給
罪深女人不入疑、念佛往生益漏ベキガ故、別女人往生
願立給也。拙穢土境ダニモ猶嫌障重女人、本願頼名號
唱出過三界、萬德究竟報土迎願給、廣大慈悲忝中々
詞以述難者也。善導和尚今女人往生願釋給、彌陀大願力
依故、女人佛名號稱命終時、女人轉男子成事得、彌陀
手授菩薩身助、寶華上坐佛隨奉往生無生悟釋。又一切
女人若彌陀名號願力不依者、千劫萬劫恆沙劫經終女身
轉事不可得釋給、此度彌陀本願ニスガリテ極樂詣ラズ
シテハ、無量劫女人身へ不可轉、無始以來女人身受タ
リキ、今ヨリ後猶六道四生轉廻間形ヲカヘ質ヲ改ム共
猶女身ヲ受テ一切心任ザランハ、悲シカルベキ事也。
況ヤ女身。非不改、三途八難底沈テ重苦受事後悔誰是

救、今幸彌陀本願逢奉、名號唱計行依最後臨終男子身成奉セテ、彌陀如來、御迎預、觀音大士金蓮乘無數化佛無量聖衆圍繞セラレ奉、須臾間無漏報土往生、無量快樂預事悅非哉。努念佛不可倦、サリトモ念佛申寶不盡、骨不折、惡道墮萬苦受ヨリハ、易念佛申樂得可者也。本願貫賴、次第カキクドキノ給ケレバ、其座侍女房達皆涙流、念佛門入、是、傳聞女人豈念佛勇無哉

一、山臥作佛房事

遠江國作佛房云山臥侍。役行者跡追山林斗蓋行立、大峰經歷數箇度也。總熊野參詣步運事四十八箇度也、偏後生事祈會現世望無、或時證誠殿通夜、年來祈所只是後生菩提也。早出離道示給祈請シケルニ、當時京都法然房云聖有、行出離道可尋示現蒙、即上洛上人參淨土法門學、念佛往生道承定、後本國歸、稱名外無他事、自本孤獨身無同行無知識、病受ザレバ病惱苦無、療治無煩往生期至入道場、西向、自鐘鳴高聲念佛數返端坐合掌遂往生、紫雲靉異香付諸人集來緣結、希代不思議國中口

遊有ケル

一、親鸞上人入淨土門事

彼一向專修聖綽空親鸞者、苗裔尋近衛大將贈左大臣從一位内丸公六代後胤、弼宰相有國卿五代孫、皇太后宮大進有範子也。前大僧正慈鎮和尙御弟子小納言範晏號、楞嚴餘流傳、四教圓融法水續云、引隱遁之志、建仁三年春廿九吉水禪房參上人弟子成綽空ト改名即親鸞是ナリ元久二年選擇集許、同年四月十四日上人眞影申預奉國淨土法門

學。上人配流之時、同北國被遠流、次以東國下向普一向專修念佛勸終、歸洛弘長二年仲冬下旬廿八行年九十歲種々靈異顯往生遂給フ。今號一向專修、彼綽空親鸞上人門流也

一、甘糟太郎往生事

土御門院御宇建仁三年冬比、山門堂衆等獨步餘學生讎諍衆徒敵成、剩日吉八王子社壇城郭惡行巧ミシカバ、追討爲差遣官兵時、武藏國御家人猪俣黨甘糟太郎忠綱云武者、彼官兵内十一月十五日八王子向シニ、先ヅ法

然上人參、彌陀本願念佛正惡人爲傍聖人爲發サレタル由、日來承侍シカバ我等如罪人其正機也心得侍バ、本願頼念佛往生不可疑存知侍共、其病床臥シノドカ臨終時事也、武士習進退心不任者、山門堂衆追討爲勅命蒙、只今八王子城向侍、忠綱武勇家人弓箭道立サワル、進父祖遺塵不失、退子孫後榮殘爲、敵禦身捨惡心熾盛、願念發起難、若又今世假謂思往生勸理不忘者、居時則禮無動時則威無欺。返敵爲取コメラレナバ、永臆病名留忽譜代跡可失、迷闇向如、願上人弓箭家業不捨、往生素意遂道侍詮取御一言承覽申ケレバ、上人言、彌陀本願專罪人爲罪人々々ナガラ名號唱往生、是本願不思議也。弓箭家人縱戰場命失、念佛終本願酬來迎預往生遂事努力不可疑、被仰ケレバ、不審開侍、サテハ忠綱往生今日一定ナルベシト悦、ヤガテ從其八王子城向、八王子權現本地彌陀左脇弟子觀自在尊也、幸我西方向往生便得者歟、權現捨給祈請命捨戰、堂衆中一坊中ヨリ十八人出タリケル、武者皆手カラ有。豪者也ケルガ

甘糟太郎云重代豪武士向ナルニ、同其仁敵艾高名不覺此時顯スベシト支度シケルガ、未甘糟不見知之間、名乘知計事、我思敵名乘進云十八人者共シコロロ並木戸口進出、甘糟折節木戸口近賣寄ケルガ、取不取武藏國住人甘糟太郎忠綱云重代豪武者也、手懸名譽名乗ケレバ、十八人者共各支度シタル事ナレバ心同戰ケレバ、十二人手掛被打。甘糟又殘六人手懸ケルガ深手負ケル上、太刀中打折今早覺ケレバ、太刀捨掌合一心彌陀念高聲念佛敵爲命任セケルニ、紫雲聳音樂聞ケレバ遠近人不恠云事無。上人緣行道御ケルガ東坂本當紫雲見ケレバ、此紫雲コソ恠ケレ、一定甘糟往生シツルト覺ルトゾ被仰ケル。國留置妻子許此由告遣ケル程、臨終夜妻之夢往生由示ケレバ、驚使上ケル京下使罷逢戰場ニテ之往生有様、田舎夢告互不思議也事語。本願不思議乍云、合戰庭靈瑞現眼前往生遂事、實希代奇特也。打手六人輩何甘糟在俗身ナガラ深本願信合戰庭往生遂。何我等ナレバ頭剃衣染ナガラ是程嚴重本願ヲ頼ザラン

ヤト改悔心發、且甘糟後世訪、且罪障懺悔爲テ本房不返、ヤガテ從其諸國修行靈佛靈社步遲ケリ。戰場ニテ之往生爲、上人問答次瑠璃王先蹤如來教勸被思台侍、彌陀本願人不嫌所不撰、只念佛往生無疑事也。我人深本願頼稱名專ニスヘシ

一、長樂寺隆寬事

元久元年七月之比、上人移住小松殿之時、隆寬律師參向出對御堂後戶、取出一卷書、付屬隆寬云、是依禪定殿下仰所、造進之選擇本願集也。源空所立法門取、要不過此。早是書寫披見スベシ。若不審アラバ可尋問也。源空存生間秘不可及、他見。死後可志流行云云。抑隆寬律師粟田關白五代後胤三河權重兼朝臣孫藤少納言資隆子息也、本宗者天台宗惠心僧都第八代嫡流相生法橋皇覺孫弟無動寺南勝度大納言法印範源面受口決弟子也。說法決擇之智辨、無並本山、文花風月才無恥儒林、然歸上人之德、入淨土門、辭公私學道遁、大小公請偏欣求往生、專稱彌陀名號、每日返數八萬四千返、所作

抄物一百餘卷也。當時長樂寺義號彼隆寬律師流也

一、山門衆徒依念佛蜂起事

同年冬比山門衆徒蜂起、大講堂庭三塔會合專修念佛可被停止之由、依訴申天台座主、從座主大僧正上人御尋有、上人起請文被進其詞云、叡山黒谷沙門源空敬曰當寺住持三寶護法善神御寶前右源空壯年昔日粗披、天台教釋、伺三觀戶、衰老今、依善導章疏雖望九品界、舊執猶存本心何忘。然近日風聞云源空偏勸念佛教、謗餘教法、諸宗依之陵夷、諸行依之滅亡云云。傳聞此旨、心神驚恠、遂聞事山門及議衆徒可加炳誠之由、申送貫首此條一恐衆勘、一喜衆恩、恐所以貧道身忽及、山落體悅所銷、謗法名止花夷、謗若非衆徒、如何慰貧道愁歎哉。凡彌陀本願云、唯除五逆、誹謗正法云云。勸念佛輩云、何謗正法。又惠心要集聞一實道入普賢願海云云。欣淨土之類、豈捨妙法哉。但老門遁世之輩、愚昧出家之類、或入草庵剃髮、或臨松室志謂次、以極樂可所期、以念佛可所行之由、時々諷陳。是則齡衰不

能練行、性鈍不堪研精之間、暫擱難解難人之門、示易往易行之道、佛智猶設方便、凡慮豈無斟酌哉。敢非存教是非偏思機堪否也。此條可爲法滅之緣者、向後宜從停止。此條以僻說弘通、以虛誕會釋者、尤可有糾斷、尤可有炳誠所望也、所欣也。此子細去年沙汰之時進起請畢。其後今不變、雖不能重陳、嚴誠已重疊之間、暫狀又及再三上件子細事一言以虛誕設會釋者、每日七萬返念佛空失利益、墮在三塗、現當二世依身常沈重苦、永受楚毒、伏乞當寺諸僧滿山護法證明見給、源空敬白

元久元年十一月三日沙門源空敬白

其時座主後白河院孫王眞性宮大僧正也

一、七箇條制禁事

號上人之門弟輩之中、未知上人存知之奧義、未辨淨土宗義之廢立之類、稱師說致邪意之謗法、依吐無窮臆說、已及山門大訴之間、同七日集門人等制誡七箇條及門人七十五人連署取備、龜鏡立後證、所謂彼七箇條起

請文云、教誡念佛門輩七箇條起請

普告號予門人念佛聖人等、

一可停止未親一句文破眞言止觀謗餘佛菩薩事

右至立破道者學生所經也、非愚人境界、加之誹謗正

法者除彌陀願其報當墮那落豈非癡闇之至哉

一可停止以無智身對有智人、遇別行人好致諍論事

右論義者是智者之有也、更非愚人之分、又諍論之處諸

煩惱起智者遠離、百由旬也。況於一向專修念佛行人哉

一可停止對別解別行人、以愚癡偏執心稱可弃置本

業強嫌嗔之事

右修道之習只各勤自行、敢不遮餘行、西方要決云、別解

別行者惣起敬心、若生輕慢者得罪無窮云云、何背此

制哉、加之善導和尙大呵之、未知祖師之誠愚闇之敢

甚也

一可停止於念佛門號無戒行專勸姪酒肉、適守律儀

者名雜行人賴彌陀願者說勿恐造罪事

右戒是佛法大地也、衆行雖區同專之、是以善導和尙舉

目不見女人此行狀之趣過本律制淨業之類不順之者、
愆失如來之遺教、別背祖師之舊跡、旁無據者歟

一可停止未辨是非癡人離聖教非師說恣述私義妄
企諍論被笑智者迷亂愚人事、

右無智大天狗此朝再誕、猥述邪義已同九十六種異道、
尤可悲之

一可停止以癡鈍身殊好唱導、不知正法說種種邪法、
教化無智道俗事

右無解作師是梵網之制戒也、愚闇之類欲顯己才、以淨
土教爲藝能、貪名利望、覆誡恣成自由妄說誑惑世間
人、誑法之過殊重、是寧非國賊哉

一可停止自說非佛教邪法、僞爲師範說事

右各雖一人說所積爲予一身衆惡汚彌陀教文揚師匠
惡名不善之甚無過之、以前七箇條甄錄如件、一分學
教文弟子等者頗知旨趣、年來之間雖修念佛隨順聖教、
敢不逆人心、無驚世變、因茲于今三十箇年無爲涉日月
而至、近來此十箇年以後無智不善之輩時々到來、非啻

失彌陀淨業又污穢釋迦遺法、何不_レ加炳誡、此七箇條之
內不當之間、巨細事等多之、具難_レ注述、惣如此等無方
慎不可犯、此上猶背制法輩者、予非門人、魔之眷屬
也。更不可來草庵、自今以後各隨聞及必可被觸之、
餘人勿相伴者不然者是同意之人也。彼過如作者不能
噴同法、恨師匠、自業自得之理只在己身而已、是故今
日催四方行人集一室告命、雖有風聞、慥不知誰人
失據于沙汰、愁歎送年序非可默止、先隨力及可廻禁
退之計也。仍錄其趣示門葉等之狀如件

元久元年十一月七日沙門源空門人已上七十五人連署也
名字。上人若謗法好禁遏豈如此哉。彼正文已月輪殿進
略之。

置、誰是疑、其後月輪禪定殿下座主眞性慈大僧正送自

筆御消息云、念佛弘通之間事、源空上人之起請文消息
等披露山門之後、動靜如何尤不審候。抑風聞如依上

人淺深三重之過愈及炳誡一定之僉儀云云。件三箇條者
一者念佛弘通惣不可然。是則非眞止觀之深理、以口
稱念佛之權說不可遂往生故云云。此條者定非滿山之

誣譏、是只一兩之謂歟、爲咎他謗法、自還致謗法、可謂勿論哉。二者念佛行者毀破諸行之餘、焚燒經論流矢章疏、或亦以餘善稱三途之業、以犯戒爲九品之因云云、聞之緇素爭不驚歎哉、諸宗學徒專足譁洶者哉。於此條者殆難取信歟。已是會昌天子守屋大臣等類歟。如此之說過申不審多事、若實者糾斷亦不爲難、偏以浮說被懸過於上人之條、頗非理不盡之沙汰歟。三者雖不及如此逆罪、一向專修行人可停止餘行之由、頗以勸進又以不可然云云。於此條者進退相半歟、善導意專述此旨、然而其趣甚深行者可思、今上人之弘通熟探、疏意敢無謬訛、而門弟等之中不知、與義不悟、宗旨、寔恣吐、妄言狠致偏執之由、有其開歟、此事甚以不可然之間、上人遮而傷之、小僧諫而禁之事廣、人多一時難禁、然而根元已斷邪執、枝葉豈亂正義乎。以之謂之三重之子細一而無過矣。衆徒之爵結何因強盛哉。況亦當時已集數輩之門徒、成七箇條之起請、禁遏邪義炳誠狂說、上人若好謗法者沙汰豈嚴密哉。至此條者一向可被

任小僧更以不可及不塞然則早休滿山之爵憤可被止。上人濫刑歟。抑諸宗成立之法、各專自解不察餘教、弘行常習先德之故實也。訪之異域者月支則護法清辨空有之諍論、晨且亦慈恩妙樂之權實之立破、尋之我朝者弘仁則戒律大小之諍、天曆亦諸宗淺深之談、八宗競而成鉢楯三國傳而爲軌範、然而村上御宇豫鑒末世之邪亂、被止諸宗對論、以來宗論永以削跡、佛法爲其安全也。就中於淨土宗者、古來行者偏擬無染無着之淨心、住專念佛一行、對他宗不好執論、比餘教不判是非、獨慕出離必遂往生也。但教法弘通之習、成義顯理日聊亦非無其心也。所謂惠心僧都往生要集中、致三重之問答、念佛勝餘行之由、詳釋成之、禪林永觀律師十因意亦引經論之文、檢我朝例註錄同趣、彼時諸宗之僧侶惠學成林禪定湛水、雖然不答惠心不對永觀、是則世實人直之故也。而今代及澆季時屬闢諍能破所破共起自偏執、正論非論皆及喧嘩、或人云、念佛若被弘通者諸宗忽可滅盡、是以遏妨云云、此事理不可然、於過分之逆

類者依實可被_レ糺斷、全非淨土宗之所傷、於門弟子等

之邪執者、上人已加嚴禁、門徒不可確執云、彼云、此上何

因可及佛法之破滅哉。凡顯密之修學、依名利研精、是

人間之定法也、於念佛教法者、非名非利思、後世人之

外、誰習學之哉。依念佛法滅之條、虛言欺狂說、可

謂未曾有若此沙汰熾盛於念佛行者、一時可失墜、辨因

果恐苦患之人、豈不傷嗟哉。豈不悲哀哉。爰小僧

自幼年之昔、至衰暮之今、雖自行疎懶、本願雖罪業重

羨、往生不倦、不怠過廿餘年之星霜、彌求彌進唱、數百萬

返之佛號、恒年以來、病進命危、歸泉在隣。淨土之教、迹當

此時、欲滅亡見之聞之、爭堪爭忍。三尺之秋霜、割肝

一寸之夜焰、焦胸、拭紅淚、摧丹心、嗚咽叩地愁悶。況上

人於小僧爲出家之戒師、爲念佛之先導、歸敬惟深、尊崇

尤切、而無事而招濫刑、有勳而處重科者、爲法不可

惜身命、小僧代而受罪、以欲救師範之科者也。凡佛道佛

行之人、自他共可願罪累、而強執俗諦、隨事之假論、欲墮

無明迷理之惑障、傷哉悲哉、請學侶之有情、伏理變執、優

法有罪而已死罪々々

十一月七日 專修念佛沙門圓證在判

大僧正御房云云、上人及殿下會通備ケラレケレバ衆徒

醇訴止ニケリ

法然上人傳卷第七

一、於月輪殿現頭光事

元久二年乙丑四月五日、上人於月輪殿法門敷剋、談話之後

御退出之刻、步出南庭給、御後殿下見送給處、頂現圓

光足踏蓮華地上、二尺計騰形貌大勢至菩薩出給御覽、

禪定殿下愈下、庭上頭面作禮、奉見給本上人也。門外見

送、奉給又大勢至菩薩也。頃之大肅然、驚起雙眼、流淚被仰

云、只今上人退出、奉見誠生身佛御座、希有奇瑞アリ。

各奉拜哉否、爰本蓮房以下傍侍申云、何様瑞乎、殿下上

件次第被示仰處、右京權太夫陸入道戒心頭光計奉拜

由申之、自餘輩更不見云云。本蓮房者中納言阿闍梨等

女也、承此事歎息云、我等雖在一座不見此奇異宿緣故也。不足恨云云。抑月輪禪定殿下大織官十八代知足院入道殿下御孫法性寺攝政大臣忠通公御息法性寺殿御子三人之内嫡子、號近衛殿攝政大臣基實御事也、二男號松殿攝政太政大臣基房也、三男號九條殿攝政太政大臣兼實、今月輪殿是。此之殿下自始奉歸上人多年薰修淨土宗御座シタリ。沉拜見此奇瑞之後、彌成生身佛想給

一、上人御癒病事

元久二年八月北白河二階房上人癒病出給、小松殿歸給。門弟等或念佛申落奉思人有、或上人參懸程物我等力不可叶申人モアリ。或又爲結緣參乎云人アリ。禪定殿下聞食此事騷々雖被加療治不叶。禪定殿下我案廻善導御影奉圖畫、聖覺爲唱導上人前供養遂シメ、講淨土法門令解說彌陀本願、發隨喜心可有除病効驗。即仰託摩法印證賀被圖畫御影、後京極其銘令書給、聖覺法印許可參勤御導師之由被仰シカバ、聖覺癒病仕

侍、明日當起日、且師匠報恩爭可申子細乎。早且御佛事可奉始、翌日拂曉小松殿參入、聖覺今日發日候、何時許起給候哉覽申シタレバ、申時許り發侍也、上人言聖覺マタ疾侍也。尤可急トテ巳時始說法始、申終結願セラレタルニ、御導師本願奧義述べ、大師釋尊モ同衆生時常受病惱用療治給。凡夫血肉身中爭其愁無ランヤ。雖然不知此道理淺智愚鈍衆生定成疑心致不信歟。善導和尙諸宗不依教相淨土宗與一向專修行立本願稱名義弘給事、末代惡世根機相應順次生死可離教法故、上人是弘通給稱化導已佛意親遂往生者千萬也。然諸佛菩薩諸天龍神爭不欲衆生不信、四大天王佛法可守護有必愈我大師上人病惱給慇懃申述、善導御影御前異香頻薰、聖覺共病落ケレバ故法印雨下學名、聖覺身此事尤奇特也申。誠末代奇特其比口遊侍ケル

一、公胤作決疑集事

圓城寺長吏公胤僧正爲破選擇集作三卷書題淨土決疑鈔。彼書殊難一向專修義云、法華經有即往安樂文有

何妨、廢讀誦大乘唯付屬念佛云云、此大錯也已上。上人披之至此不見終、擱云、斯難非也。何者凡難破法先須善知其宗義然後難之。而今暗淨土宗義致僻難者誰敢所破、淨土宗意者取觀經前後諸大乘經皆悉攝入往生行內、其何法華獨漏哉。觀經普攝入意對念佛爲廢也云云。公胤傳聞之緘唇不言、其後順德院處胎之際或時公胤爲加持上人爲說戒向以參入。依奉行遲參一事未行以前、不慮二人一處會合屢談淨土法門、公胤歸房之後語弟子等云、今日對面法然房有三所得、所謂一未知事知、二初聞之、三元知事僻改。法然房實宏才也博覽也、於所見立淨土門不可違聖意、可增信毀上人義者大過也。卽燒決疑鈔訖

一、靜嚴法印問答事

竹林院法印或時來吉水房間云、如何今度可離生死哉。上人答云、源空欲尋啓此命何。靜嚴云、決擇門智者誠可然於出離道者可依道心者、通世年久堅固安立義也。上人微笑云、於源空者乘彌陀本願期往生旨、不知。

其外云云、靜嚴云、余所思如此、爲聞入義所致此疑也卽起座去

一、明遍僧都問答事

或時明遍僧都善光寺參詣之次、小松殿坊參、上人申云、末代惡世罪惡我等、彌陀名號稱可往生淨土承、然念佛時心散亂ヲバ云何侍哉。上人言其條源空不及力、但散亂口稱名號乘佛願力往生無疑。所詮只可積念佛功也云云。明遍隨喜云、此承參候也トテ其後聊世間禮儀詞無、卽退出畢。僧都歸後上人被仰云、欲界散地生者皆是散亂也、譬如人界生受者必具足目鼻其定乍生散亂地自不修禪定外爭可留散亂哉。雖散亂唱名號遂往生ニコソ目出度本願ナレト云云

一、宗源法印上人對面事

宗源法印當初參入月輪殿對面上人間云、實被立淨土宗之由承之如何、答曰、然。宗源又問云、證據如何、答云、依善導和尚觀經疏附屬文立之。問云、何唯依一文計立宗義乎、時微笑不言。宗源登山於寶地房證

眞法印前語此事云、法然房物不及返答、頗以閉口、證眞聞之云、彼法然房者自住山之昔迄黑谷範居之後、常談法門不但達自宗兼亘諸宗博習學之、智慧深遠超過常倫、所立之義定非謬、況證眞於彼所立淨土法門者深信用之勿住僻見、不言留不足言故也云云。寶地房遇上人相承戒法、門人仍委知智惠深奧、如此被謂也。

原夫如顯眞公胤證眞靜嚴明遍隆寬明禪聖覺等者、皆是僧中之鸞鳳也、各聞上人演淨土法門咸以信受。況其餘乎、可仰信莫生疑云云。

一、世人難一向專修義事

有人難一向專修義云、縱使許諸行、不可爲往生障、何故強立一向專修義乎。此大偏執也云云。上人聞之云、如此難者不知淨土宗義也。釋迦說一向專念無量壽佛、善導釋一向專稱彌陀佛名、如此源空若離經釋、私立此義者、誠如所責、若人欲難一向義者、應難釋迦及以善導、其過全非我身也云云。

又有人難別立淨土宗云、諸教所讚多在彌陀、故諸宗

人師傍讚彌陀、普勸淨土、是勸念佛往生有、何不可。然今別立此宗、偏爲勝他、貶。上人聞之云、今立淨土宗意者、爲顯亂想凡夫造惡下類、依散心稱名功、入報土無生境也。所以者何、若依天台教相者、雖許凡夫往生、判身土至淺矣。若依法相宗義者、判身土雖深、不許凡夫往生也。諸宗所談實雖功妙、惣不許凡夫生報土義、若依善導釋義立淨土宗之時、纔依一世念佛力、造惡散亂之凡夫乘本願生報土義、於是顯是故別立淨土也矣。若有人問、今所立念佛往生義、何經何師意者、當答云、非眞言非華嚴、非三論非法相、唯依善導和尙意、別立淨土宗。正是彌陀化身所立之義也。可仰可信勿疑。如是則非源空今案、非爲勝他也云云。蓋聞上人從辭黑谷松扉往吉水草庵、以降三十餘年間、譯々所私者彌陀淨土之法門、孜孜所務、大願稱名妙行、上始自王侯將相、下至輿僮、萌齡各皆莫不染他力往生之教風、乘聖來迎之瑞雲、當知唐家導和尙和國空上人、此其淨土家元祖也。

一、津戶三郎遂往生事

津戸三郎爲守深信上人勸化、偏願極樂往生無二心念
 佛シケルガ、同出家本意遂成思タレドモ關東御家人習
 無左右不被許事歎、只乍在俗身法名望戒並袈裟可
 持由上人申タレバ、上人御返事云、御文委承候畢、誠
 左様志計深出家定社候。何事時至事候、強念可思召事
 候ヘズ、期至折無程事候。又戒品書奉候、戒名戒品ナ
 ント書シタルヘ悪ク候。是寛印供奉申人ノセサセ給タ
 ル十重禁次第ニテ候。三淨戒私書別々候、又袈裟進候、
 新候共態當時掛古候進候、名乘房號書進候、乍男皆法
 名付袈裟懸事候也。別紙書候也云云。此御返事給後、偏
 出家思成念佛其後又念珠所望時、上人御返事云、是程
 思食事此一世事非、先世深契哀覺候、搆極樂此度參合
 給ベク候。常持候珠數一奉候、何事文難盡候、御念佛
 不懈セサセ御座スベク候云云
 又或時上人御文云、此度禱往生シナント思召切ルベク
 候。難受人身已受難會念佛往法門値ヒタリ、娑婆厭フ
 心アリ極樂欣心發タリ。彌陀本願深往生御心有也。努

力御念佛不懈決定往生由存ゼサセ給ヘク候云云

又上人御影所望シタルニ付テ或時御返云、影事熊谷入
 道書候シカモ無下此委違候シカバ捨下候也。サレバ今
 度ビ得書下候ヘヌニ候、返々口惜候、其代善導和尚御
 影ヲ拜御座スヘク候云云。我影代善導和尚御影拜被仰
 事粗過分御詞哉思、不語善導和尚影前ニ念佛シタル時
 居眠シタリケル夢上人向奉物語申タルニ、善導御影拜
 云事不審條無謂惡御氣色ナリケルニ打驚ケルニ、善導
 御影向ヒマイラセ奉タル事夢中上人物語申ツルニ少シ
 モ不違ケレバ、上人一人ニテハ御座サザリケリト、
 彌信心深ノ往生之後、必思出ベキ由ヲ載セラレヌ。極
 樂參會仰セラレタル御自筆御文共、錦袋不入身放念佛
 シタルガ實時至タルニヤ、建保七年正月大臣家薨逝之
 時蒙御免出家遂本意上人ヨリ記給タル法名付尊願ト
 ノ申タル

上人御往生後、日隨極樂戀シク、年ヲ逐穢土厭覺タル
 儘。常此御文取出拜見疾迎サセ給甲ケレドモ、空ク歲

月經間、上人門弟以下僧衆屈、仁治三年十月廿日三七日如法念佛始、十一月十八日結願夜半道場明障子内高聲念佛數返後、腹切所有程物悉取出練大口裏少者喚後河捨サセタリ。夜陰事ナレバ人更不知之、其後僧衆向加様出家館居大臣殿御菩提訪奉付、主君御餘波戀御座。其上上人極樂必參會仰有、今迄不_レ往生事尊願長命旁無益事也。釋尊八十歲御入滅上人八十御往生尊願八十也。第十八念佛往生願、今日又十八日如法念佛結願當、今日往生シタランハ殊勝ノ事ナルベシナント申シケレバ、カ、ル用意トモ不_レ寄思、只有猿詞ト心得、實目出度コソ候ヘヌト答ケルニ、其夜明十九日成ヌ。敢無_レ苦痛只今臨終スベキ心地モセザリケレバ、子息民部大夫守朝喚、切腹引開丸肝物殘臨終延覺ユルナリ、寄見ヨト申タル時コソ、始知リニケル。心前程丸物有由申タレバ手入テ引切投捨。是殘故臨終延ナルベシトゾ申ケル。人々集テ驚申タレバ、娑婆厭極樂欣志日隨彌増成タレバ、今一日モ疾詣度故角計タル次第ヲカキドキ申ケ

レバ、誠願往生志熾盛ナル有様、見人皆無_レ不流_レ涙。少無_レ痛念佛ケルガ七日マデ延タル間、ウカヒ水通_レフ故ナルベシトテ、七日以後漱口止塗香用タルカ氣力更不_レ弱。無_レ程疵愈後、時々行水用タルトカヤ。正月一日成タレバ、不死_レテ者可_レ往生道無間、尊願正月一日晚臨終儀式ヲナラシテ、歲月久ナレリ。日來有様不_レ違今日往生スベキ故延引シタリト喜テ頻念佛シタレドモ、其日過次日又晚、只今臨終スベキ心地無_レケレハ此世事契タルニモ實アルハ變ゼズ、違ヘヌハ世習也。增極樂參會自筆御文ヲタビナガラ、念_レノ詣ラント心盡侍遲迎サセ給事コソ心憂侍レト、カキドキ連日ニ歎申ケルガ、同十三日夜夢來十五日午剋迎ベキ由、上人告給タレバ、十四日此夢語歡喜淚流彌念佛勇_レ成シケルガ、十五日成ヌレバ、上人ヨリ給タル袈裟懸、念珠ヲ持、西向端坐合掌、高聲念佛數百返唱、午正中念佛共息絶、紫雲空顯異香室滿、茶毘庭至異香猶不_レ失、奇特其數多ト云ヘドモ、繁故不_レ載、世舉謳歌。將軍家ヨリ御尋ニ

預シカバ、委注申タリ。熊谷入道始上人參ケル時、若命捨後生助カルトナラベ頓而腹切爲用意持タリケル刀ヲバ念佛往生スベキ由承定ヌル上ヘトテ、上人進ゼタルヲ上人ヨリ津戸三郎賜祕藏シタリ。今自害時件刀ヲ用タルニヤ、在家之御弟子其敬アル中ニ、自害シテ往生素懷遂ベキ器御覽セラレタル故、取分尊願授ラレタルモ、非無子細也。本願不思議始驚クベキ非ネ腹切後七日ノウガヒヲ用タレドモ、其後ハ塗香計シテ水ヲダニ口不奇ケルガ、五十七日間氣力不弱、聊無痛如。思念佛禮讚、仁治四二月廿七日改元寛元元年也正月十五日午剋八十一耳目驚程往生遂ケル事ハ、飽護念増上緣益預リケル事、眼前ナレバ彌希代不思議トノ申合ケル

一、住蓮安樂被行斬刑事

上人或説大乘圓頓之戒法、勸入菩薩之位、或教他力本願之念佛開示往生之道、於日域施無畏宛如觀自在菩薩照蒼天、於月輪殿示有光明、知可得大勢至之白毫、諸佛菩薩大悲利生雖區分、自安立器世間之始、至于劫

末壞劫之終、有情非情併莫不蒙日月之光用。是故伊弉册尊自令生日神月神、觀音勢至垂迹並光照國土、日月星辰廻西則是表、稽首阿彌陀佛之儀式也。然預此二菩薩化遂可生淨土、我等也爰知極樂厚緣婆娑深契我等、不願此等道理異學異見之輩我慢偏執故可停廢專修念佛由、驚天聽頻達寂聞之間、後鳥羽院有敕許遂被召捕住蓮安樂畢。此條非昔山門衆徒之鬱憤、聊護臣誤寂情之故。尋其濫觴者太上天皇以熊野御參詣之際、小御所女房達招請住蓮安樂等爲念佛聽聞、還御之後被問、爰此由甚以有逆鱗、自以後念佛者氣色背寂襟畢。就中住蓮安樂へ上人門弟中隨分上足弟子也。於其身全無過無犯處、有誹謗之輩致無實譏奏故、忽蒙勅勒被召籠之條是偏佞臣誤君如浮雲蔽白日。凡大唐一行阿闍梨慈恩大師、后妃采女歸依渴仰之間、不信之輩成疑思汚之。況末代凡夫僧難通疑殆人非木石不如不得歸依、禪定殿下被問食此事、以使者内々被欺申之間、敕答云、是山門衆徒憤也。自今以後高聲念佛可停

止由、進誓狀者可有免許之旨云云。官人以此子細仰舍之處、住蓮等申云、或等適逢彌陀超世本願、此度可遂出離生死之望、思其恩德捨命碎身尙不厭足、爲自爲他不可有不務身。爲恩使命依義輕者此謂也。我等若一旦隨勅定進此起請、非讚念佛行法此時永絕、是永代之耻也、官人奏聞此由、逆鱗瀾以甚申條奇恠慥可處、死罪之旨、被仰下間、官人重誘住蓮等云、只可被進誓狀也。爲往生極樂心中稱念非御制之限、高聲念佛計可被停止也云云。住蓮等申云、念佛不可申之誓狀忌々シク候。努力不可思寄事也。我不愛身命、但惜無上道トコソ、佛ハ説給ケレバ、雖被處死罪、全不可及怠狀也云云。官人不及力二人河原引出欲誅之時、住蓮申云、何於一所不被斬之哉。官人云敕定也。住蓮云、縱雖敕定今一度於一處欲申念佛、官人許具來安樂房兩人始、日中禮讚、住蓮房召請安樂房助言也。道俗成市貴賤群集、淚流絞伏者幾許哉。禮讚漸半至彌陀眞色文、見西方空中、紫雲已聳ケリ、

悲喜淚如雨、嗚咽止禮讚、不及懺悔回向、二人合掌唱、最後十念待、聲盡打墜頭、墜頭向西、辭居斬身合掌安坐セリ。見者驚目、聞者彈指也。夫以、雪山童子投身於牛偈與鬼神、薩埵王子捨命於竹林杖、救飢虎、勇猛專精、何以勝之哉。一生終有限、何強惜身命矣

一、天野四郎事

河内國天野四郎大強盜張本ニテ人ヲ殺シ財ヲ劫ルヲ業トシテ世ヲ涉ル者アリケリ。年漸ク闌テ後上人ノ念佛弘通趣ヲ承テ心ヲ發シ出家シテ、教阿彌陀佛トテ無左右念佛者成テ、常上人參、念佛法門ヲ承ケルガ、或時上人ヘ參タルガ、人一人モ無リケレバ今夜ヘ御トキ仕ントテ留リヌ。又閑リテ後夜半計ト覺ル程ニ、上人ヤワラカニ起居給如法忍ビヤカニ息ノ下ニテ念佛給カト覺シキ事有ケリ。ツ、シマムトスレハ不叶教阿彌陀佛シワ吹ヲシタリケレバ、此僧知レヌト思シタル氣色ニテ上人打臥給フ。寢入タル由ニテ其モ明ヌ。教阿彌陀

佛へ此行法ノ様ヲ聞テ不審無限トモ憚ヲ成テ尋不申。サテ遙程經テ後又參タリケレバ、上人へ持佛堂ニ御座シテ聲ヲ聞給テ、何ニ致阿彌陀佛ガ何事、是ト被仰ケレバ持佛堂縁ニ參テ、致阿彌陀佛淺間敷無縁ノ者ニテ侍ル間、在京ナンドモ難叶侍レバ相模國河村ト申所ニ相知リタル者ヲ憑テ、罷下ベシ。今ハ年モ老候又可入見參トモ不覺侍。本ヨリ無智者ニテ候ヘバ甚深法門ヲ候トテモ其甲斐有ベシトモ不覺候ヘバ、只詮取テ決定往生仕ルベキ様ノ御言ヲ蒙ント申ケレバ、上人言、先念佛ニハ甚深ノ義ト云事ナシ、念佛申者ハ必往生スト知ル計也。何ナル智者學生云トモ宗ニアラザラン甚深義ヲバ争カ作出云ベキ。甚深義ノ有ラント云テ努力疑思フベカラズ。但念佛ハ易キ行ナレバ申人ハ多ケレドモ往生スル者少キハ、決定往生ノ故實ヲ知ヌ故也。去月又人モ無テ御房ト源空ト只二人アリシニ、夜半計ニ忍ビヤカニ起居テ念佛セシヲハ御房へ聞レシヤト仰ラレケレバ、寢耳ニ哉覽承キト申ケレバ、其コソヤガ

テ決定往生ノ念佛ヨ、虛假トテカザル心ニテ申念佛ガ往生ハセヌ也。決定往生セント思ハマカザル思ヒナク實ノ心ニテ可申、甲斐ナキ少キ者ノ若シハ畜生ナンドニ向テ、カザル心ハ無レドモ、朋友同行ハ云ニ不及、其ノ外常ニ馴レ見シ妻子眷屬ナレドモ東西ヲ辨ル程ノ者ニ成ヌレバ、其爲ニ必ズカザル心ハ起ル也。人ノ中ニ栖シニハ其ノ意無キ凡夫ハ不可有。都テ親モ疎モ貴モ賤モ人ニ過タル往生ノ怨ハナシ。其ガ爲ニカザル心ヲ發シテ順次往生ヲ遂ゲザル也。去リトテリ獨居テモ不叶、イカマシテ人目ヲカザル心無シテ、實ノ心ニテ念佛可申ト云ニ、常ニ人ニ交テ閑マル心モ無ク、飭心モ有ン者ハ、夜ルサシ深テ見ル人モ無ク、聞ク人モ無ラン時、忍ビヤカニ起居テ百返ニテモ千返ニテモ多少心ニ任テ申ス念佛ノミゾ飭ル心モナケレバ、佛意ニ相應シテ決定往生ハ可遂。此心ヲ得ルナラバ、必シモ夜ニモ不可限、朝ニテモ晝ニテモ、人ノ聞ク憚リナカラン處ニテ、常ニ如此可申。所詮決定往生ヲ欣フ實ノ念

佛申サンズル飭ラヌ心根へ、譬へバ盜人ノ有テ人ノ財ヲ思隱テ盜ト思フ心底ニ深ケレドモ、面ニハサリゲ無キ様ニモテナシ、搆テ恠氣ナル色ヲ見ヘシト思ヘンガ如ク、其盜心へ人全ク知ネバ、少モ飭ラヌ心也。決定往生センズル心モ、又如此。人多ク集居ル中ニテモ、念佛申色モ人ニ見ヘズシテ、心ニ忘ルマジキヤ、其體ノ念佛離テハ誰カハ是ヲ可知。佛知セ給へ、往生何疑ント被仰ケレバ、教阿彌陀佛申テ曰ク、決定往生ト法門コソ心得候。又既ニ悟リ極メ侍リ、今ハ聊ノ不審モ不待、此仰ヲ承ハラザラマシカバ、此度ノ往生ハアヤウク候ナマシ。但シ此仰セノ如クニテハ人ノ前ニテ念佛ヲクリ口ヲハタラカサン事へ、有マジク候哉覽ト、上人ノ言ク、其レ又僻胤也。念佛本意常念ヲ詮トス、サレバ念々相續セヨトコソ勸メラレタレ。譬へ世間ノ人ヲ見ルニ同ジ人ナレ共、豪憶相分テ憶病ノ者ニ成ヌレバ、身爲苦シカルマジキ聊ノ臆リモ怖恐レテ逃隱ル豪ノ者ニ成ヌレハ命可失コヘキ敵ノ、而モ逃隱ナバ可

助ナレドモ、少モ不恐シザリモセザルガ如シ。是カ様ニ眞僞ノ二類アリ。地體爲性ニシテ飭ル心アル者ハ、身爲要ナキ聊ノ事ヲモ必ズ僞リ飭ル也。本ヨリ實ノ心有テ虚言セヌ者ハ、聊ノ矯飭シテ身ノ爲大ニ其益有ルベキ身ナレドモ、身ノ利益ヲハ不顧、底ニ實心有テ少モ飭ル心無是レ皆ナ本性ニ受ケテ生レタル所ナリ。其實心者往生セント思テ念佛ニ歸シタランへ、何人ノ前ニテ申トモ少飭ル心ニ有マジケレバ、眞實心念佛ニシテ決定往生スベキ也。何ゾ是ヲ禁シメン。又地體へ僞性ニシテ世間サマニ付テモ、聊不實事モ有シカトモ、知識ニ違テ發心シテ往生セント思フ心深ク成リヌレバ、念々相續セント思テ何ナル人ノ前ニテモ、無相ニヒタ申ニ申サン者、是又眞實心ノ念佛ナレバ決定往生スベキ也。全制ノ限ニ非ズ、今云所ハ三心ノ中ニ一心モ闕ヌレバ、往生セジト釋シ給ヘルニ、三心ノ眞實心人コトニ難發ケレバ、其眞實心ヲ發スベキ様ヲ云計也。サレバトテ、只ノ時念佛ヲ申シトハ、何カ勸ム可キト、

又教阿彌陀佛申テ云、前仰セ侍リツル様ニ、夜ル念佛ヲ申シニハ必ス起居侍ルベキカ、又念珠袈裟ヲカケ侍ルベキカト。上人言ク念佛ノ行ヘ行住坐臥ヲ不嫌事ナレバ、臥申サントモ居テ申ントモ、任心可依時。念珠ヲ取袈裟懸ル事モ、又折ニヨリ體ニ可隨。只所詮威儀ヘ何モ有、此度ビ構テ往生セント思テ實トシク念佛申サンノミゾ大切ナルト被仰ケレバ教阿彌陀佛歡喜踊躍シ合掌禮拜罷出ケリ。翌日法蓮房信空ノ許行テ教阿彌陀佛コソ坂東ノ方ヘ修行シ侍レ。昨日上人ノ授サセ給ヘル決定往生ノ義ト申出テ下向シ畢ヌ。其後上人御前ニテ信空此事ヲ申出シテ、サル御事侍ケル哉覽ト申サレケレバ、其事也。サル舊盜人ト聞置キタリシ間對機說法シテ侍リキ。一定心得タリト見ベシトコソ被仰ケル。教阿彌陀佛ヘ坂東ニ下テ無幾程シテ、所勞付テ最後ノ時、同行ニ語テ云、我往生ヘ決定也。是則上人仰ノ末ヲ信ジテ往生ノ故實ヲ存知シテ侍ル故也。往生ノ様必ズ上人ヘ申セト遺言正念ニ住シテ念佛數十返

唱テ終ケリ。遺言ニ任テ頓テ同行ノモノ京ヘ上リ、往生ノ様委ク上人ニ申ケレバ、能ク心得タリト見ヘシガ、不相違ケリトテ、今生ニハ大惡黨ノ張本トシテ人ヲ殺シ、財ヲ奪フヲ事トシテ人ニ過タル罪人ナレバ、前業ノ修因又惡ノ極ナルト暗ニ知レタリ。カ、ル罪人ナレドモ、本願ノ念佛ニ歸シヌレハ往生ニ障リ無シ。況ヤ其餘ノ人ヲヤ。全ク罪ノ輕重ヲ不可云、只念佛可申也ト云云

法然上人傳卷第八

一、上人配流事

罪惡生死之類、愚闇鈍聾併依聖人化導偏謬彌陀本願處、天魔競雖被罪科安樂等、逆鱗尙不止、重弟子科被及師匠。建永二年^{丁卯}二月廿八日被下上人遠流^{宣旨}。此事禪定殿下再三被執仰之間、座主前大僧正依被有門徒輩、山門半令承伏處、俄召度緣被下俗名被定遠流

之科、源元彥土佐國可令配流之由被宣下畢。彼宣下狀云

太政官府

土佐國司

流人源元彥

使左衛門府生

清原武次從二人

門部二人

從各一人

右爲領送流人元彥差件等人發遣如件、國宜承知依例行之、路次之間亦宜給食漆具馬三疋符到奉行

建永二月二月廿八日

右大夫中原朝臣

左少辨藤原朝臣

追捕之檢非違使者宗府生久經、領送使者左衛門府生武次也。禪定殿下山門憤難治被思食處、衆徒及豫議由聞食御安堵有、存外宣旨下、是併院御計有御意得暫申、子細於公家程、無左右不可有御下之由、雖被奉留爲勅勘之身片時居住帝都、旁有其恐、上人出立給ケレバ、然者可奉入法性寺小御堂由有仰。三月十六日迄奉留置、于時法蓮房信空泣々被申、住蓮安樂者已被罪

科畢、聖人流罪者只一向專修興行之故云云。然以、衰邁之身出遠境之旅、與師生別離相去誰幾許畢。各在天一崖山海阻亦長音容共限、今再會安可知。又愁師雖無所犯、既蒙流刑、實爲留跡之身、獨胡顏之厚且勅命也。一向專修興行可留由給、內々可有御化導哉侍覽云、打心歎息、一座門弟多是義同、上人言、余流刑更不可恨、其故齡已迫八旬、縱隔山海淨土再會何疑。又雖厭存人之身也。雖惜死人之命也。何必處依哉。因緣不盡、何復今生再會不變焉。任他念佛興行洛陽年久、當斯時化邊鄙之群類、是年來之本望也。然而不至、時素意未遂、今依事緣顯、日來本意、顯可謂朝恩、此法弘通者人止法更不可止、諸佛濟度之誓深冥兼護持之契、勉也。然何世間機嫌、憚可隱、經釋素意。但痛處源空與淨土法門濁世末代衆生、決定出離要道。故守護天等常隨給、我意雖無、遣恨彼等定致冥鑑。若爾者、貧道流罪弟子、斬刑如此、前代未聞事、絕常篇、因果不空生而住世可被思合也云云。信空云、先師言不差、果有其報、何以徵諸、承久騷亂、東

齋戰上郡時君於北海島中多年傷心、臣於東土路傍一日失命、先言之有徵、後生宜聽取矣

又上人念佛法門談給。一人弟子西阿彌陀佛推參、如此御養努力不可有候、各不可申給御返事申ケレバ、上人云、汝經釋文不見哉。西阿申、經釋文雖然世間機嫌存計也。上人又言、我縱雖被行死罪此事不云者不可、至誠之色尤切也ケレバ、奉見諸人皆流淚、サテモ綸言如汗、非可歇止間、官使來急移配所給由責申、上人被仰云、往生極樂道區、其中開本願稱名一行隨代被機弘通處、無道心之輩恣構邪義僞說師說間、其科歸一身被追下帝都之外事、是不慮之災過也。但強非痛此事、結緣且順逆、引接不可嫌人、來迎有前後遲速可依物機、在纏出纏皆火宅也。眞諦俗諦併水驛也。己配所令趣給ケレバ、月輪禪定殿下力不及給御餘波奉惜給事不斜、彼殿下申、忠仁公十二代後胤果代攝籙臣朝家憲政詩歌之才幹君、是許世是奉仰。雖然偏往生極樂御望深カリケル上へ、御出家後數年上人屈出離要道尋

淨土法門談給。上人頭光親拜見給後、一向生身佛思成給、然不測蒙勅勘給由、聞食御歎不尋閑、去年建永元年三月七日後京極殿俄隱給、御歲僅三十八成給。是付彌今生事へ思召捨一筋後生菩提御營也。上人常有御對面生死無常理被聞食、往生淨土御勤功重聊御心名草給、上人左遷罪當給事、何宿業ニテカ、ル事見聞覽。命長程悲事無、蒙勅勘給上人御歎最無、禪閣御悲不淺、奉見人心無置所程也。此申止メザル事世世甲斐無、無左右申其恐深。連々御氣色伺勅免申行フベシトソ被仰。配所土佐山本郷被定ケルヲ餘遙也、我知行國讚岐國小松庄へ奉移給。三月十六日曉更花洛出夷境趣給。信濃國住人角張成阿彌陀佛力者棟梁最後御共也御與ヲカク彼成阿者俗姓者清和後胤六孫王苗裔也、爲源氏正統守王家拉朝敵伊州玄孫ナレドモ給仕上人爲奴、爲僕取履昇輿採果汲水之役、拾新設食之營、自趣驛路之始迄居謫所之後、一日片時無不奉仕矣。凡同樣隨奉僧六十餘人也。上人一期威儀車馬與不乘給、金剛草

履步行給。然而且老者也、遠遠堺不_レ_レ且勸身故、乘與有ケルニコソ奉_レ惜、名殘、前後左右走隨貴賤上下幾千萬事不知、各一同悲音衝滿、東西盡聞不_レ辨、方角、再會何時期、面面悲之各愁之。去ハトテ御歲盛ニマシマスカヤ七十五老體也。餘命不_レ幾思悲歎淚難_レ禁、聖人彼等諒給言ク、驛路は大聖住所也、漢朝一行阿闍梨、日城役優婆塞、謫所又權化之栖所、晨且白樂天、吾朝嘗丞相也。

上古英聖猶爾也、況末代愚蠢哉。先蹤在耳爲_レ恥不_レ足、

當無過流刑如此被_レ仰。上人鳥羽草津召_レ御船、大納言律師公全同日西國流罪。此又上人歸依故也、律師先立船乘タリケルガ聞、上人御下之由_レ奉待、付乗移上人御船御膝爲_レ枕上聲叫喚、上人物不被_レ仰、只念佛ヲゾ申給。サテ御形見爲_レ上人眞影賜ラレケル、船中給ル御影當時二尊院塔マシマス是也。其日上人御船、神崎橋上二町計引上付、御送人々船同所着、及暮程傾城五人從女相押唐笠指上人御船近參。隆寬是御覽言、名聞不好給者、無美麗類、艷色耽給、象眼風情無、貪欲不御座

者、米穀所持希也。依何可望給、左様之事商客船可聞給上人御船也不可_レ叶云云。傾城申可有_レ情上人角御厭、增商人心無船何可_レ申哉。其後不_レ音良久餘三十計傾城船ハタヲ叩調子取。上人御船始東船西船蕭然是聞、一句今様歌ケリ。慈悲室廣人嫌ヘヌトコソ聞ケ、何女人障、船中人浦目哉ト、二三遍押返歌。其後申設今生御引出物コソ雖不_レ給、我等耳留程後生之御引出物預罷歸申。

隆寬律師聞之、鳥羽院御時事平等院僧正行ト申、小一條院御孫天下無雙有驗高僧御座ケレバ、天王寺之別當

補任セラレテ拜堂爲_レ被_レ下時、江口神崎遊君共船近寄ケレバ、有漏地ヨリ無漏地ニ通フ釋迦ダニモ、羅睺羅母有トコソ聞ケト歌ヒ出シタリケレバ、様々纏頭給。自其後成例。天王寺又同宿長者老病ニ臥最後時歌ケル今様、何ニシニ我身ノ老ニケン、思ヘバイトコソ悲シケレ、今西方極樂ノ彌陀誓憑ベシト歌ケレバ、紫雲蒼海波ニ聳、蓮花白日天雨、音樂遠聞異香近匂往生遂侍リケルモ、此上人御勸隨可_レ奉。故今思合ヘセラレテ侍ル。

何可苦御免可有被申ケレバ、傾城喜御船參。上人彼等有様御覽後生引出物所望コソ情ケレ。更ラヌダニ惣過重事也。同女人乍云、汝等殊罪障深重也。此世非常栖自結草葉露、無慕我身假姿也。宿水月ヨリモアダ也。金谷詠花客伴花隨無常之風、南樓翫月輩先月隱有爲之雲、鳥邊野朝霞示不有之世、船岡山夕煙後先立。殘蕊花樣貌蓬下朽、麗無姿苦底埋。無慕世習哉。可無慕人身也。各夢中假棲不留心、淨刹蓮臺可係念教化給。遊君流淚申、如此離愛世、此程無慕捨身生淨土女人之身、何ナル行可勤侍哉。上人云、女人障重諸教不叶出離、去彌陀如來本願殊女人深見。草提五障身タリシニ無生證、西方侍女百惡姿往生顯、淨域然彌陀如來係憑易行名號運志、今度難受得人身思出心愛カリシ可離六道歎衢云云。遊君共聞之各隨喜申、今生御引出物何カセン、今ノ御法門深耳留侍ヌトテ、御前立、我船乘遷後、又別船傾城二人乘上人御船進、彼遊君脇下手箱取出上人御前指寄申ケルハ、莫大御法門承侍。

何御布施思案侍、斯可御用立物不侍、此御布施自何御目懸ラレント覺侍程、我等中ヨリ奉候也申。上人箱開御覽引合押裏物之五有、取上御覽元結際髮ヲフツツト切褻タリ。上人是御覽流淚云、是御覽候哉、人々女人身粧、高賤老若皆髮以大切、短末續無元形刷一生大事髮、能往生ハ願ヘシキ願事ナレバコソ如此有ラメ。サレバ源空何習何行今迄如此發心セザリケルゾヤ、一句聞法養永劫之魂、此事書キクドキ、泣給、見人哀聞人モ歡喜。彼傾城共被召上人剃刀當給。各出家面々投戒美コソ思取給道心ナレ。彌陀如來六八誓願中第三十五之本願女人引接誓給。去身任本願南無阿彌陀佛聲下息終畢命欲終時、自來迎接約束任火中底彌陀來迎垂給也。此旨忘事無、皆々可往生給ケレバ、承ヌトテ御前立我船乘移神崎橋詰繫、遙西方見送、月淡路島傾歸鴈一聲霞中音信、幽々春風折騰空物哀、彼五人出家尼傾心西方係憑彌陀、專稱念佛數百餘返、體責眞實也、十念高聲唱忽水底投身畢。殘留從女等是御覽候哉、厭浮世

御座人々水底投身給、聲不惜泣人々立出御覽、紫雲空聳水面紅也。曉月傾西波上明也。忿負上タリケレバ、合掌不亂如眠各遂往生。雖末代雜有事共也。即北別所云所送置被遂。教養畢、近江國女人サカニテ念佛事、建永二年三月十八日葦屋浦雀松原生田奥御船漕過攝津國福原經島着給。此島六波羅大相國一千部法華經石面書寫漫々浪底沈、鬱々魚鱗爲救也。安元寶曆始、未來際盡結緣人々今石拾向云也。其夜半深ヌラント覺、更闌夜閑也、有明ノ月影傾海上浪納而奧見渡、白浪高立渚向テ寄テ來。上人御船部崎左右立分船階下打寄、無何如山物浪底立上、屋形左右遺戸中覆懸程覺間、鷲角張成阿式部、西信等何物覽思見、浪底不知立上長五丈計鬼神、其色赤一入再人紅如也。上人左御膝ニヲトガヒヲ持上人守奉。右方同長鬼神、其色白キ事阿害似是上人右膝ニヲトガヒヲ宿御貌見上奉。其時成阿西信向云、是口惜キ事侍。法然房行邪法洛中被出趣配所時、海中鬼神食成リケルナント、南都北嶺嘲成事悲。身爲恩

仕、何海底ノモクツト成ル共、上人御伴可申命依、義輕設鬼神食成爲師匠捨命不惜目不放。式部西信思ケルへ、善導上人頗捨身命仰屬彌陀教、師匠共死命毛髮計不惜、身全時小兒不嘲、命輕時鬼神不恐云事。師命替云上人近參寄。然上人敢不驚給御眼閉睡如心閑念誦給、彼鬼神等暫有申、上人我等程怖物見、上人爾時御目見開源空汝等遙怖物隨身持也仰。鬼神何物覽申、上人答曰、惡業煩惱是也。無始曠劫以來輪迴生死成佛眞道不進事、只源空持處煩惱態也。汝等今一旦命殺計也。煩惱賊過去遠々源空命殺、又未來永々可殺。去爲煩惱賊之所害者說給。汝等左様見惡體受此煩惱故也。汝等思不疎、曠劫流轉間源空汝等形受時有、爾時汝等父母憑兄弟契親友所從成寬、過去舊緣思、汝等不怖、又流轉生死昔思汝等不昵。爲父母兄弟時忒成無量罪業。曾不聞佛法名字其罪業餘留于今不盡。成常沒常流凡夫去汝等有様敢不怖最心閑念誦給爾時鬼神申。上人誠道心學匠御座。我等於身有憂悲是上人尋申爲參。我等

土佐國ホヅミサキノ上山岩嵬栖者也。然我等父母一千歲經必死スベキ也。我等今年三百歲罷成り、彼二親共我等行末未見終死事強歎申也。上人延命法知給タラバ授給。二親命今七百年延我等共死思侍也、上人日域第一智者承等申爲參也云云。上人長壽法我知、汝等二親具足可來ノ給。鬼神手合喜罷返畢。其比唐土唐人渡リケルガ日本ニ名譽シタラン才勸之人相問答セント云ケルガ、折節兵庫有得智惠第一上人此島着給、人々申ケレバ問答セントテ罷向タリケルガ、彼持意云、唐人取不取コ、ヲソルニナドコ、ヲソラヌゾト申ス意ハ、カミソルヒゲソルニ、ナドマヌヲバソラヌゾト不審ス。上人此ノ返答無シテコ、キルニナドコ、キラヌゾト被仰、意ハ毛有ル所ニエボシヲキルベクバ、ヒゲニハエボシヲキセヌゾト翻詰シ給リ。時ニ持意舌ヲ卷歸。三月廿七日經島逗留、村里男女老少參集濱沙數不知、同廿一日上人御船出奉、御送人々船葦屋奥指行留互袖淚飽。別悲乍各暇申都歸上給。上人御船淡路瀬戸過給汰

海奥海中御覽スレバ、鯨鯢ワニナンドヲ始メ、海中群類其數不知大口ヲ開キ鹽吹白浪頻立、御船近成船部崎左右船階ナンドニサ、メキ廻、海面不閑、水手棍取騒ゲリ。上人立出魚類白浪中群御覽、有情輪廻生六道、猶如車輪無始終、或爲父母爲男女、世々生々互有恩ト云文唱念佛百遍計申給。其後又光明遍照文誦、高聲十念唱給、彼魚類共波底入、彼等欲免畜業爲結緣上人御船近參タリケルカト、彌々法德奉貴。播磨國高砂浦着給、男女老少群集中七十有餘老翁六十有餘老女進出申、我等重代此浦海人也、幼少漁業朝夕魚貝命絶、波世計、物命殺物地獄墮苦受事間無由傳承、悲侍、此德離身命難續、故乍歎此罪業積經歲、此罪遁計事候助給申手合泣、上人哀垂極惡最下人、南無阿彌陀佛唱佛悲願乘極樂往生趣、慇懃致給十念被授、歡喜淚流返。彼二人年來夫婦也。上人仰承後盡浦出魚貝漁云共、夜宅歸二人同念佛事、近隣人驚程也、遂二人臨終正念往生シケル由、後人上人語申、罪輕重不依念佛往生現證

也、常御物語有ケル。サレバトテ念佛行者罪犯非、所詮罪五逆生信少罪恐、念佛一念生信多念勵被仰ケル也。同ク三月二十二日福泊奥、高瀬瀨御船隱、遙南方見帝王皇后如主從類其數引具上人御船參。人々成奇特思處。彼人申爲佛法結緣云、爲奉訪上人配流云、就彼是參也申給。難有御志也。暫有法問授十念給、各合掌罷歸畢、海中利益非一度々也、如今始彌奉貴。是則龍王之化現、大唐一行阿闍梨趣過羅國九耀放光照闍穴道吾朝法然上人遷土佐國給八龍顯我形奉訪配流一行歩山中之巖岨上人行海上之浪阿闍梨九耀之形移三衣上人八龍返授十念不限上古大國不依末代小國名德高貴威驗彼此不替不思議也。同國室津着給時、小船一艘近付來、遊君船見聞、上人御船人々頻是制、遊女申云、上人船由承間聊可申入事侍故推參由云モヘテズ、則鼓鳴聞ヨリ冥キ道ニゾ入ヌベキト、兩三度歌淚咽無云。稍久有申、昔小松天王八人姬宮遣七道君名留給、是遊君濫觴也。更女極障重事也。同女人乍申我等殊罪

深身也、船中浪上恣一生歡會、明暮只誑人意思、乘月影叩夜船係心往還客棹浪上浮水面見上下人日傾西者何刷無暮形、月出東者待不漫夜之契、但任身於佳客碎心、宵每留替遷香於身費思、人々手枕袖殘惜、焦胸罪深身生侍事、返々口惜悲泣。上人哀愍淚流給、良有テ上人言述處誠罪障不輕、酬報又難量、過去宿業依今生惡身得、現在惡因酬當來惡果感事無疑。若此態外渡世計略有バ、速此可離惡緣、縱餘計略無云、若身命不願志有又業可捨。若又餘計略無身命捨志無只其身乍專念佛也。彌陀如來汝如罪人爲立弘誓給。其中女人往生願、然則女人是本願正機也、念佛是往生正業也。深信心可發敢卑下事無、罪輕重不云、本願仰念佛、何柴戸苦筵共、所不簡、臨終夕彌陀如來無量聖衆共來引接給故、往生無疑由被仰。遊女歡喜淚流渴仰堂合、歸後發心眞實也。信心堅固也。一定往生哉被仰、上人歸洛之時是被尋、村人等申云、上人御下向後則出家近山里館居無他事、念佛申侍不經幾程、臨終正念高聲念佛往

生侍由申ケレバ、シツラントゾ被仰。建永二年三月廿六日依月輪殿仰讚岐國小松庄預處駿河權守高階保遠入道西忍奉入館、數日相勞奉、西忍去夜夢滿月輪光明赫奕袂宿見、不思議成處、今上人入御間、去夜靈夢併此事ナルベシトテ、至仰信キラメキ奉營溫室、美膳ヲ備奉。志願侍。上人溫室一首詠給極樂モカクヤ有ケヤマイラベヤ南無阿彌陀佛。上人へ念佛往生悉授給、自行化他共一向專修ナルベシト勸給、遠近男女老少至傳聞輩皆念佛歸シケリ。誠及世澆季、是程上人奉生合化導傳承ランダニモ可難有、次親拜見奉供養展事、宿緣目出度事實不思議。其後生福寺奉移官人等歸洛畢。彼生福寺申弘法大師立觀音靈驗地也。四月三日詣普通寺云寺給。大師爲父同建立之、一度參詣人必可爲一佛淨土友由、有大師記文。我不蒙配流宣者、爭參詣此寺、是歎中喜也トゾ被仰。然彼普通寺寺僧等去夜夢見、明日勢至菩薩來觀音可有御對面、十四五計童子告見成奇異思。此由寺一和尚寺僧等語、寺僧中同如夢見、上人御參詣

有成不思議思。各念佛奉受。同大智證大師初生所金藏寺詣給、下向給寺庭兔鹿其數出來少恐無氣色、上人奉向。上人彼等向念佛給歸給、鹿共奉付下御送申。最不思議也事共也。彼弘法大師大唐渡太祖山詣給ケルニハ千頭蹄向大師折膝、今法然上人金藏寺詣多獸上人奉送以上

阿波國目代弘澤中將入道也法名正進。件正進上人出家御弟子也。上人讚州御座之由聞、以使者申、臥身病床不足

行步候、可然者上人有御來臨示臨終正念教訓給云上人哀思召立給彼修行、次上白峯崇徳院御廟塔參給。

此君高松院第一尊無由御合戰依此島々守成ヌルコソ哀ナレト、上人思食連御念佛。于時鳥一羽飛ビ來御墓上在、上人此鳥崇徳院奉見成給、其夜白峯院主夢見丸

書寫奉沈海底所五部大乘經明日法然上人可令致供養夢想。夢覺後鐘鳴大衆集會此由披露。即上人五部大乘經可奉供養義定畢。又上人同感夢想給、丸自筆五部大乘經奉沈海中、上人供養可給。御詠流レ來テ身ヲウキトリノネヲソ

此由寺一和尚寺僧等語、寺僧中同如夢見、上人御參詣

ナクワタツミ深キ
ソコヲシラネバ
仍上人赴請唱導師、其日秀句云、君是

日本第一種性罪亦日域第一惡業也。曰金堂上松原大聲以云、生爲主上恥曝、死爲上人顯罪院、真有、堂內堂外諸人皆淚流侍。聖人白峯立志渡道場詣給。風吹浪高松崎長樂寺云處入給。彼松崎立給御船蟪浦着、然俄風吹雲驟雨降來、無程晴、鬼神四人參、上人御覽兵庫約束申鬼神也。上人是等汝申者共ノ給申入侍二親是也。早長生不死良藥與給申、上人三尺五寸阿彌陀如來立像奉懸、鬼神仰云、汝等佛奉拜、汝等形是卽生卽滅姿也。彼佛長遠不死果報也。皆々心閑可聽聞、六道四生間廿五有境、何所免死者一人可有之哉。汝等姿雖怖、全無常殺鬼不可怖。已等力強云共、魔滅獄卒必結負。日々所作可沈三塗、夜々所思可入八難、過去修行佛道タラマシカバ、今生加々留受鬼神形、死苦不歎、各命長親子共相副ント思、南無阿彌陀佛唱、今生醜惡穢身可捨。此身捨畢此阿彌陀如來觀音勢至無量聖衆共來、汝等迎取極樂淨土置給。彼土生永生生死根源絕、六道還事無、

至所只無量樂得、更不可有憂惱勸給。鬼神等申云、誠南無阿彌陀佛唱ヘアノ佛御體罷成侍。上人實然也。

全勿疑。然者我等此法授給申手合十聲南無阿彌陀佛授給。又仰云、汝等命有程此南無阿彌陀佛忘事無、常可唱又此佛御前可死、此本尊與給、鬼神等本尊給上人拜歸。其日漸暮翌朝御船出。上人暫留給、彼鬼神去方常可見云云。仍御弟子等彼方相見、空紫雲聳、此由申上人御覽彼紫雲下尋、船漕ヘシト仰。仍船急御船ヨリ二里計行、海岸高岩、數千丈也、彼人上見給、松枝奉懸本尊花折石上置、四人鬼神自岩身投。其岩下船寄上人御覽、一人老鬼頭二打破死畢。一人鬼腰中切身躰二成面々身體捨畢。然而合掌手不亂、上人彼等死骨御覽流言、源空一旦教化依、身命捨遂往生事哀、頓捨身命仰屬彌陀、大師釋給、源空未是程志無。鬼神劣心哉、御衣袖絞敢不給泣給、諸人同悲合爲、訪彼菩提阿波國目代被仰付、三間四面堂立號鬼骨寺、于今有彼寺云云。角志渡道場參詣遂、後生福寺歸給畢。諸人群集聞法結

緣念佛門歸者、盛市ノ如シ

一、津戸三郎奉訪上人事

上人流刑之事津戸三郎深疑有餘、自武州讚岐國奉使者、

上人御返事七月四日御消息八月廿一日見候畢。遙堺加

様被仰候御志不可申盡候。誠可然事ニテ加様ニ候。

兎角無申計候、但今生事者就之我人モ可思知事候。

急急可思召候。今日明日不知身、懸目見心憂事候。

サレバコソ穢土習候へ。只トク／＼遂往生バヤトコソ

思ヒ候、誰是遺恨事夢思食不可候。可然身宿報申、又

穢惡充滿堺是始事候、何事付只念々往生ヲシテント思

ベキ事候穴賢 八月二十四日 源空判云云

後生思往生願人、上人如仰今生何深恨有、更其人咎成

遺恨充事勿。只偏娑婆世界習作付穢土咎思成、其厭離

穢土便、彌欣求淨土思可増者也

凡謫居五稔之際、懺候頑鄙之流、從化立行之者、實繁

クシテ有徒

于時大永六年初春中旬三日書寫之

法然上人傳卷第九

一、一念邪義流布事

山門西塔南谷住侶鐘本房少輔、聰敏學匠也、最愛之兒

後交衆倦思、三十六歲遁世、上人弟子成、入念佛門、成

覺房申。天台宗引入迹門彌陀本門彌陀立、十劫正覺迹

門彌陀也、本門彌陀無始本覺如來ナルガ故ニ、我等所

具佛性全差異無。此謂聞一念事足多念數遍甚無益也云、

一念義云事自立シケルヲ、上人彌陀本願極重最下惡人

助、愚癡淺識諸機救爲、一形勸念々不捨是正意也、無

行一念義立多念數返妨事、不可然被仰不承引、猶此義

興、非吾弟子、弃置。兵部卿三位基親卿深上人勸進旨信、

毎日五萬數返。成覺房一念義以、彼卿數返難重々問答

致存知旨記錄尋申狀云、念佛數返并本願信様、愚案如

此候。難者無謂候、若御存知之旨候者、以御自筆書給

可候、別解別學人候者耳不可聞入、御弟子等說候不審

成候也云云取詮。爰上人御返事云、仰旨謹承候畢。御信令取給樣、折紙具拜見候ニ、一分愚意所存ニ不違候。フカク奉隨喜候。近來一念外數返無益也申義出來候、勿論不足言之事ニ候歟。文釋離義申人、若已證得候力如何尤不審候。附佛法外道不可求外、天魔競來如此狂言出來候歟。猶々不能左右候云云取詮。爰上人配流後成覺房弟子善心房云僧、越後國專此一念義立、光明房云者心得事思、承元三年夏比消息以上人尋申付、上人書起請文被送京都畢。其狀云、當世赴念佛門行人等之中、多以有無智狂惡之輩、未知一宗之廢立不及一法之名目、意無道心、身求名利、因茲恣爲度世之計、全不顧來世之罪、奸弘一念之僞法、謝無行之過、剃立無念之新義、猶失一稱之小行、雖微善削跡、雖小罪於罪障增勢、爲受利那五欲之樂、不畏永劫三途之業、教示人云、總彌陀願之者勿憚、五逆、任心造之、不可著袈裟、着直垂、不可斷姪肉、恣可食鹿鳥、弘法大師釋異生姪羊心言、但念姪食、如彼羴羊、此輩只就弊欲、偏此類歟。

十住心中三惡道心也。誰不哀之哉、匪啻謗餘教、還失念佛之行、勸懈怠無慚之業、示捨戒還俗之儀、此本朝無外道是已天魔構也。破滅佛法、惑亂世人、隨此教訓者、癡鈍之所致也。雖未學教文、有識之人、偏何可信之哉。善導觀念法門云、唯須持戒念佛云云。弟子三昧發得、懷感禪師群疑論云、志求都率者、勿毀西方行人、願生西方者、莫毀兜率之業、各隨性欲、任情可修學云云。安養行人若欲行此教者、逐祖師跡、隨分守戒品、不作衆惡、不謗餘教、無輕餘行、愬於佛法、成恭敬心、更修三萬之念佛、當期五門九品之淨土矣。而近日北陸道中有一狂法者、構妄語云、然上人之七萬返念佛者、是只外方便也、內心有實義、人未知之、所謂心知彌陀本願、身必往生淨土、極樂之業、於是滿足、此上何難一返也。重可唱名號哉。於彼上人禪房門人等有廿餘人、談秘義處、淺智類者、性鈍未悟、利根之輩、僅有五人、得此深法、我其一人也。己心中之奧義也。容易不授之。擇器可令傳受云云。風聞說若實者。以謀言也。爲哀迷者今立

誓言、貧道若秘之、僞宣此旨、注不實事者、十方三寶當垂、知見、每日七萬返念佛、空失其利益。圓頓行者從、初心緣、實相、修六度萬行、至無生、何法無、行得證哉歟。願墮、此疑網之類、切邪見稠林、至正真心地、遁將來鐵城登、終焉金臺、胡國程遠、思於鴈札、北陸塚遙、開心於像教、山川雲重、隔面于於千里之月、化道緣厚、近臻於一佛之風、加之犯惑之輩、未誠半卷書、不受一句法、空號弟子、甚其謂無。以己心智德、爲使人信用、恣說外道法、爲師匠教、或自稱名弘願門、或任心作謀書、號念佛要文集。此書中引、僞經、誰備據、謂念佛秘密經是也。經文云、不可作諸善、只可勤專修一念云云。彼書流布花夷、智者雖見、可嗤愚人、莫信受之。如此謀書、前代未聞、猶於如來寄妄語、況於凡夫、與虛言哉。如此猛惡、以一可察、萬者歟。是癡聞之輩也。未及邪見誑惑之類也。爲名利誤、他云云。抑貧道從、山門學文之昔五十年間、廣披閱諸宗章疏、所無、敬岳者、尋之他門、遂一見鑽仰年積、聖教殆盡加之、或一夏之間、修四種三昧、或九旬之中、行六時懺法

年來長齋修練、顯密諸行、身已疲老、後勤修念佛、今就稱名之一門、雖期易往之淨土、猶於他宗教文、悉成敬重、沉又素所尚之眞言、止觀哉。傳持本山黑谷法藏、有所闕聖教者、猶重奉補寫之、而愚昧後來之客、未見往昔、不知深奧、僅聞念佛之行儀、猥成偏愚之邪執、嗚呼哀哉、可傷可悲。有智之人、見之達其旨趣、粗載先年之比、所注之七箇條教誠文、子細多端、不能毛舉而已。

承元三年六月十九日

沙門源空在判

上人在國之間、無常之理說、念佛行勸給、當國他國、近里遠村、道俗男女、貴賤上下、群集事、盛市成、然則上人化道、依或自力、難行執情、捨、或邪見放逸、振舞改、念佛往生、途人多。洛陽月卿、雲客、歸依歲久、邊鄙田夫、野人、化道日淺、是則年來本懷也。然而時未至、乍思歲月送所、此年來本意、遂事併是朝恩、也被仰

一、蒙敕免被召還事

建曆元年夏、比、後鳥羽院八幡宮、有御幸、一人倡妓橫云、星災無親疎、只與善人、依王者德、失有國土治亂、吾南海

邊邑有可訪日々往反苦哉々々、近代君闇臣諂政濁人愁、

王城鎮守百王宗廟連々有評定事、天下逆亂率土荒廢定有後悔歟云云還御之後近臣等奏申。倡妓託宣之趣非只事、凡妖不勝德仁能卻邪治國土計不如德政、退妖孽之術在歸佛法、專修念佛停廢、法然房之配流尤可有有御計哉云云建曆元年七月之比。後鳥羽院御夢想云、蓮華王院有御詣着納衣之高僧出來奏云、法然房故法王并高倉先帝圓頓師也。德等賢聖益普當今君以大聖權化處還俗配流之罪咎、同五逆苦報不恐哉、御夢覺後、密示光親卿、光親得折亦可有赦免之由勸申之間、忽止龍顏逆鱗誠、被下烏頭反毛宣旨、此御夢想爲奉助本師彌陀如來垂迹觀世音菩薩令示現給也。赦免宣旨狀云、左辨官下土佐國應早召還流人源元彥身事丈長一人右件元彥去建永二年二月廿八日坐事配流土佐國、而今依有所念行、被召還者按察使權中納言藤原朝臣光親宣奉勅、件人宣令召還宜居住畿外、勿往還洛中、者國宜承知依宣行之。

建曆元年八月八日

小槻宿禰國宗

權右中辨藤原朝臣赦免之由聞都鄙、京都門弟再會喜、邊鄙土民餘波惜、悅歡相半侍。上人預勅免給國出上給、攝津國押部云處暫逗留給、老少男女勸念佛門入給數不知、雖有恩免猶不許洛中往還、攝津國勝尾寺暫住給。此寺善仲善算古跡、證如聖人往生地也。上人西谷草菴結住給、折節恒例引聲念佛有、僧衆法服破壞見苦。弟子信空上人以京都檀那被仰裝束十五具調被施入、寺僧悅臨時七日念佛懺行。彼菴室今在之、其室入自異香ヲカグコトナン共侍、步運人多侍、當寺一切經不御座之由聞、上人所持經論渡給、住侶等各悅花散香燒蓋指向奉、住侶等隨喜悅豫屈安居院聖覺法印爲唱導開題讚嘖時其詞云、夫八萬法藏八萬衆類引導、一實眞如一向專修顯處也。彼大聖世尊自說唱南無佛給、其名不顯云、心彌陀號也。又上宮太子誕生南無佛唱給、其體不萌云志極樂教主也。然慈覺大師念佛傳灯者、引經文和寶池波劣機行不能、諸師所立念佛三昧緣佛境拂心地之塵、下

根勸、不能、惠心僧都要集二道作一心者迷ヒヌベシ、永觀律師十因十門開、一篇不付、空也上人高聲念佛聞名益普名號德不顯、良忍上人融通念佛神祇冥道勸給共、凡夫望疎、爰我大師法主上人行年四十三入念佛門、普弘給、天子嚴玉冠西傾、月卿賢金笏東正、皇后媚章提希夫人跡追、傾城ノコトナキ五百侍女儀孿、然間富慢翫貧歎友、農夫鋤踏念佛以田歌、織女糸引、念佛以經緯、鈴鳴驛路念佛唱鳥取、船叩海上念佛唱魚釣、雪月花見人西樓目懸、琴詩酒翫聾者西樓梨子折、是皆彌陀不崇瓊瑾、珠數摺恥辱、以此花簇英才云不念佛者落、乞丐非人云念佛翫、故八功德水波上念佛蓮池滿、三尊來迎掌內紫臺閣無障、然者我等不念佛、彼池荒廢也、我等欣求セザルヘ其國ノ衰弊也。國茂佛樂念佛以本、人願我望念佛爲先、仍當座愚昧公請使夜念佛唱枕、私慮出趁日極樂念車馳、是上人之教誠也、抑又過去宿善非鼻ヲカミ音咽舌卷無滯間、法主淚流聽衆袖紋入念佛門併上人勸隨誠是宿善至也。愚心短舌非可述。サテモ

上人勝尾寺隱居後、蒙烏頭反毛之草下、早花洛可有還御之由建曆元年十一月十七日、藤原中納言光親卿承重賜院真有上人歸洛、一山德慕、滿寺絕賜、萬仞霞出九重雲送奉處也。同月二十日上人已有入洛慈鎮和尚御沙汰令住大谷禪房給。昔釋尊上天雲下給人天大會先奉拜見事詳、今上人南海浪逆上給、道俗男女先供養展事營、群參輩一夜中一千餘人聞、幽閑地占給、人集盛如市、上人入洛之後有雲客夢、上人內裏參天童四人雲乘管絃奏、天蓋指覆奉見夢覺。上人參內給云不思議也云事共也

一、御臨終事

建曆二年正月二日老病相垂有時而至之。日來不食殊甚增氣微此三四年以來耳目昏憒見色聞聲共以憊、然而臨大漸期二根明利不違晦昔、見人隨喜自臥病席不交、餘言偏談往生事、高聲念佛相續不絕、夜睡眠之時念佛舌口鎮動見者、成奇特思、同三日戌時或御弟子問云、今度往生決定歟。答云、我本天竺國有時者、聲聞僧交頭

陀行、今日本國ニテハ天台宗ニ入テ一代教法學、念佛門入衆生利、我本極樂在身也、定極樂歸行被仰、勢觀房申、抑先年此仰侍、聲聞僧佛弟子中何申時、舍利弗也答給。又信空房申云、古來先德皆遺跡而今一字建立精舍ナシ。御入滅後何處以歟可就、御遺跡哉。上人答云、遺跡ト一廟遺法不周、余遺跡諸州可遍、其故念佛三昧興行愚老一期勸化也、賤男賤女柴扇海人漁人葦ノトマヤニ至ル迄、念佛修砌皆是吾遺跡成ルベシトソ被仰。同十一日辰尅上人起居給向西向高聲念佛給、聞人皆淚流、門弟等告云、高聲念佛此名號唱者一人不虛皆往生スベキ也トテ、高聲念佛勸念佛功德種々讚嘆給、觀音勢至等菩薩聖衆現前給、各奉拜哉被仰、弟子等不拜之由申、彌念佛勸給。詠云、極樂エ勤テハヤク出テタラベ
身ノ終リニハマイツクナン 其後臨終佛爲三尺阿彌陀像病床砌迎奉、此佛拜給申時、上人指以空指言、此佛外又佛御座、拜否哉、凡十餘年來念佛功積、極樂莊嚴并佛菩薩眞身拜事、常事也。然年來祕不云、今最後臨故示處也。又佛御手五色糸付可取

給之由申時、上人言、如此事者常人儀式也。於我身者未必然、大樣事也。但衆生爲可收、終不採給之。同廿日巳時紫雲霞垂布房上、於中有圓形雲、如圓繪形像圓光而五色鮮潔也。路次往反人於處々見之、弟子申云、此上紫雲方生。御往生近歟、上人聞云、嗚呼哀哉々々、是心佛土非外可求、然而我往生唯爲令一切衆生信念佛也。命終只今非云云、同廿二日看病ノ人々或ハ休息或白地立出折節、勢觀房只一人看病給所、氣高女房車來臨、上人可入見參之由申、但僧衆退申、勢觀房立去當近立栖聞、此女房申如何苦思召侍覽、此御事歎申也、此藥可被用、藥奉、又淨土法門何御定侍申、選擇集云文作候此文不違申侍覽、源空可義返答セラレケレバ、サテハ目出度候トテ數御物語有テ歸ラレケル時、勢觀房恠見送給、河原出テ上ヘ向テ上ラレケルガ忽然見不給ケレバ、歸テ上人ニ尋申サレケルニ、其レコソ韋提希夫人ヨト被仰、何御座候フト重テ申ケルニ賀茂邊有答給ケル、賀茂大明神本地知人無。而今上人

仰如量知、賀茂大明神韋提希夫人也云、サテ勢觀彌信心深ノ御形見念佛肝要一筆賜覽ト申サレケレバ、自筆ニ注給狀云、漢國吾朝諸智者達沙汰申觀念々非、又學問念佛心悟申念佛非ズ。只往生極樂爲ニハ南無阿彌陀佛申無疑、往生スルゾト思取テ申外ニハ別ノ子細候ハズ。但シ三心四修ナンド申事候皆決定南無阿彌陀佛ニテ往生スルゾト思内ニコモリ候也。此外ニ奥深キコトヲ存ゼバ二尊ノ御哀ニハツレ本願ニ漏レ候ベシ。念佛ヲ信ゼン人ハ縦ヒ一代ノ法ヲ能ヨク學共、一文不知愚鈍身成ノ尼入道無智輩ニ同ジテ、智者ノ振舞ヲセズシテ只一向念佛スベシト云云。勢觀聖人敢不被露、一期之間頸懸祕藏セラレケルヲ、年來師檀契不淺、川合法眼語聞セケルヲ懇切望申、被授ヨリ以來世間披露、上人一枚消息云是也。同廿三日紫雲又來現、廿四日午剋紫雲又大競發、西山炭燒十餘人は見語ル。又廣隆寺下向尼路次は見來告、上人廿三日高聲念佛不退上、殊廿四日酉剋廿五日巳時至高聲念佛體責無間也。門人等五六

人宛番々助音、助音人々へ自聲ヲホノカニスト云へ共衰邁病惱ノ上人御聲盡虛空響聞、誠熾盛ノ御有様、見人涙不流無云。廿五日午剋至、念佛聲漸幽高聲時々相交。最後臨終年來處持慈覺大師九條袈裟着、頭北面西臥給、門弟等申云、端坐念佛給命終時至臥給事如何。上人微笑言、我今此故迷思、汝能問、我身娑婆宿、淨土徑路開爲也。今神極樂歸事往生方軌示爲也。我若端坐人定是學シカ、若爾者病身起居不輒恐正念失、此義以故我今平臥非端坐不叶、大師釋尊已頭北面西滅唱給、是又爲衆生也、我何釋尊可勝哉云云。畢頭北面西光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨唱念佛數返後、如眠息絶給、又一息止云へ共、兩眼瞬如シ、手足ヒヘタリト云共、唇舌動十餘返、行年四十三毎日七萬返念佛終退轉無、春秋八十三春何節。釋尊滅度唱上人滅度唱給。彼二月中旬五日、是正月下旬五日也、八旬何年ゾ、釋尊モ圓寂歸シ上人モ圓寂歸給。彼八十歲是八十歲也。情是思旬月同年齡等非、支干數亦共壬申歲當、皆是釋

尊化儀等、定自然事アラザラン物歟

于時大永六年丙戌正月十七日

法然上人傳卷第十

一、當上人往生前後諸人感夢事

上人往生七八年之以前、參議藤原兼隆卿爲雲客之時、夢見、有人展見大枯變紙疑何文、見之記諸往生人之書也。注、法然上人事引見之至奧記シテ云、光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨之文、法然上人臨終誦之可被遂往生云云、夢覺後不啓上人不語弟子久經年序畢而今最後誦此文給之由傳聞之作奇特之想、後日所注送也。昔夢與今符合、誰不歸

四條京極薄師眞清、同正月十九日夜夢、東山法然上人禪坊上一片聚雲聳、有人云、是往生雲也、諸人群集拜之見覺畢、翌日巳時紫雲掩映彼坊上、諸人所々見之與夢符合

三條小河陪從信賢後家尼養女、同廿四日夜夢、參上人禪坊上人云、我明日可往生若不今夜來者不後對面云云、果廿五日ノ午時上人人滅此夢亦符合

花園准后侍女三河局廿四日夜夢、見上人住坊四壁垂錦帳、光色甚鮮煙亦充滿、善能看之即紫雲也、謂上人已往生歟、覺畢、廿五日早且以夢語順西法師、即當日上人逝去、此夢亦符合

仁和寺尼西妙本國東人同廿四日夜夢、如圖繪善導聖人來

云、法然上人明日午刻可往生遊行拜之覺了、爲知夢虛實廿五日早朝參上人之許而語夜夢至午時已以歸寂、此夢又符合

又清水寺一人僧、去年十二月九日夜夢、此地夜又等群集シテ地引礎下地神有礎頂戴見、此輩如此種々靈夢雖感、敢不及披露、今年建曆二年正月十日彼地上人廟墳點、穴堀時驚來夢語是記送

東山一切經谷住僧字大進失實名弟子字袈裟王時十六歲同廿五日夜夢見東西直通大路、白砂好中敷新筵見物

者左右濟々、何事見之天童二人指玉幡西行、其後着法服僧衆千萬、左手持香爐右手取袈裟端向共行矣、問云、是誰人御畢。人答云、往生人也。又問云往生人誰、答云黑谷法然上人也、此夢亦符合

粟田口禪尼 惟方別當 入道女 同二月十三日夜夢、詣上人殯葬

處覺開八幡宮御戸、御正體在其內、時謂非是上人葬送所八幡宮也。傍人指其正體云、彼法然上人御體也、

聞之身毛豎流汗覺了、此夢亦符合。抑八幡大菩薩昔眞

通上人爲知本地致祈請之時示現云、昔於靈鷲山說

妙法華經、今在正宮中示現大菩薩云云、然大安寺行教

和尚令勸請男山之時、彌陀三尊現快上移給。又垂跡形

昔鷹彰、今鳩現。此則釋迦彌陀一體鷹鳩是者也。以之

謂之上人是西土能化、阿彌陀如來垂跡也。大菩薩又彼

佛化身、應神天王靈魂也。指大菩薩御正體示法然上

人之夢、有其謂歟。夫尋夢境者、有通虛實不定二

義、於中虛多實少、然而今所載者定是實夢也。何者夢

定不違、上人往生決定故、後々將來見聞道俗中、疑者

斷疑信者增信如上人教精勤修行順次必生極樂界中、
奉觀上人賢聖亦然也。獲六神通救攝衆生、不亦悅哉。
我人住一心一向之思、善人惡人立專修念佛之行、只畢命
可期也。サテ門弟等任釋尊遺誠、納遺骨營中蔭也

一、後後追善事

初七日不動 御導師信蓮坊諷誦大宮入道內大臣家實宗御

諷誦文云

夫以先師在生之昔、弟子遁朝之夕、擬一心之精誠受十
重之禁戒、故憑濟度於彼岸、敬修諷誦、於此砌、莫嫌小
善根、必爲大因緣、仍爲飭蓮臺之妙果、早叩霜鐘逸韻矣

建曆二年二月二日 別當前周防守源朝臣盛親敬白

二七日 普賢 御導師 求佛房 諷誦

三七日 彌勒 御導師 住信房 諷誦

末弟湛空法師捧誦經物唐朝王羲之摺本、一紙面十二行
八十餘字書之詠一首歌云

西へヨシ行クベキ道ノシルベセヨ、昔モ鳥ノ跡ヘア

リケリ

四七日 聖觀音 御導師 法蓮房 諷誦弟子良清、願文云

先師當末法萬年之始、弘彌陀一教之勝、智慧提劍、莫耶之鋒、非利、戒律鑿珠、摩尼之光、比明。抑尊靈先逝川、今、四七日遠人望來迎之雲、就新墳兩三度遺弟闕、酷烈之氣、情思誠諦之言、雖請善提之願、揭焉意旨。彌以伏膺

五七日 地藏 御導師 隆寬律師願文弟子源智、彩雲掩軒近見遠見而來集、異香滿室我香人香共讚、嘆之

六七日 釋迦 御導師 聖覺法印 諷誦 無勤寺前大僧正慈鎮御自筆

佛子上人存日之間時々談法文、常用唱導、結緣之思不淺、濟度之願如深、因茲當六七日忌辰、聊修諷誦三鳴、華鐘擊法衣、送往生家、解脫之衣是也。設法食而施化城之門、禪悅之食是也、然則幽靈答彼平生之願、必往生上品之蓮臺矣

建曆二年四月六日 別當法印大和尚位慈願敬白

陵被物錦橫被法服捧物等並僧食以下皆以慈鎮和尚御沙汰也。導師捧諷誦讚嘆云補三千貫首御。三度致一山

興隆給、幾許哉付顯付密誰於和尙可著指哉。而爲、奉訪先師上人善提恭捧、自筆諷誦御、念佛一宗之面目何事如之、專修念佛行者以之可被爲證文云云

七々日 阿彌陀 兩界曼陀羅、御導師三井僧正公胤、法弟信空願文云

先師廿五歲之昔、弟子十三歲之時、恭結師查之約契、久積五十之年序、一旦隔生死、九迴腸欲斷、自宿北嶺黑谷之草菴、至移東都白河之禪坊、其間云、撫育之恩、云提撕之志、報謝之思、昊天罔極、是以顯彌陀迎接一軀之尊像、安胎藏金剛兩部之種子、又摺寫妙法華經爲金光明經、各一部以開題以開眼、一心之懇志三寶宜知見之

建曆二年四月十四日 弟子信空敬白

公胤僧正聞上人嚴重往生之由、彌悔先非望、追善之導師、來趣大谷墳墓、佛經釋已之後、具陳、決疑鈔元起了云、公胤今日參動本意全非他、偏是爲憊、悔謗難上人之重罪也。且又成上人門弟之由爲披露也云、自懷中取出二字指置前机了、座下聽衆聞之莫不感歎矣。凡

此間佛事營諷誦行人不知其數。サテ遂上人點墳墓大谷禪房東建立、毎月廿五日彼御報恩爲、上下各群集稱名念佛無間也

一、上人滅後奇特事

中陰之間或日午剋計老翁一人墳墓尋來云、我是西山樵夫也、去寅尅夢中僧來法然上人廟堂柱奉加者只今極樂往生行結緣告給。然日來未上人御事知奉事無間、今朝且洛中出在々所々奉尋程數剋經申、彼柱奉加者上人信仰堀川太郎入道也。件入道所勞依東石藏禪林寺ノ東ノ山寺移住今此老翁告齋各行尋所、老翁同臨遺跡聖語云、上人常我傍ニマシ、臨終示念佛勸給由語申喜禮拜侍。今朝已往生申、諸僧老翁共隨喜禮拜歸、已廟堂露柱奉加微功猶非空。沉淨刹寶臺欣求之一念豈施徒哉

一、沙彌隨蓮事

四條萬里小路侍沙彌隨蓮上人臨終之後、經三箇年建保二年之比 在別帝

一、公胤僧正往生事

上人往生後五箇年經建保四年丙子四月廿六日夜、公胤僧正夢上人告云、往生之業中一日六時刻、一心不亂念功驗最第一、六時稱名者往生必決定、雜善不決定、專修定善業、源空爲孝養公胤能說法、感喜不可盡、臨終必來迎、源空本地身大勢至菩薩、衆生教化故來此界度々。公胤夢覺之後、四行偈頌一句不忘矣、注置之其後不經幾程、閏六月廿日於禪林寺遂往生素懷。行年七十二也。臨終瑞相非一、或紫雲遙聳見射山槐門、異香普薰遍室內室外。然聞太上天皇差院使、准后宮土御門內府以下飛車馬、塵和村南村北道俗洛中洛外貴賤結緣之步運、拜往生儀式矣。顯密碩德天下明匠御坐僧正、責宿善ノイミジクシテ上人歸、念佛信往生素懷遂事、雖有事也トゾ時人申合侍ケル

一、依山僧惡行令改葬遺骨事

延曆寺兩門跡號梨本青蓮院是也。各四明三千貫首備兩門一山棟梁御、或在世席法文尋往生先達或沒後庭諷誦捧值遇後會契、遺骨至豈信心疎給哉。然上野國登山シ

タリケル並榎堅者定増云者、深ク上人念佛弘通妬選擇集破文作、是彈選擇名、隆寬律師是見給、先師上人素意願爲顯選擇作定増難破覆、汝僻破不當事、譬暗天瓦礫如嘲謔、定増迨恨成上人往生後十六年經、後堀河院御宇嘉祿三年^{丁卯}夏比、衆徒語天下皆一向專修趣間、顯密教法廢、專修念佛停廢、就中隆寬律師吾山學者圓宗捨專修立事不可然。念佛宗張本遠流、又依爲其根本須先源空大谷墳墓破却、死骸賀茂河可堀流之由、衆徒嗷々群議及、攝政猪熊殿家實、座主淨土寺僧正圓基、攝政殿御兄也。衆徒濫訴既赦許有、六月二十二日山門所司專當等遣、大谷廟堂壇捨由、其定聞、京都守護修理亮平時氏使者指遣、頓宮内藤五郎兵衛尉盛政法師^{法名西佛}子息一人相具罷向。頓宮入道山門使者向申。縱勅許有云、武家不觸無^レ左右狼藉致條甚以自由也。暫相閑釋便沙汰致、若不拘制止任法、是武家御下知趣也云、猶不留、頓宮入道詞盡問答云、慢家凶徒怨結不承引、次第廟墳破速疾房舍壞、衆子細觸畢、醫王山王間食、

念佛守護赤山大明神奉代、魔緣打拂侍、僞四明三千使號媚四魔三障群來歟、本島主君爲當初切、命師範爲只今可捨云、千軍數兵向何一人當千手可懸豈量戰場以往生門出、惡徒以爲知識因緣、各可稱南無阿彌陀佛只今一々ニ汝等命可召取、自他諸共成九品蓮臺同行、怨親同爲七重樹下新質、善惡不二之理邪正一如掟、山門使者定聞知覽、顯東關御家人弓箭携狼藉禦、冥西刹念佛者魔軍退巢徒閑云、父子共馬鼻並法任下知、山門之使者クモノ子ヲ散如シテボンクホニ足付命助スル者、或ヘヒタイノ間ニ手合降乞者モアリ、如此程其日暮、即參向六波羅申、上件子細時、殊神妙由被感之。堂舍破損スト云共加様追散間、墳墓手不掛、角今夜信空上人妙香院僧正^{月輪殿御息ナリ}參、今度暫相閑ルト云共事、至興盛也。山家企定不默止歟。然於今者欲令改葬云云返答云、自此欲申之處、此命以同心、改葬之義尤可然也、仍寶蓮房遣門弟廿餘人、堀出遺骨擔持赴嵯峨二尊院、宇津宮入道賴綱法師蓮生聞此事、雖爲遁世之身依重先師

恩催集家人等相具五百餘騎勢令誓固、其外頓宮兵衛入道西佛、千葉六郎太夫入道法阿、澁谷七郎入道道阿、鹽谷入道信成等、兵杖帶軍兵率供養。昔生累代武勇之家雖施死生不知覺、今住厭離穢土之志欲殘、往生極樂之名、宿習之所催思而可知、情思往事祖父金吾朝綱東大寺脇土觀世音菩薩奉造立、留形見於南都、孫子賴綱法師西方界教主阿彌陀、如來奉遇歸、令栖神於西刹、祖孫契深前後有賴者歟。サテ御棺蓋開タリケレバ、御面像ハ在世時少不替、異香數年後遠薰實貴申返恩也。其曉則嗟峨遺骸渡奉時、御棺カイテ洛中過不催、先師遺弟念佛行人御供參人々一千餘人也。面々淚流各々絞袖、恐不異變樹林之夕、門々設水戸々濕唇宛如步、拔提河之濱、六月下旬事成炎天拭汗、東西含悲。事千萬也、彼月支梅檀尊容奉、盜時若干軍兵發有奪留云事、今日我上人之聖骨改葬日猛惡凶徒來何無惡逆之企云テ、門弟等各不可口外之由、及誓狀令退散畢。然猶可搜求之由、依有其聞、歷五ケ日之後、同八日夜忍奉、移置

廣隆寺來迎房圓空許其年徒晚ケリ

上人御遺骸翌年嘉祿三年十二月二十九日正月二十五日隴

更廣隆寺西山粟生今光明寺是也奉迎入信空上人湛空上人覺

阿等人々始門弟等一處來會奉火葬種々奇特共有、靈異

非一、五色彩雲卷空奇異香氣薰砌、門弟等拾骨之時

紫雲又現矣。彌往生成之望、增欣志思深、公全律師於

小藏山麓二尊院上建立多寶塔、並土御門院御墓所一奉

納上人御骨、勤修不斷念佛今光明寺是也、然後模眞影

以修月旦設禮奠以行遠忌、門々戸々誰家不統三五夜

中之月哉、在々處々何隅不望六八弘誓之雲哉。抑上

人求法之始先參詣嗟峨致祈請御座。釋迦彌陀契深此

土他土方緣厚、遂納遺骨於此地令移廟墳此砌初從此

佛菩薩結緣、還於此佛菩薩成就云之謂也天台釋傳聞

栖霞館嗟峨天王別業也、即建立阿彌陀堂號栖霞寺

上人後建釋迦堂假彼泉名稱清涼寺矣。凡上人德行先

代未聞、延曆寺即吉水前大僧正慈鎮、大原座主僧正顯

眞、妙香院僧正良快、惠光院法印永辨等始、南北明匠

諸宗賢哲信伏隨從不遺于羅縷

誰人傳授慈覺大師袈裟哉

誰人奉爲皇帝授戒品哉

誰人奉爲法王被圖眞影哉

誰人奉爲攝錄被禮拜哉

誰人爲諸宮諸院被歸敬哉

誰人得智惠第一稱哉

誰人兼學十二宗各蒙印可顯勝利哉

誰人依每日七萬返念佛現身發得三昧見淨土依正哉

誰人踏蓮花步行虛空哉

誰人現身放光明哉

誰人喪世之後花夷道俗每家修月忌遠忌臨時報恩哉

誰人每人留眞影而持念哉、此中適備一德之人。可

恨餘事不留而無慚無愧之輩生盲闍提之類不怖當來苦

報、好頓教毀滅橫起、願毒願、倒古廟、悲哉、超過大地微塵

劫數、未可得離三途依身、嗚呼何爲云云

或人詠歌云、人コトニ惜ム氣色ヤ見ヌ
ラン山ノ心ニ入ヌ月カナ

一、山門訴訟猶強隆寬等弟子令流刑事

山門訴訟猶強、隆寬律師不限、成覺房空阿彌陀佛等迄

配所定依之山門會議狀云

延曆寺政所下

感神院

可早捕擲一向專修張本隆寬成覺空阿其以下餘黨等事

右專修佛法之魔障諸宗之怨敵、因茲度々經奏聞之處、

皆蒙許勅裁畢、仍衆徒其後達天聽之刻、又以被宣下、

凡專修興行者以源空爲先達、門弟等剽點被墓所稱御

廟成歸敬、奇恠之至、禁而有餘之間彼破却墳墓燒捨

其骸畢、根本已被絕枝葉何不枯哉。於今者不論貴

賤之柄、不揆權門之領、悉於彼輩可擲取也。就中今度

又任先符可被禁遏之由、宣下狀爲明鏡則者山門末

寺庄園日吉神人寄人、惣者諸國七道之土民邊寺邊山之

僧徒、搜尋彼專修結構之輩、擲取其身破却住所可追、

放皇土外之狀、依大衆會議所仰如件已上

嘉祿三年六月三十日

小寺主法印住僧

修理別當法印大和尚位在判云云

都維那 法橋上人位 上座法眼和尚位在判
寺主法橋上人位在判

然間隆寬奧州、幸西伊豫國被流畢、證空依東塔西谷持
教僧僧都御舍弟、專修之由、捧急狀、其上開「天台六十卷印版可山門流通物由、有宿願之旨令披露于山上之間、被宥流刑畢、律師隆寬給凶徒等吾心不知、依定增語歟、但先師上人已念佛事及遷謫給上、余其跡追尤本意也、長樂寺來迎房最後別時七日如法念佛勤行、然結願日當異香室內薰蓮花白蓮一本庭上生、瑞花空雨見人現身往生歟疑、聞人律師奉仕セザル事ヲ恨。サテ律師森入道西阿承嘉祿三年七月五日花浴出、東關趣給、配所奧州被定、森入道深奉、歸餘念佛先達奉、近付「事可然、宿緣至也喜、律師代官門弟實成房配所遣、律師西阿住所相模國飯山具下奉、時同八月一日鎌倉立給、武藏前吏朝直朝臣廿有二歲時、相模四郎申、末代是程智者逢奉事可難有御與前追付奉、事由被申與昇居對面、朝直朝臣被申、身武家生云、心佛道懸。適人身受受希

奉、逢名匠、是併宿善可令然、願家業不捨可離生死道
教給、律師言年少御身武家器及此御尋事、可催宿善
之内、凡佛教多門聖道淨土二門不出、然聖道非有智持
戒人者、不可修行之淨土門極惡最下機爲授極善最上
ノ法タレバ、不簡有智無智不選在家出家、信彌陀他
力本願往生無疑、就中入末法七百餘歲時機相應教行
只此念佛一門限。依之飛錫禪師末法望以餘行厭生死、
陸地船漕如、憑他力往生願水上船流如給。然者名號本
願ノ船乘彌陀如來船師、釋迦發遣順風帆、上罪障雲閑
妄執浪不立、一念須臾間極樂世界七寶池渚屆事、百即百
生更無疑、此安心違不給、縱戰場命捨往生ニ障不有給
朝直朝臣忽真實信心發每日六萬返念佛一期退轉スベカ
ラスト誓約セラレケルガ、三十餘年稱名熏修積、文永元
年五月一日出家臨終儀式取向レシニ、同三日申時年來
所持彌陀如來親病者告、此度穢土思捨偏我力也。於往
生者決定也給、其夜亥刻及高聲念佛四百餘返、體實念
佛氣共終給。在家身ナガラ嚴重殊勝往生被、遂事、併是

律師一言依者也。律師飯山下給後、森入道尊崇彌深歸
敬他事無程、同年仲冬風病被犯老病臥給、病床筆取一
期身事記給。是驕中吟名被送京都畢。其後日隨テ次
第ヨハリ給ケルガ、同十二月十三日同二十二日改
元安貞元年也申時
至律師言、往生時已至、予ガ義邪正一向專修往生手本
只今可顯也、彌陀三尊向端坐合掌、彌陀眞色如金山、
相好光明照十方、唯有念佛蒙光接、當知本願最爲強文
唱給、傍侍正智唯願ナンド同是唱臨終一念百年業勝タ
ル由申ケレバ、少咲氣色本尊瞻仰高聲念佛シテ如入禪
定終給。春秋八十也、彩雲軒近付異香室滿、遠近繙素
市成、彌念佛信心増。其後實成房泣々奥州飯山參遺骨
頸懸上洛、吉水上山墳墓ヲツキニケリ

大永六年正月十八日

知恩傳上序文

竊以真如幽玄而四乘五乘不測其邊矣。法性深微而三賢十聖不窮其際焉。無塵法界凡聖齊圓之旨輒誰明之。恒沙功德寂用湛然之理誰人解之。我等皆爲垢障覆深之凡夫。衆生悉非淨體顯照之機。是以聖道自力諸教、即施即廢而妙道不遠露。淨土他力一門、久住久留利益通退代。誠知佛性真因難顯。不依他力久沈生死矣。菩提妙果難證。不值此門、豈可得入乎。爰源空上人爲釋尊使者、示彌陀本願爲善導後身、成我等知識。三有胞胎因茲永絕。六趣嶮阻依之忽隔。此化不限在世、其益彌盛滅後。恩高於山德深於海者乎。抑尋釋尊與世者、淨飯王御宇癸丑歲七月十五日始托摩耶胎內、明年甲寅四月八日出胎外七步經行。即唱曰天上天下唯我獨尊。三界皆苦我當安之。是則震且當于周第四主照王廿二年。我朝當于彥波岐武甕草葺不合尊八十三萬四千三十

六年也。伏惟一代諸教皆雖可攝我當安之言、佛意之所志、正是當淨土教。所以者何。諸佛大悲專於苦者。自力得道爲岸上機、他力出離爲常沒者也。測知安苦衆生者、偏是爲五濁五苦凡夫可說往生淨土教也。凡如來滅後一千年之後、佛法漸衰得道人希。諸比丘等如世俗人嫁娘行媒毀謗毗尼。經千十五年西天佛法傳燈且。即後漢明帝永平十年或云七年丁卯或云甲申歲也。勸合我朝時代當人王十一代帝垂仁天皇八十七年。其後過四百八十六年。我朝三十代國王欽明天王十三年壬申歲、如來教法傳來我朝。自爾以來至于七十五代帝王崇德院御宇長承二年癸丑歲、計年記滅後二千八十一年也。凡唐朝善導和尚爲彌陀化身立淨土一宗專勸他力往生。即楷定古今改百餘家執見。分別專雜疵顯本願稱名正行。訪其在世大唐高祖神堯皇帝代誕生。太宗二代廣施行化。及高宗末永隆年三月入滅。以我朝時代謂之。自三十五代國王舒明天王以後。皇極。孝德。齊明。天智。天武已上六代時人也。今源空上人即彼善導和尚後身也。原夫長

承第二曆孟夏第七日當法壽漸減、惠力既衰末法之初、受聰委於苦城、導凶頑於樂邦、嶮節如昔賢懿德似往哲、器宇與遠浩々焉。度量廣大江々焉。仰之彌高鑽之彌堅。安以牛岑淺才、測鷗漁深譏、佛家知龍也。吐法雨、留菩提之芽、人間義虎也。扇惠風拂煩惱之塵、夫濟衆生患難正像賢聖尙痛其難、況於末法乎。而上人當今脩々然普誘人、我等教以念佛、我等約以起行、閑聞平生靈瑞倩思、臨終勝相、上人正是大聖權迹也。勿謂小凡實乘、濁世無如此之人、我等出離其何。恩德廣大捨塵頭、離謝。利益甚深摧沙身何報。須非飲食惡衣服、忘羸憊、加砥礪真實勤行。如此卽內外障俱滅。上下俗同盡、順次決定往生無疑師資素懷唯斯一事而已

上人誕生事 同餘傳故略之

調色文也
法花驗記云、聖德太子者豐日天王第二御子也。母妃皇女。夢有金色僧語云、吾有救世願、願當宿后妃腹。

上

問爲誰。僧曰、我是救世菩薩、家在西方。妃答曰、妾腹垢穢何宿居哉。僧曰、吾不厭垢穢唯望盛人間。躍入口中。妃卽覺後腹中猶吞物、自此以後始知有娠。漸及八月胎中而言聲聞于外、出胎之時忽有赤黃光、來至自西方照曜殿內、生而能言、知入動靜矣

拾遺傳曰、善仲善算兩上人者、攝津守藤原致房之二子也。母紀氏。慶雲四年正月十五日夜夢微敷蓮花二莖、從空飛入口。覺後胸中如吞物、遂以有身。自爾以降母常歸佛法、不食葷腥、和銅元年正月十五日平旦誕生、母心無苦痛、室有異香。一胞之中二兒並生、敢無啼聲、常咲色矣

同傳云、延曆寺座主安惠者、俗姓大泊氏、河內國大縣郡人也。其母夢吞明星、遂有娠矣。其後不食葷腥、有期生男矣

同傳云、大法師淨藏者、俗姓三善氏、右京人也。父參議宮內卿三善清行卿、母嵯峨皇帝孫也。昔母夢夫人來入懷中、覺後有身。誕生之時母無苦痛、歲及三三性甚

岐嶽。僅及四歲讀千字文、開一知二。至七歲不留俗境、好赴佛庭、父卿屢難、拘留不敢止住。父卿命曰、誠欲奉仕三寶爲我今見一驗云々。于時庭前有梅樹、令護法折其枝、父卿感傷泣而不言。其後熊野、金峰、靈棚、洞莫不投步寄身。年始十二自松尾社出路之日、奉遇禪定法皇之御行、召爲御弟子、即登壇受戒。依宣旨付清涼房玄照律師、令受三部大法諸尊別法。又隨大惠大師受習悉曇大惠者安然弟子也。於橫河如法堂夏居。庭成小、便俄從西方貴人來矣。大法師問其人、答曰、我是賀茂明神也。慈覺大師令五段內京畿二百餘各神番贊護如法經、今日我直日也。而欲誠不淨事、既上人之所爲也何々。忽召集異人、堀捨不淨土、可方五尺云々。又着新袈裟、從口火出燒、袈裟不燒、衣服尋其子細、不淨女人裁縫故也。又依京極更衣御所惱、有禪定法皇之勅喚、本尊護法且行攝縛、平愈。相次大法師參入。法皇着法服而禮拜。又參詣熊野之間、暗知父卿之薨、自途中俄歸路。過滅後五日、大法師忽動冥官、加持蘇生。父卿着位袍而禮拜、

經七日忽薨。是令知運命之有限也。又傳法師玄照律師勤修五十九寫平法皇字多顯子院御修法之間、眞濟僧正靈作鵲形出現。置之爐壇、燒損其身。仍結大怨心、成小僧形、伺隙求短從空下來。律師每見其形、心神不例。大法師加持攝縛會無氣分、律師着法服而禮拜、彌開秘藏、悉以寫瓶。又朱五六一天慶五年正月廿二日於橫河爲調伏平將門一修大威德法。將門帶弓箭、立燈明之上、人々驚見、尊俄爾流鎬之聲指東而去。便知調伏之必然矣。依此事、公家被修仁王會、擇大法師爲待賢門講師。其日將門軍入京云々。大法師奏云、令進將門首也。者果如其言。又天曆年中大法師寄宿八坂寺、于時卿相朱紫數十群集見八坂塔云、塔之傾方其處不吉也。此塔向王城而傾云々。大法師云、年來欲直此塔、集會諸人皆以爲可加料物。大法師云、不必可用料物、今夜試可直之。其夜亥刻許坐露地、向塔加持之子剋從、乾方微風吹來。塔婆并寶鐸搖動。逮旦見之、其塔端直也。延喜年中唐僧長秀行波斯國、漂蕩海路、寄燈樓邊、僅來皇朝。久煩胸爲求救療啓、天台座

主增命僧正蓋號云々。命曰本朝驗者十人中以第三驗者

春淨藏遺之云々。唐僧既及死悶、大法師以藥師真言百

八遍加持之、即以蘇息平癒。唐僧感歎曰、我國隣于天

竺然而未有如此人、即知無第一二歟。又和銅三年八

月空也上人於六波羅寺供養金字大般若經、大法師列

名德座、于時乞食比丘來集、大法師見一比丘大驚、敬屈

請之座上、與所得一鉢、盛飯可四斗、比丘不辭、言併以

盡之、比丘其後所食飯如故在之。大法師曰、是文殊

化身也。滿座皆歎伏。如此異事不可稱計。大法師語云、

我一生三度得希有之禮拜、所謂享子禪定法皇者昔受、四

海之灌頂爲日域之主、後受三密之灌頂爲月輪之主、是

我大師也。女御所惱平癒之處法皇着法服而禮拜是善

相公者朝之賢賀、世之神才也。鑿古知來毫分無誤。

是我嚴父也。遭滅後五日、即令加持蘇生。相公着位袍

而禮拜是。受法尊師、女照律師所惱之時、加持攝縛。着法

服而禮拜是。依此三度禮拜已窮一生之運命。思其面目

復期何事哉云々。天德三比本尊告命終之日、轉讀金剛

上

般若經、祈請閻羅王、其日俄半中風漸及、數日還復如故、

是則佛力轉定業示輕受歟。其後五六年應和四年十一

月十一日於雲居寺正念不亂向西遷化。瑞相太多。云々

又云、無動寺相應和尚者俗姓樸井氏、近江國淺井郡

人也。其先孝德天王第一皇子天帶房國押人命苗裔也。

其父常嗟無子祈請佛天寶和、天長八年其母夢見吞劍、有

期而生和尚。其日瑞煙聳砌、香氣薰室、視聽之者莫不

驚怖、嬰兒之間口嫌酒肉、心厭童腥、父母異之、羞以精菜

供以別器、其之爲人也好懷、僧侶不親、俗人承和二年生

年十有五登天台山、年廿五得度。其後限十二年誓而籠

山。同年八月慈覺大師、授不動法并護摩法等稱歎曰、

業是寫瓶觀如懸鏡。現形之不動顯於日域、生身之明王

留於叡岳云々。五十二文極天安二年、良相右大臣御女西三條女御

嬰重病及死悶、右大臣請和尚、固辭不赴。大師謂曰、

大臣身代令度上人、若不赴、彼請恐非知恩、和尚依恐

大師命不竟、十二年參入彼閑、諸山諸寺有智有驗、僧綱

凡僧滿堂、溢席、和尚匍布破衣懷謙下之心、陪廂邊之座、

七三九

聊以誦咒不幾咒縛、彼此雷同、未知誰驗、而間超自几帳之上、投于和尚之前、踊躍叫喚、和尚以言制之、令歸帳裏、數剋之後靈氣屈伏、大臣感歎縑素霍然、是則顯驗之初也。五十大神和貞觀三年八月天王遣勅使、請和尚令行阿

比舍之法、誦咒未及十遍、咒縛二人之童男和尙問何物哉、答曰、我是松尾明神也。皇帝即令堀河左大臣問、徵情之所疑、每事決之、皆以有徵云々。同四年登金峰山三年安居。夢中童子來云、吾是金剛童子也。依上人師圓仁和尙命所來也、而上人威勢未及使我矣。仍暫歸去後日將來、努々、安居已竟歸本山。其年秋皇帝有御齒不預之事有勅請和尚云々。及曉史讀誦理趣經。皇帝勅和尚云、朕夢着衲袈裟之高僧八人俱來隨上人聲相共加持、覺後所患之齒不覺而落、不知所在矣。和尚奏曰、此曉奉誦理趣般若經、此經有八大菩薩、是則八十俱胝菩薩之上首也。若彼八大菩薩奉護聖體歟。其明朝和尚退出宿房、見經筥上忽有一齒、和尚招一侍中以齒獻之、皇帝感歎賞以僧綱、賜以度者、和尚謙退不

受其賞、同五年奉造等身不動明王、同七年造立佛堂、號曰無動寺、而間染殿皇后被惱、天狗云々。放言曰、自非三世諸佛出現者、誰以降我乎。和尚依召參入、經兩三日、無有其驗、即歸本山、祈此明王、爰明王背而向西、和尚隨而坐西。明王亦背而向東、和尚亦坐東。餘方亦爾。明王背而如初。向南和尚亦坐南、流淚祈請。不可憑佛語相背如是。合眼之頃、非夢非覺、明王告曰、我依一持之後生、生加護之誓、不應汝恨、猶有相背、我今爲汝說其緣、昔紀僧正持我明咒、卿依邪執、墮天狗道、着惱皇后、爲守本誓、護持天狗、今須汝到彼宮、密告天狗云、汝是紀僧正後身、柿本天狗哉。彼定低頭之頃、以大威德咒加持、將得結縛便歟。我亦伏彼邪執、令赴佛道、故告此事耳。和尚驚悟、作意從之、降伏天狗、小時平複矣。天狗歌曰

法性ノ中ヨリ出ル思フヘ 眞如ノ理トゾ云ベカリ
ケル

同八年七月准大唐南岳天台兩大師之例、師圓仁和尙

可賜謚號之狀上表奏聞。朝議云、園仁師最澄未賜此號、弘法之功會無勝劣者、同十四日傳教慈覺兩大師同賜謚號。本朝大師號始自此矣。六十餘聞延喜三年、玄照律師久沈重病殆臨、死悶、堀河左大臣請和尙於彼律師房、令修不動法。第六日、日中之時到壇之中、猛火之上、大日如來不動明王相並顯現。和尙與律師共得奉見。律師揮淚曰、予依和尙修法之驗、奉見如來顯現之身畢。同十五年對本尊、祈念生處、夢中明王捧和尙留須彌山頂盤石之上。令見十方淨土、即告曰、隨願往生。其後係念都率內院、而夢中到外院、慈慶大德生內院、忽看和尙來告曰、吾依轉讀法花經之力、已生內院、和尙早歸本山、一心可讀誦法華經云々。同十八年十一月二日向西方口唱彌陀石脇入滅、春秋八十八、于時瑞雲響、峰香氣滿室、是往生之相也。

凡黑谷上人入胎之靈夢、出胎之奇瑞、幼稚之後異、長大之才名、敢不下于先哲、令似于古賢者乎。

兩幡雨降事

上人誕生之時、有人夢云、兩幡自空雨降、翻屋上。村里老少群以見之云々。私云本傳無之、繪詞覺也、庭上椽木懸此說實也。有二其椽木、故也。

可成聖道淨土二門法將之表示也。或又上人應神天王再誕、八幡大菩薩應迹也。上人沒後有夢告、故也。三、

大菩薩者、譽田天皇、欽明天皇御宇、豐前國宇佐群馬城降始顯給、後移、菱形小椋山、今宇佐宮是也。四十五、聖武

家奉幣帛給。本名、廣田大神、今者號護國靈驗威力神通大自在王菩薩。四十七、元正天皇安帝也文武聖王養老四年、大隅日向兩國合戰、祈申此大神、

與官軍俱相向平賊徒、有託宣為懺悔、被行放生會也云々。

幼稚異相事

私云同餘傳云々

相似相應和尙稚童相、為人後自行化他、王臣都鄙歸依

何事耶、于昔相應和尙者、一生過中不食、生前度者一百餘人、受法者十六人、蒙印信者五六人也、黑谷上人又私云一生一生長齋、堅具圓戒、王臣已下受戒得度、人付法傳法輩如。

稻麻林叢云々

時國爲敵所害事

私云如餘傳云々

幼稚失父是化道方便歟、厭名利赴世心爲遁世門是不忘。

亡父遺言故也

經云、如來今者爲未來世乃至說清淨業云々。時國爲夜

討被害、是表煩惱所害機也。上人射敵者、是自無明

闇處磨儲一念無上鏃射敵貪瞋二目間也。具足煩惱衆

生依他力念佛可往生之由兼弘通事表置者哉

成觀覺弟子事

同餘傳

爲登山一母乞暇事

同餘傳

昔晉觀公幼列法花講場之時、人天交構句觀公奉教。

釋尊爲母說摩耶經等、生子被教此等事也。今思合哀也

云々。繪圖二八有之

山ヲ歌タル詞也夫天台者、桓武天皇傳教大師發誓於鷲嶺之月、弘法

於馬臺之風。先帝闢平安城而固百王之社稷、大師建延

曆寺而布一乘之教迹。佛法王法並致衛護、一乘萬乘俱

期周遍。故人有言、松茂栢喜之死爾泣、物之相成草木
尙爾云々。因茲山門一筋祈君與國、皇帝無貳育法與
人、因緣深自靈山之昔興隆廣於像末之今矣

登山事

同餘

學六十卷事

如本傳

史記云。蘇秦者東周洛陽人也。閉室不出讀書。欲睡

引錐自刺其股。血流出。踵。遂依勸學佩六國之印云々

楚國先賢傳云、孫敬好學不倦、閉戶讀書、至睡眠

時、齋繩於髮繫於屋梁、敢無怠矣

隱居黑谷事

如本傳等

弘決云、西方風俗稱名爲尊。如子之名兼於父母。佛

當生彼預設此儀使慕德稱名故也。此方風俗避名爲

敬、故以所居而顯其人一文

孝經云、凡名有五品以生名爲信、以德名爲義、以

類名爲象、取物爲假、取父爲類文

或抄云、紀納言長谷雄卿者其父彈正小弼快範朝臣。

祈長谷寺觀音生之。故號長谷雄云々

又參議大江音人卿者阿保親王御子也。母懷妊時、父親王疑非吾子。于時胎內有聲告曰、正親王之子也。故成人之後其名號音人云々

眞言并大乘律稟承事 如本傳等

其後又附中川少將阿闍梨重緣、重受眞言秘法、被重緣是東寺流眞言師也云々。抑天台圓頓戒者、本山雖跡絕、上人傳授之獨步天下。依之慈覺大師九條袈裟同以所付屬得也。件袈裟自南岳大師次第令傳來云々 已上本傳及繪詞無

謁諸宗名匠事 同餘傳

智惠第一法然房云々

毛、西施之形者不能掩其好。嫫母倭傀之姿、不能掩其醜。夫至好惡者令無親疎。是以世上之諺顯人得失。秦書云、嫫母者烝相女也。舉謁於帝、諸臣皆云、今夜烝相女進於帝、可爲后。欲見之。於是人定之間烝相進

上

皇圓受蛇身一事 繪詞委悉也

久壽二年乙亥八月比皇圓闍梨人滅。彼闍梨歎云、吾雖逢圓頓速疾教、根機下劣行業疎。然者現世證入不可叶、只可期當來得脫。如若相似益隔生不忘、名字觀行益隔生即忘、或有不忘釋者縱令雖發、圓實菩提心之身、不得相似六根益者退不退難知。不如感長壽報、不經生一世逢彌勒出世證無生云、欣求蛇身云々 如繪詞但最略不委、繪詞如法委悉也云々

法花傳云、昔波羅奈國南有連山、毒蛇毒虫充滿。其中時有遊學僧、彼國聞有法花梵莢、辨衣繩涉險獨往及、日西宿連山。夜半忽有青光漸見大龍也。動山照地來

七四三

張口向僧。僧生怖畏作是念。一生空過不遂本懷。大乘功用救毒蛇苦。即問汝食我否。龍曰。我報必吐毒氣。見者驚亡。更無害心。我是前身作沙門。恒懷忿毒不行正道。此罪受醜身。八萬四千小虫噉食身肉。苦痛不可忍。汝施慈悲救此苦矣。僧曰。如何救。答曰。造法花經。即奉上明月神珠。僧受珠。即出波羅奈國。奉獻王。王集巧書造法花經二莖。皆以白紙而寫。已與僧。僧還到山。山臭穢不可近。爾時無數天人來至山中。臭氣即止。僧問天。天答。吾是此山毒龍也。我施明珠師始造經。脫苦生天。今來供養本身。並欲報法師恩。即與珠三枚。還去。僧還歸國。起塔收經。天人恒來下供養塔矣。文

參籠嵯峨釋迦堂事 繪詞七日止

久壽三年四月廿七日改元保元 繪詞七日止參籠云々

保元々々年丙子夏比。上人一夏間參籠嵯峨釋迦堂。時上人

行年廿四。七月二日鳥羽禪定法皇崩御。御年五十四歲。

法皇堀川天皇第一御子。御母大納言藤原實季卿御女也。

康和五年御年一歲立東宮。嘉承二年七月十九日五歲即位。保安四年正月奉讓位第一御子崇德院。其後經三十四年隱給畢。雖爲末代賢王美福門院御寵愛之故。永治元年冬比奉退。崇德院御位奉付第八御子近衛院。依之崇德院有深御恨。遂成世亂。抑崇德院者大納言公實卿御女待賢院御腹王子也。近衛院申。贈左大臣長實公御女美福門院御腹也。近衛院保延五年御年一歲立東宮。永治元年十二月御年三歲得讓。在位僅十五年。久壽二年七月崩御。夢中御榮花無程御事也。王位高顯勢力自在。無常既至誰得存者之文。此事誠乎。爰爲一院御計。後白河院奉付位給。此君與新院同腹也。御年廿九受禪一院。康治元年御出家。東大寺延曆寺有御受戒。此時知足院入道殿下同有御祭壇。保元々々年七月之比。法皇御歲五十四隱給畢。即新院與主上御合戰。七月九日太上天皇潛出。城南離宮忽洛東舊院有御幸。卜戰場於其處。結軍陣於其中。主上遣官軍征凶徒。流矢之所。託左府失命。同廿三日奉移新院於讚岐國。其餘黨或仰刑官召取之。或歸

王化降來。吾國王法自此時衰微矣。是則第五々百歲闕
諍堅固之時分也。上人當此時弘通淨土一教、可濟
度惡時惡世衆生給歟。上人出黑谷幽栖適籠居帝都以
西折節天下騷動國土不安際、彌隱居之思、深增厭離之志
切也。古歌曰

山里ヘモノサビシカル事ゾアル ヨノウキヨリハ
スミヨカリケリ

誠哉此事、因茲九旬參詣畢即還住黑谷三密行法、
或傳七日元々
四種三昧、讀誦、念誦、觀念、觀法、勇猛精進也

史記云、漢十二月上欲易太子、留侯張良諫不聽。猶
欲易之立戚夫人子趙王如意。留侯招四人爲太子羽翼
翼。上乃燕置泊。太子侍四人者從太子、年皆八十有餘、髮
眉皓白衣冠甚律。上恠之問曰、彼何爲者。四人前各言
名姓曰園公角里先生倚里季夏黃公。上乃大驚曰、吾求
公數歲、避遯我、今公何自從吾子游。四人皆云、陛下
輕士善罵。臣等議不辱故恐而已遁。竊聞太子爲人孝
仁恭敬愛士。天下莫不延頸欲爲太子死之者。故臣

上

來耳。上曰煩公、幸卒調護太子。四人爲壽已畢趨去。

上目送之召戚夫人指四人者曰、欲易之彼四人輔之
羽翼已成、難動矣。上歌曰、鴻鵠高飛一舉千里、羽翮已就
漂々絕四海。□□當可奈何。雖有僧傲尙安所施。奇
數關上起去龍酒。竟不易太子呂太后子惠帝是也云々

信空成御弟子事

保元三年春、有人相具一童子於黑谷來云、此兒天性
有佛道志願爲弟子教授佛道時上人廿五。候十二歲、
彼上即文同之
是上人最初弟子也、法蓮房信空是也。宗行中納言兄也

法花三昧修行事 在繪詞但不委

永萬元年乙酉 四月比、三七日修法花三昧。夢普賢菩薩乘
白馬現道場摩頂。時上人三十三也

山林樹下獨坐 閑誦法花者

白馬王乘 行者前見給

罪障本自無所有一 妄想顛倒起

心性源淨 衆生即佛也 和讃文也

花嚴披覽事 如本傳、繪詞委記之

仁安三年戊子秋比、於黑谷披覽花嚴等云々、行年三十

六

法花傳云、南天竺國中有「梵士種名曰龍樹、龍王接
入大海於宮殿中發七寶函以花嚴、法花、諸摩訶衍、
大雲、花手、般舟、諸方等深奧經、無量妙法授之、龍
王言、我宮有花嚴不思議解脫經三本、上本有十三世界
微塵數頌四天下微塵數品、中本有四十九萬八千八百偈
一千二百品、下本有十萬頌三十八品、法花平等大惠經有
十世界塵數偈不可說品、自余深典甚大廣博文

始入淨土門事 全同本傳、但有年號年齡、繪詞同、筑紫義相傳

承安四年比、御年四十二歲時、委披覽往生要集云々

上人自記之可二見合一

廣可弘通淨土法一夢想事 如本傳

安元々年三月十四日夜夢云々、所見夢一々附合者、

高山者表彌陀名號無上功德也。長河者、念佛淨水可洗罪障垢表示也。紫雲廣大者、日本國衆生悉歸淨土可乘迎雲相也。光明無量者攝取念佛衆生可施三緣益相也。周禮云、夢者事之祥也云々、此事誠哉

抑紫雲者慶雲也。念佛行者最後終焉之刻俄逢聖衆來迎樂住歡喜踊躍正念可往生極樂最上吉事表、佛乘、紫雲垂迎接給之儀式也。然必不限臨終有悅之時紫雲立。昔一條院御時祝屏風繪被圖、松藤敷懸。色紙形歌和泉式部詠相似紫雲之由讚公任大納言參見之曰、紫雲禁忌詞也、御悅事尤可有憚云々和泉式部陳曰、此雲全非禁忌是慶雲也。漢高祖入山之時紫雲蓋覆上可登帝位之表事也。公任聞之不及重難心中感之云々

漢書曰、高祖爲人高準而類美鬚髯、左股有七十二墨子、父曰大公、母曰劉媪、姐嘗息大澤之陂、時雷電、大公往視其妻、蛟龍於其上因有娠、遂產高祖未達時紫雲覆其殿上。秦始皇帝常曰、東南有天子氣欲令人殺之。高祖大畏而隱泡湯山其妻呂太后行而遇之。高祖恠而

而問來故、呂后曰劉季所居上有雲氣、故知得來矣云々。
弘決一云、南岳大師俗姓李氏、項城武津人也。兒童時
因夢梵僧勸令入道。又數夢、僧訓以齋戒。又夢普賢乘
白馬來摩頂而去。昔未識文自然解了。所摩處自然隱
起。有如肉髻文。

母儀并本國師上洛事

上人自登山之昔迄通世之今、偏重佛道修行之志、殆
忘水救報恩之儀、此則存棄恩入無爲眞實報恩者理也。
非不知孝養父母奉事師長謂矣。爰本國師範并母堂歷
數年之後相伴而京上、對面之處相共咽、淚良久不言、少
時觀覺云、上人爲佛家之棟梁、名施遠近爲釋門之英聖、
德被貴賤、是併愚昧之秘計也。生前之本望何事如之。
而路遠境隔無見無聞、齡傾餘七旬、生難待後會之間、
携杖而步勵力而上洛。就中在堂母儀孤獨而無恃怙縱
雖可訪夢後覺路、何忽不願昏晨定省、上人早致反哺之
報、且引導菩提之道給。抑老邁之身遙思立之志非他、

上

上人興淨土法門、教念佛往生行給之由承及之間、出離
要路欲承之云々。上人曰生死解脫者是一大事因緣也。

自行暗妙宗不能益他、依之拋萬事求佛道關世俗
入真門之間、知恩之思如忘報謝之志似無、但心中非
不懸、連々所敷存也。然者相構罷下欲遂面拜之處、
遮有來臨爲恐爲說。抑往生極樂事尤可令決定信心
給。末代凡夫皆是罪惡業生也、眞言止觀深法一生難證
入故、以口稱念佛一行爲出離解脫要門、此偏依他力之
本願、亂想凡夫造罪迷徒必遂往生故也云々。觀覺聞之
深以信受、上人即於吉水邊結一草菴爲母堂所居朝
暮備膳且夕致孝云々。沙門榮好者大安寺僧也。如常仍
略之。
此延曆十五
年八秋始也

高倉天皇御得戒事

如本傳繪詞

治承元年丁酉云々、相傳次第如常仍略之

昔慈覺大師清和天皇奉授此戒之時、男女受戒者五
百餘人得利蒙益。追彼貞觀古跡、高倉先帝二日闕其萬

機政務敢尅受。此一心妙戒。自月卿雲客至。后妃采女。魏
々禁中。鳴々氣。堂々宮人面々信敬。天台異朝古跡不恥。
吾國上代不劣者乎

夫以九帖付屬袈裟開福田於日本國。十戒血脈相承時。
種子於秋津州。安然和尙傳戒品。未受袈裟之付屬。相應
和尙就弘念佛。未說圓頓之戒儀。兼此兼彼我祖師上
人而已

榮啓期之歌三樂未到。常樂之門。皇甫謚之述百玉。猶
暗。法皇之道。昇殿是衆外之選也。俗骨不可。以踏蓬萊之
雲。尙書亦天下之望也。庸才不可以攀。蓋關之月。翫其積
磔不窺玉淵者。易知飄龍之所蟠。習其弊邑不視。上
邦者未知英雄之所宿。呂氏春秋曰。段干木者魏文侯
敬之。(文選)過其廬而軾。其僕曰。干木布衣而君軾其
廬不亦過乎。文侯曰。干木不趨俗利。憐君子道隱窮
巷。聲馳千里之外也。寡人光于勢。干木光于德。寡人富
于財。干木富于義。勢不如德尊。財不如義高。吾安敢不
軾乎云々

於上西門院說戒事 如本傳

治承三年巳夏比。於上西門院七日說戒云々。信州長
官歸路之時蛇志口書法花訪生天事云々。在法花傳。如常略之。

東大寺勸進事 如本傳

東大寺緣起
昔聖武天王天平元年始建立此伽藍。良辨僧正爲大勸
進。行基菩薩爲知識聖。五畿七道令結緣。一天四海令致
奉。加成風終功。土木早遂同八年供養。卽以行基菩薩
可爲導師之旨宣下之處辭遁曰。自外國智人可來。以
彼可被爲導師之由奏聞。至期日行基引率百口僧并
治部支番等向攝州難波浦乘船調樂相待之。闕伽一具
浮海上。有少時有人而乘小船來。所浮之闕伽不亂而
前船又來至。來人卽是南天竺波羅門菩薩也。菩薩自船
下與行基共取手喜悅。行基卽詠一首和歌曰

靈山釋迦御前契眞如朽相見哉

波羅門僧正返歌曰

迦毗羅衛共契甲斐有文殊御顏相見哉

重源上人追昔行基善薩跡、普勸都鄙其於風靡草、以勸進次爲令一切衆生往、生極樂廻一方便云、定善惡生處事必依閻王裁斷、閻王問其名字、記善惡業歟。然以阿彌陀佛爲名奉答于閻王者、定可隨喜、仍先號我名云、南無阿彌陀佛、又每奉加人、以法花經字置上付阿彌陀佛名給。一部已畢者既六萬九千三百八十四人結緣也。如此及三四部也。以阿彌陀佛爲名事自此始也云々

大原談議事

如本傳但有人名如常

天台座主顯眞僧正者三條大僧正明雲弟子、顯密兼學碩德也。明雲僧正源平亂逆之時於法住寺殿爲凶黨被失命之間、顯眞忽發道心隱居大原奥、先師大僧正者村上天皇御子具平親王五代後胤太政大臣雅實孫權大納言顯通子也。出王種六代、去槐門不幾。居四明三千之貫首爲一乘三密之棟梁花族過人英才餘身。而今慮依

上

凶徒之狼戾逢存外之妄死、三界無安猶如火宅誰不厭離乎

法談事

如本傳等

後漢書曰、戴馮徵拜郎中、公卿大會群臣皆就席、馮獨立、世祖問之、對曰、博士說經皆不如臣、而居臣上是以不得就座、正旦朝賀、常令群臣說經義、有不通輒奪其席、以益通者、馮車五十席文

光明照室事

如繪詞云々

惠心傳云、於惠心院開諸經論撰往生要集、多聞天王捧蓋禮拜修頭陀行、交人間時鬼神相副隨逐守護。深夜獨坐、思惟法門、欲見要文、忽燈臺有自然燈光、雖有此希有之事、實深匿藏不語他人矣文

於東大寺說法事

重源自唐率渡觀經曼陀羅善導眞影、於東大寺大佛殿軒下立高座奉請上人、被供養、南京衆徒頗無許容之氣、重源請定間衆徒不及慎聽聞、若有訛謬者定可及嘲

瞬之處、上人述法門奧旨吐無碍辯說。爰東大興福大衆渴仰而合掌、隨喜而鳴舌云、見形者法然房、謂才智者釋迦如來歎云々

於清水寺七日說法事

建久元年庚戌秋比、於清水寺七日說戒、兼令稱揚念佛法門。于時有左衛入道法阿簡居仁和寺與鳴瀨、夢參

清水之處內陣外陣種々莊嚴、舞臺廻廊貴賤充滿。又大門有齋赤衣之十餘人、其體似檢非遠使車馬多引立。又天童二人差幡向西自廻廊步來時、法阿問傍人當寺有何法會乎。答曰、法然上人於此御堂七日可有說法之間、爲彼御迎相向天童也云々。夢覺恠思之處明

朝上人御弟子眞阿彌陀佛來告曰、此程右馬入道西念勸進於清水、法然上人說戒之次被演說淨土法門、何不被聽聞哉云々。爰法阿夜夢思合相伴眞阿參清水三日聽聞之處重夢自舞臺下蓮華多生出。一高大餘微少。上人折取小花與諸人見畢覺。念佛人可往生夢想也。法然

云、此界一人念佛名西方便有一蓮生等云々

知恩傳御室夢云々

夢想事 如繪詞云々

上人於高座指瀧水向聽衆示給也、知恩傳、繪詞、仁和寺入道親王夢、云々

於瀧山寺常行三昧勤行事 如繪詞

上人說法時石金丸、繪詞云古年童一端坐合掌念佛。

開目舉頭最後言曰、嗟呼穴貴云々。其後念佛十餘遍如眠往生、時有一聚雲紫白相交西來西躡、又有音樂聲。自餘如繪詞也

靈山寺三七日念佛事

建久元年九月比、於靈山寺三七日別時佛聽衆二人見繪詞法蓮上人一之云々

第七日曉道場燈消、然而堂內不暗、聽衆中恠之、燈已消是何光哉、良久時衆燈明消由告、其時道場俄暗

後白河法皇令寫眞影事

建久二年春比云々 如繪詞一

已下繪詞無之

昔花山法皇有御幸書寫山召延源阿闍梨被寫性空

上人影之時、山動地振之間、法皇大驚諸人怖畏。上人曰、

是非可驚、依令圖貧僧形體有此變云々、法皇聞召

之下地禮拜。今法然上人爲仙院之請被圖御形事不

劣古跡珍事也。隆信卿歸私宅爲自身圖一鋪恭敬供

養有夜感夢想拜此御影只有月輪無形像月輪傍出

一首歌一

月カケテ雲ノ上ヨリ寫シテハ西ヘユクベキシルベ

トハ見ヨ

其後所々爲之敬之

讚事 權律師信名讚

源空上人眞影

普勸道俗 念彌陀佛 能念皆見

化佛菩薩 明智稱名 往生要術

宜哉源空 慕道化物 信珠在心

上

二河消竭 疑雲求方 西利望月

又讚曰 不知作者

知識爲大師 安立諸正法 無量無數劫

不可報其恩

葉公出形眞龍現堂上、漢王燒香靈現顯煙中、物之相

感不可云無。然往生極樂行者上人歸依之遺身尤圖眞

影可祈後生者也

熊谷人道發心事

將軍右大將家頼朝平西海白浪、際奥州綠林、着錦袴

入浴歷黃亞相中納任大將羽林將軍、拜賀儀式當代壯觀也。鎮一

族齊慰萬人愁、却不忠者賞奉公者敢不分親疎、全無

隔遠近、然而猶代及澆季、人有殘恨。爰熊谷次郎直實

一人當千精兵勳功無雙武士也。去元曆之比平家追討之

時、雖有合戰之忠、依無不次之賞、忽倦弓馬之勢、俄發

出家之志。又有景時云壯士將軍與熊谷有切者不切者和事、旁恨

主君不申暇自由出家。法名蓮生宇津宮入道下同名也、成宇ハシヤウナリ

上人御弟子二向專修行人也。行住坐臥不背西、涕唾便利不向西、關東下向時側身行步、逆乘進馬。常述懷曰、昔思生累代武勇之家得日本第一勇士名。今望

成、往生淨土之身成二向專修念佛者。(傍註曰)乘二上品上生金剛臺、私直之。

彼入道願三上々、破圍戰陣之日敢不痛白刃切骨毒箭徹品往生故也。

身。歸他力願之今可願異學加難別解致疑乎。唱名

若不生者非是吾失只是佛虛妄也。信願必往生者非亦

吾德偏是佛願力也。此彼惡佛善惡任願、昔一谷先陣

今思無益高名也。惡人往生今懸一陣末代可流名云々

此外無別事一繪詞委也

御室奉請上人事

建久二年夏比、仁和寺法親王爲御受法被請上人云々。云、源空通世隱居身也。不足御受法之器世嘲人

謗旁以有其憚云々。其後内々仰云、御受法條非眞實、

御心中只往生安心爲被尋聞食也。仍上人參入被演

法門、御室殊隨喜云々繪詞無之焉

後白川法皇崩御事

建久三年壬子三月十三日、法皇崩御、寶算六十三也。

宿善開發君也。御賀御逆臨高野詣御登山。勝地名所極

歡覽驗佛靈社靈臨幸。四明受大乘戒三井傳秘密教、東

大寺追聖武跡開眼金銅靈像。法勝寺均白河院御願建

九重塔三密護摩觀行二萬二千餘座、一乘法花轉讀七萬

八千部也。書寫一切經三部、六齋被禁殺生等、事理

善根不知其數。而往生極樂者朝暮御勤御臨終正念無亂。

瑜伽振鈴響限其夜。一乘暗誦音終其曉。普天晝暗、率土

露滋。草木尙愁色也。沉蒨陵松乎。烏雀尙憂聲也、況

洞庭鶴乎。大宮人櫻色染袂引替、卯月松整懸藤衣成仁

流秋津洲之外、惠茂筑波山之影。淵變爲瀨之聲寂々閉

口。砂長爲巖之頰詳々滿耳云々繪詞無之

風フカヌ御代ニモ□ヲソ思ヒ出ル入リニシ月ノ春

ノヲモカゲ

同年秋親盛人道見佛於八坂能引導寺爲法王御菩提

七日念佛繪詞無之念佛聲名其比世間未有。仍住蓮等成評

定之處、能信感夢相云、自西方六羽鳥飛來、其形似

孔雀鸚鵡等、其音微妙哀婉雅亮也。此鳥囀六時禮讚、起

居拜行道旋遶云々。此夢語住蓮等各隨喜曰、是諸衆鳥

皆是阿彌陀佛變化所作鳥也。佛我等加被令調其音曲

給也云、能信授法則住蓮作聲明六時禮讚聽聞自此始

也云々 繪詞無三夢想也

叡空上人入淨土門事 繪詞無之

上人師範叡空來吉水坊告上人曰、叡空久雖求、出

離未決定之。今預教誘思定往生路云々。上人云、師

是一乘圓戒和上三密寫瓶大阿闍梨也。弟子久侍、陛下三

蒙慈訓、敬記淳教風多改、悉昧何以愚僧智分、還成明

師知識乎。是併如以小柏搜大海、以短綆汲井底云々

叡空云、昔後秦羅什三藏逢般豆達多尊者、雖受小乘、

後以羅什三藏爲大乘師。叡空縱本雖授戒密、今何還成

弟子不問往生道、莫辭勿遁云々。上人喟焉良久而曰、

上

三勸懲懲逗拒來命、當傾竭微管標、往生安心、盡涸拙盡

陳起行梗概、而示本願稱名行。叡空立所改、自力難行執

見歸、他力易往直道云々 此事繪詞不見

聖護院也

無品親王被請上人一事 同繪詞

無品親王靜惠御勞火急之間、門徒高僧爲御祈禱被

轉讀大般若云々

三昧發得感見淨土依正事 (繪詞乎) 如□□云々

選擇集製作事

私云讀也土御門院御宇元久元年甲子。如三本傳云々

上人若不留此高矩者、末學異義何以楷定古人所謂。

立言於世、沒而不朽(文)是也

公胤難選擇一事 如本傳

後對面有三三所得一事 如本傳云々

靜巖法印問答事 如本傳云々

知恩傳下

明遍僧都問答事

如本傳云々如繪詞又如常云々

宗源法印問答事

如本傳云々或山僧云々

竹中法印當初子時有識參月輪殿、對面上人、問云、實

乎被立淨土宗、答曰、然也。問、證據如何。答、付屬

文云々。送所作抄物一百餘卷云々

於月輪殿惱瘧病一事如繪詞

禪定殿下并上人同日同時瘧病云々繪詞月輪殿事不見

於月輪現頭光一事

元久元年乙丑四月五日云々、如繪詞也

右京權大夫陸伯入道戒心頭光許奉拜之由申云々繪詞ニハ是モ

不見老子也昔漢文帝禮河上公驚舉身奇瑞、唐高宗歸導和尚

貴口光靈異、皆是得證之驗也。測知上人非直人也。抑

竹林院法印或時來吉水坊、問曰、如何今度可離生死乎。上人答云、源空欲尋啓、此今如何。靜嚴云、決擇門誠可然、於出離道者道心者智者安立也云々。上人笑曰、於源空者乘彌陀本願期、往生外不知其餘云々。嚴云、人等所思以如此。爲聞入義所致此疑也起座去了

元祿第十六龍集癸未冬至日

洛東天王山

孝 璘

(別 筆)

惠 山 與

月輪禪定殿下大職冠十八代知足院入道殿下御孫、法性寺攝政太政大臣忠通公御息也。法性寺殿御子三人內嫡子號近衛殿、攝政太政大臣基實御事也。二男號松殿、攝政太政大臣基房是也。三男號九條殿、攝政太政大臣兼實公、今月輪殿是也。又沙彌戒心於法皇御前奉圖上人眞影、自感靈夢以來一向歸上人、忽拜靈異是往生先兆歟。仍最後時砂敷庭上令修宿所曰、免及最後聖衆來迎在近仍取相構也。其後沐浴着新衣、手取糸口唱名、如眠氣絕了云々

依諸人夢知上人本地事 全如本傳云々

七ヶ條起請文事 如繪詞起請文文如常云々 載九十二人云々

山門衆徒可被停廢專修念佛之

由訴申事

專修念佛事山門捧白疏訴申公家之間、上人誠門人被加條々禁遏事先已畢。然而尙及嗽々沙汰之由披露

下

之間。重書誓狀可被送之旨禪定殿下内々有御計

其狀曰 繪詞有之、但假字故不正、仍書之

源空偏勸念佛教、謗餘教法、諸宗依之凌夷、諸行依之

滅已云々

凡彌陀本願云、唯除五逆誹謗正法云々。勸念佛徒等

謗正法哉。惠心要集云、聞一實道人普賢願海云々。

欣淨土之類、豈捨妙法哉。但老門通世之輩、以極樂可

爲所期者、以念佛可爲所行之由時々諷陳。是則齡

衰不能練行、性鈍不堪研精之間、暫置難解難入之門、

示易往易行之道、佛智猶設方便、凡愚豈無斟酌乎。敢非

存教是非偏思、機堪不也。此條若可爲法滅之緣者、向

後宜從停止。此條以僻說弘通以虛誕、會釋者尤可有糺

斷、尤可有兩誠所望也所欣也。此子細去年沙汰之時

進起請畢、其後于今不變。雖不能重陳嚴誠、既重疊

之間、誓狀又乃再三。上件子細一事一言以虛誕設會

釋者、每日七萬反念佛空失其利益、墮在三塗、現當二世

依身常沈重苦、永受楚毒、伏乞當寺諸會滿山護法證明知

見。源空敬白。其後又禪定殿（餘本ニハ禪定殿下自狀也ト見タリ、可尋之、因證トナリ）下御息殿法印被進天台座主慈鎮和尚書狀曰、私云、慈鎮和尚者誤歟。其時座主眞性宮也。如何

源空上人起請文披露山門之後勤靜如何、尤以不審。

抑如風聞者、依上人三重之子細及炳誠一同之沙汰。

件三箇條者一者念佛弘通惣不可然云々（如平常故略之）

私云、第六十六代座主法印大和尚位實全、建仁二年七月十三日、六十三、第六十七代座主法印大和

尚眞性、建仁三年八月廿八日、卅七、治三年。第

六十八代座主大僧正法印大和尚位承圓、元久二年

十二月日、廿六、治八年。第六十九代座主前大僧

正法印大和尚位慈圓、建曆二年正月、五十九。重

任治一年

住蓮安樂被行斬刑一事

繪詞無、又未傳聞此事恐浮說歟、可尋之

異學異見之輩我慢偏執之故、可停止專修念佛之由、

驚天聽頻達教聞之間、後鳥羽院有勅許遂被召取住

蓮安樂了。此條非當山門衆徒鬱憤、聊譏臣誤、教情故也

尋其濫觴者、太上天皇以熊野御參詣之際、小御所女房

達招請住蓮安樂等有念佛聽聞、還御後被聞召此由、甚

以有逆鱗。自此已後念佛者御氣色背教襟畢。住蓮等爲

上人御弟子、於其身全無過無犯之處、有誹謗輩致無

實譏奏之故、忽蒙勅勘被召籠之條、偏佞臣之誤。君

如浮雲幣白日、凡者大唐一行阿闍梨、慈恩大師、后妃采

女歸依之間、不信之聲成疑思汚之。況末代凡夫僧難通

人之疑者也。人非木石不如不得歸依矣。禪定殿下

內々被難申之間、勅答云、是山門衆徒憤也。自今以後

高聲念佛可停止之由進誓狀者可有免許之旨被仰。

下官人住蓮等申云、我等適逢彌陀超世之本願。此度可

遂出離、思其恩德、捨沙身尚不厭足、爲自爲他不可

不唱。心爲恩使命依、義輕者此謂也云々。官人等奏聞

此由、逆鱗彌甚。申狀奇恠也。可處死罪之旨被仰下

間、官人等重誘住蓮等可進誓狀、由申之。住蓮等申云、

念佛者身高下假令真實念佛不可申之誓狀忌々事侍。我

不變身命。但惜無上道佛說給。設雖被處死罪。全不可及怠狀也云々。官人不及力。二人河原引出欲誅之。

住蓮申云、何於一所不被斬。官人曰、勅定也。住蓮

云、設雖勅命今一度於一所欲申臨終念佛。官人許具

來安樂房。兩人日中禮讚始。住蓮房調聲、安樂房助音也。

道俗成市絞袂。至彌陀眞色之文。西方空紫雲生。悲喜嗚

咽止禮讚。打落頭。頭向西而居。斬身台掌而坐。見物驚目

聞者彈指矣。私云此事未傳聞。能々可尋事也。常二

報恩經大光明王因緣引之云々。如常故。略レ之。

後京極攝政殿薨去事

繪詞ニモ有之
但無歌

建永元年三月七日、攝政太政大臣良經公頓死、月輪

禪定殿下御息也。文操過人理政。撫民、諸道探淺深而

測浮沈、萬機補佐政、而無親疎、朝之賢智也、世之神才也。

前大僧正慈圓相共思沈給。職事辨官道暗、文峰歌苑主

失被仰。花尙昔花留有露、宅是舊宅廢無人

秋ノ夜ノ風ト月トノ友ハミナ春ノ山路ニマヨヒヌ

ルカナ

禪定殿下此御歎打副、上人配流事心苦被思食御所勞。

前大僧正御訪被參、殿下仰曰、攝政事歎無甲斐、上人

炳誠事、衆徒鬱訴于今不懌、能々可被誘門徒生前本

意只在此事。座主云、更々不可有疎略之由被申、抑

涙被退出了云々

上人配流事

如本傳與又如繪詞云々

禪定殿下山門憤難治被思食之處、衆徒及預議之由

聞食有御安堵存外宣旨下、是併院御計有御意得、暫申

子細於公家之程、無左右不可有御下之由雖被奉

留、爲勸勤之身片時居往帝京旁有其恐、上人出立給、

然者可奉人法性寺小御堂之由有仰、三月十六日被

奉留置、然而論言如汗、非可默止之間、禪定殿下不

及力給、又官使可有御出洛之由申間。上人仰云、往生

極樂道廻、其中開本願稱名之一行、隨代被機令弘通之

處、無道之輩恣構邪義偽號師說之間、其科歸一身被
 追下于帝都之外事、是不慮之災過也。但強非痛此事、
 結緣互順逆引接不可嫌人。來迎有前後、遲速可依物
 機、在纏出細皆火宅也、眞諦俗諦併水驛也已配所令赴給
 之間、信濃國住人角張成阿彌陀佛者、俗姓清和後胤、六
 孫王苗裔也。爲源氏正統守王家拉朝敵伊與州玄孫也。
 而給仕上人爲奴爲僕、取履昇輿、採菓汲水之役、拾
 薪設食之營、自赴驛路之始迄居謫所之後、一日片時
 不怠也云々

禪定殿下御歌上人返歌 如繪詞云々
 大納言律師公全待上人船等事 如繪詞云々

已下繪詞異也云々
 十七日經島付給、十八日室付給、遊君集奉拜上人
 云々。教化念佛、此泊長者女、最後何我身老等歌ウタフ
 テ往生事、上人引之勸君共給云々 繪詞異レ之、經島君
 共例引取レ信事也、
可三見
 合一

是又繪詞異也、可見合
 又云或遊君云、一葉船上副涙露申云、サラヌダニ女
 人極過重事也、同女人申ナガラ我等殊罪深身也、船中
 浪上恣一生歡會、明暮只誑人心思、乘月影叩夜船、係
 心於往還客、棹浪上浮水面見身於上下人、日傾西無
 何刷無暮形、月出東待不憑夜契、カ、ル罪深身ニシモ
 生ヒケル事返々口惜侍。而上人御教化承往生極樂事、
 眞實喜思侍泣々申ケレバ、上人理思食流涙給云々
 同廿六日讚岐國鹽飽地頭奉入事云々 異繪詞。可見合、
 如繪詞一但疎略也
繪詞二ハ有ニ
 夢想云々

禪定殿下御往生事

御所勞火急間、光親卿爲仙洞御使被參御訪殿下泣
 仰曰云々 已下如繪詞。
但被レ召光親云々 身縱託西土蓮、雖開無生情、
 神即來古鄉間可拭懷舊淚相構、云々殿下其後無程御
 往生也。兼知死期事二日、端坐待終焉事一時、念佛
 與氣俱終。室中異香經日尙芳矣云々

一念邪義流布事

北國狀如繪詞，又如常
故略，但成覺房事無之

八幡宮託宣事

此ハ繪詞ハ二不見歟

建曆元年夏比後鳥羽院八幡宮有御幸。一人倡妓橫曰：星災無親疎，只與善人依。王者得失有國土治亂，吾南海邊邑有可訪事，日々往反，苦哉々々。近代君闇臣詔政，濁人愁，王城鎮守百王宗廟連々，有評定事，天下逆亂，率土荒廢，定有後悔歟云々。還御後近臣等奏申云，倡妓託宣之趣非只事歟。凡妖不勝德，仁能却邪，治國土之計不如德政，退妖孽之術在歸佛法，專修念佛，廢法。然上人配流尤可有御計哉云々。

前中書王者延喜御子天曆御弟兼明親王也。占龜山麓營山庄之刻，得小野宮攝政讒彌以蟄居。作免裘賦，閉箱置之。中書王薨逝之後，天子自然傳覽。及于君闇臣諛處，龍顏不悅，投寄之。獻覽之人成恐之處，少時又覽之。至于扶桑豈無影之句，大啼泣云々。扶桑豈無影乎。浮雲掩而忽昏，叢蘭豈不芳哉。秋風吹而先敗云々。

下

朱雲字子游，魯人也。成帝時張禹以爲帝師，位特進甚尊重，雲上書求見，公卿在前。雲曰：今朝廷大臣上不能匡之下無益民，皆尸位素餐。願賜尙方斬馬劍斷佞臣一人首以勸其餘。上問曰：誰也。對曰：安昌侯張禹。上大怒曰：少人居下，誹上，逞辱師，傳罪死不赦。令御史將雲下殿，雲擊殿檻，檻折。雲呼曰：臣得從龍逢比干，遊於地下足矣。未知聖朝何如耳。左將軍辛慶忌叩頭曰：此臣素着狂直於世，使其言是不可誅，非固當容之臣以死而爭，帝意解。然後得免。後當治檻，帝曰勿易，因詮直臣云々。

說苑曰：師經鼓琴，魏文侯起舞。賦曰：使我言而無敢見遠。師經投琴於文侯不中，中疎潰。文侯顧左右曰：爲人臣而撞其君，其罪何如。左右曰：罪當烹。使捉師經下堂一等。經曰：臣可得一言與死乎。文侯曰：可。經曰：昔堯舜之爲君，唯恐言而人不違。桀紂之爲君，唯恐言而人拒。臣撞桀紂非撞吾君也。文侯曰釋之。是寡人過懸琴於壁，不補疎，以爲寡人之

過云々私云、是等
文調色歟

蒙_二勅免_一被_二召返_一事

夢想事繪詞無之
可尋之、餘同

建曆元年七月之比、後鳥羽院御夢想云、蓮花王院有御參、着衲衣高僧來奏曰、法然房故法王并高倉先帝圓戒師也、德等賢聖益普當今、君以大聖權化處還俗配流之罪、咎同五逆苦報不恐乎云々。御夢覺後密被示允親卿。云、得折可有勅免之由被勸申之間、然止逆隣誠被下鳥頭變毛官旨案此御夢爲奉助本師阿彌陀垂迹觀音令示現給也。左辨官下云々如繪詞

歸洛次參詣勝尾寺事

大旨如繪詞

但一切經迎人上人御弟子殿法印并當寺住侶七十餘人捧蓋奉迎之云々。聖覺法印說法、如繪詞。拾因云、本朝孝謙天王云々引數宿往生文云々、
如拾因也略之

可有歸京由被下院宣事

如繪詞云々

御臨終事 皆如本傳云々

二菩薩現前云々、詠二首歌繪詞無之

極樂へツトメテハヤクイデタ、バミノヲハリニハ

マイリツキナン

ワタルトモ知ラデヤ人ノ返ルランニツノ河ハノナ

カノホソミチ

當上人往生前後諸人感夢事

參議兼隆爲雲客時夢 全如三本傳 四條京極海師眞清

夢 全如三本傳 三條小河陪從信賢後家夢 全如三本傳

花園准后侍女三河局夢 全如三本傳 仁和寺尼西妙夢

全如三本傳 八幡住人右馬金剛丸九子息夢 全如三本傳 廿五日

上人往生時群集中或人夢 全如三本傳 或復謂曰 全如三

本傳 東山一切經谷住僧弟子夢 全如三本傳 上人大

谷禪房東岸上有一面平地 云々全如三本傳 隆寬律師

上人入滅後云々 全如三本傳 粟田口禪尼夢 全如三本傳

抑八幡大菩薩昔眞通上人爲知本地致祈請之時示少々似繪詞也

現曰

昔於靈鷲山 說妙法花經 今在正宮中

示現大菩薩云々

而大安寺行教和尚令勸請勇山之時、現彌陀三尊、移袂上給。又垂迹形昔鷹影今鳩現。此則釋迦彌陀一體鷹鳩是一者也。以之謂之、上人是西土彌陀垂迹也、又彼佛化身應神天王靈魂也。指大菩薩御正體示法然上人、之夢有其謂歟。夫尋夢境有通虛實云々、全如本傳一

沒後追善事

初七日乃至六七日 全如繪詞一

六七日願文後奥云

綾被物、錦橫被、法眼棒物等并僧食以下皆以慈銀和

尙御沙汰也

導師捧諷誦讚嘆曰、補三千貫首三箇度、致一山興隆幾許哉。付顯付密誰於和尚可着指哉。而今爲奉

訪先師上人菩提忝捧、自筆諷誦、念佛一宗之面目何事

下

如之。專修行者以之可被爲證文云々

七々日、全如繪詞一、導師公胤僧正佛經讚嘆之後、具陳決疑抄之元起了曰、公胤今日參勤之本意全非他、

偏是爲懺悔謗難上人之重罪也。且又成上人門弟之由爲披露也云、自懷中取出二字、指置前机了。座下聽衆聞之莫不感歎矣云々 繪詞二字事無之可尋之

公胤僧正往生事 如繪詞也

上人往生後歷五ヶ年、建保四年丙子四月廿六日夜夢

告曰、往生之業中乃至來此界度々云々、紫雲異香以甚然間太上天皇差院使、准后宮土御門内府已下飛車馬被拜往生儀式

先言有徵事 大旨如本傳一

隱岐院謀反事

承久三年五月十五日、太上天皇同天寶昔召集兵誅洛陽守護庭尉光季之後、爲追討右京權大夫義時被分遣打手之間、關東武士等又依一品禪尼下知責上于京

都其武如焚會之入鴻門、其勇似仁貴之破鷄林、六月十五日百萬軍兵自宇治勢多入洛、畿内畿外遠近充滿。搜求道戰場之者、斬首無隙、于拭白刃、人馬死傷塞區。不輒行步、西面北面誇朝恩、好武勇之輩、忽滅亡、近習罷臣立邊功之族悉被囚。大納言忠信、按察使光親、中納言宗行、二位兵衛督有雅、宰相中將範茂、宰相中將信能卿等、不心旅空後先立東道、行末猶足柄不關敢淚流、何嗚見方來悲矣。光親卿富士末野秋初風、萩下葉吹夕、露命消敢程、蓬髮下蓮花願、法花經讀被斬ケル。宗行中納言菊河宿タリケル夜、立入宿住替付ケル。昔南陽縣菊水波下流而延齡、今東海過菊川宿西岸而失命云々

浮島原ヲ過ケル時

ケフスグル身ヲウキシマノ原ニテゾツキノ命ヲキ
、サタメツル

藍澤云所遂被切畢

有雅卿範茂卿皆於東土路傍失命畢

同七月六日、太上天皇奉移鳥羽殿、大宮中納言宰相中將左衛門尉能茂許御共出四辻殿給。御心中可推量、叙覽外七條殿遙顯給、紫宸殿軒葉隙ヌレハ、離宮塵深洞庭只兵充滿

同八日、御出家、大軍圍鳥不通、隔錦帳三千寵愛此世御妾不及奉見。近玉砌、近習臣妾不替御有様不能奉拜。召信實朝臣令圖御影被進七條女院。女院即有御幸御目互晚泣外御詞無、懸女房手任足即立歸御畢

同十三日奉移隱岐國武士立副御輿勸申先途。傾月可惜御名殘、遮奉見人々朝恩誇朝賞漏莫不落淚。自鳥羽西定式武士有様學給。人所好必不空、無由ケル御スサミ哉悔被思食ケル。可憐、水無瀬洞庭抒悵、亡國恨隨庭シモ限ラザリケリ。出雲國大濱云所付セ給テ
タラチメノキヘヤラデマツノ露ノ身ヲ風ヨリサキ
ニイカデトハマシ

シルラメヤウキ世ヲミラノウラ千鳥ナクノシボ

ルンデノケシキヲ

雲波煙浪凌遙隱岐渡付給ヒヌ。境非南北鳥札失便。政陰陽變不測鳥頭白成無期。泣々望故郷雲海沈々眼爲穿。空瞻其方山青黛翠薄思不痛云事無、朝秋夕悲。撰地山庄、觸折曆覽四季景色統萬事寂念令感。種々雜藝何玉體塚中、奇苑蹴鞠之御遊古今無比御事也。黃帝古跡白河昔天移、明石浦朝霧水無瀨秋夕詠給三十九年御榮、一時逆德衰、四十八願憑始三尊來迎期御

カネテヨリイヘデコシマノタヨリアラバ松風サソ
ムラサキノ雲

昔清涼紫宸金扉采女並腕卷玉簾、今民烟蓬蘂葦軒海人垂釣爲語友、槐門棘路之類拭紅淚於征路之月、月卿雲客之聲斬生頸於他郷之雲トソ書置給ケル

凡三帝一時殘遠流之恥諸臣一旦泣死刑之罪因果所酬豈不思食知乎

依山僧惡行一令改葬遺骨事

大如本傳又如繪詞也仍略之

下

門弟等拾骨之時紫雲又現、公全律師於小藏山麓二尊

院上建立多寶塔、並土御門院御墓所奉納上人御骨、修不斷念佛、今光明寺是也。然後換眞影、修月忌云々

門々戸々誰家不統三五夜中之月、在々所々何隅不望、六八弘誓之雲乎。遺弟之諱一念多念遙繼、末法萬年之法命門葉之構、長時別時顛研、本願三尊之信心者歟

釋迦堂參籠之意

如繪詞也、但本傳渡日本事無之

凡上人德行先代未聞矣

延曆寺 吉水前大僧正慈鎮 大原座主 僧正顯眞

妙香院 僧正良快 惠光房 法印永辨 竹林房

法印靜嚴 寶地房 法印證眞 出雲路 法印明禪

私云滅後歸上人 安居院 法印聖覺 齒城寺 靜

惠法親王 聖護院 歎 長吏 僧正公胤 仁和寺 御

室守覺法親王 南都 興福寺贈僧正藏俊 光明山

僧都明遍 菩提山 重源和尙 東大寺 寬雅律師

醍醐寺 慶雅法橋

如此南北明匠諸宗賢哲信伏隨從事不違于羅縷矣。

誰人傳慈覺大師袈裟乎、誰人奉爲皇帝授戒品乎、

誰人奉爲法皇被國眞影乎、誰人奉爲攝錄被禮拜

乎、誰人奉爲諸宮諸院被歸敬乎、誰人得智慧第一

稱乎、誰人不會聞師講自解淨土一宗乎、誰人兼擊

十三宗各蒙印可顯勝利乎、誰人依每日七萬反念佛

現身發得三昧見依正乎、誰人踏蓮花步行虛空乎、

誰人暗夜無燈照室乎、誰人現身放光明乎、誰人早世

之後花族道俗修遠忌臨時報恩乎、誰人每人留眞影

而持念乎、

私加之云、了意

誰人自造顯本地形乎、誰人示本地於筆點乎、誰人高

僧夢內告本地垂迹乎、誰人自興行一宗於本朝乎、誰

人多得諸人感夢乎、誰人滅後利益感本朝乎 已上私

加之

此中適備一德之人可恨餘事不足。而上人雖不生

皇后卿臣家爲邊國遠邦之士民、被召殿上登于高座、

對于明王授于戒品誠佛法東行以來未有如上人盛

德。爰無慚無愧之輩生盲闍提之類、不恐當來苦報偏

好頓教毀滅橫起瞋毒顛倒古廟悲哉。超過大地微塵

劫未可得離三途身嗚呼何爲々々

或人詠歌云

人コトニ惜ム氣色ヤ見ヘヌラン山ノ心ニ入ラヌ月

カケ

月ヲナホ本ノ棲ニヤトセカシ出ニシ山ノ影ナラヌ

カハ

門徑遠開事狀
延曆寺政所下 感神院

可早搦捕一向專修張本隆寬

空阿彌陀佛其已下餘黨等事

右專修者佛法之魔障諸宗之怨敵也。因茲度々經奏

聞之處皆蒙勅許畢。仍衆徒其後遠天聽之刻又以被

宣下。凡專修興行者以源空爲先達門弟等剩點彼墓所

稱御廟成歸敬。奇恠之至蔡而有餘之間、破却墳墓燒

捨其骸畢。根本已被絕枝葉何不枯乎。於之者不論貴賤之栖不撰權門之領、悉資出彼輩可擲取也。就中今度又任先符可被禁遏之由宣下狀爲明鏡。別者山門末寺庄園日吉神人寄人、惣者諸國七道之土民邊寺邊山之僧徒、搜尋彼專修結構之輩、擲取其身、破却住所可令追放皇土外之狀、依大衆僉議所仰如件以下

嘉祿三年六月卅日 小寺至法師住僧 在判

修理別當法印大和尚位

都維那法橋上人位

上座法眼和尚位在判

寺主法橋上人位在判

隆寬律師空阿等流罪事

山門使者破却大谷廟塔之後、遠流門弟隆寬、空阿、詳哉證空、幸西、等、可被停止專修念佛之由重經奏聞之間、隆寬相模國、幸西伊與國被流畢。常阿被國云々證空屬東塔西谷持教房僧都非專修之由捧、怠狀之上、開天台六十卷印板、

下

可山門流通物之由有宿願之旨、令披辭于山門之間、被宥流刑畢

湛空上人聞之詠一首和歌

世ノ中ニ無シトテコソハ忍バレヌ有テハ人ニ厭ハ

レシハヤ

隆寬律師配流之後於湯山書述懷狀被送京都、題羈

中吟是也。如常云々 故略之

律師注此記以後不幾而入滅畢

抑集記此傳志者、迄當來之世經道滅盡之時、我以慈悲悲哀懇特留此傳止住百歲。其有衆生值此傳者、隨意所願皆當往生矣。彼阿育大王之不信佛法、逢波斯匿王之妹、聞語在世事忽生信解、今先師上人人入滅之後、僅雖歷七十餘廻之星霜、當世奉直上人三輩已以希也。若無委細傳記者將來無知上人德行之者歟。仍尋聞諸家傳說所令集記也。留贈後代共期往生矣已上了於望西樓抄出之畢

（校訂者曰、次記事者可レ入ニ際寛律師空阿等流罪事下ニ斷片也）

爲最後勤、十五日朝於道場往生。奇代不思議也。彼

空阿以上人御影隆信子息 信實ノ筆上人御往生年三月比寫之。

與善導御影並懸爲本尊一向稱名。彼本尊在知恩院

上人影隆寛銘文書給ヘリ云々

或記云

法然上人門徒流罪等事

法然上人並門徒遠流次第記

聖人罪名源元彦男、配所土佐國、幡多、春秋七十五、

此外門徒或死罪或流罪云々流罪人々

淨圓房 備後國 禪光房 伯耆國 妙覺房 伊豆國

法本房 佐波國 成覺房 阿波國 善信房 越後國

善惠房 無助寺前大僧正 被申預之

已上流罪師弟共八人

死罪人々四人

善綽房 性願房 於攝津國被レ誅 住蓮房 安樂房

於近江國被レ誅

馬淵法印尊長沙汰云々

承元年中 已上

維時

元祿十六癸未稔仲秋之頃。依江州知恩院 尊像開帳上

洛。幸拜閱此書以書寫了

孝 璘

霜月冬至日

（別筆）

右知恩傳二卷者。以良照義山公所持之本寫之自校合

畢

此本東山大谷入信院庫藏在之

惠 山 叟

第三集

雜

と

抄

出 據

- 一、源空聖人私日記(西方指南鈔本、淨土宗全書卷一七參照)……………一卷
- 二、法然上人傳記(醍醐本、法然上人全集參照)……………一卷
- 三、黑谷源空上人傳(十六門記、淨土宗全書卷一七參照)……………一卷
- 四、法然上人祕傳……………殘缺 二卷
- 原本 室町時代古寫本
 京都市 禿氏祥祐氏藏
- 五、正源明義抄(刊・元祿五年版)……………九卷
- 六、法然上人祕傳遠流記(刊・行齋與書)……………二卷
- 七、法然上人惠月影(淨瑠璃台本・漆間徳定作)……………十段
- 八、史料と抄録……………
- 九、明義進行集(卷二・卷三)……………殘缺 二卷
- 一〇、知恩講私記(東寺寶菩提院所藏の古寫本)……………一卷
- 一一、圓光大師略傳(白菅秀道撰)……………一卷

源空聖人私日記

夫以、俗姓者美作国庁官漆間時国之息、同国久米南条稻岡庄誕生之地也。長承二年癸丑聖人始出胎内之時、兩幅自天而降、奇異之瑞相也、權化之再誕也、見者合掌、聞者驚耳云々。保延七年辛酉春比、慈父為夜打被殺害畢、聖人生年九歲、以彼矯小箭射凶敵之目間、以件疵知其敵、即其庄預所明石源内武者也。因茲逃隱畢。其時聖人同国内菩提寺院主觀覺得業之弟子成給。天養二年乙丑初登山之時、得業觀覺狀云、進上大聖文殊像一鉢、觀覺西塔北谷持法扇禪下、得業消息、見給奇給小兒來、聖人十三歲也。然後十七歲、天台六十卷說始之一。久安六年庚午十八歲、始師匠乞請暇遁世。法華修行之時、普賢菩薩眼前奉拜。華嚴披覽之時、小蛇出來、信望上人見之怖驚給、其夜夢、我者此。聖人夜經論、

見、雖無燈明、室內有光如晝、信空法蓮房也同見其光。修真言教入道場、觀五相成身之觀行、頭之於上西門院、說戒七箇日之間、小蛇來、聽聞、當第七日、於唐垣上其蛇死畢、于時有二人入見、其頭破中或見天人登、或見蝶出、說戒聽聞之故、離蛇道之報、直生天上歟。高倉天皇御得戒、其戒之相承自南岳大師所傳、于今不絕、世間流布之戒是也。聖人所学宗々師匠四人、還成弟子畢。誠雖大卷書、三返披見之時、於文者明々不暗、義又分明也。雖然以廿余之功、不能知一宗之大綱、然後親諸宗之教相、悟頭密之奧旨、八宗之外明、弘心達磨等宗之旨、爰醍醐寺三論宗之先達、聖人往于其所、述意趣、先達給不輒、起座入内、取出文函十余合云、於我法門者無余念、永令付嘱于汝云々。此上称美讚嘆、不遺羅縷、又值藏俊僧都、而談法相門之時、藏俊云、汝方非直人、權者化現也。智惠深遠、形相炳焉也。我一期之間、可致供養之旨契約、仍每年贈供

養物一致懇志、已遂本意了。宗之長者、教之先達、無不隨喜信伏。給本朝所渡之聖教、乃至依記目錄皆被加一見了。雖_レ然煩_レ出離之道、身心不安。抑始自_レ覺覺道緯善導懷感御作_レ至于楞嚴先德往生要集、雖_レ親_レ奧旨、返拜見之時者、往生猶不_レ易。第三返之時、乱想之凡夫不_レ如_レ称名之一行、是則濁世我等依怙、末代衆生之出離、令_レ開悟_レ訖。況於_レ自身得脱_レ乎。然則為_レ世為_レ人雖_レ欲_レ令_レ弘_レ通此行、時機難_レ量感_レ應難_レ知。情思_レ此事_レ暫伏寢之處、示_レ夢想_レ紫雲廣大、聳覆_レ日本國_レ自_レ雲中_レ出_レ無量光_レ自_レ光中_レ百宝色鳥飛散充_レ滴虚空_レ于_レ時登_レ高山_レ忽拜_レ生身之善導_レ自_レ御腰_レ下者金色也。自_レ御腰_レ上者如_レ常。高僧云、汝雖_レ為_レ不肖之身、念仏興行滿_レ于一天_レ称名專修及_レ于衆生_レ之故我来_レ于此。善導即我也云々。因_レ茲弘_レ此法_レ、年次第繁昌無_レ不_レ流布_レ之所。聖人云、我師肥後阿闍梨云、人智惠深遠也。然情計_レ自身分際_レ、此度不_レ可_レ出_レ離生死_レ若度々替_レ生、隔生即忘之故定忘_レ弘法_レ敷、不_レ如受_レ長

命之報、欲_レ奉_レ值_レ慈尊之出世、依_レ之我將_レ受_レ大蛇身、但住_レ大海者可_レ有_レ中天、如_レ此思定、遠江国笠原庄内椀池云所、取_レ領家之放文_レ住_レ此池_レ誓願了、其後至于死期時、乞_レ水入_レ掌中_レ死了、而彼池風不_レ吹浪俄立池中塵悉_レ上、諸人見_レ之即注_レ此由_レ觸_レ申領家勸_レ其日時、彼阿闍梨當_レ逝去日_レ所以有_レ智惠_レ故知_レ難_レ出生死_レ有_レ道心_レ之故值_レ仏之出世_レ祈願也。雖_レ然未_レ知_レ淨土法門_レ之故如_レ此發_レ意願_レ我其時若此法尋得_レ不_レ願_レ信不信_レ此法門_レ申、而於_レ聖道法者、有_レ道心者期_レ遠生之緣、無_レ道心者併住_レ名利、以_レ自力_レ輒可_レ厭_レ生死_レ之者、是不得_レ漏依之証也云々。又聖人年来開_レ經論_レ之時、釈迦如来罪惡生死凡夫、依_レ彌陀称名之行_レ可_レ往_レ生極樂、弘_レ說_レ給_レ之勸_レ得_レ教文、今修_レ念仏三昧_レ立_レ淨土宗、其時南都北嶺碩学達共_レ誹謗嘲哂無_レ極。然間、文治二年之比。天台座主中納言法印顯真厭_レ娑婆_レ忻_レ極樂、籠_レ居原山_レ入_レ念仏門、其時弟子相模公申云、法然聖人立_レ淨土宗義_レ可_レ尋_レ聞食_レ顯真云、尤可_レ

然云々。但我一人不可聽聞、処々智者請集定了、而彼大原竜禪寺集会、以後法然聖人請之、無左右來臨了、頭真喜悅無極、集会之人人

光明山僧都明徧東大寺三輪宗長者也、笠置寺解脱上人侍從已講貞慶法相宗人也、大原山本成坊、此人々問者也。東大寺勸進修乘坊重源、嵯峨往生院念仏坊改名今ハ南無阿陀仏ト号セリ、天台宗人也、大原来迎院明定坊蓮慶天台宗人、菩提山長尾蓮光坊東大寺人、法印大僧都智海天台山東塔西谷林泉坊、法印權大僧都証真天台山東塔東谷宝地坊 聽衆凡三百余人也

其時聖人、淨土宗義念仏功德、彌陀本願之旨、明明說之。其時云口被_レ定本成坊、默然而信伏了。集會人人、悉流_レ歎喜之淚、偏_レ煽伏。自_レ其時、彼聖人念仏宗興盛也。自_レ法藏比丘之昔至_レ彌陀如來之今、本願之趣、往生之子細不_レ味說給之時、三百余人一人無_レ疑。聖道淨土教文支旨說_レ之時、人人如_レ向_レ虚空、無_レ出_レ言語之人。集會人人云、見_レ形者源空聖人、実者彌陀如來応

跡歎定了。仍集会之驗、於_レ三件寺三晝夜不断念仏勤行了。

結願之朝頭真、付_レ法華經之文字頁數一人別阿彌陀仏名付被_レ教訓、大仏上人自_レ其時、南無阿彌陀仏之名付給了。高倉院御宇安元元年未_レ聖人齡自_レ四十三始入_レ淨土門、閉觀_レ淨土給。初夜宝樹現、次夜示_レ瑠璃地、後夜者宮殿拜_レ之、阿彌陀_レ尊常來至也。又靈山寺三七日不断念仏之間無_レ燈明、有_レ光明、第五夜勢至菩薩行道同列立給、或人如_レ夢奉_レ拜_レ之。聖人曰、猿事侍覽、余人更不_レ能_レ拜見。月輪禪定殿下兼実_{御法名}門照、煽依甚深也。或日聖人、參_レ上月輪殿、退出之時、自_レ地上高

踏_レ蓮華_レ而歩、頭光赫奕、凡者勢至菩薩化身也。如此善因、令_レ然業果惟新之處、南北之積徳、頭密之法燈、或号_レ謗_レ我宗、或称_レ嫉_レ聖道、寄_レ事於左右、求_レ咎於縦横、勸_レ驚_レ天聽、諷_レ諫_レ門徒之間、不慮_レ之外忽蒙_レ勸_レ、被_レ行_レ流刑了。雖然無_レ程煽浴了。樞中納言藤原朝臣光親為_レ奉行、被_レ下_レ勸免宣旨、去建曆元年十一月二十日煽浴、居_レ東山大谷之別業、待_レ西方淨土

迎接、同二年正月三日、老病空期⁷、蒙昧之臻、所待所⁷、
 憑筵悅哉、高声念仏不退也。或時聖人相⁷、語弟子云、
 我昔有⁷、天然⁷、交⁷、声聞僧、常行⁷、頭陀、本者是在⁷、極樂
 世界、今來⁷、于日本国⁷、学⁷、天台宗、又勸⁷、念仏、身心無⁷、
 苦痛、蒙昧忽分明。十一日辰時端座合掌念仏不⁷、絶、
 即告⁷、弟子云、高声念仏各可⁷、唱、觀音勢至菩薩聖衆
 現在⁷、此前、如⁷、阿彌陀經所說、隨喜雨⁷、淚。渴仰融⁷、肝、
 尽虚空界之莊嚴遮⁷、眼、妙法輪之音声滿⁷、耳。至于
 同二十日、紫雲聳⁷、上方、円々靈鮮⁷、其中⁷、如⁷、凶絵仏像、
 道俗貴賤遠近縑素、見者流⁷、感涙、聞者成⁷、奇異。同日
 未時舉⁷、目合掌、自⁷、東方、見⁷、西方、事五六度、弟子奇
 而問云、仏來迎歟。聖人答云然也。廿三四日紫雲不⁷、
 罷、彌広大聳⁷、西山、壳⁷、炭老翁荷⁷、薪樵夫、大小老若
 見⁷、之。廿五日午時許行儀不⁷、違、念仏之声漸弱、見仏
 眼如⁷、眠、紫雲聳⁷、空、遠近人人來集異香薰⁷、室、見聞
 之諸人仰信、臨終已到。慈覺大師之九条袈裟懸⁷、之、
 向⁷、西方、唱云、一一光明徧照十方世界念仏衆生、撰取不

捨云々、停午之正中也。三春何節哉、釈尊唱⁷、滅、聖
 人唱⁷、滅、彼者二月中旬五日也、此者正月下旬五日也。
 八旬何歲哉、釈尊唱⁷、滅、聖人唱⁷、滅、彼八旬也、此八
 旬也。園城寺長吏法務僧正公胤為⁷、法事、唱道之時、其
 夜告⁷、夢云、源空為⁷、教益⁷、公胤能說⁷、法、感即不⁷、可⁷、尽、
 臨終先迎接、源空本地身大勢至菩薩、衆生教化故來⁷、
 此界⁷、一度度、此故勢至來見名⁷、大師聖人、所以讚⁷、勢至⁷、
 一、無辺光以智恵光普照一切、故嘆⁷、聖人、稱⁷、智恵第
 一、以⁷、碩德之用、潤⁷、七道故也。彌陀勸⁷、勢至、為⁷、濟
 度之使、善導遣⁷、聖人、整⁷、順縁之機、定知十方三世無
 央數界、有情無情遇⁷、和尙與世、初悟⁷、五乘濟入之道、
 三界虚空四禪八定、天王天衆依⁷、聖人誕生、悉拔⁷、五衰
 退没之苦、何況末代惡世之衆生、依⁷、彌陀称名之一行、
 悉遂⁷、往生素懷、源空聖人伝説興行故也。仍為⁷、來⁷、之、
 弘⁷、通勸⁷、之、

南無釈迦尼仏 南無阿彌陀如来 南無観世音菩薩
 南無大勢至菩薩 南無三部一乘妙典法界衆生平等利益

法然上人傳記

法然上人傳記附一期物語

見聞書勢觀房

或時物語云、幼少登山、十七年且六十卷、十八年乞暇遁世、是偏絶名利望、一向為學佛法也。自爾以來四十年、習學天台一宗、粗得一宗大意、我性者、雖大卷書三反見之者、不聞于文義、分明也。雖然以三十年廿年功、不能知一宗大綱、然闕諸宗教相、聊知顯密諸教、八宗之外、加一仏心宗、且九宗、其中適有二先達者往而決之。面々蒙印可、当初醍醐有二論先達、往彼述所存、先達忽不言、既而入内取出文檣(楯カ)十余合云、於我法門、無可付屬之人、已達此法門、給悉奉付、稱美讚嘆、傍痛程也。進士入道阿性房同道聞之云々、又往藏俊僧都許、談法相宗法

門之時、藏俊云、非直人、恐大權化現歟、雖奉値(奉ト)普論主、不可過之覺程也、知惠深達事、言語道斷、我一期有思延(思ト)供養志云々、其後每年送供物、已果願望、凡每値先達、皆被稱嘆、惣吾期所(稱カ)來到聖教、乃至伝記目錄無不見、爰煩出離道、身心不安。抑惠心先德造往生要集、勸濁世末代道俗、就之欲尋出離之趣。先序云、往生極樂之教、濁世末代之目足也、道俗貴賤誰不歸哉。但顯密教法其文非一、事理業因其行多、利智精進之人未難、如予頑魯之者、豈是故依念仏一門、聊集經論要文、披之修之、易覺易行云々、序者略言述二部、與旨、此集已依念仏云事、顯然也、但念仏相貌未委者、入文採之。此集立三十門、第一第二第三門、是非行躰者、暫置之。其餘五門、是就念仏立之、第九諸行往生門、是任行者意、案一旦雖明之、更先懇勸丁寧、勸進、第十門、是問答料簡、又非行躰。就念仏五門、料簡之、第四是正修念仏也。以此為念仏體、第五是助念方法也、以念

仏、為_レ所助、以_レ此門、為_レ能助、故念仏、為_レ本意也。第六別時念仏也、長時、勤行不能、勇進者、限_レ日数、勤_レ上念仏也、更非_レ別時。第七是念仏利益也、為_レ勸_レ上念仏、勸_レ利益文、奉_レ之。第八是念仏誑扱也、本意在_レ念仏云事又顯然也。但付_レ正修念仏有_レ種々念仏。初心、観行不_レ堪_レ深奥者、教_レ二色相観、々々々中有_レ二別相観、有_レ総略観、有_レ雜畧観、有_レ極畧観、又有_レ称名、其中懇懇、勸進之言唯在_レ称名之段、於_レ五念門、雖_レ名_レ正修念仏、作願廻向是非_レ行体、礼拜讚嘆又不_レ如_レ観察、々々々中於_レ称名、丁寧_レ之為_レ本意、云事顯然也。但於_レ百即百生、行相_レ者、已_レ讓_レ道_レ善_レ導_レ積_レ委_レ不_レ述_レ之、是故往生要集、為_レ先達_レ而入_レ淨土門、闕_レ此宗奧旨、於_レ善導_レ一反見_レ之思、往生難、第三反度得_レ乱想、凡夫依_レ称名行、可_レ在_レ生之道理、但於_レ自身出離、已_レ思定畢、為_レ他人、雖_レ欲_レ弘_レ之、時機難_レ叶故、煩而眠夢中、紫雲大登覆_レ日本國、從_レ雲中、出_レ无量光、從_レ光中、百宝色、鳥飛散充滿、于時昇_レ高山、忽奉_レ生身善導、從_レ腰下者念色也、

從_レ腰上者如_レ常人、高僧云、汝雖_レ不_レ肖身、弘_レ專修念仏、故來_レ汝前、我是善導也云々、從_レ其後弘_レ此法、年々繁昌_レ、不_レ流布_レ之境也。或時物語云、從_レ顯真座主御許、遣_レ使者云、登山次必遂_レ見參、有_レ可_レ申承_レ之事、必令_レ音信_レ給、仍_レ到_レ坂本、申_レ此由_レ座主下令_レ對面、問云、今度何_レ解_レ脫生死、答云、如何様_レ不_レ可_レ過_レ御計。又云、突然也、但先達者若有_レ思定旨_レ者、示_レ給其体、為_レ自身_レ者聊有_レ思定旨、只早遂_レ往生極樂也。又云、依_レ順次往生、遂致_レ此母、如何_レ輒遂_レ往生_レ耶。答、成仏雖_レ難、往生易_レ得也。依_レ道_レ善_レ導_レ意_レ者、仰_レ仏願力、為_レ強緣、故凡夫生_レ淨土云々、其後更无_レ言說_レ而還、後座主御言云、法然房、雖_レ智惠深遠、聊有_レ偏執失_レ云人來語、此事、予云、於_レ不知之事_レ者、必起_レ疑心也。座主聞_レ此事、誠然云、我於_レ顯密教、雖_レ積_レ積古、併_レ為_レ名利、不_レ忘_レ淨土、故不_レ闕道_レ善_レ導_レ積、非_レ法然房者誰人如_レ此言、恥_レ此言、隱_レ居大原、百日日見_レ淨土、草疏_レ給、然後我已_レ見_レ立法門、

令_レ來臨_レ給_レ請_レ之云々。此時東大寺上人南无阿彌陀仏未_レ思_レ定_レ出_レ離_レ道_レ故告_レ此由_レ、即具_レ弟子三十余人而來、具_レ此衆_レ參_レ大原_レ源空_レ之方東大寺上人居流、座主御房方、大原上人居流述_レ淨土法門、座主一々領解談_レ義畢、座主發_レ一大願_レ給_レ。此寺立_レ五坊_レ相_レ統_レ一向專念行_レ稱名_レ之外更不_レ交_レ余行_レ其行一始已來于_レ今不_レ退轉_レ尋入_レ此門_レ後為_レ勸_レ妹尼御前_レ被_レ書_レ念仏勸進_レ之消息_レ流_レ布世間_レ顯_レ真消息_レ云是也。大仏上人發_レ一意乘_レ云、我國道俗跪_レ闍_レ魔官_レ之時、被_レ問_レ校名_レ者、其時為_レ令_レ唱_レ仏号_レ付_レ阿彌陀仏名_レ、我名即南无阿彌陀仏也云、我潮流_レ布阿彌陀仏名_レ事、自_レ此時_レ始也云々或時物語云、当世人迷_レ法門分際_レ云々輒可_レ解_レ脫生死_レ也。我師有_レ肥後阿闍梨云人_レ智惠深遠_レ人也。情願_レ自身分際_レ今度不_レ可_レ解_レ脫生死_レ、若此度改_レ生者隔生即忘_レ故定忘_レ仏法_レ歟、然受_レ長命報_レ待_レ慈尊_レ出世_レ大蛇是長寿者也。吾当_レ大蛇_レ但_レ若住_レ大海_レ者可_レ有_レ中天恐_レ依_レ之遠江国笠原庄内椀池云池、取_レ領家放文_レ願_レ住_レ

(内下有字脫)

此池_レ死期_レ乞_レ水入_レ掌中_レ死畢_レ。於_レ彼池_レ不_レ風吹_レ率_レ大浪自起_レ、排_レ上池_レ中塵_レ諸人作_レ奇特_レ注_レ此由_レ申_レ領家勘其_レ日比_レ当_レ彼阿闍梨逝去日時_レ有_レ智惠_レ故知_レ生死難_レ出_レ、有_レ道心_レ故願_レ值_レ仏世_レ然而不_レ知_レ淨土法門_レ故發_レ如_レ此意乘_レ。我其時尋_レ得_レ此法_レ者、不_レ願_レ信不信_レ指_レ授_レ此法門_レ於_レ当世_レ仏法_レ者、有_レ道心_レ者期_レ遠生_レ縁_レ無_レ道心_レ者併住_レ名利思_レ以_レ自身_レ輒言_レ可_レ出_レ生死_レ者、是知_レ機縁分際_レ故也

或時云、我立_レ淨土宗_レ意趣者、為_レ示_レ凡夫往生_レ也。若依_レ天台教相_レ者、雖_レ似_レ許_レ凡夫往生_レ判_レ淨土_レ至淺薄也。若依_レ法相教相_レ者、判_レ淨土_レ雖_レ甚深_レ全_レ不_レ許_レ凡夫往生_レ也。諸宗所談雖_レ異、惣_レ不_レ許_レ凡夫生_レ淨土_レ云事。故依_レ善導積義_レ與_レ淨土宗_レ時、即凡夫生_レ報土_レ云事頭也。爰人多_レ誹謗云、雖_レ不_レ立_レ宗義_レ可_レ勸_レ念仏往生_レ今立_レ宗義_レ事、唯_レ為_レ勝他_レ也云々若不_レ立_レ別宗_レ者、何願_レ凡夫生_レ報土_レ之義_レ哉。若人來言_レ念仏往生_レ者、是問_レ何教何宗何師意_レ者、非_レ天台_レ非_レ法相_レ非_レ

三論「非花敵」答「何宗何師意」乎。是故依「道綽善導」意立「淨土宗」是全非「勝他」也云々

或時上人有「瘧病」種々療治一切不_レ叶、于_レ時月輪禪定殿下大敬_レ之云、我因_レ給善導御影、於_レ上人前_レ供養之、

此由被_レ仰_レ遣安居僧都許_レ御返事云、聖覺同日同時瘧

病仕事候、雖_レ然為_レ御師匠報恩可_レ參勤仕、但早且

可_レ被_レ始_レ御仏事云々、自_レ辰時始_レ說法、未_レ時說法畢、

導師併_レ上人共瘧病落畢。又其說法大旨者、大師釈尊同_レ

衆生_レ時者恒受_レ病惱_レ給、況_レ凡夫血肉身、云何无_レ其憂、

雖_レ然淺智愚鈍衆生者不_レ願_レ此道理、定懷_レ不信之思、

歎。上人化導已稱_レ仏意、面遂_レ往生者千万々々、然者

諸仏菩薩諸天鬼神、争_レ不_レ歎_レ衆生、不信_レ四天大王可_レ守_レ

仏法_レ者、必可_レ慙_レ我大師上人、病惱_レ給也。善導御影、

前異香薫云々僧都云、故法印下_レ雨華_レ名、聖覺身此事

尤奇特云々世間、人大驚生_レ不思議思云々

或時云、我立_レ一向專念義、人多_レ誘云、縱_レ雖許_レ諸行往

生、全不_レ可_レ成_レ念仏往生障、何故強立_レ一向專念義、耶、

此大偏執義也。答、此難是不_レ知_レ此宗限故也。經已

云_レ一向專念无量壽仏、故釈云_レ一向專稱彌陀仏名、離_レ

釈私立_レ此義_レ者、誠_レ所_レ實難_レ去、欲_レ致_レ此難_レ者、先

可_レ謗_レ釈尊_レ次可_レ謗_レ善導、其過全非_レ我身上、当初依_レ

弟子過_レ有_レ被_レ流_レ讚岐國云事。其時對_レ一人弟子述_レ

一向專念義、西阿彌陀仏云弟子推參云、如_レ此御義

努々々不_レ可_レ有_レ事候、各不_レ可_レ令_レ申_レ御返事_レ給云々

上人云、汝不_レ見_レ經釈文哉、西阿彌陀仏云、經釈文、

雖_レ然存_レ世間譏嫌_レ許也。上人云、我雖_レ被_レ截_レ頸不_レ

可_レ不_レ云_レ此事云々御気色尤至誠也、奉_レ見人々流_レ涙

隨喜云々

或時自_レ鎮西_レ來修行者、奉_レ問_レ上人云、稱名之時、

係_レ心於仏相好_レ事、如何樣可_レ候。上人未_レ言說_レ前傍

弟子可_レ然云々。上人云、源空不_レ然、唯思_レ若我成仏

十方衆生稱我名号下至十声、若不_レ生者不_レ取正覺、彼仏

今現在世成仏、当知本誓重願不_レ虛、衆生稱念必得往生

許也。以_レ我分際_レ觀_レ仏相好_レ更非_レ如說觀_レ深_レ恐_レ本願_レ

口唱^{フル}名号^{ナウゴウ}唯是一事^{タカシニヒトコト}不^レ飯^ヲ令^レ行^ニ也。修行者^{シュウギョウシャ}悦^テ退出^ス畢^ニ。

或時^{シキトキ}人間^ニ云、積^ニ本願^ニ略^{スル}安心^ニ有^ニ何意^カ耶。上人^{ジョウジン}答云、知^ル衆生^{シュウジヤウ}称念^ニ必得^ニ往生^ニ自然^ニ具^{スル}三心^ニ也、為^レ顯^ス此理^ニ如^ク此積^也云々

或人間人、每日所作配^ニ六万十万等^ニ數遍^ニ而不法^ヲ与^ル、配^ニ二万三万^ニ如法^ト、何可^レ為^レ正耶。答云、凡夫習^ヒ難^ク配^ニ二万三万數遍^ニ不可^レ有^ニ如法義^ニ、唯不^レ如^ク數遍多^ニ、所詮^ヲ為^レ令^ニ心相統^ス也。但必定^ス數非^レ為^レ要^ト、只為^ニ常念^ニ也。不^レ定^ス數遍^ニ者懈怠^ニ因緣^{ナレバ}者勸^ニ數遍^ニ也云々

或時間云、智惠若可^レ為^ニ往生要事^ニ、正直蒙^レ仰^レ可^レ營^ニ修學^ニ、又以^テ但称名^ニ不可^レ有^ニ不足者^ニ可^レ存^ニ其旨^ニ、以^テ只今仰^ニ可^レ存^ニ如来金言^ニ候。答云、往生正業^ニ是称名^ト云事、釈文分明也。不^レ簡^ニ有智無智^ニ云事又顯然也、然者為^ニ往生者^ニ称名^ニ為^レ足、若欲^シ好^ク學問^ニ不^レ一向^ニ念仏^ヲ可^レ遂^ス往生^ニ、奉^テ值^ニ彌陀觀音勢^ニ至^ニ之時、何法門^カ不^レ違^フ、彼国莊嚴^ニ、昼夜朝暮^ニ說^ニ甚深法^ニ、可^レ期^ニ其時^ニ之見^レ仏聞法^ヲ也。不^レ知^ル念仏往生^ニ旨^ニ之程^ニ可^レ學^レ之、若知^レ之者求^ニ不^レ幾

之智惠^ニ不^レ嫌^ニ称名^ニ之暇^ト也云々

或時云、淨土人師雖^レ多、皆勸^テ菩提心^ニ觀察^ヲ為^レ正、唯善導一師許^テ无^ク菩提心^ニ之往生^ニ、以^テ觀察^ニ判^ス称名助業^ト、当世之人不^レ依^テ善導意^ニ輒^ニ不^レ得^ニ往生^ニ、覺道^ニ道緯^ニ懷感^ニ等皆雖^レ為^ニ相承^ニ人師^ト、於^テ義者未^レ必^ニ一准^ト、能^ク可^レ分^ニ別^ニ之、不^レ辨^ス此旨^ニ者於^テ往生難易^ニ難^ク存^ニ知^ル者也云々

或時間云、人多勸^テ持齋^ニ此条如何。答、僧尼作法^ニ尤可^レ然也、雖^レ然当世機^ニ已衰^ニ食已滅^ニ、以此分際^ニ一食者心偏^ニ思^ニ食事^ニ念^テ仏心不^レ靜、菩提心^ニ經云、食^ニ不^レ妨^ニ菩提心^ニ心能^レ妨^ニ菩提^ニ其上^ニ自身^ニ可^レ相計^ニ也云々

或時間云、於^テ往生業^ニ已思定畢^ニ。但一期身^ニ之有様云何可^レ存候。答云、僧作法^ニ在^ニ大小戒律^ニ、雖^レ然末法僧^ニ不^レ隨^フ之。源空縱禁^ニ之誰人隨^レ之。只所詮^ニ念仏相統^{スル}様可^レ相計^ニ也。為^ニ往生者^ニ念仏已^ニ為^ニ正業^ト、故守^ニ此旨^ニ可^レ相勵^ニ也、持齋^ニ全非^ニ正業^ト也

或時受^テ教^ヲ与^テ發心^ニ可^レ各別^ニ也。中比有^ニ一住山者^ト、内々學^テ淨土法門^ニ云、我已得^ニ此教^ト、雖^レ然未^レ發^ニ信

心、以何方法、建立信心云々。予教云、可令祈諸三宝、給。自爾以降、懺祈請之。或時參東大寺念誦、適當上棟木之日、情見之、忽信心開發。自非匠計畧者、彼大物云何居棟上、何況如來善巧不思議力哉。我有願生志、仏有引接願、尤可往生。一得此道理之後、再無疑心、彼人來語、此由經三二年之後、遂往生、旁現靈瑞、不可思議也。依學問、雖不發心、依見境界之緣、起信、唯懺懺係心常思惟、又可祈三宝也云々

或人問云、真言阿彌陀供養法、是可正行哉云何。答、不可然也。雖似一隨教其意不同也。真言教云、阿彌陀是己心、如來不可尋外、此教彌陀法藏比丘之成仏也。居西方、其意大異、彼成仏教也、此往生教也、更以不可同云々

或時云、法門善惡、在宗義也。學者雖多、分別宗義者極希也。吾朝、真言有二流、所謂東寺天台是也。其中天台、真言、其宗義非如東寺、所以者一山內兼學顯

密、一教、其中法花宗為本意、故天台與旨、是即真言也云、是故不出顯密分之真言也。東寺、真言於顯宗、敢无雙肩也。我闕諸宗教相、真言仏心、兩宗取諸宗、用為自宗教相、而廢諸宗、立自宗、諸宗中至宗義者无等、此兩宗也云々

私云、此言、下聊有所存歟。選撰集已、真言仏心、入聖道門、為淨土宗教相、以聖道門、對淨土門、而廢之給、其智惠深遠事、言語道斷者歟

或云、上人在生、時三井寺實首大式僧正公胤、作三卷書、破選撰集、名淨土決疑抄。其書曰、法花有、即在安樂文、觀經有、說誦大乘句、轉說法花生、極案、有何妨、然廢說誦大乘、唯付、屬念仏云々、是大錯也、取意上人見之、不見終、指置云、此僧正此程之人、不思、無下分際哉。聞立淨土宗義者、可思、定判、教權

實、者可思、廢權立實義覽、作聞立宗義、枉理、以法花、望入觀經往生、行中事、似忘宗義廢立。若能學道者、可謂觀經是兩前教也、彼教中不可攝法花。

今淨土宗意者、取觀經前後之諸大乘經、皆悉攝往生行內、何法花獨殘之哉。事新不可望入觀經內、普攝意者、教為對念仏(智カ)之也云々。使者學仏房還語、此由、僧正閉口不言說、彼僧正來說法之次、被語於前淨土決疑抄之由來、我今日臨此砌事、偏為憊悔此事也云々。聽聞道俗貴賤莫不隨喜、其後僧正同遂往生素懷畢、瑞相非奇特旁多云々(非下恐一之字脱)。或時云、源空參月輪禪定殿下之時、住山者一人參會、聊有憊故。問云、誠耶立淨土宗給。答云、然也。不敷其名。問云、何文付立之給耶。答云、就善導觀經疏付屬、又問、云何文付立之給耶。答云、就善導觀經疏付屬、釈立之也。又云、立宗義云程事、何唯依一文立之給耶。微咲不物言、還山於法地房法印前一語、此事、惣不及返答云。法印云、彼上人不物言者、処不足言故也、彼上人於我宗已為達者、剩且諸宗普習學、智恵甚深超過常人、故思不及返答不物言也、努力々々不可住僻見。上人聞此事云、彼法印殊親近奉談法門、故知智恵分涯如此云也。

殊於我法門者、相承于源空云事顯然也。或人問云、常存惡修善旨、念仏与、常思本願旨、念仏何勝哉。答、惡修善是雖諸仏通戒、當世我等悉違背、若不乘別意弘願者、難出生死者歟云々。或時云、汝有選擇集云文、知否、不知云、由、此文我作也。汝可見之、我存生之間、不可流布之由禁之故人々秘之、依之以成覺房本写之。当初上人御不例氣出來給、聊御平癒之時、從月輪禪定殿下、為御形身集要文、可給之由被仰、依之造此書、令進覽給。此書中、或云約淨土門諸行所比論也、或云淨土宗觀無量壽經意也云々。上人述此意云、此觀無量壽經、若依天台宗意、爾前教也、故成法花方便、若依法相宗意者、成演別時意、然依淨土宗意者、一切教行悉成念仏方便、故淨土宗觀無量壽經意也。又云、聖道門諸行、皆修四乘因、得四乘果、故不及比、校念仏。淨土門諸行者、是比校念仏之時、非彌陀、本願、光明不攝取之、釈尊不付屬、故云全非

比較也、然道綽善導宗義大異也、能々一々分別知之。
聖道淨土二門雖異行体は一也、義意可レ知云々

〔禪勝房への答〕

或時、遠江国蓮花寺住僧禪勝房參上人、奉レ問ニ種々之事、上人一々答レ之。

一問曰、世間有ニ難者云、八宗九宗外立ニ淨土宗、是自由也、如何可レ對ニ治此難ニ候。答云、立レ宗事者更非ニ仏説、付ニ自所レ學經論ニ覺ニ極其義ニ也。諸宗習皆以如レ此、今立ニ淨土宗事、付ニ淨土正依經ニ解ニ得往生極樂義ニ之先達立ニ宗名ニ也、不知ニ宗起者致ニ如レ此之難ニ也、非ニ難事ニ也

二問云、於ニ法花真言者不レ可レ入ニ雜行中ニ云、如何對ニ治此難ニ候。答云、恵心先德集ニ二代聖教ニ造ニ生要集ニ立ニ十門、其中第九門是往生諸業也。已ニ法花真言等諸大乘經被レ入ニ諸行、諸行与ニ雜行ニ言異其意同、今難者不レ可レ勝ニ恵心先德ニ歟。

三問云、付ニ余仏余經ニ結縁助成事、可レ成レ雜候歟。答、

我身乘ニ仏本願ニ之後、決定往生信起之上結縁他善事、全不レ可レ為ニ雜行、可レ成ニ往生助業ニ也。善導釈中、已隨ニ他善根ニ以ニ自他善根ニ廻ニ向淨土云々。以ニ此釈ニ可レ知也

四問云、極樂有ニ九品差別ニ事、可レ為ニ彌陀本願構歟。答云、極樂九品者非ニ彌陀本願、更无ニ四十八願中、是釈尊巧言也。若脫善人惡人生ニ一所者、惡業者可レ起ニ等慢心ニ故、令レ有ニ品位之差別。脱善人進ニ上品惡人下ニ下品也、急參可レ見云々

五問云、持戒者念仏數遍少与ニ破戒者念仏數遍多、往生後、淺深如何。上人指ニ所居盤ニ答云、就レ有レ盤論ニ破与ニ不破、全於レ无レ盤者、云何論ニ破不破哉、其様末法中、無持戒無ニ破戒ニ但有ニ名字比丘、伝教大師末法燈明記委明ニ此旨、其上不レ可ニ持戒破戒沙汰、為ニ如レ此之凡夫ニ所レ教本願者、急々可レ称ニ名字ニ也

六問云、念仏行者、毎日所作有ニ不レ絶声之人、又有ニ心念取レ數之人、何可レ為レ本候。答云、口唱心念悉名

号、何皆可成往生業、唯仏本願為稱名故、可出聲也。故經說令聲不絕具足十念、釈云稱我名号下至十声也、聞我耳之程為高声念仏、但不不知譏嫌而非可高声地体可思出聲也

七問云、日別念仏數遍入相續之程事可定幾候。答云、依善導釈者、万已上可為相續分、出觀念、雖二万返急申、虚不可過時節。設雖二万返可為一日一夜之所作、惣一食之間三度許唱之者、能相續者也。但衆生機根不同者、一准不可定之、若志深者自然相續事也

八問云、礼讚深心中、十声一声定得往生、乃至一念无有疑文。又疏中深心、念々不捨者、是名正定之業、云云何可分別候。答云、十声一声、釈是信念仏之様也、信取一念往生、行一形可助也。又一発心已後、釈可為本意也。

九問云、本願一念者、可通尋常機臨終機候歟。答云、一念願為不及一念之機也、不通尋常機者

不可有上尽一形之釈。此釈可得得意、必一念非為仏本願云事顯然也、已釈念々不捨者是名正定之業、彼仏願故、唯此釈意可云念々不捨者即順本願、但値本願、遲速不同者、發上尽一形下至一念、給也、故善導得念仏往生願也云々

十問云、自力他力申事、何様可得心候乎。答云、源空雖非可參殿上機量、自上召者二度參殿上。此非我可參之式、上御力也。何況阿彌陀仏御力、翻稱名願來迎事、有何不審、自身罪重、无智者、云何不可疑遂往生、若如此疑者、一切不知仏願者也。為度如此之罪人、所發之本願也、乍唱此名号、努力々々不可有疑心云々。十方衆生願中、有智无智、有罪无罪、善人惡人、持戒破戒、男子女人、乃至三宝滅尽之後、十歳衆生无漏。彼三宝滅尽之時、念仏衆生与當時行者比之、当世人如仏也。彼時、人壽十歳也、戒定惠三学不聞名云々、此等衆生乍知可預來迎、我身可被捨云事、云何可得心出哉。但

極楽不被_レ欣、念仏不被_レ信事行者可_レ成_二往生障_一、故云他力願云超世願也

十一問云、可_レ具_二至誠等三心_一、文三体如何樣可_レ得意候乎。答云、具_二三心_一、事无_二別様_一、阿彌陀仏本願、称念我名号者、必来迎誓給故、決定、深信可_レ被_二引接_一也、心念口称不倦已得_二往生之心地_一、而至_二最後_一、一念不退転者、自然具足三心也。在家者、共中、雖无_二如此分別_一、只念仏者知_レ生極楽、常念仏之聲、自然具三心、多遂_二往生_一也。此故一文不通者中神妙往生已上問答

一、三心料簡事

付_二疏第四_一仰云、先淨土惡雜善永以不_レ可_レ生知、是以玄義分、定即息慮以疑心、散即廢_レ惡以修善、廻_二此二行_一求_二願往生_一文。又散善義云、上輩上行上根人求_二生淨土_一、斷_二貪瞋_一文。然則今此至誠心、世所_レ嫌之虛仮行者、余善諸行也、三業精進雖勤、内貪瞋邪偽等、血毒雜故名_二雜毒之善_一、名_二雜毒之行_一、云_二往生不可_一也。

是以礼讃、專雜二行得失中、雜修失云、貪瞋諸見煩惱来、間斷、故廻_二此等雜行_一、直欲_レ生_二報仏淨土_一者、尤不可嫌、道理也。然以_二身口二業_一為_レ外、以_二意業_一為_レ内者、僻事也。既云_二雖起三業_一、豈除_二意業_一乎。又虚仮者、誑惑者云事僻事、既云_二苦励身心_一、又云_二日夜十二時急走急作如炙頭然者_一、文云何仮名之行人如_レ此哉、正是雜行者也。次所_二選取_一之真實者、本願功德即正行念仏也。是以玄義分云、言_二弘願_一者如_二大經說_一、一切善惡凡夫得_レ生者、莫_レ不_レ皆乘_二阿彌陀仏大願業力_一、為_レ増上縁也云々。是以今文正由_レ彼阿彌陀仏因中行_二菩薩行_一時、乃至一念一刹那三業所_レ修皆是真實心中作_二云々_一。由阿彌陀仏因中真實心中作_レ行惡不_レ雜之善故云_二真實_一也。其義以_レ何得_レ知、次釈凡所_レ施為趣求_一亦皆真實文此以_二真實_一施者、施_二何者_一云、深心二種釈第一罪惡生死凡夫云、施_二此衆生_一也。造惡之凡夫即可_レ由_二此真實_一之機也、云何得_レ知、第二釈阿彌陀仏四十八願撰_二受衆生_一等云々。如_レ此可_レ得_レ心也云々。深心中反修_二余善_一云事、

以二余善云事、以二余行二可二往生二非為答、難破言不レ可二指南二也。

五種、正行中、觀察門事、非三三定善、散心念仏行者、極染有様、相像、欣慕心也。廻向發願心、始、眞実深信心中、廻向云事、此三心中、回向云心也。去過(去過は過去)今生諸善者、三心已前功德、取返極染廻向云也。全三心後非云行二諸善二也云々。

白道事、雜行中、願往生心、白道為貪嗔水火二被レ損、以レ何得レ知。釈云、廻諸行業、直向西方也云々。諸行往生、願生心、白道聞。次專修正行、願生心、願力道、以レ何得レ知、仰蒙釈迦猪遺指南、西方又藉彌陀悲心、招喚、今信順二尊之意、不レ願水火二河、念々无遺、乘二彼願力之道、捨命已後得レ生彼国、文已下文是也。正行者、乘願力道、故、念不食嗔水火損害、是以譬喻中云、西岸上有レ人喚言、汝一心正念直來、我能護汝、衆不レ畏レ望於水火難云々。合喻中云、言西岸上有レ人喚者、即喻彌陀願意也云々。專修正行人、不レ可レ恐

貪嗔煩惱也。乘本願力白道、豈容被レ損、火焰水波、哉云々。

一、定善中自余衆行雖名是善、若比念仏者、全非二

比較也云事

諸行与念仏二比較之時云、念仏勝余行劣、彌諍論不レ絶事也。只念仏本願行也、諸善非本願行也云時、眞言法花等、甚深微妙行、全非二比較也、存此旨、可レ云二比較義二也。

一、无智者三心具云事

一向心念仏申、無疑往生、思、即三心具足也云々

私云、一向心者至誠心也、无疑者深信也、往生

思心廻向發願心也

一、余行しつべけれともせずと思、專修心也、余行目出けれども身かなはねばえせずと思は、修せねども雜行心也云々

一、造惡機念仏事

造惡身之故念仏申也、造惡料非念仏申、可得レ心也

云々

一、善惡機事

念仏申者、只生付、まゝにて申へし。善人乍^ニ善人、悪人乍^ニ悪人、本まゝにて申すへし。此入^ニ念仏^ニ之故、始持戒破戒なにくれと云べからず。只本^ニ体^ニありのまゝにて申へしと云々。付^レ之^ニ間^ニ云、本^ニ聖道門^ニ人持戒、焔淨土門^ニ之時捨^テ持戒持齋、修^ニ尊修念仏^ニ即成^ニ破戒^ニ如何。答、念仏行者欲^レ犯^ニ惡^ニ之時思、念仏申此罪滅すへし存犯^レ罪誠惡義也。但^ニ真言^ニ有^ニ調伏之法^ニ云事、兼^テ惡^ニ後調之法^ニ故也云事、其^ニ様犯^レ罪兼^テ惡^ニ本願之滅罪力^ニ全不^レ苦事也云々

一、惡機一人置此機往生 謂 道理なりけりと知程習たるを、淨土宗善學 云也。此宗惡人為^ニ手本^ニ善人^ニ撰也、聖道門善人為^ニ手本^ニ惡人^ニ撰也云々

一、行者生所依^ニ心行^ニ事

但念仏生^ニ極樂國^ニ、但余行生^ニ懈慢國^ニ也。然念仏余善兼行者亦有^レ一、念仏方心重雜^ニ余行^ニ生^ニ極樂^ニ、余行方

心重助^ニ念仏^ニ生^ニ懈慢^ニ云々

一、知^ニ我身具^ニ三心^ニ事

如^ニ大經說^ニ、歡喜踊躍心既發、可^レ知^ニ三心具^ニ一^ニ瑞也。歡喜者、往生決定思故喜心也。往生不定歎位未^レ發三心^ニ也云者也。不^レ發^ニ三心^ニ故无^ニ歡喜心^ニ、是則致^レ疑故歎也云々

一、一法撰^ニ三機^ニ事

第十八願云^ニ十方衆生^ニ无^レ漏^ニ十方^ニ之衆生^ニ、我願内込^ニ十方^ニ也。法照禪師云、彼仏因中立^ニ弘誓^ニ聞^レ名念^レ我惣來迎、不^レ簡^ニ貧窮將^ニ富貴^ニ、不^レ簡^ニ下智與^ニ高才^ニ、不^レ簡^ニ多聞持淨戒^ニ、不^レ簡^ニ破戒罪根深^ニ、但使^ニ廻心多念^レ仏、能令^レ瓦礫變成^レ金云々。此文我心身貧窮不^レ造^ニ功德^ニ、下知^ニ不^レ知^ニ法門^ニ、破戒雖^レ犯^ニ罪障^ニ、便廻心多念^レ仏、思云々

一、无智為^レ本事

凡聖道門極^ニ智慧^ニ離^ニ生死^ニ、淨土門還^ニ愚癡^ニ生^ニ極樂^ニ。所以趣^ニ聖道門^ニ之時、登^ニ智慧^ニ守^レ禁戒^ニ、淨^ニ心性^ニ以

為^ス宗。然入^ル淨土門^ニ之日不^レ恐^ニ智惠[、]不^レ護^ニ戒行[、]
不^レ調^ニ心器[、]只々無^ニ甲斐^一成[、]無智者^ニ恐^ニ本願[、]願^ニ往
生^一也云々。書^フ此狀御自筆[、]禪勝房田舎下京つとに取ら
せむとて給たりと云々。又云、源空念仏申一文不通男
女齊申、全年来修學智惠一分不^レ恐也。然かく知^ク又^ク
るしからぬそと云々

一、阿彌陀經一心不乱事

一心者、何事心一するぞと云、一向念仏申阿彌陀仏心、
我心一成也、如天台十疑論云、如世間慕人能受慕者
機念相投、必成其事、慕人者阿彌陀仏也、恣者我等也。
既心発^ニ一向阿彌陀[、]早仏心一成也。故云一心不乱、
上少善根福德因縁念うつさぬ也云々

一、阿彌陀經善男子善女人事

此執持名号^ニ身成故[、]云善男子善女人也。如下品
上生一生十惡凡夫最後一称時被讚[、]善男子。実本機五
濁惡世惡時衆生也、是以觀念法門[、]阿彌陀經今文云
若仏在世、若仏滅後、一切造罪凡夫云々可^ニ思合^一

三 心 料 簡 事

一、定機事

淨土宗弘於大原談論時、法門比牛角論事不^レ切、機
根比源空勝たりし也。聖道門法門雖^レ深今機不^レ叶、
淨土門似^レ淺今根易^レ叶云時、人皆承伏云々

一、前念命終後念即生事

前念後念者、此命尽後受^ニ生時分也。非^ニ行念[、]往生称
名、称名正覺業、然則称名命終、正定中終者也云々

一、阿彌陀經難信之法事

此罪惡凡夫依^ニ但称名[、]得^ニ往生云事、衆生不^レ信也。
依^ニ之釈迦諸仏切証誠云也云々

一、無^ニ戒定惠[、]者可^ニ念仏云事

此無^ニ下義也、縱雖^ニ戒定惠[、]三学全具、不^レ修^ニ本願念仏[、]
者不^レ可^レ得^ニ往生、雖^レ無^ニ戒定惠[、]一向称名必可^レ得^ニ往
生也云々

一、乃至一念即得往生事

我等非^ニ一念機[、]乃至至機也云々。又乃至十念如^レ此。吾
等非^ニ十念機[、]乃至至機也云々

積上尽一形下至十声一声等定得往生又如此吾等非下至十声機一上尽一形機也云々

一、以三五決定二往生云事

一彌陀本願決定也。二釈迦所説決定也。三諸仏証誠決定也。四善導教釈決定也。五吾等信心決定。以此義一故往生決定也云々

一、若存若亡事

乘ニ本願ニ云レ存、下ニ本願ニ云レ亡也、乘有ニ二義ニ下有ニ二義ニ謂造ニ惡業ニ之時發ニ道心ニ之時也。造罪時をるゝとは者、如レ此造レ惡身定可レ背レ仏意ニ思即をるゝ也、此云レ亡也。道心發時をるゝとは者、如レ此發ニ道心申念仏叶ニ仏意ニ思即をるゝにて有也、此云レ亡也。造レ罪時乘者、罪つくらるゝに付も、此本願なからましかば何為、乘ニ此本願ニ之故、雖造レ惡決定往生ベシと思乗也、此云レ存。又道心發ニ時乘者、如レ此之道心不レ始ニ于今ハ我過去生生發、然未レ離ニ生死ニ之故、知道心不レ救レ我、唯仏願力我助得。されば道心有

無あれ其不レ願唯、須稱ニ名号ニ生ニ淨土ニ思即乘也、此云レ存云々

一、平生臨終事

於ニ平生念仏ニ往生不定思、臨終念仏又以不定也。以ニ平生念仏ニ決定思、臨終又以決定也云々

一、一念信心事

取ニ信於一念ニ尽ニ行於一形ニ疑ニ一念往生ニ者、即多念皆疑念之念仏也云々。又云、一期終一念一人往生、況一生間積ニ多念功ニ豈不レ遂ニ一度往生ニ乎。毎ニ一念有ニ一人往生徳、何況多念無ニ往生ニ哉云々

一、本願成就事

念仏我所作也、往生仏所作也。往生仏御力セシメ給物、我心とかくせむと思自力也。唯須レ待ニ付ニ称名ニ之來迎

一、礼讃若能如上念々相統事

往生要集指ニ三心五念四修ニ云ニ如上ニ也。依レ之云レ之三心五念四修中明ニ正助ニ行ニ指レ之云ニ念々相統ニ也云々

一、无ニ外雜縁ニ得ニ正念ニ故事

此^ハ他^ハ大善^{ナル}我^ハ心^ニ无^ク怯弱^ニ云也。假令見^レ法勝寺^ノ九重塔^ノ我^ハ不^レ立^ニ一寸塔^ニ云^レ无^ク疑心^ニ。又^ハ拜^テ東大寺^ノ大仏^ヲ我^ハ不^レ造^ニ半寸^ノ仏^ニ云^レ無^ク卑下^ニ心。称名^ノ一念^ヲ得^ニ无上^ノ功德^ニ決定^シ可^レ往生^ス思定^ス云^レ外雜緣^ヲ得^テ正念^ヲ故^ト也。如此^ノ信者^ハ念仏^ヲ与^テ彌陀^ノ本願^ヲ相応^ニ与^テ釈迦^ノ无^ク相違^ニ隨^テ願^ヲ諸仏^ノ証誠^ニにてある也。雜行^ノ十三^ノ失^ヲ以^テ此義^ヲ可^レ得^レ心也

一、請用念仏事

趣^ニ他^ノ諸^ノ修^ニ念仏^ノ者^ハ有^テ三種^ノ利益^ニ。一^ハ自行^ノ勇猛^也、二^ハ助^ニ且^ニ那願^ノ念^ヲ、三^ハ為^テ能^ク衆^ノ一^ニ成^テ利益^ヲ也。功德^ハ有^テ二^ノ体^用、二^ハ体^{留^レレ}自用^ノ施^レ他^ニ。妙楽大師^云、以^テ善法^ヲ体^ニ不^レ可^レ与^レ人^ニ已^ル。此^ノ釈^ス願^ヲ以^テ此^ノ功德^ノ文^ノ之所^ト也、云々

一、善人尚^ハ以往^ニ生^ニ況^シ惡人^ハ乎事^{有^レ之}口^口伝^之

私云、彌陀本願^ハ以^テ自力^ヲ可^レ離^ニ生死^ヲ有^テ方便^ニ善人^ノ為^テを^レこし給^フ哀^ニ極^ニ重^ニ惡人^ハ無^ク他^ノ方便^ヲ整^テを^レこし給^{ヘリ}。然^ル善薩^ノ賢聖^ノ付^レ之^ノ求^ニ往生^ヲ、凡^ハ夫^ハ善人^ノ爛^テ此^ノ願^ヲ得^テ往生^ス、況^シ罪惡^ノ凡^ハ夫^ハ尤^モ可^レ憑^ニ此^ノ他^ノ力^ヲ云也。惡領^解不^レ可^レ

住^ニ邪見^ノ、譬如^レ云^ニ本^ハ為^テ凡^ハ夫^ハ兼^テ為^テ聖人^ノ、能^ク々^々可^レ得^レ心^々々々。初三日^ニ三夜^ヲ説^ク之余^ニ之、後一日^ニ説^ク之後^ニ二夜^ヲ一日^ニ説^ク之

別傳記云

法然上人、美作州人也、姓漆間氏也、本国之本師智鏡房^本上人十五歲、師云^レ非^ト直人^ニ欲^シ登山^ス。上人慈父云、我有^レ敵、登山^ノ之後^ニ聞^レ被^レ打^レ敵^ヲ可^レ訪^テ後世^ニ云々即十五歲^ニ登山^ス、黒谷慈眼房^ヲ為^テ師^ト出家^シ授戒^ス。然間慈父被^レ打^レ敵^ヲ畢、上人聞^ク此^ノ由^ニ師^ニ乞^フ暇^ヲ遁世^ス云。遁世^ノ之人无^ク智惡^ノ候^也、依^テ之^ノ始^ニ談義^ヲ於^テ三所^ニ、謂^フ支義一所、文句一所、止観一所也。毎日通^シ三所^ヲ、依^テ之^ノ三ヶ年^ヲ互^ニ十六卷^ヲ畢^ス。其後籠^テ居^ニ黒谷^ノ経藏^ニ、披^テ見^テ一切^ノ経^ヲ、与^テ師^ノ問答^ス。師時^ノ閉^テ口^ス、師即捧^テ二字^ヲ云、知者^ハ為^レ師^ト、今^ハ上人返^テ為^テ師^ト云々。又^ハ花嚴宗^ノ章疏^ヲ見^テ立^テ、醍醐^ノ有^テ花嚴宗^ノ先達^ノ行^ヲ決^シ之。彼師^云鏡賀法橋^云、我雖^レ相^ニ承^テ此宗^ノ、此程^ハ不^レ分明^ニ、依^テ上人^ノ開^テ処^々、不^レ審^ニ云々、依^テ之^ノ鏡賀奉^テ二字^ヲ、即受^テ梵網^ノ心地戒品^ヲ。或時自^ニ御室^ノ鏡賀^ノ許^テ花嚴真

言勝劣判可進云々依之鏡賀思念、仏智照覽有憚、真言為勝。爰上人、鏡賀許出來給、房主悦云、自御室有ニ如レ此之仰云々。上人問、何様判思念。房主云如レ上申、此上人存外次第也。源空所存一端申さむとて、花嚴宗勝、真言一事一々被レ顯、依レ之房主承伏、御室返答花嚴勝たる之由申畢。其後智鏡房自美作州上洛、上人奉ニ三字、但真言宗中河少將阿闍梨受レ之、法相法門見立蔽俊決レ之、蔽俊返ニ二字。已上四人師匠皆進ニ二字狀、竹林房法印淨賢奉レ值ニ上人ニ取ニ念仏信(此法意鏡不明)者一心。三井公胤於殿上ニ七ケ不審問ニ上人。上人老耄之後不見ニ聖教三十年、其後山僧筑前弟子、為レ令レ遂ニ堅義、參ニ上人、内々談ニ法門、堅者云、三十年不見ニ聖教被レ仰、各分明事、當時勤學越、非ニ直之人ニ御云々。公胤夢見云、源空本地身、大勢至菩薩、衆生教化故、來ニ此界一度々云々

御臨終日記

建曆元年十一月十七日、可ニ入洛之由賜ニ宣旨、藤中

納言光親奉也。同月廿日、入洛住東山大谷。同二年正月二日、老病之上、日来不食殊増、凡此二三年、耳をぼろに、心朦昧也。然而死期已近如レ昔耳目分明也、雖レ不レ語ニ余事、常談ニ往生事、高声念仏无レ絶。夜睡眠、時舌口鎮動、見人為ニ奇特之思。同三日戌時、上人語ニ弟子云、我本在天竺ニ交ニ声聞僧、常行ニ頭陀、其後來ニ本国ニ入ニ天台宗、又勸ニ念仏。弟子問云、可レ令レ往ニ生極樂哉。答云、我本在ニ極樂ニ之身可レ然。同十一日辰時、上人起居高声念仏、聞人流涙、告ニ弟子云、可ニ高声念仏、阿彌陀仏來給也、唱ニ此仏名者不レ虛云、歎ニ念仏功德事如レ昔。又觀音勢至菩薩聖衆在、前拜レ之乎否、弟子云、不レ奉レ拜、聞レ之彌勸ニ念仏給。其時可レ拜ニ本尊ニ之由奉レ勸、上人以指々レ空此外又有レ仏。即語云、此十余年奉レ拜ニ極樂莊嚴化仏菩薩、事是常也。又御手付ニ五色糸、可レ令レ執レ之給ニ之由勸者、如レ此事者是大様事也云、終不レ取。同廿日巳時、当ニ坊上ニ紫雲笈、其中有ニ四形雲、其色鮮如ニ画像、行レ道人

々於_レ処々一見_レ之。弟子云、此空紫雲已_レ變、御往生近給歟。上人云、哀事哉、為_レ令_レ一切衆生信_レ念_レ仏也云。

同日未時、殊開_レ眼仰_レ空、自_レ西方_レ東方見_レ送事五六返、

人皆奇_レ之奉_レ問_レ仏在_レ歟、然也答、同廿三日紫雲立_レ之

由令_レ風聞、同廿四日午時紫雲大_レ變、在_レ西山_レ炭燒十

余人見_レ之來而語、又從_レ広隆寺_レ下向_レ尼、於_レ路頭_レ來而

語。爰上人念_レ仏不退之上、自_レ廿三日_レ至_レ廿五日、殊

強盛高声念_レ仏事、或一時或二時、自_レ廿四日酉時_レ至_レ廿

廿五日、高声念_レ仏无_レ絶。弟子四五人番々助音、至_レ廿

五日午時、声漸細、高声時々相交、集_レ庭若干人々皆聞_レ

之。正臨終時、懸_レ慈覺大師九条袈裟、頭北面西、誦_レ

光明遍照十方世界念_レ仏衆生攝取不捨、如_レ眠命終。其

時午正中也。諸人競來拜_レ之、供如_レ盛市。或人七八年

之前有_レ感_レ夢有_レ人見_レ以外大雙紙、思_レ何文_レ而見_レ之、

注_レ諸人往生_レ文也。若有_レ法然上人往生注_レ處_レ遙_レ至_レ與

注也。有_レ光明遍照四句文、上人誦_レ此文_レ可_レ被_レ往生_レ

夢、覺不_レ語_レ上人、不_レ語_レ弟子_レ令_レ符_レ合此夢_レ、生_レ奇

特_レ思。上人往生之後以_レ消息_レ被_レ注送、恐_レ繁不_レ載。

旁有_レ不思議夢想等、可_レ足_レ云故略不_レ記。御入滅者滿

八十也

如來滅後一百年、有_レ阿育王不_レ信_レ仏法、國中人民歌_レ

仏遺典、大王云、仏有_レ何德_レ超_レ衆生、若有_レ值_レ仏者

往而可_レ尋云々大臣云、波斯匿王妹_レ比丘尼值_レ仏之人也。

其時大王請問、仏有_レ何殊異、比丘尼云、仏功德難_レ尽

粗說_レ二相、王聞_レ此功德_レ即歛_レ喜心開悟。上人入滅以

後及三十年、當世奉_レ值_レ上人之人其數雖_レ多、時代

若移者、於_レ在生之有_レ樣_レ定懷_レ朦昧歟、為_レ之今聊抄_レ

記見聞事

〔三昧發得記〕

又上人在生之時、發_レ得口稱三昧_レ常見_レ淨土依正、以

自筆_レ之、勢觀房伝_レ之。上人往生之後、明_レ邇僧都尋_レ

之、加_レ一見_レ流_レ隨喜淚、即被_レ送_レ本_レ處、當時聊雖_レ聞_レ

及此由、未_レ見_レ本者不_レ記_レ其旨。後得_レ彼記_レ寫_レ之。

御生年當_レ六十六_レ長承二年癸丑誕生、建久九年正月一日、從_レ山

桃、法橋教慶之許、帰後未時、恒例毎月七日念仏始_レ行_レ之。一日明相少_レ現_レ之、自然_レ甚明也。二日水想観自然成_レ就_レ之。惣念仏七ヶ日之内地想観之中瑠璃相少_レ分見_レ之、二月四日朝瑠璃地分明現_レ之云々。六日後夜瑠璃宮殿相現_レ之云々。七日朝重_レ又現_レ之。即似_レ宮殿類_レ其相現_レ之、惣水想地想宝樹宝池宮殿之五観、始自_レ正月一日_レ至_レ于二月七日_レ三十七ヶ日之間也。毎日七万反念仏不退勤_レ之、依_レ之此等相現也云々。始自_レ二月廿五日_レ明処開_レ目、自_レ眼根_レ仏出生、赤袋瑠璃壺見_レ之。其前閉_レ目見_レ之開_レ目失_レ之。二月廿八日依_レ病念仏延_レ之一万或_レ二万文。左眼_レ其後有_レ光明放_レ、又光端_レ赤、又眼_レ有_レ瑠璃、其眼如_レ瑠璃壺、瑠璃壺有_レ赤花、如_レ宝瓶。又日入後出見_レ四方、有_レ赤有_レ青宝樹、其高无_レ定。高下隨_レ意或四五丈或二三丈云々。八月一日如_レ本七万返始_レ之及_レ九月廿二日朝_レ地想分明現、周円七八段許也。其後廿三日後夜并朝又分明現_レ之云々。正治二年二月之比、地想等五観、行住坐臥隨_レ意任_レ意任運現_レ之。建仁九

年二月八日後夜聞_レ鳥舌_レ琴音聞、笛音等聞、其後隨_レ日自在聽_レ音。正月五日、三度勢至菩薩御後_レ丈六許御面現云々。西持仏堂勢至菩薩形、丈六面現、是則此菩薩既以_レ念仏法門_レ為_レ所証法門_レ故、今為_レ念仏音_レ示現、其相不_レ可_レ疑也。同廿六日、始_レ座処下四方一段許青瑠璃地也云々。於_レ今者、依_レ經并釈_レ往生無_レ疑。地観_レ文心得_レ無_レ疑故云々。可_レ思也。建仁二年二月廿一日、高島少將殿於_レ持仏堂_レ謁_レ之。其間如_レ例修_レ念仏、見_レ阿彌陀仏_レ之後、障子徹_レ通_レ仏面_レ而現。大如_レ長丈六_レ仏面_レ即忽_レ隠_レ給、廿八日午時也。元久三年正月四日、念仏之間、三尊現_レ大身_レ又五日如_レ前云々。此三昧發得之記、年来之間、勢観房秘藏不_レ披露。於_レ没後_レ不_レ函伝_レ得_レ之書畢

法然上人伝記依及覽雖為枝葉書之

義 演

(元也)

黒谷源空上人傳

安居院沙門釈 聖覚記

夫以、衆生の沈淪、無量無辺なれば、諸仏の済度も無数無窮なり。然といへども迷倒の我等罪業甚重にして過去若干の如来の教化にも、既にもて漏来り。現在十方の諸仏の利益にも、尙また障られたり。今末法濁世に人身を受たりといへども釈尊の遺法にあひ、幸に聖教を聞、聖教しなことに行門まぢまぢに別たり。若その要を言ば唯二種あり。一には聖道門、唯自力をはげまし、穢土にありて仏道を成就す。此土は悪縁これ多が故に十進て九は退す、是故に此門を難行道と名。二には浄土門、仰て仏願を信じ仏の名号を唱て浄土に往生し、速に菩提を証、彼国は善縁これ多が故に進のみありて退なし、是故に此門を易行道と名。然則聖道の一種は正像の兩時尙もて難行なり、何況末法をや。是

故に愚癡迷亂の凡夫、依行することあたはず、浄土の一法は末法濁世亦これ易行なり、何況上代をや。是故に五逆謗法の悪人、同往生を得。情此理を案ずれば宿習誠に憑し、何なる善因に催されてか我等此法に遇る。往生尤輒、仏果彌近し。欲喜身に余り、感涙忍難し。抑此事は誰人の恩徳ぞや、偏にこれ先師空上人の慈訓の化益なり、報しても猶余あり、謝しても亦飽ざる者なり。仍て報恩謝徳の為に勅化の始末を記す、唯慈恩を仰て淺言を恥ず、後見誹謗することなかれ、于時安貞元年丁亥極月上旬の候云爾

謹述三上人行狀二略有二十六大門一

- 一 託胎前後因縁門
- 二 出胎已後利益門
- 三 最初入学仏法門
- 四 離親登山学行門
- 五 受戒棄求閑居門
- 六 発心離山住谷門
- 七 披攬一代聖教門
- 八 信修念仏往生門
- 九 善導来現授教門
- 十 勅進念仏往生門
- 十一 殿下教命造書門
- 十二 頭光現顯本地門

十三 流罪州洛利益門 十四 臨終念仏往生門

十五 没後順縁利益門 十六 没後逆縁利益門

第一 託胎前後因縁門

釈迦大師入滅の後二千八十二歳の星霜を過て、大日本人王七十五代の帝崇徳院の御宇に、上人出世し給。美作の国久米の南条稻岡庄の人なり。父は条の押領使漆間時国、母は秦氏の女なり。夫婦年来孝子なきことを歎て仏に願、神に祈に祈請其功積り、願望已に満足して長承元年壬子七月上旬妻の夢に剃刀を飲と見て有身玉ふ。夢の事を時国に語、時国、善哉善哉仁者は男子を生べし、但剃刀を飲と夢見ことは此子成長して出家学道し、仏法の棟梁となり諸衆生を教化し、遁世出家せしめて仏道に引入べき瑞相なりとぞ申されける

第二 出胎已後利益門

長承二年癸丑四月七日の午の正中に上人誕生し給へり而に四五歳の後は坐するにかならず西に向、言初口遊にも南無阿彌陀仏と唱給ふ。親疎見者これを怪まずと

いふことなし。保延七年辛酉の春の比、時国夜討の為に

殺さる。其敵は伯耆権守源長明が息男明石の源内武者所定明なり。造意の由来は定明稻岡の庄を知行して多くの年月を送に、時国下掌の身として定明を軽ずるに依て遂に對面せざりき、其遺恨なりとぞ。其夜九歳の小童、小箭をもちて敵を射に、定明が目の間に立。此疵によりて頭れんことを思、即逐電してけり。見聞の上下譏悦せずといふことなし。時の人みな小童を呼で小箭児とぞ云ける。時国大事の疵を蒙りて今を最後の時九歳の子に向て遺言すらく、我死去の後、世の風儀に隨て敵を恨ることなかれ、これ偏に先世の報なり、若此讎を報んと欲はゞ、世生生五に害心を懷て、在所所に輪回絶ことなからん。生ずる者は皆死を悲む、愁憂更に限なし、我此疵を痛、人又何ぞ痛ざらん我此命を惜、人豈惜ざらんや。我が情をもて人の思を知べし。然則一向に專自他平等の濟度を祈り、怨瞋悉消て親疏同菩提に至らんことを願べしと、言をはりて心を

直し西に向て高声に念仏して、眠がごとく命終し給ひ
けり

第三 最初入学仏法門

永治元年七月十日改元 辛酉の歳末に当国菩提寺の院主観学
得業智鏡の弟子となる。師、経書を授るに性はなほだ
峻爽にして憶持して忘給はず

第四 離親登山学行門

観学、等侶に語て曰、此児の器量直人にはあらず、何
ぞ辺国に住しめん、はやく台嶺に登すべしと。而間此
小童を相具して母の所に行て此由を語、母聞て仁者を
ば無人の可留とぞ深思へば菩提寺に住つるさへ猶遠と
思なり、況登山せんをや、思よらざることなりといへ
ば、小童、昔本師釈迦尊は御年十九にして父の大王に
忍、密に王宮を出で終に成仏して、無量の衆生を濟度
し給へり。今自は生年十三、暇を悲母に申し、法山に
登り出家修学して父母の深恩を報じ、皆仏道に引導し
我も人も悟を開たてまつらん、返返歎給ことなかれ、

努力恨給はざれと申せば、母の曰、誠に生子に誦らる
ゝとは是なり。伝聞、往昔釈迦如来は御母の為に摩耶
經を説給へりと。今更に思合て有難ぞ侍る。然はあれ
ども凡夫の拙習、恩受の別忍難とて落涙千行なり。小
童、又伝聞參河守大江定基と云し人は出家学道し、老
母の許を蒙て大唐に渡り、彼国にして円通大師の号を
得本朝の名を上たり。それ仏も流転三界中恩愛不能斷
棄恩入無為眞実報恩者と説給ふ。自もはやく四明に登
すみやかに一乘を学て二親の菩提を訪なば、豈眞実の
報恩に非らんやと、条条に理をつくして申ければ、母
も理に屈して泣泣暇を許けり。観学得業も。此問答往
復を聞て歓喜心を迷し、落涙袂を潤て申演ん方もなく
語少にてぞ還ける。終に天養二年乙丑の春、比叡山西塔
の北谷持法房源光の所に送遣。其書狀に云、進上大聖
文殊の像一体と、源光此消息を見て文殊の像を尋るに
像は無して年十二三小児のみ來臨す。其時源光はやく
意得て文殊の像とは此児を讚ならんと、奇特の思をな

し、喜で一文を授るに輒十義を悟ければ、源光我はこれ短才淺智なり、碩学に属て、深理を窺しむべしとて功徳院肥後阿闍梨皇円の許に送遺す。彼阿闍梨は參河権守重亮の嫡男、少納言資隆朝臣の阿兄、隆寛律師の伯父、皇覚法橋の弟子にして當時の名匠、台嶺の賢哲なり。此児修学夜に積、才智日に登、万人異を歎、一山同怪めり

第五 受戒衆求閑居門

久安三年卯丁仲冬八日に出家受戒し給ぬ。時に年十五歳なり。有時師に白て言、出家受戒の本望已に足ぬ。今はすなはち居を山林に卜、跡を煙霞に暗さんと。師、これを聞て受難人身を受たり、苟に遁世せらるべし。又遇難仏法に遇り、何ぞ修学せざらんや。登山の験に六十巻を誦て後、本意を遂べしと諫ければ、われ閑居を欣索ことは名利の散乱を免れ、靜に經論章疏を学せん為なり。貴命はなはだ背難、修学もとも本意なりとて生年十六の春始て三大部を稟承し、螢雪の勤懈怠な

く繩錐の励勇猛にして数教睡眠を除、三箇年をへて六十巻の奥義を究、智恵明達にして併先哲に超給へり

第六 発心離山住谷門

久安六年庚午九月十二日生年十八歳にして始て黒谷の禪室に入り、慈眼房叡空上人をもて師とす。彼師は瑜伽祕密の真旨、玉を登、円頓大乘の戒律、鏡を懸。学解盡なく、道心最深して誠に師の位に足れり。上人の発心を聞て随喜し讚して仁者少年にして早出離の心を発せり、実に法爾法然の上人なれば法然をもて房号とすべし、実名は源空とす。これ源光の上の字と叡空の下の字とを拾取とぞ申されける。抑法弟聖覚、黒谷の為体を闕見に谷深して流淨、霹乱併去れり、路細して跡幽なり、閑居尤便あり、聖教蔵に満り。修学自勇、本尊光を耀す、行法何怠らん。遁世館居の上人の心を留給こと誠に其謂あり。上人此に住て、年月幾ならざるに真言、戒律、一身に兼学して血脈を叡空上人より稟承す

第七 披攬一代聖教門

一代の聖教飢を忍て終日披見し、諸宗の章疏、眠を除て通夜習学す。教文を多誦じ、義理を深悟る、それ此篇に就て条条多端なれども略して三五を記す。具に載に遍あらず

一、暗夜に聖教を見給に燈なしといへども室内明なり。白河の信空上人、此瑞相を拜見して身毛為堅、感涙頻にしてふかく上人の徳を貴べり

二、華嚴經披説の時、青蛇經机の上に蟠る、信空上人又これを見て怪み心中に怖畏す。其夜の夢に大竜かたちを現じて、我ばこれ華嚴經を守護する所の竜神なり、我を恐るゝ事なかれ、上人を守たてまつらん為に今顕現すといへり

三、法華三昧を修行し給時、大白象王道場に來現せり
四、有時上人予に語ての給く、我が性の分齊、何なる大卷の書なりとも三遍これを闕説ば文義を諳記す。本

朝將來の諸宗の聖教広披に、粗幽致を悟得て皆本宗の

印可を蒙りき

五、大納言律師寛雅に遇て三論宗を習給ひし時、かの宗の法門、自見の義を演給に、寛雅是を聞て遍身より汗を流し、言もいはず落涙して随喜の余に祕書を取出して、自宗の法門付属するに器量の人なし、貴客すでに此法門に達し給り、授与するに足りとて悉もて付属す

六、南都の贈僧正藏俊僧都に謁て法相宗を学せし時、上人自義を述給に、藏俊始には貴房の義勢細細に聞へ難と高声に談じけるが、後には舌を卷て信伏し、良久聴聞して掌を合て讚して曰、我等が相承の法門いまだかくのごとき深義をしらず。公は何さま直也人には非じ、恐はこれ仏陀の化現ならん、我願は初の間難の過を免ん為に一期の間供養したてまつらんと欲すとて、毎年に供物を送られける

第八 信修念仏往生門

上人生年九歳より四十三に至まで三十五年の学問は、こ

れ偏に出離の道にわづらひ、順次解脱の要路をしらん
 為なり。是に依て遍諸宗を學し給に師匠かへりて弟子
 となりぬ。有時上人、予に語ての給はく、法相三論天
 台華嚴真言仏心の諸大乘の宗、遍學し悉明るに入門は
 異なりといへども、皆仏性の一理を悟顯ことを明す、
 所詮は一致なり。法は深妙なりといへども我が機すべ
 て及難し。經典を披覽するに其智最愚なり。行法を修
 習するに其心翻て昧し。朝朝に定めて惡趣に沈んこと
 を恐怖す、夕夕に出離の縁の闕たることを悲歎す、忙
 忙たる恨には渡に船を失がごとし、朦朧たる憂には闇
 に道に迷がごとし。歎ながら如来の教法を習、悲なが
 ら人師の解釈を學、黒谷の報恩藏に入て、一切經を披
 見すること既に五遍に及ぬ。然れども猶いまだ出離の
 要法を悟得ず、愁情彌深、學意増盛なり。爰に善因急
 に熟し宿縁頓に顯れ、京師善導和尚勸化の八帖の聖書
 上人在世般舟讚末一を拜見するに末代造惡の凡夫、出離
 流布故云八帖讚一を拜見するに末代造惡の凡夫、出離
 生死の旨を輒定判し給へり。粗管見していまだ玄意を

眺めずといへども随喜身に余り、身毛為豎てとりわき
 見こと三遍、前後合て八遍なり。時に觀經散善義の、
 一心專念彌陀名身の文に至て善導の元意を得たり。歎
 喜の余に聞人なかりしかども予が如の下機の行法は、
 阿彌陀仏の法藏因位の昔かねて定置るゝをやと、高声
 に唱て感悅隨に徹り、落涙千行なりき。終に承安五年
 乙丑の春、齡四十三の時たちどころに余行をすて、一向
 專修念仏門に入て始て六万遍を唱。先師詞^{已上載}上人其後
 一万遍を加て、毎日七万遍の念仏の行者なり。有時上
 人悲歎しての給はく。当世諸方の道俗を見聞するに無
 道心の者は悉名利に住して修行すること能ざれば、生
 死を出るにあらず。道心智者は今度輒生死を出難と謂
 て遠來縁を期す。是故に順次の得脱はなはだ思を絶た
 り。信心の手を空して法財をとらず。所詮此は是或は
 浄土の縁なくして累世難行の機なり。或は浄土の縁あ
 れども、いまだ良師に遇ざるの人なり。かくの如の二
 機は浄土の易行易往なることをしらず、必永劫の行に

趣。爰をもて源空が初の師肥後阿闍梨皇田は、宏才博覧にして智慧深遠なりしかども、我が機分をはかるに今度生死を出難し、蛇身長命の果報を受けて彌勒の出世に値て得道せんと欲しけり、其願空からず、大蛇の身を受けて遠江国笠原の庄桜池水面一に住給。智慧あるが故に生死の離がたきことを知り、道心あるが故に慈尊に遇んことを願。然どもいまだ浄土の法門を知給はず誠に淺猿きことなり、此条源空が深歎なり。爾時われもし此法門を知得たらましかば信不信はいざしらず、勸化し申ん者を、哀なるかな、悲かな、出離の甚難ことを深悲で蛇身三熱の苦を受給ん

第九 善導米現授教門

有時上人、予に示て云、源空已に導和尙の釈に帰して其元意を得たり。其元意とは乱想の凡夫、但無観称名の一行に依て仏の本願をもて増上縁として、順次に極楽世界に往生するなり。但自身の往生は決定して疑なし。然に有縁の蒙昧を勸進して浄土に生ぜしめんと欲

ふ。所見の義勢是とやせん、非とやせん、凡智辨難しと、かく思惟して心に念じ勞ふ夜の夢中に、一人の僧あり。腰より上は墨染、裳より下は金色なる宝衣を著し給。予低頭合掌して問て云、大徳は誰人ぞや。靈僧答給はく、我はこれ善導なり。汝専修念仏を弘通せんと欲する料簡の義理、我が釈文に違はず、釈文は即是証を請て定畢ぬ、是故に兼ては又仏意に違はず、よろしく弘通すべし、化益もとも多からん。予伏請て曰、大徳然るべくば浄土の教門、面授口決して自も信じ他をも教しめ給へ。和尙示給はく、善哉善哉、菩薩大聖、浄土の教法願に随て授与せんと。仍て三部契經八軸の金典今九帖書中除二船舟讀敬て付属を蒙こと慇懃鄭重なりきと。上人の勸化、和尙の印可、快仏意に称へり。もつばら仰信すべし

第十 勸進念仏往生門

上人已に和尙の指授を蒙て黒谷の禪坊を出で吉水の菴室に住給しより以来、自行化他併念仏の勤なり。これ

によりて自造の選択集にも自行化他唯釋念仏、然間希問津者示以西方通津適尋行者誨以念仏別行、信之者多不信者少、当知浄土之教即時機而當行運也、念仏之行感永月而得昇降也といへり。上人の化導日にしたがひて盛に世に弘まり、道俗男女唯念仏をこととし、王城辺土尊称名を口遊とす

有時上人示て云、浄土宗の学者は先此旨を知べし。有縁の人の為には身命財を捨て、偏に浄土の法を説べし。自の往生の為には諸賢聖を離て専念仏の行を修すべし。此二事の外、余他の管なしとぞ仰られける。御遺言誠に貫故に此を記し末代に聞しむ

弟子聖覺畏りて尋申して云、当今末法は機解昧劣にして如来の教法に応ぜざれば、多は如法にあらず。聖道門の行人、殊更に虚仮を懐けり。かく存じ候は浄土教を敬重する執情の故にや、將又此義ありや。上人答給はく、末法の濁世には聖道の虚仮此条異論なし、先哲悉決判せり。浄土の学人も少虚ありといへども聖道の

多分虚仮なるには同からず。故に禅林寺の十因に云、夫以衆生無始輪回諸趣諸仏更出濟度無量、恨漏諸仏之利益、猶為生死之凡夫、適值積尊之遺法、蓋勵出離之聖行、一生空暮再會何日、真言止觀之行道幽易迷、三論法相之教理與難悟、不勇猛精進者何修之、不聰明利智者誰學之、朝家簡定賜其實、学徒競望增其欲、暗三密行恭登遍照之位、飭毀戒質誤居持律之職、實世間之假名智者之所厭也、今至念仏宗者、所行仏号不妨行住坐臥、所期極衆不簡道俗貴賤、衆生罪重一念能滅、彌陀願深十念往生、公家不賞自離名位之欲、檀那不祈亦無虚受之罪、況南北諸宗互諍權實之教、西方一家獨無方便之門といへり。是故に末法には聖道の行人自然に虚偽を懐、念仏の行者は多は至誠なり。浄土門の少虚は機の過にして行体の失にあらず。聖道門の多虚は行法の咎にして機の失にはあらず。斯乃難行にして機に応ぜざるが故なり。然れども万機みな偽を懐べきにあらず。

利智精進にして機法相応せばたやすく道を得べし、混乱すべからず。淨土宗の意は難を捨て、易を取、敢偏執すること勿れ。二道の縁を糺べし

治承四年庚子十二月二十八日平家南都をせめしとき、東大寺に火かゝりしかば皆悉炎焼す。其後造興の為に右大辨藤原行隆朝臣をもて大奉行に定られけるに、行隆敬て往昔より彼寺は一天四海の人民を勅て御建立ありけり。今又勅進の聖を付られんか、真力を仮ずんば俗補勇難と、勅答申し上げれば、尤先例に任べしとて、大勅進の聖の沙汰侍けるに、法然房源空こそ其器量に当れりと選定て、行隆朝臣を御使にて勅宜ありけるに上人申されけるは、源空が好所は念仏勅進の行なり、起立塔像の大勅進職は其器量にあらず、若勅進の職に応ぜば世務心を惱て念仏転退しなん。念仏永廢せば唯仏意に背のみにあらず、兼ては亦和尚の意に違ん。若念仏退転なからんと欲はゞ造興成難かるべし。造営功畢ずんば豈命旨に背ざらんや。且は聖見を慚、且は勅

命を恐。然ば則一旦の宣旨に随はんよりは永辭せんにはしかずとて固辭退申されけり。行隆朝臣その志の堅固なるをみて、ことの由を奏しければ、もし門徒の中に其器量の者あらば拳申べきよし重て仰下されけるに、よて、上人、醍醐の俊乘房重源を召て勅に応じて参内せしむ。法皇後白喜給ひて遂に大勅進の職に補せられけり。上人宣旨を辭して偏に称名の行を興し自刷剎他、唯専修念仏のみにして寸暇を惜給へり

有時鎮西の聖光房と聖覚と但兩人、上人の御前にて淨土の法門聽聞しける時、聖光房尋申て云、仰て本願を信じ実に往生を願ずれども妄念鎮に起て止難、散乱彌倍て靜ならず、此条如何が候や。上人答給はく、妄念余念をもちへりみず、散乱不淨をもちはず、唯口に名号を唱よ、もし能称名すれば仏名の徳として妄念自止、散乱自靜り、三業自調て願心自發なり。然れば願生の心の少にも南無阿彌陀仏、散乱の増時も南無阿彌陀仏、妄念の起時も南無阿彌陀仏、善心の起時も南無阿彌陀

仏、不浄の時も南無阿彌陀仏、清浄の時も南無阿彌陀
 仏、三心の闕たるにも南無阿彌陀仏、三心具するにも
 南無阿彌陀仏、三心現起するにも南無阿彌陀仏、三心
 成就するにも南無阿彌陀仏、これすなはち決定往生の
 方便なり、心腑に納て忘るゝことなかれ。聖覺尋て云、
 今の御義のごときは三心を闕といへども唯仏名を唱れ
 ば名号の徳として、三心發得して往生すべしと聞へ候。
 然に和尚、虚仮心の行人は昼夜十二時に急に走急に作
 こと頭然を私がごとく、勇猛に勤行すとも往生不可な
 りと定判し給へり、彼此の御義如何が合せんや。聖光
 房の云、予が所存も亦爾りと。上人答て云、此不審は
 今の所談にあらず。これは本より三心を具すれども歴
 縁対境の時に如法ならざる、其治方を述なり。所引の
 和尚の解釈は一向に三心の闕たるを嫌、意趣もとも巧
 なり。是故に難にあらずと仰ければ弟子等兩人ながら
 信仰の余に申し演ん詞もなく唯一同に阿と云き

ありて尋訪ありしに、法眼問たまはく、末代濁悪の我
 等凡夫罪業日に増て散乱癡惑なり、いかゞして今度生
 死を離るべきや。法印答て云、此条は賢愚皆もて一同
 なり。但此程法然上人に參謁して出離の要法を明たり。
 所謂彌陀他力念仏往生これなり。此法を得て後、年頃
 の積憤雲のごとく忽に散じ、当時の歓喜後に喩をとる
 なし。かくのごときの義は法然上人に遇給て委細に御
 尋あるべしと申けるに依て、有時法眼、上人に對面し
 ていまだ罪障を断ぜざる散乱の凡夫いかゞして極楽に
 順次往生すべきやと問給ふに、上人、成仏は甚難く往
 生は尤易し。善導和尚の御釈をもて三部經を拜見する
 に仏の本願力を強縁として乱想の凡夫、報仏の浄土に
 生ず。自力聖道の執情をもて他力浄土の眞門を疑こと
 なかれと答給ければ法眼言もの給ず、坊に帰て後、人
 に語たまはく、智恵第一の法然房も見立る所の義理に
 於ては大に僻めりと。上人伝聞て我が知ざることには
 謗をなすこと常の法なり、始て驚べきにあらず、尤も

顯眞法眼、大原に居住の時、恵光房永井法印、事の縁

道理なりとの給けるを法眼又かへりきゝ給て、自他の
両門に相語て云、倩案するに吾顯密の法門を兼學すと
いへども、偏に名利を志て解脱の爲にせず。法然房は
幼少の時より道心者にて出離生死の爲に一代の仏法を
學して見立る所の義なり、誠に錯あるべからず。然ば
則深先非を悔、後信を專にせんと欲すとて上人を竜禪
寺に請じ給ふ。此条風聞て淨教を聽聞せんが爲に道俗
雲のごとくに集來て勝林の室に余れり。前権少僧都明
遍三論法印權大僧都証真天台侍征已講貞慶解脱房法印
權大僧都智海天台此等の明匠を始として、諸宗の賢哲
其教をしらず。而間皆面々に富樓那の弁舌を震て重重
に難を致す、聳こと盛なる市のごとし。上人、鸚鵡の
轉が如に各各の疑難を会釈し給へば、諸宗の明匠舌を
卷て言ことなく、靜なること春の日に似たり。爾時上
人、聖道の諸宗は理ふかく解微にして匪を得ること甚
難し。此則世くだり人愚にして機教相違すれば其修行
に堪ず。ながく苦海に沈淪していまだ涅槃の岸に到ら

ず。淨土の一門は解し易く行し易ければ得脱最速なり。
愚鈍下智を捨ざれば庸學なほ勇あり。破戒重罪を簡ざ
れば惡人なほ生る。行住坐臥を別ざれば念念に常に行
じ、時処諸縁を論ぜざれば散乱猶唱ふ。其止惡をいへ
ば念時日の三懺悔を許せり。其修善をいへば一念十念
猶生ると効たり。和尚の積禮に唯有三念仏蒙光授蒙
当レ知本願最爲レ強、眞形光明遍法界蒙光觸者心
不退なりといへり。攝取不捨の光益は念念称名の徳を
さづく、尤これを信ずべし、尤これを勤べしと。一日
一夜詞を尽て淨教を講説し給へば、聽聞の道俗、或は
涙を流て仰信し、或は声を挙て歡喜す。其中に坊主法
眼顯真は雙眼より涙を流し、仏前に踊立て自香炉をと
り旋遶行道して、高声に念仏し給へば、南北の明匠三
百余人異口同音に念仏を修行すること三日三夜間断な
し。其外の參礼結縁の聽聞衆は其数を知らざりき。爾
しより以降、処処の道場悉仏名を唱、童子の戯にも併
念仏を口遊とす。其後法眼顯真は召出されて天台の座

主に補せらる、叡山の高僧常倫に超出せり。此等の明匠、皆上人に帰し給ふ。又座主顯真、十二人の時衆を定おきて不断念仏をおこなひ給ふ。一向に称名相續して余行をまじへず、其行を勤始めてより今に退転なし。有時上人、靈山寺にして三七日夜の不断念仏を勤行し給に燈なくして光明あり。第五の夜にいたりて行道するに勢至菩薩同列に交立給けり。時衆夢のごとく幽に此を拜して上人にこのよしを申に、爾ることも侍らんと答給ふ。謹で此瑞相を讃嘆するに且二種あり。一には觀念法門に、如三觀經下文、若有_レ人至心常念_二阿彌陀仏及_二菩薩、觀音勢至常与_二行人、作_二勝友知識_一隨逐影護し給ふといへり。勢至菩薩_二道場に影現し給こと深經釈に叶へり、誰か疑心を懐かんや。二には上人は勢至菩薩の垂迹なりと云こと世挙てこれを称す。爰に時衆等、念仏勇猛にして罪障微薄なれば彌信心をまし、勇猛に勤行せしめんが為に聖力加祐して、幽に本身を見し給ふ歟。然ば則若は在世にも若は滅後にも、上人

勸化の流を信じて酌ん人は自ら解脱の行を正して、兼ては他の誤を直べし、已に信ぜんものは彌信じ、いまだ信ぜざるものは早これを信すべし。後白川法皇、上人を勸請ありて菩薩戒を説しめ、兼ては往生要集を講ぜしめ給ふ時に、上人声を澄して夫往生極楽の教行は濁世末代の目足なり、道俗貴賤誰か帰せざらん者とよみあげ給へば、此一言に、万乘百官殿中簾中、今始めてきこしめさるゝやうに各心肝に染てたふとく皆感涙を流し給へり。太上法皇は聞法隨喜の余に、左京権大夫藤原隆信朝臣に勅して上人の眞影を写さしめて、蓮華王院の宝蔵に収られける。

東大寺の大勸進俊乘房重源上人、念仏信仰の余に一の意業を發て我が国の道俗、閻魔呵責の庭上に跪て其名字を答ん時、仏名を唱しめん為に阿彌陀仏名をつくべしとて、先我が名を南無阿彌陀仏とぞ号せられける。

我が朝の阿彌陀仏名は此より始れり

月輪の禪定殿下、宿縁に催されて信仰世に超、崇重此類なく西方をもて所期とし、念仏をもて正業とし給へり。此によりて建久九年^{戊午}の春、対馬左衛門尉重經を御使者として浄土の法門度々聴聞すといへども、公私念劇の間、即施即廢なり。庶幾は紙墨に載給て廢忘に備侍らんと仰せられければ、上人嚴命に遵て一軸の書を造り選択本願念仏集と名けて、高覽にそなへ給ふ。彼集の奥に云、不_レ凶蒙_レ仰辭謝無_レ地、仍今聊集_二念仏要文_一、剩述_二念仏要義_一、唯願_二命旨_一不_レ願_二不_レ敏_一、是則無慙無愧之甚也。庶幾一經_二高覽_一之後、埋_二于壁底_一莫_レ遺_二窓前_一、恐為_二不_レ令_二破法之者墮_二於惡道_一也と、極重の罪人は念仏を誹謗す。此書を秘することは、かの誹罪を止んが為なり。法事讚にも五濁増時多_二疑謗_一、道俗相嫌不_レ用_レ聞、見_レ有_二修行起_二瞋毒_一、方便破壊競生_レ怨、如_レ此生盲闇提聾、毀_二滅頓教_一永沈淪、超_二過大地微塵劫_一、未_レ可_レ得_レ離_二三途身_一、大衆同心皆懺_二悔所有破法罪因縁_一といへり。縦人有て念仏を誹謗すとも驚

べきにあらず、末法濁世の罪人の定れる習なり。來報に定て阿鼻地獄にあらん。信順の人は逆縁をもて彼罪人を濟はんと思べし

第十二 頭光現顯本地門

元久二年^{乙丑}四月一日に上人月輪殿にして念仏讚嘆の後退出し給ふ時、禪定殿下庭上に走降て五体を地に投じて上人を礼拜し、良久ありて起させ給て上人の頭の上に金光顯現して光映徹し、中に一の宝瓶ありつると仰せられて御涙にむせび給ふ。爾時始て上人は勢至菩薩の化身なりと知れり。愚禿、此篇を記するに身毛為堅て雙眼に涙を浮ぶ。恐しきかな、喜しきかな、濁世の我等衆生を導んが為に極楽の聖衆仮に凡夫を示し念仏の行を弘給ふ。仰で本地を討れば極楽世界の聖衆なり、往生浄土の勸念仏に憑あり。俯して垂迹を訪へば三昧発得の祖師なり。専修念仏の教往生に疑なし、本迹異なりといへども化導是一なり。念仏の衆生を攝して淨國に生ぜしむ。後世を恐ん聾は誰か此師に帰せざらん。

極楽を望の類は何ぞ上人の釈を信ぜざらん

第十三 流罪歸洛利益門

建永二年卯二月二十七日、吹毛の讒奏に依て還俗の姓名源元彦を賜り、遠流の宜旨をくだされければ、上人の勅化をあふぐ道俗貴賤皆なげきかなしみあへるに、上人は感悦の色ましまして、源空が遠流を蒙こと、辺土の化縁すでに熟せり、誠によるこぶ所なり。普万機を教化して念仏門に入しめんとぞ仰せられける。慈悲誓願の色、外に顯れて哀にたふとかりけり。月輪の禪定殿下、しばらく御離別の恨を息んが為に法性寺の小御堂に上人を一夜逗留たてまつられけり。上人の給はく会者定離は常のならひ今はじめたるにあらず、何ぞ深歎んや。宿縁空からずば同一蓮に坐せん、浄土の再会甚近にあり。今の別は暫の悲み、春の夜の夢のごとし、誹謗ともに縁として先に生て後を導ん。引撰縁はこれ浄土の楽なり、夫現生すら猶もて疎からず、同名号を唱へ、同一光明の中にありて同聖衆の護念を蒙る、

同法尤親し、愚に疎と思食べからず。南無阿彌陀仏と唱給へば住所は隔といへども源空に親しとす。源空も南無阿彌陀仏と唱たてまつるが故なり。念仏を緯とせざる人は肩を並膝をツク与といへども源空に疎かるべし。三業皆異なるが故なりとの給ば、禪定殿下悲哀心を迷し一言もの給はざりけり

同三月十六日に法性寺を立て配所に趣給ふ。配所は讃岐国小松の庄なり。斯乃門弟住遊安楽不善の咎とて吹毛の讒言によりて罪なき上人を流刑に行れけり。凡讒人の訴に依て左遷せられし賢哲、上代ためしなきにあらず。吾朝には役行者、菅丞相、異国には一行阿闍梨、白楽天、これ皆罪なくして謫所にすみ給へり。夫権化の善巧は凡智測難し。信謗縁を結び違順益を蒙る。上人配所に趣給へば帝都は闇に燈を失しがごとく、辺土は盲の明を得るに似たり。洛陽は悲を舎、田舎は喜を懐、悲ても念仏を唱、喜もて名号を称す。悲喜俱に善を勸、大権の化益誠に巧なりとたふとかりけり

同八月。勅免の宣旨をくだされしかどもなほ洛中の往還をゆるされざりしかば摂津国勝尾寺にしばらく住給す。すでに五箇年を経て華洛に還帰あるべきよしの宣旨を蒙り。樞中納言藤原光親卿の奉行として建暦元年辛未十二月十二日に帝都に帰り入て東山大谷淨室に居住し給ふ。

昔釈尊初利天にして九旬安居の説法終て後、上天の雲より来下し給ふ時、人天大会歎喜して供養したてまつりしがごとく今上人南海の波をさかのぼり給へば道俗男女各あらそひて供養をのべける。羣参のともがら一夜の中を算るに一千余人ときこえき。閑居の室なりといへども貴賤賢愚来集て法を聞こと猶盛なる市のごとし。利益倍多して信仰日に新なり

第十四 臨終念仏往生門

建暦二年壬申正月二日より上人老病やうやく興起して日頃不食の所勞、殊に増氣し給へり。凡此二三年は耳目彌朦昧なりしかども、往生の期ちがづきければ二根明利にして色を見声を聞給ふこと、もつぱら盛年にたが

はず、見聞の道俗、奇異の思をなす。唯高声の念仏相統勇猛にして其中間には更に余言をまじゑず。ひとへに淨土の事を談じ睡眠の時に猶直念仏を唱給へり。有時上人の給はく、高声に念仏を唱へよ、阿彌陀仏の来給へり。南無阿彌陀仏と唱者は一人としても極楽に往生せずといふ事なしとして念仏の功德をほめ給へり二十四日の酉時より二十五日の巳時に至までは高声念仏殊更に勇猛なり。五六人の僧、番を結て助音するに助音は苦むといへども暮齡病悩の御身敢て退屈し給はず。道俗随喜し、傍人驚讚せり、午時に至て念仏の御声やうやう幽にして高声に時時唱給ふ。午刻の正中に年来所持の慈覺大師の九条の袈裟を著し、頭北面西にして光明遍照十方世界、念仏衆生撰取不捨、南無阿彌陀仏と誦して睡がごとくして息絶たまひぬ。音声止て後、独念仏を唱給ふと覺しくて唇舌を動給へり。春秋八十に満たまふ

第十五 没後順縁利益門

上人の滅後に八方の遺弟各上人の正義を弘通して念仏世にひろまり称名国にみつ。信ぜざる者は少、信ずる者尤多し、これ上人権化の効、聖衆護念の力なり。或は上人勅化の仮名の書、大胡に示さる消息、二位殿に教化の返狀、此等の書に依て本願を信じ極楽に往生する、道俗貴賤年年にまさり日にさかりにして、念仏の繁昌眼前に証あり。爰に禅林寺の靜遍僧都是上人入滅の後、選撰集に帰して一向専修念仏者となれり。かの僧都是これ真言家の賢哲、小野広沢の兩流を相伝せる明匠なりけれども、浄土の法門有縁なるにや、彼宗を捨て、念仏門に帰し給へり、皆これ上人滅後の利益なり。現証を見聞して化導の遍ことを知れり

第十六 没後逆縁利益門

上人左遷の時、予に語給はく、貧道が流罪更に歎苦にあらず。念仏の興行洛陽にして年ひさし、今辺鄙に趣て田夫野人を教化せん事、年来の本意なり。但いたむところは源空が弘むる浄土の法門は造悪の凡夫出離

の要法なるが故に、念仏守護の神祇冥道、無道の障難をとがめ給はん歟。長存命せられば因果の空からざる事を思合べしとぞ仰られる。其後いくばくの歳月をへず、わづかに十箇年の間に、承久の逆乱おこりて天下の騒動にをよび、君は北海の島に行幸して臨岐院と号す、讒臣は戦場に討負て或は命を失ものもあり、まことに不思議にぞ侍る。又後堀川院の御宇安貞二年_{丁未}六月二十一日に比叡山の衆徒一同に僉讒すらく、専修念仏世に興行してより聖道の諸宗習学するに人なし、しかれば奏聞を経て善導勅化の念仏の行法を停廃せしむべし。所詮彼法門の興起は法然扇根本なれば大谷の墳墓を破却し、源空が死骸を取て鴨河に流すべきにさだめ奏し申ければ、つゝに勅許を蒙り、同二十二日に山門の使者大谷に下来て廟堂を破んとす。爾時京都の守護修理亮平時氏このことを洩聞て、右兵衛尉内藤五郎兵衛藤原盛政入道法名西仏を差遣す。盛政、子息一人を相具してまかりむかつて、縦公家の御許ありといふとも子細

を武家に触申すべきの所に、左右なく是を執行るゝの
条もとも狼藉なり、はなはだ自由なり。若制法にかゝ
はらずば武家の成敗にまかすべきよし頻に禁止すとい
へども山門の使敢て相隨ざりければ、盛政入道高声に
喚で云、医王山王も許給へ、念仏守護の四大王竜神
八部、護法天童に代りたてまつりて弟子西仏魔縁を排
侍らん。これ定て天魔波旬癡侶に託し、偽て山門三千
の使と号して、留難を致なるべし。豈凶きや、戦場の
筈をもて往生極楽の門出とし、凶悪の輩をもて臨終知
識の因縁となすべしとは、但汝等各南無阿彌陀仏と唱
よ、一一に壽命を断べし、頭には關東の御家人として
弓箭を搦て狼藉を防、冥には西土の念仏者として師恩
を報じて凶徒を罰すべしと、命を捨て、馳廻ければ、
面を向人なく蛛の子を散がごとく皆悉逃失けり。宇都
宮入道、俄なるに五六百騎を催具して馳參じ、廟堂を
守護したてまつりて哀なるかな、昔は名利の為に關東
の將軍に侍衛し、今は菩提の為に西方の上人を守護す

と云ければ、万人此詞を聞て皆哀を催けり。終に廟墳
を改て嵯峨の二尊院に隱置ぬ。路次の程は守護の兵二
千余騎前後にかこみてわたしたてまつりき。此則極重
悪人の信順の心なきをば逆縁を結ばしめ、来世に導給
はん善巧方便ならん、在世の慈訓、滅後の法流、順逆
の二縁、利益まことに広し、具に記すにあたはず、各
見聞に仕るのみ

上人入滅時、弟子生年四十六歳、數年積功親承淨教了

黒谷源空上人傳終

法然上人秘傳 上

上人の親父は美作国の庁官漆間の朝臣時国なり。母は
秦の氏の女なり。時国いまだ一人の孝子なし。これを
なげきて婦夫ともにかたりあはせていはく、日本国は
これ神国なり。天照大神国主とおはしまして、御末あ
まつこやねのみこと、朝のまつりごとをつかさどりた
まひしよりこのかた、衆生の願望をみてたまふこと、
順流のごとし。されば勝尾の勝如聖人、横河の源信僧
都みなこれ母のいのりによりてまふけたまへる鐘愛の
孝子なり。われらもかの悲願にもるべきにあらず。当
国岩間の観音に祈請まふさんとて参ところに、いづく
よりかきたりけん、白狗いできたりて、時国の左の足
をねぶりける。あやしむところに、時国のいとこに左
藤兵衛尉といふおとこ、たちよりてこれをみるに、生
子有聖無煩惱といふ七字なり。この文のこゝろは、生

じたらん児清僧にしろく／＼の煩惱あるべからずと
いふ文なり。これ上人の生前の瑞相なり。時国不思議
なることかな、いかさまにも門出よしとおもひて、夫
妻ともに参籠して、信心をいたし、七日祈請するに、
しるしなし。二七日に満ずる夜、観音しめしてのたま
はく、なんぢら先生の宿業をしらずして、よこさまに
みづからをせむることいわれなし。あたふべき子また
くはんべらず。なむぢら先生に白鷺にむまれて、筑前
の国三笠のこをり赤池といふ池につねにすみて、よろ
づの魚虫の所生の子を食噉せしこと一万五千の生類な
り。そのむくひによりて、たちまちに地獄におつべか
りしに、そのころかの国に利生聖人として、常行念仏の
僧の往生しはんべりしを、茶毗せし時に、汝らとひと
をるとてその茶毗のけぶりにあたりける結縁によりて
うけがたき人身をうけたりとはいへども、今生に生ず
べき子だねさらにはんべらず。しかりといへども、二
七日のせい／＼をいかゞむなしくなさんや、なんぢこ

れをのむべしとて三寸のかみそりを眉間よりとりい
して時国の妻女にあたへたまふ。たまはりてすなはち
のむとおもひて、ゆめさめおどろきて、時国にこれ
かたる。ゆめあわせにいはいく、いかさまにも懐妊すべ
し。その子男子にしてたゞ人にあるべからず。権化の
再誕として一朝の戒師となるべしとぞのたまひける。

この夢は長承元年^{壬子}十二月七日の夜半也。よのつねに
は懐胎して九の月、日数二百七十五日にこそ生ずるこ
となれども、この上人は母をくるしめたてまつらじと
や、おぼしめされけん、五月とまふす長承二年^{己癸}四月
七日の午刻に、おぼえずして産生したまふ。ときの人
この児を生安子とぞなづけ、やすく生まれたまへりと
いふこゝろなり。時国のたまはく、すぎにし整夢を案
ずるにこの児たゞ人にあらず。わたくしに名をつくべ
からず。貴とからん僧を請じて、名をばつけはんべら
んとのたまひて、貴僧を請じて乳母に児をいだけせて
僧にぞみせたてまつりける。僧この児をよく見たまふ

上

に、頭のくぼくして、かどあり。まなこ黄にして、ひ
かりあり。これすなはち深智有頂の勝相なりとて、あ
やしむところに、そらに五色の幡二流とびきたり、宿
所のうゑにひるがへること半時ばかりなり。これをみ
る人みな不思議なりとぞあやしむ。時国も僧もおどろ
きこれを御覧す。僧のたまはく、昔八幡大菩薩の御誕
生の時にこそ、加様に幡はふりたりけるとはまふしつ
たへはんべれ。かの大菩薩の本地阿彌陀仏にておはし
ます。されば極楽世界の教主衆生済度のために権化の
再誕なり。彼仏の本誓悲願口称名号をむねとして正覚
をなりたまふ。さればこの名号をかたどり (脱髮)
やゝはるかにありて、おきあがりてこれほどにおこな
ひたまひけるに、いまゝでとひたまはざりけるよ、あ
さましき。しばのいほりのすまひをのがれたまへとお
もひて、このゆみにてうちたてまつりしかひまし／＼
て、高貴淨行の智者となりたまひけるうれしさよと、
いひもあえずこえもおしまさずなきける。僧正もまこと

八〇九

にこのゆみにて、うたれけるしるしなり。このゆみこそ大恩の善知識なれとて、三本の率都婆につくりたまひて壇の片原にたて行法のときには、まづこれを礼したまひけるとかや。かの慈仁僧正も十三にて登山したまひけり。文殊丸も十三にて登山したまへばおもひあはせらるゝなり。よく学問して僧正のごとくなるべしと、母かきくどきのたまへば、文殊御前よにもうれしげなる躰にてさうけたまはりさふらふと領掌せられけり。かの末武はこの世にはんべれば、子息の僧正にもふたゝびたづねあひけるなり。汝が父の時国はこの世になきひとなればたれかはたづねとうべき。むかしよりのかの叡山には女人のかようことなし。みづから女性の身なれば、こひさにおもへば死ぬともたやすくたづねゆくことあるまじ。かまへてとくゝだりたまへよ。日もたけ時もうつる。はや／＼とて母かへりたまへば文殊御前あはれ身にそみてこゝろにかゝりたまひければ、しのびのなみだをながし、ゆきかねたまひけり。

はゝもたちかへり／＼児のうしろかげのみゆるほどはみおくりたまひけるとかや。夜をかさね日かずつもりけるほどに、かの児のおもかげわするゝことなかりけるに、ときくにかたみにはほとけの御名をとゞめおくとかきおきたまひしことのはもおもひいでられ、文殊御前登山したまひてはひとみな厭穢欣浄のこゝろねんごろにして、つるに往生の素懷をとげたまひけり、あはれなりしことゝもなり

法然上人秘傳 下

久安三年卯二月十三日に、つくりみちにて、文殊御前ときの関白月輪殿の御出にあひたてまつり、かたはらなる小河にうちよりたまひけるを、御車よりいかなる小児ぞと御たづねありければ、児のをくりにはんべりける。僧、美作の国より学問のために登山しはんべるよしまふしければ、御くるまかけはづさせたまひちか

くめして、御覽じて、よく／＼學問せらるべし。學匠
になりたまはゞ、師匠にたのみたまふべきよし、ねん
ごろに御約束ありけり。いなかわらはに對してこれま
での御礼はこゝろへぬことかなと、供奉の人々はおも
ひり。児の目のうちにひかりのはんべりけるを殿下御
覽じてたゞひとにあらざとおぼしめすゆへに、この礼
をぞなしたてまつりたまひける。文殊御前は延曆寺の
西塔北谷法持坊源光法師の坊へのぼりたまふ。觀覺得
業の狀にいはいはく、進上す大聖文殊の像一躰とかけり。

源光これをあひたづぬるに、文殊の像にあらざ、少童
の來臨をみて、先日ゆめに文殊を拜すとみはんべる
に、いまの消息に符合せり。いかさまこの児の器量を
感ずることばなりとこゝろへて、うれしくぞおもひけ
る。源光學するところの書をさづくるに、とゞこをり
なく學しきはめたまひぬ。源光この児にをしへはんべ
るべき書つきぬ。すべからく碩學につけて円宗の奥義
をきはめさすべしとて、おなじき年の四月八日に功德

院の阿闍梨光円の坊へおくる。阿闍梨手をうち、さん
ぬる夜のゆめに、満月この室にいとみはんべりつる
に、この児性俊なり。たゞ人にあらざといひて、法門
の伝受せしむるに、とゞこをりなし。かの阿闍梨は粟
田口の関白四代の後胤、三河守重兼の嫡男少納言助方
の朝臣の兄隆寛律師の伯父光学法橋の弟子、ときにと
りて名匠なり。おなじき年の仲冬に、十五歳にて出家
受戒しおはりぬ。やがて叡空の坊に入來す。叡空この
小僧をみて、法然の道理はんべりとて、すなはち法然
の坊号として実名は源空とぞよばれける。これははじめの師の源光のはじめの字と、のちの師の叡空ののち
の字とをとりあはせて、源空とぞつけられける。聖人
行年四十三にて黒谷の經藏をひらき、諸經論を一々に
披見して聖道淨土の要義をくはしく料簡して聖道門を
さしおき、淨土門にいりて出離出死の旨趣を覺悟して
順次往生のおもひ治定して利他のために諸國修行のこ
ゝろざしありて、おぼしめしたちける。まづわが師匠

達を浄土門の易行道へすゝめられたまんとて、法相宗の師匠藏俊僧正の坊にわたりたまひて、源空このほど黒谷の經藏をひらきて披見つかまつりさふらふ。なかに浄土宗の章疏大唐の善導和尚の書籍をくわしくみるもひさだめて、一向専念の但念仏者にこそ成てさふらへとのたまひければ、藏俊これをきゝ、しばらくものものたまはず。半時ばかりありてつまはじきをして、あなむさんの

(脱文)

に帰したまふ。かの一切経はのちに勝尾寺に聖人施入したまふ。その後はひとへに一向称名行をこたらず、もはら念仏の一行をすゝめ、つるに念仏三昧發得したまふ。あるとき聖人つま戸をひらきていでたまふに、夜半なりといへども夜半にはあらずして日中にぞみへける。これをあやしめよくみたまふに、そらに紫雲たなびき地には極楽の莊嚴あらはれて、そのなかに高僧一人たちたまふ。半身よりかみはすみぞめのころも、

半身よりしもは金色なり、かの僧聖人につげてのたまはく、汝不肖の身也といへども専修念仏を勸進することともすぐれたり。われその証のためにきたる。大唐の善導とはみづからなりとしめたまふ。聖人随喜し問ていはく、經論の明文を眼前にそなふといへども、五濁雜亂の衆生鈍根無智の凡夫阿彌陀仏の誓願をたのみ、念仏して往生すといふ説まことにうたがひなしやいさゝか不審なり。かの阿彌陀仏の不取正覺誓願成就して今現在に成仏したまへり。まさにしるべし、本誓悲願むなしからず、衆生称念すればかならず往生すること決定なり。このうへはうたがひあらんやと云云。聖人六十六の三昧發得これなり。たゞ口受して筆点にのすることあるべからず。これ秘藏する伝と云云。筑紫の豊後の国麻合の郡に権太吉則といふ俗、在京の時聖人の室にまひりて、浄土の法門聴聞してすなわち發心して決定往生の安心をとまふすに、聖人のたまはく、浄土の法門に別の義なし。阿彌陀仏の本願にもし

われ成仏せんに、十方の衆生わが名号を称せんこと、もし十声にいたるまで、もしむまれば正覚ならじとちかひ、いま現に成仏したまへり。かの誓願をたのみて一念の疑心なく、つねに称念せば往生決定なるべしと、おほよそ極悪最下の凡夫のために極善最上の法を釈迦如来慈悲をもてときあたへたまふぞとこゝろ、えて時処諸縁をきはらず、行住

(脱文)

方恒沙の諸仏の一大事とときたまへる念仏をいるがせにしたまふにこそ。たゞし往生せんところざしたまふか、また学問せんとおもひたまふか、学問のこゝろざしならば南都北嶺のかたに学匠あまたはんべれば、それにて学したまふべし。また往生ののぞみならば、一文不知の入道なりともいそぎ下向して、光明房とともに念仏をまふして順次の往生をとげらるべし。おほよそ阿彌陀如来法蔵比丘のむかし平等の慈悲にもよほされて、一切善悪の凡夫を平等に往生せさせんとおぼしめし、五却思惟のあんをめぐらして、おこしたまへ

下

る念仏往生の本願なれば、信心をいたして、本誓をたのみ、一念もうたがふことなく、つねに念仏すれば、上一形をつくし、下十声等にいたるまで、決定往生するものなり。されば三輩往生のなかに、機の上中下に對して諸行をとくといへども、一向専念無世壽仏とときたまへり。念仏往生の本願といひ、三輩のなかの一向専念といひ、釈迦彌陀二尊の本意、しかしながら、専称名号なり。かるがゆへに善導和尚のたまはく、上來雖説定散兩門之益望仏本願意在衆生一向専称彌陀仏名と。この文のこゝろは、かみよりこのかた、定散兩門の益をとくといへども、仏の本願のこゝろにのぞむれば、衆生をして、一向にもはら彌陀仏の御名を称するにありと釈したまふも、一向専称なり。ゆめ／＼うたがふべからずとのたまへば、頭智房先非後悔せられて、なみだをながしたものとをしぼり、すなわち下向して光明房ともるともに称名念仏無間なり。仏道修行の怨敵は疑心なりけり。またもや疑心をおこさまじと

八一三

こゝろうくおもひて、光明厨のあからさまにたちいで
 たまひけるひまをうかどひて、かみそりをとり、念仏
 数遍となへてはらをきり、命終しおはりぬ。ときにあ
 たりて紫雲そらにおほひ、音楽地にひゞき、異香室に
 薫じて光明てらし、化仏菩薩あらはれて、こゝろもこ
 とばもおよばれず。釈尊因位のむかしこそ法のために
 身命をすてたまひけれ。かれは菩薩の修行、これは凡
 愚の往生、末代なりといへども生死をいとひ、菩提を
 もとむるこゝろざしふかければ、身命をすてはんべり
 けるにこそ。これひとへに聖人勸化の不可思議なるゆ
 へなり。されば聖人をば善導の来化ともいひ、あるひ
 は勢至の化身ともいひあるひは彌陀の応現ともいふ。
 まことにたゞ人におはしませず。かるがゆへに在世の
 むかしより歿後のいまにいたるまで化導のさかりなる
 こと、聖人の徳業にしくはなし。あふぐべし、信ずる
 べし

正源明義抄 卷第一

第一 時国先祖の事

夫おもんみれば、世を利し機をかゞみ益を施すとへをみるに、日月四州の照光を廻したまふににたり。しかれば須彌のみねの鶏は可見路となく、くらきやみち暗てやうやく道みへぬべしといへり。仏教も又かくのごとし。正法千年のときは印土さかりに、像法のはじめ漢土につたへ、おなじき末に本朝にいたる。はじめは仁王三十代欽明天王の第四の御子用明天王第三の王子聖徳太子我朝の仏法開闢したまひしよりこのかた、仏法流布の国となりて法水あまねくながれて天日月の三州をうるをす。しかればすなはち如来滅後二千八十四年人王七十五代崇徳院の御宇にあひあたりて一人の聖人おはします。法然上人と申したてまつる。粗かの聖人の由来をかんがへたてまつれば、所生の国は美作

久米の南条稻岳の北の庄の人なり。父は庁官仮名は左衛門の亟漆間の時国母は秦氏の人なり。抑親父時国の先祖をたづぬれば右大臣元光より六代の子孫式部大夫元俊、陽明院にして内の蔵人の頭兼高を殺害せし罪科によりて美作の国へ配流せらる。爰に当国の庁官神護の大夫漆間の元国一人の女子を持、かの婿として男子をまふくる、重国と号す。その子に親国とその嫡子に時国と名乗て外祖の家督をつぐ。かの時国の先祖は流人として所帯なしといへとも財宝乏しからず、眷属室にみちて名字をしらず。しかりといへども歳すでに三十にあまるまで一人の子なし。あるとき時国の氏の女にあひかたりていはく、我一人の子なし一期つきてのち後世をとふてあさせんものなし、またその跡をつくべきものたへなんことのかなしきよといふければ、氏の女みづからもなげき、この事にて候。しからばいかならん遊君遊女をもち説て男女につけて君達をもちふけたまへ、みづから母乳してそだてたてまつらんと

いへば、時国はいはく、それはしかりといへどもおなじくは汝か腹にまふけてこそ汝ど時国と二人のなかに生見けれどいへば、氏の女はいはく、さらば昔よりいまにいたるまで仏神に祈ことの叶へばこそ、ものかたりにも伝らぬ。勝尾の勝如上人横河の恵心の僧都みなこれ母のいのりにてまふけたまへる鐘愛の子ときけば、われその悲願にもるべきにあらずとて、夫婦こゝろをひとつにして祈請すべきと云々

第二 菩提寺参詣の事

同じ国菩提寺といふ山寺あり、かの寺は救世観音の靈地なり、かの寺にまふで七日の光陰をむすび信心ふたこゝろなく丹精を抜て祈請申す。利生の媒ち方便の使化度の導師たるべきしるしにやありけん、七日に満する夜半に氏の女夢想をかふむる、五更にゆめさめて時国をおとろかしていはく、自たゞしき夢想を蒙りてはべれ。齡暮年に蘭たる老僧の香帳のよそほひ朗にあらはれ、慈悲を面てにそなへたまへるが、嬰珞の衣を

著し威儀たゞしく丹果の脣をひらき加雪のはぐきをあらはして告たまはく、汝子を乞これをあたへんとて、眉間よりおほきなる剃刀をとりいたしこれを飲、子はきたるべしとのたまへば氏の女ゆめこゝろに女人の身の中は垢穢なり。かほどたつとき剃刀をいかでかたまはらん、そのうへやいばとて利物なり。かつふはおそろしとまふせば、僧重てのたまはく、まことに子の所望ならばうけてのめと云々。ときにみづから左右なく口をひらき飲とみれば夢さめおはんぬとかたる。時国もたゞいま満月のあきらかなるをいだきとるとみたり。いづれもく身のために過分におほへはんべり。そのゆへは淨飯王の後は七月十五日夜の御夢に金色の天子白象に乗じて右の脇よりいらたまふと御覽してすなはち懐妊したまへり。漢朝の高祖の父朝日をいたくとみて漢の高祖をまふけたまへり。なんぢが見ところの夢まことならばあたにあるべからず。まふけん子は男子にて長じてのち、決定法師なるべし。おなじくは家を

もつかん、尊長こそしかるべけれども、法師子をもちて後世をとれんこそうれしけれ。そのゆへは普通の剃刀を飲とみたらは世のつねの法師なるべし。これはおほきなる剃刀をのむとみれば天下无雙の高僧にてあるべしとて、後年のことをよろこびたまふ。妻女これをきゝて実にも左様にたつとき高僧にて候べくは、懷妊誕生の天までみづからにいとまをたびたまへ、祈誠したてまつらん。時国左右に及ばずいとまをたふ。ときに氏の女新造の所をしつらひ毎日沐浴し新衣を著し身に香水をそゝぎ十方の諸仏を敬礼してたなこゝろを合てのたまはく、ねがはくは十方の三宝、ことには菩提寺の大慈大悲大薩埵、予かまことに懷妊誕生ありて、男子にして成人ののち大高僧となるべくは、阿難富楼那のごとく清淨の仏弟子となさせたまへといのりたまふぞありがたき。かくて精進としをこへ、祈願月をかさね禮拜日をおくるほどに

第三 御誕生の事

巻第一

誕生のときにいたる。男女後苑をみるに高長の椋の木のごすゑに天より白幡二流ふりかゝる。幡かしらより紫雲たちて時国の寢殿にたちおほふ。所従等時国にかたる、おどろきいで、みればうたがひなし。合掌して云昔応神天皇御誕生のときは八流の幡ふりくだる。そのゆへに八幡大菩薩と号す。これは本朝に八正道のひろまるへきしるしなり。しりぬ我子誕生の天に二流の幡ふりくだること、いかさまに成人ののち本朝にわたる一代の仏教をふたつの道となすべき瑞相とて後年のことをよろこひたまふ。さるほどに産の紐をひらきたまふころは崇徳院の御宇長承二年癸丑四月七日午のときに誕生あり。所生の子は男子なり、諱をは三徳殿となづけたてまつる。父母はまふすにおよばず、所従眷属みなよろこびあへり。釈尊の御出胎のときは国中に三十二の瑞相あり、よりに相人まふさく在家におはしまさは転輪聖王となるべし、出家学道あらば无上尊となるべしと云云。この上人誕生のとき二流のはた雨下る

ことたゞごとにおはしませず。又積尊御出胎は地神第五鵜鷺草葺不合の尊八十三万六千四十二年癸丑四月八日の午の時なり。出胎同年にして同月なり。積尊の御初言にのたまはく、天上天下唯我独尊三界皆苦我当安足と云云。本朝には聖徳太子の御初言には二月十五日の早且に南无仏となへたまへり。漢朝の智者大師も南无仏となへたまへり

第四 二歳御初言の事

この上人も二歳とまふす七月十四日に、善導遷化の日をむかへてはいはく、南无三宝となへたまへば、これ三国の奇特を一心にそなへたまへり。襦袢のなかより竹馬に鞭うつまで、たつて泣さふびたまふ声をいだしたまはず。そのこゝろ成人のごとし。やゝもすれば

第五 西の壁に向たまふ事

西のかべにむかひて黙然としておはします習あり。天台大師の雅癡の形相にたかはず。吾徒生来坐臥常面向西心念唯在彌陀。さるほどに翠帳こうけいのうちに貴

み、松風羅月のもとにあをく、桃李万歳の春をむかへては万花をおりてひさのうへにたはふれ、秋帳千年のまどのまへには明月を詠じて夜をあかしたまふほどに

第六 少弓遊の事

少児すでに七歳になりたまふ。少弓あそびをしたまふにも、つねのおさあひものにはすぐれたまへり。そのほかの遊ことくくあまりにぬきいでたまへり。かくて少児九歳とまふす

第七 夜討の事

三月十八日の夜、時国の宿所へ賊人五十人斗打入たり。折節しかるべき勇士どもはみなく、他行して禦べき人もなし。以下の雑人は逃さりぬ。時国ばかりおきあひて小袖端おり太刀をぬきいでむかひて散々にたゝかひけり。敵は七八人きりてかゝる班会かたけきもかなふべしともおぼへず。しかれども王莽が術をかまへ祿山が威をふるひてたゝかひければ、さががけ二人たちまちにきりふするほどに、のこりは家のうちをひきしり

ぞく。時国も大少の疵をかうぶりてうたれぬべしとおぼへて内へたちかへりてみれば、妻女少児をいだきてあぎれてたちたり。時国いひけるは敵の荒手なをいりぬとおほふるなり、少児をいだき紫竹の坪に忍べし、その外はわれふせがんとて散々にきりてまはる。しかるところにひとつの奇特あり。この少児四歳とまふす春、父の時国竹合の弓と萩のわりはさみの小矢をつくりて少児にあたへていはく、代をおさむるはかりごとは文武の二道をもてす。武の一道は弓箭なり、うしなふことなかれとてあづけられしを、父のことばをみよのそこにおさめて、ひるはひめもすにもちあそび、よるはよもすがら枕の上をさらざりしが、その夜しも屏風の破目にさしはさみておきたるをとりてにげけるが父のかたき射とて竹のなかよりねらひよる。その夜の大將軍下知してたちたるを射るほどに、あやまたずひだりのまなこにたちけり。少事なれどもいたてにて引ければ以下のものどもゝ引にけり。少児母にいゝけ

るは、かたきははや引ぬとおほへ候。父の御ありさまみまひをせさふらはんとて走いりてみれば、父はかたき五六人打とどめてやがてかたきのうへにふしたり。父のひたいをおさへて死にたまへるかとなきたまへば父息のしたよりなんちをみんとおもふこゝろをいのちとして、今までいきたるなりとゆふ。さるほどに従類眷属どもきたり、刃土のものどもあつまりて時国を別のところへうつして血をとどめて疵をみれば、大事のきずは八ところ、少事は十ところばかりなり。目もあてられぬ事どもなり。ときに少児父にのたまひけるはかたきはみしりて候。時国いはく我だにしらぬかたきを汝いかでかしるべき。少児いはくたしかに手をおふせて候。これは白河の院の北面に伯耆の権守貞明が子に明石の源内武者長明等にてさふらふ。父きゝてかきこき童が、われだにしらぬ敵をしりたりけるよといゝて、せめてなんぢが十歳になるまで相してつゆのいちきへなんことよと、なみだをながしたまへば、集い

たりし上下までみななみだをぞながしけり。さるほどに少児すでにうちていでんとするとき、時国言く、な

んちは親の敵なればとおもひて長明等をうたば血をもて血をあらはんがごとし。もとの血はおつともいまの

血はそむべし。時国が長明等にうたれんことこれまた過去の宿習なり。これを親の敵とてうたば又なんちが

身にきたらんこと一定なり。されば生死无窮に輪廻たゆることあるべからず。明石をうたんとおもふことゆ

め／＼あるべからずとおほせられしかば、少児父の首をいだきてなきいたり。こゝに時国の舎弟に奈良本の

金吾時貞はせきたりて、いかにととへば少児いまだ御存命とこたふ。なにとて思立ぞといへば、少児いはく

多門天の吠戸羅城八対威王が无育城なりとも、父の敵こもりたりとうけたまはらば、まかりむかひて死ぬべ

くさふらへども、父の御制止さふらふあひだ、力なくて候なりとてなきいたり。時貞さらばなんちはきたる

べからず、打立て人々として二百余騎をあひ具して明石

が館へ押寄てときをつくれどもおともせず、南庭に煙ばかりたちたり。その辺のものにことのよしをたづねれば、明石殿は今夜頓死さふらふとてたゞ今

第八 時国茶毘の事たり塔婆の事

茶毘せさせたまひさふらふとて、とりあへずみな／＼忍ばせたまひて候とまふす。さて時貞内にいりてみればいまだ棺に火もわたさず、弓のはずにてたきとをはねのけ棺をやぶり死人をみれば、左の眼に矢目あり。

これにて明石死にけりとして頸をとりて馳かへり、少児にこれをとらせけり。少児これを父にみせていはく、さんぬる夜少弓にて射たりしやうをぞ、かたりける。時国これをみたまひて

おくれてもあるへき物か、しでの山
ひともわれにはさきだちにけり

とて最後に言けるは、我思かけず横死にあひてむなしくなるなり。今生におもひ置ことはせめて汝が十四五歳にもなるまでそはずして、たゞいまつゆの命消こと

こそかなしけれ。観音よりまふしうけたる一子なれば
時国が後生をは汝をこそたのみたれ、あひかまへて法
師になりて覚匠となり、二親の菩提をたすくべしと言
て、なをくいひ置べきことはおほけれども、はや近
づくとおぼゆるなり、生死无常のことはり汝よくしる
べしとて保延七年三月十九日生涯四十三にして朝のつ
ゆときへ給けり。少児父にいだきつき、おなじ道にと
かなしみけり。妻女地にふし天にあふきたまへども、
有為无常のことはりいまをはじめぬことなれば、ふた
ゝびかへることなし、あはれなるかな无常の殺鬼恩愛
のなかをもたちまちに、はなるかなしさよ。非哉黄泉
のたびいとけなき緑子をもしたがへず八苦火宅のうち
にしのびかたきは別離の炎三界流転のあひだにも流安
きはかなしみのなみだ、桜梅のさかりの華无常のかぜ
にちりやすく、蘭菊のたへなる形転姿のくもにうきか
はる。いかゞせんともたへたまへど、甲斐ぞなき、誠
にあはれなりしことどもなり。さてかくてあるべきに

あらざれば菩提寺の学頭観学得業を招請し、引導師と
して暮山の野辺におくりいだし、夕部の嵐にたくへて
東俗の烟となしたまふ。少児母とともにひとつ炎とも
たへたまふぞ理なれ。たゞ心肝埋がごとし、風胡胸に
塞、愁歎はらはたをたつ、相思の床のほとりにはある
じなき枕ひとり先立り。合親のむしろのうへにはかさ
ねし衾いたづらに残り、はなやかなりしかうばせはひ
とむらの草にかくれ、わりなかりしすがたは北亡新旧
の塚となりたまひけるこそいたはしけれ。さて三日と
まふすにつゞかぬ骨をとり、得業を中陰の引導師とし
て七日々々の念仏誦経おこたらず、妻女少児一族等の
諷誦願文退転なし。歎かなしみけれども、つながざる
月日にて一百箇日にもなりぬれば、五輪塔婆をむかへ
て仏事斜ならず、あはれなりしことどもなり

第九 菩提寺御登山の事

そののち父の遺言をたかへず、少児得業にともなひ菩
提寺に登て学文するに、一字を教れば、十字をしり、

一義をおしふれば多義に通じたまふ。凡九歳より十三歳まで住山して習学するに和漢の文書にくらからず、もろくの經論章疏におひては通をゑたるがごとし。

あるとき得業児にむかひて給ひけるは御前はあたらずの器量なり、田舎にしては深理本書とはいかにもこゝろもとなし、そのゆへははかしくしき明匠なんともありがたし、本山にのぼりて学文候へたしとのたまへば、三徳殿いかさまおほせにしたがひ候へしと領掌す。得業言く、さらばいさ里にくだりて母義にもいとまを乞てのぼらんとて児を相具してくだりたり、母の宿所にいらたまふ。母児おなじく得業に對面していわく、このほどは思はず候なにごとの御くだりぞとゝいたまひければ

第十 母に御暇請の事

児こたへていはく、自は御いとまをまふして本山にのぼりて学文つかまつり候はんためにくたりて候と申す。そのとき母いはく本山とはいづくそと、得業いはく観

学が本山は南都にてさふらへどもいさゝか難義の子細さふらふ。山門は他山なれどもあひしりたるかた候へば、登山せしめばやと存知候と云云。ときに母いはくそれこそしかるべくも候はね、うけたまはれば比叡山はこれより十日ばかりのみちときく、さればみんとおもふともたやすくかなふまじ。また児も痛われも痛したがひにみへんこともかたし、使者の往覆も日かずへて生死のほども期しがたし。時国におくれたてまつりても、一日片時もかなふまじともおもはざりしかども、汝を忘形とおもひてこそつれなきいのちもなからへたれ、これにて得業のしらせたまひたらんほどのことを習とらせたまひたらんに、なんの不足があるべきおもひよらぬことゝて泣きたまへば、得業も道理にせめられてものたまはず。児まふしたまひけるは、おほせもともさる御ことにてさふらへども、母御前は五障三従の御身にてわたらせたまふ。われをおしませたまふとも老少不定のならひなればおくれさきたつた

めしあり。われむなしくならば母もるともに奈梨にしつまんことこそ口惜しくおぼへさふらへ。母御前も父時国にはいつまでもそひたまひさふらはんとこそおほしめし候つらめども、はからずおくれまひらせたまひて歎たまふ。昔の釈尊は父の大王にはしられたまはで十九にして御遁世ありて三界の導師となりたまふ。天台大師は七歳のとき父におくれたまひ、十一歳して母にいとまをこひ、五千里のみちをゆき明師にあひて大師の高位にのぼりたまふ。本朝の三河の入道寂照は二十七にして出家をとげ、三十七にして老母にいとまをこい、万里の波瀾をこへて八祖の長老をきはめ円通大師といはれ、つゝに古郷へはかへりたまはず。かゝるみちをも仏道修行には老母もゆるしたまひけるとうけたまはる。本山はほどこかくさふらへば、御覽せんと思召候は、一年に一度もくだり候てみまひらせ、みへもまひらせ候べし。みづからが学文をとゝめさせたまひ候は、^ひ死につかまつり候へしとてなきたまへば、

母も理につまりてものものたまはず、やゝありてさていつ登たまふべきぞととひたまへば、やがて明日とこたへたまふ。近明日日叶まじ。日の吉凶もえらびとものものをも出立すべし。児のたまひけるは自在家に候て公方の出仕なんとも仕候は、もとも日の善悪をもゑらび候はんずれども、今度の登山は随分遁世のころざしにて候へば、ともものとも山へおくりつけん程に、二三人にはすぐべからず。かやうのことは思立こそ吉日にてさふらへとまふされければ、力なくしてよもすから衣襲をたちぬひ朝にいたれば母児のかみを手自結、衣襲を着して児のかみをかきなで、老少不定の習なればこれやかぎりにてあらんずらんとて、なみだぐみたまへば、おつるなみた児の頂にかゝり、ひたひのうへまでながれけり、児世にうれしげにて、にこやかに咲たまへり。母これをうらみて汝が名残のおしさにこれやかぎりにてあらんずらんとおもひてなくぞかし。なにごとの咲^なしくて咲たまふぞと。親は子を

おもへども子は親をおもはずとはこれぞとよのたまへば、児いはく極楽に生する往生人をは彌陀の心水をいたどきにそゝぎ、観音は慈悲の衣をきせ勢至はおひをさつけたまひ新成の菩薩となづく。これを善導和尚釈していはく、无边菩薩為同学性海如来、尽是師彌陀心水沐心頂、観音勢至与衣被といへり。これを灌頂ならうとうけたまはる。母御前慈悲の御なみだみづからが頂にかゝり候あひだ、たゞいま学文の門出に灌頂つかまつるよとよろこばしくてこそ咲さふらへ。なぜかはみづからも親子のみちにて御名残のおしからては候べきとて、なみだぐみたまへば、母御前もいとせきあへずなきたまふ。さるほどに縁のきはに馬ひきよせ角免かづんまふすともものども三人、得業も同宿一人從僧一人おくり文もたせてあひそへたり。伯父奈良本も一日路おくらんとてきたれり。児すでにうついでんとしければ、母袂をひかへてなくくゝのたまひけるは、登山の後医王善逝をば仏教の父とたのみ、七社権現を

は加護の母とたのみたてまつり、学庠となりて名譽のはまれをわれらにきかせたまへ。自か生ての孝養とおもふべしとのたまへば、児たゞいまの仰をふかく存知つかまつり候はんとて、上下の面々にいとまを乞て門外にいてたまはんとするとき、母なくくゝ一首

形見とてはかなき父がとゞめおきし

子の別さへ又ぞ悲き

児の返歌

別路のなに歎ますたらちめよ

一蓮の法の道ゆく

と詠じて

第十一 御国出の事

近衛の院治世天養二年三月廿一日美作をたち靈仏靈社に参詣して、ひとへに学文の宿願成就せしめたまへと祈誠おこたらず。さるほどにいさゝか日数をへておなじき晦日に京につく、あくれば卯月一日なり。児出立のぼらんとす、ともものどもまふしけるは、さすが

山門は目はつかしかるべく候。今日は御かみをもすまし、行水なんども候はでとまふしければ、児言く、さしも母のいま一日もとどめさせたまふにはとどまらずに京に逗留せんことよしなし、万が一もいかならん。不思議にもあひたらば人のあざけりこれなるべし。行水したらばなにのせんかあらんとて出立ければ、ともものども、つぶやき／＼のぼりけり

第十二 下松月輪殿御対面の事

さるほどにさがり松の辺にて貴人の御出にまひりあひたてまつる。見物の人にとへば当御摂録月輪殿とまふす。いそぎおりて馬引のけさせ、われも木影にたちよりのびたまふ。殿下児のうしろすがたを御覧じてのみより尺をさしだし、少童これへきたれと、まねきたまふ。児すこしもはどからず、御車のまへにまひりたまふ。少童はいづくよりいづくへぞと、とひたまふ。児こたへてはいはく、これは美作の国より学文のために、山門へ登候とこたへたまふ。月輪殿山門の本房

はいづれの房ぞ、師匠はたれぞととひたまへば、児まふしたまはく、西塔北谷功德院の阿闍梨光円は粟田口の関白四代の後胤三河の権守重兼嫡男少納言資隆の長兄隆寛律師の伯父光学法橋の弟子持宝房肥後の阿闍梨源光房へのぼりさふらふとこたへたまふ。月輪殿すゝしくこそきこへ候へ。少童にはみこむるところあり、あひかまへて学文ころにいれ、大碩学となりて兼実が出家の師匠となりたまへと、御約束ありて殿下は御とをりあり。さるほどに児馬引よせうちおりのりてのぼりたまひけるが、ともものどもに言けるは、汝等がいゝつるにつきて今日京に逗留したらば、いかでか一人の御目にはかゝるべき。すでに殿下の御出家の師匠とならば一天の君の御師範とならんこと案の内なり。あつぱれ学文の門出かなとて、駒をはやめてのぼりたまふほどに、すでに本房につきたまふ。折ふし源光はひる縁にかみそるとをおはしませしけり

卷 第二

第一 源光御対面の事

折節源光はひろ縁にかみそるとて御はしけるが、門より児を具してきたれり。いそぎ内にいりかみそりはてて衣きて出合対面して、これは思よりまひらせず。いづくよりぞ、もし人たがへにか候らんと云云。同宿の僧これは美作国南都観学得業当国菩提寺に住山候が御状さふらふとて、おくり文をさゝげたり。源光ひらきてみたまへは玉章久通ぜず、たがひにこゝろに万里をへだてたるがごとし。積憂のいたりによりて拙状をさゝぐ、貴殿いかん。抑正身の大聖文殊の聖容一躰これをおくる頓首 三月廿一日

進上源光阿闍梨御房 沙門三會已講観学得業

文をみれば大聖文殊とかきたり。児をみれば日くろみや事もあらぬ児なり。大聖文殊とはいかさま児の器量を感じたるござんめれ。なにとしてか今夜この児の

器量をみんとてまづさけなんとすゝめて、物かたりして夜にいりてのち、児をつねのところへ請じいれのたまひけるは、少童は田舎にてなにくかよみたまへると、とひたまへは、児こたへたまはく、いなかのことに候へば、はかくしくさしたるものも誦せずさふらふとこたへたまふ。源光さるにても内典外典の物かずをことくくといたまへば、字声などはさこそゆかみて候らはめども、御たづねの分はよみわたして候とこたへたまふ。さては大略のこらずさふらふや、俱舎論はよみたまへるか、いまだ誦せず候とこたへたまふ。源光さらばことの初に六百行の頌をおしへたまつらんとて、本書をひき一遍誦してきかせてこれを今夜の内におぼへて、朝源光にきかせたまへと云云。児うけたまはり候と領掌しけり。さて源光児をいだきて臥たり、そののち児またもとはすこのあひだのたびのつかれといひ、前後もしらず睡眠したり。源光たうと寝いりたる児をおしおどろかして、夕部よみきかせま

ひらせし俱舎の頌はおぼへたまへるかと思はばらく案じておともせず。源光さればこそ夕部たゝ一廻よみきかせたり。いかなる文殊もならずしてはかなふまじ。ましてやがて寝いたり。五十行百行にてもあらず、よもおぼへじと思たまふところに、児やゝありてはいはく、少々おぼへたりと存知さふらふ。本書をひいて御覽さふらへ誦してきかせ申さんと云云。源光さらばとてもしびをかゝげ本書をひらきみたまへば児もともてに本書をみるかとすれば、さはなくして本書をもみず、うちうつぶし初諾一切衆所冥滅拔衆生出生死涅槃敬礼如是如理師对宝藏論我当説といふより、おはり超勝五百応心待迦葉微羅刹三藏にいたるまで、一字もおとさず六百行をそらにさらりと誦せられたり。源光これをきゝたまひ本よみたりとも六百行を空にかほどたやすくよむべきか、大聖文殊の化身なり。あつばれ我山の本願大師の再誕したまへるやとあやしみ、さらに凡夫にてはなきものをやと、むねうちさはぎ不思議さのあ

まりに、児をつらくみたまへば、頂き平にして異眼に黄なる光あり。これさらに人間の種子にあらずともひつらね、ものもいはず、さるほどにおくりのものどもいでたちてくだらんとす。源光返事を書く、その状にいはいはく貴札のおもむき明朝のきりを払ひ、それ貴方にむかひて拜見せしめ候ひおはりぬ。抑大聖薩埵の御登寺、もとも一山の法燈寂岳の昌榮なり。貧道淺智愚案老耄たりといへども、明頭多叢にして習学本望たるべきか。頓首謹言大阿闍梨源光請文云々。そのうち源光児にむかひてのたまひけるは、源光はこれ一文不知のものなり。しかるべき明匠の禪房へも立入たまへかし。たとひ弟子一分にてましますとも、なにのおもひか候べき、この愚癡ははやこれなる少僧に申つけさふらひぬ。先智の身なればおしへたてまつるべきことなし。かやうにては定後悔あるべくさふらふ。児言けるは、おほせはさる御事にて候へども、たゞ不便のおほせをかふむりたくさふらふ

第二 出家暇請の事

かくのごとく日夜をおくるほどに、すでに十五歳になりたまへば、やうやく出家のこゝろさし出来あひだ、房主にいとまを請たまへば、十七まではとてゆるされず。十月十日あまりに同宿十余人めし具して

第三 日吉御参詣の事

日吉の社へ参詣あり。まづ大官法宿権現に敬白法味を授たてまつる。抑当社権現はこれかたじけなくも本地清涼山の月をかくし、妄想顛倒のちにまじはりたまふ。南无五百久成の如来、和光のかげを海水にやどし三千世界の能化の主たちまちに自か本懐を加備したまへど、通夜祈請したまふ。五更にのぞみて四方をみめぐりたまへば、月明々として湖上に珊瑚をしけるかとうたがひ、七社の社壇は実宝寂光の土かとあやまたる宝殿いらかをならべたり、摩尼宮殿かとおどろかれ、巴猿所々に叫ていとどあはれをもよほす、おりにふれ月あきらかなる跡たらくなり。垂迹和光のくもりなき

ちかひをおもひいたして一首

神代より曇らぬ月の光にて、秋にかはらぬしめの

内哉

註連の内月晴ぬればたひの夜も、秋をそこむる緋

のたまがき

神殿の内より声ありて

よもの山おひへの峯の月影は、つるには西の雲に

こそいれ

第四 御出家の事

一 源光出家暇請、一十五歳出家久安三年二月下旬、一登壇受戒 善信円明

第五 皇円阿闍梨入御付たり遁世の事

一十六歳のとき初春八日皇円阿闍梨の御房にて円教至極の奥義を極たまふ。しかふしてのち円明源光のまへにひざまつきて遁世の暇を申したまふ。源光承引せられず。ほどをへて又こいたまふといへども許容せられず。第三度まで申たまふとき源光のたまはく、抑円明

公きゝたまへ人の遁世といふは出流向車とて、五十六十にもなりてのことなり。又はいかなる愁歎恨なんどのことの端ありてこそ、かやうのことをばおもひたて御遍は我山の法燈一山の明玉と人々よろこびあへり。なんぞ今日このころの遁世とは思留たまへと、大に制せらる。円明申したまはく、さ候は愚身に三の心候、これ叶べく候はゞ遁世は御免をかふむるべく候。ときに源光これをきゝて三の心といふは推たり。房舎聖教所領の事な心みしかき訴詔哉。本よりこの坊は智者のつくべき坊なり。先立て人に約束したりとも非学匠はかなふまし、所領は坊につくものなり。聖教は又智者のものなり、愚者にては無用なり、いで諺状かゝんとて硯紙をとりよせたまへば、このときになれば同侶等これ等の事どもと推して、この坊所領聖教等はみな〱円明に譲たまはゞ、三日とものへはやなんどと密あへり。源光硯をならし筆を点じて、三のこゝろとは推したり所存いかん、はや〱言と云云、ときに円

明さ候はゞまづ一申すべし。それ、はなはさきはじめて七日にかならずちるものにて候か。ちらで四五日のころにて候ことならば遁世は思とゞまり候べし。さも候はで、さきたるは残、つぼめるはちり、遅先ならひにて候はゞ御免候へと。源光これをきゝて存のほかの訴詔かなと円明のかほほまもりて、ふでをさしおきて興をさめたまへり。やゝありてさていま一はなにごとぞ。円明申したまはく、人の歳は二十をわ若者としてきはれ候ふ。四十にいたりては老の内に入候。短命と申し生忘暮年とてたのみなきこゝろにて候。たゞ人のさかりは三十ほどな年にて候。円明三十のころにて不老不死にて候へくは、遁世はまかりとゞまり候はん。又老少不定前後相違のさかいと、しろしめし候はゞ、御免をかふるべく候。今一は四季のなかに春夏冬なく、たゞいつも八月中のこゝろにてあるべく候はゞ遁世は思とゞまり候はん。さてはなくて極熱極寒のうれへ、きをひきたるありさま偏に三悪趣苦にて候。かやうの

条々そのいはれ候はゞ但御免候へと申さる。源光言語道断にてももの言はず。暫く有存する旨有。先遁世のことと思とゞまりたまへと言いければちからおよばず。あるとき円明証眞宝持房法印のもとに談義にておはしけるが本房にかへりてみれば風氣とて薪火させて後煮り、少童同宿等に腰うたせ、うしろさすらせなんどしてひきかつきふしたまへり。円明あらあさましとて枕ちかく立よりてせなかをさすりながら、弾指したまへり。源光あつといひておきたまへり。それにつき同宿どもこれはなにごとぞとておほきにいかる。源光言ひけるは、各々いかなること不思議なり。常住三宝七社権現も御照覧あれ、円明にむかひてあたをむすぶべからずといひて、円明きたれとてよひむかへの玉ひけるは、御辺の所望たゞいま成就せさせ申すべし。いまの御辺のありさまこそ、はぢいりておぼゆる。无病の身にだにも頓死はつねのならひなり。まして病床しながらいひき、かくほど睡眠したまふか、病は死のはじめ

ぞかし。後世をおそるゝ人は子にふし、刀におきよとこそおかれたれ。通夜こそつとめざらめこの白昼にいびきかきてふしたまふことよ。なにと習ひたまへる仏法ぞや、たゞいま地獄におちんずるこの僧をつたなくはぢしめて弾指したまふことこそはづかしけれ。遁世の暇をゆるさぬも无道心なりと、かた／＼思しらせんとてあてたまひたりと存ずるなり。とく／＼御辺に暇をたてまつらん。遁世したまへ、ただし、日本の閑居をたづぬるとも西塔黒谷慈現上人寂空の御房にはしかじそれへまひりたまへ。いま一年もしたしみてつねに對面をもすべしとて、円明御ゆるしをかふりてやがてときをもかへさず、同宿等に暇をこひて左の手にては茶筒をもち、右の手にて茶筌をさゞげてすでに遁世にいでたまふ

第六 寂空先祖付たり寂空へ御参の事

抑かの寂空上人とまふすは、大宮摂政殿の御子良忍上人の御弟子京極の大政大臣高衡の卿の御孫、中の御門

の中納言家成の卿の伯父、小野の宮殿にも伯父なり。

円明十八歳久安六年八月二十六日西塔黒谷慈現上人叡空の御房にまひりたまへり。おりふし御房には老若とも五六十人おはして止観の談義の最中なり。おのおの円明のまいらたまふをみて申合けるは、これに来る少僧は当山无雙の学匠の名をとりたる円明公にて候かなにさま法門申しにまいら候とおぼへ候と申しあひけり。叡空これをお覧じておほせけるは、さてはなし、これは遁世して来とおぼゆるなり。そのゆへは天台大師南岳大師へまひりたまひけるとき、茶筌をさゝげてまひられたり。その先祖をまなびてきたるとおぼゆるとぞおほせける。さて円明公御まへの縁にかしこまりて侍り。叡空問言く、汝はいづれより来ぞと。円明答申たまはく、定名字をばきこしめされても候らん。宝持房阿闍梨源光の弟子に円明と申ものにて候が、遁世のころざし候によりてまひりて候と申し上ぐ。重てといたまはく、抑遁世といふは過去の心が遁世して来

るか。現在の心が遁世するか、未来の心が遁世するか。

過去の心が来るといはゞ過去の心は去てなし。現在の心が遁世するといはゞ現在の心は不住なり。もし未来の心が来るといはゞ未来の心はまだ至らざるなり。仏心即魔界、魔界即仏、心一心為一念遍有法界也といへり。いづれの心が遁世して来ぞと云々。円明こたへて申たまはく、過去現在未来の心も遁世せず先始已来今世流当来之所在煩惱流転流浪面々者衆生有苦顕罪心といへる、この文の心にひかれてまひりて候とこたへたまふときに、上人なみだをながして言ひけるは、三塔に学座おほしといへども、叡空がかやうにとひたらんに、かくのごとく答べきともがらはおほへず。御辺はこの流転滅滅の法門ははや落居せられたりけり。御房はなにと名乗たまふぞとおほせければ、善信円明と申候とこたへたまふ。御辺はこた法然具足の人なり、今日よりは法然房となづけたまへ。実名をば汝が師匠の源光の源の字と叡空の空の字とをとりて、源空とな

のりたまへとおほせければ、久安六年八月二十六日叡空上人にあひたてまつり改名して法然房源空となのり玉ひける

第七 嵯峨釈迦堂の事

保元二年丁丑三月四日源空御歳二十五歳、叡空上人に御暇をまふして黒谷の御房をいでたまふ。まづ恩徳報謝のために嵯峨の釈迦堂に一七日参籠します。抑如来この伽藍にうつりたまひし由来をたづねたてまつるに、むかし釈尊の生母摩耶夫人のために、一夏九旬のあひだ報恩の経をときたまふ。このとき倭天大王如来を恋慕したてまつり、毘首羯磨におほせて赤梅檀をもて尊像をつくりたてまつる。安居ののち仏初利天下り下。曲女城にいりたまふとき、木像身を生仏に擾したまふに、化導を木像にゆづりて生身の仏をさきにて、祇園精舎にいりたまひてのち、大唐化せんがために震且にきたりたまふ。陽州の開元寺の梅檀の像これなり。こゝに日本東大寺求法の沙門齋然上人天元六年

に官符をたまはり、入唐のときまづ開元寺にいたり、尊像を拜したてまつり、則ち帝闕に奏して竜顔に謁し勅免をかうぶりて彼瑞像を移して帰朝せんとほちするところに、本仏を渡したてまつるべきよし、梅檀の像まのあたりに齋然にしめしたまひければ、そのこゝろを得て新仏のいろを本仏にあひにせて取替たてまつり、帰朝したまふほどに、ひるは仏を荷担したてまつり、よるは齋然曾塔したまひて寛和二年七月九日に帰朝すかの寺に安置したてまつる御本尊なり。平等の慈悲たれにおひてかへだてあらん

第八 興福寺藏俊対面付たり中河上人対面の事

保元二年三月十二日、南都の興福寺大納言の僧都藏俊の御房に、いりたまひ、法相の法門を学したまひ、六經十一部の論にまなこをさらし、四分三性の法門にたまをみがきて奥義をきはめたまへり。平治元年己卯藏中河の上人にあひたてまつり、真言の秘法を伝受したまふ。四曼三密の法門をさとりける。

第九 鑒真和尚口伝付たり寛雅華嚴相伝の事

永暦元年庚辰初秋第五の天にいたり、勝大寺の鑒真和尚に伝戒を学したまひけり。三聚十重十無尽等にあきらけて、応保元年辛巳四月に仁和寺の大納言法印寛雅にあひて華嚴宗を学したまふ。漸頓二教の差別を学語して、三無差別の道理にくらからず。三事円融法界唯一心のむね、そうじて十玄六相の法門の奥義をきはめたまへり

第十 慶賀三輪相伝付たり慶賀問答の事

長観二年甲申初冬にいたりて、慶賀法橋にあひて三論宗を学したまふ。三乗七方便九法界一仏乗と開会して誦す。九聖一如の極理々内理外の二門を立、八不中道証義皆空の観門にくらからず。あるとき慶賀法橋のもとへ入御ありて、三論の法門を不審せらる。慶賀はきはめて我性こはき人、源空もまた深玄なれば慶賀もあらそひを立おほせらる。三論宗の長者なれば文釈に明なり。源空も広学多聞の人なれば三日三夜の重難重答

の論義至極なり。しかれどもち慶賀あらそひにおれて鎌をみづからとりて法蔵をひらき、概をとりいだし源空のまへにおき、坐具をむねにあて仏陀と称して讓状をかゝれける。その語にいはく、本朝にわたるところの三論の法門においてはのこるところなく聖教とも授ゆづりわたすものなり。永万元年三月日沙門法印慶賀判、進上法然房とかゝれたり。源空まふしたまはく御讓状はかしこまつりて候へども、進上がきはさかさまに存知候へば、いかでかあづかり申べきと申されければ、慶賀いはくその談中々おぼへさふらふ。御房の智分をきゝたてまつるに、いまは師匠なりとも、のちは一定御分の弟子になるべし。進上がきをいたさずんば、さだめて片腹いたかるべきあひだ、かくのごとくかきたるなり。いたみたまふべからず。自今已後は御房学文のあひだは、参籠に伴一人從僧一人御分ともに三人の衣婆齋料は、慶賀一期のほどは沙汰すべしとかへりて檀越の契約をなしたまへり

第十一 華嚴披見少蛇の事

あるとき華嚴披覽したまふときはあやしき少蛇きたりてさふなくさらず、法蓮これにおそれたまふ。上人の夢のうちにあやしき女の形きたりて示て云く、われはこれ天竺の无熱池にすむ善女竜王なり。和尚上人の仏法守護のために、我ひとりの伴をつかはす。おそれたまふことなかれとしめしおはりて、女の形すなはちかくれぬ。まぼろしのごとく夢さめおはりぬ

第十二 法華三昧普賢の事

法華三昧のときは正身の普賢、白象に乗じて道場に現ず。暗夜にとぼしびなきに光明をてらしてひるのごとし。この菩薩はこれ住位灌頂位の薩埵、入住支門の大士なり。その心常寂にして生死をわたす船師なり。たちまちに三昧發得したまひ、ますく習学にすゝみたまへり

第十三 真言觀門の事

真言觀門のときは道場にいらりて阿字觀を修するに、五

相成身の觀行を現ず。大日如来はこれ周遍法界の理自性清淨の本躰なり。非色非心の理かりに三身滿徳のかたちをしめし、无言無説の仏、一実真如のむねをときたまふ。かくのごとく觀念したまふに五輪種子の觀にいらりて九相の一身は無常の成ずるところと觀じ、益して通世のこゝろざしにすゝみたまへり

第十四 近衛坂經藏の事

永万元年四月上旬のころ、近衛坂の西黒谷といふところにて草庵を結び、独学のこゝろざしありて隱居したまひ、一切經を開見したまふこと第三返、そのほかもろくの論藏、三国相伝の聖教和漢人師の所釈一々に高覽あり。恵心の僧都の往生要集を御覽じて、これは源信已証の法門なりと拜見したまふほどに、いとど心つき、善導の五部九卷の疏、曇鸞道綽の章疏等委細に御覽じたまふほどに、第一返のたびに、一代の經論を聖道門淨土門とふたつのみちとなしわかたべきと御覽じて、第二返には淨土門におひて專雜の二行あるべし

と御覽じ、第三返には大小乗の肝要は彌陀の本願名号
不思議なるべしと御覽じさだめ、所詮には善導の觀經
の疏四卷にはく一心專念彌陀名号行住坐臥不間節久
近念々不捨者是名正定之業順彼仏願故といへるこの文
のしたより、このたびの出離生死頓証仏果のみち、彌
陀の名号にかぎりりと治定したまひ、習學二十三年独
學十二年の學業をさしをきて、安元元年乙未生年四十
二にしてつゝに淨土門にいり、末代惡世の衆生極重最
下の凡夫の得道は、名号におさまると堅固の信心に住
して、毎日の御所作には但心称名して、一向專修の義
をたてたまふなり

第十五 夢の善導の事

治承四年庚子源空御年四十八、四月七日の夜不思議の
夢相を御覽ず。法然はたかき山の中間にありてみれ
ば、峯より三重の滝をちたり。しもは清水濤々として
みなぎりながる。その河のはたには大道の通駅あり、
男女おほく往返す。滝の水上には百宝の色鳥とびかけ

る、まなこより光明をはなちて十方を照す、その中間
に、こしよりしもは金色なる僧の容顔微妙にして老年
六十ばかりなり。合掌をむねにあて高声念仏したま
ふ。念仏のこへごとにくちより化仏しきりにいでたま
ふ。源空にむかひてのたまはく、われはこれ大唐の念
仏興行の祖師善導和尚なり。なんち正路の化導これ真
実なり、退轉すべからず。いまこの高山のいたゞき
は、これ念仏三昧万行万善の上々のいたゞきを表する
ところなり。三重の滝は江河のながれ、なんぢが勅化
念仏三昧の法水法滅百歳のときまで利益あるべき瑞相
なり。百宝の色鳥まなこより光明を放ち、汝が頂を照
すは六方恒沙の諸仏の汝を護念したまふいはれなり。
汝、利益衆生増進のなすべきおもひなりと仰せおはり
て源空に十念をさづけたまふ。眉間より光明をはなち
て西方をさしてさりたまふに異香甚だし。源空このよ
そおひをみれば、紫雲日本国にたちおほひてあるをみ
て、夢こゝろにおもはく、源空が念仏利益は本朝にあ

まねく流布すべき瑞相なりとおもはんとすれば、ゆめ
 さめおはんぬ。それよりいよ／＼源空は念仏の信心深
 くとなるなりとおせけり

第十六 桜の池の事

一源光入定桜の池のこと、源空あるとき御弟子等にむ
 かひて御物語したまひけるは、このほど源空後悔する
 ことあり。そのゆへはこの浄土門をいま七八箇年以前
 に、みいだしたらばわが本師肥後の阿闍梨をばよも虵
 道にはおとしたてまつらじと、かなしむなりとおほせ
 けり。ときに御弟子等まふさく、なにとて、虵身をば
 うけさせたまひさふらひけるやらんと問まふしければ
 源空なみだをうかめてかたりたまひけるは、おの／＼
 きゝたまへ、師匠源光は慈覚の譜弟、慈恵の御弟子恵
 心にも弟子光円にも弟子なり。光学法印の写瓶、持宝
 房阿闍梨源光とて四明天台稻生の流におひてやんごと
 なき明匠ぞかし。一流の長者たり。かゝる碩徳も諸宗
 の習学うすくやおはしけん。またはいかなる異業にや

住したまひけるにやこのたびの修行にては成仏不定と
 落居してやおはしけるやらん。人は生をあらたむれば
 隔生則忘とて修行するところをわするとて、生をあら
 たまめずして慈尊の出世にあひ奉り、悟をひらかんと
 おもはば長命の術は虵身にてこそあれ。いづくの国に
 かしかるべき池あらんとて、弟子等を諸国につかはし
 てみせしめたまへども、いづくの国にもさりつべき池
 さふらはずとてみな／＼かへりのぼる。こゝに東海道
 の使者但馬の註記澄算といふ少僧かへりのぼりてまふ
 さく、遠江国笠原の庄に桜の池とて候。南は濔海万里
 なり、化は山木まゝにあり、海をあひさることとをか
 らず。興有池にてさふらふとまふす。源光これをき
 き、その領主をばたれとかいひけると言ば、徳大寺殿
 の所領とまふす。さては源光が慥越なり、よもおしみ
 たまはじ、されども所存ありとて沙金百両あたへ永代
 のはなち文をとりて嘉応元年六月十三日の夜半にたな
 ごゝろに水を乞て件の池に入定しおはんぬ。智慧ある

がゆへに生死のいでがたきことをしる。道心のゆへに仏の出世をねがふ。浄土の法門をしらざるゆへにかくのごとく異業に著したまへり。源空師匠の存日にこの宗をみいだしたらば、などかまふさざるべき。さもあらばなどか往生の益をさづけたてまつらざるべき。口をしくおもふなりとて、御落涙あり。ときに御弟子等まふさく、正道門の諸宗に依生死をはなるゝみちはさふらはぬやらんと、源空のたまはく、一代諸教まぢまぢに、みな殊勝なり。はじめ華嚴の事理円融法界唯一心の観、阿舎の四諦縁生観方等の彈呵褒貶観、般若の尽淨虚融の観行、法華涅槃の唯一乘醍醐措捨の妙業、顕密大小権実みなくその益はなはだし。かくのごとく深理の法門は習学するといへども、これをきはめ行じとつくるものかたきなり。されば源空はいづれもく大略修行したれども末世におよび濁世になりぬれば、機分おとろへて得道ありがたければ、時機相応して念仏の法に治定して、ひとへに彌陀の誓約をたの

みたてまつるなりとぞおほせける。そのうちしかるべき御弟子等を四五人召具して、遠江の国榎の池へ御くだりあり。池はすみてちりもなく、くさもしげらず、佐々浪のみたてり。聖人おのく阿彌陀經を四五卷、御念仏數百返ありければ、あさましき作法にてうろくづをおいて、角をいたゞき、みづのうへにうかんでみへたまふ。源空御なみだをうかめねがはくは、まことの源光にておはしまさば、本身に伏して現ぜさせたまへ。かくのごとく御異業に住させたまひけんこと、愚案のはなはだしきなりと、御引導ありければ、みづのそこにしづんでのち、行法の躰を現じてまたうかみいでたまへり。不思議なりしことどもなり

卷 第三

第一 寂空御問答の事

治承二年十月上旬に源空黒谷へ御参あり。寂空御対面あり、いかにと仰せける、源空ほどひさしく存じ候間

御目にかゝらんために参てさふらふとまふさる。釈空のたまはく御辺誠か、この近年は念仏の諸宗に超過たりとたてたまひてみづからも専ら念仏になり、人に道心をすゝめても念仏をもて生死をはなれよ、これにすぎたる法なしとまふさるゝと云云源空こたへてまふさく、左候、このたびの出離はひとへに念仏をもて決定の業とおもひ定て候へべ、自行にも化他にも称名念仏をつかまつり候とまふし給ふ。その時釈空いはく、先祖上人達も観仏三昧殊勝の道理をこそ立られしかとて聖道修行の甚深のやうをおはせらる。源空は念仏の諸教にすぐれたるやうを立たまふ。たがいに広学にて数尅文釈をふるひて御問答あり。源空いはく機法あいかたはゞ得道決定なり、時機にあひそむかば凡夫所入かたかるべし。造悪の愚人等観仏三昧等の深理の法をのぞまんや。彌陀の願力によらずんば出離不定と存候。釈空凡夫として聖人にならんといふは一向小乗なり、生死をはなるべからず。一切善悪都莫思量なるうへ

は、諸法を一仏乗と開會するに、なにものかもれんやとて、おほきに笑ひたまふ。源空まふしたまはく、仰せはたゞ諸法のはたはりをこそ仰せさふらへ、それはこと新しくおぼへさふらふ。八宗九宗の法門はいづれも勝劣なくさふらふ、教のごとく修せばその証をあらはさんこと掌をかへさんがごとし。その段もとより不審候はず。機法相應して凡惑ひとしく得道せんかたをばかなふまじくさふらふや。文証をもてまふしあげ候はんなり。釈空結句はらをたてたまひて、御辺はたれにあひてならふところの法門ぞ、さすがに釈空が智分はものにとへば大海のごとし、なんぢ学匠とおもふとも釈空がしたぞかし、釈空にむかひてかゝる事をまふすとてせめたまふ。源空のたまはく、これは法門にてはさふらはで一向諍論にてこそ候へ、あはれしかるべき判者だにさふらはゞ落居すべくさふらふものをやと、まふされければ、釈空腹を居えかねて、念仏すぐれたらば御房ひとりまふせ。そこまかり立てとて、お

んそばなる枕をとりて、投打にせさせたまふ。そのときになれば御前なる同侶達まふされけるはかほどおほせ候に、まづたゝせたまへかしといひければ、源空力なく立たまふとて、聖教をば御料簡さふらはでとまふさる。いとゞ寂空はらをたて医王山王も御照覧あれ、自今已後師弟の義あるべからずとて、縁までおふて出たまひ、足駄をとりて追さまにうちたまへば、左の耳のうへにあたりて、あけに血ながれて逃たまひけり。ときに同宿等大略こゝちよきことにそおもひあひける。人ことに勝たるをば猜、劣るをば卑むならひにてこのほどあまりに学匠めきてありつるが、はやうせぬ聖人御誓状ありて御打擲あるうへは、よも左右なく御免あらじとて、みなくこと切ぬとぞさゝやき相ける

第二 寂空御往生の事

おなじき三年二月に寂空御病床したまう。源空このよしをつたへきゝたまひて登山して、しのびて御房にまひりたまう。学秀僧都をよび出し言ひけるは御違例の

ようけたまはり候あひだ、御老躰の御ことにて候へば、いかゞと存さふらふて登山つかまつりて候とまうす。ときに学秀僧都よろこびていはく、上人は三百余人の弟子どものなかに、法然房はまことの大学匠なり。寂空があてたるをばよも本意にはおもはじ。されば偏念あらじとぞおほせ候ひしが、嬾しくも御登山候、しばらく忍て御座さふらへ、なにごとも申しあはずべしとて、傍の障子のまにおきたてまつる。さて学秀僧都枕もとへまひる。寂空御目をひらき、あの燈かきたてよとおほせありて、おのくゝにむかひてのたまひけるは、人おほしといへども法然房は心あるものなり。寂空は明日辰の一天には臨終すべきなり。法然房はいかでかしるべきとおほせければ、学秀僧都まふさく法然房は内典外典に通じたる学匠道心者にてさふらへば、これにてまてさせたまひて候ひしことをば、すこしも意根不審にはよもこゝろにはさみさふらはじ。うけたまはり候ほどならば、登山つかまつりてよそな

状如件

治承三年己亥二月日

叡空判

がらも承はらぬことは候はじ。また御病床のこと当山は申すにをよばず、洛中まで披露候へば、これにさふらひしときの御誓文におそれて近房にも候らんと申す聖人あはれきたれかし、なにごともいひふくめんとぞ仰せける。しばらくありて学秀僧都おりふし法然房こそ参てさふらへとまふされければ、叡空これへと仰あり、源空御前に畏る。叡空のたまひけるは、うれしくも来りたまひたりいづぞやのことに誓状して打擲せしかば無念におもひたまひて、よも登山あらじとぞんじつるに、只今来臨よろこび入はんべれ。一期の対面これもかぎりなるべしとて、叡空書記せんとて、御心底ともくれぐれ御物語ありて硯と紙を召よせて、自筆にものをあそばす。当座の人々いまなにをあそばすやらんとおひあへり。これは聖教の讓状なり、その状にいはく讓渡聖教の事、比叡山西塔黒谷の經藏におくところの五千余卷の經論、北白河中山の經藏におくところの三千余卷の聖教のこるところなく讓あたふるなり仍

法然房とかきたり。その時になれば比法然房こさかしぶりして、念仏の法門とて無相伝のを見出て上人に頭はられまひらせ、坐敷追立られまひらすのみにあらず、永御不審蒙とそねみつる同侶たち兒達、いま御讓状をたまはられければ、みな口をとぢ智者と智者との論談は子細ありけりと、さゝやきあひて偏執を失ひけり。中にも淨憲法印は師のつへの弟子にあたるは法門の印形といへり、面目なりと感じたまへり。叡空御急病と披露ありければ、諸方より檀越御弟子等来集せらる、およそ四五百人もありけん。さて叡空上人その夜もあければ本尊にむかひ威儀例のごとくして即悟三昧に住してつるにおはりぬ。御弟子以下諸人涕泣したまふことなめならず。阿難尊者の恒河のほとりにして、四十余年の化儀につきて三昧定にいりたまふがごどし。ときの哀傷師弟のなごりどもつくしがたき

ことどもなり。されどもかくてあるべきことならねば、御棺をしつらひ入棺したてまつる。兩三日をへてすでに茶毘したてまつらんとするとき、寂空御棺のなかよりこの棺の蓋をひらけと仰せいださる。各おどろきさはぎあはて、空信学秀御棺をひらきければ棺の中よりみづからおきたまひ、御手をひかれていでさせたまひ源空にむかひ、坐具をのべ三札をなし、源空本地身歸命大勢至化度衆生故於娑婆出現と三度となへたまひてのち、御座になをり諸人にむかひ、泪をながしたまひけるは、法然房を球魔王官に御沙汰ありつるをきゝて、今こそ存じたれ、われ未定してありつるところに、球魔大王来現して大日本国の源空の本師寂空に拜せさせんとて、誦していはく、源空本地身大勢至菩薩衆生為利益度々出現故と誦してさりにき。かゝる薩埵の化身を打擲しつる罪障を、懺悔せんがために、又蘇生するなりとて硯と紙をめしよせて、讓状を別紙にかきて四明天台の沙門寂空判進上法然上人とかきなを

して法然房にたてまつりたまふ。さて寂空は源空にむかひ十念相統して往生をとげたまひけり。さきには三昧相承して即悟三昧に住して終たまひけり。今度は念仏三昧に治定して禪定にいるがごとく御息たへさせたまひけり。観仏念仏の両益をあらはし、二度の往生をとげさせたまひけるこそたふとけれ

第三 南都勅進の事

治承四年十一月に法皇より御勅使あり。本三位中将重衡の卿、南都炎上のこと御勅進あるべきよし勅定をくださる。その宜にいはいく南都の仏法滅亡の条朕が愁歎におぼしめす。聖人いかでか同心せられざらんや。賊徒等七大寺をほろぼすといへども、余をはしばらくおく。東大寺はこれ先皇の御願なり。十六丈の盧毘那仏一時に破滅す。御身量震襟としておきどころなくおぼしめす。はやく上人鑄仕を加へられ、よろしく仏閣を建立し仏像を安置せられば朕が喜悅のところなり、まづ率加したてまつるとなり。勅使藏人信国上人の御房

にまいり宜のおもむきまふしたり。上人宜のおもむきを聞しめして、御勅答には御宜かたじけなく仰下さるといへども、源空山門の交衆をのがれ遁世隠居の身にまかりなり、ひとへに後生の勤行ちゝに及びさふらふ。つぎに年齢つゝまりきたりて造營その期をわきま

へずさふらふ。就中に山林籠居の身にかゝる大勲進そのはゞかりはなはだしく候。自余貫禪房へ仰せくだされ候べしと云云。法皇上人の御答をきこしめしおし返して仰くだされけるは、弟子分のなかにしかるべき器量のともがらあらばさしまふされよとなり。上人申さく、もし俊乗房澄源とまふすものがおもひかゝりさふ

らはんかと、時にすなはち御勅便をめさる、やがて参内つかまつる、南都勲進のよし仰くださる、澄源御奉加をたまはりて左右なく領掌つかまつるあひだ、後白河の院の御奉加にはく奉加せしむる仏閣造営をなすべきこと、みぎ奉加にいたりては、東大寺仏殿金堂講堂戒壇院来迎堂鐘樓經藏仏閣寺聖殿寺鎮守拜殿湯屋大

透牆凡目録かくのごとく造營のあひだ、防州をもて私領として造功をなすべきたくみの大工侍従大納言種安に補す、よろしく諸人助力すべし、奉行左少弁行隆に下知をくはう仍執達如件

養和元年壬丑四月日

参議彈正少弼藤原朝臣 泰定

俊乗房にたまつる。御奉加の目録奉行大工一紙にのせたり。澄源これをたまはりて上人見参にいれまひらする奉加のおもむきを御覽じて仰けるは、あつばれわ僧は権者かな。これほどの大勲進をうけとるとぞおほせける

第四 澄源大神宮参詣の事

そのうち澄源はまづ伊勢大神宮に三七日こもりたまひて、抑々天照大神は天神七代本地過去の七仏なり。

地神五代は五智の如来なり、かの第一の御弟子仁王のはじめとして、みもすそ河の流きよくして、衆生の願を成就したまへり。これ私の名利にあらず、ひとへに

伽藍草創のためなり。たちまちに成就円満せしめたまへとかきくどき、祈請したまへば、すなはち御夢相あり、唐嬖東の童子方寸の玉をあたへたまふとみて夢さめぬ。うつゝに見たまへは敵重殊勝の玉袖のうえに現ず。澄源あまりのたふとさになみだともにかの玉をくびにかけ、勘進するに綾羅錦繡錢貨米穀金銀銅鉄絹布綿馬のたぐひ、こゝろにまかせて出来すること本朝にかぎらず、ふくかぜに草木の靡くがごとし

第五 月輪殿御出家

付たり上西門院御詣の事
同小地天上の事

寿永元年三月に月輪殿へ上人を召請まふして御出家あり。法名は円照、同元年七月上旬に上人を上西門院御請におもむきて御説戒あり、沙彌戒具足戒少律儀戒等の七日の御説法あり。女院を始たてまつりて感涙をながしたまへり。初七日より少蛇唐垣のうへにのぼりて七日さらず、侍る人々不思議に思けり、もし御説戒を聴聞するかとうたがひたまへり。七日談ぜられ廻向結願ありければ、少蛇唐垣の上よりすべりおち死にお

はりぬ。かの口より十二三ばかりなる童子唐嬖東して角ゆいて天をさしてのぼると、女院月輪殿は御覽ず。已下の人々の目には蝶いで、天をさしてのぼるとみる。みるところは不同なれども蛇業をまぬがれて天上しけりと喜びたまへり

第六 頸真籠居付たり大原問答の事

こゝに天台の座主権大僧正頸真とまふす碩徳おはします。未だ大僧都にておはします、ときに承安三年生年四十三にして、官職を辞して大原に籠居して、とし久しく春秋をおくりたまへり。寿永二年に日吉の御幸のとき座主明雲の賞を法印にゆづり、助せらるゝといへどもかたく本門をとちてあへて事にしたがひたまはず、生死のいでがたきことをのみなげたまふ。そのうち衆徒きよし申すによりて文治六年三月七日に天台座主に補らるゝといへども、うけがふ気色なかりしかば、勅使大原にむかひ宣命をくださるゝ。座主職をさづけられついに召出され同き五月廿四日に最勝講の証

義をつとめ、おなじき廿八日大僧正に任ず。しかりといへども動すれば隠遁のおもひふかくして、つねに永弁法印と出離解脱のことをのみ談ぜられけり。かの座主大原に隠居のころ三位禪師をもて御使あり。まことにや念仏往生勸進のよし承り及び候、そのうへそうじて諸宗の所談候なり、顕真このたびなにをもてか生死をはなるべきと云々。上人御返事には、うらうらと南無阿彌陀仏とまふしてこそ生死をばいづべく候ふと云云御使かへりてこのよしを申、座主のたまはく、法然房は道心堅固のものときゝたればいさゝか偏執のものにてありけり、さすがに顕真などを在家無智の尼入道に同じて念仏まふせといふ、まことをば知ざるが念仏勸進の由承さふうふと、いひ送りたること偏執しかやうに愚痴のものに順じて返事したるごさんなれと。ある兇害のものありて上人に申しけるは、これより仰られたる御返事を座主きこしめし、かやうに仰せられ候とまふす。上人の仰には、それは顕真の御不審

あるが道理、そのしなこそ上臈にておはしますとも、いかでか浄土の法門などをば、たやすくしろしめすべきの一流の長者たりといふとも諸流に違することはたやすくなきことなり。一切はしらざることは不審をたつることぞとよ。ときにまた件の人僧正の御もとへまいりて、法然はかやうにおほせさふらふと申す。顕真これをきこしめして、いまこそきゝなをしたれ、なにごともしざることは不審なるものぞといふは、愚癡なれば不審なごさんめれ。法然房ならではだれか顕真をかやうにいふべき、いざはじめて浄土の法門みんとて、なを大原に隠居して浄土の三部經天親竜樹の論文、善導の五部九卷の疏、そのみならず五祖の釈論章疏等明鏡に御覚じて義理を案じたまふこと兩年をへて、弟子等にむかひてのたまひけるは、顕真このあひだ浄土の法門みおぼへたり。それにつきて不審おほし今度の不審こそ法然房と談ぜずはあるべからず。法然房を召請して不審をあきらめばやとのたまひければ、

各申されけるは、出離大事の御法門、聖道浄土、折角をばいかでか御一人してはきこしめすべき。この辺の碩徳達学匠どもをめして、きこしめされて不審なんどもをたておほせられ候へとまふす。なにともおのおのはからへとおほせければ、相摸の阿闍梨に廻文をかきてもたせてめぐらす。廻文につけて大原の竜禅寺に集会する人々の事、光明山の明遍僧都、侍従已講の長慶印誓聖人、笠置の貞慶上人、智海法印、大原の本性上人、嵯峨往生院の聖、木幡の明定房法印大僧都、権大僧都証真、淨賢法印、淨憲法印、仙義律師、学秀僧都、淨寧法印、妙覚寺聖人、椽本空法房、生馬聖人松林院仰徳房、長桑寺定蓮房、菩提山藏人入道空觀空仏房八坂大和入道見仏、神楽岡淨空房、中山信蓮房、淨遍僧都少将上人、実惠大納言、法印寛雅、中納言法橋慶雅、醍醐の座主空範、石山の僧都覚円、梅尾明恵上人、高尾慈蓮房、財寺求法房、仁和寺勝願房、範頭僧正、竹林房法印、左大臣僧正顕真惣して廻文にあづからざれ

ども、心ある人々、老若ともに大学匠三百余人、或は偏執のともがらもあり、或はまことの道をなげきたまふやからもあり。かれこれ集会して列座す。其外道俗貴賤二千余人来集す。そのとき侍従已講を使者としておほせけるはいつぞや申せし浄土の法門このほど大原に隠居して見おほへはんべる。それにつけて諸宗の所談相違のあひだ、落居のためにまふす、かならずたわたらせたまふべし。上人の御返事にはやがて参して御不審をもうけたまはり、愚僧もころざすむねをまふすべしと云云。御使はかへりぬ、上人かくのごとく南都北京の寺院辺士の碩徳大学匠念仏偏執の人々集会するほどの大義におよぶ条をば、ゆめにもしろしめさず、たゞ後生菩提のために聖道浄土の相違、自力他力の衆生の機分等安心の所談とおほしめし、御弟子等もたゞなをざりの法談なんどこころへはんべれば、さはなくして凡そ日本一の宗論得道の折角なり、上人も御一期の御大事これにすぎじとみへたまへり。しかるを

かゝるたくみをばゆめにも覚悟したまはず、なにの用にもたつまじき初心晩学の無智愚痴の入道どもばかりめし具す、このなかにも澄源隆寛聖覚等を上首としてかれこれ廿余人なり。上人は例の御ことなればやがて入御あり、ころは文治二年後鳥羽院の御宇なり。さるほどに竜禅寺にいたりたまひて寺門をさしのぞみて御覽ずれば、三百余人の高僧二行に列座せられたり。御発起の顕真は上座なり、左のわきは大原の本性上人、右のかたは実範碩徳左右居わかれたまへり。上人門外に徘徊したまひけり、御弟子等これをみてあはやこのあひだに在々所々にして法然上人浄土の宗義をたてさせたまふことをのみ沙汰し。あるひは偏執し、あるひはいきどをり、難じつるともがら折をえをの／＼同心して来会せり。今度の聖道浄土の勝劣、大小権実の対判、結句とみへたり。いかなる文殊舍利弗の智慧なりともか、なふべきともおぼへず。三百余人の習学者は上人法門につまじたまはゞ、我情の手枝をあてたてま

つり、ながく浄土宗のはたほこを倒しおらんと義定したる気色あらはなり。御弟子等はわが師匠今日をかぎりにうせたまふべきよとおもひあへり。諸経の肝要一代至極たゞこの文にありといふこと、破れなんとおもひてこゝろも身にそはず。しかるところに上人御弟子のかたへかへりむかひたまひてのたまひけるは、みな人は児を扶持し髪をけづり手足をあらひものをおしへたて、骨をおりてこそ弟子をばもつに、源空はひさしく骨をもおらで二千余人の弟子をまふけたるぞとよろこびたまふ。そのとき御弟子等、このおんことばにこそ、すこし力をつきて覚けり。されども上人聴衆笠きともなかをかきわけ／＼入りたまふ。正面の脇の間よりのぞみたまふ。法然上人の御とものなかに信濃国の住人角張の七郎大郎入道成阿といふものなり。上人の御袖のしたよりくゞりとをりて、上人の御まへにたちふさがり、当座の気色をみれば上座せられたりける顕真は、高麗縁の盪二帖かさねて、そのうへに豹の

かわをしきて座せられたり。上人の御座とおぼへて大文縁の畳二帖かさねて敷たり。これには人も居す、成阿これをみてわが上人の御座には敷皮もなし、かやうにては一段さがりたり。なんぞや敷皮に對して敷くべきとみまはせども、さほどの座敷なればものもてし、いかゞせんとおもひてみるほどに、礼盤にふたへ縁の半帖あり。これをみて成阿未座なる若学匠どもの居ならびたる左右の袖をわけて、無礼に候へどもと申てまかりとをりさふらふ。上人の御座のしどけなく候。みまいらせ候はんとて、ついとをり、仏前なる礼盤の半帖をとりてひちたてゝ上人の御座にかさねてしき、うしろ座に跪づき、ひのきはねの扇抽出し、上人の御方へむかひてこれこそ御座にて候へ、入らせたまへと申す。上人御座に直りたまへば、廿余人は座敷なく、そとろきてたちわづらひたり。成阿いかにや御房達これへ参たまへ。今日こそ自宗他宗の得否、今日を限るべし。出離一大事の御法門聴聞つかまつらん事、われら

人界の生をうけたるさひはひなれ。人身のをもひで、宿善のほどこれなるべしとてうち咲てゐたり。廿余人は成阿がことばにつきて一度にいりて上人の御うしろ仏壇のまはりにゐながれたり。三百余人の学匠ども若干の聴衆等、目をすまして上人の御自をまもり、成阿がふるまひを御覧じておぼしめされけるは、たとひ日比内談したりともたゞ今のなかにては、かやうに振舞べしともおぼへず。初声の一言をもて法性の深厚をしると云云。法然房の智にわれらを物のかずともおもはぬゆへに、今この入道もかくのごとく振舞ごさんぬれ。加様にては今日の間答に決定つまりぬべしとぞ思給けると、のちに御懺悔ありけり。上人当座の気色を御覧ずれば、その日の問答の間口には大原の本性上人と見たり。題者は南都の範頭僧正と見たり。精義者は宝持房法印、註記は嵯峨の竹林房法印淨憲のまへには硯と大巻のまき物のつき紙一卷をかれたり。範頭のまへには釈拍子一帖おかれたり。これは上人暫も法門に

わづらひたらば打々と打しらべ立べき料と見へたり。おほよそ月支震且はしらず、日本一の宗論とぞおほへたり。さるほどに座敷定り東西もしづまりけり。問ていはく誠にや、上人諸教にはまさしく出離なし、たゞ念仏の一法のみありとさふらふや。自從得道夜乃至泥洹夜所説之法皆是不虚といへり、いかでかかやうにたておほせられ候や。上人こたへて云く、これ禁忌の句なり。一口演説法衆生拔業回衆生得脱者皆是良薬法といへり、いかでか諸教の出離をふさぐべきや。かさねてとふて云く、引るゝところの文証しかりといへども諸宗の出離は得道むなしかるべし。浄土ひとり出離決定と勸化候なるや。答て云く、問は諸備のいたすところ答は随機の説といへり、問者重疊せば答者感効にするか。問答四五返におよべども満座ものもいはず、そのとき上人のたまはく、諸人卷舌す一座直面たり、向顔艶色すいかん、ときに聴衆の中より一句かきて満座の中へ投いれたり。とりてみれば衆機放光は法華一

会三百の僧侶は念仏の開道なり、上人おほせけるはおのゝ宗論たるべくは經をさだめ、論をさだめ、人師の所釈を定法とせんと云云。精義者のいはく、おほせ最しかるべくさふらふ。仏説によりて薩埵の説をさるべからず。菩薩の論蔵によりて人師の釈を弄つべからず。經論の文証をもて指南とせん。三国の所判をもて蘭菊をさだむべきと云云。源空の言く智度論にいはく上人の論談には仏經をひいて非をさると云云。しかれば自宗の出離決定の指南は經論をひいて証拠にそなへよ、諸宗の得道は深理正蔵の勝義得否をきよくしたまへと云云。題者のいはく、法然房の仰もともしかるべく候、論談の正中には黒繩を引、白布をししくべしといへり。經論章疏をもて本とすべきなり云云。ときに註記視をならし筆を点じて両方のことばを書付をはんぬ。上人のいはく釈尊出世の本懷は、みなこれ彌陀の本願をあらはさんためなり。出離決定は彌陀一仏にかぎれり。諸宗の得道は断惑証理のゆへに出離ありて出

離なしと云云。題者拍子を打て法然房のことは一義兩言なり、なんぞ鼻端に備んや。さしたる証文なく宗を建立して諸教の出離を塞ゆべきかとしらべたてたり。精義者つゞひて菩薩の大願は利他を先とす、如来の成道は法界をすてず、諸宗において或は出離或は無出離といふや、仏説には如来の開会を法界とするなり、始終誓願凡夫出離といへり、法然房の仰らるゝごときは大師の釈にも、若は仏説にも背く、是いかん。上人の玉く源空私ならず然ばすなはち観无量寿經にいはいはく、具足十念称南无阿彌陀仏称仏名故於念々中除八十億劫生死之罪云云。観仏三昧經にいはいはく、三世諸仏依念彌陀三昧成等正覚と云云。秘密藏經に云く、三世諸仏出世本懷阿彌陀仏名号為説と云云。心地観經にいはいはく一代諸教諸善根並一念仏功德力専修超過名大善余悉為劣非往生故と云云。南岳大師の云、念仏一代聖教肝心八万法藏骨目出離生死在所往生極楽力道と云云。天台止観に云、以論止観者念西方彌陀但專彌陀為法門主と

云云。明恵聖人のいはいはく、仏教多門にして八万四千にわかれたり、衆生根機万者にして塵勞もまた八万四千なり。しかれば經にいはいはく我如良医智病説薬服与不服非医咎也と云云。一切の法は得道実也。然れば出離に差別をたてらるゝ条もとも不審となり云云。上人いはいはく聖道門の得道しかりといへども時機にあいそむかばその益あるべからず。機法相応せずばむなしかるべし。教の浅深権実の対判、大小のあらそひ、七日の間ことぎれずといへども、機法和合し時機相応を、たぐらぶれば、道理に伏して法然聖人の御義に同じぬるうへは、みな浄土往生に帰せられけり。螿におのゝくみな学匠にておはしましければおのゝく帰伏し、大原の七日の間答事畢。浄土宗いよゝゝさかんなり、それよりして聖道浄土の宗論はとゞまりぬ。上人の御勸化もともなかなりしに大原の間答にかち給しかば日本一州帰依ますゝ繁昌し、目出ありしことどもなり。御発起の顕真は浄土宗において多年の御不審をひらき給

へば、すなはち法然上人にむかひ坐具をのべ香炉をと
りて仏陀と称し給けり

卷 第 四

第一 尾張法橋子餓鬼の事

文治三年十二月に楊梅高倉尾張の法橋頼秀の宿所へ上
人を召請まふしそれにて歳末の別時をはじめられる。

上人おほせには四部の衆はみな番帳にいるべし。その
名帳の下にわがこゝろざさん亡者をいれて、弔うべし
とおほせければ、おの／＼亡者をいるゝ。亭主の女房
申しけるは、みづからはたゞ法界衆生といれたく候。

さらばももしかるべしとてかきのせたり。第二夜に
あたる丑の時の時を女性四五人ともなひて行道して念
仏する、万事みな睡眠したりしとき、上人は仏前にし
て、しづかに御念仏あるに、法橋の妻女、後門の方よ
りいそぎきたりて、上人にまふしけるは、わらわはう
たてしきおちどをまふして候。ゆへはいるゝときのも

のゝ名帳の下に心ざすところの過去性具をいれよと承
候間、いづれをかくべきとおもひさふらひて、法界衆
生といれさせ候へば、もるる衆生も候まじければ、こ
の法界衆生のなかを三人のぞきたくさふらう、おもひ
わすれてみなふさねて法界衆生といれて候。たゞいま
除きて給さふらはんと申す。上人のたまはく、いづれ
の人を除きたき者はと、御たづねありければ、はゞか
りて暫まふさず。上人かさねてのたまはく、なに者の
除たきぞと仰ければ、あの法橋が子、女子二人男子一
人はんべりしが、みな死して今年六年か七年かになれ
り。これはわらはがためには子にてもはんべらず、生
て候しときも、なにとしてもにくゝさふらひしが、法
界衆生といれて候はゞ定て是らもその弔にあづかるべ
く候。さればこの廻向に洩れずさふらはんこと詮なく
おぼへ候。信空申したまはく、死してのちはなにかく
るしかるべき、除すともあれかすとまふされければ女
性申しけるは、さ候はゞ自らはこの御時をあげまいら

せ候はんとまふす。上人の仰にはたゞ三人をのぞきたからば、除けと仰ければ、法界衆生のなかを法橋が先腹の子ども三人をは除とかきつけたたり、そのとき女性よろこびけり。第五夜にあたりて例の丑の時、女房しづかに念仏する暁方に、後門の方よりはつと叫びて上人の御前へまひりて跪づく。なにごとぞと御たづねあれば、女房まふさく、生々世々口惜き身にて候、たゞいま行道し候へば、後門にして爰すそをひかへるやうに侍べるあいだ、なにもものぞとみ候へば、少さき餓鬼ども三人わらはが足にとりつきて申こと、こゝろうく候。生きたりしときこそ御にくみ候らはめ、なにとて死してのちまでにくゝおぼしめすべき。法界衆生といれさせ給ひて候ひつれば、すこしの苦患もはれ候ひつるに、そのなかをだにものぞかれまいらせ候かなしきよ、上人の御廻向施餓鬼にあづかり候につけてもその恨みすくなからず候。しかるべくばものとのごとくいれて給候へとて、とりつき歎候ひつる気色あまりに心う

く候とて、髪をきりて御前におきまかりいでぬとぞみへし、ゆき方しらずとつたへ畢ぬ。又件の女たちまちに遁世しけるとぞきこへし。かゝる悪念のものも上人の御利益によりてたちまちに正理に皈しけるたふとさよ

第二 上人蓮台野へ御出の事

同じ五年の春のころ上人御弟子等十余人召具して、蓮台野に御出ありて仰せけるは、源空而三年巳前にいささか夢にみるこゝと有り。夢の実否をしるべきことありとて、すこし高き塚のうへに御登ありて四方を御覧じめぐらし、御目にかゝりたる首を御弟子等にとり集めさせて、塚につき行道して阿彌陀經念仏數遍となへて御とふらひありて御詠あり

皮にこそ男女の品もあれ骨には変る人形もなしとぞ、あそばして暫くかうべを御覧じければ、百四五十もありたるそのなかに、おほきなるかうべより血の涙をながしたり。御弟子等驚きて余りの不思議さにこ

れはいかなる人の首にてか候らんとまふしたりければ、上人もいかでかするべき。先づ此の首を火葬せよとて件の首をやき、名号を書し、たちかへり給て御弟子等に御物かたりしたまひけるは、源空いにしへ山に

ありしとき、同学の仁に三位の註記祐尊といふものあり。しかあるとき京へ登りたりしが、二三日はありてある夜失せたりき。たづねけれどもみえず。つぎのとし人沙汰しけるは、これを殺害して蓮台野にすてたりときく。是を一族ども知らず、むなく犬野干にあらされてうせぬ。源空がゆめにみへていはく、われはこれ過去の宿習によりて人に殺害せられて、空く野外のつちとなりぬ。日比の同学のよしみにとふらひて給候へ、かうべは野中にあり天台の習学あれどもいまだ得道せず候とて涙をながしむへたり。源空も夢心になみだをながし必ず訪らひたてまつるべし。こゝろやすくおもひ給へといへばよろこびけり。夢さめてのちも涙を流したり。もしかの祐尊が首にてあるらんとおほせ

ければ、上人その夜の御夢に祐尊御とふらひにあづかり、たちまちに天上すると御覧する。殊勝なりし御とふらひなり

第三 南都供養の事

正治二年四月修乘房重源、上人を南都へ召請まふす。

これは東大寺半作の軒のしたにして觀經の曼陀羅、唐土よりわたしたてまつるところの五祖の眞影を供養したてまつらんがためなり。上人御領掌あり、すでに御約束の日になりしかば上人御弟子十余人めし具して入御あり。上人の御意にはかように御遁世の御すがたにて御供養あるべきよしなりしを、万山評儀ありてまふしけるは、その儀あるべからず。本朝無雙の大伽藍なり、遁世隱居のことは各別の儀なり、これは大法会諸仏菩薩の御影向のにはなり、いかでか不法不義にてつとめられんこと、人倫あざけりたるべしとて、法会の具足を上人へ送りたてまつる。力なし当時ばかりをばとぞ仰けるとき、ところの衆義として徒僧大童子中童

子力者人工にいたるまで、みなく南都の経営なり。庭前に幡をたて仏壇華机天蓋宝散玉珠の華鬘高座札盤錫杖香炉香箱念珠散華華籠新調美麗なり。請僧三十日出仕の躰は羅漢にひとし。御導師の躰は瓔珞細軟の法服に九帖の香の袈裟、威儀は釈尊のごとし。寅の一点の乱声、辰の尅の集會、耳目をおどろかし、幡蓋かぜに驟へし、自在天の粧ひをうつし、沈香みきんに薫じて海紫岸のおひに類し、持金剛僧の振舞ひは法界宮の侍従にたり。珠幡七宝をいろへ宝螺六瑞をあらはす。おほよそ堂内のかざり、供具の躰言語道断なり。鏡鉢虚空にひびきて貴賤の眠をさます梵唄雲穿て伽陀は妙をきはめ、大阿闍梨の法義はまことに智処城の教主かとうたがはれ、三帰発願の音声は、舍衛の金言かとあやまたる。まさにいまこの曼陀羅を解説するに惣じて四分あり。一には勸発大衆用心分、二には縁起因縁生信分、三には正説曼陀羅法門分、四には廻向法界往生分なり。これより始めて彌陀觀音願主のふかき信

心をかきみ給ひて、浄土の姿相の曼陀羅を織あらはしたまふ。人おほく生信をたまはらしむ。正説曼陀羅法門分といふは、右の縁は觀經の序分義卷第二、一代の法門をはじめとして厭離穢土欣求浄土のむね、禁父禁母の往生歴々たり。左の縁は觀經正宗分卷第三にあたる。三昧正受の義におもむき若男若女の觀門明々たり。下の縁は正宗分上中下品の来迎華台宛然としてたのみあり。中台をあふげは四十八願莊嚴浄土の義式彌陀の垂迹なり。惣じて三方の縁は釈迦撥遣の恩徳肝に銘ず。彌陀如来願力所成の莊嚴觀音勢至諸菩薩九品蓮に念仏に帰し、散善九品は品ごとに往生すべきむね、五箇日のあひだ御讚嘆ありければ、聴聞のともがら耳をおどろかし、きもに銘ず。涙もおさへがたきがゆへに偏執のやからも邪見をすてゝ无生にいり、たちまちに三祇の功徳を満じ、まさに五智の果位に登る。しかれば三賢十地の大士四禪六欲の天衆みなことごとく侍

衛す。生前の所願も満足するこゝちなり。おほよそ貴賤袖をしぼり、衆徒袂をうるはず。慢心諍ひをうしなひ、伽藍もまことにうごきたまふかと身の毛いよだつてぞおぼへける。さて次の日より同五祖の眞影を供養せらる。凡三国伝来の血脈釈尊付属の相承、各本宗を聞き、ふかく淨土の眞門に結成せるむねをのべ給へり。そうじて前後七日のあひだ御説法の音声解脱の弊大師の旧儀をうつし、富婁那をまなび給ふ。偏執の諸宗も捨劣の義をわすれ、法相至極の習学者も我慢のたほこをそばめて、上代も中ごろもかやうの碩徳大智不思議の法門きゝおよばざるよしを、褒美して退散はんべりけり。そのうち難波奈良の伶人舞楽の秘事をきはめ、新羅高麗の曲をつくす。上下これを折角と見物する。さて上人は御帰洛あるべきよしの御出で立ちあり。こゝに修乘房まいりてまふされけるは、さてもこの大仏を造営したてまつり、同じく御堂建立かくの如し。凡そ日本一の大善根と存知候に、このあひだの

御説法について御意にかけられず候。いかほどの功德といふこと御讃嘆候はず。御供養は各別の事にて候へども、当伽藍を称揚候べきと存知候へば余取外のことにて候はず。なにさまの御意にて候やらん、さだめて經論所釈の文等候らんと申す。上人おほせけるは、この大善根は目出度く殊勝にぞ思給らん。御辺のためにはかほどの修福造営は大苦惱とこそみへたれ。日本のみならず、唐土までのくわしんは苦惱にあらずや。この功德をは念仏二三返にはおとりとぞみへたれと云々此事やがて和讃の者ありて興福寺におとなく披露する。両門跡の衆徒会合して、さてはこの法然房はこのあひだの法門等はたぐいなき学匠大智者ときゝたれば、こゝろに大偏執をもちたるものなりとて即時に大鐘をならし、衆会して僉儀まぢくなり。ある仁すすみていゝけるは、当伽藍はこれ聖武皇帝の御願行基菩薩文殊の化身として建立したまへり。しかれば波羅門僧正は南浮第一と供養したまへり。かゝる止む事

なき大伽藍を念仏二三返の功德にはおとりといふこと、これ偏執のいたすところにあらずや、すみやかに耻辱をあたへて追ひくだすべきものをやと云云次第に与力同心の悪僧七百人なり。三位の僧都覚範のいはく、当寺はこれ法相唯識のところ、大乘習学のみきんなり。たとひ経釈明文ありといふとも、そのはゞかりなく、かくのごとく過言に及べきか、これ仏意にも神慮にも違すべきものなり。はやく押よせて追払ふべきものなりと云云。此中にも中納言の僧都定範といふもの、いひけるは面々の僉議しかりといへどもかくのごとくの経論所釈の証文歴然たらば、いかでか種々の沙汰に及ぶべきか。それは学匠義にはあらず、法然房もさだめてやうあるらん、まづ子細を相尋ねてその返事によるべきものをやと云云。老若ともに大略学匠達なるあひだ、定範の儀に同じてもともしかるべし、もし不思議の文証あらんときは、無道の強議なるべし。学匠の所存あらず、一同して、上人の御宿房へよせたりけ

れば、上人は、はや御下りといふけるは、衆徒やがて般若寺のまへにて追付きたてまつる。定範上人の御そばへするりとよりて上人の召たる奥の長轡と薙刀の柄とむずと握り、加へ当伽藍造立の功德は念仏二三返にはおとりとはわたくしのことばか、いずれの経文にはんべるぞと云云。そのときになれば御弟子等南都さまへの入御はいかゞ候べきと申し候ひしを、入御ありてかくのごとくの珍事におよぶ、口惜さよとて各々色を損ず。七百余人の衆徒その外の偏執のともがらついでをもてあばれ、法門につまりてあてられたまひたらば、なんとおもひかほなり。衆徒も大略は又上人の御言を偏念していさゝかも謬りましまさば、耻辱をあたへたてまつるべき、つらたましいあらはなり。これにつけても御弟子等この辺にてはさる経釈の文ありとも御はゞかりもあるべかりぬる物をと、こゝろくるしく思ふ。ときにより所によりて仰あるべき物をと手を握る。上人すこしもはゞかりたまはず。定範がいゝもは

てざるに、華嚴經ををひいてみたまへと、定範もさる者にて、華嚴經は広本なり、いづれの巻いづれの品にはんべるぞと、上人仏地品を引て見たまへとおほせければ、さらばとて上人の御下りをおさへて華嚴經をとりぞつかはしける。時をうつさず經はとりてきたれり。定範經をひらきければ上人その經たびたまへ、文はまつけのごとし。各々は左右なくみつけたまはじとて御手にとらせたまひて仏地品に巻よせて、これ見給へと仰ければ、老僧四五人たちよりてみれば、十丈金色像六万五千躰十度造供養不如稱彌陀とみへたり。上人のたまはく、また妙塔勝心經をとりよせたまへ、引いてみせたてまつらん。南無阿彌陀仏一念功德勝於一百三十五恒河沙成滿金塔者と云云。此ほか經釈論文勝計すべからず。当伽藍は一仏一精舎一度造立供養なり、これらの經文のごとくは莫大の金像供養なるべし、念仏二三返の功德におとりとは源空がわたくしの会釈なく、明文のごとくはたゞ一返の功德にもおとり

とこそかながへたれ。げにもかゝる大乘經等の文をやぶりにてのたまはゞ力なしとぞ仰せける。定範いはく、仏々平等なり、十力四無畏内証外用の功德みなもてひとし。なにゞよりて彌陀を念ずる。功德諸仏善根にすぐれたるやと云云。上人のたまはく彌陀仏因位の修行別なり、誓願別なり、成仏別也。かるがゆへに三世の諸仏に超過せり。その日の辰の一点より終日に問答なり。然れば上人の御返答条々すぐれたり。そのうへ淨土の法門彌陀の名号の諸教にすぐれ、三世諸仏の功德善根にひいでたる肝心どもおほせければ、各々学匠にてみなく爛伏したてまつりけり

卷第五

第一 明遍僧都夢天王寺の事

文治四年の春のころ明遍僧都いさゝか夢想を御覽する。天王寺の西門をさしのぞきて見給へば、非人乞者その外病者など臥たり、看病人あまたあり、或は飯

或は栗柿梨を病人にあたふるに少々うけとるといへども、まめやかなる病者は手もかけず。ある看病人のまことに慈悲ふかけなる僧おも湯をさまして病人にすゝめてとをり給へば、力つきたる病者も大事なるもこのおも湯をうけてのむと御覽するに、夢こゝちに夢をあはせ給けるは、かたき栗柿梅桃梨を口入たまへば、大事なる病者は一口も食もせずとみへけるは、かやうに堅き菓物は華嚴天台等の法門、いまこの大事なる病者はわれら極悪最下の衆生なり。法は難行なり、衆生の機分は劣なり、機法あひかなはぬが、かくのごとくみるよと慈悲ふかけなる僧、看病人のためにおもゆを引いてとをるを器量なる病者もきわめて不覚の病者もみなみな口を開けて吞と見は、彌陀の本願慈悲深き僧善知識なり。南無阿彌陀仏の名号はくだんのおも湯なるべし、機法相応して生死をはなるべき瑞相を六方恒沙の諸仏のてらしてみせしめ給よなどおもひ合せ、このよしを上人へ記してまひらせらる。これすな

はち上人御勅化の殊勝なるがみゆるよなど、いとど帰伏し信心ふかゝりき、たふとさまふすばかりなし

第二 修明門院御參の事

文治五年修明門院にして女院へ上人を召されおはしにして、七日御説戒あり。南岳大師天台に伝へ給へし戒品なり。又慈覚大師五台山にわたりて文殊の即身に相ひ奉つり御相伝ありし三種淨戒叙空より上人御相伝ありし戒なり。この三種淨戒といふは一には有情邊益戒、二には勝善法戒、三には勝律儀戒なり。この三種の戒に十二の戒躰あり。一得永不失の大乗戒なり、是らの戒行七日御讚嘆あり、第五日にあたる朝いまだ御説戒はじまらざるに香炉に火ありて兩三日きへず。この煙にあたるもの男子七人女子五人上巳十二人臨終まで異香薫じてうせずといへり。女院上人の御目には十四五ばかりなる天童、香炉に火をおきて修明院の御前にて勢至菩薩大乘戒七日御讚嘆の結縁に梅檀をたきて、切利天へ登るとまふして天をさして登ると御覽ずる。

余の人々の目には雀飛びのぼると御覧する。又説戒結願の時は秋の下より鬼とびいで、萩のうへにのぼる。

高くとびあがりて落て石にあたりて首を打ちて死におはんぬ。この鬼の口よりびんづらゆいたる童子天をさしてのぼるとみをはんぬ。畜生なれども不惜身命のころざしふかくしてたちまちに畜業をまぬがれけるも不思議なりし事どもなり。唐土には隋唐二代の国師大極殿にして仁王般若を講じ給ふ、いまは法然上人清涼殿にして御説戒あり。おなじく女院に袈裟をさづけたまつり給、唐の安然和尚は戒品つたへたまひしかども、袈裟をば授けられず。今の上人はかれこれ兼学して帝珠をさかへたまへり。それよりいよ／＼和尚上人の位うつたかくおはしまし、たふとき事ども、申すばかりなし

第三 耳四郎の事

爰に河内の国の住人に天野の四郎といふ悪党の長本あり。かの天野は人の有力なるをきゝては夜打をも山賊

海賊等のころとなくうばひとる間、人異名に耳四郎と名づく、ある時信空の宿所姉が小路白河二階の房え上人を召請申されたり。折節かの耳四郎都にのぼりて在々所々をためらひあるきけるが、便宜よかりしかばかの貴坊へいたりぬ。又縁のしたよりくゞりいりて、人のしづまるをまちしのび居たり。上人つねの御事なれば、出離の要道袈裟有為無常転変の所を常住におもひいりたるはかなさよ、極楽無為の不退の快樂を期すべきこと、彌陀本願の念仏にしくべからざる道理、人界に生れかならず悪人となり、ほどなく三悪道にかへりて無量劫のあひだ苦をうけんことを、夜すでに三更におよぶまで御法門あり。天野板のしたにして至極聴聞つかまつり、なにごとともわすれてあゝわが身はいかなるころぞや、つたなき者にはわが身よりかはなかりけり。そも／＼四方の人々はみな貴きも賤しきもかならず後世をねがふぞかし。われことさら浅増しき業人ぞかし、罪業つくるこの身をやしなう口惜

さよとおもひとりて、夜もあけゝれば願いで上人へまひり、上件のわざども、この房の下に宵より忍入て、ねらひたる折節、上人の御法門承はりて先非を悔て年来のつみをなげきて願れいでたりとて、涙をながし口説たてまふしければ、上人神妙におもひきりたり。たとひ日来悪業をおかしたりとも今日よりして偏に念仏せば、悪人撰取の本願なれば、なぜかはあやまち給べき、かならず決定往生なるべしと種々に御法門仰せければ、それよりして四郎無極の遁世者にて、ついに少罪をも犯さず、めでたかりし道心者なり。しかるあひだ年来日比の敵どもそのかずおほかりけれども、四郎用心緊しくして、うちもからめもしえず、天野我は是れこのうへはとてうちほれて腰刀をだにもさゝずありければ、人もみな日比の遺恨をすて許してありける。

丹波の国の住人篠村の新左衛門範長といふものあり。

在京してありけるが、三箇年巳前に一大事におもひける一族をうたせて、なにともしてこの本意をとけばや

と、ねらひけるが、この道心をも許すまじき時分なり、うたばやおもひかゝりて私宅えすかしいれて酒をすゝむ。天野もとより上戸にて当座に平臥してはんべり、人しづまりて範長刀を抜きもちて宵に着せたる緋ひきのけ刀を指立んとするが、息音をきけば念仏の声なり、恠しくおもひて紙燭をとぼしてみれば、彌陀如来の御すがたと幻のごとくにて不思議に思ひて、驚してみればもとの四郎なり。時に範長かかる悪人すら堅固の道心を発せばかくのごとし。難有身となる。いはんやわれまたいかでかこれを殺さんと、即時に発心してたがひにいにしへの敵のこゝろを懺悔して、同じく道心者となり、頓にもとひきり、四郎は法名を教西とたまはり、範長は善教と給はる。これ又上人の御法門の奇特なり

第四 清水寺へ御参の事

有とき少松内府相国をすゝめて清水寺に詣し給ふ。折節上人参籠し御座してけり。ついでをもて父子ともに

上人の見参に在る、後生の事を問たまふ、上人言ける

は善導は門々不同八万四為滅無明過業因、利劔即是彌陀号一声称念罪皆除と釈したまふ。經に哀愍特留此經此住百歳ととかれたれば、諸教おほしといへども善導等の教にまかせて念仏するにて候へば、このたびの出離無出離は御はからいたるべく候と仰せければ、相国も帰敬信仰して下向せらる。その後内府わざと吉水の御厨へ参じてねんごろに御法門うけたまはりて涙をかべ申されけるは、重盛の身のうへだにも、この度の出離の事のみ一大事とこゝろにかけ存知さふらふに、相国禅門のこと罪障さだめてふかゝるべしと、そののみ口惜しくおぼへさふらふと也。相構々々御みちびき候へとなげき申されけり。又重衡道盛つねにまひられけるが、重衡も最後には剃刀をあてられまいらせ受戒せられたり。道盛死後まで上人の御はからひをもてその御菩提をとぶらはれまいらせ、そのほか一族たちつねに参れけり。都没落の時は皆々まひり給ひ念仏をう

けたてまつり給ひけり

第五 内裏問答の事

建久元年二月上旬に上人宜によりて御院参あり、折節仙洞には高僧五六人まひらる。一人は無動寺の僧正寛四、一人は仁和寺の僧正浄範、一人は石山の上人専祐一人は横河の僧正真範、一人は大乗院の僧正祐範なり。法王この僧侶を御叡覧ありておほせけるは、今日法然上人をはじめとしてかた／＼参内こそ神妙にはんべれ、はやく聖道浄土の法門出離の肝要を談ぜられば朕よろこびきこしめさるべし。堀河殿うけたまはりて申しけるは、御勅まことにさいはひと存知候。もとも御叡慮にあひかなひ給ふべく候。ときに無動寺の僧正申けるはなにごとの肝要かまふしはんべるべき。去る文治のころ顕真催促によりて随分の碩徳遠小原にして七日の間答に大略念仏往生決定と落居候、諸宗の対判いかやうにさうらひけるや、不審に存じさふらふと云云大乗院の僧正申給はく、召ありといへども今日同

心に御参内まれなるべし、御参会さいはひにおぼへさ
ふらふ、君の御勅のごとくもとも聖道浄土の法談まふ
し承りたく候と云云石山の僧正まことに小原にての間
答残るところの法門本朝にはよも候はじ、しかれども
君の御まへにて定談なし、仏教多門なれども帰仏はま
た一仏なり、無動寺横河の帰法は天台なり、大乘院の
帰法はまた法相なり、仁和寺の帰法は華嚴なり、愚僧
は又真言なり、法然上人は天台法相華嚴三論真言律宗
九宗の兼学至極の法どもをすてゝ無相伝の念仏をみい
だし、日比の稽古の習学をさしおきて往生極楽の一法
におもひつき、ひとへに称名念仏候も八宗九宗は無縁
にして念仏の一法は有縁なり。抑愚老今日本朝无雙と
披露ある法然上人にあひたてまつり、不審一句申して
上人の御意をことにかうぶりたく候。一印一真言証道
詣路といへり。しかれば俺の一字を胸にたもては即身
の如来なり。この息鼻へいだせは両部の大日虚空に現
ず、俺の一字を舌の先にかくれば諸尊空中に満てり。

しかれば経には俺字三密即此法身遍照毘盧遮那得大惣
持門といへり。道理を御覚悟ありながら、念仏すぐれ
たりと立られ候らん、もとも不審にさふらふ、心底を
のこさずうけたまはるべく候と云云上人答のたまは
く、源空も御前の問答さいはひにまかり存知候。その
ゆへは君は無上法皇の御名をからせ給へり、その御前
にして聖道浄土の真義を決せんことかたわらにしてひ
そかに説くにはしくべからず。当座にて難易の二道を
治定すべし。祕密神咒経にはく一言語皆是彌陀所
説思量譚謨兩字祕密藏経に云三世諸仏出世本懷阿彌陀
仏名号為説大師の御釈にはく真言行者於南無阿彌陀
仏名号更勿作淺略思若入真言門諸言語皆是真言何況阿
彌陀と云々又云く念仏者十甘露真言一代聖教結経八万
法藏妙肝心出離生死最要法彌陀来迎得往生といへり。
いかでか名号をはなれたる真言あるべからず。又真言
をはなれたる名号なし、真言門にて修行しがたければ
難行道と判じたまへり。面々のごときの智者はさもか

候はんずらん、それすら時機いかん、いかにいはんや鈍根無智の極悪最下のともがらは真言止観の修行にかなふべからず。もとも空しかるべしといへり。おのおの不審まち／＼なりといへども、ついには浄土易行に結成せり

第六 牛飼童往生の事

同年十月下旬に五条の坊門高倉に牛飼童あり。つねに上人へまひり念仏の安心往生の得否のことをたづねまふす。今度この生滅しさふらいなば、二度かへりきたるべき憂世にてもさふらはず、あひ難き彌陀の教文を聴聞つかまつり候て、名号に信をとり邪正のほどをも分別つかまつるべき往生を治定仕候こと、上人の御恩徳にて候。上人聞しめし神妙にまふしたり。汝うき世にあらんこと今十余日なるべし、世事をわすれて念仏し来迎にあづかるべしとおほせければ、童涙をながし申けるは、無始曠劫よりこのかたなん万劫の生死をおくり候けん。いま往生をとげ候こと上人の御恩徳にて

候へば、臨終の用意にとて十念給てまかり出ぬ。そのうち夜半に端坐合掌して往生をとげおはんぬ。室の内に光明ありて不思議の瑞相をあらはしけり

第七 後白河の法皇の崩御の事

建久三年後白河の法皇玉躰不予に御惱あり。門葉の人行舜僧正法眼円毫法印祐賢等御祈禱のために真説の大般若五檀の供養などありしかども、そのしるしわたらせたまはず、日にしたがひて急々にならせ給ふ。しかるあひだ法然上人をめされ出離の大事はひとへにたのみおぼしめさるゝとおほせければ、上人まふしたまはく十善の御戒行は過去は今生にきはまり、今生の持戒動行は未来の酬因となると、御榮華北闕の御たのみは今生にきはまりおはします、万事の座下この病床にきはまるとみへさせおはします。往生極楽の素懐なんの御うたがいかわたらせ給ふべき。娑婆の御たのみは夢幻のごとし、極楽は無量無辺の法楽なり。九重は有為の都浄土は無為法性の台なり。念仏往生の御信

心には無数の旧業を消滅して一念に眞如の都にとつくり位なり。君兼ねて即身に往生はとげさせおはしまして候へども、恩徳報謝のために御念仏わたらせ給ふべしとまふさせ給ひしかば、法皇御座になをらせたまひしかば西にむかひて合掌を御胸にあて念仏数遍にて、蓮台結伽に素懷をとげさせ給ふ。御崩算六十一とぞ申しける

第八 無品親王御参附たり御白河法皇御

一周忌の事

同き年無品親王法然上人を善知識として御往生あり。

種々の奇瑞耳目をおどろかしけり

建久四年九月靈山平松の御房にをひて後白河の法皇御一周忌のために七日御別行あり。結番衆二十三人なり。第五夜の寅の尅に上人たゞ御一人行道しおはします。嵐はげしく吹きたりて正面の障子を吹たをし両燈をふきけし暗夜に燈びなきに道場に光明あり、ひるのごとし。慈田僧正不思議におぼへて道場のうちらみぬ

ぐらし給へば、人々の色みな金色なり。さて上人を見まいらすれば御後に金色の円光たちたまへり。右の御脇に生身の大勢至菩薩たちそひ給へり。上人行道したまへば板の上一尺ばかり高き中をふみたまへり。御足のしたには八葉の青蓮華をふみたまへり。念仏の御音にしたかひて御口より光明いづ、慈田僧正月輪殿上人を拜し給ひて、涙を流し五躰を地になげて礼したまつる。秋兼の三位入道彌仏こえをあげ涙を流し帰命稽首大勢至菩薩三身薩埵法然上人生々世々値遇頂戴となふれば、二十三人の結衆も同音にかくのごとし。上人とひたまはく、月輪殿申し給く、上人はおがませ給や否。右の御脇に生身の勢至たちそひて行道しおはします。かゝる不思議の御ことこそ候はねと申されければ、上人かさねてとひたまはく、観音はおはしませぬかと月輪殿しからずと答たまふ。上人おほせけるは三心具足の念仏者をば中尊の阿彌陀仏とときたまへり。観音勢至はともとなり給に勢至ばかりそひて観音のそ

ひたまはざるは思ひがたし。しかるに經には無量寿仏化身無数与觀世音大勢至常來至此行人之所ときたまへり。又若念仏者当知此人是人中芬陀利華觀世音菩薩大勢至菩薩為其勝友当坐道場生諸仏家ともきたまへるに、觀音のたちそひたまはざらんやと、おほきに不審なりとぞおほせける。月輪殿おほせけるは生身薩埵凡夫の肉眼にて礼したてまつらざることあて奇特にはなし、上人三昧發得の嚴重なること、たふとさ申すばかりなし

第九月輪殿へ熊谷入道参付たり鳥羽院御夢事

建久八年春上人月輪殿にて四帖の疏御談義有べき由にて上人入御有り、熊谷推参仕る。上人留めばやと思しめせども、さる者なればよも御前ちかくは参らじと思食してあるほどに、上人御前にて御談義はじまる、熊谷は沓ぬぎに居たりけるが、御法門の御こへとをくして分明にもきこへず、熊谷いひけるは、この穢土ほど口惜き所はよもあらじ、極楽にはかゝる差別はあらじ

ものをと、御座所がとをくして御法門がさだかにもきこへばこそと腹立申しければ、月輪殿あれはなにものぞと、上人おほせけるは武藏國の住人熊谷入道と申すものにて候が、右大将殿をうらみて出家して伊豆國走湯山に参籠して候しが上洛仕り、源空が弟子となりて候が、いかさまかの入道が推参仕りて候と仰ければ、月輪殿やさし、なにかはくるしかるべきとて召る。熊谷一言も式第申さずまいり、御縁に祇候す。念仏の信によりて殿下の御縁をゆるされまいりけるこそめでたけれ。建久八年に沙彌印藏竜禪寺の滝のうへに一字の少堂を建立して、御身は泥仏の來迎の三尊を建たてまつる。上人御供養ありて不断念仏を始めおかる。その後、鳥羽院に御夢想あり、厚きすみぞめの衣めしたる老僧御寢所へをはしまして、われは法然上人彌陀供養聴聞のためにいでたるなり、院も後には結縁候へとおどろかし申してきたれりとしめす。御夢こゝろに、いづくの僧にておはし候やらんと仰ければ、清水

のたきへまいらればをのづから現世安穩後生極楽としめし畢てたちかへらせ給ひ、御覽じてやがて次の日清水寺へ御行あり、おほよそかの觀世音菩薩の光中において五道を現じたまへり。そのゆへは經にいはいく奉身光中五道衆生一切相皆於中現ととき、礼讃には五道現光中と讃せり。善導も身光普現五道衆生と釈したまへり。この觀世音菩薩の天冠のうちに一立の化仏を頂戴したまへり、これすなはち觀世音の廿五三昧をもて廿五有処の群類をすくひたまふ大慈大悲一立の、化仏をつかさどり給へり。又この菩薩面色をば閻浮檀金の色ととき給ひけり。面色をば彌陀の報身に同じて法衆をうく。身色をば釈迦に同じてもろくの群類を度する徳を標したまへり。まことに殊勝なる秘文なり

第十月輪殿選択集給の事

建久八年の初冬に月輪殿上人へ御まいりあり、いつよりも御こころしづかに御ものがたりあり。愚老一期のあひだは明鏡にむかふこころして上人にあひ参せ、邪

正をひるがへし雜行自力をすて承はり、わけて信をかたむけ候。一期ののち子孫にもつたへ、また末代の學者の手本の証拠にもつかまつり候やうなる、肝要の治定する聖教をすこしも方便權門なく、御制作候ひて給り候はゞ当代末代のかぐみと存知すべく候と仰ければ、上人きこしめされそのむね勘がへ候て見参にいれべきとて、仮名書の文を上下卷えらまれ月輪殿へまひらせらる。至極拜見させたまひ心肝にそめて殊勝におぼしめす。但仮名書あまり人々目易くしてもて遊び候らはんも无念に候。しかるべくは真名にあらばれよと、同き九年正月に清書して一本月輪殿へ進ぜらる。しかるべき学匠等にさづけさせ給へばみな秘藏してさうなく見聞のともがらなし

第十一親鸞聖人御参の事

元久元年三月に一人の世禅参りたり、これは弼の宰相有国の五代の孫皇太后宮の大進有範の子なり。山門にて少納言の公範安と号す、慈鎮の風義を学び学海功積

て習学年だけ給へり。智恵幽長なるに依て生死の無常をしり、仏土の果位をさとりてかの法然上人は八宗兼学の碩徳、日本無雙の智者達もかの智恵にはすぐれじと風聞せしむるあひだ、かの貫房へ参じてその宗躰をうかゞひ、自力修学の稽古法門をもたて申し、浄土門について不審をも申し、かの真義にも落居して速に生死をなればやとおぼしめし立て、吉水の門下にゆき、上人の見参にいりたまひ円融相統の極理俱円実相のうへなれば、又密教において六大無碍の外は一物もあるべからずといへり。聖道修行の道理どもをたてとひたまふ。上人すこし多みをはしまして、浄土の法門三經一論五部九卷の疏をひきあはせくおほせあり。範妄首を地につけ聴聞あり、上人彌陀本願の奥旨別願酬因の最頂凡夫頓速の法門折角を極めて後、大集月藏經にいはいはく我末法時中億々衆生起行修道、未有一人得者、当今末法是五濁惡世、唯有浄土一門可通入路の文、明鏡なりと云云。聖道門の得益殊勝なりといへども、

鈍根無智のともがらはおもひがたきによりて、仏これをかゞみて末世無仏のときの得益を現じたまへり。とくに範妄公うけたまはりてやがて本宗をさしおきて、上人口決のむねをうけ、たちまちに浄土の法門を學したまふ。その精奇特にして上人寵愛身にあまり給へり。ほどなく三經論藏軌記章疏等の御談義一遍わたしたまふ、多遍の人にこえたり、義理をきくに一度にその極秘を存知したまへり。生年廿九にして叡岳の住侶をはなれ給て、改名を善信房とたまはり、範妄をあらためて禪空となのりたまひける。同二年の春選択集をさづけられたまへり。かの選択集に内題の字と禪空外題の字と南無阿彌陀仏往生之業念仏為本と、この三所をば上人御真筆にてあそばして給はられたり。善信念仏の信心肝に銘じ、法門の義理むねにみち、同き秋七月に上人の眞影をまふし給はるに、すなはち免許せられ団画したてまつる。同き月廿八日に眞影の銘は上人の御筆にあそばされたり。若我成仏十方衆生称我名号

下至十声若不生者不取正覚彼仏今現在成仏当知本誓重願不虛衆生称念必得往生と云云。この文同く御真筆となり。そのうち六角堂に御参籠のとき、太子の御夢想により縛空を改めて親鸞となりの給へり、専修念仏の祖師善信上人とまふすはこの親鸞上人の御ことなり

第十二雲朗僧正選撰集披見付たり源空起請の事

元久元年甲子十月天台座主華頂峯の雲朗僧正学匠等を集て選撰集を御沙汰あり。その中に聖道門をすて浄土門に帰すべきといふよりこのかた、一切の行を傍にすべきむね、乃至隨他のまへにはしばらく定散の両門を開くといへども隨自の後はおへりて定散の門を閉ぢよといふ文より始て、聖道門をすて定散をは閉ぢ難行をばかたはらにせよといふ、この捨閉閑傍の四の名目を座主とがめ給ひて、我祖師天台大師は四教五時をつくりて大小権実をたてたまへり。嘉祥は五教を判じ三乘真実のむねをあかし、惠果弘法は一代の仏教を顯教と遺ひ、大日の一法を密教とおさめたまふ。各宗をたて

そのいはれあり。法然房のごときは諸宗を滅亡し諸教を破するものなり。この学仏法の外道守屋にひとしきものをや。はやく天長を動かしたてまつり、洛中をはらひながく无間の地にうつすべきものをや。大徳達各同心せしむるやいなやと、各もとも御義に同じたてまつるとて、明日大講堂の庭に会合ありて定判におよぶべし、座主の御房を退散す。同く十五日山門蜂起して三千の衆徒会合して僉義区なり。中にも西塔法師に但馬の堅教浴秀すゝみいでいゝけるは、仏法はこれ王法なり、仏法さかんの国には人法あつし、仏法破滅す、抑源空法師の仏法興張のごときは本朝の仏法を増し王法をあつくしたまふところに、神威をかざり仏法失せしむる輩をば太子種子を断じたまふ。これすなはちわが朝の仏法をおもんじ給ふゆへに法敵をほろぼす。しかるに、源空法師を忽に断罪せしめ、諸宗仏法を興して王法繁昌の国たらんものをやと云云。又東塔南谷太輔の註記祐覚すゝんで云く、それいは吾山はこれ七

仏草創の地なり、三国佛法のみきんなり、桓武天王の御宇に当山の中堂をたてられしより已来、山すぐれて諸山にうつたかく、薬師の威光も余仏にこへてなをひいでたり。しかれば当山の法燈をは湖上に同ずと、山王御宜あるものをや。先才无了簡のともがらは法然の智慧をたふとみ帰敬の首を傾くれども、当山はこれに同ぜんや、日域に又佛法のごとく急速に洛中をはらひ、弟子等を遠國に配流せしむべきものやと云云。衆徒もとも／＼と同じて訴状をさ／＼ぐ。奏覽をふるに君用いませさずば、神輿を陳頭にさ／＼げ入洛して天裁を仰くべしと僉議して、やがて翌日訴状の草案して同き七日に藏人の註記清書して衆会の中にして披露せしむ。各これをきゝて神妙の義に同じて中山の大納言殿へそへ状あり。三千の衆徒僉議一同の状進上せしめ候。はやく天裁をかうぶり喜悦のまゆを開かんものか。源空法師一人と三千の衆徒等と思食かへべきや、勅宣にしたがふべし。急速に天中に披露あらば本望に

候、恐々謹言、十一月日謹上中山の大納言殿、訴状をへて不日に遣しけり。天中に披露あり、その勅宣にはく沙門源空の興隆佛法を信じて諸宗をおほしめしすてられず。先皇貴尊の佛法によるにあらず、かさねて信ずるところなり。はやく山門の濫妨斑足のあはれみに属して、三千の鬱填文にしたがひて徳に帰せよとなり。天氣かくのごとし、槐門藤原の朝臣隆房執達如件、衆徒綸旨のおもむき拜見していよ／＼遺恨をふくみ、神輿を下洛のよし、披露ある。上人難儀におほしめすによりて山王の御宝前にして御起請文、その状に曰く沙門源空敬白山王七社護法善神諸宗誹謗のこと、諸教破謗し自宗ひとり成立するにあらず、たゞ廢權立実するもの諸宗の常法なり、源空の新義にあらず、これによりて諸教滅尽のもとにあらず、難易の二道は論文明かなり、もし条々いつわらば六方の諸仏の知見にもれ、ことに医王善逝の御加護にあづからず。別しては山王七社の御簡をかうぶり、今度の宿願むなしくし

てながく生死に墮せん、よつて起請文如件

元久元年十月日沙門源空敬白、十禪寺の御宝前におされ畢ぬ。重て七箇条の起請文これあり。二百余人の連判これによりて山門やうやくしづまりけり

卷 第 六

第一法務大僧正公胤破選択の事

建久七年の夏菴城寺の碩徳大僧正公胤、上人御製作の選択集を一見して大に偏執してかの書を破せんがために、一卷の文をつくり、浄土決疑抄とあらはす。この書にははく法花に即往安楽の文あり、観經に誦誦大乘の句あり、法花誦誦者、極楽に生ぜんこと疑なし。たと念仏を付属するこれおほきなる誤りなりといへり。上人これを御覧じおはらず、さしおかせ給ていはく、この難はなはだ非なり。まづ難破はその宗義をしりてのち難ずべし。しかるにいま浄土の宗義にくらくして僻難をいたさば、たれかよくやぶられざらんや。それ

浄土宗のこゝろ観經前後の説、大乘經をとりてみなことくく往生の内に摂入せり、そのなかになんぞ法華ひとりもれんや、観經にあまねく摂入するこゝろは念仏に對して廢せんがためなりと云々。公胤これをつたへきよて唇をとちてももいはず。あるとき順徳院の所胎のあひだ公胤は加持のためにめさる、上人は御往生の談のために召さる、おなじく院參あり、奉行遲參のあひだは兩人一所にしてしばく浄土の法門を談ぜらる

第二浄土決疑抄を燒事

公胤本房にかへりて弟子等に向ていひけるは、昨日參内に二の所得あり。一には未だきかざる浄土の宗義をきく、二にはもとしりたることのひがめることを改む、誠に以宏才也、見たつるところの浄土の宗義聖意に違すべからずと仰れて、法然上人の義を信ずべし。謗せるは大成るとがなりといひて、わがつくるところの浄土決疑抄をやきて畢ぬ。又公胤の不審には諸行を

ゆるさず悪人すら往生す、いはんや諸行といへども皆善也、何ぞあながちにきらふべきや。上人の御答には一向専念無量寿仏とゞけり。観經は繫念彌陀所想於西方と説り。又同じき經に念仏衆生摂取不捨ととき、阿彌陀經には一心不乱ととき、善導の御釈には一向専称彌陀仏名と釈し給へり。天親菩薩は世尊我一心といへり。これ諸行をふさぐ文なり。諸行をまじへば雜行自力也。これを隨緣雜善恐難生と廢し給へり、いかん

第三桓舜僧都の事

正治二年の冬山門に桓舜僧都とて学匠あり。上人へ参り聖道門の殊勝なる道理をやう／＼たて由す、浄土門は淺近の教なる条至極なり。上人しばらく愛してきこしめさる、彌陀の本願は權教權門にして得道愚かなりなんど、やう／＼申しければ、上人諸宗のめでたきこと言語忝じけなし、しかりといへども源空等がやうなる愚癡のものは難行難悟のゆへに本願をたのみたてまつり、彌陀の御力にて往生すべし、仏すでに大經觀

經の両經に彌陀の名号は無上功德ととき、又曰汝好持是語持是語者即是持無量寿仏名と、彌勒阿難に付屬したまへり。天台大師は難解難入且置不論即詣西方値仏開悟としめしたまへり、宗家は又鈍根無智難開悟と釈したへり、菩薩は又難易の二道を分別せらるゝこと明らかかなり。御辺の仰らるゝ法門は源空習学せしことひと昔すぎたり、浄土の法門を習学せずしてをさへての料簡は徒らごとなり。このたびの得道あやまり給な、おほせらるゝ料簡は法華三昧の肝文すなはち彌陀なり、かくのごとぎの法門をしらずば、目のはたのまつげをみざるとて浄土の法門聖道の修行に超過して往生やすしと、三世の諸仏もとき、十方の仏も証誠したまへりなんどいみじく、至極の御法門仰ければ、これも螻に学匠にて感涙をうかめて、やがて多年の習学をさしをきて、浄土の法門を学して堅固信心をおこしけり。さてこの桓舜僧都は世にこへたる第一の貧者にてありけり。いまゝでは兎角して学文し住山したりし

が、いまは詮方なくして山王に祈請申すに、註しなし、ちからなくして東山辺に住して念仏してありけるが、かやうにてもあり、かねて有時稻荷に参籠して祈請するに、七日に満する夜、切紙に千石とかきたるふだをひたいに押れたてまつると、夢想をかうぶりて心中に喜悅して、いまはかうとおもひ下向して三日といふ夜のゆめに、白髪したる老翁まくらもとにきたりていはふ、われはこれ大明神の御使なり、汝に千石のふだを与へしかども、山王御制止あれば召帰えすぞと申し給けり。夢さめてのちこれをおもふに、誠に壯閑が小蝶となりて百年のあひだの苦楽、憂喜ことどもをみれば、たゞ一時がほどの夢なりしがごとし。これはあまりに口惜しきとて山王に参籠して恨の祈請を申たりければ、山王の御示現にいはく、桓舞はこのたび念仏申て生死をはなるべきものなり、しかるに余命いくほども延べからず、千石の分限にては定て名利に着して栄花にさへられて往生不定なるべきあひだ、あひ計

うなり。我をうらむな、我は汝を憐むのその分はおもひはからふと示したまふ。ゆめに桓舞あな不思議の御ことや、身の貧をもあながちに歎ぐべからず、福をも欣ふべからず、三箇年ありて二月上旬に奇特の往生とげはんべり

第四上人流罪の事

元久二年三月に又山門騒動して上人流罪のよしいまに延引す。そのいはれなしとてすでに三宮の御輿をかざり近明に人浴あるべきよし急速なりければ、公卿僉義ありて不日に繪旨をなし下れけり。追立ての官人には周防の判官元国、伊賀の判官末貞におほせつけられ論旨さゝげて月輪殿に参じて申けるは、上人の御房へ参ずべく候へども、御心中はゞかり存知候ひてまづ参じて候、繪旨かくのごとくと申す。月輪殿繪旨を取あげ拜見せしめ給へば、配流せしむ法然上人之事

右山門の訴詔たるによりてすなはち法名を改め藤井の元彦、配所は土佐国波多

異説には
松の三嶋明浄ノ巖屋にこ

れを遣す、仍綸旨如件

元久二年三月日參籙藤原朝臣泰茂

月輪殿御涙を流し、兎角おほせもなし、上人へ進ぜらる。上人もこのうへは力なしとて御出立あり。つぎの日官人等大谷の御房へ參じて御衣を改め、俗衣をきせかへたてまつり、建久元年三月十八日御年七十四にて御房を出させおはします。まず西八条少松殿の持仏堂へうつしたてまつる、これによりて山門の蜂起しばらく延引しけり、たふときを流し奉る法には、俗名をつけ俗衣となさるゝことなり、よて年号も改め畢ぬ

第五住蓮最後の事

さて上人をば月輪殿の御はからひにて法性寺の少御堂にうつしたてまつり、しばらく御逗留あり。上人の御弟子の中に住蓮安楽とて二人あり、一人は後白河の院の北面に安部の判官盛久とてはんべりしが出家して安楽となづく、住蓮は伊勢の次郎左衛門清原の信国とてはんべりしが、出家して住蓮となづく。たがひに在俗

のときも申し承はり一所の傍輩たりしが、おくれさきたつことを歎げき、終焉のきざみにはひとつはちすと契りたりけるが、上人小松殿へうつらせ給てのち是在々所々の念仏路次往返の高声念仏も心やすからず、その時は五条の内裏なり、上人へまいりてかへりけるが内裏ちかくとをるとて一声をうたふたり、輪王位高けれども七宝ひさしくとまらず、天上のたのしみおほけれども五衰はやく現じける、南無阿彌陀仏くと申してとをりける。使庁のものどもこれをきゝてなにもぞ、黒衣の師匠、配所に趣きたまふ。そのはどかりなく禁制せらるゝ高声念仏申すはとて、走いで住蓮安楽を是非なくはりふせけり。彼らたとひ王位にのぼるとも、死せば悪趣にかへるべしと申しければ、いよいよ打擲して官人にあひふれて近衛の西の獄に入られけり。あくる年の三月十八日都を御出あるべきよし披露ありければ、住蓮安楽も獄舎にてこれをき、官人の方へ申しけるは、罪科かろくしていたされば、いたさ

れ候へ、又誅せらるべくば近明日のあひだに誅せられ候へ、師匠来十八日に配所におもむき給よしうけたまはり候へば、生乍ら御件申さざらんも、その甲斐なくおぼへ候。一向誅せられたらば御とも申したるこゝちにて候べしと申しければ、別当殿へ申す。さらば誅せよとて佐々木の九郎吉実に仰付て近江の国馬淵にて誅せられんと欲す。其時に至ればかの二人より上人へ狀まいらす、其狀に云く我等いかなる身をもちて法のために命をおしむべきや、こともなゝめにおもひては又もあふべき御法かは、極悪深重の衆生他力往生をとげんとおもはば、住蓮安楽を手本にすべく候とて一首

極楽に参んことのうれしさに、身をば仏にまかせける哉

さて二人ともに誅せられ畢ぬ。住蓮は頸より光をはなちておつる。くび高声念仏十余返となへ、安楽は頸おちてのち念珠をくること百八をもて、三返口より蓮華出生す。これらの奇特をみてきらるゝにもおそれず、

誅せらるゝをまかなしまず、念仏して遁世するものこれおほし。上人これを御覧じて、御落涙あり、最後の狀なり

第六善恵房申さるゝ事

上人へ善恵房申れけるは、いまは御配所たり、御法門を暫くとゞめられてまづ都に御住候へかし、山門も心しづかになだめられ候はゞなどかしづまらで候べき、御内心こそ念仏にて候とも人のこゝろをやすむべき、御方便にてこそ候はんずれ、山門も訴訟むなしからざるいはれをもて申すことにてこそ候へ、ことの落居のあひだまづ浄土の法門をとゞむると御領掌候べくや候らんと申しければ、上人たとひ源空がしたを八分にさかれ、新羅百濟にしたつる嶋へ流罪せらるゝとも、釈尊の教主とし、彌陀如来の名号おしへたまふ御使として、善導和尚おほせらるゝむねをもて勅進するとがにより、流罪の宜旨をかうぶらんこと、現当にとがを痛むべからずとおもひ、かくのごとく畢んぬ。印土の僧

伽羅は後に疎名をとり、師子国にながさる、しかるに観音現じて僧伽羅を訪ふ。晨且の一行は楊貴姫にあだなをとり果羅国にもむぎしに、九曜現じてみちをてらす。源空さしたる権者にてはなけれども、六方恒沙の諸仏なじかはすてさせ給ふべき。とがまたかれに類せず、たゞし源空念仏することあり、余の州は念仏の勳化とどきたるに四国にはいまだとどかず、かの国利益あるべき瑞相とこそおほせければ、みなく涙をながしたふとさ申ばかりなし

第七親鸞上人の事

こゝに上人の御弟子の中に善信親鸞とておはしけり。これ数百人の御弟子のなかに初心晩学なりけれども、その精奇特にして聖人写瓶の御弟子なり。いまだ宿老におよばずして宗の奥義をつたへて智徳諸方にみちふさがりければ、かねて天庁にそなはりさきだちて雲上にきこえ、徳用やはたし給けん。君臣ともに猶予の上は六角の前の中納言親経の卿、年来一門のよしみをと

をされけるが、折節讖定の砌につらなつてなだめられ申しけるによりて、死罪を遠流に定けり。すなはち配所は越後国笠嶋の国府なり。よて還俗の姓名をくだし藤井善信とあらたむ。同じくは上人洛中に御座の時申しうけて、兼日に都を出んとて北陸道へおもむきたまふ。近來の御弟子なりといへども師匠同罪の遠流、且は面目なり。配所にも御髪おろさず、しかれば禿の御形なりければ愚禿の親鸞ともなおりおはします、このゆへなり

第八賊人付たり月輪殿へ一句御相伝の事

同き二年三月廿三日の夜、上人近日に都を御出あるべきよし披露ありければ、僧俗われもくと参りけり。その夜風吹きて月もいまだ出でざるに、たれともしらず悪党五六十人後門のかたより打入り、上人の御重宝の仏具等已下をうばひとりてまかりいでぬ。かの重宝と申は紫且の卓、紫藤の机、華林木の椅子、孤床の曲篆、木綿豹虎の敷皮、氈白氈金羅夾綾の打敷、後白河

の法皇の御臨終のとき御ゆづりありし銀の水瓶、金の硯箱、金の錫杖、上西門院の御受戒の御布施沈の丁立香、椎紅椎朱香箱、壺には鏡州鎖乳、定州油滴、唐の勝善大王より一条の院に献せられし梅檀の切目の経箱、絵には瀟湘の夜の雨、洞庭の秋の月、山市の晴嵐、江天の暮雪、遠寺の晚鐘、遠浦の帰帆、平沙の落雁、漁村の夕照その外唐絵、梅華鈍子表背高蒔の箱にいれられたり。このほかの重宝みなくとりてにげさりぬ。聖覚隆寛随蓮成阿等ありあひて追かければ上人仰けるはこの悪党どもにつへのひとつもうちあつべからずと、御制禁有ければ、力なくしてとまりぬ。上人いかゞおぼしめされけん、面々は来るべからずとて悪党の跡をたづねておはしますほどに、稻荷の神の御前の北ますみの谷といふところへたづね入、御覧ずればうばひとるたからを配分せんとす。かれらが並居たるうゑに、ひらき岩のうへに御座ありて汝らにいふべき子細ありてこれまできたりたるなり。こゝろをし

づめてきゝたまへ、人のかしこきといふは後世をおそれて来世のつとめをするをいふなり、罪業つくる困縁をかんがへてみたまへ、たゞ衣食の二なり、しかるにこの身といへるは須臾旦暮の間、電光朝露の身をもて長時永劫の苦をまねかんこと悲てもなをあまりあり。されば古人のいはく町にのぞみ市にまぎれても遅れがたきは病のみちなり、城にこもり巖窟にいれてもふせぎがたきは無常の殺鬼、さりてかへらざるはわが身につもるとし生じて死門に向ふことは山水よりもなをはやし、指を折りて數ふればみし人もおほく死す。かしこきもさり、はかなきもとまらず、善導のいはく人間念々當衆務不覺半命日夜去と説給ふ。朝夕こそつとめざらめ、人の財宝をわが物として六道に輪廻せんこと、いかでか歎ざからんや。世事をなげすて一心に彌陀を念じて不退の業をうけ、無量無辺の苦をはなれんことうたがひなしといふよりはじめて、初発心のいまより仏果証得の位をうくるまで御教化ありければ、

悪党ども涙ながし首をかたむけて聴聞つかまつる。御弟子等もこの時になれば、一所にまいりこれを聴聞して御伴しかへり、跡にのこりたる人々にかたりあひて涙を流しけり。かゝる所にいまの悪党ぬすみたる物をさゝげて上人の御まへにさしおく。上人おほきに御腹を立おはしましておほせけるは、汝等はこゝろえのものにあらざるなり。このもの源空乞ひにきたるとおもふか、人のこゝろざしなればとりておきたり。一塵ものこさず給りてまかりかへれと仰られければ、面々堀仰の色をあらはしけり。さて聖人部に御越年ありしかば、また山門おこるべきよし風聞あり、以て外のわづらひなるべしとて、配所へ御くだりあるべきよしなり。官人どもあじろ輿のむねもすだれもやぶれたるをさかさまに、かきてまいりたり。上人の御興みぐるしさよと申しあひければ、上人御覧じてこれこそ源空が本意なれとて、すでに召されんとす。その時になれば月輪殿御輿の長轅にとりつかせ給ひて、泣々仰ける

は、今もていにしへをおもふに長命ほど口惜ものはんべらず。御出京の後のみたてまつるべき善知識もおはしませず。さだめて臨終せんことのこゝろうさよとて、御落涙ありければ、上人おほせけるは源空一期申さぬ法門一句まうすべし、かきとどめて失念せず御往生し給へとおほせければ、おのゝ涙をとどめて硯をならし、筆を点じて書つけんとしたまふ。上人言く、つみは十悪五逆も滅してん、しかも少罪をもつくらずとおもふべし、罪人すら往生す、いかにいはんや善人をや、一念十念に往生すと信じて一生称念すべし、肝要にはこれこそ申べけれどと御自筆にあそばしたまふ。自身現是罪惡生死凡夫曠劫已來常没常流転無有出離之縁者、決定深信彼阿彌陀仏四十八願攝受衆生無疑無慮乘彼願力定得往生とあそばしてこれを源空とも御覧じて臨終し玉へとて遣されければ、月輪殿三度礼してふかく納給ふ。さて月輪殿官人等にむかひて仰けるは、配所は土佐国とさだめらるれども他人の所領

なり、たれか上人によくあたり申すべき、讃岐国中の郡は自らが所領なり、それへ下りまひらせばやとおもふはいかゞあるべきと仰ければ、二人の官人等かしまて承候。土佐国を讃岐国へひきかへて勅勘の身とまかりなりて禁獄流罪候とも、上人に命をまひらせたることと申しければ、月輪殿おほきに悦びおはしまして讃岐国少松の庄のあづかり所もとへさきに御使をつかはさる。配所の上人当国へ御くだりあり、自身下りたりと思ひて懇にあたりまいらすべし。疎略に存せば定めて後悔あるべしと御書をくださる。去ほどに四つの太鼓も鳴りければ、官人ども御輿まいらせよと申ければ、その時になれば月輪殿秋兼殿堀河殿右京極殿大宮殿已下、坂東の武士受学相承の御弟子達三百余人御輿の前後にひれふして声をたてゝ泣きかなしむ。御輿の前には藤井の元彦と札をおさる。上人御歳七十五、去年の冬より御髪をめされねば白髪と御坐あるになし打烏帽子をひきいれ進らせ、水色の御直垂を被された

り。承元元年四月十一日の午の刻に御出あり、多年受学の恩徳常随給仕のよしみ晝夜朝暮の御名残なれば、声をあげて泣悲しむ。公方の御力者をばのけて、角帳の成阿沙彌隨蓮、覺阿道仏等を力者の棟梁として、御弟子十二人は公方よりの御供惣じて六十三人、御輿の前後につきまいらせて七条を西へ、大宮をくだりに烏羽をさして御くだりあり。法性寺より烏羽までは御輿をとをしゑず、しるも知らざるも貴賤男女みちの左右に充滿して袖を顔にあて、袂をしぼらぬはなし、あはれなりし御ことどもなり

巻第七

第一烏羽より御船に被し召事

官人船を点じて十一艘草津より御船にめされたり。折節鴨河桂河の水まさり箭を射わたすがごとし。宇土野辺にておほせけるは、源空今度四国へくだり利益あるべくばゆふさりの夜半にしるしあるべしとおほせけれ

ば、官人とも御座船と雙べてくだりけるが、おほせうけをたまはりて筆を染、これを註して申しあひけるはこの事げにも実事ならば上人たゞ人にてはおはしますべからず。なに事あらん、とくこの日がくれよかしとぞ申しあひける

第二神崎御着天王寺別当参付たり傾城事

さる程に神崎につき御座船をば橋よりかみにひきのぼせてつけたてまつる。おの／＼船もみな一所につく。こゝに天王寺の別当大納言の律師おくれさまに参りたり、これも同じくならびてつく、そのほかの商人ふね国人の船かず十艘上しもにつきたり。人しづまりて水引きしたる笠さして小船一艘美女に櫓をせて上人の御座ふねちかくよせて、美女を使として御ふねへまふしいるは、都より貴き上人の御くだりのよしきこへさせたまひてさふらふほどに、神崎の長者御前のおんむすめ御前に御引手ものたまふらんとて参給ひて候。御座船へいれまひらせんと申。そのとき隆寛律師屋形の内

より立いで、返事せられけるは、思よらざる所望かな、さやうのことをば商人船国人の船などの方へこそいふべけれ、上人はもとより御所持なく象眼のたぐひもなし、美麗をこのませたまはねは絹布のたぐひもなし、一鉢のそこむなしければ米穀もなし、なかんづくに上人の御座船なり、いかでか姪女の身としてまひるべき、とく／＼まかりかへれとて屋形のうちへいりぬ。傾城此よしをきゝて情も慈悲もましますべき上人の御座船にだにも御いとひあり、ましてたれ／＼の人情あるべきとて又も申さず。そのうち東西しづまりて良久しくありてのち、齡廿四五かとみへし傾城扇をもて船ばたをとう／＼と打て調子をとりすましたり、人々みゝを時ててきけば、いまやうを一つうたうたり。女人は仏の母ときく、釈迦も女人の所生なり、有漏無漏かけて済度する、仏の悲願の御法にも女人みちびく誓あり、洩さぬ慈悲ときくものを、なにとて女人を隔つらんと、二三返うたふてのち一首かくばかり

よしあしとたれ選らん津国や、なにはの事も隔てなきもの

とぞ詠じける。上人これをきこしめてたま／＼の御ことにはいしくもうたふたりとぞおほせけり。人々もいまやうの上手哉とぞ感じあひける。そのうち又傾城使をもて申しけるは、今生の御ひきで物こそ思召しよらずとも、後生の御ひきでもに御法門を一句うけたまはり候はんと申入たり。上人このよしきこしめされて神妙に申入たり、まいれと仰ければ、五人の傾城どもまひる。齡卅ばかりなるを老女としてみなさかんのものどもなり。なるみすまして参るおほくの船の人々、月は折節くまなし目をすまして見物する、上人の御前なる僧侶を一所へよせられましましてすへさせたまふ。上人かれらを御覧じておほせけるは、なんぞ旁かたがたの法門の所望と候なるは、いかやうの法門ぞ、まづこの人間界のありさま有為無常の理をおもひしるべし、生をうくるものはかならず死にいたる習なり。北州の千

年非相が八万劫終に其期あり、いはんや南浮不定の身をや、老たるはのこり若きはさきだつことはりなり。

無常念々にいたれば常死王居すと説たれば、今日人は人のうへと思へどもつゝには身のうへに来んこと一定なり。善導和尚の給はく、汝等勿抱臭屍臥、種々不淨仮名人、如得重病箭入躰、衆苦痛集安可眠と仰られたれば、汝たち貌はよくとも十王争でかすて給べき、色は白くとも無間の猛火の煙にはくろむべし、形は尋常なりとも獄率の杖にはあたるべし、こえは妙なりとも猛火のせめにはさけぶべし、髪はながくとも命はみじかゝるべし、よいには枕にかざるとも明けなば鳥のすとならん、人の一期のくることは、たゞ幻のごとし、かくてこの身つきてのち、さてしもあらんいかゞせん、魂ひ中有にうかれゆく、引路の牛頭は手をひきて閻魔の庁にいざなへば、催行の悪鬼は鉢をとちていそぎゆけとてせむるなり。かゝる苦患にあひぬればゆかじとすれど甲斐ぞなき。善悪一期の振舞は、淨婆梨の鏡に

うつさんとき、獄率におもてをまもられんこと口惜しさよ。恥をさらすのみにあらず、ついに無間におちて多百千劫の苦をうけんこと、今生一期の振舞によるべきなり。汝たちが消息は、日もゆふぐれになりゆけば、もとなきかたちをつくりかへ、一葉の船にさをさしてよろづの船にのりうつり、月の光にかげみへて、おなじ枕にかたならべ一つ袂のしたにふし、わづかに一夜の契して、又裂キズキに、わかれゆく、思々のうつり香は、よしなきことゝは思はぬか。すてゝもすつべきは今生一期の妄執なり、欣ひてもねがふべきは彌陀如来の本願安養の淨刹なり。有漏の穢身を早く捨て輪廻の娑婆をはなれて、かの土の快樂をうくべきなりと、はじめて諸教にもきははれ、諸仏の利益にももれたる悪人女人を、彌陀他力の誓願をもて来迎引接したまふいはれの御法門小夜ふくるほど御教化ありて

罪といひ業といへるもみな消る、南無阿彌陀仏の

こえのしたにて

とあそばしければ、傾城どもさめくとうち泣きて心肝にそみたる有様にて、かゝるありがたき普知識にあひまいらせ候こと、まことに宿習とこそ思合せ候とて、御まへをたちけるが、申しけるはさて、彌陀如来の御誓願はかゝるあさましき女人をも念仏申し候はゞかならず迎へさせ給ふべきこと決定にて候やと申せば、上人この人間だにも約束はたがはず、いはんや仏の御誓にしたがふて六方恒沙の諸仏証誠なぜかはむなしかるべからずと仰ければ、ありがたき御ことに候ひけりと申して、我船にのりうつりてもどりけり。さてこの傾城の行方を見るに橋よりかみに大船ありけるに、せがひのしたに船をつけてしばらくありてはし船にのり、美女に櫂を押せて上人の御船へまいる傾城一人小袖ふかくかづき、上人の御まゑにて申けるは、これはさきにまいりて候ひつる傾城の中よりにて候、四国へ御くだりの御はなむけにまいらせ候、われらが衣裳はにほひふかきそのおそれすくならず候、これぞ

御こゝにかなひまいらせんとおぼへ候とて、手箱一合とりいだし上人の御まへにおく

第三悪党出家の事

かゝるところに長たかき男の年齢四十ばかりなるが、むくらちの直垂きて袖をかみに打かけて、行器はづかをかた／＼提げて、上人の御船へまいる。おそるゝ所なくそでかざしながら畏まで申けるは、これは去ぬる三月に法性寺の小御堂にして狼藉仕て候し五十三人のものども、同心して京都にて御引で物たてまつるべきよし内々申候しかども、おもふほどとゝのおらず候て、これまでみな／＼参じて候、いそぎ御目かけられ候へてたち退ぞく。上人このよしきこしめされ御そばちかく召けり。まづ傾城のまいらせたる手箱をひらきて御覧すれば、ひきあはせ二つゝみたるもの五袋あり、ひらきて御覧すればたゝうたるもとゆいにて、むすびたる髪をねふかくきりたり、上人左の御手こてもとゆいぎはをとつて引きあげ御覧すれば、たけにもあまりた

るらんとみゆ、残をひらき御覧すれば思々のもとゆいにてゆいたる髪をきりたり、上人五の髪を左の御手にとり、右の御手にてかきなでてこれみ給へや、老僧たち、さかりの女の貌には髪にすぎたる物なし、たゞいまでみめをつくりなし、人によく見えんと思ひつるものどもぞかし、しかるに一向の法門によりかやうになりぬることよ、源空は七十五の老年におよぶども、いまだかほどの道心はなし、一句の法門に永劫の魂を養ふといへるは、これらのことぞかし、おの／＼はなにと、ききたまへる法門ぞやとて、御涙をながしおはしませば、船中の僧侶みな涙をながしけり。官人もこれをみて涙押へがたくぞはんべりけり。さて五人傾城どもみな御まへにめされければ、みなはだみゆるほどぞぎりたる、これを不思議とおぼしめすところに、悪党らがまいらする所の行器蓋をひらきて御覧すれば、或はいつところ、或はなにところゆいたる髪をきりて五十三まで行器にいれて持参せり。これをとりいだし

て御覧じて人々にむかひて仰せけるは、年来より人を殺害せし山賊海賊をつかまつり、口中の味ひとしつる大悪人の、一句の法門に答へてかくのごとく道心をおこすことのうれしさよ、はや／＼これへまひれと仰せければ、各々まいりて申しけるは、都にてもとゆいをもぎるべく候つれども、よく／＼堅固の信心を治定仕り候はんあひだ、今まで延引仕り候と申しあげたり。

上人神妙なりとて出家法号さづけさせ給て仰けるは、いかならん山の奥、岩のはざまに籠居しても念仏申して往生すべし、穴賢々々、ひるがへる心なかれと仰られて十念をさづけかへさせ給ひけり。さて五人の傾城ども申しける、いかならん火の中水の底にいり候とも、南無阿彌陀仏と申候はゞ、決定往生すべく候やらんと問申せば、子細におよばす死するところはなにともあれ南無阿彌陀仏となふれば、仏来迎し給ふと仰ければ、心やすく候とて十念給はりてまかりたつ、わが船のりて上人の御坐船の方へ笠さしかざし、おの

／＼西にむかひて高声に念仏申し、合掌をむねにあて十念いまだ終らざるに、五人の傾城水の底に入終ぬ。彼等美女どもこれはいかにやとておめき出でたり。方々の船ども騒ぎけり。美女申しけるは、御出家をだにも浅ましきことにおもひまいらせつるに、かくのごとくならせたまひぬるよ、老々とならせまします大方とのと申し、我等までもなにとなりゆけと思食ぞやとて泣き悲しむ。去程にある船より水連とびいりて、五人の死骸をかつきあげて、橋のうへにならべおきたり。

異香そのあたりに薫ず、紫雲はこき紅のごとし、橋の上にたちかこみ、水面にかゝり乱転して紫藤の華のごとし。かの死人をむかへて母にみすれば、合掌の印もみだれず、口は咲めるがごとし、眼はねむるにいたり。河と宿所のおひだには瑞華ちり、異香また室にみつ、奇特の往生をとげ畢ぬ。母この瑞相を見て歎きもさまではなかりけり。すなはち上人を請じたてまつり申しけるは、今生に執心のとまるもかれらがゆへな

り。往生をとぐることに歎きの中の悦びにて候へば、いまは生ても詮なく覺候、生身の如来の大善知識のおはしますとき、ともに往生こそとげたく候へとて、すなはち髪をおろし授戒法号たちて、十念を給て往生人等をば茶毘し畢ぬ。上代も中比も有難かりし往生なり。其後母三十五日まで仏事勤行して、その曉おとろへず、ねむるがごとく往生をとげるとぞきこへける。

第四中納言律師參事

さる程に上人はその宿所兩三日御逗留ありて、明れは十五日御船にめされ尼ヶ崎へ御くだりあり。順風しかるべかりしかば、兵庫の嶋和田の三崎へ御ふねつく、夜半ばかりに経が嶋の方より船一艘来て、上人の御座船にならべてつく。船より僧一人上り御船に參る。これは天王寺のさきの別当中納言の律師弘鑒、子細あるによつて國へくだりけるが、上人の見參にいらんためにまいられたり、終夜御物語申しはんべり、人々睡眠

したり

第五鬼神參事

しかるところに丑の時ばかりにおよんで、おほなみ一つたち来て上人の御船にちかづく、上人あやしく思食す、御船のへより、なみ二にわかれんとして見えて、屋形の戸をさしのぞみたる物を御覽すれば、赤色の鬼神なり。又左の方よりのぞめるものを御覽すれば、白色の鬼神なり。おそろしき申すばかりなし。弘鑒はすたはち船の底へかくれ畢ぬ。御弟子等も迷惑してたゑいたりたるもあり、おどろきおちおのゝきけり、角張の成阿随蓮ばかり兎角して振ひ／＼氣をとりなをし、一所にして申しけるは、上人鬼神に害せられましまさば、山門よりはじめて在々所々に法然は邪法を執するあひだ、鬼神に生ながら取れたるなんと嘲哂せられたまはんことの口惜さよ、鬼神上人を害したてまつらぬさきに一刀と思切て左右を守護したてまつる。されども物をも申さず上人も御目を塞ぎ、御顔をも動かし給

はず、良ありて鬼神等まふさく、師匠を思ふこゝろざし浅からず、哀れにこそはんべれ、別の子細あるべからずと申。その時随蓮なにごとに参りたるぞ、とくとく申せと、時に鬼神上人に一大事を申しれんためにまゐりたり。なにごとの所望ぞと仰ければ、鬼神申さく、我等よりもおそろしきものや御覧じ候と申す、上人仰けるは汝等よりはるかに醜しきものこそもちたれ、無始曠劫よりこのかた我身に付き副ひたる悪業煩してそこばくの苦をうく、汝等も無常の殺鬼にせめられて、死苦をうけて三悪道に随んこと、疑ひなし、ある経にいはいはく

有情輪廻生六道 猶如車輪無始終

或為父母為男女 世々生々乎有恩

といへり。汝等源空がために父母ともなり、兄弟ともなり、親屬ともなりつらん、いかでかおそろしかるべきと仰ければ、鬼神うちうなづきて、上人はまことの

智者にておはしましけり、我等二人父母あり、今年七百才にまかりなる。いま三百才をへて死せんことをなげく、この命を二三千才にもべて給はるべしと申しれんために、まいりたりと申す、ときに上人源空こそものゝ命をなぐなすことをしりたれと云云。そのとき鬼神四国へ具足してまいるべしとて忽然としてかくれ畢ぬ。上人仰せけるは、いかにや御房達こゝちとりなをせとぞ仰ける。官人等もかくのごとく不思議をうけたまはりて、いよく上人を帰敬したてまつりけり。上人御船よりあがりますます、人々もあがり鬼氣に酔ひたるこゝち散じけり

第六上人和田千僧三昧へ御入事

上人は和田の千僧といふ三昧所へあがせたまふ。これは行基菩薩の千人の僧を請じて供養せられしゆへに、和田の千僧と号せり。それに一夜御やどりあつて、阿彌經千卷念仏百万返となへて亡者を御訪ひあつて、あくれば十七日御船にめされんとす。さて六十三人の

御伴の人これよりかへりぬ。十二人は公方より名字を
さし、四国へつきそひ給ふべし、讃岐国えとをる人々

次第不同

法蓮信空 修理の大夫信隆の子息侍従信真子なり、十二才
より参る

より参る

善恵証空 加賀の勝賢入道藤原の員外の子息、十四才より
参る

参る

観法 秋兼三位入道の子息、十三才より参る

浄蓮 堀河右大臣入道殿子息、十一才より参る

唯実 大和権の守入道殿子息、十三才より参る

明円 土御門中納言の御娘高松殿の御局と申、後白河
の法皇御落胤腹と云云

唯観 京極のおほる殿の妹南都法師中納言の公と申せ
しが、十九歳より参たり

四信 これは月輪殿落胤腹山門にして藏人の註記と号
す、よつて月輪殿御不審蒙る間、離山して御室
へ参り少将の堅者と名乗て、上人につき参て後

西道 本は醍醐の座主御弟宰相阿闍梨弁寛、二条の中
将公忠御弟なり

将公忠御弟なり

信法 御室の坊官侍従法眼祐導子息、十三より参極變
人なり

人なり

成阿 信州角張の七郎大郎子息、廿三にしてもとより
切り、一向信心念仏者とはんべりけり

切り、一向信心念仏者とはんべりけり

随蓮 後白河の院北面にて泉の判官高橋の基時入道廿
五にして出家して無智也と云へども信心堅固の
人なり

人なり

第七御共の人婦洛の事

さて都へかへる人々小原の顕真、慈円僧正、実俊僧
正、竹林寺浄賢、明禅法印、澄憲、浄憲、聖寛、寛

雅、慶賀、隆寛、明遍、神岡聖、松林院聖、大和入道
行得、明恵、聖俊乘上人、八坂聖、生馬上人、横河僧

正、無助寺の僧正性空、往生院の念仏房、藏人入道、
日向入道已下をはじめとして、已上五十三人は都への

日向入道已下をはじめとして、已上五十三人は都への

ぼる。ゆくもかへるもたがひの御名残どもあはれな
りしことどもなり。上人御船にめさる、同く十二人の
りたまふ、飯洛の人々陸にとまると、後会その期をわ
きまへず、たがひの命もしらざれば、これをかぎりと
ぞ歎給ひける。いまを最後と思はれければ五十三人の
中より

法のためなれぬる人の別れ路に、なにと涙の先に
立つらん

習はねばそむる袂もしぼらぬに、此別れにぞうき
もしらるれ

船中の十二人中

別れ行くあとははかなき白浪に、なを打ちそうる
我がなみだかな

思ひやうき世の中に廻りきて、ためし少なき名を
はながしぬ

上人の御詠

別れ路の程は雲を隔つらん心は同じ華の台ぞ

官人已下にいたるまでみな袖をしぼりけり、かくてあ
るべきにあらねば御船はすでにいでにけり。四国へと
をる人々も、ちかきほどはこえを通じて名残をおし
み、飯洛の人々も御船とをざかり、なみにへだより、
跡すむまで船津にひれふして泣々見おくりたてまつり
けるが、御船雲のほかにかすかになりければ、なみ
だとともに都へのぼりけり。さて上人はなにしおふ明
石の浦あい崎林崎と、松原高砂尾上の松を御覧じて浦
々にして御結縁ありて室の津に御船つけまいらする。
さて弘鑿は人しれず鬼氣に酔ひて憶病やみにふして二
三日ありけるが、こゝちとりなをし上人より改名性夷
たとたまはりて、上人の御かたちを張たてまつる。船
中の張御影とて二尊院の塔にましますこれなり

第八室津の傾城の事

室の津にて又傾城どもまいたり。長者申しけるは、
わらは浅増きわざを立つる身なれども、後生は仏にな
りはんべるべきいはれや候らん、重代かゝる身とむま

れ来て、日にかはり時にしたがひて、いまだ客に近付く、世をしらずわたることまめやかに罪業とおぼへ候ひなんと、かきくどきまふして一首

聞きよりくらき道にぞ入りにける、遙かに照らせ

山の端の月

上人世に衰げに思しめして仰けるは、まことによくよく身のほどを思ひしりてありけり。諸仏菩薩の悲願はいづれおとり給はず、しかりといへども彌陀如来は女人往生の別願をおこし給へり、信心堅固にして名号を行住坐臥にとなへ給、終焉には仏かならず来迎引接あるべしとより始めて、くれなくと御教化ありければ、左右眼に涙をうかべてたつ、良久しくして又長者をはじめとして六人引き連れて参り、出家法号をたもちて十念たまはりて一首あり

思きやうき世をいとう折節に、誓ひの船や渡りあ

ひけん

その後道心堅固にして念仏ものうからず。終焉のきざ

み異香屋にみつ、紫雲みぎにたなびき、不思議の往生をぞとげにける。この長者の先祖 小松の天王娘宮玉判 加陵風芳と有けり

江口、神崎、室、兵庫の傾城はこのすへなり。いにし

へより、道心深くして奇特をあらはすことおほし

第九讃岐へ御付の事

同き廿一日讃岐の国中の郡えつかせ給ひけり。高橋入道西忍のもとへいれまひらす。上人をば別所へ宿せさせまいらせ、月輪殿より先達て仰くだされけるうへは、斜めならず煩りたてまつり。湯屋結構し美膳調味しつ、そのあひだの経管いかごとぞ振舞ける。官人等をもてなし引出物など仕る。別段の儀にきらめきければ、上人のゆへなりとよろこびあり、これは在家にて候へばとて、当庄の内清福寺へいれまいらす。

この寺は真言上乘靈場なりければ、上人の念仏の勸化をうけ、帰伏したてまつる事斜ならず。去る程に、官人等いとま申して販落つかまつる、官人たけしと申せども、このあひだの所々の御法門に人の販伏せしむる

事、猶心遁世のやう、自水往生のこと、こゝろなき鬼神に至までこの化導におもむくを見聞するに、生身の薩埵と拜し奉るうへ、船中の御なごりに袖をしぼりかねてぞみへし。されども留まるべき身ならねば、同き四月廿八日に後会を契りまいらせ、十念給りて泣々版落つかまつりけり

巻 第 八

第一慈円僧正の御旧跡へ參給事

さて都へ登たまへる人々は、諸方の事どもをきかじとて、各隠居してはんべりけるが、卯月半もすぎけるに、慈円僧正、醍醐の房官尾張の法眼快尊、御室房官少輔法眼祐範両三人あひともなひ大谷の御房へ參て、上人の御旧跡を忍びたてまつり、御房に一夜宿して終夜ら恋慕、涕泣し給ふ。去年の冬比よりすみあらし給へる御房なれば、人跡たへて草しげり、籬のおきにこととへば、嵐ひとりかなしめり、軒のしのぶの色みれ

ば、つゆは涙をあらそへり、のきはもまばらになりぬれば、月の光のさし入て、暁の燈をかゝぐ、すだれたへては風よるのかきをはらひ、松の嵐はげしくて、板まをたゞく音すれば、枕にかよう夢もなし、なにごとにつけても、心をいたましめずといふことなし。快尊申しけるは、あはれやな上人御坐のときは、門葉市をなし、結縁数をしらず、仏法繁昌の庭には、利益さかりのみきんとこそみへしに、いつしかかやうに荒はてゝ、浅増くなりはてぬることよ、年序をへてすえには雉鬼の栖とこそならんずらんめ。さればかゝる正法興行の靈場、権化有縁のところもまのあたりなるべきとおぼへずとて、落涙千万しければ、慈円といひけるは、善悪の二をならぶるに、悪はつよく善はよはし、正法なれども一旦は魔障にさへらるれども、魔事外道はついには達せず、仏法滅亡することなし、仏在世のありさまをきくに、機縁あるほどゞきこへたり、そのゆへは須達長者伽藍を建立して、如来ならびに仏弟子

を一生涯のあひだ供養したてまつらんと欲す、しかるべき露地なし、しかふして祇陀太子天下無雙の勝地を持たり、水竹左右にうけ、菓樹前後にならぶ、こゝに須達長者祇陀太子にかの地を所望し奉る、太子答たまはく、おしむべからず、かの地のうへに金をあつさ六寸にしきみてよ、得さしむべしとの給へり。長者よろこびて金をはこび、その地のうへに敷みちて東西へ十里、南北へ七百余歩なり、然れば一千七百一十五間の御堂を建立す。そうして一百余院の精舎なり、仏菩薩大阿羅漢をすへたてまつり、日々に百味の飲食をおくりたてまつること廿五年の間なり、かの所を祇樹給孤独菌となづく、かくのごとくめでたかりし寺なれども、もとは逝多林となづく伽藍を祇菌精舎と称す、舎密多羅王精舎をやぶりすて、人をころす所とさだまりけり、よて四大天王ならびに沙渴羅竜王いかりをなし、そらより大磐石をくだし、人を打ころす、数箇年をへてのち忉利天より帝釈第二の御子ふりて、人王と

なりて造立したまへり、そのうち又数箇年をへて天魔やきはらひ畢ぬ。いま荒廢の地となりて礎居のみのことつたへり、さればこれも化縁つきぬるにやとて、落涙し枕をあらうばかりなり、折節明方に郭公雲井はるかにおとづる、慈田僧正一首

あるじなき荒たるやどは涙もる、我を訪らう鳥のはつねか

と詠じ、明ぬれば両三人ひきつれて、御厨のうへにのぼる。遠見するところに青石のおもてひろく大なるあり、この石のそばより背蓮華のつぼめるが生出でたり。快専これを見て慈田につげたてまつる。僧正み給て不思議なりと称美せらる、祐範石のつきぎはよりとりて、慈田にまいらせらる、よく御覽すれば、蓮華の茎に四句の文あり。建曆二年源空帰洛、臨終正念往生茶毗この文まことに奇特なり、これは承元元年なり、さては建曆といふ年号あるべきか、このこと披露あるべからずとて慈田ふかくおさめたまへり

蓮葉の糸くりかへす物ならば、わこくに華はさきぞさかへん

上人の別の子細なく御帰洛あらば、念仏の御勸化いと日本に流布すべき瑞相なりとぞの給ける。たれ披露するともなきに京に沙汰あり

第二玉垣の観音付たり夢想の事

こゝに無助寺の僧正の弟子に大武の註記といふ少僧あり、遁世して諸国一見しけるが、伊賀の国山田の郡服部の庄玉垣の観音堂に通夜したりければ、夜半ばかりに不思議なる化人どもきたりて、上人赦免なくば国土に大疫おこるべしと申してかきけすやうに失にけり。このこと又洛中に披露あり、承元二年四月八日の夜、仁和寺の法親王横河の僧正同き夜の夢に法然上人建暦二年に臨終あらんときは、頭北面西右脇なるべしと天童きたりてつげりと御覽す

第三月輪殿御逝去の事

月輪殿上人左遷のことをあながちになげきおはしまし

て、その御思ひにや、承元元年五月五日御年八七にして御往生させたまひ畢ぬ。上人配所にしてきこしめされ御なみだ千万行なり

第四清福寺に御越年付たり支度の道場の事

さて上人はそのとしも清福寺にて御越年おはします、ここに承元二年八月に上人を支度の道場へ請じたまつる、風は上げしく、浪たかくして、御船くつがへるがごとし、されども別の御ことなし

第五松山御参詣の事

松山の庄長楽寺へ挙しまいらする、こゝにしばらく御逗留あり、御弟子等、いざや当国にきこゆる松山みんとしてゆきければ、上人もわたらせたまひけり、眺望のいと面白さに人々一首のうたをよみければ、上人いかにして

いかにしてわれ極楽にうまれまじ、彌陀の誓のなき世なりせば

人々この御詠心へられず、当所の景気、もしはひなの

すまひなんこそ現したくはんべれ、これはその儻なしと難じ申しければ、こゝろのすめばこそ角いふなりと仰せけり

第六律師の母の事

あるとき上人律師に仰せけるは、秋風にたくひてものゝ吟ずるはきくかと、律師申さく、なにとも分別仕らず候と、あれこそ律師の御房が母よと仰せければ、むね打さはぎ興さめて申しけるは、いかなる罪業によりていかなるものとなりてかくのごとく候らん、又いかなる妄念によりてつみあるらん、まづ鋤鎌をもて御堂の辰巳のいしずへのしたをほりて見給へと仰せければ、夜をみあかしてほりければ、大鼓の胴のごとくなるものをほりいだす、律師あさましく思ふて上人の見参にいれけり。かくのごときのおけと仰せありて、御弟子等をめし同音に念仏ひと時ばかりありて、かのものやうやくうごきいでけり、これをみるに餓鬼にてぞはんべりけり、律師いかんしてか仏道なるべく

候らんと申せば、七日念仏すべしと仰せけり、三日ありて餓鬼申けるは、清きうつはものにゆきをえさせよとこふ、いかんととへば、すゞりふでをこふ、むかしならひたりとて、四句の文をかきてまいらす。餓鬼多苦痛是苦尤無極、我願亦未来生妙光音天とかきてまいらする。上人これを御覽じて餓鬼を御教化ありけるは、いま苦にせめられて光音天をうらやむことなかれ、これも無常転変の内なり、されば正法念經に天上欲退時心生大苦惱地獄衆苦痛十六不及一とときたまふ、はやくなんじ念仏して浄土へ往生すべしと仰せければ、餓鬼ひとへに念仏し他念なし、七日別地結願の日念仏していきたへ畢ぬ。紫雲そらにたなびき不思議の往生をとげけり。この罪のむくひは十八になる継子の娘、六十九歳の姑の尼公に、あまりにつらくあたるほどに自害したりける、その因果に餓鬼とはなりたりと人まふしけり

第七鬼神往生の事

そのうち上人を佐渡浦といふ所へ召請申。御船にて入御あり、夕日海中に入てのち黒雲うずまきたり。上人の御座船の辺におつと見へければ、鬼神三四人参たり。二人は兵庫にてまひりたりし鬼神どもなり、竹杖つきたる鬼神におほせけるは、まことか汝等いのちのみじかきことをなげくかと、かれ答申けるは、我年齢七百才をたもてり、死にいたらんこといくばくならず、あの赤白の鬼神は我子なり、われいつまでもぞいたく候と申す。上人おほせけるは、汝等がかたちにとゞしく生類を害していのちとし、悪業日にまして後生には必ず三惡道におつべし、頗く命を捨て仏果のかたちをうくべしと、時に仏果とはなにものぞと申せば、上人御笈より絵像の阿彌陀如来を船の屋形にかけたてまつり、仏果とはかくのごとくの御かたちなり、汝らはいやく南無阿彌陀仏と称して身軀をすてよ、あの御かたちになりて親子ともに極楽にして、無量劫のあひだあひそひて無量無辺の快樂をうくべしとなりと仰けられ

ば、鬼神手をあはせ三度うちうなづき、十念をさづけおはしましけり、さて本尊を申しうけて四人の鬼ひんがしをさしてさりぬ。つき日晩におよび、東に紫雲たつ、上人鬼神往生したりとおぼゆる、ふねいだせとて紫雲にしたがひたづねいらせたまへば、讃岐の国と阿波の国とのさかいに万才山柳見の巖といふところにたづねいりて御覽ずれば、そびへたる岩のうゑに申しうけたる本尊をかけたてまつり、この御前より四人ながら身をなげ死にてんけり。上人おほせけるは一句の法門にこたへて不惜身命のこゝろざし、肝に命じ、往生をとげけり、こゝろなき鬼畜なれども奇瑞をあらはさんことよ、いはんや人倫においてをや、いかでか道心なからんや、鬼畜木石にもおとるべしとぞ仰せける。さて死骸を一所にとりをき、そのうへに一字の御堂をたて本尊にはくだんの阿彌陀の画像を安置したてまつり、上人御供養ありて鬼骨寺となづけられけり、とき阿波の国の守護に少笠原の次部義秋が所領のうち、

免田十町寄進して、かれらが菩提をとぶらひけり、めでたかりしことどもなり、

第八成阿父の蛇の事

さるほどに当国に御越年あり、あくれは承元三年になる、土佐の国室の津金剛智足擢の三崎を拜廻し給ひて、三月のすえに又清福寺へ御かへりあり。同五月下旬に上人角張の成阿をめして仰けるは、曼陀羅寺の東に大石に蟬のながごとなるこえのするはきくかと、成阿申さく、いまは冬にても候はず、夏になりて候へばさも候らんと申。上人仰ける、それこそ成阿が父よ、往て岩をわりてみよと仰ければ、あまり不思議さにかかけの大槌、鶴のはしを用意してかの岩をわりてみれば、なかくぼ／＼としたるところに水三分ばかりあり。そのなかに三尺ばかりなる赤竜わだかまりてはんべり。道俗貴賤是をより見物す。成阿これをみて心もさだかならず。父七郎政氏にておはしまさば、衣の袖へうつり給とむかへければ、袖にうつりてぞはんべ

りける。あとをみれば我是観音寺勤行令落止罪業所感果石堀為蛇身、ときに成阿懺悔しけるは、角張の庄に観音寺といふ御堂あり、免田三町二段在家一字候、親父政氏かれを勘落して我が党の給恩とす、その罪業のむくひ疑がひなしと申。上人仰せけるは、信濃国のことはこれまでこへて、当国にてかくのごとくあるはなにごとぞ、成阿申けるは、かの寺の別当阿闍梨良秀と申せし人は、当国禅通寺の人と申候ひしが、この縁候ひて信濃にこえてかの寺の別当となりて候ひけるが、免田勘落ののち詮方なくて帰国仕候ひぬと承り候しが、その念力にこたへて蛇身をばうけたるとおぼへ候とて、恭敬渴仰したてまつること斜ならず。さて少蛇七月十五日の念仏の最中、念仏聴聞すとおぼへて上人にむかひまいらせて、うちのびて死に畢ぬ。上人のおほせには少蛇往生したりと仰せける。紫雲たなびきたりければ、人々不思議のおもひをなしけり、さるほどに攝津国神崎よりはじめて傾城の自求往生おなじく

五十三人の悪党遁世のこと、浦々の釣人等の殺生をとむること、室津の遊君の出家、鬼神捨身往生のこと、律師の母餓鬼、いまの少蛇往生のこと、世に披露あり、俱舎にいはいく炎石鉄九衆生にあり

第九坂本の猿の事

こゝに不思議あり。承元四年七月二日に山門の猿坂本より二三十東塔にのぼり、中堂四十八燈をうちけし、おほ大鼓を打やぶりて坂本へくだる。次日猿百四五十のぼりて惣持院の十二燈をうちけし、扉ら障子を打破りなどしてまたくだる、つきの日猿二三百のぼりて文殊をひきたをし、四天王をうちまろばし谷々房々に乱入して経論聖教をとりすて、房舎を破却しければ、座主この事たゞごとにあらずとて門跡へあひふれ大鐘をならし三塔会合して僉儀まち／＼なり。ある人いはく我山はこれ王法をまほるなり、かゝる奇特前代未聞の珍ごとなり、もし仏法皇法のあやぶみかとも祈禱あるべきかと云云。東塔南谷藏人の註記すゝんでいは

く、軌信和尚よりこのかた十六代がほどの先規つたへはんべらず、さだめて山王の御とがめか。十禅寺の御宝前にして護法の占をきこしめさるべきかと云云。衆徒もともと同じてあくる七日十禅師にして、西塔北谷教受房の美濃堅者の童に辰王とて、今年十三歳になるを大床にのぼせおきて、地藏の大咒をみちて護法をわたり奉んと欲す、さらにわたり給はず。各肝胆をくだき五大明王の法をもていのりけるに、聊かもしるしなし、東塔北谷性持房法印弟子菊壽殿とて九歳になる少児あり、その日の衆会の躰みんとて若輩等と、くだりたるが、衆僧のかたより小鳥のごとく大床にとびのぼりて辰王をおしのけて、その座に居なをる。そのとき老僧力をえてこのほどの山上の猿の悪事たゞごとゝはおぼへず候、定めてわが神慮のおぼしめす宗候か、はや／＼御弟子等にしめしおはしませとて、伽陀をとなへければ、東西しづまりけり。ときにちごさめ／＼となきて二首あり

おのがためなにをあたごの山なれば、みなを唱ふる人をながすや

ちはやぶる王の籬を巻上げて、彌陀の御法を聞きしものをや

とうち詠じて云く、われはこれ五百塵点久成の如来、和光の化儀を海水に宿し三千世界の能化の主、八相成道の光を叡岳の麓に朗かにしてとし久く、我が山の仏法を守護するゆへに、法宿権現とよばる、みづから当山に住するゆへに、白山熊野の権現も当山におはまして、ともに円頓の教法を守護したまへり、彌陀葉師一跡にしてわが山をまほりたまへり

のりのためみかげをうつす山本に、聖きらへばすまじとぞ思ふ

とうち詠じ首をたれてうしろむきて泣居たり。ときに老僧も中臈も面々に落涙してこれをかぎりとぞみへたる。さては当山の訴訟によりて法然左遷の御うらみにて候ける、急速に奏聞をへて、めしかへされば、もと

も神慮にかなふべく候や、はや／＼納受をたれ、ものごとくわが山を守護しおはしませとて、数返の陀羅尼よみてければ、権現はあがらせ給けり

第十上人御勅免の事

同じ八日後夜のかねに僉儀して、法然左遷の御うらみにて候ひけりと奏聞両度に及びければ、もとより朕が叡慮にあらず、汝等が奏乱によりて配所へもうつせとて、すなはち勅免の綸旨をなしくださる。その宜にいはく

さんぬる承元元年に土佐国へくだしつかはさる所の流人源の元彦の身のこと、山門の訴訟によりて左遷せしむといへども、今又念行せしむる子細あり、勅免せらるゝ所なり、はやく本名を補し、鳳城に還帰せしめ利益をまたくすべき旨、宜く諸国に承知すべし、よつて宜如件

承元四年八月日

按察使藤原の朝臣泰定

月輪の大納言殿より始て各御状これ同じ、勅使には和泉の判官阿部近本、八月二日にみやこをたつて同き十八日に讃岐の国につく、上人勅宣のおもむき人々の御状等御覽じて、源空念宿ありとて同き廿三日に御請を申させ給ふ、勅使は同き廿五日に上洛仕る、さて上人は九月廿五日に讃州を御たちありて十月四日に兵庫につきたまふ

第十一勝尾寺へ入御の事

同き十日に勝尾寺へ入御あり、百箇日御参籠あり、かの寺には善中禅算の古跡勝如上人往生の地なりとて、当寺にて御越年あり、一百箇日御参籠す。あくれば承元五年になりけり、国中の聖道僧俗等わりなくとゞめ申ければ、いづれも利益なりとて正月より四帖の疏の御談義ありければ、その年も暮年におよべり

第十二画九一切経施入付たり大谷御本房御著の事

この寺に一切経のおはしまさゞることを上人不足におぼしめして、叡空上人より御相伝の一切経をとりくだ

し当寺に施入したてまつり、聖覚法印を唱道として御供養あり。さるほどに上人御帰洛遅々におよぶ、よし重て綸旨をなしくださる、上人おどろきおそれおはします、急速に勝尾寺の御いでたちあり。承元も改元ありて建暦元年と号す、十一月廿日に御入洛あり、御在所は大谷の御本房、さきの大僧正慈円勅を承りて御房をとりしつらひ給ふ。上人すでに今日ときこへければ山崎赤河原鳥羽のつくりみちまで参向ふ人々そのかずをしらず。車馬をとばし思々の御むかひなり、上人を見まひらせて輿車よりこぼれおち、各々まつ十念をうけまいらせ、御輿のなかにとりつきて悦の涙をぞながされける。七条を東へ御とをりあるに、貴人武士道俗男女御房までさらにひまもなかりけり

第十三月輪殿北の政所御対面の事

同廿三月にさきの月輪殿北の政所、同く大納言殿御房へ御まいりありて故殿下上人配所へ御うつりの後、日夜朝暮に悲歎しおはしましゝがその愁歎のつもり御所

勞となり、ついに御命終ありしことを、かたりまふさせ給て、今さらなるやうになげき給へば、上人も御存命あらば見参に入て配所の物がたり申てんとて、そゞろに落涙しおしませば、御弟子達も各すみぞめの袖をひたされける

第十四上人御参内の事

さるほどに同き十二月六日に権中納言光親の卿を奉行として御参内あるべきよし仰いだされければ、つぎの七日に御参内あり。いまさら御めづらしく貴き御気色なり。これは神崎よりはじめて種々の御奇特のこと而奏使披露ありけること、殿中までそのきこへあるによりてなり。上人御参内おはしませは渴仰せずといふことなし。さて上人御参内の後は御飯洛といひ、歳末の相看といひ、上下万民時々尅々に市をなす。釈尊初利天に登りて一夏九旬のあひだ報恩経を説たまふ。上天の雲のうへより降給ひしかば、人天大会ことごとく拝見のみちをあらはしたまひしがごとし。さて御弟子達

巻第九

は面々に縁について他行せられ。勢観は長病をうけて配所の御とも申さず、近日に減をえて勝尾寺まで御むかひにまいられたり、ことさらなにごとも勢観とのみぞめされけり

巻第九

第一上人御違例の事

去るほどに各参り集りて一所にして御越年あり。あくる正月一日なり、法蓮房道場庄嚴して年始の御念仏勤行あるべしとおほせけり、されども上人は御入堂もおはしませず、善恵房参じ御念仏の時おそくなりさふらふと申せば、源空は風氣のこゝちなり、各つとめよと仰ける。仰にしたがひ朝の御念仏勤行し畢ぬ、法蓮参じて見奉れば、いまだ御寝もならせ給はず、御こゝちをとひまいらすれば、心地例ならず、今日より七日別時あるべしと仰あり。おき居もおはしませず、そのうち高声念仏不退なり、御まへには法蓮善恵勢観房等不

退に候て御ものがたり申す。上人の御こゝちをなくさ

め奉る。上人をほせけるは、釈迦如来も御入滅のきざ

みには御身もひいらぎ、御胸もくるしく、こゝます

れ、かしこおせと阿難に命じ給き。源空は仏躰にあら

ねども決定の業とおぼへたり、いまだかくのごとくひ

さしく病床したることなし、われをたのむべからずと

仰せけり。十二日よりおき居おはしまして高声念仏五

躰をせめて三日三夜なり、各々申けるは源空がいのち

一月二月とものぶべからずと仰けり。そののち御目を

ふさぎ御念仏をとどめて三日なり、善恵房参じて上人

をうごかし奉り、御臨終仏の阿彌陀の像をばおがませ

たまふやと申せば、上人御ゆびをそらへさしおはしま

して、あの仏のほか別に仏のおはしましてや、観音

勢至は看病人のごとく、源空がほとりをさり給はぬは

おがむやとぞ仰せけるこそ不思議なれ。さて老僧達一

人づつしづかに念仏すべしと仰せければ、面々に御ま

第二内裏の御使の事

さるほどに権中納言光親、左大弁国実両勅使にて上人

の御往生の検見不退に坐せられたり、廿日の未の刻よ

り紫雲は御房のうへにたれおほひ、廿四日の酉の刻よ

り御念仏しきりなり。さてしばらく御睡眠ありけれ

ば、各はや日夜の窮軀に客殿のかたへいでゝすこしね

ぶりたまへり

第三賀茂大明神の入御の事

勢親法蓮兩人はんべりけるに、ともしびのかげよりゆ

ゝしき貴女一人きたりて、上人の見参にいるべし。人

々立のき給へとしめし給ひければ、御前をたち閑所に

てうけたまはれば、件の貴女上人の御そばにたちより

給ひて、いかにくるしくおはし候らん、この御痛はり

のみこゝろくるしく候とて、菓を服せさせまいらせて

仰せけるは、浄土の法門をばなにと御さだめ候ぞと。

上人こたへていはく、選択集と申す文を制作して候へ

ば、この文にたがはずはんべらば、源空が儀にて候べ

しと答へおはしませば、貴女さてはめでたく候とて、御ものがたりありて、臨終は殊勝奇特に候べしとて立いで給ふ。勢観これをあやしみて見送り給へば、車に乗じて河原へいで給ひけるが、忽然としてみへず、たちかへりて上人にたづね申せば、上人これこそ韋提希夫人よと仰せける。賀茂大明神の本地これなりとぞしめしたまひける

第四勢観屏の事

さて夜もすであげければ、廿五日の巳の刻になりぬ。上人御目を開き御覧じめぐらしおはしまして、あの障子とれと仰せければ、客殿のあひの障子をとる。兩勅使を始として宇都宮成田大胡別府佐々木の人々なり。上人御念仏をとめていかにやほどひさしと仰せければ、御帰洛の後御目にかゝらず候あひだ、とりあへず上洛仕り候と申す。上人はるくとの上洛神妙也とこそ仰せける。さて勢観をめてなんぢにあづけしつらとりいだせとてふたひらかせ、中なる物をと

出だせと仰せけり。消息二通切紙のふたつゝみたるものを二つゝみ出ださせて、上人仰せけるは、勅使を始めたてまつりて、坂東の人々もきゝたまへ、人の難儀の詮途には源空がごときものをたのみ給ふべきなりそのゆへは本三位の中將越前の三位つねにきたりて、源空に對面ありて洛中退出の後も重衡の卿は、源空に受持法号をもちて知識とせられ給ひき、ことに越前の三位ふかくたのみ二世のちぎりを致し給ひていひけるは、一門運つきて都をおちゆくべきにて候へば、合戦のときは一陣をまふるべく候あひだ、都の辺にてうたれたりときこしめされ候はゞ、御弟子等をつかはし死骸をとりて、後世をとひてたまはるべく候、死骸にしるしあるべく候と、約束ありしほどに、子細あるべからずと領掌す。案にもたがはず、一の谷の城やぶれて平家の一門おほくほろぶと、きこへしかば隨蓮成阿を生田の森へつかはして若干の死骸をみる、註なし、湊川にくだりてみるに切紙をもて越前の三位道盛

とかきてわきのしたにおしたり、これをとりて勝尾寺へきたれり、源空參籠のこゝざしありて折節ありしほどに、すなはち火葬して骨をとりて上洛するほどに、壁野の宿にてきけば、小宰相殿は鳴戸のおきにて身をなげたりときく、あはれさ申ばかりなし。さてこれにて道盛二人の菩提を訪ふ所に、二月廿一日の夜ふけて女姓のこえとして源空に見參すべきよしひいれたり、たれぞとたづぬれば、しのびてものも云ず、もし道盛の方の人かたとへば、しかりとこたう、さて内へいれて事のよしをたづぬれば、道盛自然の事あらば上人をたのみまひらせてまひるべしと、申して入たる子細あるぞ、われともかくもなりたらば、上人にまいりて後、なにゝも思ふやうにあるべしと申しし言をたのみて、福原より人目をつゝみこれまでまいりたるよしを、かたりもあへずなきるたり。源空あはれさかぎりなし。さて閑所をしつらひて、はごくみおきたり、ほどなく平産す。所生の子は男子、とりあげそだつると

ころに産の後六十三日といふに少宰相殿は二三日わづらひてはからず死に給へり。さて二人の菩提を訪らふなり、各その時の子をは源空が子なりと申とかや、かゝるぬれ衣をきて養育したりし子ぞあの勢觀法師はとぞ仰せける。都より參らせたりし文、明日うたれんとての今日、生田の森より進じたりし文、わきのしたにおしたりしふだ、二親の骨のうへに銘をかきつけて勢觀にたまはる。勢觀此を給りてむねにあて、ひれふして愁歎きはまりなし。悲しき哉なや有為の里父をみれば名のみ残れる白骨なり、母をみればそのしなもなし、哀れ哉や南浮のさかひ、白骨はとゞまれどもそのかたちはなし、分段生死いかなれば、父子の恩愛をへだつらんとて、たゞ今のことのやうになげき給へば、見聞の人々たもとをしぼり、哀傷の涙押へがたくしてはんべりける

第五三尊來迎付たり御入滅の事

さるほどに四の大鼓も打ければ、紫雲は御房のうへに

たれおほひ、金色の光明は日に映じてかゞやき、異香は御房の内に薫ず。ときに上人おほせけるは、師となり弟子となるは、多生契恩のいたり、徳のいたりは宿生のかたらひなり、生夢のうちの対面はたゞいまに過ぎれり。生死の恩愛ははやきはめぬ。報土無生の再会を期すべしまくのみ、法蓮袈裟まいらせよとめさる、慈覚大師より御相伝の九帖の袈裟をまいらする、御手づからひきかけて、高声に光明遍照十方世界念仏衆生攝取不捨と唱て、北まくら西むぎにひれふしおはしまして、御念仏九返にして、いま一返は南無の御こゑのしたにて御息終させ給ひけり、そのうち御臂のうごきたまふこと十余返ばかりなり、善恵房なみだをののごひ申けるは、上人御化導の輩にも十念をさづけおはしませしき。仏の本願も乃至十念ととき、善導も十声と釈し給へり。上人御存日には源空が往生者末代の念仏者の手本なるべしと仰候き。いま一返候はずとも御不足は候はねども、いま一返御念仏となへて御弟子等にきか

せ給へとて、法蓮房南無阿彌陀仏とすゝめたてまつりければ、はるかの紫雲のうへに南無阿彌陀仏と一返こたへたまふぞ奇特にはんべりし往生なれ。建曆二年壬申正月廿五日の午の正中春秋八十の御往生也。天竺はいかなる国なれば狗戸那城にして仏入滅したまふ。南浮はいかなる国なれば平安城にして上人命終したまへる、抜提河の西の岸いかなる所なれば仏八十にして滅を唱給ふ、白河の東のほとりはいかなる所なれば大谷にして上人御往生ありやとて、涕泣きはまりなし。或は受学相承の御弟子、或は他宗帰伏の御弟子、信心堅固の念仏の弟子結縁聞法のたぐひにいたるまで、かなしみの涙むねをこがす、いはゆる仏田寂に入たまふときは、そらをとぶ鳥類もつばさをたれて御棺のまへにおち地をはしる獣ひぎを屈して涙を流がす。吹く風枝をならさず、草木いろを變ず、江河も流れをとめて登地の菩薩も無生の觀智をうしなひ、証果の羅漢も漏尺の袂をしぼり給ひき。無碍解脱の御弟子

も、無常転変のよしみとかなしみ給ふもことほりなり、いはんや末世の愚俗においてをや、生死出離の善知識におくれたてまつり、別離の涙も禁じがたきものなり

第六土葬の御儀式の事

すでに晩におよびければ、さてあるべきにあらねば、上人を入棺したてまつり、一同に念仏数万返となへて廻向もおはりてのち、御葬の儀式評儀せられたり。釈尊の御茶毗のごとくなるべしとさだめらる、このよし法蓮房に申ければ、法蓮なく／＼いひけるは、信空十二歳上人廿四の御としより恭なくも師弟のちぎりをなしたてまつりてより已来、朝夕信空とめされ、極熱の空には扇を給て御まへに候し、極寒の冬の夜は衾をかさねて御辺にまいる、経論をさゝげては鸚鵡のさえずりこたへ、疏をひらひては伽陵頻の御こえをまなぶ。かくのごとくの御なじみ一年二年のよしみかは、五十余歳の年序なり、かやうの御なごりにいかでか無念に

火葬し奉り、忽に白骨となしたてまつらん事、余にあへなくおぼへ候となげきたまへば、面々信空の御儀に同ずとて、土葬の儀式にさだめられけり。あくれば廿六日御葬所には大谷のうへの山、青石のある所をさだめられ、石をひろい土をつきたまふ、慈円これのみたまひて、青蓮華のおいたりし石なりとて、奇特のおもひをなしたまふ

第七土御門より御訪ひの事

さるほどに内裏の檢見の勅使帰参仕る、御往生のやうを奏聞す、未曾有の御往生なりとて御弟子のなかへ綸旨をなしくださる。土御門の院より上人御往生の葬の御絹水引、已下のために唐綾十疋白布三十端、近衛の藏人等をもて送られたり一首

後の世の知べなれとてかくばかり、思ふ心をはこぶばかりぞ

同廿七日の午の刻の御葬なり、御棺は御枕のかたは信空、御跡は善恵、惣じて配所の御伴十二人の僧侶御棺

の左右につきそひ、そのほかの御弟子等結縁の老若勝計すべからず。同音に念仏して御葬のときにいたり、埋み奉り畢ぬ。上人兼日におほせけるは、我が往生は釈尊のごとくなるべしと仰せいだされたりければ、御弟子ら申さく、端坐合掌にて候ましやと申せば、すこし微笑しおはしまして言く、我れ娑婆に宿することは浄土の経路をひらかんがためなり。源空端坐合掌せば人々さだめてこれをまなばん。もし失念のともがらは、しかしながらおのが心をあつかひて、名号を本とすべからず、穢身端坐によるべからず、たゞ念仏往生なるべし、釈尊の御入滅の儀いかでかそむくべきやと、頭北面西右脇臥にて御往生をとげさせたまひ畢ぬ。さて中陰のあひだは各退散なくして精誠をいたし、報恩を謝したまへり、まことにありがたかりし御ことどもなり。初七日の導師は法印淨憲、大官の大政大臣家の御諷誦あり、二七日の導師は法印淨賢、秋兼の三位入道殿の御諷誦あり、三七日の導師は住心坊、

証空の御諷誦あり、四七日の導師は観頭僧都、左大臣僧正顯真の御諷誦あり、五七日の導師は法印聖覚、上西門院より自筆の仮名書の御諷誦あり、誦経物には大文の綾百疋、箏の琴一帳、唐錦の袋にいれられたり、その諷誦にはく

誠にや、またつみふかき身となりて、よせくるなみに事とへば、より所なきものうさに、行くすべしらぬ旅のみち、たづねてみればのりの師の、げにたのもしきしるべかな。昔かたりの詞のはに、われもろともの上にいり、たぐひすくなきおしへとや、まことのみちをあらはして、ひとつはちすのみとぞなる、そのおもかげのゆかしさに、わづかのまともわすられず、つゆのいのちもたのまねば、おもひのいろをほにいだし、みづぐきばかりぞしるべなる、こふるぎのたもとにあらされて、もろきなみだのところせき、よものほとけもしろしめせ、わがいつはりのなきことを一首

うけつたう法の流れにすゝがれて、心のいろのま

ことあらはす

左少将藤原朝臣為衡敬白

六七日の導師は求仏房、無動寺のさきの大僧正慈円の御諷誦あり、七々日の導師は菟城寺の長吏法勢大僧正公胤、信空の諷誦あり、公胤僧正は内裏に参会せしめ浄土の不審等をあきらめ、喜悅の眉をひらくといへども、別してかれに帰伏したてまつらず、五七日の夜の子の尅にあたりて、希代の靈夢を見給ふ、よはひ八旬ばかりの老僧瓔珞細奩の衣を着し、天童に蓋をさゝせ、公胤の枕もとにたちて、しめしたまはく、汝源空の念仏の化導を不信の条、かつふは仏意にそむくべし、かの廟墳に詣して慙悔をなし、懺度をえてうくべし、われはこれこの寺の本願主智証大師なり、唱導をのぞみて滅後のちぎりをむすぶべしとしめしおはりてさりたまふと、おもへはゆめさめぬ。そのあとに異香薫じて数刻なり、よてまづ廟堂に参じて後会をちぎりたてまつり、滅後の御弟子と号せらるよし、諷誦のみ

きんにして改悔し、左右の眼になみだも禁じがたしとて、かたりもあへずなき給へば、聴聞のともがら各袖をぞうるをしける。そのうち毎月忌辰をむかへて御弟子の道俗たゆることなき御仏事なり。百箇日は隆寛、一周忌は堀河殿、第三年は月輪殿次第各前後未判のあひだ、御廟においてくじにまかせて勤行せらる。そのほかまゝの御勤勝計すべからず。宗宗家々大徳碩才これおほし、かやう忠勤ありがたきことどもなり

第八波画堅者破選扨付たり廟堂破却の事

嘉祿二年の春のころ上人の御往生十五年に相あたりて、一の不思議いできた。そのゆへは延暦寺梨本は実相円融房、青蓮院は皇胤譜代の遺跡なり、各四明一山の貫主にそなはり、両門三千の棟梁とおはします、高僧賢哲なり、しかりといへども或は御存日に習学し、法門の道理に帰敬し給へり、或は後会のちぎり、諷誦をさゝげて滅後の菩提をいのる、みなこれ念仏を賞し、化導をもはらにするゆへなり。たとひ墳墓くつ

るとも、いかでか遺骸をおろそかにせんや、こゝに上野国より登山したりける習学者に、波面の堅者定僧といふものあり、ふかく上人の念仏弘通をそねみ、選択集を破する文をつくり彈選択となづけ。法然の弟子習学者おほしといへど、もとは天台宗の学者、いまは師匠のあとをまなぶ、一宗を興行して一流の過をたつるものなりとて、隆寛律師のもとへおくられたり、律師これをみたまひて先師の素意をあらはさんがために顯選択といふ文をつくりて、定僧が難破をくつがへしたまふ。かの肝文にはく、なんぢか僻破のあたらざることは、たとへば暗天の飛礫のごとくす、とあざけりかきたり。定僧遺恨をなして、後ほりかはのゐんの御宇嘉祿二年の夏、衆徒をあひかたらひて天下みな一向に浄土門におもむきて、顯密の教法すでにすたれなんとす、よて念仏を停廢すべし。就中隆寛はこれ我山の学者として円宗の教法をすて、念仏専修することしかるべからず、張本を遠流すべし、まづその根本源空が

大谷の墳墓を破却してかの遺骸を賀茂河白河にはねいれよとて、強々の群儀におよべり、わか学匠どもとともく同じて一心神水を服し、当山に閉籠奏聞すべきよし治定して、貫主に申。其時関白は家実猪熊殿、山門の座主浄土寺の僧正円基、摂政殿の御あになり。内外ともに強縁にして衆徒濫訴に勅語ありければ、六月廿三日所司専当等を數百人さしつかはず、大谷の廟堂へ発向す、よて京都の守護人修理の亮平の時氏使者をつかわし、東大隅の入道親子五人いでむかて問答す。内藤五郎兵衛の尉藤原の盛政父子十五騎にてまかりむかふ、洛中辺土耳其目をおどろかし、人々さはぎあへり。左右なく狼籍をいたさんことはなはだもていはれなし。たとひ子細ありとも天聰をおどろかしたてまつり、別して將軍家にあひふれべし、たとひまた勅裁ありとも、武家がたうけたまはりて、その沙汰を經べしと、面々問答にをよべども、是非なく凶徒等強々の儀をいたし、次第に廟堂を破却し、房舎をこぼちけれ

ば、ちからなくし、定めて山門のものどもきゝしりたらん、善悪不二邪正一如のことはり、関東のともがら弓箭のいへをつぐ、西方の行者魔障退治のためなり。

面々にむまの鼻をならべ、法にまかせよと下知して散々にかくれば、くもの子のちるがごとくにけうせぬ。

その日もすでにくれ、おほよそ堂舎破損すといへども、かほどに退散しければ墳墓にはいまだ手もかけず、その夜は信空証空妙香院の僧正良快月輪殿御子息各御弟子二百余人かしまつて涙ともに警固して談合ありけるは、今度まづ退散すとも山門のいきどをりついにむ

なしかるべからず。今夜に改葬したてまつらんとさだめて、少夜ふけ人しづまりければ墳墓をひらき奉る、御棺朽損せず、ふたをひらきておがみ奉れば、すこしも損壊もなし、御色こそすこしくろくおはしませども、御衣も袈裟も朽ちず、異香とをく薫じて数年をふ御弟子達いよ／＼奇特のおもひをなし、おの／＼敬礼して云、帰命稽首法然上人、生々世々値遇頂戴とゝな

へて、阿彌陀經同音念仏数万返して、よもすがら落涙千万なり。むかし月氏には教主釈尊の尊容をぬすみ奉らんとせしとき、警固をいたす、いまだ域に本師上人の遺骸をぬすみたてまつらんに、災難なからんやとて、宇都宮入道遁世の身なれども、にわか甲冑を着し兵具を帯し、家の子郎等ども二百余騎、都にあるあひだ、宿直仕る。このほか大隅の入道千葉の亮入道法阿渋谷の七郎塩屋各軍兵を率して参り、よろいの袖をかたしき、甲の鉢を枕として、なく／＼守護し奉り、夏の夜なれば、ほどなく明なんとなす

第十二尊院へわたり奉る付たり広隆寺御葬事

さるほどに御棺をよろひの肩になひ、涙とともに嗟峨の二尊院へわたり奉り、山門より捜求すべきよし風聞せしかば同じ廿八日の夜、しのびて広隆寺の来迎房四信のもとへうつし奉りて、在所を口外すべからざるよし、各々仏前にちかひて退散し畢ぬ

第十一隆寛律師遠流の事

さるほどに夏もすき秋のはじめになり侍べり。山門の訴訟こはくして、隆寛律師、聖覚房、空阿彌陀仏を配所へつかはさるべきよしきこへしかば、律師のたまひけるは、凶徒等わがこゝろをしらず、定僧が申すことによる、たゞし先師上人すでに念仏興行によりて遷謫におよびおはしませば、予その跡を追はんこと、もとも本意なり、配所は奥州と定めらる。嘉祿二年八月五日相模国森の入道うけたまはりてくだりけるが、律師をふかく帰依しけるあひだ、律師の弟子に実成房を配所の代官につかはす、律師をば西阿住所飯山へいれたてまつり、末代にかほどの善知識にあひ奉ることよとて、ふかく渴仰をいたしけり。つぎのとしの夏のはじめより風氣とておかされふしたまひけるが、病床して自筆に一期のあひだのことを記して彌中吟となづく。同じき年の六月十六日に不思議の往生をとげ給けり。嘉祿二年十二月廿八日に改元ありて安貞元年と云云。同じき二年正月廿五日の暁き、上人の御遺骸をば広隆

寺より西山へ迎へ奉り、光明寺遺第一所に來會して茶毘し奉り畢ぬ。種々の奇特申すばかりなし、貴とかりし事どもなり。さて今度改葬し奉る時の御色形を、眞影に造立し奉り毎月廿五日に法恩を修せんが爲に敬礼をいたす、信州善光寺の報恩院の御影はこれなり

第十二隨蓮の夢の事

沙彌隨蓮出家の後上人に常隨給仕して配所へも御とも申す、上人御臨終の時も隨蓮をめされて仰けるは、念佛はたゞやうなきをやうとすと、たゞ二ごゝろなく申せと仰せかふむる、このむねを信知す、こゝに上人御往生ののち、三箇年をへて、世間に念仏者ども申していはく、念仏申せども学文をして三心の様をしらずんば、往生すべからずと云云。隨蓮まふさく、上人のおほせにはやうなきをやうとすと、たゞひとへに仏語を信じて念仏すれば、かならず往生するなりと仰せさふらひき。またく三心のことをばおほせ候らはずと云云。ときの人それは一切こゝろへまじきものには、た

と方便にこそ仰せあれど、まことには上人の御存知のむねとて経論をひきてゆゝしく申すあひだ、随蓮さてはさもあるらんと、すこし感ずるこゝちあり、たれにかこの不審を明べきとおもひて、一月をへけるに、あるとき随蓮ゆめをみる、法勝寺の西門をさしいりてみれば、池の中に色々の蓮華ひらきてめでたし、西の廊

の方へあゆみよりてみれば、僧衆おほくあつまりて淨土の法門を談ぜらる、その上座に上人能化しておはします、随蓮みつけ奉りてかしこまる。上人仰けるは、随蓮このほどなんぢなげき思ふことゆめ／＼わづらふべからず、ときに随蓮くだんのことを申しあげたり。上人おほせけるは、世間にひがごと／＼いふものありて、あの池の蓮華を梅桜といはど、なんぢ領掌すべきかと、そのとき随蓮いかゞ左様に申候とも、げに蓮華にて候らはんをばもちゐべからず候と、ときに上人さぞあるらん、念仏も又かくのごとく、源空がおしへのまゝを信せば蓮華をやがて蓮華とおもはんごとし。

人のいふことにつきて迷乱せば、あの蓮華を人、梅桜といはどそれにつきて、我身もあらぬやうにてあるべきか、人邪儀をのぶるともゆめ／＼人の迷乱につくべからずと云云。そのゝちふたごゝるなくして八旬におよび、ついに往生の素懐をとげ畢ぬ

第十三親鸞上人の御勅免の事

さて上人御勅免のこと、さんぬる承元四年八月日、よて善信上人も御勅免の院宜おなじ日になしうたさるといへども、越後の下着は十月になり、しかりといへども上人御入洛のよし、いまだきかざるあひだ、しばらく善信上人御上落も御斟酌のよしにて、上人の御上落をあひまぢ給て、京都に不断人をのぼせておかせたまふ。されどもその年もすでにくれぬ、つぎのとしも御上落なしときこへしかば、承元政元ありて建暦元年と号す、さてなを十一月にも御上落ともきこへず、十二月廿日に京都のつかひ下国して十二月中旬に御入洛とぞ申されける。善信上人きこしめされ、正月に国を御

出あるべきよし思しめしけれども、北国は雪き多やらで路次難儀のあひだ、坂東をへて御のぼりあるべきにて、信州へ御こへありて上野へ御いでありければ、こゝかしこより御門徒の人々そのかずをしらずきたり、御なごりをしたひ申す。正月もさり二月も中ばになりければ、上人御帰洛ののちいくばくならず、正月一日の隣より御風氣とて同じく廿五日に御往生とつけ申したりければ、いまは上落してもえきなし、たゞひとへに師訓を興じて滅後の化儀をたすけ奉らんにはしかじと思しめして、仏法まれなる遠国の道俗を利益して、厚恩を謝し奉らんと仰せありて、関東北陸奥州のさかひをてらして、貴賤男女老少愚昧化導しおはしましてのち、御遺跡もわずれがたく、かつは恋慕の思ひ、かつは礼拝のために御上落ありて、年来の遺弟同学のよしみ、上人の御廟もなつかしく、かたゞさりがたくおぼしめし、五条西の洞院あたりに勝地をとめて住みたまふ。毎月廿五日、上人御往生忌辰をむかへて念

仏道場となし給へり。そのうち数年をへてひがし山へ御うつりありて御恩徳を謝し奉り給へり。しかればお坂東北陸等御遺弟門葉市をなし、目出たく興隆しおはしましけり。御滅後五十余年の化導もはら奇特にして、門徒の道場そのかずをしらず、日本一州にみつることこの上人の御勅化もとも日域にみちふさがる。聖道浄土の門葉家々宗々これありといへども、当流は算数にもおよばず、いづれの宗、たれの利益において偏執をなすべきや、不思議の勅化これきはまりなし。さて善信上人念仏の功つもあり、修行たけたまひ、教行信証といふ疏を始めとして、数十巻の釈を造立して信ぜしめ、ふかく捨邪帰正したまひ、末代の凡夫を哀みたまふ。まことに無智のともがらのためにみやすく、ころへやすきこと、この釈にかぎれり、しかふして弘長二年壬戌十一月廿八日御歳九十にして、殊勝の往生をとげたまへり。諸国の遺弟その遠忌をまち多、報恩を謝すること未曾有のことどもなり

法然上人秘傳遠流記

法然上人遠流記卷之上

目録

- 一 上人月輪殿奇瑞之事
- 二 山門衆徒訴訟之事
- 三 上人配所土佐國定事付俗名付奉事
- 四 月輪殿法性寺留給事
- 五 法性寺小御堂惡党入事
- 六 惡党等示御詞之事
- 七 上人御帰依人々法性寺集給事
- 八 月輪殿御名殘惜給事并殿下示御詞
- 九 上人御出浴之事
- 十 同御船神崎着事
- 十一 室津傾城等御教化預事
- 十二 同上人依教化捨身事
- 十三 御船福原経嶋着事
- 十四 鬼神御船入父母長命法問奉事
- 十五 特意云唐人上人問答之事

- 十六 御船和田三崎付事
- 十七 御送人々別給事附名殘歌
- 十八 同都婦大谷御坊參給事

元久二年乙丑四月五日上人月輪殿に參じて、浄土法門を談じ給ひて退出の時、地より高き蓮華を踏み歩み給ふ御後頭光輝けり。禪定殿下彌よ信敬淚を流し給ふ事千行万行也。凡そ上人弘通の教文世に弘まり、日本一州彌依最も深く、念仏の日高く晴れ衆機煩惱の雲を払ひ鏡へに称名の風とをく扇ひて万類往生の花の芬ひ新なり。一天真仏四海の独尊と仰ぎ給へる所、山門より上人念仏弘通をそねみ法然坊是れ外道也、単へに念仏一門停止し、其の身を配流せらるべし。不然、七社の神輿を洛中へ牽入べき由、土御門院に訴へ申に依て月輪殿より兎角諫め被申けれども、衆徒彌よ蜂起す。此の故に建永二年卯二月廿七日に還俗の姓名を牽り藤井の元彦と云へり。配所は土佐の国と定められ、

又月輪殿法性寺の小御堂に留奉り給ふ。或夜雨ふり風騒がしかりけるに悪党五十余人御座所にをしよせたり然れども戒行を先とし慈悲を宗とし給へる人々なれば妨ぐるに及ばず、上人を始奉り御弟子六十余人の衣裳を皆剝取り、其外仏具水瓶などの御重宝ありけるを隆寛律師の計らいとして隨身せられたりけるを皆取りにけり。此悪党等、後の山を指して入にけり。隆寛律師聖覚法印二十余人引具し追懸くるを上人努々其儀有るべからずと仰ければ、皆帰りぬ。其後上人唯一人此悪党のあとを尋ねて山に入り給ふ。律師も法印も見へ隠れ見へ隠れ行く程に、法性寺より奥真澄まことの池のはたに悪党等並び居、取る所の衣裳を配分しける所に、上人御入り有て石のありける座し給て、彼の悪党等に向て言はく、人々の有様を見るに或は諸大夫織藏人皆々恥ある輩也。暫く心を閑め源空が一言を聞くべし。今何ぞ電光朝露の須臾の身を以て盜業を犯し、長く永劫の苦しみをうけんや。浮生は幻しの如し、朝に交じ夕

べに交ず。生死流転は昔も迷ひ今迷へり、病ひは死の花なれば無常の風一度びあをいて本末に帰る色もなし老ひは生の終りなれば有為の雲散じ峯に留り跡もなし身を観ずれば岸の額に根を離れたる草、今日や今生の終りならん。命を論ずれば江のほとりに繋がる船、明日や後生の始ならん。無常の殺鬼は高賢をも嫌はず賢君をも明王をも何れか終に残らん。有為の怨賊は貴賤をも不_レ論、良臣をも黎民をも誰か独り留まらん。古より今に至り凡より聖に及ぶまで人は異なれども、此の理を交ぜず。世は移れども此の習ひは新たならず凡そ悪道苦患をうくる事専ら煩惱に依て妄執す。妄執の故に煩惱を起す。煩惱の故に苦患をうく、三毒依て銅柱鉄城に墮す。又寒氷紅蓮色は惑業の家より染め出せり。悲哉夢の如くなる一旦の身を食り永き世の苦因を不_レ顧、歎哉幻しに似たる片時の世を思ひて来報の苦患を知らず。汝等が威勢にも憚らず、奪精の猛鬼は汝等が弓箭にも恐るべからず。終に炎魔窟にひさまづ

かんととき自業自得果の涙を干すともかはくべからず。

願はくば今生一世の身を軽く思ひて後生永代の罪の重き事を思べし。然るに彌陀の本願は十悪五逆をも不

嫌、超世の番号は謗法闍提をも多らぶ事なし。一称な

れども尙を不捨、況んや十念行業をや、十方衆生の願は広くして、道俗をも攝し、光明遍照攝取は遍くして

男女に及ぼす。相構へて此理を耳の底に留めて往生極

楽の素懐を遂ぐべしと、懇に教化し給へば五十余人の

悪党ら随喜をなし渴仰を致し、前の罪を恨み後悔の涙せきあえず、面々合掌し十念を受く。上人如是の御

意に及ぶほど教訓して返り給ひぬ。隆寛聖覚御有様を見奉り、涕慟悲涙きはまりなし。彼の俗仁等上人の御

心を恥て取る所の衣裳を皆持ち来り進せけり。于時上人言はく、源空全く財宝を取んとて汝等を教訓する

に非ず、見苦しき仕態也。疾々持返るべしと仰有ければ力に不及、給りて返りぬ。さる程に山門の訴訟の趣

き頻りに依て諏訪判官実安、和泉判官助国二人兩奏使

追い立ての官人として法性寺の小御堂に罷向ふ。上人

配所に移し給ふべき由し申すに依て、上人已に出て給

ひ御輿に乗り給ふ。力者の棟梁には式部公西信入道信

濃州の住人に角張つゝがの成阿彌陀仏随蓮惣じて六十人なり

最後の御送し率らんとて参り給ふ人々には月輪の禪定

殿下、堀川の右大臣入道殿、明兼三位の入道、大原の

顕真、天台の座主慈珍、凡そ蘭城寺の人々、九重の内

上人の化導に預る輩ら一人も残らず参りけり。上人装

束し給へる御躰を見奉れば悲哉秘密灌頂の剃刀を当て

給へる御頂きには悪業俗塵の穢しき烏帽子を引き立て

召し、無漏解脱の御衣を剝取て有漏冥悪の直垂着せ奉

り、法徳高貴の御名を替え在纏業報の俗名を付け奉り

藤井の元彦と云名を付てよび奉る。有為世間の習ひは

春の花一日の友なを立ち離れば名残り惜しく、秋の月

片時の情け実とに曉の空に心苦しき事こそ侍べるに、

三句一偈の師にも非ず、永年数日の芳恩也。何なる木

石なり共、此の御姿見たてまつりて歎ざらんや。さる

にても若年異例の御事にも非ず、七十五の御老妹也、見るに魂をけし思ふに涙せきあゑず。其の中にも月の輪殿は老々として上人の御輿の長柄に取り付き給ひて言く、哀れげに長命ほど心くるしき物は侍べらじ。丸ろ上人に先き立ち進まらせて訪ひ奉らんと存じ候ひつるに、上人配所に移されましまさば再会何れの時ぞや。罪無き上人を土佐の国まで移し奉りなば、愚老が悲泣いかゞせんと歎き給へば、上人涙を押えて言く、面々の愁涙理り也といえども、別離有為の習ひ、生死もつて同じ再会期し難しと云へども、聞法結縁は累劫芳契也。然れば行末たのもしく思給べし。各々心を閉め筆を染めて源空が一言を書きとゞめ給べし。縦ひ源空は西海の波に携ると云ども一句法訓は留りて眼の前に形見と可成。設ひ罪は十悪五逆すら往生す、況や善人をや。念仏は一念十念も往生すと知て而も多念の業をばげまして、一念十念の者往生す、何況んや多念をやと心得て申べし。是れ源空に對面すると思て忘れ玉ふ

たと云々。御輿をすでにかき出し奉るに、上人向顔も今日計り也、師匠の御躰もいつか見奉るべきと思へば隆寛も聖覺も前後に随ひ、只だ顔を押へてかなしむ。月の輪殿、堀川殿も後宮にして縦に教訓の昔を思ひ玉ふ。然し配所土佐国と定められけるを月の輪殿彌よ遠く成奉らん事を悲み、今少し近き所の讃岐の国に中郡法性寺の庄誓福寺は兼実が所領也。其れへ移し奉らんと思ふはいかんと言へば、両奏使等、縦ひ命失ひ頸をめさるとも上人の御故ならば、恨む所有るべからず。御仰に随ふべしと。鳥羽の草津より御船にめす。土仏の津にて上人仰せに云く、源空今度の配所は海中四國の利益あるべし。今夜其の注るしあるべしと言ふ。兩使此事を書き付け置く。かくて上人の御座船を神崎の橋の上へ二町計り引き上げて付けたり。御送りの人々の船六十余艘同じ所に繋ぎ、同じ暮れ程に傾城五人水引きしたる唐傘さゝせて従女に栢をさせて上人の御座の御船近くこぎ寄せたり。参らすべき由を申す。隆寛

律師船の屋形遣戸を開いて言ひけるは、上人は名聞を好み玉はねば、美麗の類もなし、食欲もなき御身なれば、絹布米穀の所持もなし、何に依てか望み玉ふべき其上へ女人の御身、努々上人の御船には叶ふべからず左様の事は、近か通ひの商人船にて聞き玉ふべき由言へば、傾城申けるは、惜しくもましますべき上人だにもかく御いとひあり。増して商人など心なからん。船には何にと可_レ申とて、其後は音もせず良久しくありて、齡三十計なる傾城の船ばたをたゝひて調子を取り上人の御船より始めて東の船、西の船を始めて是を聞くに、三句の今様を詠じけり。慈悲の御無漏広くして人を漏らさずとこそ聞け、何にとて女人を隔つらん、船の内の人々恨めしさよと、二三返詠じ、其後申けるは設ひ今生の御引出物こそ無くとも、我等耳底に留るほどの後生の御引き出物に預かりて、帰らんと申す。隆寛律師是を聞て上人に申さん。昔寂然上人嵯峨の釈迦如来を迎え奉り、帰朝の時、望津に着玉ひけるに、傾

城ども来り船に乗らんとす。叶ふまじき由、言ひければ、有漏路より無漏路に通ふ釈迦だにも、羅刹羅が母は有りところそきけと、うたひけるも、今こそ思ひ合せけれ。何にかは苦しかるべき。御ゆるされも有るべきにやと被_レ申ければ、上人聞こし召し、旁のはからひなるべきと仰せらる時、このよし傾城に言ひければ、彼れら喜んで御船に参りける。其後、上人彼等有様を御覽じて、後生引出物を所望するこそ心憎けれ。さらぬだに、女人は極めて罪重き事あり。同じ女人と云ながら、汝等は罪深き身也。船の内、波の上にして一生の親会を恣にして明暮し只だ人の心をたぶらかし、月の影に乗る船ばたをたゝいて往還の客に心を懸け、波の上にさほをさし、水の面てにうかびては身を上下の人々に見へ、日西に傾きては何となく形をつくろひ東に日の出れば契をさる。夜半の枕を待ち只だ身を上下の盪に任せて夜ごとに香はる異香を、身に留めて思ひを費やす。心々手枕、袖に名残を惜みて胸をこがし

如此のつみ深き身と不^レ知侍べる事、返々はかなし。
此の世はつねの栖かに非ず、草葉に結ぶ露よりはかな
く其の身ばかりの姿也。水に宿る月よりもあだ也。金
谷に花を詠ぜし客も花と共に無常の風に随ひ、南楼の
月を翫ぶ盞も月に先き立ちて有為の雲に隠れぬ。され
ば鳥部野の辺の朝の霞、有りはつまじき世を願ひ、船
岡山の夕部の煙、送れ先き立ち愁へを残し、花やかな
りし姿も、蓬^{よもぎ}が本に朽ぬ。蔽しかりし姿も苦の底に埋
む。嗚呼はかなかるべき世の習ひ哉、不定なる人の命
也。各の夢の内のかりの栖かに心を留めずして淨利の
蓮に思を懸くべしと言まへば、ある遊女涙をながし申
すやう、如此の浮世を離れはかなき身を捨て浄土に
参るべき行は、女人身に取ては何なる法力を勧め候
ふべきやと問ひ奉る。上人言く、女人は罪深ふして、
諸教の出離をゆるさず、彌陀如来の本願は殊に女人引
接の願深きなり。韋提希夫人は五障の人身たりしかど
も、往生を西方に証す、侍女が百悪なりしも往生の業

懐を淨域に願はず。彌陀如来に憑みをかけ易行の名号
に志を運ぶ。今度難受人身を得たる思出には、心うか
りし歎きの衝^{うちま}をはなるべしと云々。遊女ども是を聴聞
して随喜して申す様、今生の御引出物は何かせん。只
今御法門を深く耳の底に留まり候ひぬと申し、御前を
立ち、我が船に乗り移つて大船の傍らに此船を指寄せ
又別の船に若き傾城を二人のせて上人の御船へ進する
彼の遊女ども先きより絹深く引きかつき脇の下より手
箱を取り出して上人の御ひざ近く指し寄せ申しけるは
莫大の御法門承り候ぬ。何をか御布施にと思ひまひら
せ候へども、聊か御用に立ち候べき物候らはねば、是
こそ何より御目に懸けたく覺へ候ふほどに、我等が中
より進するなりと申す。上人彼の箱を引き開きて御覽
せんとする所に、直垂の袖を髪に打ち懸けて、ほつか
いを片かたに持ち来りて、上人に進上して申しけるは
法性寺小御堂にて狼籍仕候ひしが是まで参りて侍る也
と申す。上人先づ傾城の参らせたる手箱の蓋を開きて

御覽ずれば、何とは不_レ知、引き合せにて包みたる物五あり。取り上げ御覽ずれば本結きわより髪を切て包みたり。残り如_レ前、思々本結を以て結びたる髪を切て奉る。上人彼れ等を取上てかきなで_レ涙を流し、是を御覽候へ、女人の身のかざりには高きも賤しきも老ひたるも若きも皆髪を以て大切とす。長き髪をば末を枯らさじと思ひ、短き髪をばかづらを懸けて、女人の_か齧りには髪に過ぎたる物なし。されば盛者必衰の理り爰に願れ、会者定離のさかい彼等が有様也。されば後生は能々大切なる物かなと御感あり。彼の者ども是へ参るべしとて五人の傾城御前に参る。次に男の進らせたる行器を開て御覽ずれば、思々の水引にて取たるもとどり五十余人まで進らせたり。上人彌よ御なみだ万行して御手指し上げ玉ひて各是を見玉へや。昨日今日に至るまで人の命を害するを能_トとし、山野のけだもの江河のうろくづに至るまで、彼れ等が害し残せる物なし。雖然、源空が一句の法門に依て加様に成ぬる事

こそ哀れなれ。去れば源空何と習ひ何と行しければ今永劫の魂を養ふとは此の理也とて、書きくどき泣き玉へば、見る人も哀しみ、聞く人も涕泣せり。此俗人も面々召寄せ出家受戒せさせて十念を授け玉ひて言くいづくの波の上までも相具し度候へども、我れ流人の身なり、伴に不_レ及、何ならん。樹下石上にも籠居て念仏申て素懷を逃ぐべしとて皆々御前を立られけり。次に傾城どもを出家せさせて、戒を授け、いみじくこそ思ひとりたる道心なれ、彌陀如来の六八の願の中に卅五の願は女人引接せん誓ひ也。然者本願に任せて南無阿彌陀仏と唱へて声の下たに_い気絶へなば、命欲_レ終らんと時の約束不_レ違、火の中水の底までも観音蓮台を傾け、彌陀如来は来迎し給ふべき也。此の旨を忘る事なくして、往生を願ふべしと言へば、遊女も歎喜の涙をながしけり。さて御前を立ち船に乗り移つて神崎の橋柱に船をつなぎ、遙に西方を見送れば、月は淡路島にかたぶき、帰雁の一音_{こゝろ}渡の中に音_{かみ}信れ、ゆう_く

たる春風に折からをぼろ成る空もの哀れなるに、彼の五人の新出家の尼、心を西方に傾き、憑みを彌陀に懸け奉り、専称念仏する事数千返也。十念高声に唱へて水の底に身を抛げ終りぬ。残留る徒女二人ありけるが是れ御覽ぜよや浮き世に厭ひ給ひぬる人々身を抛げ玉ひぬと、声も惜まずさけば、船の内の人々立出でみれば、紫雲空に變き、水の面は紅也。在明の月西に傾きて波の上明らか也ければ、水の底に飛び入り、此傾城どもをかづき上たれば、合掌は未_レ乱、左右の眼眠るが如くにして、各往生を遂げにけり。無_レ言量り道心也とて、別所と云所に送り一片の煙とたち上りぬ。さて上人御船は葦屋を指して出て三月十八日波閑かなり。葦屋の浦雀の松原、生田のおきをもこぎ過ぎ、攝津の国福原の経の島に付玉ふ。其の夜、今は半ばに深けぬらんと覚へ更闌け閑か也。在明の月影さえて海上波納まりて風閑か也。遙かにおきを見渡せば白浪高く立ちなぎさに向ひ寄せ来る。上人の御船の舳に、左右

へ立ち別れてせかいに付なり。見るに其勢ひをびたゞしき鬼神、船の遣り戸より内へ覆ひ懸るやうに覚へける間、角張の成阿彌陀仏西信等見ければ、波の底は不_レ知、立ち上りたる長五丈計りなる鬼神、其色赤く、一入再入の紅の如し。上人の左の御膝を枕とし顔をもたげて上人を守り奉り、右の方より覆ひ懸る者の長_ナ、前の鬼より高して其色白き素雪に似たり。上人の右の膝に顔をもたせて侍べり。をそろしき事はかりなし。船の中の人、鬼の氣に配せり。成阿彌陀仏西信に向つて言ひけるは、是れ口惜しき事にこそ侍る。法然坊邪法を行して浴中をも追ひ出され、配所に趣むきけるが、海中にして鬼神の食と成りけるなんと、南都北嶺の嘲りと成りなん事こそ悲しけれ。但し身は恩の為めに仕ふるといふ事あり。何なる海中のもくづと成るとも、師匠の御為めに捨つる命は惜しからじと云て、朴木柄の刀の九寸余り有けるが、氷なんどのぞくなるを懐中より抜き出て、上人の御そばに侍り、上人をあやまち

奉らば鬼神を一刀と心指し、彼の者ども目も離さず用心す。彼の角張と申は、俗性いやしからず、王家を守り朝敵を取り意執の堅孫也。されば今如此の師匠に命を奉んと思ふことはり也。式部公西信思ひけるは、上人も願はくは、身命を捨て彌陀に帰属せよとこそ教へ玉へば、我れ師匠共に死せん。命は毛髪計りも惜からず。されば外伝にも身を全うする時は小兒までも不_レ嘲、命を軽くする時は神なり共、物ともせずと云事あり。縦ひ身は何と成とも正中さしつらぬき師の御命に代り奉んと思ひければ、紫體の八角にしたりける刀一尺もあるらんと見へけるを、柄もこぶしもおれよくだけよと_ヒ挙りて、上人の左の御脇へまわる。然りと云へども上人は敢へて事ともし給はず、御眼ねぶる如くして御心閑かに念仏し玉へり。かの鬼神等暫らく有て申す様、上人我等ほどにをそろしき物や見玉ひたるやと申せば、其時上人御目を開き玉ひて源空は汝等よりも遙かに怖しき物を身に随て持たる也と、仰有ければ、

鬼神等何なる物なるらんと申せば、悪業煩惱是也。其故は無始広劫より已来、生死輪廻して成仏の本望を遂げざるは、只源空が所持の煩惱の仕態也。汝等者、今一旦の命を殺す計り也。煩惱のあだは過去遠々にも我が命を殺して、又未来永劫までも我を殺べし。煩惱のあだを害せんものゝ為め、清淨の業を説くと言へり。汝等なさやうに悪躰を受たるも是れ煩惱の故也。汝等を思へば不_レ疎。広劫流転の間は已れの形を受たる時あるべし。其の時は汝等をば父母兄弟とも親友所従共なりぬらん。過去の宿因を思ふてをろそかならん。又流来生死を案ずれば、已れもながし。去れば源空汝等を父母兄弟としたりし時、恣に無量の罪業を作り更に仏法の名字を不_レ聞、其の罪業の余習猶を不_レ尽、常没流転の凡下となれり。されば汝等が有様を見るにをそろしからずとて、御心閑かに念誦し玉ふ。其の時鬼神申けるは、上人は実に道心深き智者にて御座しけり。我等が身にきて悲しき事侍り。是を上人に尋申さん

為に参りたり。其故は我等は土佐の国にはづみ崎の上の岩穴にすむ者也。然るに我等父母一千歳を経て必ず死すべき也。今年三百歳に成る。彼の二親ともが我等が行末を見はてずして死せん事をあながち歎き申す也上人命長き法ばし知り玉はば示し玉へ。二親の命を今七百年延て我等と共に死んと思候也。上人日域第一の智者と承候を尋申さんために参たる由申しければ、上人御涙を流し玉ひて命長き法こそ我れ知りたれ。汝等が二親を具足して参るべしと仰有りければ鬼神等手を合せて喜て帰りぬ。又其の比大唐より唐人渡りけるが日本の名番したらん明眼の人に逢ふて問答せばやと云ける折り節、兵庫に有けるが、智恵第一の上人此嶋に付き玉ひたり、人々申ければ、問答せんとて参りける上人御髪めされけるに、彼の持意もちいと云、唐人取あえず爰をそるに何ぞ爰をばそらずと申す。心は、髪をばそるに何ぞ肩をばそらぬと不審す。上人此返答に爰に着るに何ぞ爰にきぬと仰せらる。此の心は毛の有る所鳥

帽子を着るに、何ぞ鬚には鳥帽子をきぬぞと返帰し給へり。其時、持意舌を巻て帰りぬ。三月廿日には経の島に御逗留あり。同廿一日上人御船を出し奉る。御送の人々の船、経の島より都へ、上人の御船は和田の三崎をさして下たる。送りの人々船は葦屋のおきにしてうかみける。只だ行くも帰るも袖に余りし涙也ければ慈鎮思召つゞけてかくぞ詠じ玉ひける

別れ路やたらぬ浮き身にしたひ来て

かへるはつらき涙なりけり

慈田おぼしめし連ね給て

流れ行く人の別れをしたひきて

帰るはかゑる心ちこそせぬ

中にも聖覚船を留て泪のひまに上人の御船を見送り玉へり。和田の三崎霞こめてそこともなくうかれ玉へば

慕ふべき甲斐もなぎさのいづち艘

いづちをさしてうかれ行くらん

斯くて御送の人々は都に帰りてせんかたなき余りに大

谷の御坊に参て、此れ彼を見廻はりければ、仏像経卷かはらずと雖も、上人はましまさず、思ひの余りに其夜は御坊に留り玉ひて、慈円僧正、醍醐の坊管上総の法眼堯順、御室の坊管毫秀夜もすがら念仏して明くれば帰んとし給ひけるが、大谷の上の松山などを見行きける程に、有る所にたゞみ一帖じきほどの大石あり。彼上に背蓮花四五本をい出たり。法橋不思議に思ひて残りの人々に、此由を申、人々見るに花の茎文字に似たる白すじあり。能々見れば文字也。其の文字に云く、上人帰朝建曆元往生之台所と云文字也

上巻終

法然上人遠流記卷之下

目録

- 一 上人御歸洛瑞相之事
- 二 海中群類上人化導預事
- 三 高瀬奥龍神出現の事 附一行阿闍梨事

- 四 讃岐国誓福寺入給事
- 五 同国善導寺僧夢告事附隨上人還奉事
- 六 同金藏寺御参事并、弘法大師之事
- 七 崇徳院御廟参給事
- 八 白峯別当夢告之事
- 九 同五部大乘經供養導師上人請奉事
- 十 松崎長楽寺御参之事
- 十一 同律師母餓鬼在所教給事
- 十二 同餓鬼上人依教化成仏之事
- 十三 件鬼神御船参事
- 十四 同命長法念仏授給事附兄弟神事捨身事
- 十五 角張成阿爾陀仏父小蛇偶事
- 十六 同為小蛇一七日別時念仏事
- 十七 上人帰洛時節到来事并、叡山不思異之事
- 十八 山王権現託宣之事附御歌之事
- 十九 上人御歸洛之事

さて上人配所の波の上にて朽もし終はで御赫免可レ有瑞相也。相構へて他に見すべからずとて能々こしらゑて慈珍尾張法橋毫秀に預け置玉ひぬ。さて上人御船は

淡路の瀬渡を過ぎさせ給ひたる。汰海たうみの奥おくにて海上を御覽すれば、鯨鯢鱒などを始めとして海中の群類数を不知大口をよき塩を吹き白浪を立て御船近く成り船のへさき左右のせかいにさゞめきめぐり、海の面ても静かならず、船既にくつがへるべきやと船子梶取りもあはでさはく。上人立出給て魚類の白浪の中にくんじゆするを御覽じて言く

有情輪廻生三六道 猶如ニ身輪ニ無ニ始終一

或為ニ父母ニ為ニ男女一 生々世々互有レ恩

と唱へ給ひて念仏百返計り申させ給て、其後に光明遍照十方世界念仏衆生撰取不捨と誦し、高声に十念を唱させ給へば、彼の魚類共波の底に入にけり。畜生の業を免がれんが為に御舟近く参りけり。彌上人の法徳を人々讚嘆し奉る。其日の晩程に高瀬の奥きに御船かかりけり。春の晩の月なれば、未だ海上にも出ず、聞かりけるに南方より帝王皇后の如くなる人を上首として従類其数引具して上人の御舟に参る。誰れ人なるら

んと思ひて見る処に、彼の中の主人と覺しきは御舟に乗り移り、残りの衆は海上にあり。彼人申す様、仏法結縁の為と云ひ、又上人御配所御訪ひの為、彼れ是れ参たる也と申給へば、上人言く、有難き御志し哉とて誓く御法門ありて十念を授け給へば、各合掌して帰りぬ。海中の利益是れには限らず、度々に及びけれども今に初めたる如く彌よ互に尊み奉る。是則竜王の化現也。依レ之古へを案ずるに大唐の一行阿闍梨は光国に趣給けるには九曜の光を放ち、闇穴を照し給けり。

日本の法然上人は土佐国に移り給には八竜形を現じて配所を訪ひ奉る。一行は山中の岩穴を歩ゆみ給へば、上人は海上波路を行給ひ、阿闍梨は九曜の光に闇難を助けられ、上人は八竜帰りて十念を授け給ひ、彼れは大唐是は日域、彼れは上代此れは末代と云へども、上人威徳は凡聖信誘あらまざるのみならず、海中の群類までも一子慈悲是れ平等なる者なり。同三月廿二日無路の津に付き給へば、諸人参会す。御法門いとめづら

しく侍べり。同廿三日順風来る間、御舟を出し、月輪殿仰含めらるゝに依て讃岐の国中郡小松庄誓福寺に入れ奉る。初め配所は土佐国畠郡山影の庄に二条殿の御領也と定められけれども改めて小松の庄へ入れ奉り。小松の庄の領主は高橋権守入道西仏也。参向ひて上人を請け取り申し観音寺へ入れ奉り、七日綺羅々々しくもてなし奉り、其れより御弟子達心すこし取りしづめてぞ思ひける。其後ち誓福寺へ移し奉る。官人等各帰洛す。此人々あかぬ御名残りに絶へずして各袖をぞしぼりあへる。承元二年十月に上人弘法大師の初生拜見の爲め善導寺の寺僧夢に見侍べり。明日勢至来り観音に御対面可_レ有と、十四五計なる童子の告と見たりけり。早速に此由を寺の一和尚に寺僧語りければ寺僧の中にも同じ如く夢を見たりけるに、上人御詣であれば不思議の思ひをなして各十念を授かりける。同次に智証大師の初生の所、金藏寺に参りて下向の時、庭に兎、鹿あまた出来る。少しも恐るゝ気色なくして上人に向

ひ奉る。上人かれらに向て十念し給へば暫く鹿も付き奉りて下りけり。上人の御送りを申すにやと不思議にぞ侍べりける。昔、空海大師大唐に渡り大祖山に参りけるに、千頭の虎大師に向ひ膝をおり、今の法然上人は金藏寺に参り給へば多くの獣上人を送り奉りけり。阿波の国の目代は弘沢中将入道也。法名正進とぞ申ける。件の正進は上人の出家の御弟子なり。上人讃州に御座すの由聞ければ、使者を以て申けるは、身病の床に臥し行歩に不_レ足候、可_レ然候は上人御来臨あつて臨終正念御教化を示し玉へと申せと。上人哀れに思召し御昇り有て崇徳院の御廟塔へ参り給ふ。此君は高松院の第一の尊にて御座す。無_レ故御合戦に依て此の島に住守と成り給ひぬるこそ哀れなれと思召しつゞけて御念仏あり。于_レ時鳥一つ飛び来り御墓の上にあり。人何鳥とも不_レ知。上人は此鳥崇徳院と見知り給へり。白峯の院主別当の夢に見ける様は、丸が書写し奉て海底にしづむる所の五部の大乘經を明日法然上人此山に

登り給ふ次に、供養し奉るべしと夢想あり。夢覚めて後、不思議に思ける間、早朝に白峯の院主別当のもとへ使者をつかはす。別当は院主の坊へ人を立るに途中にて行合ひ、互に状を取りちかへて帰りけり。依て鐘を鳴して大衆会合有て披露す。則ち上人御詣であれば五部大乘經を供養し奉るべきよし儀定し畢んぬ。上人御夢に御覽じける様は、丸が自筆の五部の大乘經を海中に沈め奉るを供養し給ふべきとて

流れきて身をうき島の子をぞなく

我がつみ深き事をしらばや

依て上人は請に趣き導師を唱へ、其日の説法の秀句に君は是れ日本第一の種性、罪も又日域第一の悪王也と言へば、金堂の上の松原に大きな声を以て云ふ、生ては主上として恥をさらし、死ては上人の爲めに罪を顕はずと院宣有ければ、堂内外法の人、皆々泪を流しけり。上人白峯を立給ひて志度の道場に參給ふに、浪高くありければ、松崎の長楽寺と云ふ所へ參り給ふ。

其所の領主は治部の律師とて山の西堂法師也。上人に對面申して是へあらでは争か入御可有とて慇ろに聞へ申す。其夜上人と枕を並べて臥したり。其曉上人律師に告げて言く律師の母儀他界して何年に成給ぞやと問給へば、今は卅余年には成候らんと申す。さて上人その母儀には見參し度くは思給はぬかと言ふ。律師こは何の次ついででぞと思けれども彼上人は権者にて御座す。何なる不思議もや有覽と思て悲母他界にをもむきてより以來、夢に不見より外は存生の姿を見る事なし。通力に非れば、後生の果報をも不知、六道四生の内には如何なる生をか受給ひぬらん。二十五有の間には奈何なる所にか御座すらんと乍い歎日を暮し、乍い悲夜は明かす。されば争か見んとは存じ候べきと云。其時上人言くさやうに思給はば、明日人夫を廿余人鋤鉞などを持ち聚め給ふべしと仰らる。律師の云く、何れの所に何やうなる者にて侍べるらんと申せば、松風をとやみて閑かなる時、有隙にはさも物あはれなる躰

に吟ずる声あるをば聞給はずや否やと仰らるれば、律師古しへよりさやうの声夜に聞候へども、奈何なる者共不知過ぎ候ひきと申。其夜も明けければ人夫そろえて進ひらせけるに、上人長楽寺の辰巳の角の柱の下を指て被掘ければ、一丈計りの深かさに掘りたりければ、石の如くなる物有り。取上げ見れば腹は大鼓の如くなるが、足手なし。即ち仏前に置て上人呪願して云く、餓鬼成仏躰念仏不思議一返能称念現世余業惱と誦し給へば、彼の物漸く動きて手足出来ぬ。上人汝が名を何と云ぞと問ひ給へば土虫鬼と答ふ。いつか飲食ありしと問ひ給へば、我が此の果報を受けしより以来、食の名を不聞。仍急ぎ美膳を取り寄て与へ給ふに餓鬼是を食んとするに頸細くして露ばかりも不_レ通、依て食する事不_レ能、律師を見て彼の餓鬼申けるは人の親の子を思故に三界の獄に入るとは我身の上にて待べりけりとして涙を流し哭き臥す。時に律師此の有様を見て上人の御袂にすがりて弟子行法の次には先母出離生

死頓証菩提と廻向して祈りし。其廻向の功德は何也ければ、今まで苦患を受給けるぞや。上人は天下の独尊一天の導師にて御座せば、願くは母の苦患を助け給へや。上人の御力にて業報を救給はずば、又誰をか忍むべきと歎き悲しめば、上人も涙をながし給て、七日別時の念仏を始め上人と律師と共に餓鬼のまほりを行道し、念仏し給ふ。餓鬼もと一人のまほり給ふに隨て、四方にくるくるとまはる。別時五日に當時雨ふりければ、あの雨を受けて我れに与へよと餓鬼申しければ、則ち雨を受けて与ふ。此水を受けて天に指し上げて四句の文を誦す。其の時の文に云、餓鬼退生善報現三天身、清淨化業不退と云ひ畢りぬ。上人を守り奉て申す様善知識者はれ大悲因縁とは承りし事は、只今上人に値ひ奉らん、同の事にこそ思ひしり侍べる。我れ天に生んと思志に仍て雨を願ふ也。雨は是れ天上の水なれば其の小因也と云へり。其の時上人、汝が願ふ所の天上尙を是れ五衰あり。されば彼の餓鬼人間にて有りし

時富貴なりしかども、只我子同く妻子計を大切に思ひ他人の目を心に不_レ恥、仁義礼智信をも不_レ知、我が財宝を惜しみ人の財をば多く慾がりて貪欲不道限なし。足手を以て悪を作り、口にて罪を語る、其の科がに依てのどの穴ふさがり、飲食せず。かやうの酬ひにて足手なし。又、我が子の律師をは大切にし仏法をも不_レ聞、慳貪放逸なるに依て長楽寺の御堂の柱の本に餓鬼と成て住みけり。縦ひ天上に生ずとも此の意を引き替衆生を利益して慈悲の志ありて仏法を修行せずば速かに出難生死頓証菩提ありて長楽を受て浄土に住すべからずと、御教化ありて上人松崎を御立ありて、其の日は御船を二十の浦に付給ふ。俄かに風ふきさはぎ、村雨降来つて程なく暗たりけるに、鬼四人参りたり。御覧すれば兵庫の嶋にて約束申したりし鬼神なり。上人言く、是等は汝が申せし物共かと言ふ。老たる鬼二人は是れ申し侍し我等が二親也。長生不死の良薬を与へ給へと申せば、上人三尺五寸の立像の阿彌陀如来を懸

け牽り、鬼神等に言く、汝等あの仏を拜み牽り、汝等が形は是即生即滅の資也。あの仏の御資は長遠不生の果報也。皆々心を静めて聞て信樂すべし。六道四生の間二十五有の境には何物か死をまぬがる者の一人も可有。資をそろしげなれども全く無常の殺鬼は恐べからず。己等がちからつよしと云とも魔滅獄卒には必ずすぐべし。日々に作る所の三途に沈むべき深重の罪業、夜々に思ふ所は八難に入るべき悪念なり。汝等過去に仏道を修行したらば、今生にかゝる鬼神の形を受けて死苦をば歎かざらまし。命を長ふして親子に相そはんと思は、南無阿彌陀仏と唱へて、今生穢身を捨てつべし。此の身を捨て、終はりなば、阿彌陀如来觀音勢至無量の聖衆と共に来り、汝等を迎へ取り給ふて、極楽に置給ふべし。彼の淨利に生れて永く生死の根源を断ち、六道に帰る事なく、至る所には無量の衆にはこり、更に憂悲あるべからずと勧め給へば、鬼神等聞申さく、実に南無阿彌陀仏を唱へば、あの仏の御資に成

べきにて待るかと申せば、上人実なり、全く疑ふ事な
かれと仰せ有ければ、鬼神等然らば我等に此法を授け
給へと申せば、可然とて上人御手を合せ十声南無阿
彌陀仏と授け給へり。又教て言く、汝が命のある程は
此の南無阿彌陀仏を忘るゝ事なく、常に唱ふべし。此
仏の御まゑにて可死とて、彼の本尊を与へ給ふ。鬼神
本尊を給て、上人を拜み奉て帰へる。角て其の日も暮
れにけり。明朝御船を出さんとす。上人言く、暫らく
船を不可出、存する旨あり。彼の鬼神等去りつる方
を常に見る、空に紫雲變びきければ、此由を上人御覽
じて彼の紫雲の下を尋ねて舟を寄すべしと言ふ。御舟
を急に一里ばかり行て海岸に岩あり。数千丈そび多た
り。御弟子を登らせて見給へば松の枝に本尊を懸奉り
花を取り石の上に置いて四人の鬼神等岩より身を投げ
たり。御舟を寄せて御覽すれば、一人の老鬼は頭を打
くだきて死畢りぬ。一人の老鬼は腰より切て身軀二に
成れり。面々に生命を捨畢りぬ。然れども合掌は不

乱。上人彼等が死骸を御覽じて泪を流し是れ御覽ぜよ
や、人々昨日今日に至るまで人を食して罪を作る鬼な
れども、源空が一旦の教化に依て生命を捨て往生を遂
げつる事の哀れさよ。頓捨身命帰屬彌陀とは聞け共、
我れ未だかほどの志じはなし。鬼神には劣れたる心哉
とて、御衣の袖もしぼる計り也。御弟子達も皆々泪を
流し給けり。さて彼の鬼神共死骸を一所に取寄せて阿
波の国の目代の許へ御使あり。急ぎ参たりければ此由
を語り給へば、目代も随喜す。此所に一字の御堂を立
て彼等が菩提を弔らばやと仰ければ、仰せに隨て三間
四面の堂を建立して彼の寺を鬼骨寺と号し、三町の免
田を寄進せて今に彼の寺ありと云へり。次の日讃岐と
阿波との境に六連と云処有り、此浦を上人の御船過ぎ
させ給ければ、亦た立て島と云所あり。此の島の腰を
通はせ給ふ。角張の成阿彌陀仏を召して舟を此島に留
めよと仰せありければ、御舟を此の島に留む。成阿彌
陀仏を此の島へ登せて底のほど岩のかどを打て見よと

仰ありければ、則ち彼の所に至て石を取り岩かどを無二相違一、打くだきたり。見るに石破れたるあと凹みて、水一升ばかりあり。水の中に小蛇あり。此れ御分の父よ、請ぜよと云ふ。仰せに随ひて小蛇に向て成阿彌陀仏申しける。実に我父角張七郎殿にて御座すか。是れへ參り給へとて、衣の袖にはい入りぬ。又小蛇の臥したる跡をみるに、石に銘あり。酬倒免田源顔氏成^レ小蛇一と云ふ文字也。干^レ時成阿彌陀仏涙を流し、目もくれぬ。されば仏陀寄進不帰本と云ふは此の理り也。我れ幼稚五歳の時、父はやく死せしは是非を不^レ知。今始めて見れば纒なる小蛇也。是れは何の罪の酬也ければ五十余年の間、彼の岩の中に在けるこそ悲しけれとて悲涙せり。則ち上人に違を申て自^レ是誓福寺へ帰つて食物を求めて小蛇に与ふ。日中は山へはなち、夜は来りけり。其後に上人志度寺へ御參詣ありて阿波国の目代の宿所に入らせ玉ふ。一七日御法門ありて後、誓福寺へ御帰寺ありて成阿彌陀仏が舎弟の本へ此由を仰

ありければ、折節京都に有けるが、急ぎ小松の庄へ下りぬ。角張の七郎太郎申様、少年にして父にをくれ候間、是非を不^レ知候。但し領内に旧寺の一字候しに、免田三町侍べるを取り上げ、下部の給分にせられたりけると承はると申す。其の時上人此の事也。彼の蛇の臥したる跡に酬倒免田と云ふ銘ありしはと言ひて、七日の別時を始めて此の蛇に廻向し給へば、結願と同じく此の蛇死畢りぬ。上人の御法徳に仍て彼の蛇成仏すと云云。さて上人御帰洛の瑞相の時節到来、承元三年己^巳六月八日に大猿八つ連れ比叡の山上に登りて根本中堂の内陣十二燈を打消して、同じく太鼓を打破り日吉へ下りぬ。其れより以後日々に猿ども山上に乱入り悪事を致し、惣持院の文殊楼を散々に打破る。猿山上に登る事一倍せり。後には充満しておほし。山王大師の御とがめありてぞかゝる瑞相あるらん。各東坂本に下べしとて大衆一味にして十禪師の社檀にて護法を渡し奉る。童子を祈り付んとするに渡り給はず。西塔の東

谷成就坊の弟子金菊丸とて十一歳になる小児、下僧の肩に乗りて見物しけるが、鳥の飛ぶが如くに來り、童子を押しかけて如何計りさめくんと哭く。老僧護法渡りたりと心得て、御神慮尋ね申せども御返事なし。誓く有て此小兒二首の歌連ねけり

をのがため何かあたごの山なれば

法然坊をながしけるぞや

ちはやぶる玉の簾を巻きあげて

彌陀の誓ひを聞かんとぞ思ふ

すべて別の事をば云はずして只だ此の歌を詠じてさめざめと泪を流す。大衆申けるは、法然上人を山門の訴訟に依て流したりし御氣通きとほひにてこそ候らん。其の儀ならば上人を帰洛せしむべしと申せば、其の時彼の童子の云く、証真法持法印をば我が山に有れば太郎と思ひ法然上人をば他所は有れば次郎と思て神慮慥もしく大乗の法施に明き充ちて思し食しつるに、汝等聊か申するに依て遙かなる西海に流がし置ければ日々夜々

に山海を越えて、彼の法然坊を守り、いか程心くるしく思召とか思ふぞとて、さめくんと御落涙ありければ衆徒等其恨みにて候はゞ急ぎ奏聞を経て上人を帰洛せしめ奉るべし。はやく權現上り給へと申す。其の時權現喜び給ひて上らせ給ふ。依て衆徒等時刻を移し、唐崎に懸りて京入す。仙洞に惣參して上人流罪を留めて召帰すべき由奏聞す。竜顔逆鱗の禁を止めて召帰すべき僉下せらる。その免状に云く、土佐国の流人早く召帰すべき源の本彦もとひこの身の事、右件の元彦于時建永二年二月廿七日に土佐国へ配流す。然るに所念の行有るに依て召帰さる、宜しく衆徒等承知すべし、宜奉之状如件

承元三年八月 日 左京大夫權守有光

其時上人讃岐の配所を出させ給ひて建暦元年十月二十日に上人京都へ還歸し給へば、先の大僧正慈珍の御沙汰として大谷の御坊に居住みされけると云々

下卷 終

法然上人惠月影

漆間徳定作

第一 徳守鳥居前の段

徳守
神社

世に定まれる性もなく、相もなきに心から、善悪邪正と分れいで、是非黑白と分れきて、蛇の飲む水毒となり、牛の飲む水薬と成り、たがひにせめぎ争ふは、実に此の娑婆の習ひなり。爰美作苦田の郡津山の城下、立つや煙も賑はしき、民の籠の数々を、守り給ひて鎮座ます神の御徳の徳守神社、今日は目出度き秋祭り、千秋楽の神事とて、鞍馬、武芸の仕合ひやら、催し物の数多く、人出も多き鳥居前、伯耆守定明が、奴の権六と鷲平ほろよひ機嫌の千鳥あし、いと横柄に帰り来る。こちらは久米の押領使漆間時國が小性頭稲岡亀之進、奴の太刀平と槍助を伴に引きつれ御殿の、今日参

拜の前ぶれ役、しづ／＼こゝに來かかりたり。権六わざと酔ひとほけ、どつとばかりに衝き当り、ヤイヤイこゝな三ピン、眼玉はどうした、イヤサ此の権六様の御通りが見えぬか、ヤイ人もあらふに伯耆守様の奴様ぢや、ソウトモ／＼此の鷲平様も同じ御家來、わりや漆間家の三ピンぢやネイカイ。聞いて立腹こらへかね、太刀平槍助進み出でコリヤ／＼酔ひどれ、無礼はそちらから仕かけおいてしかもまざ／＼しい無礼呼ばはりもう手は見せぬぞと、身構へば、権六鷲平、空威張り何んぢや／＼手は見せぬ、ソナ弱虫の手は、見たくもねい、同じ手なれば、伯耆守様の苦が手、時國の手のうちみていもんぢや、いざ其の訳聞いておかんせ、先づ、さきだつて伯耆守様が御赴任の、挨拶とて、そちらの館へ、お越しの折り、時國は、無礼千万、面会に暇とらし取扱ひも存外のしうち、これと申すも、おのれが先祖の血筋自慢、人をも人とも思はぬ振舞ひ、伯耆守様は、その時以來、いやはや、きつい、御立腹

深くも之れを意恨におぼしめし、折りさへあらばと、ねらふて御座るは、主が主ゆゑ、家来までが、今のしだら、さあ今日つた武芸仕合ひの、神事でござる。いざこゝにて高慢の鼻柱ひつくじいて呉れんずと、さあこい来たれと武者ふるひ、平地に波を起したがる、喧嘩好きの奴ども、主を威光に威たけ高、これ見よがしの酔ひざまなり。こちらはもとより、腕達者、武術自慢の太刀平は、もうたまりかね、刃に手、いやこいつがこいつが言はしておけ屋の底ぬけ阿呆、我君時国公は勿体なくも仁明君、第十六の皇子、西三条右大臣源の光公の御血統、伯耆守は堀川院の笛造り、長明が、一子の定明、笛吹きほら吹き太鼓うつ、お太鼓持ちの成り上り者とは、人が違ふ、家が違ふ、あゝこりやこりや、太刀平、槍助、何んとした、軽卒な言ひ条、ひかゝゝ、暴にかゆるに暴を以つてする、売り言葉に買言葉、そりや皆小人の行ひ、ちとたしなめよ。いやなに、其許たちは、伯耆守殿の御家来衆、某は漆間家

の小性頭、稻岡亀之進と申すもの、つい道の行手を急ぎしたため、思ひも寄らざる粗忽な致して御座る、今日つた、神事の折りから、いざかいは神への無礼、まづ御勘辨な致されたしと、いと慇懃にしたてに出る亀之進、弱音と猶もつけ入る悪党奴、顔色のみか底しんまで、腹くろくの本性頭はし、偕ては愈々恐れ入つて勘辨なして下されと申さつしやるか。いやもう長いものには巻かれる、強い者にはまけてかつのが上分別、おうよし、それ程勘辨がしてほしくば、さあ韓信のまたくどり、おいらが此の股ぐら三べんくどりお尻をおがんでおじぎな致せと、無理難題。聞くや太刀平たちまちに、烈火の憤り、うぬほざき居るよな、言はして置けば附け上る、雑言過言もう、我慢な致されぬ、天に代つて誅伐せんと、太刀平太刀を引き抜けば、槍助俄かに杖をやり、やりすごして衝きかゝるやあいよ、抜きおつたな、いざと権六、鷲平、刃をかざし、はや斬り結ぶ、丁々発止、神前忽ち修羅

開場。龜之進割つて入りやあゝ慮外なり、不屈きなり、神前をけがしては神への恐れ義光公へ相すまぬ。いざゝ刃は引きおろふと、鉄扇執つてまたゝく内、兩人刃を打ち落され、腰骨したゝか打ちのめされ、蹴足引きゝあとをも見ずに、森の中へと逃げうせたり。あとに三人顔見合はせ、まあ口ぼとにもない卑怯な奴それに引換へ龜之進様の御手練手のうち、いやはや恐れ入つてござりますと、太刀平、槍助刃をおさめ、龜之進はしづゝと衣紋つくりてうやうやしく神殿さしてまゐりゆく、つゞいて奴も身をたゞし、おんともしてぞ入りにける

第二 徳守 武藝仕合の段

忍ぶ文字摺りもしりあひすり乱れたるみちのくを、弓矢を以ておさめてし、鎮守府將軍八幡太郎義家卿、御舍弟新羅三郎義光公遙ばるこゝに下向あり、近国諸國の押領使、預り所の諸大名、徳守神社へめしよせ給ひ、

武藝仕合ひの仰せ事、いとごそかに行ひける。正面の大床は、源義光公左右に居並ぶ源家の武士、奇羅星の如くひかひゐる。早や数番の勝敗ずみ、次の番組、誰れなると、西と東の敵味方、かたずをのんで待ちに待つ、最後の舞台ぞ晴れがまし、お附きの侍声はり上げ、やあゝ伯耆守定明、君のおめし、早々是へと取次ぐに、衣紋つくるひ立ち出でて、東の方へと座に附きて、いと丁重に拝すれば、義光公は、それとみ給ひやよ定明、かねてより申出でたる其の方の願ひ、正に開届けたぞ、いで所望にまかせ。今日唯今、久米の押領使漆間時國との立合確かと申附くる。又時國へ内意を伝へし処、彼はたつての辞退、しかし予が切なる所望に従ひ遂に承諾な致したる段神妙の至り勝敗は唯時の運、あとに意趣ばし残さぬやう。武士の心事は光風霽月、よつく心得たるか。はつはあ長まり奉る、我君には武道ばかりか音律の道にては笙の御名人恐れながら某しが父長明事も笛造り堀川院の御寵愛蒙る身に依

て、某もいさゝか、此の道に趣味を懐き候が、時国などは田舎生れ、かゝる優美の道をば、露存じ申さず、唯々武骨一点張り、すりや彼れは、達人、所詮は某があひ手と相成ることは、竜車に向ふとうろうの企て、さりながら神慮と我君とを慰め奉らん。某が所存、何卒しかるべく御さつしのほど、ねがひたてまつると、うはべをかざるしたごゝろいろにみせねど針をもつ、鬼あざみ草あざむきて、棄しらぬ顔ぞにくにくし。義光公はそれともしらず、ほゝを成程く、其方ことは横笛の名人とはかねてきゝ及ぶ。然るに今日つた武芸の仕合ひさすかは、滝口感心な至り、武道にかけても定めし心得深からんいやなに今日の番組中此のとくみこそ大関と大関とのたちあひ、予も至極満足に存じをるぞ。イザ時国をめし出だせと、下知し給へば、お附の侍ヤアく其れに控えし久米の押領使、いざいざこれへと呼び出だせば、かねて期したる時国は、いと勇ましく威儀とゝのへ歩みいでくるあしもとに、すき

をも見せぬ天晴れ武者振り一際目立ちて見えにける。時国遙か下手にざし、これはく我君には遠路の御下向といひ、荘園のおとりしらべと云ひ、しかも御健勝の態を拜し祝着至極に存じ奉る。今日々武芸仕合ひの御催し御照覧恐れ入り奉ると挨拶あれば、義光公、これは聞き及ぶ時国、智仁勇かね備ふとの噂も高し、天晴れ名将今日々伯耆守より仕合取組の一条、実にも竜虎の取組諸国諸大名たちも、みな陪観な待兼ねある、いざ早々立合ひてよかろうと、鶴の一声美事なり。東は定明西時国今ぞ竜虎は嘘ぶきて岩根に靠れるさまなりき。定明きつと時国に向ひ、やあく目づらしや、漆間時国日頃の恨みいやさ日頃もよいうるはしの出でたち貴殿と某との一騎打ち実に千載の一遇いざくと詰めよれば、時国はいとおちつきて目礼しこれはく定明殿こたびのとくみ、貴殿ナ所望コリヤコレ落花の情に流水の情、御前仕合ひは晴れの勝負武道のほまれ、イザく時国すばやくとつておさへ、やあく定

明卑怯なる此の木劍、中味にかくす真劍な、如何にツと凶星をさゝれて唯ウロ／＼。サアソレハサアコレハツと争ふうち、義光公が下知のもと近侍の侍右左り、木劍執り下げ吟味の役、ヤヤツアコハコレ表面は木劍中味は真劍、思へば仕合に事よせて、意恨を果たさん真劍勝負、さては定明には時国に對し何がな意恨ばしあるよとおぼゑたりと、言上すれば、義光公ソハ又存外の痴者しほもぢ悪くきしうちヤア／＼定明其方には詮義の筋あり。者どもソレツ引ツたてと、おん下知に詮方なく／＼定明はしを／＼として引かれゆく、後には義光公おんこゑほがらかに、ヤア／＼時国唯今の武術、いかにも天晴れ／＼、これは当座の恩賞なり。いざ／＼これをとらするぞと、黄金造りの御佩刀、ひとふりとして授け玉ふ。時国これを推し戴き、コレハ／＼身に余る過分の御恩賞、某が家門のはまれかたじけなう存じ奉ると、しとやかに一札する、ホーホーサテ／＼都へ帰へりなば、兄義家にも言上を致すべしと、おん声

残し、しづ／＼とおん座を立てば諸大名、続いて、諸武士も従ふて奥殿深く入りにける。おあと見送り時国は、御殿を下りしづ／＼と、館をさして立ち帰る。不興を蒙る定明は、深くたくみし計、不覚にも見破られ無念残念くちおしやと、一間をそつと忍び足、殿此処に御座りましたか、折角企みの偽木劍、彼の時国に一泡ふかすることもならず、肝腎の途中で露見とは、テモマアよく／＼不運なわが殿様、某齒がゆふて／＼成り申さぬ。もう此の上は一刻の、猶予はなりませぬ。サア／＼よい工夫がありそうなものと、忠義顔してすすむれば、定明どつかと膝組み直し、ヲ、ヲ、よい処へ権藤治、予も先程から思案に呉れたが、ササ耳をかせ／＼ハツハツハツア、ソレ其の手立とイツバと耳にくちあてひそ／＼話。権藤治、俄かに勇み立ちヲヲそれなら来年の保延七年三月ごろ時国が家来他行の不在の折り、不意の夜討のひといくさ。シツシツシツイ声が高い／＼／＼と、主従が根深かきたくみの悪魔の

さゝやき知らぬが仏。仏にも似たる心の善人は善を行じて、明あかすより明かき道にぞ入るさの月、月に群雲、世はとかく花にあらしのためしをば、しめし易すぎぞ、是非もなき

第三夜討の段

月は満ちても十六夜や、早や欠けかゝる始めとや、花は咲きても一盛り、早や散りそむる習ひあり。況してや月にはそねみの雲、花にはねたみの風あれば、世を驚も此の里を安からざりと啼くならん。其の驚も夜は更けて、埒に夢を結ぶ頃、堀の水さへも静やかな丑満ねむるおぼる月、ばら／＼散り来る桜花、心短かき春風の誘ふは何の知らせぞや。今泰平の御代なるに、こは何事ぞ鎧武者、其数百騎に徒士侍ちゆうし侍、あまた随へひそく／＼と、先に進みし総大将、馬上ゆたかに銀鍬形、五枚鍬とらの兜を着し草摺の音響々として勇ましく嚴物造りの太刀打ちせらす。弓削の荒武者定明、きつと後ろを

振り返りヤア／＼者共、十歳此の方、恨みの刃、ねたみの劔を磨きつゝ時節を待つて、今日只今忍ぶ文字摺り草摺りの音、忍ばせし今宵の夜討、目指すは久米の押領使、漆間の時国只一人、女童に目なかけそ。特に今宵は彼れが家来、名のある武士は他行して城はがら明き、流石の時国彼がそつと首討ち落し功名手柄をあらはせよ、手柄によつて恩賞取らせん。さは去りながら時国は劔を持つては鬼神同然、実に一騎当千とは彼れが伎倆、不勢なりとて油断はならじ、又小童こごながらも勢至丸、天性比凡の気質と武芸、尙更以つてあなどり難し、多勢をたのんで不覚を取るなよ。ハツハ、ア、畏まり奉る、兼て用意の繩梯子、掛け矢の大槌打振ひ金城鉄壁も只一ト撃ち、ヲヲ勇ましい／＼。爰は名に負ふ落合ひ橋、彼が生首落合橋早や城門へは程近し、者どもかゝれと下知すれば、矢竹にはやる若殿原、我れこそ先駆け一番槍と、繩梯子掛けて飛び込んだり。中より城門さつと明け、人馬諸共押し寄せて、関せきの声

をぞ揚げたりける。只事ならぬ物音に、夢破られし時
国公、褥を蹴つて起き上り、大太刀おつとり声を上げ
ヤァヤァ宿直の者は居らざるか。コレ／＼秦氏、勢至
丸、心得ぬアノ物音、夜中と云ひ騒がしきは、必定夜
討と覚多たり。勢至丸にも弓矢と劔、奥も薙刀おつ取
り、先づ／＼此所を落ち延びよ。詞せわしく云ひ放ち
あなたの方には泣き叫ぶ、腰元共や端女の、声を後ろ
に、大床へ走り出で、見給へば、早や宿直の侍数十人
切先き揃へて渡り合ひ、朱に染みたる死物狂ひ、され
ども敵は鎧武者味方は不意をおそはれて、裸寝卷の悲
しさは、いつしか薄手や深手を受け、庭は忽ち血汐の
海、屍は山の如くにて、追ひつ追はれつ火花をちらし
万字巴と入り乱れ、斬り結びたる物凄き、修羅の街を
松明の、焰に照らす有様に、流石豪気の時国公、瞬く
内に数十騎斬つて／＼切りまくり、其身も数ヶ所の痛
手を負ひ、唐紅ひの血汐の紅葉、古木を小楯に三人の
敵を左右と前に受け、渡り合ひてぞ見へけるが、音に

聞えし達人とて、近よる者もあらざれば、しばし時を
ぞ移しける。睨らみ合ひ、如何なる隙間や見出しけん
先に進みし強敵は長巻の柄を返し、颯と一振り時国の
足をば払ひし電光石火、されども飛鳥と身をおどらし
よるめく敵の肩先より、真ッこう割り斬り、左から斬
り込む太刀先を、危ぶく開いて車切り、モウ叶わじと
遁げ出す。やらじと後ろより袈裟掛けに斬り捨て給ふ
早業の、秘術に怯け遠巻きに唯エイ／＼と声ばかり、
近寄る者もなかりける。かゝる不覚の有様をはるかこ
なたの物蔭より、定明きつと伺ひ見て、イデ未練至極
の味方の奴原、イデ物見せんといふより早く、弓に矢
つがへ引絞り、一矢に射貫きくれんずと、身構へして
ぞまぢゐたる、神ならぬ身の時国は、かゝる事とは露
知らず。刀を杖にヨロ／＼と氣息も絶えだゑ絶え入る
ばかり、暫しいこへる有様に御運の程こそ危ふけれ。
こなたの屏風に身をしのぶ、母もろともに勢至丸、氣
をつめてぞ居たりしが、既に危ぶき父が身の上、小弓

に矢つがへ一心不乱、弓矢八幡御神と、心に念じ満月の如くに縮つてねらひを定め切つて放せば誤まず、敵の大將定明が、兜のひさし射削つて、はつしと立ちたる急所のいたで、流石の定明まなこもくらみ、こは叶はじと勇氣もくぢけ、門前さして逃げうせたり。ヤア／＼きたなし／＼斯くまで夜討をかけながら、後を見せる卑怯のふるまい返せ戻せと味方の軍卒、のがさじものと追ふて行く

第四 時國遺言の段

月にそねみの雲あれば、花にも妬の雨ぞ降る。保延七年彌生の半ば、長閑けき春の花鳥の夢も破れて今日は早や夕べの嵐のしのばるゝ、美作は久米の郡稲岡の庄といふ押領使なる漆間の御館夜の宿直の腰元衆、あまたつどいてひそ／＼話し、思ひ出すさへ恐ろしい。夕べの夜討お殿様や御台様、和子様までがいた／＼しい夕べからのお悲しみ、思ひ奉ればのふ梅ヶ枝殿、オ、

そふとも／＼松の戸様の仰しやる通り、夕べの夜討の大將は、につくき弓削のあばれ武者、伯耆守定明が、日頃恨みの卑怯な夜討、鎧兜の騎馬武者が百騎ばかり是れに従ふカキヤウ徒士侍、松明獲物とりどりに、先を争ひ門打破り、一度にどうと鯨波、イヤモウ私しや夢に見た心地して修羅の街を始めて見た、心もうわの空となり、唯もう腰が抜け雀、忠義のちうの声さへ出ず、早ふ逃げたい逃げたいと、足は立田の気は紅葉、顔の色こそ青紅葉、命もちらんばかりなりホンに恐ろしい事でござんしたわいなア。シタガ申し松の戸様へ此の桜木が弟龜之進から聞きますれば、当家の御嫡男勢至丸様は勿体なくも仁明天皇の御血筋御年やふ／＼九ツの小松の枝の細腕ながら、小弓おつとり物蔭より、父の敵憎つくき奴と、敵の大將定明が、片目をめがけてはつしと射る、不思議や征矢は誤まず、美事に敵の右の目を、のぶかに射立てたりければ、さすが剛氣の定明も片目川にて其目を洗ひ、浮足立て逃げ失せたとの

物語り、何とマア勇ましいお手柄ではござんせぬかへ
オ、桜木様の仰しやる通り、梅檀は二葉よりもかんば
しくとやら、イヤもう恐れ入つたる和子様の御勇氣、
悲しい中にも一同の悦びさこそとすいし候と話し合ふ
其の折からア、コリヤ／＼腰元共声高い静かに致せ。

只今殿の御召しにより御台若君諸共今にお通りなさる
チトたしなんだがよからうと小性頭の稲岡亀之進びん
もほつれて愁ひ顔、尾羽打枯れねど淋しき風情、枯木
の如く立ちされば、程もあらせずしづ／＼と和子の御
手を御台所、涙ながらの目を拭ぐひ、御守り役の枋之
助、乳母のおこそ、めし連れて通らせ給ふ長廊下、そ
れと見るより腰元ども、みなひれ伏して咽び泣く。隔
つこなたに父時国、恨み深手のかしらのきづ、太刀風
はげしき其の名残り、つゝむにあまる其の風情、苦し
き息を胸息に、もたれ給ひし有様を、一ト目見るより
若君御台、ノウ悲しやと走りより、御いたわしの此の
深手、其のお姿は何事ぞ、お心たしかに持つてたべ、

我が夫のふと取り継り、歎き給ふぞ道理なり。勢至丸
涙ながら申父上お心儘かにお持ち下さりませ。大將定
明は射とめましてござりますすと、聞くより時国、なに
そちが定明をうちとめしとな、ホーウ、天晴れ出かし
た手柄者ぢやと苦痛を忘れ、笑みの眉。儘かに射止め
ました右の目、さは去り乍ら定明は、卑怯にも後を見
せて逃げ失せたり、とゞめも刺さず取逃がせしは、こ
れぞ一期の不覚やと、無念涙の物語り、ア、コレ勢至
丸武士の子と生れては不倶戴天の父の仇、一念こつて
はふくしうの、心掛武門のならひ、武士の意地尤も至
極、が然しこの父が心根は其れにも勝る誠の仏道、教
へのまに／＼任せん心、コレ勢至丸心を静めて今端の
遺言、小耳の底へ聞き入れて、夢にも忘れてはならぬ
ぞよ。察氏とてもその通り、予が遺言は誠の道、さと
りの上より出たる教へ、予が亡き跡は父と母二人を兼
ねたる一人の親、愛におぼれず情にほだされず、獅子
が我が子を育つる如く、情のなきが情ぞと心まつとう

育つべし。扱て勢至丸、会稽の耻を思ひて敵き定明を恨みばししたもふなよ。ア、思へばく過ぎし世に此の時国が恨みより、彼を殺した罪科の其の糸車は今爰に我と自が引寄せしは、是れ此の仇に違ひなし。恨みに報ゆるに恨みを以つて重さねなば、恨らみの種こそつきぬ道理、恨まざるを以つて恨みをほろぼす真事の道、仏の御心の大悲、これやこれ時国が年頃日頃学びたる、仏の道の御賜。汝これより出家を遂げ、父の菩提をとむらひて、母にも出離の道教しへ、汝も早く世の争を遁るべし。未来は親子諸共に清き蓮の上に、真如の月をながめばやと、いとなんごろに言ひければ、勢至丸は手をつかへ、敵を討たぬは残念には候へ共、父の仰せに随ひ、もふ恨みは持つまい、今から仏の道に入り、能くく教へを守りますと、手を合したるいぢらしき、後にぞ法然上人と世にも尊き名僧は此の幼子の御事なり。ア、其の一ト言を聞く上は、此の世に心残りなし、ア、モウ是れまでぞや、イザイ

ザと引寄せて、これが此世の別れかと手を取り交はず名残りの涙、西に向つて合掌し、次第く絶へにけり。ノウ悲しやと秦氏は、夫トの死骸に抱き付き、もだへむせびて泣き居たる。漸う涙押沈め、ア、思ひ廻せば自は未だ振袖の花乙女、身は錦ごりの宮近く、仕へし頃よりおもわれて、思ふ中とはなるこの引板、引けば引かるゝ心の綱、たゞ一トすじにかしづいて、二人が中に漸とおい立出でし此の小松、末のみどりも見ぬ内に、かれ行くけふの男松、一人残りし此の女松枝もほそく日を送る、今日より後の自らは鶯鶯のつがひの放れし如く、泣くより外はなかりけり。今より心政めて、おつとの遺言仏法の道を、守るも貞女のみち、南無阿彌陀仏と諸共に、唱ふる経も菩提のため、実に有り難き念仏の道ぞ広々知られたり

第五 漆間家門外の段

何を恨みの滝の糸、結すばれとけぬ思ひより、弓削の

荒武者伯耆守夜討をかけし保延七年、其の光陰に閑守なく、流れ／＼ていつしかと、月日はめぐりて久安三年肌まだ寒き如月や残んの雪の白梅に驚さへもまだしらぬ濃染の梅にたちまじり、匂ふ、景色を美作や、久米の郡の押領使漆間の城門いかめしく見越しの松の枝の下、掃除役の奴共槍助、太刀平、弓八てんでに箒と塵取持ちいそいそとして掃き清よむ。槍助俄に立どまり、やア太刀平や斯う御掃除が美事に出来ても御殿様が此の世に御座らぬゆゑトント精も根もつきて働き甲斐がないではないかい。イヤわればかりじやないて此の太刀平始め、下部一同が寄るとさわると昔話、七年以前に御殿時国様伯耆守定明が卑怯な夜討に敢えなくおなり遊ばされ、御殿の内は涙の雨、わけておいたわしいは御台秦氏様、御殿様の御遺言とやらで和子勢至丸様は高田の菩提寺で仏道御修行、血すじの親子でさへ離ればなれおりやモウ胸が一杯でたまらぬ／＼と鬚男、男泣きする太刀平の太刀も心も冴ゑ／＼で錆び

れぬ中味の如くなり、弓八箒を尻にしき、コ、コレあにきの槍助に太刀平よ、一体全体此の弓八様はトントお殿様の御心中が合点ゆかぬ。押領使ともあらふ時国様又ツタ夜討の夜の勢至丸様小弓をもつて定明の片目を射給ふたほどの御勇氣のアノ和子様、なぜ父君には敵討の仰せがなかつたのであらふ、なぜ和子様にはかたき討を思ひ立ち給はなかつたのであらふ。武家の御家でありながら、武家らしくもない山寺ずまひ、此の弓八は憚りながら武骨一点張り夜討の時も真裸かにて敵を斬りふせる武刃者じや、おりや齒がゆふて成らぬイヤイヤ尤も／＼貴様が言ふからおいらも云ふが武家には武家の意地、武士には武士のたましひがある筈智仁勇兼ね備へ給ふ時国様流石にアノ夜の立派な御働き、寄せ来る敵をまた／＼くうち、数十騎斬つて捨てられたアノ御手練と御勇氣、剛勇無敵の定明もあしらひかねたる戦の懸引、突にも源家嫡々の御血すじほどあるとて皆／＼感服致したのに、いざ御臨終の御時に忽

ち心一転して、御勇氣もいづくへやら、いつしかやさしくお成り遊ばされて、勢至丸様へは敵討をさしとゞめ、出家して菩提の道を踏めよとの御遺言、ア、想へばお慈悲もかう通り過ぎては智恵も欠け勇氣もうせて

拙ひ、月の桂も折るばかり、家の風をば吹かすべき、
けはひに滴つるぞ勇ましき

武士らしくもない成されかた、下郎の身分でさへチト御諫が致したい位であるわいヤイト。さすがは武家の奴とて皆勇ましき心がけ、手に持手拭豆絞り涙しぼり

第六 秦氏愛別の段（上の巻）

水はみそらに登らねど、月は陸には下らねど、水を結

て恨み泣く。折から立聞く小性頭稻岡亀之進ツカ／＼と進み出でコリヤ／＼奴共、上を憚からぬ御噂話余りと云へば粗骨な振舞ひ、チトたしなんだがよからふといとおだやかにしかるにぞ、ネイネイネイ、恐れ入ぞ奴ども、わが部屋／＼に立帰る。あとにはひとり亀

めば其手には、月さはやかに来りすむ。寝た間も忘れぬ、心と心、互ひの胸に通ふより、あふと見る、夜や逢と見る、さすが親子は、血筋の縁、錦たれたる几帳

之進ア、光陰矢のごとし、先君時國公のハヤ七回忌、わが父柝之介行実も和子様のお御行くすゑのみ、おあんじ申して御座る、イザ登城な致して御機嫌な伺ひ奉らんと、威儀つくるひて亀之進城内さして急ぎ行く、

のそば、乳人おこそはすり寄つて、申、御台様、御台様、是はしたり、お夢でも御覧しましたか、先程から

わが父柝之介行実も和子様のお御行くすゑのみ、おあんじ申して御座る、イザ登城な致して御機嫌な伺ひ奉らんと、威儀つくるひて亀之進城内さして急ぎ行く、

きつううなされてお出遊ばす、申、御台様こそでござります、申々と、ゆり起されて秦氏は、漸御目をさまし給ひ。コレハ乳母かいの、自らとした事が、今宵も

わが父柝之介行実も和子様のお御行くすゑのみ、おあんじ申して御座る、イザ登城な致して御機嫌な伺ひ奉らんと、威儀つくるひて亀之進城内さして急ぎ行く、

同じ和子の夢、ゆめじをたどる、自が便りすくない心根を、不便とすひしたものと、歎き給へば、お道理

わが父柝之介行実も和子様のお御行くすゑのみ、おあんじ申して御座る、イザ登城な致して御機嫌な伺ひ奉らんと、威儀つくるひて亀之進城内さして急ぎ行く、

と、乳母もそでをぞ、おふひなき那伎山風さそはねど

実に心ある時國の家来は流石推しなべて、皆忠節の人

寒気いや増す高貴山、さも物すごき風情なり。名こそ

豊並村とともなみ／＼ならぬ高円の菩提寺に、勢至丸指折り見ればモウ七歳、今年は丁度十五の春ほんに左様でござります。若君様が十ヲのお年、父君様の一周忌に山よりお帰り遊ばしたは、ツイ此程と存じまするに、今年は早七回忌、三月の御命日には是非お帰り遊ばしませふ、それ斗りを、お待申ております。イヤ観覚得業はのふ、随分と多いまい豪気の御出家、すこしのひまさへ、おしませ給ひて、学問の修行にいそしみ給ふ心がけ、何のマア其様に、あまやかし早ふつれて帰らふぞいのふ。成程伯父君とは申ながら師匠と弟子との御契り、あまい斗りが、情ではござりませぬ。先達ても、若君が生木をお切なされた迎それほそれはきつい御折檻との噂、草木国土悉皆成仏のいわれより、草木と云へども、生ある物、むざ／＼と、命を取は罪と成との御教へ、それに付ても若君様、なみならぬ御苦労と、思へばわたしや、御いたはしう存じます。サレバイノ、其時観覚得業は、天竺で名高い草

聚比丘の物語りを、おつしやつたとの事、折に逢、時にふれてのおしへ方、当意即妙のお悟しぶり、智識の扉を、ひらかする鍵でがな有ぞいのふと、主従たがひに、若君の噂とり／＼、水入ず、主をば思ふ忠義のおこそ、うみのたらちね親心呼べば答へん山彦の、声ひくけれど、主と子を、思ふ心の琴の音は、はるかに高き高円の、山の奥にぞひゞくらん、御殿の奥の、長廊下、たれやら案内こし元が、一間隔て手をつかへ、只今、若君様、伯父君様おかへりでござりますと思ひがけなき取つぎを、聞よりはつと飛立斗り、乳母も嬉しく、俱々に、いそ／＼として出迎ひ給ふ。師匠の影も踏ざる礼儀、七尺下り、師の坊の跡にしづ／＼打とをる。ヲ、コレハ／＼観覚坊和子もお供を仕やつたか、扱マア立派な成人ぶり、サア／＼こちへと、主従が、手を執るばかりのもてなしなり。師の観覚威儀を正し一別以来御意得ませぬ。姉上にも健かにて、まづは重畳／＼。一礼終れば勢至丸、母上様御健勝の体を拜し

祝着、至極に存じます。又毎々のお便りお心付、千萬黍ふ存じますと、りり敷挨拶なし給へば、母の秦氏嬉しげに、コレハく観覚坊には、いつも替らぬ頑丈の御姿、自も安堵致しました。何かは扱置、和子の身の上、寛厳よろしき育てかた、なみ大体ではござりませぬ、厚く御礼申ます。コレ和子そなたも、師の坊の御教へ、心にしめてのつかへぶり、母も満足に思ひます。殊に嬉しく覚ゆるは、なき父君の御尊牌に、香華燈明絶さずして昼夜六時の御経回向を、しやるとの事、母が身に取、これほどの嬉しい便りはないわいのふ。草葉のかけでも、父君の、およろこびはいかばかりと、思へば涙がくくと、とどめ兼たる御風情。御台所は心づき、コレ勢至丸、今は父君白木の位牌とお成りなされても、さぞなお待ち兼ねのおんみ魂、まづまづ仏間に通られて、ごあいさつの御回向いたされよ、いざくと秦氏は、先に立たれて、導びき給へば、勢至丸は師の坊のおんあとより、続いて乳母のおこそま

で、しづく奥に入りける。外はみぞれの如月十日折しもお家の柱石たる稲岡柝之助行実、主家を思ふ物案じ、しほくとしてあゆみくる。跡よりたれかしらま弓、いきせきとして走りつき、フイヤそれ、なるは漆間家の御重役、稲岡殿でござるか、某は時国公の御舍弟、立石時秀が家来、本城市之丞正武でござる。主君、立石公の仰せを受け、御当家の秦氏君又、和子勢至丸様へ御諫言を申上度とわざくかけ付け、推参致してござると。いとせき込んだる礼儀振り、こなたはそれと、一礼しコレはくお見それ申た、正武殿、御諫言とはいふかし、何はともあれ登城の上、万事御意を得るでござらふ、恐れながら貴殿には、暫時これにてお待ちされ左様ござれば、稲岡氏と、たがひに目礼柝之助、奥殿さして入にける

第六 秦氏愛別の段

爰は漆間の奥御殿、仏間の正面莊嚴おごそかに、香花

燈明まばゆき斗り、中に祭れる白木の位牌、時国公のなき御靈、尊かりける須彌壇なり。今しもあしたのかん勤も、なみだの内に相果てて、有りし榮華のむかしをば恐ぶ心の世の有様、観覚坊は詞をたゞし、姉上御台所、今ノ日、改めて御意得たし。ソワ別事ではござらぬ、和子勢至丸儀、一を聞いて十をしる、其性の悟き事、実に流るゝ水よりもあつばれ、かゝる非凡の勢至丸、只いたづらに、草ぶかい田舎の中に、埋め置んより、今日本の大学匠、靈の如くに集りたまふ、比叡のお山に、のぼし参らせ、天台座主の御位にも、昇らせたい、愚僧が願ひ、何卒永のお暇を、今よりゆるし給はれと、思ひ入てぞ見へにける。勢至丸は手をつかへ母上様膺も伯父上の仰せの通り、都へ登りたふござりますと。聞より母の秦氏は、ハットばかりに打驚き、是はしたり観覚殿、たつた十里の菩提寺でさへ中々遠くも思ふのに、所もあらふにこれは又都の奥の比叡のお山何としてそれがマア、赦してやられふ物か

いのふ夫に別れて自は、たより少ない今の身の上、仏道修行は兼てより、わらはも嬉しう思へども、都のその比叡とやら、思ひ留つて給ひのと、袖をかみしめ秦氏は、わつとばかりにどふとふし、人目も耻ず泣給ふ。折もこそあれ栃之助、それと見るより手をつかへ只今先君の御舎弟、立石家の御家来、本城正武と申者何か御諫言の儀に付、御名代として参上と申上れば御台所諫言とは心得ぬが御名代とあるからは、立石公の御意見も承りたし、早ふこちらへお通し申や。ハハアはつと斗りに、稲岡はしづゝ立てこなたに向ひ、ヤア、それにひかへし、本城氏、御台のお召、早々はへと取次にぞ、血気にはやる本城正武、意気揚々と威丈高、上座にこそは押直り、扱御台所を始、和子様又観覚坊様まで、揃はせらるゝ此座席、いざ是にて主君の仰、言上せんと、威儀をたゞし、主君立石公には亡き兄君の時国公とは常日頃より御氣質も違ひ、音信さへも、しぜんとだへ、され共七年以前のアノ御最期

遺血筋の御兄弟とて、御家の跡の一大事、忘れんとし
て忘れがたし、然るに此程世上の取沙汰に勢至丸を山
寺へつかわして仏道修行致しおるとのこと皆武門の家
に似合はざるふるまいと、開度毎に御いきどふり、今
日はぜひとも改めて、御諫言申入んと、則拙者御名代
の役、サ其趣き、まづ第一、家督相続の事、第二には
敵討用意の事、此大切なる武門の道を、全ふさせんが
為、勢至丸には出家の一条、ふつゝりと思ひとめさせ
不倶戴天の父の仇討。武名を天下にとどろかし、先祖
の武功を揚げん事、これぞ武士たる道の誠の本懐又予
が娘千鶴の前、かねて申し入れおきたる若君との縁組
八千代の末の玉椿、子孫の榮へ、さかへさせんとと思
し召、方々思案仕かへられ、いざ／＼返答召れよと弁
舌いともさはやかに、とき立てのべ立て、たゞみかけ
主を威光にすゝめける。皆々はつと驚きて何と返事も
くちなしの花のやう成る勢至丸ひぎのり出して正武に
向ひ、イヤナニ今其の方が云ひしこと、一応は尤もな

れど、夫れはかたよれるちいさき心、世には武家ばか
りが人ではない、ソモ人として世に立ッ道、是にはさ
ま／＼有り、鷹の出家は、なき父君への孝行、父の遺
言を守るのじや、そちがけふ来やつたは、定めし此鷹
を不孝者にせふとの事か、ア、イヤ全く左様な儀では
シテ又家の相続とは云へど、家よりも父の心の相続が
かんよふ。又敵討も合点なれど、恨まざるをもつて恨
をほろぼせとの父上の遺言は、敵討にもましたる仇討
爰の深ひお志しはヨモそち共には分るまい。そちは此
勢至丸を人の中なる人にはさそふとは思ひくれぬか。
サアそれは、どふでも出家をやめさすか。サア／＼サ
アと、つめかけられて正武は言句も出ず、尻ごみして
ぞひかへ居る。若君重ねて、汝よつく聞け、武家と雖
運なくば滅ぶる事は儘ある習ひ、討つべき仇も赦して
討たず、憎べき敵も愛して憎まず、弘く恵みてふかく
憐れむ末代不滅、御法の家、かゝるお家の相続こそ、
鷹が誠の家督ぞや。家をば捨る誠には家を捨ざる理り

有り。よく／＼そちも考へ見よと宣いて、元の御座へしづ／＼と、鶴の一声かくやらん。ハ、ア恐れ入つたる賢明無比の御詞、お詞に對し、一言半句の申開きが成ませふや。主君立石公へ委細言上せば、只感涙遊ばされ、御同意あるはかゞみにかけたり、斯迄深ひ思し召が有ふとは、凡人の分らざりしも理の当然、最早お暇申さんと挨拶さへもそこ／＼に、館をさして立かへる。勢至丸さし寄つていんぎんに両手をつき、涙払ふて申し母上、受けがたき人の身をうけしが上に逢ひがたき、仏の道にあひ奉り、まだ其上に目の前に見せつけられし無常の有様、思へば此の世はゆめでござります。早く比叡のお山にのぼりて、一乘眞実の御法が極はめたふござります。但し母上の御膝元去らず、子たる者の道を尽すが本意なれども、そりやコレ世間の孝道なり。出世間の道からは有為儂りの世を捨て、無為眞実の道に入るは、是こそ人界に生を受けたる誠の思ひ出、今の別れはうつゝの別れ、此儂りの別れをおし

みて、未来につゞく悲しい後悔、残させ給ふな母上様と仏の道を説き立て、さとす子よりも悟さるゝ、母こそ却つておしへ子が、見上げ見おろしはら／＼と、なぐ蟬よりも泣もせで、身をこがしたる螢火の、小さき目にも光りあり。光りや後に鳥羽街道、摂政関白忠通の御所車さへとどめたる、威光は今よりかう／＼と日月輝く如くなり。母はうれしき顔をあげ、ヲ、やさしい事を／＼、よふマア云ふてたもつたのふ。そなたの詞聞に付け、母が迷ひの雲も晴れ、よふ得心仕ました程にの、モウ涙はない、ナア／＼何の泣ふぞヲホ／＼／＼／＼ヲホ／＼、今改めて、永の暇を取らそふ程にいさぎよふ出立しやと、雲千仞の高根より、突落したる獅子の子や、親の思ひの獅子ふんじん、心を鬼とも蛇ともして、手離しがたき母親の、思ひは千々に碎くるばかり骨身にこたゆる真身のやみ、子故に迷ふ親心死ぬるにましたる心根を、三十一文字に引きちよめ、身も浮ばかりに泣給ふ。筐としてはかなき親のとどめて

し、此別れさへ又いかにせん、げに此子にしてこの親と、感歎にもらひ泣き、ヲ、姉上、天晴レ出かされたり。それでこそ、時国公への貞節も立、まつた誠の親の慈悲、道理／＼と顔そむじ、衣の袖に男泣き、乳母のおこそも柄之助、皆お道理と諸共に、声を限りに泣つくす。勢至丸もこたへ兼、五人が涙一時に、落ちて流るゝ片目川、波立ちよする如くなり。此ま心の涙川後には名にあふ吉水や、法りの流れと末代迄、流れ流れて弘誓の船、善悪共に御法りの親の明照大師、都の東に知恩院、其西山に光明寺栄へさかへし浄土門、幾千万の寺の数の本の始めは誕生寺、今も昔のあと留めて、あふがぬ人こそなかりける

第七 二見ヶ浦悪太郎住家の段

千早振る伊勢の神風吹きくれど、持つて生れた心のちり、払はれもせず荒びゆき、夜遊び博奕資の目の、替る／＼の悪事の渡世果ては喧嘩の打ちようちやく、世

にはぐかられても、おのれのみ世をも人をも御上みをも、何憚らぬ不敵の振舞たゞうはべをばうちかざる。

裏と表の二見ヶ浦、波の荒磯あばらやの、狐師渡世の親分肌片目姿の悪太郎、何の困果ぞ父親も、見にくき片目の世捨て人、はなれてくらす長男の、悪太郎が手下なる錆平、ふか吉、おこぜの権次に、鯨兵衛、皆どや／＼として立ち戻り、頭分今戻つたぞやと、手には鈴竿網船具、籠に多物の魚とり／＼、かしらおかしらサア早ふ見て下さんせ、いつでも／＼片目かんちの魚ばつかり、かしらが狐に出られても、おいらが船で乗出しても、取れる肴は不思議に片目、一体全体、赤鯛黒鯛、マアたいした訳が、あらふかいなど、皆口／＼にどなり散らせば、苦がみ切つたる悪太郎、百日蟹やどてらの姿、右には煙管、左には、朱塗り羅てんの煙草盆、惣々さげて上座に直り、エイ／＼ロやかましいほざき様う、片目でもめくらでも、取つた魚類は金になりそふな、まア案じたものじやない。然し此の二見

に移つてから、狐師をすれば奇態な事じやて、網に入り、竿にかゝる、魚と云ふ魚、どいつもこいつも片目ばかり、いかにこちら親子が片目ぢやとて、こりやあんまりおかしいわいと、親父様に聞いて見たれば、只黙然として念仏の返事ばかり、追のおれも是には気がくさつて、ならぬわいのふエ、ツ忌くしい、モウく浜行はやめとせい、船具も網も釣道具も、今からみんな売り飛ばし、博突のもとでか女郎かい、飲んで食ふて寝て起きて浮いて浮かれて浮れめども、皆だけだかそう、どうせ世は太う短うあすんでこませ、サアく手下共、酒宴の用意せいと云ひつければ、下地は好きなり御意はよし、おつと合点、夫れが能い能いよいよさで立上り、オイお頭いらが取つた片目の魚は買手はおるか只でさへ、縁起が悪いと逃げくさる、貰ひ手のない此品もの、いざ今からお手料理、サア来い皆来いと、裏口さして馳せて行く。早や運び出す、酒肴、鮎子さかづきつきつきに、持出だされたる嶋台

に蝶花形のそへたるは、何の用意か白波の差しつおさへつ盃の、数もまはればおのづから、酔も廻つてさんざを歌へや舞への真只中、悪太郎立あがり、コリヤく承玉はれ、人間万事は食ひけと色気、いかに吉野の花見ぢや迎、ソレく花よりも鼻の下、食てく飲んで、又飲んでサテほろりと桜色、こう心が春めいては、もう女でなくては夜が明けぬ、コレヤコレ、日本のお国ぶり、サ、アノ土小屋に、引くつてある、いつぞやの旅の女、年は二八のにくうない、イザ引摺り出して酒の肴ぢや、くどいてく、色にしやう、サアく早ふ参れと云ふに手下はおつと合点、コレヤイケネイ、鯖平さまは酔ひつづれ、口は立つても足立ず、それでこつちは口とぎの手伝ひ。ヤアくおこぜ、貴様一寸行つて来いと、云はれて俄かにおこぜの権次、オウサウトモく、アノ旅の女を引捕らへしはお頭の云ひ付けとは云へ、権次は結ぶの神、おれが肝入でけんさい殿を、どれ連れて来やうと立上り、裏小屋さし

て出て行無惨やな姫君は、夫恋ふ鹿の峙さへ所定めぬ
 浜千鳥、片羽は枯れてよし芦の苫田の郷を出でしより
 身は数々の憂苦勞、思ふ人には逢れもせで、心は主に
 淡路島、白浪の手に捕へられ哀れ其身は十重二十重、
 紅ひそむる荒繩に、引立られてん難紅葉、霜に悩みの
 風情なり。サア女、ソレお頭がお待兼ねと突きやられ
 ハツとためらひたちろぎて、涙の顔を打覆ふ、綾のた
 もとも色あせて、玉のつゆおく玉笹や、さはらば切れ
 ん玉の緒の、命の瀬戸の此場の有さま。コリヤ、ヤイ、
 旅の女、イヤサ姫君、先立てよりいかに口説いて、す
 かせば迎、今に色よい返事もない。まだ其上に国所、
 氏索性さへ打明さぬ剛情不敵、いづれば、よしある姫
 なりと、肌身につけし守袋を、追つ取つて、取調べて
 万事は合点、姫が生国は、美作は苫田の郡、二の宮と
 いふ所、立石某が息女で有らふ、其名もめでたき千鶴
 の前、エツエーンノ様に、国も親も知られては、父へ
 の恥辱、家への名折れ、無念に候、口惜しう候と、齒

を喰ひしめて泣き給ふ。コレサ、姫君いかに氏ある素
 性にも致せ、此悪太郎迎、万更の生れでない、今こそ
 悪業渡世の浪人なれ共、血筋は正しい、我身共、勿体
 なくも堀川院の滝口某は、われらが父ぢや、又母人が
 我身をお産みなされしも同じ美作、縁は異なもの、生
 れは同国隣郡、何さく、釣合ひの能い姫と我身ぢや
 イザく千鶴の前、機嫌直して、色能い返事ヤイ権次
 姫の細目を早やとけよ。サア、何んと、ねこなで声
 エ、ツ、穢らはしいそこ放しや、聞くさへ耳のよごれ
 じやわいのふ。してく気がりな、今の言葉、そち
 らが美作生れと云やかるからは、若しや久米の郡は、
 弓削の庄ではなかりしかと、云はれて驚く悪太郎、オ
 オサく、不思議に云ひあて召された、姫其眼力には
 恐れ入る。我身の生れは弓削の庄、襦袢の間に父上が
 一人の姉を余所に残し、逐電あつて旅から旅、さすら
 ひまわりて憂艱難、今は親子も離ればなれ、母は亡く
 なり姉は分らず、我身ひとりの我まゝ三昧、身は悪党

の頭となり、千分の数さへ数百人、酒池肉林の楽づくめ、何んと今日から宿の妻、二つに一つの返答しやれと手を執りかゝれば、其手を払ひ、又しても無礼な振舞、其れなら明石の源内武者伯耆守定明が、お前の父であらふがのふ、オ、よくぞ云ひあてめされた。追がは立石公の息女の果、なほ更ら以つて思ひ切られぬ、サア／＼早ふせきたてられ、もうそれ聞くうへは、我夫の敵の悴、同じ恨みの仇敵、慮外しやると赦しはせぬぞと、云はれて悪太郎、顔色かへ、オ、姫と思ひいたわつてやさしく云へば附け上る、可愛さ余つて憎さは百倍、いで目にも見せてくれんずと、有り合ふ割竹、追つとつて飛びかゝらんず其けしき、おこぜの権次走り出で、マアマア待たしやれ、急ぐ所ではござらぬ大事な姫の身の上、命あつての、物種、若し当り所が悪ふて、ひよんな事にならふも知れぬ。爰はお頭、権次が預かつた。コレサ姫君、是には深い仔細も有らふサア／＼頭が得心ゆく様、身の来歴を語らつしやい

と、やさしい勧めに、又泣き入つて、思ひ出に、悲しの淵に打沈む。姫は漸ふ起き上り、オ、権次とやら、先程から情のある執成しやう、其心根にほだされて、いはねばならぬ我の身の上一通り聞いてたべ、そも自らには、稚い頃より、親と親との、許婚主しにあわびの片思ひか、なんぼうおしたひ申しても、恋路の暗は我心、さきは明るい悟りのお方、今は御出家遊ばされ一天四海に二人とない、世にも尊き生き仏、法然厨とはなられても、妾がためには、矢張り元の勢至丸様、思ひ廻せば稚い頃、夫は十五の御年にて、母御も妾も振り捨て比叡のお山に入り給ひ、辛苦も二十五年の果て、凡入とやら報土とやらの浄土門ひらき給ひ、何所迄もつまをば迎へぬおんひぢりと聞いて悔り、身も世もあられず、恨みつらみに泣き明かし、思ひ余つて妾が玉の緒、きれなば切れよと思ひし末、乳母萩野ともろともにお城をぬけてお後したひ、雨風雪を杉さか越へ、草木を和氣の里立つて、氣は播磨路や、印南渦、

憂きも苦勞もいなみはせず、身の行末も白鷺の城下を後に、淡路を立ち、世を加古川をうち渡り、なきの涙に明石の浦、歎きの雨ははら／＼と、振の袂にたるみの浜、からき浮世の塩屋を経て、浜の真砂の数々の悲しい事も我夫ゆゑ、伊勢路をこえて鈴鹿山、身を宇治橋の橋の袖、ふつてわいたる災難は萩野が俄な持病の癪、身は姫御せの介抱も何と詮方立計り、日は暮果て真の間、オ、サ、その間を幸に、おこぜの権次に云付けて生捕つたは千鶴の前、病人ながら乳母の萩野、懐劍抜いて手強い武者ぶり、不愍ながらも恋路の邪魔者エエツしやらくさいと蹴おとせば、五十鈴の川へ身はどんぶり、エエツ、そんなら乳人は殺されたかいなア、むごい事をさせたわいのふ、コレ萩野殿、身に病み煩らひさへなかりせば、むぎ／＼討れる乳人ではないに、エ、やかましい、サア／＼千鶴の前、もういゝかけんに観念して、否応云はずに手活の花、エ、けがらはしやと、逃げ行かんともかく時、悪太郎と権次

の二人、前後に路を打ふさぎすでに危く見へけるが、不思議や忽ち一天くもり大地は震動、稻妻きらめき物凄くも又すさまじき悪太郎始め子分一同、五体しびれて腰足立たず、只ぼう然たる其中に姿ありあり萩野が亡霊、コレ悪太郎、よく聞けや萩野はお前の姉と云ふ深い由縁と異途で聞いた、それがお前に殺されたも、皆な父上の罪業からじや、まつた姫君は立石家の御息女にて、妾が為には御主の大恩人、無礼ばし仕て給るなや、早く罪業の懺悔をして真人間に戻つてくりやれ、頼む／＼と云ふを思へば姿は消へ千鶴の前もいづくへか、後しら波の浦げしき、ハツト氣のつく悪太郎血相かへて怒りの顔色、ウム／＼、サアハ法然めがげん術にて、眼をくらし命をかけし姫をまでかつさらししよや、恋の敵の法然坊、彼を殺して亡者とせば姫が心もうつりかはらん、そうぢや／＼と刀の目釘、うちしめり降る、村時雨、身を簑笠に隠しつゝ、浜辺をさして、かけり行く

第八 定明切腹の段

十方世界を照らしつゝ善悪共に隔てなく、光をあたる天つ日は御法の上より名を附けて彌陀如来とは申すなり、これを形に仰ぐ時、天つ日の影そのまゝに天照らします大御神内外の宮居宮柱、ふとしくたちて千木かつを木、神さびまざる神杉の中にぞ高く聳へます。

伊勢大廟に参籠の法然上人源空はあまたの御弟子引連れて五十鈴の川にみそぎして、夜をこめまして広前に祈りを捧げ奉り有難さにぞ涙をば法衣の袖にしたし給ひ、朝熊山を朝ならぬ夜のうちより出でたちて、二見が浦は夫婦岩つきぬ妹脊の契りあり、千鶴の前のこゝまでも、あこがれ尋ねさすらふとは、なに白波の浪うち際、月を便りに歩み給ふ。此の時後のかなたより髪はおどろにかき乱れ、息も絶えぬ追ふて来るひとり姫は千鶴の前、喃待たしやんせ待つてたべ、其所にわたらせ給ふは法然房様と見奉る、イ、ヤノウ昔しの

勢至丸様、年つき尋ぬる甲斐あつて計らず爰に遇ひましたも、神が手引きの尽きせぬゑにし、コレノウ〜と呼ぶ声は千鳥の声か千鳥あし、御弟子の法蓮耳そば立て若し御師匠様、誰れやら呼ぶ声が聞えます。と申上ぐれば法然上人、骨身に答ゆる女の呼声、血筋のゑにしか法のゆかりか、呼ばれて逃げんも心づらしと岩根に腰うちおろし待たさせ給ふ情の御様子、御手に珠数をつまぐつて、みくちに念仏となへ給ふ。あやぶき虎口を通れたる千鶴の前は落ついて、それと見るより法然房の法夜の袖しつかと取つてくづおれかゝり人目も恥ぢず泣くばかり。上人しづかに其の手を放させ珠数うち振りにて穢れをはらひ物和らかに給ふやう、何国の方かはおぼゑね共、予が幼な名さへ呼びたてゝ待てよと仰せあるからは、若しや国元なる立石家の息女ではござらぬか、何故本国はなれかゝる伊勢路の旅空に打さすらひておわするや。まッた災難にでも出逢ひ召されしかと云はれて姫は気を取り直し、オ、よふぞ

や問ふて下されませす。自らはあなた様と許婚の千鶴の前、情けにあまへ申すも恥かしながら、国元たつて行年月の憂き艱難、まだその上に悪る者の、こわい工みのわなにおち乳母の萩野が殺されたり、又自らがこれ此の通り、打ちちやう擲く、攻め折檻なぶり殺しの目に逢ふのも皆あなた様おんゆへぞ、十八年が長の年月骨身にこたへし憂き苦勞今こそわすれて嬉し涙、尋ね／＼て今爰で逢ふたは伊勢の太神が結ばせ給ふ妹脊の契り、少しは不慙と推量してたつた一言女房と云ふてたまはれ上人様と、法衣の傍に寄り添ひて正体涙いぢらし。上人驚き飛びしさり、尊き御目に玉の露、ア、哀れなり不慙なり、人間と生れては其の凡情は左もあるべしが、然しよく聞かれよ、千鶴の前、法然昔の登山出家の砌り、既に時秀公に申上げて、妹脊の縁も是れ切りと妻はおるか母をも家をも打捨て身はこれ人にして然も仏の御子の出家沙門八重の汐路にたゞよひて生死の海に沈めばとて魚には塩のしまざるたとへ、

もう法然は勢至丸ではない許婚の妻はない筈、此の法然が恋人は只お一人にして然も其数限りなし。聞かれよ姫、千鶴の前御仏に染むる心のいろに出ば秋の梢のたぐひならまし。法然が色は秋の紅葉はその紅ひの血汐まで心に思ひ染め奉る。恋人はこれ此の彌陀仏極楽化主おひと方より外にはござらぬ。短かき渡世の恋よりも長きまことの阿彌陀如来を恋人とあふぎ、身をも命も打捨てゝ恋こがれ給へば二世はおるか三世まで、法然とそもじは一垂托生、そもじが彌陀となつて我が恋人、さすれば法然恋しと思召し候へば、只南無阿彌陀仏と申させ給へよ。念仏だにも申させ給へばそもじと法然とは膝差しまじへて同席同座、若し念仏怠りなば譬へ法然が傍にござあつても、法然とは海山万里、念仏申す人としならばそは皆法然が恋人でござれば、わが恋人はひとりの彌陀にして而も其数限りなしとは爰の道理、去れば法然が恋人たる阿彌陀如来はかしこくも、この日の本に頭はれて、姿を替へて天照す大御

神様、さてこそ法然が態々伊勢路の大願參籠、いざいざ千鶴の前いまから心改めて、この法然房よりも彌陀の恋人にかしづきたまへよ。迎も此の世に千歳の春や万年の秋はござらぬよく／＼思案を成し給へといと懇ごろにさとされたり。千鶴の前も感じ入り迷ひの夢も覚めかけて南無阿彌陀仏と伏し拜み泣き出したまふ。こなたの竹籤かき分けて、心其名の悪太郎、様子立聞き怒び出で、おのれ法然源空め、意恨かさなる恋の敵いまこそ思ひ知りおれと太太刀引抜き上段に振りかざし、骨も砕けと打ちおろす。不思議や刀はふつとおれたゞ茫然と悪太郎たゞみ見やれば上人の御身に光明かく／＼と、輝き給ふ御有様、大悪無道の悪太郎、小刀抜いて立向へど体しびれて働らかず、もがき／＼て飛かゝる。斯くと遠目に片目の老人、走り来つて引とむれば振り返つて驚きながら、オ、親人仇敵の法然討つに何故の此邪魔だて、サアそこ放されよ、コリヤヤイ悴、法然は身共が討つ其脇差こつちへおこせと、

取るより早くおのが弓手の脇腹へぐつと突立たり、ヤコリヤ親人、何故の此御最期早まつた事なされたと道の悪人悪太郎も鬼の眼にはら／＼涙、ヤレ悴歎くまゝい／＼、只何事も知らざる汝、法然様も千鶴様にも、申し昔の罪障懺悔一通語り申さん先づ聞てたべ。コレ此漁師の親仁こそ、姿は変れど滝口の武士、伯耆の守明石の源内定明がなれの果と聞いて上人驚き給ひ、楯は保延七年彌生の春の戦ひに射かけし矢傷の片目の定明いかにも仰せの通り若氣のいたり血気にはやりいさゝかの恨を根に持ち時国公に弓を引き、武士に有まじき卑怯の夜討、時は丑満朧月鳥も睡に夢結ぶ、我旗下の鎧武者其数百騎は徒士侍数多随へ大槌打振り流石の金城鉄壁も只一撃に打くづし乱れ入る敵は名におふ鬼神と呼ばれたる漆間時国、早業秘術にまたゝく内味方討たれて死人の山、唐紅ひに血潮の紅葉され共時国終には手傷に其時、某時国討たんと身構へたり、折しも御身の放せし尖り矢羽音するどく兜の庇を射削つて右

の目を射立てられ苦しまぎれに逃出す。忽ち軍は破れとなり味方はちり／＼詮方なく漸くのがれ逃げ延びたり。其後ち噂に聞けば勢至丸様討つべき仇も赦し憎むべき敵も愛し恨まざるを以て恨を滅せとの御父の遺言を守り給ひて、今は都の大善智識と承つた時は、コレ此定明が心の内の恥かしさ、此胸のやるせなさ、けふは御前に罷り出で懺悔の切腹なし遂げやうか、翌日は庵におとづれてと思へど時節到来せずおめ／＼今まで長らへたり。サフ法然様、時国公の仇敵此親仁を一分だめしにして亡き父君の御ン恨みを晴らさせ給へ、サ成敗あれ、コリヤ悪太郎、そちが手にかけて殺したる萩野はまさしう汝が姉、ホ、驚くは尤も父が作州逐電の砌り妾腹の娘なれば女房の手前も有り、足でままとひ萩野は他家へ預けたり、其時持たせし、コレ此北山王子権現の守札、父が氏素性をしるし置きし此一品、斯計らず今ん日五十鈴川の下手にて女の死骸と人の騒ぎ、押し分てよく見れば肌にかけてたる此お守中改めて打ち

驚き、なむ三死としたり我娘と抱き附たさ悲しきも人前なれば夫れとなく、厚く葬むり此由を汝に知らしやらんものとそちが家を訪ひくる途中、子分に聞けば其女なら親方が蹴り殺して川へはめたとの物語り、いかに知らぬといひながら、現在真身の弟のそちが手にかけ殺せしとはよく／＼因果の寄り合か、かゝる非業の親子供等が三千世界を尋ねても有るべき事かと老の歎き、守袋を抱きしめ、可愛や萩野、爺じや／＼／＼はやい、必弟を恨むなよ。皆何事も此親が不所存故に天の御罰、世の見せしめ、コリヤ必迷ふてくれるなよ恨を晴らして成仏してくれ、勘忍してくれ勘忍してくれ赦してくれ／＼と、苦痛いとはず悔み泣く。姫は涙にむせかへり、ほんに思へば此年月朝な夕なのいつくしみ、かばふてたもつた厚恩の送らぬのみか其上に、長の旅路の憂苦勞、殺さらりやつたも自らが家を出した故なれば、皆其元は私しが業、思へば／＼情なや勘忍してたもいのと、人目も恥じずくどき立て、く

どき立つれば法然上人、さとり／＼し御身にも不便の
涙せまりくる。御弟子も共に顔背く、血筋の縁が悪太
郎こらへ兼てはら／＼／＼／＼と涙は五十鈴川、
落ちて流れて川下の堤もあふるゝ計りなり。定明苦し
き息をつぎ我が片目は昔の矢傷、出生したる悴が片目
漁る魚迄不思議にもおなじ片目の魚類計、輪廻無親と
付きまとふ。アラ恐ろしや／＼と、過去遠劫の發露懺
悔片目の魚は片目川今も昔に異ならぬ、跡をとめて
末の世に靈驗示すぞ威徳なる。始終の様子悪太郎、胆
先さゝるゝ心地して一念忽ち発起心退は武士の血を受
けて悪に強きは善にも強く、ア、父上よく御生害遊ば
した法然様への申訳も相立ち夫でこそ堀川の院、滝口
の武士、拙者も追腹仕り死出や三途の冥途の御供、イ
ヤナニ千鶴様にも申訳なき無礼の段々今改めて御詫び
申す。いづれもさらばと自害の体、法然押とめヤレ早
まるまいホー追に天晴出かされたり。懺悔をすれば皆
是清浄無垢の人々、もふ死ぬるには及ばぬ、方々よく

聞かれよ、經文には既に只礼懺清浄の水のみあつて能
く衆生罪業の垢を洗ふべしと説かれたり。無明長夜の
夢さめて今こそさとの夜明も近し、イザ／＼方々法
然が弟子となつて命全ふ仏道修業是則ち二世安楽、ア
レ／＼伊勢の大海原、今しも曝豊阪登る朝日影いとも
尊し／＼と、上人御弟子諸共に東に向ふて合掌し、声
高らかに南無あみだ仏／＼と十念を唱へ給へばこはい
かに東の空は唐紅い、浮ぶが如くの大日輪、紫磨黄金
の御六字南無阿彌陀仏と有り／＼と現はれ出しは摩訶
不思議、ア、ラ尊や勿体なやと光り拜んで定明の、息
は其儘絶にける。御名号拜し／＼て悪太郎、千鶴の姫
は合掌の其手をかへして髪を切り、法の衣はまとはね
ど心は早くも袈裟かけ松、日光坊善明と悪太郎に法名
給はり、千鶴の前には妙鶴尼、今道心のお弟子入り、
世にぞ伝へし日の丸の六字の筆は、上人の名残りをと
めて伊勢詣、宇治は山田の欣浄寺今にぞ祭る御真筆、
神は此の世の父となり、仏は未来の母と成り、神と仏

の二見が浦、伊勢は五十鈴の河上に鎮まり給ふ大御神、南無あみだ仏の本地ぞと恵み尊き御法なり。

第九 松虫 道行戀の重荷

雲井の上や山がつの賤が伏屋とへだつれと恋に上下の隔てなき。大内山の女ろうの身にも着そめし恋衣、恋の重荷も我物と想へばいとど輕げにて虫折り笠に顔かくし待人ありと松虫姫先に急げばおくれじと、成もゆかしの鈴虫姫指して行く手は獅子が谷、恋ゆゑ遠き山路さへ近うおもふて今爰に、御所抜け出て花の蔭見渡せば、柳桜を交きまぜて今は都の春景色いざ觀にごんせと告げ渡る鐘の響が音羽山、南無や阿彌陀が峯かけて暖める奥も花盛り野山も春の心哉。折りから来かゝる茶摘子がつとなで附けし黒髪に、チラ／＼懸る花片はなびらをそのまゝそれを花かんざしに誰れに今宵やアイウエオ、びんのおくれ毛櫛入れて恋の玉章カキクケ、コウやあアやと色話し、ヤレ／＼キツウ、シヤベリヤマズ

好うマア戯談おいやすなア、いや／＼若いものはひとさしそこでマキムメモウ、われおとらじと打ちつれてみどり十重なる茶の圃に入りにし賤の乙女子が、ふしおもしろふ歌ひ出て若き芽を摘む手揃ひに、いよ／＼榮え信楽の壺におさまる里人は皆万歳とぞ祝ひける。サア／＼都へ二人の衆打ちつれて行く跡へ誰を乗せたか山駕二丁、親を嵯峨野へおとづれの、今帰るさの此の野路、駕昇、息杖、エツサツサア／＼／＼、さあと此の花の下よりもヤツバリ下司は鼻の下、ヨイヤサアとおろす駕昇、駕の垂れあけて出でたる安楽住蓮婆尊とや袈裟衣数珠つまぐれる念仏の心は花に移らばこそ松虫姫は顔打ちみやりあなたは安楽様、イヤイヤナア院の北面、阿倍盛久様、本に思ひがけない藤、兵衛の尉信国様の住蓮様、こゝへはどうして迎ひ駕、さては日頃の願ひをば契へてやろふとのお情かと心に語る一人言いふさへ胸の内気な姫おもはゆげなる風情にて顔はほのめく紅桜いとし色ますばかりなり。松虫姫は恋

ひしきの胸に荒波とつおひつ法衣の袖に執りすがり、命にかけし此の恋ひを如何に聖者のおん身じやとて、人には人のお情有有るのが仏の御慈悲であらうと心も赤き緋桜や、いづれ劣らぬ花の色、成程切なる志悦しいとは思へども其れは在俗昔の夢、浅き夢みし昨日は迷ひ、有為の奥山既に越え今は大悟の京九重、都にござる法然様、我等が師匠と仰ぎまゐらせ濁にそまぬはちすの身、浮世の仇の恋よりもまこと仏へ宮仕へ、好う覚悟たが善いぞやと、言ひ捨てたまひて裾に入りサツとも垂れ打ちおとし急がせたまふ裾と裾、二人の姫は心を定め、転女成男、妾でも髪さへ切れば妾成男子此世からなる一蓮托生、尼にさへなりや一処にゐらりやう、どうぞ待つてとふしまろび、妾は娑婆であなたは極楽輪廻に迷ふてゐるうちは近かづいても十万億土後追つて此の髪をと心勇めば風勇み、散りくる花や散華楽、霞のおくの鶯は伽陵、頻伽か、経陀羅尼無量寿仏に契る身は此の世のいのちも延年寺、後に眺

めて八坂の塔、祇園吉水法勝寺嬉し／＼と如意満足、その如意が岳そのふもとぬしおふたりが庵へといそぎいそぎておとなへり

第十 御流罪の段

釈迦と彌勒の玉櫛簪ふたりの仏の中空に月の光と現れて無明の長夜を照します、末世相應の浄土門、広く開きて善悪邪正唯そのまゝに救はるる、彌陀超世の御悲願は元祖法然弟子親鸞、師弟手を引き衆生を引く、引きめの弓矢執るもののふ、月卿雲客そはおるか勿体なくもいにしへに、例も誰れか後白河大君さへも上人に玉の冠を傾けて生如来とも仰ぎます、名譽はよしや吉水の、禅房繁昌たぐひなし

されば南都北嶺の荒法師忽ち嫉みの焰をもやし、念仏非法の嗾訴に讒訴、春日の神木山王権現表に押立て担ぎ立て早や都路に入らんと有様、搦て加へて雲井には官女松虫、鈴虫を、安楽住蓮手引して擅まゝなる出家

こそ、破戒無慙邪淫の罪と思ひ設けぬ御疑ひ、そのほか罪の数限り、皆師の房に投げかけて正しき道も東山世に時めきし道場も念仏停止の制札に、門は閉ざされ剩つさへ重き罪科の宣旨まで降さるゝとの世上の取沙汰、いたましや上人は移りて罪を小松谷待たぬ日數もきさらぎの中の八日に早やなりぬ。浮世を忍び墨染の法衣に身をば包みても香は漏る梅の門の戸をほと／＼おとなふ二人の尼僧、誰様ぞお取次ぎをと云ふもあたりへ気がねる声、善信房立出て設くると云へども、常に閉さぬ師の房の御教へなるに、かく閉さねばならぬ憂たてさよと開けばおづ／＼立入る女性、オ、松虫殿鈴虫殿いづれに忍び今日が日まで、よくぞ無事でありながら、何と思ふて此の所へは、さあ此度の師の御房の御災難安楽住蓮お二方の敢へない御最期、皆妾二人の為めと思へばあるにもあらぬ悲しさ、責めて御前にひれ伏して罪のしもとを松虫が心を推して善信様どうぞ師の御坊へお取りなしをとうるみ声、同じ思ひに

鈴虫もふりそゞぎたる袖時雨とふに死ぬるこの命、今日までながらへ浅間しい、はづかしい見参に入ることもたつた一言、師の坊にお詫びがしたさ叱られたさ、もし善信様と取りすがれば松虫も取りすがり、お前様も妻子を持ち、女の心はよふ御存じ、お慈悲情けと掻き口説かれ、胸にひつしと善信坊、たとへ如何なる理はありとも、その妻子を持つたればこそ、宗敵が讒訴の種となり、師匠がけふの憂目となる、この善信は不孝第一さら／＼お二方の業ではない、とは云へ朝廷の手前世間の思惑今が大事の御瀬戸際に御見参は懣やかならずわきまへ給へと諭されてすりやお詫さへかなわぬとか、阿難尊者の再来とたのむあなたに振りはなされどうなる事ぞ何とせうと二人は手に手取交し、泣くより術はなかりけり。俄かに門外人馬の響き、上使／＼と呼ぶる声々、素破こそ大事と馳せいづる法蓮善綽性願其他、善信坊は二人の女性、見容められじと籬の蔭入る間あらせず御法の門外、仏にあらで鬼

馬毛の駒のたてがみ二頭だて、紫こぞめの手繩かいくり五位の衣冠もおごそかに、上使は檢非違使久経、武次、二人の官人馬より飛をり互ひに多しやく庵の上座に推し通る、ヤア法然房源空、まつた徒弟善信はいづれにある、疾くまかん出て上意の次第、謹んで承はれ畏れ多くも太政官符の申渡しなるぞと威猛高、人々はつとかしこみて手に汗握るばかりなり。紫雲を出る月の影、異香薫する一間より立出で給ふ法然上人、後に随ふ善信坊、上使の前に静々と心はゆるがぬ金剛座、札拜いともいんぎんなり。久経は威儀を正し、如何に源空善信上よりの御沙汰謹んで承はれと取出す一書、太政官府土佐の国司

流人源空事藤井ノ元彦、使左衛門ノ府生、武次、同じく越後の国司、流人善信事藤井の善信使府生源秋兼右流人元彦と善信を領送の爲め件らの人をさして發遣件の如し、国よろしく承知して、例によりて此れを行へ、路次の国、又よろしく食濟兵馬三疋を賜

ふべし、符到奉行

建永二年二月十八日

右大史中原ノ朝臣

左少辨藤原ノ朝臣

以上と音声さわやかに読み渡されて門弟一同、余りの事にあきれ果て唯茫然たるばかりなり。上人少しも動じ給はず、愚僧を土佐へ又善信を越後へ流されんとの上意畏み奉ると、事もなげなる御受けに末座に控ゑし聖覚法印たまりかね、此れはしたり師の坊様、ざりとは余りの軽々しさ、一期の大事干載の恥辱よく御思案なふてはかなひますまいと、言ふを引取る法蓮房聖覚法印の申す処至極と存ぜられます、そも念仏は三千大千世界の真理、我等が我儘にて申す念仏にあらず皆々大悲招喚の呼声に催されて自然と出づる仏性の雄叫び幾千万本の制札を建つればとてなんの、なんの念仏停止がなり申さうか、又任運安楽が破戒女犯の御疑ひ、そは御勝手の邪推でござる、若し又破戒女犯の詮議立てせば却つて南都や北領の法師ともは片ツ端か

ら流人のござらう、それには引替内外相応清淨無垢の師の房を、藤井の元彦なんどいふ俗名までつけ、遠流とは余りと申せばふさわしからぬ、法のお裁き法蓮命にかけて不服のござる、と悲憤の相好、上人暫しと押し止め、如何に法蓮房方々もお開あれ、法然こたびの流罪更に恨みとは存じ申さぬ、其故は齡既に八十路にせまり、たとへ師弟が同じ都に任めばとて娑婆の別離は近きにあるべし、よしまた山海遠く隔てばとて浄土の再会何ぞ疑はん、いとふたとて生きて居るは人の身惜しんだとて死するは人の命、何ぞ必ずしも処によるうや、しかのみならず念仏の興行都に於て年久しい、早く辺鄙に赴いて田夫野人を勧めんことこれ年頃の本意なり、然るに時節到らずして素意を果さぬ源空が、流罪の影にて念仏を辺土に流布し本意を遂ぐる、是れぞ誠に朝恩ぞや、ハ、忝けなし有難しと聖者の言葉肝に銘じて人々はアツとばかりに合掌礼拝随喜の涙に暮れるなり。武次は言葉をやはらげ上使の役目はこれに

て相すむ。発足は未の上刻迎ひの興を参らすまでゆる／＼名残を惜しまれよ、あゝ想ひかへせば空恐ろしい現在まざ／＼無実の罪科と知りながらも、斯く上人たちを罪人扱ひに致せしこと、これも檢非違使の役目を勤むる身なればこそ、お許しめされい法然上人、やがて雲井の御胸も晴れ一陽來復、芽出度き都入りの御沙汰やあらん、いでその時こそは役目のがれ、心になかりし今日のおん説び、よろこび勇んで御出迎ひ、まづ／＼それまでは御老体随分ともにご大切、又お弟子がたも師の房おん大事に、爰しばしの一ツとき雨と情をあとに兩人は大内さして立ち帰へる。木屑もくずとなりて流れ行く、それは昔の菅相丞、誰れ、柵しほと成りてだにとどめん人は今も又無き世は同じ無実の流罪、哀れや法然上人にいよ／＼宣旨を下されて嵐の後のしじまにも似て今更に人々は、心々の無常観、善信房は上人の御膝近く進みより、かねて覚悟は致したれども、あなた様は土佐の國、又それがしは越後へと南と北の生別れ

同じ事なら師弟は親子、親子一処にいづこまでも御供致したうござりますると申上ぐれば、いやのう善信、北と南に師弟が別れ、唯一心に念仏のみのりを扱めて参れとある、此れぞ如来の御仕向け勇んでお行きやれ勇んで参る、然るに我れは元來孤獨親もなし、又子も持たねど、おことは三界繫縛の切るに切りうき絆を持つ、其の鉄索を美事に断切り恩愛輪廻の不破の閑無事に越し路へ出立おしやれ、我れは都に名残の念仏いざ方々と奥の方、静々立つて入り給ふ

さして入り玉ふ梅が香匂ふ法の庭、經読む鳥の音もすみていとど哀を催をせり。跡に善信唯ひとり、肝に答へし師の言葉、難行苦行はいとはねども色身の此の悩み、故郷の妻子が忘れらりよか、況してや二人は父恋ひし夫恋ひしと明け暮れに歎げき悲しみあこがれん、不愍のものやとかこちごと、思ひは同じ玉日の前、若君諸共一間よりまろびいで取り縫り、わつと計りに泣

き沈む。善信房打ち驚き、二人はどうして此の処へといぶかれば、玉日の前顔をあげ流罪の上使がおんいりと浅倉主膳のしらせに依り、来ごとは来ても上使の手前かくれて委細を聞きました。泣くも泣かれぬ越路渴今別れてはいつか又めぐり逢ふ瀬もしら雪に埋もれ給ふいたわしや。教への為めといひながらまだいたいけなこの和子が、片時側を離れても尋ね廻はりこの母を泣かすことかと泣く涙よそのみる目もあはれなり。子はさがしくも父の手にしつかと執り付きおろく声、越路とやらへ行くことをやめて下さりませ、行くなら鷹も母様も一緒に連れてと頑是なき幼な心はいと猶親の心の迷ひの絆、右と左に引き締められ五臓六腑もさかると思ひ、おゝ出来したく孝行なことよふいて呉れましたなア、オ、それでこそ皇太皇后の大進、藤原の有郷卿が孫ほどある。さりながらよふ聞きや此の父は松若丸と申せし四歳の時に父に別かれ、八歳にして母に死に別れそれを思へばそなたはまだやうく

五歳の今日までも父と母とが此の世にそろひ、起すもねかすも親と親、何ぼう果報な身であらふぞ。今父が越路へ行くは御法の為めの大事な御使ひそれをむつがり留むるのは孝行に似て不孝第一、こゝの処を聞き分けておとなしう留守居めされ、のう和子は賢い、もう泣きやるな。アイ、はて、そなたが泣けば母も泣く、エ、エ、玉日も泣きやるな、ハイ、和子も泣きやるなアイ、はてさて泣くなと口には立派、心には流石、恩愛別れの涙、妻は心もみだるゝ思ひ、泣顔みせじとくひしばり、そむくる顔をさし覗き、父様さへお泣きやるもの膺も悲しい、これ母様、父君やつて下さるなとせがむ子よりもせがまるゝ母はあるにもあらぬ思ひ彌陀の誓は罪咎も唯そのまゝに救はるゝ、大慈大悲と聞くものをさりとはつらき此の苦現、これも宿世の因果かと夫の膝に身を投げかけ悲歎の涙ぞあはれなる。一間のうちに声あつて、三界の繋縛を断つ彌陀の利劔今こそ形見に取らすぞと、開く一間の上段には、利

劔即是彌陀名号、一声唱念罪皆除と書きしるしたる師の墨蹟、前に上人、端座合掌

南無至心帰命礼西方阿彌陀仏

彌陀身色如金山相好光明照十方

唯有念仏蒙光撰当知本願最為強

六方如来舒舌証專稱名号至西方

到彼華開聞妙法十地願行自然彰

願共諸衆生 往生安樂國

安樂住蓮頓生菩提、南無阿彌陀佛／＼と回向のおん声、聞くよりもはつと善信、心の頓悟あら勿体なや尊とやと三拜九拜ありがたなみだ、いかに善信、彌陀名号の回向に依つて、安樂住蓮出離得脱、汝は此の利劔によつて、美事鉄索断ち切るかと仰せに善信飛びしさり、ハハアこれこそ真に利劔の名号、遠流の本尊、ハハアありがたやかたじけなや、これ／＼玉日、和子も承れ念佛申さんともがらは皆一樣に彌陀のおん子、南無阿彌陀仏と唱ふれば、即ちその中には妻も子も我

れも姿をあらはずぞや、何の悲歎、何の愛着、離別もなく生死もなし唯念仏おこたるなど、さとし給ひしその言の葉、後には親鸞聖人とて本願他力の開山と今の世までも諸人を救ひ玉ふぞありがたき。幼な心の房丸君、聞きわけましたその代り、利劔の名号、阿彌陀様御用がすんだら父上を早う帰して下されと紅葉の諸手合掌し南無阿彌陀仏もいぢらしし、籬の蔭の松虫鈴虫思はず御前にまろび出で、ノウ勿体なや恐ろしや、師匠を遠流の壘目に逢はせ、大事なお弟子を殺したは皆わたしたちふたりの悪業、鬼とも夜叉ともおそろしい我れと我身を刺殺し、罪のお詫びと思ふたは其も女の浅い心、よしない二人が恠ゆえにこんな大事を引き起し、さぞ方々は松虫が、いや鈴虫が憎くからう、こらへてたべとばかりにて、おがみまわりふしまろび、声を限りに泣き叫ぶ。上人慈眼をそゝがせたまひ、彌陀の利劔に愛念断ち切り、清淨無垢の白蓮紅蓮、なほも華開実相のすがたを極めて極楽の一蓮托生楽みにいよ

く念仏励まれよと情けの仰せ有難涙、並みゐる人もろとも濡れぬ袂はなかりけり。表の方に声あつて流人領送の時来れり、方々用意と呼ばわつて、怪しの張輿舁ぎ荷はせ、門内狹しと入り来り上人に打ち向ひ、土佐への流人法然房源空事藤井の元彦、越後への流人善信事藤井の善信、又った源空事、月輪関白のお執成、土佐は余りに道遠し、殿下知行の讃岐の国へ変更の旨仰せ出だされた、いで罪人の乗物へ、ハヤトクくとありければ、おん痛はしや上人は玉藻刈るてふ讃岐濁荒磯波の辺土まで送ると思へば人々は又今更の涙雨これが一世のわかれかと目も呉れ胸も張り裂くおもひ、涙をかくし善信房上人の前に謹んで、処こそはへだつれど心はおなじ謫居のおん供、師の御房には御健固にて追つつけ浄土で浄土とあといひさして吞み込む涙上人おん目に涙を浮べ因縁つきずば今生にて何ぞ再会なからんや、いづれも健固で念仏興行怠るな、方々さらばとおん上人いでさせ玉ふおんすがた、法蓮房は上

人の法衣の袖に執り縫り鋭邁、豪氣の御心でも争はれぬはお歳のうへ、八十路に入らん御老体で波風荒き讃岐鴻、どうお命がつゞきませう、何卒最期の御思案あつて、九死に一生を得る手段、念仏停止の御沙汰が願はしうござりますると、涙と共に申すにぞ、上人きつと見たまひて、血迷ふたか法蓮房、法然が興ずる浄土の教は濁世末代の衆生が出離の要道念仏の弘通は、人止めんとするも法更にとゞまるべからず、この法然流罪はおろか、たとへ死罪に行はるゝとも念仏申さであるべきかと、一念交ぜぬ大磐石、法蓮房感じ入り我れながら不覚なり、さりながら古来の高僧聖者には皆御遺蹟がござりまする、万一御入滅もござらばいづれを御遺蹟と定めませうやとありければ、上人詞をやわらげたまひ、遺蹟を一処に定むる要なし、念仏を唱ふ所は貴賤貧富の別ちなく、海人漁人苦屋まで皆法然が遺蹟ぞと、仰せはげにもありがたき勢至菩薩の御再来、実に現当のいき如来とみな一様に礼拝す、名残はつき

ず早やさらばと、立ちいでたまふおんすがた、「露の身はこゝかしこにてきゆるとも心は同じ、華のうてなぞ、」詠じたまひ、静々奥に召したまへば、善信房も乗り移つるいざとうちたつ門前俄に騒がしく、東下りの尻馬を又乗り直して西の空、一世の大事と蓮生熊谷大手を挙げ大音声、ヤア勢至菩薩の再来たる師の上人に仮名を附け、遠流などは存外千万、蓮生これにあるからは其奥やらぬと仁王立ち、素破、狼藉と磐固の役人、どつとかゝるを投げのけ蹴返し、ひとつぶて烈げしき手なみに磐固の役人後しざりする斗りなり。檢非違使、怒の声あららげ、ヤア不屈きなり蓮生房、上意に背くは反逆同然そこうぐくなくと身構へたり。ウハッハッアハア、、、這は小賢しの上意呼ばわり、南都や比叡の偽せ法師が嗾訴こはさの念仏停止、流罪の御沙汰が何の上意、いでや仏法王法を擁護のためのひといくさ、此の法衣此の頭陀を太刀、物具にぬぎかへて比叡山の三千坊、南都の七箇寺ども攻め附け攻め破

り悪僧残らず打ち滅ぼし念仏流布の世となさん、何とく／＼とのゝしつたり。上人興よりをりさせたまひ、如何に蓮生、汝遁世の素願を忘れ、閻浮に復る心の修羅太刀執る業が何の勇氣、一念彌陀仏称名の不退転の心こそまことの勇氣と知らざるか、我が讃岐への門人出は謫居にあらぬ彌陀の御使ひ、玉藻にあらで浦人を念仏の鎌に刈りとるため、心得たるか蓮生といとねんごろにさとしたまへば、蓮生手をつき頭を下げ、ハハア、現身三昧発得の生如来たる師のおことば、なでうそむかんさりながら鎧の袖の一振にも足らぬやからがそのために師匠がけふの御法難、おもへば丹治直実のきのふをすてて、墨染の法衣の袖が恨めしいと腸を断つ男泣き、阿彌陀が峰にこだまして山もくづるゝ如くなり檢非違使の声として、ヤア／＼者共はや時うつる、上人を疾く／＼興へ乗せまゐらせよと下知すれば、ハツと答へて雑人ばらいざさせたまへとありければ、女心は尙更に声なきほそる鈴虫が永き船路の浪風をいとわ

せ玉へとふし沈めば、どうぞ御無事の御帰洛をまつ虫の音もすがれゆく。父上なうと幼な子がしやくりあぐれば、玉日の前、必ずおん顔わすれぬやう、好うみておきやれとさし覗き、みやる目と目に千万無量、胸は湧き立つ血の涙、早や昇ぎだす越路と讃岐、別れ／＼に行く道の、並木の松や深みどり忽ち変はる六金色虚空に花ふり音楽きこえ、伽陵頻伽の鳥の声みこしの前後にあらはれて、空よりみおくる天人菩薩みや椀化のおん守、やがて神託、岩清水、雲井のうへより流罪の御赦免そのとしもはやくれつかた、法の戦に勝尾寺念仏再び時めきて、二世安楽の浄土門、いよ／＼ひらく華頂山、三世に響く三味線のいとも尊とき知恩院、西と東の本願寺、二十四畳に跡とめて、代々の教の源は是こそ二十五靈場、第一番は美作や久米の稻岡誕生寺、流れをともにいざくまん

をはり

史料と抄録

玉葉

(文治五年) 八月一日、戊子、今日請法然房之聖人、談法文語及往生業。

八月七日、甲午、入夜向九条堂、先是洗頭自明且可

始恒例念仏之故也

八月八日、乙未、辰刻、法然聖人來授戒、其後始念仏。

(建久元年) 七月廿一日、甲戌、今日向九条、自明日可始恒例念仏之故也

七月廿三日、乙亥、午刻、先請法然坊源空上人受戒、

次始恒例念仏。

(建久二年) 七月廿八日、甲戌、早且向九条堂、為

受戒也、請源空上人受之。

八月十九日、乙未、早且、女房相具、向九条堂、女房自今日、始如法誦誦之加行之故也、余自廿一日、可始恒例每年念仏之故也、

八月廿一日、丁酉、懺法三時了之後、請法然房源空上人、受戒了、入夜、又誦懺法、即余始念仏、女房始誦誦也、其法如法經行儀也、又女房一人為同行、師房

九月廿三日、己巳、此日、中宮依不例、退出里亭、重日雖可憚、事火急之故也

九月廿九日、乙亥、此日、請法然房上人源空、中宮有御受戒事、先例如此上人、強不參貫所之由、有傾軋云々、是不知案内也、受戒者、是事不聊爾、以伝受人可為師、而近代、名僧等、一切不知戒律事、禅仁、忠尋等之時まては、名僧等、皆好授戒、自其以後都無此事、近代上人皆学此道、又有効驗、仍不顧傍難、所請用也

十月六日、辛巳、今日又有受戒事、法然房

(建久三年) 八月七日、入_レ夜向_二九条堂、自_二明日_一為_レ修_二恒例念仏_一也

明 月 記

八月八日、早旦洗髮、午刻、請_二源空上人_一受戒、即始_二念仏_一

(建久八年) 三月廿日、甲午、余今日加_二灸点_一、一所一壯灸始了、醫師時成、今日、請_二法然房_一受戒

(正治二年) 九月廿七日、庚辰、自_二夜半_一、女房病惱、及_二危急_一云々、仍修_二諷誦_一

九月卅日、癸未、女房、今日殊大事發、仍請_二法然房_一、令_二授戒_一、有_二其驗_一、尤可_レ貴々々、又渡_二邪氣_一之後、聊落居、成_二円祈_レ之

十月一日、甲申、及_レ晚、女房温氣散畢、為_レ悅、今日猶受戒

十月二日、乙酉、今日、又更發、太以重惱、今日猶受戒

(正治二年) 九月三十日、天陰雨瀟、夜天晴、鷄鳴自六条殿退下、未一寝人々周章、北政所又重令發給、火急之由被申、仍驚駭參上、但別事不聞出、遲明女院渡御、參上退下、往反窮屈、請_二法然房_一有御戒云々、又以成_二円僧都護身_一

(建仁元年) 十月廿七日、天晴、已時許參_二口殿_一、去十七日女院御出家云々、於此御堂有此事、法然房參勤云々、但殿下頻令難渡申給、不被御髮云々

(建仁二年) 一月廿八日、天晴、入_二道殿渡御_一、午時許隆信朝臣使者來云、夜前九条殿御出家、(於法性寺)幽閑及歟者、入_二道殿還御之後_一、申始許參入_二法性寺月輪殿_一、(新御)夜前

御仏事等訖、子時許御此御堂、法然房參入、被_二遂御本意_一、(奈良)法印率_二剃給_一云々

(建永元年) 十一月廿七日、天晴、後聞、(大臣實念)大臣殿已令遂給、法然房戒師、法印率_二剃、(大臣實念)實信取被物、盛親取布

施絹、納言被取野劔衣帽直衣、剃髮之後、著染衣受戒給

(承元元)

(建永二年) 正月廿四日、天晴、陰雨間降、巳時出門

參水無瀨殿、出御馬場殿訖後參着、頭弁出京、專修念

仏之誓停止事重可宜下云々、去比聊有事故云々、其事

已非輕、又不知子細、不及染筆

二月九日、天晴、近日只一向專修之沙汰、被擲取被拷

問云々、非筆端之所及、

二月十日、天晴、任大臣云々、巳時參上、申始出御訖

退下、例笠懸云々、新宿所寒風無術、仍參御所、入臥

已講壇所、今朝兼時朝臣為入道殿御使參、相具專修僧

云々、專非可被申事歟、骨鯁之御本性猶以如此

四月十七日、入道殿下御事、近々太不穩、背年来之御

存知之旨、可悲可恥

(安貞元)

(嘉祿三年) 六月廿七日、天晴、已後忽陰、大風起、

雲飛揚、終夜大風、雨間落、後聞、忠行卿一条高倉群

盜襲來、人多而不入云々、夜深早凉成、始着有綿物、

山門僧又依妨專修、築法然房之墓、破壞其墓堂、以濫
僧等令壞取之間、自武家制止、不知此欲陵礫山所司等
之間、訴訟又嗽々云々、近日謀反惡徒蜂起之最中、時
節負同心之疑歟、甚無機關、

三 長 記

(建久六年) 七月十三日、晴、御戒自今日印西上人參

仕云々、源空湛叢三上人各五十ケ日被結番、至御産期

可參仕云々

(元久三年) 二月十四日、乙丑、陰、新宰相送御教書

院宣曰、法々安楽兩人可召出、又高野惡僧覺幽同可被

配流者、件法々安楽兩人源空上人一弟也、安楽房者勸

進諸人、法々房者立一念往生義、仍可被配流此兩人之

由、山階寺衆徒重訴申之、仍及此沙汰歟、於其操行者

縱難為不善、所勸所執只今仏往生之義也、依此事被行

罪科、可痛哭々々々、當此時奉行此事、先世罪業之令

然歟、但山階兩衆徒殊成此訴訟、若依背神慮春日大明

神有咎歟、趨々所洩只此一事許也、可召出之由即仰造

左佐親房許了、別当未補、此間左佐行序事也

二月十六日、丁卯、晴、參殿下、(九條宮經)以有經申条々、次有

召、念仏宗口宣間事被仰合

二月十八日、己巳、晴、入夜雨降、參殿下、以兼時申条々、次依召參御前、念仏宗口宣事進之、大略神妙之

由有仰、少々依御計又改之

二月十九日、庚午、謁解脫房、念仏宗口宣間事示子細、

衆徒難不可然之由示之、但寛宥背訴訟本意歟

二月廿日、辛未、參殿下、以有經申条々、念仏宗事與

福寺衆徒猶訴申、先度宣下之狀有訴訟之本意、偏為予

所為之由、入僻韻、今度五師三綱直可參殿下之由、衆

徒仰舍云々、所為自由也、儘可付氏院別當之由、有殿

下仰云々、但不及列參、兩三人參云々、衆徒狼藉尤以

奇恠也、依召參御前、申承雜事、入院退出

二月廿一日、壬申、晴、山階寺三綱二人來示衆徒懇望之

子細、入僻韻之由仰子細了、已刻許參殿下、山階寺五

三 長記

師四人三綱六人為衆徒使參、念仏宗口宣依宥事、不觸

予直參長者殿可申之由、衆徒示之、仍直參向、(西)殿下仰

曰、以長兼不申上者不可聞食、罷歸以此旨可觸衆徒歟

乍候京以使可示遣歟、於此条者、使五師等可相計、直

申上之条不当也、被仰此子細之間、予所參會也、使者

曰、相觸可申上之由被仰下、早可申上也、予答曰、衆

徒成鬱不可觸之由結構、何可申上哉、如被仰下、早示

此子細於衆徒、可申上之由、衆徒令申者、可申上也、

以使者計許一切不可申上、抑身過怠何事哉、職事下宜

旨之習、一言一字非御定不載之、而加私詞之由衆徒成

邪推、補藏人頭已五代繼踵、重代奉行之家爭不辨此程

事哉、衆徒申狀如不辨東西、山寺法師之所言尤左道也、

訴訟不_(經)尽者、被仰下之趣鬱訴、(判力)殘可被改宣下之趣之由

言上可定歟、使者大略閉口、但使者曰、衆徒依為氏院

別當、一旦愁申許歟、然而如此被仰下之上、不申沙汰

者、猶可申付之由、定不承伏歟、只可及參洛也、已朝

家大事也、於所鬱者其理雖可然、只可申上也、仍申此

子細、仰曰、長兼所鑿申其理至極、然而隨彼相計申上
 又何事有哉、早可申上、何聞申狀等、(弱)五師申云、源空
 仏法怨敵也、子細度々言上了、其身、并弟子安樂、成
 覺、此弟子未
知名字住蓮法本等、可被行罪科、源空不謗諸教
 之由習進起請云々、其後於所々猶不止謗訕、已奏事不
 實、違勅者也、尤可被行罪科、當時披露宣下之狀中、
 源空上人由被載之、上人云々兼智德者也、源空者僻見
 不善者也、起門弟之淺智、背源空本懷、此句又似無源
 空過怠、又漫莫加制罰於誘論之輩(之)上句、被禁偏執之由
 雖見、不可罰之由被載之間、念仏宗之輩各稱雄、彌(感)
 不善之心、又猶念仏宗々字、專修名号、可被停止之由
 可被仰下之、其詞雖繁、大略不過之、口宣狀衆徒了見
 僻韻也、被仰下之趣委且仰舍了、所詮以本解詞可被載
 宜旨之由、所申請也、又申上階僧房造管懈怠之子細、
 予參御前、申条々子細、殿下仰云、此旨可有御奏聞、
 以仏法興立悉成此訴訟、仍可有御沙汰之由、有御気色
 歟、於宣下狀者、大略雖不背訴訟、吹毛之難也、然而

重申狀之趣可有御奏聞、僧房造管事、以申狀之趣被問
 国司、可及改任沙汰者、即令參院給

二日廿二日、癸酉、申刻許任人沙汰了、殿下令退出給
 予又候御供、暫候公卿座、召予、參進、山階寺衆徒訴
 事、被仰勅定之趣、先是衆徒使五師三綱等所參也、予
 仰衆徒使曰、先度宣下之狀更不背衆徒奏狀之趣、如汗
 綸旨雖難被改、以本解条々可被載之由申歟、都此訴訟
 已為仏法興隆冒上、仍難緊止、且又先宣旨未施行賭国
 以本解条々有御計、重可被改也、依訴申、雖及此沙汰
 彼輩又所劾念仏也、依此科被加刑罰之条、又雖可背物
 議、一弟中安樂、法本、於此兩人者、偏執過傍輩由有
 其聞、可被行罪科也、衆徒雖訴訟、如申必無裁許、而
 起自仏法興隆之志、仍大略任申請可有計御沙汰也、重
 御計上者、又不可申子細、使五師等有悦送、(感)可披露此
 旨之由令申

二月廿四日、乙亥、晴、參殿下、以長俊朝臣申条々、
 殿下渡御中山殿、出御之次、依召參御前、念仏宣旨曲

水宴聞事有仰

二月廿五日、丙子、晴、參殿下、以有經申奏聞條々、

各任御定可致沙汰之由有仰、次依召參御前、曲水文人

事有評定、被注下之、念仏口宣事、猶有申旨、相計可

被改之由有仰

二月卅日、辛巳、晴、今朝源空上人一弟子二人、為弘

通念仏、依謗諸仏諸教、被勘罪名、宣下中宮權大夫了

其狀如此

元久三年二月卅日 宣旨

沙門行空忽立一念往生之義、故勸十戒(教力)毀化之業、恣

謗余仏、願進其念仏行、沙門遊西稱專修毀破余教、

任雅執退妨衆善、宣令明法博士勘申件二人罪名

藏人頭左中弁藤原長兼奉

件兩人、遊西者安桑房也、行空者法本房也、於行空者

依殊不当、源空上人放一弟了

(建永元年)五月廿七日、丁未、午刻許先欲(近衛家實)參殿下之

処、於途中、已令參内給之由、雜色下人告之、仍廻贖

參内、即有御參、公卿未參集、暫令候東向御所給、召
予、參進、申雜事等

念仏宗宣下事

仰曰、以前沙汰趣委不知之、但任件沙汰趣可被仰

下敷之由可奏

六月十三日、癸亥、入夜甚雨、朝間依召參法性寺入道

殿、被召入簾中、任大将并宰相中将殿御辭退聞事等被

仰合、又念仏宗事条々被仰子細、良久祇候

六月十六日、丙寅、申刻可參之由、去夜有殿下仰、仍

申斜參院、殿下令參給、被尋仰念仏宗聞事、以前沙汰

之趣委申了

六月十九日 己巳、專修念仏宣旨仰詞事、可被計申之

由、以御教書仰人々、春宮大夫、堀川大納言、藤
新阿大納言、左大弁等也其狀云

專修念仏事、依偏執之勸進、可諸教衰微之由、興福寺

衆徒所經上奏之也、所申為仏法也、不可有無裁許、仍

任解狀之旨可被宣下也、仰詞如此、条々以此趣被仰下

如何、委可令計申給、院宣狀也、各注仰詞、相副遣之、

六月廿一日、辛未、晴、及夕雷雨、但微也、今日念仏宗宣下事、為仰合人々向所々、先參中山入道（案實公、月輪）闕白殿、

以定佐申子細、以中將兼季朝臣被仰御返事、次向內府

許、被出逢、同示子細、次向入道左府許、（三條實房）數刻閑談、

除目執筆等事談之、次參（家實公）撰政殿、以佐清申条々雜事、

次參東宮傳許、示同子細、次向右府許、（禮忠公）所勞無術、不

能申子細之由被答、及深更帰畢、窮屈不知為方、

向人々許仰詞

專修念仏事、源空上人門弟等一向勸進之間、還誹謗

諸宗、於余行者非出離要之由、遍称之、因茲仏法可

及衰微之由、興福寺衆徒訴申之、仍可被宣下也、其

趣如此（以仰詞案令廻見也）若依此宣下、念仏又令衰微者、已罪

業也、可被計申者

人々申狀

入道闕白殿令申給云、此事、不見衆徒奏狀、以前沙

汰之趣又不承及、輒難計申歟、但先以衆徒奏狀、一

且可被問勸進上人、以彼陳狀、又可被問興福寺歟、

然而此沙汰於今者勿論、可被宣下者、大略不可過此

趣歟、但辺鄙之輩、委不口見仰詞之趣、称念仏停止

宣旨、若雖一人醜信心者、已罪業也、此狀尤可有思

慮、遁世之身議奏、事体有憚、可依人々申狀歟、念

仏之咎、及此程沙汰之条、勸進之輩偏執、誠不足言

事歟

入道左府被申云、偏執之勸進、誠有過分之聞、被仰

下之趣、已委細也、守此狀者、何可及念仏衰微哉、

以此趣被仰下、何事有哉

東宮傳被申云、偏執之聞雖遍、年来薰修之行、或驕

其志、或不姿、可依人意、強不可一撥歟、所劬又強

非罪業、衆徒雖不可及上奏、殊訴申之上、可被宣下

者、不可過此趣歟、但人以可称念停止宣旨由歟、依

之若信心輩雖一人、驕其志者、罪業也、此条能々可

有用心歟

內府被申云、仰詞之趣不可過之、衆徒訴仏可有裁許

者、被宣下、何事有哉

六月廿六日、丙子、参院、御所中間空退出、次参殿下、以季宗申条々

北野廻廊修□

念仏宗宣下

(以下欠文)

六月廿八日、戊寅、晴、参院、以辨内侍奏両条、北野廻廊功事可勘功程、専修念仏人々申状事、留御所了、逐可被仰左右、次条々欲奏之处、白地御幸、仍退出
八月五日、甲寅山階寺三綱為衆徒使来、念仏宗宣旨事早可申沙汰、予答云、被仰下之可致沙汰、故殿御時為氏院别当、而不触被訴申歟、而今被相触之条如何、彼無重答旨、此訴訟以不被甘心事也

皇年代略記

承元(天力)二年二十八、一向専修源空已下科坐 ●

皇代 曆

承元(天力)二年二月廿八日、僧源空配流土佐国、住蓮安桑等

皇年代略記等

死罪、是依一向専修停止也

仁和寺御日次記

(建曆二年) 正月廿五日、癸酉、源空上人入滅

立川寺年代記

(承元元年) 三月、法然上人佐州流

(承元三年) 八月、法然帰洛

(建曆二年) 正月、法然往生

皇帝紀抄

(建永二年) 二月十八日、源空上人、号法然房配流土佐

国、依専修念仏事也、近日件門弟等、充満世間、寄事於念仏、密通貴賤并人妻可然之人々女、不_(前カ)拘_レ制法日新之間、搦_レ取上人等、或被_レ切_レ羅、或被_レ禁_レ其身、女人等又有_二沙汰_一、且専修念仏子細、諸宗殊戀中之故也

百 鍊 抄

(安貞元)
(嘉祿三年) 六月廿四日、山門所司已下群衆大谷辺、

破却法然上人墓所、是專修念仏事、近日有山門之訴、

於彼墳墓興盛之故云々、但於遺骨者、門弟等偷堀

出渡他所云々

七月五日、專修念仏者配流官符請印、隆寛律師還俗名

配陸奥後日被改空阿彌陀仏改名原薩摩。成覚改名枝重

砲岐島

七箇條制誠

(二尊院文卷、本文省略し署名者のみを出す)

元久元年十一月七日

沙門 源空(花押)

信空 感聖 尊西 証空 源智 行西

聖蓮 見仏 導豆 導西十人寂西 宗慶

西縁 親蓮 幸西 住蓮 西意 仏心

源蓮 源雲廿 欣蓮 生阿彌陀仏 欣西

西縁 安照 如進 導空 昌西 導也

遊西卅 義蓮 安蓮 導源 証阿彌陀仏

念西 行西 行西 尊淨 焔西 行空四十

導感 西観 覚成 禅忍 学西 支曜

澄西 大阿 西住 実光五十覚妙 西入

円智 導衆 尊仏 蓮恵 源海 蓮恵

安西 教芳六十念西 安西 詣西 神円

弁西 空仁 示蓮 念生 尊忍 参西七十

仰番 忍西 好阿彌陀仏 鏡西 昌西

惟西 好西 禅寂 戒心 了西

同八日追加人々、僧尊蓮八十僧仙雲 僧顯願

僧仏真 僧西尊 僧良信 僧綽空 僧善蓮

蓮生 度阿彌陀仏 阿日九十静西 成願

自阿彌陀仏 覚信 念空 正蓮 向西

親西 実蓮 観然百人蓮智 実念 長西

信西 寂明 行西 恵忍 円空

観阿彌陀仏 蓮慶百人浄阿彌陀仏 観尊

具慶 蓮慶 蓮仏 進西 正念 持乘

覺弁 蓮定百二十人 導匠 深心 往西
 觀導 一円 実蓮 白毫 正観 有西
 上信百卅人 定阿彌陀仏 念仏 観阿彌陀仏
 蓮仁 蓮西 徳阿彌陀仏 自阿彌陀仏
 持阿彌陀仏 西仏 空阿彌陀仏百四十人
 九日 覺勝 西仏 慶俊 信西 進西
 源也 雲西 実念 心光 西源百五十人
 応念 惟阿 源西 行願 信恵 忍西
 寂困 安西 仏心 心速百六十人 観源
 聖西 蓮寂 智円 参西 永尊 空寂
 願蓮 証西 西念百七十人 戒蓮 専念
 法阿彌陀仏 西阿 西法 西念 西忍
 幸西 成蓮 実念百八十人 西教 僧慶宴
 沙門感喜 有実 淨心 立西 唯阿彌陀仏
 行西 向西

愚管抄

愚管抄

又建永の年、法然房と云上人ありき。まちかく京中を
 すみかにて、念仏宗を立て専宗念仏と号して、たゞあ
 みだ仏とばかり申べき也、それならぬこと顕密のつと
 めはなせそと云事を云いだして、不可思議の愚癡無智
 の尼入道によるこばれて、この事のたゞ繁昌に世には
 んじやうしてつよくをこりつゝ、その中に安楽房とて
 秦經入道がもとにありける侍の入道して専修の行人と
 て、又住蓮とつがいて、六時礼讃は善導和上の行なり
 とて、これをたてゝ、尼どもに帰依渴仰せらるゝ者出
 きにけり。それらがあまりさへ云はやりて、この行者
 に成ぬれば女犯をこのむも魚鳥を食も、阿みだ仏はず
 こしもとがめ玉はず。一向専修にいりて念仏ばかりを
 信じつれば、一定最後にむかへ玉ふぞと云て、京田舎
 さながらこのやうになりける程に、院の小御所の女房
 仁和寺の御むろの御母まじりにこれを信じて、みそか
 に安楽など云ものよびよせて、このやうとかせてきか
 んとしければ、又ぐして行向どうれいたち出きなんど

して、夜るさへとどめなどする事出きたりけり。とかく云ばかりなくて、終に安楽住蓮頸きられにけり。法然上人がして京の中にあるまじにてをはれにけり。かゝる事もかやうに御沙汰のあるに、すこしかゝりてひかへらるゝことこそみゆれ。されど法然はあまり方人なくて、ゆるされて終に大谷と云東山にて入滅してけり。それも往生／＼と云なして人あつまりけれど、さるたしかなる事もなし。臨終行儀も増賀上人などのやうにはいわるゝ事もなし。かゝる事もありしかば、これは昨今までしりびきをして、猶その魚鳥女犯の専修は大方多とどめられぬにや。山の大衆をこりて、空あみだ仏が念仏をいちらさんとて、にげまどはせなすめり。大方東大寺の俊乗房は、阿彌陀の化身と云と出て、わが身の名をば南無阿彌陀仏と名のりて、万の人に上一字をきて、空あみだ仏、法あみだ仏など云名を付けるを、誠にやがて我名にしたる尼法師をゝかり。はてに法然が弟子とてかゝる事どもし出たる

誠に念仏法の滅相うたがいなし。是を心うるにも、魔には順魔逆魔と云。この順魔のかなしうかよふの事どもをしふる也。彌陀一教利物偏増のまことならん世には、罪障まことに消て極楽へまいる人も有べし。まだしきに真言止観さかりにもありぬべき時、順魔の教にしたがいて得脱する人はよもあらじ。悲しき事どもなり

さて九条殿(教皇)は、念仏の事を法然上人すゝめ申しをば信じて、それを戒師にて出家などせられにしかば、仲国が妻の事あさましがり、法然が事などなげきて、その建永二年の四月五日、久く病にねて起居も心になはず、臨終はよくてうせにけり

念佛無間地獄鈔

日本国には法然上人浄土宗の高祖なり。十七歳にして一切經を習ひ極め天台六十卷に渡り、八宗を兼学して一代聖教の大意を得たりとのしり、天下無雙の智者

山門第一の学匠なり云云。然るに天魔や其身に入り
けん、広学多聞の智慧も空しく、諸宗の頂上たる天台
宗を打捨て、八宗の外なる念仏者の法師と成りにけり。
大臣、公卿の身を捨て、民百姓と成るが如し。選
撰集と申す文を作りて、一代五時の聖教を難破し、念
仏往生の一門を立てたり。仏説法滅尺経に云く、「五濁
惡世魔道興盛、魔作沙門、我道壞乱、惡人軋多如
海中沙、善人甚少、若一人若二人」云云。即ち法然房
是なりと、山門の状に書かれたり。我が浄土宗の専修
の一行をば五種の正行と定め、樞実、顕密の諸大乘を
ば五種の雜行と簡びて、浄土門の正行をば善導の如く
決定往生と勧めたり。觀經等の浄土の三部經の外、一
代顕密の諸大乘經、大般若經を始めと爲して終り法常
住經になるまで、貞元の録に載す所六百三十七部、二
千八百八十三卷は皆是千中無一の徒物なり。永く得道
あるべからず。雜行聖道門をば門を閉ぢよ、之を抛て
之を閣け、之を捨て、浄土門に入るべしと勧めたり。

一天の貴賤首を傾け四浦の道俗掌を合せ、或は勢至の
化身と号し、或は善導の再誕なりと仰ぎ、一天四海に
なびかぬ木草なし。智慧日月の如く世間を照して肩を
竝ぶる人なし。名徳は一天に充ちて善導にも超へ、曇
鸞、道綽にも勝れたり。貴賤上下皆選撰集を以て仏法
の明鏡なりと思ひ、道俗、男女悉く法然房を以て生身
の彌陀と仰ぐ。然りと雖も恭敬、供養する者は愚癡迷
惑の在俗の人、帰依渴仰する人は無智放逸の邪見の輩
なり。権者に於ては之を用ひず、賢哲又之に随ふこと
なし。然る間、斗賀の尾の明慧房は天下無雙の智人、
広学多聞の明匠なり。摧邪輪三卷を造りて選撰の邪義
を破し、三井寺の長吏実胤大僧正は希代の学者、名譽
の才人なり。浄土決疑集三卷を作りて専修の惡行を難
じ、比叡山の住侶仏頂房の隆真法橋は天下無雙の学匠
山門探題の棟梁なり。彈選撰上下を造つて法然房が邪
義を責む。加之、南都、山門、三井より度度奏聞を経
て法然が選撰の邪義、亡國の基たるの旨訴へ申すに依

つて、人王八十三氏土御門院の御宇、承元元年二月上旬に専修念仏の張本たる安乘、住蓮等を捕縛へ、忽ちに頭を刎られ畢んぬ。法然房源空は遺流の重科に沈み畢んぬ。其時摂政左大臣家実と申すは近衛殿の御事なり。此事は皇代記に見えたり。誰か之を疑はん。加之法然房死去の後も又重ねて山門より訴へ申すに依つて人生八十五代後堀河院の御宇、嘉祿三年、京都六箇所の本所より、法然房が選択集並びに印版を賣め出して大講堂の庭に取り上げて三千の大衆会合して、三世の仏恩を報じ率るなりとて之を焼失せしめ、法然房の墓所をば大神人に仰付けて、之を掘出して鴨河に流され畢んぬ。宣旨、院宣、関白殿の御教書を五畿七道に成下されて、六十六箇国に念仏の行者一日片時も之を置くべからず、対馬の島に追遣るべきの旨諸国の国司に仰付られ畢んぬ。此等の次第両六波羅の注進狀、関東相摸守の請文等明鏡なる者なり

教行信證後序

竊以、聖道諸教行証久廢、淨土真宗証道今盛、然諸寺積門、昏レ教令、不知真返門戶、洛都儒林迷レ行令、無レ辨ニ邪正道路、斯以、興福寺学徒、奏ニ達太上天皇号後鳥羽院諱尊成今上、号土御門院諱爲仁聖曆、承元丁卯歲、仲春上旬之候、主上臣下、背レ法違レ義、成レ念結レ怨、因レ茲、真宗興隆、大祖源空法師、并門徒數輩、不レ考ニ罪科、狠、坐ニ死罪、或改ニ僧儀、賜ニ姓名、処ニ違流、予其一也、爾者已非僧非俗、是故以禿字ニ爲レ姓、空師并弟子等、坐ニ諸方辺州、經ニ五年居諸、皇帝佐渡院諱守成聖代、建曆辛未歲、子月中旬第七日、蒙ニ勅免、入浴已後、空居ニ洛陽東山西麓、鳥部野北辺、大谷、同ニ二年壬申寅月下旬第五日、午時入滅、奇瑞不レ可ニ称計、見ニ別伝、然愚禿禿、建仁辛酉曆、棄ニ雜行、令、帰ニ本願、元久乙丑歲、蒙ニ恩恕、令、書ニ選撰、同年初夏中旬第四日、選撰本願念仏集内題、字、并南無阿

彌陀仏往生之業念仏為本、与三釈綽空字、以三空真筆一
令レ書レ之、同日、空真影申預、奉三函画、同二年閏
七月下旬第九日、真影銘以三真筆、令レ書三南無阿彌陀
仏、与三若我成仏十方衆生称我名号下至十声若不生者
不取正覚彼仏今現在成仏当知本誓重願不虛衆生称念必
得往生之真文、又依三夢告、改三綽空字、同日、以三御
筆一令レ書三名之字一畢、本師聖人、今年七旬三御歳也
選撰本願念仏集者、依三禪定博陸、月輪殿兼夷、法名円照
之教命一所レ令三撰集一也、真宗簡要、念仏奥義、撰三在
于斯一、見者易レ論、誠是希有最勝之華文、無上甚深之
宝典也、涉レ年涉レ日、蒙三其教誨一之人雖三千万一、云レ親
云レ疎、獲三此見写一之徒甚以難、兩既書三写製作、図三
画真影、是尊念正業之徳也、是決定往生之徴也、仍抑三
悲喜之涙一註三由来之縁一

撰 邪 輪

爰近代有ニ上人、作ニ一卷書、名曰ニ選撰本願念仏集、

撰 邪 輪

迷ニ惑於經論、欺ニ誑乎諸人、雖以ニ往生行一為「宗」、反
妨ニ碍往生行一矣、高弁年来於ニ聖人一深懷ニ仰信、以下為
所レ聞種種邪見在家男女等假ニ上人高名一而妄説、未
出ニ一言一誹謗上人、設雖レ聞ニ他人之談説、未ニ必信ニ
用之、然近日披三閱此選撰集、悲嘆甚深、聞レ名之始喜
礼ニ乎上人妙釈、披レ卷之今恨レ讀乎念仏真宗、今詳知
在家出家千万門流所起種種邪見皆起自ニ此書一、至ニ上
人入滅之頃、興行倍盛、專鑲ニ于板印一、以為ニ後代重宝一、
永流ニ於一門一而敬重如ニ仏經一、繪以ニ為往生宗之肝要念
仏者之秘府、依レ之適有ニ難者一、負ニ過於難一乎念仏、希
值ニ信人一、擬徳於信乎往生、遂使一昧法雨分ニ甘鹹
之味一和合衆僧成ニ不同之失、何其悲乎、仍於ニ或処一講
經說法次出ニ一難一破ニ彼書一、就ニ文義一有ニ多種訛謬、且
置レ之唯出ニ大邪見過一、邪説亦多種、且出ニ一難一、但有
人云、此書更非ニ上人製作一、是門弟所撰也云云、然者
彼集奥文云、而今不レ圖蒙レ仰、辭謝無レ地、仍今慙集ニ
念仏要義、唯願ニ命旨一不レ顧ニ不敏一、是即無慙愧之甚

也、庶幾一經高覽之後、埋于壁底、莫遺窓前、恐為不令破法之人墮於惡道也。上、既有此文、須對諸人問作者名字也、有人云、上人雖有深智、不善文章、仍無自製之書記云云、設上人自雖不執筆、若印可之者、更不_レ免其過、若上人不_レ印可者、何故造滅後、鑿于板印、以為龜鏡乎、若又雖非上人并門弟所選、彼一門有_レ受_レ學此書、尙不_レ免其過也、若上人都無_レ知者、唯破_レ此邪書也、更不_レ可_レ簡別其作者也

古今著聞集

源空上人は一向專修の人なり。たゞ人にはおはせざりけり。彌陀如来の化身とも申。勢至等の垂跡とも申すとぞ。其証あきらかなり。諸宗の奥旨さぐりきはめずといふ事なし。暗夜に經論を見給ひて、燈明なけれど光明家内をてらす事昼のごとし。久安六年生年十八にしてはじめて黒谷の上人の禪室に入て、難解難入の

文を聞て易往易行の道におもむく。まのあたり宮殿宮樹を見、化仏等をげんじ奉る。元久二年四月一日、月(發見)輪殿へ參じて退出の時、南庭をとをりけるに頭光げんじたりければ、禪閣地におりて恭敬礼拝し給ひけり。建曆三年正月廿五日遷化。春秋八十 往生の瑞相一にあらざ。いまだ墓所を点ぜざるに、兩三人の夢に、其所にあたりて天童行道し蓮花開敷けり。三四年よりこのかた、老病身にまとひて耳目蒙昧なりけるが、往生の期ちがづきては、ことに目も見え耳もきこえにけり。みづから上品極楽は我本国也。定てつゝに往生すべし、觀音勢至等の聖衆來現して眼前におはします。我往生はもろくの衆生のため也との給ひて、廿四日の酉のときより、高声念仏鉢をせめて聞なし。廿五日平正に光明遍照の四句の文をとなへて、慈覺大師の九条の袈裟を着して、頭北面西にしてねぶるがごとくにしてをはり給ひにけり。念仏音声とゞまりて後も、なを唇舌をうごかせる事十余反ばかり也。順次の往生うたがひ

なきもの也

三井寺の公胤僧正、結縁のために四十九日の導師を望みて、両界曼陀羅並に阿彌陀の像を供養してけり。其後五ヶ年を経て、建保四年四月廿六日の夜、僧正の夢に見侍りける。上人告云

往生之業中 一日六時節 一心不乱念 功德最第一

六時称名者 往生必決定 雑善不決定 高修定善業

源空初孝養 公胤能説法 感喜不可尽 臨終先迎接

源空本地身 大勢至菩薩 衆生為化故 来此界度者

かく示してさり給ひにけり、勢至菩薩の化身といふ事これより符合する所なり

沙 石 集

大原の僧正、頭真座主、四十八日の間、往生要集の談議し給ふ事有りけり。法然房の上人俊乗房の上人など、談議の衆にて、大原の上人達あまた座につらなり如法の後世の学問の談議なりけり。四十八日功をへて

人々退散しけるに、法然房俊乗房両上人ばかりはしちかく居て、法然房申されけるは、この程の談議の所詮いかか御心得候と、俊乗房に申されければ、秦太瓶一なりとも、執心とまらん物はすつべしとこそ心得候へとかたらる。僧正御簾のうちにきき給ひて、上人たち何事を語り給ふぞと仰せられければ、俊乗房かくこそ申し候へと、法然房申されければ、御衣の袖に御涙を、はらくとこぼして、このほどの談議に、これ程にめづらしき事承らずとて、随喜し給ひけるよし、或人語り侍りき

平 家 物 語

(平重衡)
三位中将土肥次郎を召て、「出家をせばやと思ふは如何あるべき」と宣へば、実平此由を九郎御曹司に申す。院の御所へ奏聞せられたりければ、「頼朝に見せて後こそ、ともかうも計らはめ、唯今は争か許すべき。」と仰ければ此由を申す。「さらば年来契りたりし聖に、

今一度対面して、後生の事を申談せばやと思ふはいかゞすべき」と宜へば、「聖をば誰と申候やらん」「黒谷の法然房と申人也」「さては苦しい候まじ」とて許し奉る。中将斜ならず悦で、聖を請じ奉て、泣々申されけるは「今度生ながら捕れて候けるは、再上人の見参に罷入べきで候けり。さても重衡が後生いかゞ候べき。身の身にて候し程は、出仕に紛れ、政務にはたされ、橋慢の心のみ深して却て当来の昇沈を願ず。況や運尽き世乱てより以来は、こゝに戦ひ、かしこに争ひ、人を滅し身を助らんと思ふ悪心のみ遮て、善心はかつて起らず。就中に南都炎上の事は、王命といひ武命といひ、君に仕へ世に随ふ法遁がたくして、衆徒の悪行を静めんが為に罷向て候し程に、不慮の伽藍の滅亡に及候し事、力及ばぬ次第にて候へども、時の大將軍にて候ひし上は、責め一人に帰すとかや申候なれば、重衡一人が罪業にこそなり候ぬらめと覚え候。且はか様に人しれずかれこれ恥をさらし候もしかしなが

ら其報とのみこそ思知れて候へ。今は首を剃り戒を執りなんどして偏に仏道修行したう候へども、かゝる身に罷成て候へば、心に心をまませ候はず。今日明日とも知らぬ身の行末にて候へば、如何なる行を修しても一業助かるべしとも覚えぬこそ口惜う候へ。倩々一生の化行を思ふに、罪業は須彌よりも高く、善業は微塵ばかりも蓄へなし。かくて空く命終なば、火血刀の苦果、致て疑なし。願くは上人慈悲を發し、憐を垂れてかゝる悪人の、助りぬべき方法候はば、示給へ」其時上人涙に咽て、暫は物も宜はず。良久しう有て「誠に受難き人身を受ながら、空しう三途に帰り給はん事、悲しんでも猶余あり。然るを今穢土を厭ひ、淨土を願はんに、悪心を捨て、善心を發しましません事、三世の諸仏も定て随喜し給ふらん。それについて出離の道まぢくなりといへども、末法濁乱の機には、称名を以て勝れたりとす。志を九品に分ち、行を六字に縮めて、如何なる愚癡闇鈍の者も唱るに便あり。罪深けれ

ばとて、卑下したまふべからず。十悪五逆回心すれば往生を遂ぐ。功德少ければとて、望を絶べからず、一念十念の心を致せば、来迎す。専称名号至西方と釈して、専名号を称すれば、西方に至る、念々称名常懺悔と演て、念々に彌陀を唱れば懺悔する也と教へたり。

利劔即是彌陀号を恐めば、魔縁近づかず。一声称念罪皆除と念ずれば、罪皆除けりと見えたり。浄土宗の至極、各略を存して、大略是を肝心とす。但往生の得否は、信心の有無に依べし。唯深く信じて努々疑をなし給ふべからず。もし此教を深く信じて行住座臥時処諸縁を嫌はず、三業四威儀に於て、心念口称を忘れ給はずば、畢命を期として、此苦域の界を出で、彼不退の土に、往生し給はん事、何の疑かあらむや」と教化し給ひければ、中将斜ならず悦て「此次に戒を持ばやと存候は、出家仕らでは叶候まじや」と申されければ、「出家せぬ人も、戒を持つ事は世の常の習ひ也」とて、額に剃刀をあてゝそるまねをして、十戒を授けられけ

れば、中将随喜の涙を流いて、是を受保ち給ふ。上人も万物哀に覺えて、搔暗す心地して、泣々戒をぞ説ける。御布施と覺しくて、年比常におはして遊れける侍の許に預置れける御硯を、知時して召寄て、上人に上り、「是をば人にたび候はで、常に御目のかゝり候はん所に置れ候て、某が物ぞかしと、御覽せられ候はん度ごとに思食なずらへて御念仏候べし。御隙には經をも一卷、御廻向候はゞ然るべう候べし」など、泣々申されければ、上人とかうの返事にも及ばず、是を取て懐に入れ、墨染の袖を絞りつゝ泣々帰り給ひけり。此の硯は、親父入道相国砂金を多く宋朝の御門へ奉り給ひたりければ返報と覺しくて、日本和田の平大相国の許へとて、送られたりけるとかや。名をば松蔭とぞ申ける

私聚百因緣集

法然上人事

抑本朝源空上人者。往生極樂勸進大念仏三昧弘通先達也。美作州人姓漆間氏於癸丑_二生於壬申_一卒生涯八十年所學不殘_レ顯密。所以父美作国庁官云漆間辰国久米南条稻岡北庄人也。上人初生崇徳院御宇長承二年癸歲也。其出胎時雨幡自天雨降奇異瑞也、權化再誕也。

見聞驚_レ耳目。父母喜笑過_レ分たり、然有_レ哀事。生年九歲にして頓父後十歳以前成_レ亡父空子。何不_レ悲乎。尋其死縁。為_レ夜打_レ被_レ殺害_レ于_レ時保延七年辛酉春比なり。

其とき有_二不思議、九歳小童以_三破器小箭_一即射_レ害_レ父凶賊之目。遂以_二件疵_一彼夜打無_レ隱蒙_二被_レ疵_一人誰、即明石源内云武者云々。不_二安堵_一聞_レ跡畢、幼少意には難_レ有事なり。其後近_二付僧_一同国菩提寺院主觀覺得業_二成_二弟子_一性根勝_二衆童_一心念超_二傍輩_一既最上利根にして空不_レ可_レ留_二田舎_一故得業相儀令_二登山_一于_レ時近衛院治天

天養二年乙酉小兒十三歳也。登山之本房西塔北谷持法房

也。抑得業小兒登山之時送_二叡山消息_一云、奉_レ送_二大聖

文殊師利菩薩一尊_一云々。然漸學_二円宗_一聞_二一覺_一十、

從_レ流_二水速_一なり。受_レ釋知論如_レ取_レ明破_レ闍入_二止觀_一窓_一

極_二六即七位權實差殊_一向_二玄文机_一得_二五時八教一期縱

横_一給へり。凡円頓修行室普賢拜_二眼花蔽披覽床_一には青

竜順_二座邊_一、此等初學料簡には相_二叶聖意_一故也。亦非_二

一乘円乘_一兼_二學密教_一習_二五相三密觀行_一加之廻_二諸寺_一

親_二諸宗教相_一設雖_二大卷_一三返披覽之後文義明々たり。

故処々にして伝法師匠還成_二弟子_一たまふ。況傍輩衆僧

更論談無_二敵對事_一殊又円頓大乘戒体南岳大師以後師々

相承即在_二正足_一知法聞_二仏徳世無_レ隱、雲上在_二御師徳_一

高倉天王御得戒。亦上西門院にして七日説戒、爾時有_二

不思議、日々小蛇來聽聞、當_二第七日_一彼小蛇於_二唐壇上_一

死畢、于_レ時人々見事不同なり。一其頭破目中より小

蝶出て空登云々、一作_二天人_一登山々々。凡上人御在生不

思議甚多。如_レ是時春秋三十二年週雖_レ披_二學自宗他宗

道、顯教密教本朝將來聖教伝記目錄等、尙正自身出離
生死念煩、朝夕歎念言給ける、宜哉、我師肥後阿闍梨
智惠優長御座、悲身出離生死、顯密教法文義実目出け
れども願、自身分際、即身断惑証理可、難叶、若又期、
遠生之因、昇沈不定也。自隔、生即忘定、廢忘仏教道理、
我云何受、長壽報、奉、值、慈尊出世、悲我須受、大蛇身、
待、後仏出世。但住、大海、者可、有、中爰、如、此念定後
路次使遠江国笠原庄桜池云、取、領家放文、住、此池、願
畢。其後經、年月、正死期時、乞、水入、堂死畢、其日彼池風
不、吹、大浪俄立、池中塵垢悉払上、後彼処人々、檢、合之。
正閨梨閉眼日也。当、知、彼本望不、空云、凡有、智惠、故
歎、出離生死、有、道心、故期、後仏出世、誠、值、難、值、仏
教、此度不、厭、空廻、生死、事、悲、中、悲、也。朝暮悲歎無、極、
然而御年三十三、永満元年、乙酉歲より始入、往生浄土教門、
從、曼鸞道、緯、善、導、懷、感、等、製作、到、本朝、楞、嚴、先、德、惠、心、往
生要集、一拜見及、二兩、三返、即得、他力、往生直道、六方証誠
二尊許、庇、衆聖、此心、観、發、往、生、極、樂、指、掌、無、疑、出、離、生

死堅、信直速なり。其後上人常言けるは、我得、此道教、
後我師別路不、令、趣、後、悔、ける。從、其、以、來、自、行、化、他、偏
往生極樂教門也。選擇集云、於、是、貧、道、昔、披、闍、茲、典、
粗、識、棄、意、立、と、ころ、に、捨、余、行、云、爛、念、仏、自、其、已、來
至、于、今、自、行、化、他、唯、緯、念、仏、然、間、希、問、津、者、示、以、西
方、通、津、適、尋、行、者、に、は、誨、以、念、仏、別、行、依、之、者、多、不、信
者、勘、当、知、浄、土、之、教、叩、時、機、而、當、行、運、也。念、仏、之、行
感、水、月、而、得、昇、降、也、已上、抑、上、人、取、此、信、給、て、の、ち、忽、感、
靈、夢、紫、雲、広、聳、覆、日、本、國、自、雲、中、出、無、量、光、明、中、百
色、鳥、飛、散、充、滴、虛、空、于、時、登、高、山、頂、忽、拜、見、生、身、善、導、
云々、自、此、京、花、四、遠、一、天、四、海、順、其、勸、化、但、宗、義、法、教、興
習、南、都、北、嶺、碩、學、達、各、誹、謗、之、共、嘲、瞬、之、如、此、經、二、十
余、年、文、治、五、年、比、天、台、座、主、中、納、言、法、印、顯、真、為、厭、娑、婆、
願、極、樂、大、原、籠、居、入、念、仏、門、た、ま、ふ。爾、時、彼、弟、子、相、模
公、申、云、法、然、上、人、浄、土、教、門、盛、被、立、之、由、聞、侍、同、往、生、極
樂、之、文、義、分、明、な、り、可、尋、聞、給、云々、法、印、言、尤、可、然、
同、我、一、人、不、可、聽、聞、畿、内、智、者、後、世、者、達、告、集、請、寄、俱、此

臨聞せんとて達_二此義法然上人_一。上人即領掌喜大原竜禪
 寺人々有_二衆会_一。此來り集人々の中に少々有_二不_一。天台座主顯
 真、光明山僧都明遍_{東大寺三論}。笠置解脫上人_{侍從已講長盛}
 大原本成房大旨此人共定_{問者}云口。亦大仏上人俊乘房
 重嵯峨往生院念仏房_{天台}來迎院明定房蓮慶_{同宗の}妙覺
 寺聖人仏真坊_{安念高}野人也_{宗人}。菩提山長尾蓮光房、長桑寺定蓮房
 捺持院清淨房、桜本求法房、智海証真如_{此人々有_二集}
 會、門徒弟並人數集三百余人、大躰聖道淨土大宗論也
 云々。有_二諸方難勢_一、一々會_レ之義理分明也。文証顯然
 也。凡往生極樂之教行、彌陀本願釈迦勸説、諸仏舌相
 經証文、罪惡生死一毫未断凡夫依_二一生修福念仏_一、上尽
 一形下至十念一念花台迎接定得_二往生_二二門中_一には淨土
 門、二道中には易行道、二力中には他力門、二業中に
 は正定業、念々相統畢命為_レ期者、十即十生百即百生
 之道理、委々細細説_レ之たまふ。此時一座悉往生_二疑
 心、諸衆皆本願堅_二信心_一、一人として無_二不_一隨喜_二者_一。此
 上人形雖_レ似_二比丘_一、既仏菩薩采応なりと各讚_二嘆_一之_二二

尊大悲願_二目前_一、九品莊嚴如_レ向_二明鏡_一、信伏之驗有故三
 晝夜別時念仏念仏中奇瑞非_レ一。如_レ別紙_二從_レ其以來顯_二名
 徳_一、副_レ日門徒門弟數多送_レ時檀越競依_レ上人御在生間
 常御別時あり、毎_二別時_一必有_二靈山_一三七日如法念仏あ
 り。時衆十二人室蓮房心禪房定蓮房藏人入道住蓮房安
 桑房蓮光房西仙房清淨房念仏房阿勝房蓮乘房、其先達
 法然上人云々。三七日云丑時異香満_レ室、三七日子時光
 明朝にして驚_二人目_一、音楽聞_レ耳加_二稱_レ名音_一、試消_二燈明_一、
 雖_レ然道場明々たり。上人本地勢至菩薩云事其念仏中願
 たり。有_二子細_一如_レ別紙_一云々。凡上人御年八十建曆二年
 申正月三日老氣小衰にして小病小惱儀也。其後故高_{コトナク}声
 念仏不退也。十一日辰時告_二衆僧言_一、久高声念仏可_レ
 唱、觀音勢至諸菩薩現_二前此室_一たまふ。同二十日紫雲
 峯_二禪房西虛_一未時より上人顯_二快色_一、拳_レ目見_二西方_一た
 まふ事五六度、常隨弟子問奉る、仏來迎_レ付給へるか。
 上人答云漸其相現前給云々。二十三日二十四日には紫雲
 異香無_レ間、二十五日午時計行儀更無_二違事_一、最後教こそ

哀なれ。本願有_レ限往生無_レ疑願蓮結_レ脚、只今定、劬らくは将来道俗称名不_レ懈必期_二一仏土_一云々、而慈覺大師相承袈裟懸給、向_二西方_一頭北面西唱_二言光明遍照十方世界、念仏衆生攝取不捨、念仏御音漸弱見仏御眼如_レ眠、前後門弟押_レ涙金鳴左右僧侶咽音にて唱_二御名_一万人心契_二浄土值遇_一、八旬何茂釈尊上人唱_レ滅たまふ。三春何なる節ぞ、正月二月中旬下旬五日なり。抑園城寺長吏法務大僧正公胤為_二上人御法事_一為_二唱導_一たまふ時、其夜夢告、云源空本地身大勢至菩薩、衆生教化故来_二此界_一度_レ生云々或亦伝_二善導再誕_一、有_二子細_一云々夫以彼此同有_二口光_一、聞見_二聖教_一書_二文釈_一云々重々子細略_レ之如_二別紙_一云々

私聚百因縁集卷第八終

元亨釋書

釈源空、姓漆氏、作州稻岡人也。父時国母秦氏、父母無_レ子析_二仏神_一、母夢吞_二剃刀_一、覺語_二于夫_一。夫曰、汝其

有_レ子乎。恐雉染之人矣。因而孕、母不_レ茹_二童臆_一、長承二年四月七日生。頭圩而稜、眼黃而光、宗族異_レ之、至_二四五歳_一、拳止動向_レ西。九歳父被_二寇害_一一家噪逃。空自_二屏処_一偵_レ之、以_二小弓矢_一射_レ寇。中_二其眉間_一、寇者源長明、寛治帝之衛曹也。為_二其額瘡可_レ証_一、遂隱而終_レ身。時呼_レ空為_二小矢兒_一、郡之菩提寺觀覺聞_レ之乞為_二弟子_一、性美_二習學_一。覺嘆曰、此器兒何可_レ居_二草沢_一乎。送与_二延曆寺源光_一。光曰、此童駿驥也、非_二吾朽索之所_一、羈也。即投_二功德院皇円_一剃落受戒、時年十五、三昧之間通_二受台教_一、又從_二黒谷睿空_一、稟_二密乘及大乘律_一、凡大藏經律論佗宗章疏靡_レ不_レ檢閱、空於_二教義_一有_二自得処_一、欲_レ質_二其所蘊_一、謁_二藏俊_一、述_二唯識_一、詣_二慶雅_一、演_二雜華_一。二師皆嘆_レ踰_二於師承_一也。因_レ是俊贈_二供物_一、雅寓_二章疏_一、空自詭曰、我誦_レ書_二三遍_一其義自彰、不_レ勞苦_二而已_一。又曰、八宗之外涉_二仏心宗_一、於_二九教相_一粗得_二幽致_一、晚見_二信師往生要集_一、乃棄_二所業_一、倡_二浄土專念之宗_一、承安四年出_二黒谷_一、居_二洛東吉水_一、盛説_二專修及円頓菩薩大戒_一、緇白巖然向_レ

風。嘉応帝召入_レ宮受戒。藤相国兼実延問_二浄土之事_一。空述_二選択集_一呈_レ之。專修之徒取為_二秘要_一。顯真、靜敵明遍、証真、公胤、皆緇林之翹楚也。從_レ空問_二專念之道_一。空修_二法華三昧_一白象現_二道場_一。又說_二華嚴_一几案下有_二異小蛇_一。其徒信空怖_レ之捕去。次日蛇又左焉。又避之、其夜蛇夢_レ空曰、我是華嚴之護神也莫_レ畏也。其後蛇猶蟠_レ几下、空又不_レ怕、經竟蛇不_レ乘矣。皇太后於_二上西門院_一請空一七日說_レ戒、門扉上有_二一蛇_一、七日之間屈盤不_レ動、每_二說時_一有_レ側_レ耳勢、至_二散日_一而斃、其頭裂為_二一_一、其中髣髴似_二人形_一。空謁藤相国于月輪、談話而出、相国下_レ庭拜、背後語_二左右_一曰、空公頭上現_二金円光_一子等見乎。对曰、不_レ見、自此相国益加敬。空念修久勤屢感_二勝相_一、手_レ筆自記曰、建久九年正月一日修_二二七日念仏_一、第二日水想觀成、第七日地想觀中瑠璃地現。二月一七修之間水想地想宝樹宝地宮殿等現。正治二年二月之修地想等五觀隨_レ意顯現。元久三年正月四日彌陀觀自在大勢至三像現_二室中_一。五日三像又見。

建永二年春二月甞_二讚州_一、居五稔。空曰、吾不_レ因_レ諫争布_二專修之道於海裔_一乎、亦我一化之幸也。建曆元年詔追赴_二都城_一。二年正月居_二大谷_一、染疾。其徒安_二彌陀像於床頭_一、且為_二臨終助標_一。空曰、此像外汝等有_レ所_レ見乎。諸弟子曰、無。空曰、我十餘年來荐視_二極樂界相及仏菩薩真身_一、今又仏來也。二十五日朝高唱_二仏号_一、諸徒助和、久而皆声嘎。空獨不_レ衰、而至_二午時_一、其後著_二云持之慈覚僧伽梨_一、頭北面西誦_二光明遍照偈_一而寂。年八十、臘六十六、空亡之前_二三三日紫雲降_一垂坊上。

贊曰、修多羅有_二一相一行_一、三昧_一、專勤精修之謂也。空公之倡_二專修於称号_一也資_二于此_一乎。夫多岐亡_レ途兀兀皆是。專修之言又孔躋矣。然_二魔_一、勝業_一、斥_二佗宗_一、雖_二墮徒之執弊_一、恐空之訓有_レ不_レ尽乎。蓋_二魔有_二二種_一、自佗之異也。自_二魔無_レ咎佗魔受_レ殃_一。昔者荊通曰、臣唯独知_二韓信_一、非_レ知_二陛下_一也。故置_二漢高之亭_一。里克曰、不_レ有_レ魔也、君何以興。故受_二晉惠之誅_一、澆季濫叨不_二替專徒_一、諸家末流浸沒競趨。是以我_二二魔之別_一、諫_二于後學_一。

淨土法門源流章

近代有叡山黑谷源空大德、俊機敏利智慮深濬。人王第七十六代近衛天皇御宇久安六年歲次己巳齡方十八厭_レ世閑居、專欣_二安養_一修_二往生業_一、淨土教義從_レ此漸昌、自行化他唯在_レ此。人王八十二代後鳥羽天皇御宇建久九年歲次戊午于_レ時源空年六十六、錄_二選撰本願念仏集一卷_一、_二開為_二立_二淨土宗_一大願_二義理_一、自此已後淨教甚昌貴賤俱修都鄙咸遵、人王八十四代順德天皇御宇建曆二年歲次壬申源空入滅年滿_二八十一_一 (中略)

問源空已後弘通云何。答源空大德門人非_レ一各揚淨教_一、_二五恣_一弘通_二俱立_二門葉_一橫豎_二燈_一、即有_二幸西大德_一、長樂寺隆寬權律師、小坂證空大德_一、_二後居_二鎮西聖光大德_一、信空大德_一、_二道號_二法蓮_一、美州行空大德_一、_二道號_二法宝_一、九品寺長西大德等_一、并源空大德親承面受之弟子也。各隨_二所承_一弘_二淨土教_一、念仏宗旨所伝雖_レ同立義巨細異解多端

獅子伏象論

本伝云、東山大谷寺高祖上人、諱源空号法然、長承二年四月七日午尅不_レ覺誕生矣。作州久米郡稻岡村人也。父名亮間氏時國、母察氏也、依_レ不_レ有_二男子_一而父母俱詣_二岩間寺觀世音菩薩像_一祈_二求得_二男子_一其母夢_レ吞_二剃刀_一而孕、經七箇月而誕生焉。眼有_二重瞳_一而頭毛金色也。四五歲已後其識若_二成人_一。遍曉_二同_二雅党_一人皆敬_レ異之。故以郡之菩提寺觀覺愛好而為_二弟子_一。初授_二經誓_一性甚俊嶷、所_レ聞之事憶而永不_レ忘、覺嘉_二其後異相_一、語_二等侶_一曰、見_二此兒_一器量匪_二直人也者_一惜哉、何徒居_二辺國_一。久安三年丁卯春、送_二去延曆寺西塔北谷宝幢院持法房源光法印之許_一、其狀曰、進_二上大聖文殊像_一一体_一。書狀到來披_レ覽之、文殊像不_レ見而小兒來入。于_レ時源光以為文殊像者美_二此兒器量_一之詞、然相_二其容貌_一首_レ巧_一而鹿眼黃而有_二重瞳輝光_一、皆是卓華聰敏好相人皆嘆美。源光曰、吾是暗鈍淺才、不_レ足_二此奇重之提撕_一、須_二請_二索頌_一

学窮於巴宗奥義。即託功德院肥後阿闍梨皇円令学。天台教文。円者皇覺法橋弟子、一時名匠、繼從俊人也。

皇円感悅斯尼神情爽拔為大法器、以愛玩奇童承訓、所知曰多云々。十六歲春輒披本誓、以夜統日刺股忘眠迄十八歲秋。送三箇年之居、精究六十卷之秘願。慧解天縱殆超師授。皇円感歎曰、汝住黒谷而慈眼坊寂空為師。寂空者於真言密宗興大乘律、當時寡策爽髦。即相具到寂空上人之室、具陳彼素意。寂空聞而隨喜曰、汝曹少年早發出離心、實是法然道理上人也。即以法然而為道号、而諱源空。此諱字源即初師之上字、空是後師下字、用二師上下之字、故諱源空。師事于寂空、認密教与律宗、而外整律儀、内修密法、幾二宗大乘一身兼学修行。兼学成望遂之後、一切經律論忍飢而日々披、每披多暗文字。自他宗章疏、忘眠而夜々見、隨見深得義理、加之古今伝記疏録、倭漢秘書典籍、莫不執乎丁眠矣。此中法華三昧修行、頓写八卷時、普賢菩薩乘白象、現于道場、

唯独上人拜、余人所不見焉。又華嚴經披覽之時、青蛇蟠机上、師弟信空見之怖畏。嘗夜夢、我是守護華嚴經、竜神勿怖。又謁于歲俊僧都、述法相宗之法門自解義、俊屢聞仰曰、我等師資相承未存此義、和尙解給非直也人、疑是仏陀境界、雖遇論主不可、過是、智慧凝遠非凡愚類。吾一期間欲展供養、果而每年送供物、人多贖之。又入醍醐寺、对寛雅法印、述三論宗之法門自解義、雅聽受然淚下、更不能言、隨喜之余取出書櫃數合於自宗章疏、無附屬仁而禪師大達斯法門、悉以委附、即授与之。又寂山西塔有覺阿上人謂僧、入宋国七箇年、就仏海遠禪師座下、聞仏心禪宗、開悟發明、一大事圓法、伝達磨以來心印血脈、焔朝、而居寂山、集大衆、談話、三千徒中唯独源空得解開悟發明一大事。阿歎曰、此国之人根機未及仏心宗旨、源空独能得解。實是非直也人、即如来化身耶。達磨再誕聊言已、而以伝来衣鉢達磨已來血脈飾袋等、悉皆授于上人。其血脈譜曰、

本師釈迦牟尼大和尚、其下西天二十八祖、東土六祖乃至弘海遠和尚、覺阿和尚、源空和尚記。故八宗之外加三
心禪宗、涉於九宗、弘觀宗義、粗得深旨。惟度衆
僧中炙輶、郡府間明鏡也。因茲時人諺云、智慧第一
法然上人、誠哉是言也。爰上人自語、入淨土宗、濫觴
曰、予嘗煩出離道、寢食不安、多年心勞、後披覽
往生要集、序云、夫往生極樂之教行、濁世末代之目足
也。道俗貴賤、誰不痛仰者乎。但顯密教法其文非
一。事理業因其行惟多、利智精進之人未離、如予頑
惰者豈敢矣。是故依念仏一門、聊集經論要文、披之
修之、易覺易行矣。序者略一部奧旨、而述之義也。
其序云、正依念仏一門、故、入文委採此集立十門、於
中第一厭離穢土、第二欣求淨土、第三極樂莊嚴、是三
門非行休者、暫置之。其餘五門、正就念仏立
之、第九諸行往生門、為任行者樂欲、一旦雖明之
更無懇勸勸進。第十是助道入法、亦非行休、就念仏
五門、料簡之。第四正修念仏也。以是而為念仏休、第

五是助念方法也。以上念仏為所助、以此門為能
助。故以念仏為本意。第六是別時念仏也。長時勤
行不能勇進者、限於日數、而勤念仏、更非別休。
第七是念仏利益也、為勸念仏、勸發利益文。第八是
念仏莊嚴也、為勵上念仏、引諸經莊嚴、然者此集大
意唯有念仏明矣。是故予往生要集為先達、而入淨
土宗門也。此集中処々引善導和尚釈、以為規。
爾後披覽彼釈、至第二遍、未得宗義、斯廻揮本宗執
心、泥滯聖道門教相、故也。至第三遍、都捨本宗執
情、一心詳觀之時、深得淨土宗義。所謂亂想凡夫由
無觀稱名、順次往生於淨土也。但於自身往生者、
已決定、欲為他恢弘此法、所詳觀義合、私意否、
心勞之夜、夢紫雲變豔覆、日本國、雲中出無量光、
光中百寶色鳥飛散充滿、又見有高山、險阻對西方、
有長河、浩瀚無邊畔、峯上紫雲發、河原孔雀鷄鶉等
衆鳥遊、雲中有僧上浪墨染衣、下金色衣服也。予問
曰、是為誰耶。僧答云、我是支那大唐國西都光明寺

善導也。汝欲弘通淨土念仏之故、為作証來也。上善導

則彌陀化身、詳撰義正合仏意、為化他、為化蒙啓

旨、承安四年甲午春二月九日、出叡山黒谷、住洛陽東

山吉水大谷、興淨土宗、行勸化、弘一心不乱念仏三昧

妙行、由是華夷早白、遠近貴賤、晨暮輻輳、問津立

行、濟々焉、煌々焉。其徒附者譬如百川、巨海猶

鱗介之宗、龜鼈。就中大乘巴頓菩薩戒者、本師釈迦牟

尼仏大和尚已來、十九代法嗣相承。唯有二身、而後無

餘他人。故法皇當今、傾玉顔而受此戒。皇后姫宮貴

戒德而服戒香。大臣百官皆信善知識、而申供養。

將軍諸武士悉仰長老、而布施万物。加之南都北嶺碩

学、同心為師範、東海西州緇白等志隨化。雖然独

未得阿彌陀仏已來相承承受一事、他疑難為脱、登

渡宋之志、已欲逐給。于時建曆元年辛未正月二十一日

子尅、晨且國光明寺善導和尚、化來日本國洛陽東山

大谷寺方丈、授極樂淨土本有真實性相一乘戒法、大

乘方等三部五分經王、八種威儀九品服具等、源空親拜

受。本師阿彌陀仏大和尚之下、娑婆十仏、西天文珠、

流支、東土曇鸞、道綽、善導、日本源空系受相承矣。

如斯我高祖上人、具戒無雙、智行兼備之靈德矣。月氏

者、竜猛菩薩以芥子而開鉄塔、值大日如來、而伝

三摩耶秘密戒等。晨且者、慮思大師説誦法華經、刻遇釈

迦牟尼仏而受大乘菩薩戒等。日本者、法然上人念仏中

值遇善導和尚、伝受極樂淨土一乘戒三部經等、而嗣法

登祖位。三國三師共無比類大聖也。以之而謂之

者、即是応身如來乎。真實明悟真人乎。又明証論云、謂

得公設問云、今師所立淨土宗義、從誰人稟受之

耶。言利翁言、源空上人面受室彌也。謂從公曰、或人

云、源空上人是於淨土宗者、失稟承師也、我等亦同、

唯共有目有意。見文字、推義理、深得宗旨、懸稱

祖意、空上人何勝於我等、我等何劣於空上人、義理既相

同、何強執彼義、捨此義哉、此難如何會。言利翁曰

夫学温、故知新、道稟承為先、多分義也。此外又少

分或有從經卷義、或有異代師義、若依此等義、何

堅執師資相承之義，強致於失稟承之難乎。抑亦如
此謂者，若啞羊僧，若捨緣之顯密諸宗中，不學一宗、
儒道二教中不窺一教之流類也。所學纔淨土一宗歟。
所至何遠哉。莊子曰，直用管闕天、用錐指地也。
不亦小乎。良此謂也。君子一言以為智。一言以為不
智。空上人智不可及。猶天之不可階而昇也。
彼等与空師譬如鷓鴣之襲狗狐豚，咋虎至則靡耳。
遂使建曆第二壬申初春念五日中午，滿八十歲而出娑婆
火宅，永入極樂淨刹。爾來五十余年

(下略)

淨土十勝節箋論

請問之曰、從上所引上人法語、人皆知之、汝胡不見
乎、匪雷小師獨得之、亦知恩院別當法印大和尚位
舜昌得之而為祖師行狀畫圖之詞而已。問曰、得上
人法語以為潤色所立義之丹青者、吾又得上人遺
典舉出之、以挫折君立義、所謂吾祖上人所書淨土
宗畧鈔云云々

明義進行集

(内題)

明義進行集卷第二並第三

(別筆五行)

一、尋入ルミ山ノヲクニハ主モナ□

吹ク松風ノヲトハカリ□□

一、白雲云

折リエテモ心ユルスナ山サクラ

チラハウキヨニカエリモソスル

明義進行集卷第二

抑源空上人ト同時ニ出世セル諸宗ノ英雄ノナカニ、
カノ化導ニ隨テ、サハヤカニ本宗ノ執心ヲアラタメ
テ、專無觀ノ彌名ヲ行シテ、往生ノ望ヲトケタルヒト

僧惠鏡之

オホシ、今入滅ノ次第ニヨリテ、ソノ義ライハ、

第一禪林寺僧都靜遍

貞應三年甲申四月廿日入滅時也年五十九

僧都ハ大納言平賴盛卿子弘法大師ノ門人ナリ、始ニ

ハ醍醐ノ座主勝賢^{モトハ}、僧正ニ隨テ小野ノ流ヲ請テ、

後ニ八仁和寺ノ上乘院ノ法印仁隆ヲ師トシテ、廣サワ

ノ流ヲツタウ、兩流ヲ一器ニウツセル淵粹^スノ眞言師也

淨土門ニ入濫觴ヲミツカラカタテイワク、世コソテ選

擇集ヲ披覽シテ、念佛ニ歸スル者多シ、吾コノコトヲ

キ、テ嫉妬^{ソノキニオキム}ノ心ヲオコシテ、選擇集ヲ破シテ念佛往生

ノミチヲフサカムトオモヒテ、破文カクヘキ料紙マテ

シタ、メテ、クハシク選擇集ヲヒキミルホトニ、日來

ノ所案ニハ相違シテ、末代惡世ノ凡夫、出離生死ノミ

チハ、ハヤ念佛ニアリケリト見フセテ、ヤカテ念佛ニ

歸シテ、カヘテ選擇集ヲ賞翫^{シヤウケン}ス、タ、シ日來嫉妬ノ

心ヲオコシテ破セムトタクミキ、コレ吾力大ナルトカ

トヲモヒテ、選擇集ヲ頂戴シテ、オホタテ憤墓^イニマウ

テ、ナク、悔謝ヲイタシテ曰ク、今日ヨリハ、上人
ヲ師トシ、念佛ヲ行トスヘシ、聖靈照覽ヲタレテ先非
ヲユルシテ、イマノ是ヲカ、ミ給ヘト、ソノ後ツヒ
ニ、高位ノ崇班ホウバンヲステ、心聞房トナツキテ今ハ一向
ニ念佛ヲ行スルナリト也、サテ靜遍カ念佛ノ詮要コ、
ロヘタルヤウハトテ、一偈ニソノコ、ロヲ結スハレタ
リ、所謂一期所安極、永捨世道理、唯稱阿彌陀、語嘿
常持念、ト、コノナカニ、世ノ道理ヲスツトイウハ、
世人念佛ニ付テ、無盡ニ義ヲイフトモニ、道理ナキニ
アラス、シカレトモワレハ只稱シテ、ツネニハスレシ
トナリ、又法照禪師ノ五會法事讚ニ、彼佛因中立弘誓、
聞名念我物來迎等ノ七言八句ノ文ヲ誦シテ、コレコソ
淨土宗ノ肝心、念佛者ノ目足ヨトソツネニハマウサレ
ケル、

第二高野僧都明遍

貞應三年六月十六日入滅時二年八十三

僧都ハ少納言藤原通憲朝臣第十四男、澄憲法印ノオ

トウト、貞慶上人ノオチナリ、東大寺ニ住シテ、敏覺
法印ニ師ツカヒシテ、三論宗ヲ學ス敏覺ハ長門ノ法
カトノカミタヤハシノツネトミノ子越前已講珍海カ面
授口決シツクツノ弟子ナリ三會ノ講師ヲトケ法勝寺ノ證義ヲツ
トメ東大寺元興寺等ノ別當ニ住ス、カネテ西方ノ行人
者ナリ、左衛門入道西光イ、平大相國ノ禪門ノタメニ斬
刑シニオコナハレケル時、遺言シテイハク、美絹百疋、
法印ノ御房ニ進スベキナリト云、敏覺ハ西光カヤシナ
イキミタルユヘナリ、
敏覺クタムノ絹ヲモテ、カツハ西光出離ノタメ、カツ
ハ自身行法ノタメ、住坊ノ西北ニイタフキノ一堂ヲ建
立シテ、ソノカヘニ等身ナル光ホトケヲ圖シ、左右ニ
木像ノ觀音勢至ヲタテ、ヒカリ堂ト號ス、コ、ニシ
テツ子ニ妓樂ヲト、ノヘテ、往生講ヲ修ス、ツヒニ臨
終正念ニシテ、往生ヲトケオハヌト也、クタムノタウ
地ハ、最勝光院ノタツミ、觀音寺ノオホキクハシノキ
タノ邊ノヒカシノミ子ノウヘナリ、堂舍坊宇ミナモテ
僧都付屬ス、

智惠等倫ナクシテ、才名諷譎^{ノイブツカ}アリシカトモ、律師ノ時、五十有餘ニシテ、ハヤク道心ヲオコシテ、本寺ヲステ、光明山ニ籠居モシ、又公請ニシタカハムト思ヒカヘスコ、ロモヤアルトテ、シハラク牛車ヲハ法住寺ノ坊^{先師敏覺ノユツレル物ナリ}オキテ、ナヲ公請ヲハツトメラレケリ、カクノコトクスルコト五年トイウニ、イマハ一切ニオモイオクコトナシトテ、律師ヲ辭シテ、ナカク高野山ニ籠居、トキノヒトミナイハク、明遍ハ左右ナカリツル學生ヲイマニ昇進ノオソクテ籠居カト申シアヒケレハ、三會ノ巡ニヨリテ、ヤカテ少僧都ニナサレテ高野へオホセラル、ツイニイテ、ツカヘス、カタクモテ辭退云々、アルトシ善光寺マウテノツイテニ、源空上人ノコマツトノニオハスルトコロニ、人ヲイレテ見參ニ入タキヨシノタマヒケレハ、上人ノ返事ニ、タレモ入タク候、イラセ給へト、トキニサフライアヒタルヒト、コノコトヲキ、テ、イカナル甚深ノ法門カ問答アラムスラムトテ、ヨロコヒアヘルコトカキリナ

シ、上人サキサマニ客殿ニ居マウケテマチ給フトコロニ、僧都來臨シテ、アカリ障子ヲヒキアケテ、タカヒニ面ヲミアハセテ、イマタイナホラヌホトニテ、左右ナクコトハヲイタシテ問テ曰ク、末代惡世^(中)ノハレラカ様ナル罪濁ノ凡夫、イカニシテカ生死ヲハハナレ候へキ、上人答曰ク、南無阿彌陀佛ト申シテ、極樂ヲ期スルハカリコソシヘツヘキコト、存シテ候へト、僧都ノタマハク、ソレハカタノ様ニサ候へキカトハ存シテ候、其ニ取テ決定ヲ料ニ申シツル哉ト、僧都又問テ曰ク、ソレニ依テ念佛ハ申シ候へトモ、心ノチルヲハイカ、シ候ハムヤト、上人答曰ク、ソレヲハ源空モ力ヲ及ヒ候ハスト、僧都又問曰ク、サテソレヲハイカ、シ候ハムスルト、上人コタヘテノタマハク、チレトモ猶ヲ稱スレハ、佛ノ願力ニ乘シテ、往生スヘシトコソコ、ロヘテ候へ、タ、所詮オホラカニ念佛ヲ申スカ第一ノ事ニテ候ナリト、僧都イハク、ヤウ候、^〱コレウケタマハリニマイリツル候トテ、前後ニハ聊モ世間ノ禮

儀ノコトハナクシテ、ヤカテ退出云々、人倫ノ法、舊イ友ナリトイヘトモ、對面ノ時ニハ、先ツ世間ノ禮儀ノコトハラ出シ、次ニ所存ヲノヘテ、後會ヲチキリテサルハ、サタマレルナラヒナリ、コノ僧都初對面ノ人ニ、禮儀ノ申コトハナク、サウナク法門ヲ問様事、俗ニ混セス體、眞實ノ道心者ナルヘシ、

僧都退出ノスナハチ當座ニハヘリケル、聖リタチニイアイテノタマヒケルハ、欲界ノ散地ニムマレタルヒトハ、ミナ散心アリ、タトヘハ人間ノ生ヲウケタルモノ、目鼻ノアルカコトシ、散心ヲステ、往生セムトイハムハ、ソノ理シカルヘカラス、散心ナカラ念佛申トモノハ、往生スレハコソ目出タキ本願ニテアレ、コノ僧都ノ念佛ハ申セトモ、コ、ロノチルヲハイカ、スヘキト不審セラレツルコソ、イハレスオホケレト也、

スヘテ高野ニ住シテ卅餘年、跡聚落ニイラス、身世事ニミタレス、長齋梵行智者道心者、チカクハコノヒト

ナリ、念佛ノイトマヲオシミテ、傳法ノコトソコノマス、シカレトモ都鄙ノ道俗タツネ入テ、往生ノ要ヲ問フ時ハ、オノツカラコタヘタマヘルコト、モアリ、ソノ義ツモリテオホシ、略シテ詮要ヲ云ハ、或人問云ク、當時ノ出離ノ業、念佛ノ外ハカナウヘカラサルカト、答曰ク、念佛ノ行タニモ、往生ノ業成就スル事ハアリカタシ、マシテ自餘ノ行ハ、イカニハケムトモカナウヘカラス、眞言ナトモ、上品ノ悉地ハ、即身成佛、中品ノ悉地ハ、十方淨土、下品ノ悉地ハ、修羅シラ嚙シラニムマル、シカルヲ下品ノ悉地タニモウルコトアルヘカラスト、又或人問曰ク、念佛往生ハ決定カト、答テ曰ク、其條ノコトアタラシ、タ、シ空阿彌陀佛カ僧都ノ遁身世名也ニトリテハ、ナマチヘカ往生ノサハリトナムスヘキナリ、ナマ智慧トハ、ムカシ學セシ三論ノ法門コレナリ、念佛往生ニオヒテハ、無智ノモノ、コノ法ニアヒテトナヘハ、カナラスムカヘタマフヘシト信スルホカ、サカシハウタル心ナクテ、ホレノト申シ井タラムハ、

一定ミヘツヘキコトナリ、サレハ空阿彌陀佛カヒトツ
ノ願ヲオコシタル様ハ、モシ順次ニ往生ヲトケスハ、
又人界ノ生ヲ受テ、一文不通ナルカ、本願ニアウモト
ナリテ、佛法トトテハ、タ、念佛ノ法許ヲシリ才學ト
テハ、タ、申スモノハ、往生ストハカリシリテ念佛シ
テ往生セムトヲモウナリ、

又、或人問曰ク、タトヒ念佛ヲ修シテ淨土ヲネカウ
トイウトモカナラス、大乘ノ實智ヲシルヘシ若シカラ
スハ、ホト／＼コレ外道ノ見ニ同シ、カルカユヘニ、
カナラス佛法ノ由來ヲシルヘシ、ソノウヘ所求願行如
實ニ人ノ心ニマカスヘント、コノ義イカト、答曰ク、
コノ條スコフルコトアタラシキカ、天臺カ十疑、安樂
集等ニカクノコトキノ問答コレヲ、シ、無相ノ觀等ハ、
實ニソノ益甚深ナリ、シカレトモ有相ノ行人得生ノ條、
又勿論ノコトナリ、嘉祥ハコトニオヒテ、無相ヲサキ
トスレトモ、ソレナヲ往生ノ因ヲ判スルニ、有相無相
共ニ生スト云々、起信論ニソノムネミヘタリ、イハム

ヤ淨土ノ教門觀經雙卷經等ニ全無相ノ義アカサスト、
又或人念佛ヲ義ヲ深ク言ヲ聞テ難シテイハク、三部經
ノナカニ理ノ文ナシ、觀經ニモ只色相觀ナリ、全ク理
觀ナシ、稱名行ハ理觀ニタヘサルヒトノタメニ、タ、
名號ヲ稱セヨトス、メタリシナリ、シカレハ惣シテ念
佛ノ義ヲフカクイウ事ハ、カヘテアサキ事ナリ、義ハ
フカ、ラストモ、欣求タニモフカクハ、一定往生ハシ
テムト、又病中ニ、或時人タニカタテイハク、トテモ
カクテモ至心ヲハケムヘキナリ、ワレモヒトモ、コノ
心ノナキ事、無術コトナリ、三部經ニモ、決定往生ノ
業トナルヘキ大切ノ處ニハ、ミナ至心トイフコトハア
リ、只淨土ヘマイリタキコ、ロハカリソノ大切ナルト、
又病中ニ或時カタテイハク、經ノ文ニモ、詮要ハ稱名
ヲノミス、メラレタリ、往生ノ想、引接ノ想ナト、イ
フタニモナヲオモヒエカタシ、タ、ホトケタスケタマ
ヘトオモヒテ、相續不斷ニ稱名スルニハシカスト、又
病中ニ或時カタテイハク、オホヨソ、理觀カナウヘカ

ラス、佛ノ白毫ヲ觀セムトオモウタニモ、目ヲフサケハ、イラノトシテオモヒミス、イハムヤ無相ノ理觀スコシモオモヒヨラス、タ、ロニイウハカリナリ、廿五三昧ノ過去帳ト申スモノニ、惠心ニ或人トフテイハク、理觀セサセ給ヤト、答曰ク、理觀モセムトオモハムニハシツヘケレトモセス、タ、稱名ハカリナリト云々、惠心ノ先德ノコトキノ、シツヘキヒトタニモセス、マシテオモフトモカナウマシカラム我等カコトキノヤト、

又病中ニ、或時カタテイハク、遊蓮房カヒシリ骨ニハ世間ナニコトモ對スヘキモノナシ、頼業カ學生ハカリ□□モシ對揚ナラムト、大納言入道光頼ハマウサレケリ、空阿彌陀ハ遊蓮房カオウト解脱房カオチナルカ、離勘ノコトニテアルナリ、ヒトノコ、ロニク、オモヒタルコノユカ、遊蓮房ハコトハライタシテモノマウサル、コトハナカリキ、ソノコトハサウラウナト人中ス時ハ、ウナツカレシハカリナリ、最後ニ所勞ノ時、

安居院、法印ノモトヘ消息ヲツカハシタリケリ、ソノ狀ニイハク、後世ノツトメニハナニコトヲカセムスルト人申シ候ハ、一向ニ念佛ヲマウセト御勸進アルヘク候、智者ニテオハシマセハ、世間ノ人定メテ尋申候ハムスラムトテ申候也トマウサレタリシカハオホロケナラテハ、サ様ノコト申ヘクモナカリシ人ノモシ證ノエタルコトノアリシアラムトタツネ申サムトオモヒシホトニ、ヤカテウセラレキト法印カタラレキ、經一卷モ書籍一卷モミニ持セサリシ人ナリ、法花經ハ初心ノ時オホヘラレタリキ、後ニハ一向念佛ハカリナリ、臨終ニ九念シテイマ一念ト、法然上人ニス、メラレ、申シテ、高聲ニ一念シテ、ヤカテイキタヘヌ、廿一ニシテ出家、卅九ニシテ往生、ハシメニハ西山ニヒロタニトイウトコロニ止住、後ニハヨシミネニシテ終焉ト云々、遊蓮房ハ少納言入道ノ第十一ノ男、信濃ノカミコレノリナリ法名、澄憲法印ノモシ證ノエタルコトノアリシヤラム、タツネ申サムトオモヒシアトニウセラレキト

不審ノ申サレタルコトハ、遊蓮房ノ念佛ニオヒテ、證ヲエタルコトヲシリヲヨハレサリケルニアリ、ソノ證ヲエラレタルヨシヲ、南都ノ修禪院ノ僧正信憲ノ人ニカタリ申サレケルハ、故遊蓮房ノノタマヒシハ、高聲念佛ハ、カナラス現徳ヲウル行ナリ、ヨリテ善導ハ貞觀中見西河禪師淨土九品道場於是篤勤精舍、若救頭燃、每見入佛堂合掌胡跪、一心念佛非力竭、不休雖寒水、亦頃流汗、表至誠、出龍舒淨予祖師ノアトヲオモヒテ三寸火舎ニ香ヲモリテ、ソノ香ノモヘハツルマテニ合掌シテ、毎日三時高聲ニ念佛スルコトヒサシクナリス、ソノ間ニ靈證ヲエタル事度々ナリ、ソノ證相ヲハハ、カリヲナシテ、カサネテイカニトモタツネ申サ、リキト、カレハ念佛三昧ニオヒテ、一定記ヲエタルヒトナリ、ソモく遊蓮房ハ、身ハホソくトシテカハユキホトニ、甲斐ナケナル嬰孩第一ノ人ナリケリ、シカレトモ聊ノアリキニモ、一幅半ナル極樂ノ曼陀羅ヲトモニ具シタル、小法師ニハモタセスシテ、ミツカ

ラクヒニカケテ、ヤスミモシ、トマリモスル處ニハ、左右ナクニシニカケテ、コレヲ、カミ、極樂六時讚ヲオホヘテ、時ヲタカヘス誦シテ念佛ヲ申サレケリ、スヘテ少納言入道ノ一族コソテ遊蓮房ヲタトム事、佛ノ如シ、ウヤマウコト、キミニ同シ、コレスナハチ道心堅固ニ、勇猛精進ニシテ、チリハカリモ俗ニ混セサルユヘナリ、

第三長樂寺律師隆寛

安貞元年ヒノトノ井十二月十三日入滅、時二年八十

律師ハ、アハタノ關白五代ノノチ、少納言資隆朝臣ノ子、叡山ヨカハノ戒心ノタニノ知見坊ノ住侶ナリ、伯父父兄ナリ皇圓阿闍梨ヲ師トシテ、台教ヲナラヒ、イマ案スルニ、律師法然上人ノ爲ニハ、天台宗ニハ同法ナリ、トモニ皇圓ニ傳受スルカユヘニ、淨土宗ニハ弟子ナリ、後ニ依附スルカユヘニ、聖道淨土一轍ナルコトハ、マコトニ累劫ノ宿善ナリ、コトハラマシヘ、訓ヲ

ウケタラム門弟等、乃至將來コノナカレヲクマムモノ、
カノミナモトヲタツネテ隨喜スヘシ、皇圓入室後、範
源法印ニ隨テ、ソノノコルトコロヲツク、(シ脱)カネテ家塵
ヲウケテ、モトモ詩歌ニタクミナリ、善根純熟シテハ
ヤクモテ發心シ、ナカク穢土ノケ望ヲタチテ、タ、淨
土ノ快樂ヲネカウ、信瑞同宿ノ昔、ミツカラカタテノ
タマヒシハ、隆寛發心ノハシメニハ、三行ヲリノ阿彌
陀經ヲ手ニニキリテ、毎日ニ四十八卷ヲヨミシカハ、
大僧正ノ御房ニ盜號慈鎮和尙祇候ノ時モ、サル行人ナレハト
テ、御前ニシテモクナムノ經ランキテヨムコトヲハハ
ユルサレタテマツリタリキ、後ニ法然上人ニ對面シタ
テマツリテ、後世ノ事談シ申スニ、源空モハシメニハ、
念佛ノ外ニ、阿彌陀經ヲ毎日三卷讀候キ、一卷唐、一
卷ハ吳フ一卷ハ訓シナリ、シカルヲコノ經ニ詮スルトコロ、
タ、念佛ヲ申セトコソトカレテ候ヘハ、今ハ一卷モヨ
ミ候ハス、一向念佛ヲ申シ候ナリト、隆寛スナハチコ
、ロヘテ、ヤカテ阿彌陀經ヲサシウキテ、念佛三萬五

千返ヲ申云々、其後ツネニ參セシニ、ハシメツカタハ
コ、ロヲキタル様ニテ、イトウチトケ給ハサリシカ、
往生ノシタキヨシ、心中ニ存スル様、委シク申シ、カ
ハ、上人オトロキテ、聖道門ニテケウアス僧正ノ御房
ニ御祇候ノオムミノ、コレホトニ往生ノ御志ノフカク
候ケルコトノカタシケンサヨト隨喜シテ、淨土ノ法門
ノ大意トテノタマヒシハ、大唐ノ善導ノ淨土宗ヲタテ
給フ事ハ、三經一論ヲ正依トシ、曇鸞道綽ヲ祖師トス、
マサシクハ凡夫ノ爲ニシ、カタハラニハ聖人ノ爲ニシ
テ、行ハタ、稱名、期スルトコロハ來迎、ヒトヘニ願
力ヲタノミテ、自身ヲカルコトナシ、他宗ニ對シテ勝
劣ヲ判セス、餘教ニ敵シテ淺深ヲ論スルコトナシト云
々、慇懃ノ教訓ヲ蒙ルコト數十ケ度ナリ、ヤウヤクニ
ス、ミテ數遍六萬返ニナリニキ、然間元久元年三月十
四日、コマツトノ、御堂ノウシロニシテ、上人フトコ
ロヨリ選擇集ヲ取出シテ、ヒソカニサツケ給フコトハ
ニイハク、コノ書ニノスル處ノ要文等ハ、善導和尚ノ

淨土宗ヲタテタマヘル肝心ナリ、ハヤク書寫シテ披讀
 ヲフヘシ、モシ不審アラハ、タツネ給ヘト、タ、シ源
 空カ存生ノ間ハ披露アルヘカラス、死後ノ流行ハナム
 ノコトカアラムト、コレヲモチカヘリテ、隆寛ミツカ
 ラフテヲソム、イソキ功ヲオエムカタメニ、三ツニヒ
 キハケテ、尊注昇蓮ニ助筆セサセテ、オナシキ廿六日
 ニ書寫シオハテ、本ヲハ返書シテ、シツカニ披讀スル
 ニ、不審アレハ、カナラス上人ノ許ヘ參シテ、ヒラキ、
 然レハマサシク選擇集ヲ付屬セラレタルモノハ隆寛ナ
 リト云々、又天台釋ニハ、行ハ以テ進趣ユヰ爲ト義トノタマ
 ヘルコトノ佛道修行ノ第一用心ニオホヘシアヒタ、毎
 日ノ所作ニ、六時禮讚ノ念佛、八萬四千返ヲサタメテ、
 懈怠ナクシテ、久クナリ候タリ、八萬四千返ハ、ナニ
 コトカ表スル、八萬四千ノ光明ノ數ニアテタルナリト
 云々、又、淨土ノ法門ノ至極詮要トテノタマヒシハ、
 若我成佛、十方衆生、稱我名號、下至十聲、若不生者、
 不取正覺、彼佛今現在世成佛、當知本誓重願不虛、衆

生稱念、必得往生、信ヲス、ムル事ハ、コノ文ニ有
 リ、コノ釋道理極成ノウヘ、文字又卅八、マサンク
 カスニアタレリ、定メテフカキコ、ロアルヘシ、依テ
 カタ／＼信ヲモヨオスモノナリト、一心專念、彌陀名
 號、行住坐臥、不問時節久近、念々不捨者、是名正定
 之業、順彼佛願故、行ヲス、ムルコトハ、コノ文ニア
 リト、又、彌陀眞色如金山相好、光明照十方、唯有念
 佛、蒙光接、當知本願最力強ツネニハコノ文ヲ誦シテ
 落涙ハナハタシ、

雅成親王但州ノ謫所ヨリタツネオホセラレテイイハ
 ク、一日七日之行一心不亂之様、難存知候、罪惡生死、
 凡夫心、一時猶易亂候歟、彼不亂ハ、定メテ其義候哉、
 可承候、又現在ノ事ナレハトテ、他佛ニモ、神ニモ、
 祈ヲモ、勤ヲモスルハ、雜行ナレハ、往生ノサハリニ
 モ成ヌヘク候歟、又現在ノ事ハ別ノ事ニテ、後生ノ勤
 トテハ、念佛ハカリナレハ可有苦候申覽、每事可被計
 仰候也、恐々謹言、

八月十日

在御判

雜行事

律師御房

請文云

一日乃至七日一心不亂之事、

心ヲ西方ニカケテ、北方ノ佛ニモ、南方淨土ニモ、東方ノ寶刹ニモ、ノソミヲカケ、心ヲハクルコトナキノ、一心ニシテ不亂トハ申候也、コレスナハチ淨土宗ニ論スル所ノ一心不亂ノ義ナリ、煩惱具足ノ凡夫ナリ、妄念日々時々ニオコル、イカテカ須臾モ、刹那モ、不亂ナルコトアルヘキヤ、然則他力本願ニカケテ、他佛ノ餘行ニ心ヲウツサ、ルヲ不亂ト名ク、疊禱法師イハク、一心者、念^シ無碍^ト如來、願^シ生安樂、心々相續^シ無他^ト想間雜^ト云々、聖道門義ニテコソワカコ、ロヲキヨメ、コ、ロラスマシテ、亂想ヲト、メ、妄念ヲヤメヌニハ、修行不成セストハ申シ候へ、コレスナハチ自力得道ノ教ノ談ナリ、一心ノコトハラナシケレトモ、宗ニシタカヒテ、ソノ義ハ不同ニ候也、

往生極樂ノ業トテ、念佛ノ外ニ種々ノ行ヲアヒマシヘ候ヲ雜行トモ、雜業トモ、雜緣トモ申候也、現世ノ爲トテ、藥師ノ寶號ヲモ稱シ、觀音經ヲモヨミ、又神明ニ法施ヲサ、ケムコトハ、全ク雜行トハ不可申候也、モテノホカノ不知案内ノ申シ様ナリ、往生極樂ヲネカヒテ稱名念佛ニ入ラム人ハ、現世ノ名聞モ、利養モ、ナムノ料ニイノリモトムヘキソトイフ難コソ候ヘトモ、ソノ條ハ、不得心ノ難ニテ候也、其故ハ、人ノ根性モ、人ノ機根モ、千差萬別ナルコトニテ候ヘハ、現世ノ名利ヲナカクステ、往生ヲネカヒ、稱名ヲハケムハ、上品ノ機根ナリ、後世ヲモヲソレ、往生ヲモネカヒナカラ、出家ヲモセス、名利ヲモステスシテ、念佛往生ノ勤ヲモ、タウルニシタカヒテイノリ、經ヲモヨミ、陀羅尼ヲモトナウル人モアルヘキナリ、則中品ノ機根ナリ、サレトモヒトヘニ現世ノ事ニ染着シテ、後世ノ苦報ヲモカヘリミサル下品ノヒトニノソムレ

ハ、ナラモテ殊勝ノ事ナリ、多年ノ懇志ニコタヘテ、
臨終正念成就シナハ、順次往生ハ必定ナリカユヘナリ、
(ル)

稱名念佛用心事

彌陀ノ本願ヲタノミテ、フタコ、ロナク名號ヲトナフ
ヘシ、コノ名號ハ、一念ニ八十億劫ノツミヲ滅シテ、
則無上ノ功德ヲ具足シ、廣大ノ利益ヲウルナリ、一生
造惡ノモノ、五逆深重ノトモカラ、臨終ノ十念ニヨリ
テ、カナラス極樂ニ往生ス、マシテフカク本願ヲ仰キ、
ヒトヘニ重願ヲタノミテ、日々ニ功ヲツミ、時々ニヲ
コタリナカラムヒトノ、聖衆ノ迎ニアツカリテ、觀音
ノ蓮臺ニノホラムコトハ、チリハカリモ不可疑、煩惱
ノアツカラムニツケテモ、罪業ノカサナムニツケテ
モ、彌陀ノ願力ニテハラヒノソイテ、名號ノ功力ニテ
キエウセムスルソトオモヒテ、チリハカリモ疑フ心ナ
クシテ、稱名ヲハケムカ彌陀ノ願力ニカナヒタル念佛
ニテハ候也、一念ヲモ、十念ヲモカロムル事アルヘカ
ラス、何況ヤトシノクヲオクリ、ツキノクヲカサネテ、

稱名ヲコタラサラムヒトノ、來迎ノ雲ニモレ、引接ノ
蓮ニノホラスコトハ、ユメノアルマシキナリ、ユメ
ノ念佛ハスレトモ、經ヲモカ、ス、ヨマス、堂塔ヲ
モ、率都婆ヲモタテス、ツクラサラムハ、ヨハントイ
ウ事ハサラノアルヘカラスサルナリ、又肉食姪事ノ
時ニハ、カナラス沐浴スヘシ、不淨ノ身ニテ、ミタリ
カハシク珠數ヲトリ、本尊ニ不可向、但シ煩惱ヲモク
テ、床ニシツミタラムヒトハ、イカニモイカニモシテ
稱名スヘシ、佛像ヲモオカムヘシ、コレハ別ノ事ナリ、
サレハトテ、身モツヨク、コ、チモヨカラム時ハ、ヨ
クノツ、シミキヨマルヘシ、一念十念ノ往生ヲ疑ヒ、
一日七日ノ稱名ヲカロムルヒトハ、彌陀釋迦ヲソムク
ノミナラス、十方ノ諸佛ヲソムクツミヲモクシテ、永
ク地獄ヲスミカトスヘシ、

又念佛ノ日々ノ數返ハ、上品ハ十萬九萬八萬七萬返、
中品ハ三萬四萬五萬六萬返、下品ハ一萬已下ナリ、詮
ヲトリ要ヲヌキテ、ホ、注進言上ス、此旨ヲモテ披露

セシメ給ヘク候、恐惶謹言、

十一月廿三日

權律師隆寬

又、暮年ニオヨヒテ、世ノ人ノ異議ヲ破センカ爲ニ、一卷ノ書ヲシルシ給ヘリ、得生西方義ト名ク、七篇ヲタテタリ、ソノナカノ第一ノ往生極樂ノ正行ノ篇ニイハク、夫極樂ハ、本願所成ノ立ナリ、彌陀ハ、本願所成ノ佛也、カノクニ、生レムトオモハムモノ、カノ佛ヲミタテタテマツラムトヲモハムモノハ本願ノ名號ヲ唱ヲモテ正行トシ、本願ノ密意ニ從ヲモテ正業トスルナリ、善導和尚本願ノ文ヲヒキテ、勸進シテノタマハク若我成佛、十方衆生、稱我名號、下至十聲、若不生者、不取正覺、彼佛今現在世成佛、當知本誓重願不虛、衆生稱念必得往生、已上、コノコトハリニヨルカユヘニ、正助ノ二行ノ中ニハ、稱名ヲモテ正行トス、專雜ノ二修ノナカニハ、專稱ヲモテ正業トス、然則彌陀攝取ノ光明モ、只稱名ノ人ヲ照ス、觀音所持ノ蓮臺モ、只稱名ノモノニサツク、釋迦如來ノ我見是利實語モ、

只稱名ノ行ニアリ、諸佛ノ廣長舒舌ノ證誠モ、只稱名ノ徳ヲアラハス、是ソノ決定往生ノ正行正業ノ相ナリ、問曰ク、稱名ハヤスキニ、タリトイヘトモ、説ノ如ク行スルコトハ、甚タカタシ、一心專念彌陀名號トイヒ、念々不捨是名正定之業トイフ、シカルヲ我等散亂鹿動ヤマサレハ、一心專念モ成シカタシ、世務作業モヒマナケレハ、念々不捨モイカテカアルヘキ、ステニ善導ノス、メニソムケリ、ムシロ彌陀ノ願ニ順センヤ、彌陀ノ願ニ順セスハ、正定ノ業ニハアラサルヘシ、ワツカニ三字ノナヲトナウルヲモテ、決定往生ノオモヒヲ住セム事、定メテ邪見ニテソアラメ、コ、ヲモテ今世間ヲミルニ、念佛ノ行者ハメニミチ、ミ、ニミチタレトモ、臨終正念ニ瑞相アリテ、往生スルモノハ、百カナカニ一二ナリ、千カナカニ五三ナリ、現證モアリ、道理モアリ、此義ヲハイカ、會スヘキヤ、答曰ク、今一心トイフハ、全一色一香無非中道ノ一心ニアラス、又唯識法身ノ無相離念ノ一心ニアラス、又五大五輪ノ

本理不生ノ一心ニアラス、タ、コレ一向ニ極樂ヲネカ
 ヒ、阿彌陀ヲ念スル一心ナリ、又コレ一向ニ自身ヲス
 テ、他力ニツク一心ナリ、マタコレ妄想ノナカニ、
 一向三字ヲ唱ル一心ナリ、又是罪惡ノナカニ、一向口
 稱ノハケム一心ナリ、又是我身ノ愚鈍ヲシリテ、一向
 ニ彌陀ノ智願ヲ信スル一心ナリ、又是奸詐百端ヲカナ
 シミテ、臨終ノ大利ヲ期スル一心ナリ、又是貪瞋邪僞
 ヲオソレテ、一向ニ滅罪増上縁ヲ期スル一心ナリ、汝
 ハ自淨其意、妄念不起ノ一心ヲモテ、ミタリカハシク
 他力眞實乘佛願力ノ一心ニヒタ、クルナリ、一心ノコ
 トハ、オナシケレトモ、一心ノ義ハコトナリ、例セハ
 大乘ニモ、小乘ニモ通シテ、空ヲノフルトモ、ソノ空
 モ淺深重々ニカハリタルカコトシ、故ニ一心トスルニ
 アラス、コ、ヲモテ名願ノチカラヲ念スルコ、ロハ、
 懶惰懈怠ノヤマサルニツケテモ、イヨ／＼フカク來迎
 ノ益ヲオモフコ、ロハ、煩惱妄念ノツキサルハツケテ
 モ、イヨ／＼切ナリ、是ヲ名ツケテ一心專念トイフ、

又不捨トモナツクルナリ、自力修行ノ道理ヲモテ、他
 力難思ノ德ヲ疑フ事、智惠ニテ智惠ニアラス、道理ニ
 テ道理ニアラス、念佛ヲ行スル人ハシケクオホケレト
 モ、往生スルモノ、ハナハタスクナキコトハ、アニコ
 ノユヘニアラスヤ、カナシムベシ、／＼、道綽ノ安樂
 集ニイハク、モシ衆生アテ、一生惡ヲ造レトモ、命終
 ハル時ニノソムテ、十念アヒツ、キテ、我名字ヲ稱セ
 ムニ、ムマレスハ正覺ヲトラント、又云ク、モシ惡ヲ
 ツクリ、ツミヲツクコトヲ論セハ、何ソアラキ風、ト
 キアメニコトナラムヤ、コ、ヲモテ諸佛大悲ス、メテ、
 淨土ニ歸セシメタマフ、設ヒ一形ノホトアクヲツクル
 トモ、只ヨク心ヲカケテ、專精ニツネニヨク念佛スレ
 ハ、一切ノモロ／＼ノサハリ、自然ニキヘノソキテ、
 定メテ往生スルコトヲウヘシ、已上、一生造惡トイフ
 ハ、煩惱具足シタル凡夫ノ相ヲアラハスナリ、若論起
 惡造罪已下ノ十二字ハ、スナハチコノ旨ヲノフルナリ、
 十念相續トイフハ、最後ノ稱名ノ益ヲアラハスナリ、

縱使一形已下ノ二十餘ノ言ハ、如此ノツミ深クトモ、善知識ニアヒテ、超世ノ弘願ヲ聞テ、難思ノ利益ヲ信シテ、妄念ノ中ニモ稱名ヲハケミ、煩惱ノチカヒモ、本願誓ヲタノミテ、他力ヲハスレズ、稱名ヲハスレサレハ、必スモロ／＼ノツミヲケテ、必ス來迎ヲカフリテ、彌陀ノ淨土ニ往生スルコトヲアラハシタルナリ、善導ハ道綽ヲアヲキテ、彌陀ノ願ヲ信ス、淨土宗ヲタテタマヘルヒトナリ、師トノス、メタマヘル旨一ツサマナリ、正行正義タノムヘシ／＼、疑事ナカレト、已上、明訓ヲムケテ、無觀稱名ヲ行シテ、往生ヲトケタルモノオホシ、惣シテ淨土ノ法ヲアカシ、念佛ノ義ヲノヘタル書、大小數卷粗世ニ行ス、彼等ヲヒラカハ、ソノコ、ロサシハミツヘシ、抑當世淨土ノ法ヲ談シ、念佛ノ行ヲタツルモノ、大半ハコレ律師ノ遺流ナリ、

第四空阿彌陀佛

安貞二年戊子正月十五日入滅、時年七十四、上人ハイツレノトコロノヒト、イフコトヲツハヒラカ

ニセン、父母ライハス、本宗ヲナノラス、源空上人ニアヒタテマツリテ、無觀稱名ノ義ヲキ、テ後ハ、禮讚モセス、阿彌陀經モヨマス、京師ニ周遊シテ、貴賤ノ衆ヲス、メ、定メタル居處ナシ、ヒトノ道場ヲスミカトス、常ニハ如來尊號甚分明、十方世界普流行、但有稱名皆得往生、觀音勢至自來迎ノ文ヲ誦シテ、于戲南無極樂世界トイヒテ、又トリカヘシテ、觀音勢至自來迎于戲南無極樂世界トウメキテ、悲喜交流ハナハタシ、フツニ、人ノコトヲハスレテ、タ、稱名ヲコト、ス、マコトニコレ多念ノ純本、惠修ノ棟梁ナリ、同時空阿彌陀佛トイウヒト、二人イマス、ヒトリハ高野ノ明遍コレヲハ有智ノ空阿彌陀佛トイウ、ヒトリハコノ上人ハ、コレヲハ無智ノ空阿彌陀佛トナツク、德行ハヤクアラハレテ、名望世ニサカリナリ、高貴トイヘトモ、智人トイヘトモ、ムカウ時ハ必ス敬屈ライタシテ、イサ、カモ橋慢ノ色ナシ、世ノ貴ヒ人ノ仰ク事、先規モ、不聞、後代モイカテカアラム、但シ世ノ人ノオモヘル

カ事ノコトクナル無智ノ人ニハアラス、ソノ故ハ、人
ノ法門ニ付テ、コトノホカナルコトヲイフ時ハ、キ、
カネテヨキ様ナルサカシラシ、又オモヒカケヌ甚深ノ
法門ナトヲノ給ヒテハ、ヒカコトイヒツトオモハレタ
ル氣色ニテ、アラヌサマニ申シナサル、コトノミアリ
ケリト、イマ案スルニ、タ、ヒトニハアラス、定メテ
知ヌ、彌陀ノ二尊カ、ハタ極樂ノ聖衆ノ化來シテ、末
學ノ異義ヲタ、ムカタメニ、外力闍ク、内照テ、無智
ノ相ヲシメシ、無觀ノ稱名ヲ行シ給ヒケルナルヘシ、
モシカ、ラスハ、ヨノヒト歸依ノ、ナムソカクコトク
ササカリナラムヤ、例セハ空也上人ノ一切經ヲ披覽シ
テ、佛法ノ深義ヲ通達シ給ヘリトイヘトモ、父母ヲイ
ハス、居處ヲサタメス、無智ノ相ヲシメシテ、只稱名
ヲ行セシカコトシ、信空上人ノタマハク、空阿彌陀佛
ヲハ、世ニハ無智ノ人トオモヘレトモ、ハレニヲイテ
ハシカラス、一定權者ノフルマヒトミルトコロアルユ
ヘニ、フカク歸伏スルナリト、云々、コノコト、ヒト

ニアヒテノ給ヒシヲ、信瑞マノアタリ聞事度々ナリ、
一念多念ノ座ヲハケテ、彼此混合セス、念佛ノ時ノ終
リコトニ、此界一人念佛名、西方便有一蓮生、俱使一
生常不退、此花還到此間迎、娑婆ニ念佛ヲツトムレハ、
淨土ニ蓮スヲ生スナル、一生常ニ退セネハ、コノハナ
カヘリテ迎ナリ、一世ノ勤修ハ、須臾ノホト、衆事ヲ
ナケステネカフヘシ、願ハ、必ス生レナム、ユメ、
オコタルコトナカレ、光明遍照十方世界、念佛衆生
攝取不捨、此等ノ文讀ヲハ只誦スル事、ソノ式コノ上
人ヨリオコレリ、又風吟ヲ愛玩シテ、テツカラ、ミツ
カラ、ツ、ミモテ念佛ノ道場コトニハ、必スコレヲカ
クト云々、其ノコ、ロイカム、コレニ二義アリ、一ニ
ハ、風吟ハ人力ヲカラス、只風氣ニマカセテ、自然ニ
音ヲ出ス、ソノコエ哀亮ニシテ、人ノ心ヲ盪漉シテ、
和易專一ナラシムルユヘニ、二ニハ、極樂淨土ノ七寶
ノ重樹ノ風ノヒ、キヲコヒ、八功德池ノナミノオトヲ
モハムニモ、イサ、カノナカタチタルヘキカ故ニ、多

事カネソナヘタレハ、一心愛玩カコレニツイテ愛玩ノ先蹤タツネタレハ、義淨三藏即ソノ人ナリ、カタチメニスクスコエミ、ニサラス、遂ニ頌ヲツクリテ、渾身似口一掛、虚空、不同、東西南北風、一等與他談般若、滴打等了滴打等ト已上、所觀ノ旨、頌ノコ、ロニミエタリ、先師法蓮上人イハク、聞、綠竹之美音、與不蕩心、見草木艷色、與不悅目者非出離器云々、イサ、カ存スルトコロアリテ次ニコレヲ記ス、

第五白河上人信空

安貞二年九月コ、ヌカノヒ入滅、時二年八十三、上人ハ、左大辨藤原ノユキタカノ朝臣ノ長男、源空上人ノ上足ナリ、祖父中納言ノアキトキノ卿、息男ユキタカニアヒカタテイハク、我イマタ法師子ヲモタス、第一ノ遺恨ナリ、汝今度マウケタラム子、若男子ナラハ、我カ子トシテ法師ニナシテ、後世ヲトフラハシムト云々、ソノ、チホトナク、行隆ノ室左衛門ノカミ藤原通季卿、ムスメ懷孕着帶ノ後、ソノハ、カタク輩腥ヲ

タチテ、乳養ノアイタ、乳母肉味ヲ食セス、コレ則清淨ノヒシリニツノリタテムトイフ意巧ナリ、コ、ニ黒谷叡空上人ト顯時卿ト、師檀子キリ年シ久シ、ヨテ鍾愛ノマコヲ、叡空上人ノ許ヘツカハス狀ニ云ク、面謁之時、令申候、小童登山、卽剃髮、著法衣、墨染布袈裟入車中、(應)不曆名利之學道、速授出離之要道云々、登山故云、翌日ニ出家、トキニ十二歳ナリ、コノ事ホ、三塔ニキコエテ、禪師ヒシリヲカマムトテ、山僧雲集スル事、數日マテニヤマス、學窓ニ入テ、ツトメテトクヲキ、ヲソクイネテ、師ノサツクルトコロヲハスル、事ナシ、二條院御在位ノ時、行隆祇候アルヒ、主上ノオホセニイハク、實ニ行隆ハタフトキヒシリコモチタルトナト、サ候ト、又平大相國禪門ト、行隆朝臣ト不快ノコトアリテ、向顔セサル事十餘年ノ後、福原ニシテ、ハシメテ對面ノ時、禪門衆前ニ尋ネ申サレテイハク辨殿ノ御息ノ、ヤマノ禪師殿ヲヤムコトナキヒトニテヲハシマスヨシ、諸人沙汰シアヒテ候ヘハ、結緣ノタメニ見參

コソシタク候ヘト云々、カクノコトクノコトヲキ、テ、チ、タリトイヘトモ、オコラス、子ヲミルコト、佛ノコトシ、ムカウ時ハ、衣冠ヲタ、シウシテ、無體ヲイタサス、寂空入滅ノ後、源空上人ヲ師トシテ法ヲ學ス、シカレハ信空上人ハ、源空上人ノ爲ニハ、ハシメニハ同法、後ニハ弟子ナリ、コノ故ニ、源空上人ノ補處トシテ、本尊聖教三衣坊舎、コトノクニモテ相傳シ給ヘリ、オホヨソ一朝ノ戒師、萬人ノ依怙ナリ、コ、ニ或人ノイハク、法蓮上人ハ、戒ハカリコソ、上人ニハ相傳セラレタレ、淨土門法門ハシカラスト、云々、コレヲキ、テノタマヒシハ、上人ハ廿五、信空ハ十二歳、五十餘年ノ同宿トシテ、聖道所學ノ法文ミナモテ傳受セリ、イハンヤ淨土宗ハ書籍ハツカニ十卷カウチナリ、法文ノアサキコト、テノウチノミツノコトシ、信空ヲ淨土ノ法門不知トイフハ、不知子細ノモノナリ、河ハ深キフチハナラス、淺キヨリナルカコトシク、法門モ又然リ、ヨクシリタルモノハ、タヤスク不言、々々ハ

フチナリ、不知モノハセノコトシト云、雅成親王、明禪法印ノモトヘ、不淨ノ時ノ稱名ノ事イカヤウニカ用意スヘキト御尋アリシニ、明禪ワレトハ計不被申、内々コノ上人ニ相傳シテ申サル、御文ニイハク、不淨時稱名事、洗衣浴身アラユ莊嚴道場等、別時之儀候常儀、口稱三昧唯繫念相續、可爲先候、不淨之勤行不可有強憚アラカニ候歟之由、存念候、然而以短才、無左右、計申之條、冥顯之恐、尙難免候之間、相尋信空上人法蓮房、宗行御舎兄、法然上人ノ上足ノ弟子ナリ、之處、御文如此、不申被仰下之旨、内々相觸候仍、他事相交候之間、切出進入候、彼上人内外博通智行兼備、念佛宗先達、可謂傍若無人、申狀尤可爲龜鏡候歟、

切出被進入狀ニイハク、彼不淨不苦正文不覺候、經唯除食時候、善導從不除食時、除睡時候、不論行住坐、淨不淨、意計分明候歟、

夫明禪ハ智德高遠ニシテ道心純熟セリ、自門他門、若ハ貴キモアレ、若ハ賤キモ、イマタ一言ノソシリヲイ

タサス、然ルヲコノ上人ニ歸シテ讚嘆ノコトハ右ノ如シ、法蓮房ハ戒ハカリコソ相傳セラレタレ、淨土法門ハイマタシカラスト云人、此狀ヲ見テ、イカ、會釋セム、上人遷化ノ後四七日、五七日ノ中間ニ、遺弟善空法師臨時ニ佛事ヲ修シテ、法花經ヲ供養スル事アリキ、導師ハ明禪ナリ秉燭ヘイショク以後來臨說法ノ詞ニイハク、明禪ハカクノコトクノ佛前ニシテ、カネヲ打タントイウ誓狀シテ年久ク成候ヌ、一昨日六角、中將入道通金ヲモテ、一寸ナル阿彌陀佛ヲ、モチタテマツリテ、アノ弊坊ニ來リテ、コトサラニ開眼シテト被申候シテ、時アシキヨシ再三申候モテ、理ヲ枉テト返々被申候シカトモ、佛前ニシテ、啓白セント、金ヲ打テ候ヘハ、イカニモカナウマシキヨシ申候シカハ、サラハ此佛ヲ御前ニテ打チクタクムト被申候シカハ、ソレハラムコ、ロニテコソ候ハメ、サレハトテイカ、誓狀ヲハヤフルヘキト申シ候シカハ、不及力シテ、件ノ佛ヲハ打捨テ被候キ、サテ昨日送り奉リ候ヌ、カヤウニカタク誓狀ヲシ

テ候ヘトモ、コノ聖靈ノ御事ハ、他ニコトニ候、ソノユヘハ、淨土ノ法門ヲトヒ奉リ、往生ノ故實ヲ承リテ、信ヲトリ候ニシ後ハ、年來アフキタテマツリテ候シ間、何事ニテ候トモ、コノ聖靈ノ御事ヲハ辭セントオモフコ、ロサシ深ク候ユヘニ、佛モユルシ給ヘトテ、萬事ヲワスレテ、マヒリツルナリトテ、說法クハシカラス、大略三段ハカリナリ、ソノ座ニツラナリシ人々、コレヲ聞テ感嘆セストイフ事ナシ、信瑞幸ニ中陰ニハヘリテ、マノアタリコノコトヲ聞キ、明禪ホトノ人ノカクハカリ信シ給タリシハ、タ、コトニハアラストオホヘテ、隨喜無極リキ、往事ヲオモウコトニ、今モマタシカリ、又信瑞同宿ノ昔シ、決定往生ノ用心ヲ尋ネ申シシ答ニノ給ヒシハ、本願ノコトクハ、念佛申サムモノハ、一人モモルヘシトモミヘネトモ、往生スルモノ、スクナキハ、故實ヲシラサルユエナリ、世間ノ一切ノ事ハ皆ナ故實ノ相傳カイミシキコトナリ、弓箭ヲ取ルモノモ重代ノ武者ヲハアナトラヌ事ナリ、ユ、シケニ

フルマヘトモ、家ヲヲコシタル非重代ノ武者ヲハ、ヒ
トコレヲユルサス、乃至アヤシノ加治番匠マテ、相傳
不絶、故實ヲシレルヲ最トス、今案ノ義ハ、カナラス
アヤマチアル事ナリ、況ヤ無始曠劫ノ間ハナレカタク
生死ヲハナレムオコナヒニオヒテヲヤ、信空ハステニ
コレ、「エイ空
源空相傳シテ、故實ヲウケタルミナリトテ、
甚深ノ故實トモサツケ給ヘシケ、レハ、コ、ニハノセ
ス、別紙ニコレヲ記ス、コ、ヲモテ靜遍僧都ハ、法蓮
房（重代）コソ重代ノ聖リヨ、我等ハ家ヲオコシタル非代重ノ
ヒシリナリトコソ、利口セラレシカ、
念佛ノ義、狀ニノセテ流布ス、ソノ詮要ライハ、下
野守藤原朝臣申ス、去シ貞應三年夏比、コノコロ念佛
ノ義ヲヤウノニ申シ候ヲハ、イカ、オモヒサタメ候
ヘキト、尋申タル返事ニ云、念佛ノコトハ、ヤスキサ
マニテ、様モナキコトニテ候也、シラヌモノトモノソ
ヘナキコト、モヲ申候ヲハ、キ、イレサセ給フヘカラ
ス候、阿彌陀佛凡夫ノ昔シ、國王ニテヲハシマシ、時、

世自在王佛ニアヒタテマツリテ、コ、ロヲ、コシ位ヲ
ステ、ソウニナリテ、名ヲ法藏ヒクトイハレテヲハン
マシ、トキ、卅八願ヲオコシ給ヘルカ、アラハレテ阿
彌陀佛トナラセ給ヘル根本ノ願ヲハ、第十八ノ念佛往
生ノ願ト申ス、ソノ文ニイハク、設我得佛、十方衆生
至心信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺
トイヘリ、コノ文ノコ、ロアラハニミエテ候、佛ヲ得
タラムニトハ、佛ニ成タラム時、十方衆生トハ、極樂
ヨリ西ナラムモノモ、東ナラムモノモ、コ、ロヲハツ
クシ、信シ□□極樂ニ生セムトヲモヒテ、ウルハン
クハ多ク申スヘケレトモ、セメテスクナカラム定十度
ヒ南無阿彌陀佛ト申セハ昔ノ本願ニ叶ヒマヒラスルカ
ユヘニ、極樂ヘマヒル事ニテ候ナリ、コノホカニハ、
又サセル風情モナキ事ニテ候ナリ、タトヘハ人ノ許ヘ
マカラムスル物ハ、ソノトコロノ家主ノ心ニ叶ヒタラ
ムニ、スキタル事ハ候マシキ様ニ、極樂ニマイラム物
ハ、其ノ國ノ主ニテマシマス阿彌陀佛ノ御意ニ叶ヒマ

イラセムニスキタルツトメハ候マシケレハ、阿彌陀佛ノ申カマイルウルハンキツトメニテハ候ナリ、カ、ルコトハリノ候ユヘニ、阿彌陀佛ヲ申セハ、極樂淨土ヘマイル事ニテ候ナリ、コノホカニ様アリテ、觀法ナトヲシテ申ス事ニテハ候ハス、只口ハカリニテ申ス事ニテ候ナリ、サテコレヲハ無觀稱名トイヒ、觀法セスンテ、只口ハカリニミナヲトナウルヲハ、別門ニタテ、念佛三昧ト説ケリ、觀佛三昧、念佛三昧トテ、別段ノ事ニテ候ナリ、名モカハリ、コ、ロモカハレリ、シラヌモノ、コレヲシトケナクトリタカウヘカラス、先師法然上人ノアサユフヒトニヲシヘラレシコトナリ、念佛ニハ、全ク様ナシ、タ、申セハ極樂へ詣ル事トシリテ、コ、ロヲ至シテ、只申セハマイルコトナリ、モノヲシラヌウヘニ、道心モ無ク、イタツラニソヘナキ物ノイフ事ナリ、サイハムロニテ、阿彌陀佛ヲ一念モ十念ニテモ申セカシト候シ事ナリ、又修理亮惟宗忠義、去嘉祿二年秋比、不審十四箇條ヲシルシテ、尋申タル

内、第一ノ段ニ、三心ヲハイカ、コ、ロヘツクヘキトイヘル問ヲ答テ云ク、觀無量壽經ニイハク、若有衆生、願生彼國者、發三種心、即便往生、何等爲三、一者至誠心、二者深心、三者廻向發願心、具三心者、必生彼國、已上、善導和尚同經疏ニ云ク、首須眞實心故、々々名至誠心、二者深心者、卽是深信之心也、三者廻向發願心者、以此自他所修善根、信心廻向、願生彼國、故名廻向發願心ナリ、私云ク文意ヒロキニヨリテ、コトノス、三心ハ唯經、並ニ流文ノ如クハサラニ別ノ義ナシ、アラハニミユルマ、ナリ、經ニ至誠心ト説キ、疏ニ眞實心ト釋セラレヌレハ、往生ノ事ヲナヲサリナラス、ホネニキリ、身ニソメテ、マコトシクオモフコ、ロナリ、二ハ深心トイフハ、深キ信心ト釋セラレタリ、信ニ付テ、二ツノコトアリ、一ニハ、我身ハ是レ罪惡生死ノ凡夫ナリ、六道ニメクリテ苦ヲウケム事、ソノ期イツトカキラス、未來無窮ノ生死流轉無極ト信ス、

是レハ有ルマ、ノ事ナレハ、信スルニモオヨハス、ヤ
スシ、二ニハ、カ、ルミナレトモ、彌陀ノ願力ニ乗シ
ヌレハ、生死ヲハナレ、淨土ニ往生スト信スルナリ、
コノ信ヲカタシトス、コレモ學生ノ我カナラヒタル法
ノ相ニタカヒタルカ故ニ、シハシト、コホルコトコソ
アレ、モノシラヌヒトノ、タ、チニコノヲシヘニアイ
タラムハ、信シヤスキコトナリ、ハカミノワロキニハ
アラス、佛ノ願力ノツヨキニヒカレテ、淨土ヘマヒラ
ムスト、一念モ疑フ心ナクオモフヘキナリ、三ニ、廻
向發願心トイハ、我過去現在、所修善根、及他人功德、隨
喜シタル善根マテヲ極樂ニ廻向シテ、淨土ニ往生セム
ト願スルヲ、廻向發願心トナツク、三心如此、全ク風
情モナキコトナリ、此ヲトコロセク様ニ申ナサムハ、
ソ、ロ事ナリ、經ニモナク、ソノイハレモナカラムコ
ト、モハ、イタツラコトナリ、コ、ロアラム人、タレ
カ耳ニキ、イルヘキ、善導和尚釋シテノ給マハク、若
少一心、卽不得生云々、往生ノ業ニハ、四修三心トテ、

ツカイタルニ、ワロキ行者ノ中ニハ、四修ハカケタレ
トモ、ナラ往生ス、三心ヲハ三ツナカラ必ス具スヘキ
ナリ、然ラ唐朝ニ及ヒ、日本ノ往生傳等ノ中ニ、サル
事有ト名字ヲタニモシラス、一文不通ノ物トモ、皆悉
クニ往生セリ、コレヲ案スルニ、ソノイハレアリ、往
生スルホトノモノニナリヌレハ、サルコト有トシラネ
トモ、三心ヲ必スソラニ具スルナリ、ヒトノタメナラ
ス、我身マコトシク往生セムトオモフコ、ロハ至誠心
ナリ、念佛ヲハ往生スヘシト信スルコ、ロハ、則、深心
ナリ、コノツトメラモテ、極樂ヘマヒラムトネカフハ、
ヤカテ廻向發願心ナリ、此ノホカニ、別ニ三心ナシ、
コノ心ステニ具セリ、往生疑ヒナシ、教文サラニタカ
ハサルモノナリ、

同キ第四段ニ、在家ハ往生シカタク候カ、ソノユヘ
ハ、當時ノ形ニヨリテ、アルイハ殺生、アルイハ姪事、
アルイハ酒肉等、五辛、或ハ名聞、如此ノ事不審ニ候
トイフ問ヲ答テイハク、出家ノ人ハ、佛道ヲ行スルニ、

コトニフレテタヨリアリ、在家ノ人ハ、事ニヲイテサ
ハリオホケレトモ、菩薩ニ二種アリ、イハユル出家ノ
菩薩、在家ノ菩薩也、トモニ菩薩ト名ケ、同シク佛道
ヲ成ル、又佛ニ四部ノ弟子アリ、イハユル比丘、比丘
尼、優婆塞、優婆夷也、イツレモ佛ニツカヘテ生死ヲハ
ナル、皆佛弟子トナツテ、ナラシ大事ナル煩惱ヲ斷シ、
菩薩ニイタル、況ヤ往生ニオイテヲヤ、但シココロ
ノ僧俗、トモニ戒行無ハ、實ノ弟子ニハアラス、假名
ノ弟子ナレトモ、往生ハ餘行ニハニスヤスキ事ナリ、
彌陀念佛ハ、行住坐臥ヲイハス、淨不淨ヲ論セサルコ
トナレハ、イカナル時、イカニツミフカキミナレトモ、
只本願ヲタノミテ、佛名ヲトナウレハ、往生ヲトク、
ココトヲフカク信シテ、實ヲイタスコ、ロサシアラ
ムヒトハ、往生ナムノ疑カアラム、必スタ、出家ノ人
ノミニカキラス、經ニハ、若善男子善女人トコソ説レ
タレ、出家在家共ニ往生ストミユタリ、ヨニアリテ、
オホヤケハタクシニイトマナケレトモ、本願ヲタノミ

テ、淨土ヲネカヒ、身ハイソカシケレトモ、心ニカケ
テイトマノヒマノニモ、念佛スレハ、必ス往生ヲト
クルナリ、唐朝ナラヒニ日本ノ往生傳ニノセタル人ト
モノ中ニ、在家ノ人ソノカスアリ、證據顯然ナルモノ
ナリ、ソノ故ハ、惡ハ善ヲ滅セス、善ハ惡ヲ滅ス、ヨ
キモノニハ、ハロキモノハ□シマクルコトナレハ、善
惡フタツナラヒヌレハ、善ノ力メニヒカレテ、往生ヲ
トク、阿彌陀佛不思議ノ威力マシマス、イカナル威力
ソトイウニ、一度南無阿彌陀佛ト唱ルニ、今生ニオホ
クツクレル罪ノノコリナク、滅スルタニモ、不思議ナ
ルヘキトコロニ、スキタルカタ八十億劫ノアヒタ、ツ
クリツモレル無量ノ過去前生ノツミノ滅ニ、スキタル
不思議ヤハアル、カ、ル事ナレハ、在家ノサハリヲ、
キミナカラモ、往生セムハ、ナムノ疑カアラム、オホ
ヨソ聖教ノ中ニ、惡人ノ生死ヲハナレ、道果ヲ談スル
事、ソノ例オホシ、天台止觀第二ニイハク、和須密多、
姪而梵行、提婆達多邪見、即生若諸惡中一向是惡

不得^{ウツシカト}修道^{ウツシカト}者、如此^{ウツシカト}諸人、永作^{ウツシカト}凡夫^{ウツシカト}ト、釋ニ
 イハク、惡ノナカニモ善アリ、惡人佛道ヲオコナハス
 ハ、ツミツクルヨロツノヒトラハ、ミナイツトナク、
 凡夫ニテハテ、佛ニナル事ハアルヘカラネトモ、惡
 ナカニモ、善ヲ修スレハ、必ス菩薩ニイタル、イカニ
 イハムヤ、往生ハミタノ願力アレハ、ソノカラコハン、
 又念佛ハカリツトムルモ、身ニタヘテヤスキコトノ必
 スカナフミチナリ、ヨロツノ事ニハ、ミナ故障アリ、
 往生ニハモトムレトモ、故障ハ一モイタサレス、ツミ
 ノ深ケレハトテモイフヘカラス、五逆ヲツクルモノ、
 ナホ往生ス、况ヤ十惡ヲハツクレトモ、コレヨリヲモ
 キ五逆ヲハツクラサルヲヤ、念佛ノ功ヲツマストモ、
 イフヘカラス、十念トテ、ハツカニ十返申シテタニモ
 往生ス、イハムヤ申サストイフトモ、一生涯^{カイ}ノ念佛ヲ
 ヤ、ツミヲノミツクレルモノ、臨終ノ時、善知識ニス
 ハ、メラレテ、ハシメテコ、ロヲオコシテ申サム念佛ハ、
 イクサミテヤハリト、嗚呼ノコトニテアルヘケレトモ、

ソノ時、ハツカノ十返モ、念佛ハナラタチコロニシ
 ルシアルコトナリ、善導和尚ノコトク、念佛三昧發得
 シタマヘリ、法照禪師ノ五會讚ニイハク、不簡下智與
 高才、不簡破戒罪根深、但使廻心多念佛、能令瓦礫反
 成金、文、私ニ云ク、智慧ナキヲモキラハス、ツミフ
 カキヲモキラハス、只念佛ハカリタニモスレハ、イカ
 ナル身ナレトモ、瓦ヲ反シテ金トナサムカコトク、凡
 夫ノ肉身ヲステ、法性身ノ菩薩トナスト釋シタマヘ
 ルナリ、同キ第十ノ段ニアルイハ觀佛三昧トイヒ、或
 ハ念佛三昧トイウ、イツレノ説ニカツキ候ヘキトイヘ
 ル問ヲ答テイハク、觀佛三昧トイハ名ヲトナヘス、繩
 床ノ上ニ端坐シテ、心ヲ一境ニ閑ニシテ、彌陀ノ相好
 ヲ觀スルナリ、念佛三昧トイハ、一相ヲモ不觀セス、
 只名號ハカリヲ餘念ナク、一心ニトナフルナリ、是ヲ
 無觀ノ稱名トイフ、オホヨソ淨土宗ノオシヘ、專修念
 佛ノ至極、善導和尚ノマサシキコ、ロハ、コレヒトヘ
 ニ稱名念佛ナリ、專修ノ中ニモ、禮誦觀察等ノ餘行ヲ

ハミナ助行トナツク、カタハラコトナリ、名號ヲ唱フルヲ正行トス、觀法ハココロノヒトハ、□□トカシナク、モノウカリテ、全クセサルコトナリ、念佛ハ口ニ唱ル事ニテ、ヤスクテ、又決定往生スルタヨリヲエタルハ、觀佛三昧ノ義アルヘカラス、一向ニ稱名念佛ヲツトムヘキナリト、已上、

コノ師、今ハ深位ノ大士ナリ、義ニオヒテ、信行人有ハ、引接何ソ疑ハム、

明義進行集卷第二

明義進行集卷第三

第六出雲路、上人覺愉

天福元年癸巳正月卅日入滅、時年七十六、

上人ハ、俗姓ハ平氏、右馬助貞房カマコイチ、文章生

康房 伊勢國住人

庄田進士號 蘭城寺住シテ、天台ノ義淵ヲ良慶よしかた法眼

ニウカ、ヒ、眞言定水ヲ慶範法印ニクム卅有餘ニシテ、ハヤク本寺ヲイテ、ツヒニ桑門ニ入ル、ソノ處ハ、

明義進行集卷第三

光明山ナリ、三四廻ノ後、花洛ニカヘリテ、イツモチニ草庵ヲ經始シス、コ、ニ住、ソノ後、一切經論ヲ披讀シ、モロ／＼ノ章疏ヲ涉獵ス、才學優瞻シテ、遠近タツネテ師トス、シカレトモ出離ノ行業、何事トイウコトヲ不知處、門弟ニカタリテ曰ク、ワレモトハ、四王天ニ生レテ、毗沙門ノ眷屬トナリテ、後佛ノ出世ヲマダムトイウ願アリキ、ソノ義ステニアラタメテ、今ハ念佛ヲ申シテ、極樂ニ往生セムトオモフナリト、發心ノ様、所存ノ赴キ、彼ノ隱遁國ノ記ニミエタリ、サテノチサマニハ、淨土ノ法門ナムトミタテ、隨分ニ弘通アリキ、人來テ、往生ノ至極要ヲ問時キハ、必答曰ク、善導ニヨラハ、願行具足シテムマルヘシト、云々、願トイハ、厭欣ノ心願、行トイハ、稱名ナリト、オヨソハ聖道門ノトキ、本寺ヨリ兩三度、源空上人ノモトヘ參シテ、律ノ法門ノ不審ノ事トモタツネラレケルツイテニ、稱名念佛ノ詮要ノ事モ沙汰アリケルニヨリテ、無觀稱名ニオヒテハ、上人ノ義ニタカハス、若

我成佛、十方衆生、稱我名號、下至十聲、若不生者、不取正覺、彼佛今現在世成佛、當知本誓重願不虛、衆生稱念必得往生、ツネニハ、此ノ文ヲ誦シテ、願ヲエタル事ハ、コノ文ニアリ、念佛ニハ、又風情ナシト云々、暮年ニ中風シテ、大漸キマニソソミテ、弟子等ニイハク、身口ノ二業ハ合期セネトモ、意業ト耳根トハ昔ニタカハス、ミ、ニ念佛ヲ申シ入ヨ、タメニ念佛セヨトコスス、メラレタレト云々、淨土宗ニ付テ、著述オノシメテノ書トモアリ、人握アツク翫ハムシテ、サカリニ布行ス、

第七安居院法印聖覺

天曆二年乙未三月五日入滅、トキニ年六十九、法印者、澄憲法印眞弟子、叡山東塔北谷八部尾竹林房住侶ナリ、靜嚴法印ニシタカヒテ、圓宗ヲ禀承シ、カネテ先師法印ニモナラヘリ、スヘテ一山ノ明匠、四海ノ導師ナリ、又源空上人ニ、日頃ノ妙戒ヲウケ、淨土ノ法門ヲツタフ、上人ツネニノタマヒケルハ、吾カ後ニ、念佛往生ノ義スクニイハムスル人ハ、聖覺ト隆寛

トナリト云々、元久二年八月ノ比、シラカハノ二階坊ニシテ上人瘡病オホキヘイヲシイタシテ、コマツトノヘカヘリ給、又門弟等オノノアヒカタタイハク、イサ念佛ヲ申シテ、オトシタテマツラムトイフヒトモアリ、上人ノ御房ハ、カ、ルホトノモノニハ、ワレラカチカラカナハシ、若シ又俗例ノ爲ニマイレルカトイフ人モアリ、九條禪定殿下、此事ヲキコシメシ、サハキテノタマハク、吾レ案シタリ、善導ヲ圖繪シタテマツリテ、上人ノマヘニシテ供養シタテマツラムト、スナハチ託麻法印證賀ウケタマハリテ、コレヲカキ進ス、後京極殿ソノ銘ヲアソハス、聖覺御導師ニ參勤スヘキヨシオホセラル、オホセニヨリテ翌日拂曉オシツクニコマツトノニ參入シテ、マウシタマウ、聖覺モオナシク瘡病ノ事候カ、シカモケフハヤコリヒニテ候也、何時ハカリヲコラセヲハシマシ候ヤラムト、上人コタヘテイハク、申時ハカリニヤコリ候ナリト、聖覺ハマタイクヲコリ候ナリト、サルホトニ、九條殿ヨリ、善導ナラヒニ布施等ヲクリツカ

ハシタリ、イソケノトテ、香花燈明ト、ノヘテ、ミ
ノハシメニ登禮盤、サルノヲハリニ下座、六ヲコロト
イフヒニアタリテ、サハヤカニヲチ給、又自嘆シテイ
ハク、先師法印カ降雨、聖覺カケウノコト、第一ノ高
名ナリト云々、見聞ノ道俗隨喜セストイフコトナシ、
上人イハク、ケフノ御說法ヨソ、眞實ニ貴ク候ツレ、
一心ニ聽聞シ候ヒツルニヨリテ、オチ候ヌト、云々、
ソノ說法ノ大旨ハ、善導和尚諸宗ノ教相ニヨラスシテ、
淨土宗ヲ興シ、一向專修ノ行ヲ立テ、無觀稱名ノ義ヲ
ヒロメ給事、末代惡世機根ニ相應シテ順次ニ生死ヲハ
ナルヘキヲモフキノ至、大師釋尊モ、トキノ病惱ヲ
ウケテ療治ヲモチキタマヒキ、況ヤ凡夫血肉ノ身、何
テカソノ義ナカラムヤ、然ラ此道理ヲシラサル淺智愚
鈍ノモノ、定テ疑心ヲイタカムヤ、上人ノ化道若佛意
ニ叶テ、順次ニ往生ヲトケ給フヘクハ、衆生利益諸佛
菩薩、佛法守護諸天善神、且ハ所化ノ疑心ヲタ、ムカ
タメ、且ハ佛法ノ威驗ヲアラハサムカタメ、ワカ本師

上人ノ病惱ヲヤメ給ヘト、云々、

トキニ善導ノ眞影ノ御前ニ異香薫スト、云々、
タツネテイハク、佛ノ病惱ヲウケテ、療治ヲモチキ給
フトイフ事、ソノ證ナニ、カイテタルヤ、答曰ク、大
論ノ第九ニ、佛九罪ヲウケ給、難ヲ會シテ曰ク、佛ニ
有二種身、一者法性身、二者父母生身、此法身、滿十
方虛空、無量無邊、色像端正、相好莊嚴、無量光明、
無量音聲、聽□衆亦滿虛空、常出種々名號、種々生處、
種々方便、度衆生、常度一切、須臾息時、是法性身、
佛能度十方衆生、受罪報者、是生身佛、々々々次第説
法如人、法以有二種、佛故受諸罪、無咎、乃至如毗摩
羅詰經中説、佛在毗耶離國、是時佛語阿難、我身中熱
病風氣發、常用牛乳、汝持我鉢、乞牛乳來、阿難持
佛鉢、晨朝入毗耶離、至一居士門下立乞、時毗摩羅
詰在是中、行見阿難持佛鉢而立、問阿難、汝何以晨朝
持鉢立此、阿難答曰、佛身小疾、常用牛乳、故我到
此、毗摩羅詰言、止々、阿難勿謗如來、佛爲世尊、已

過一切諸不善法、當有何病、勿使^シ外道^ノ聞此^ノ僞語、彼當輕、便言佛自疾不能救、安能救人、阿難言、此非我意、面受佛勅、當須牛乳、毗摩羅詰言此難雖佛勅、是爲方便、以令五惡々世、故以是像一切若未來世有諸比丘當發從白衣、求諸湯藥、白衣言、汝自病病不能救、安能救餘人比丘、我等大師獨有病、況我等身如草芥、不能病耶、以是菩薩故諸白衣等、以諸湯藥供給比丘、使得安穩坐禪行道、文、シカノミナラス、興起輕ニハ、佛ヲ頭痛背痛等ノ惱^ヤ座ス事ヲ説ケリ、佛既ニシカリ、弟子又憂ラマヌカレス、ナニヲモテカシルコトヲウルトナレハ、大論廿三ニ、苦相ヲ明シテ曰ク、諸法雖無常、愛著生苦、無所著無苦、問曰、有聖人雖所著可皆有苦、如舍利弗、風裂病苦、畢陵伽婆嗟眼痛苦、羅婆那跋提痔病苦、云何言無苦、答曰、有二種苦、一者身苦、二者心苦、是諸聖人以智慧力故、無復愛愁嫉妬瞋恚等心苦、已受先世業、因緣四大造身、有病飢渴寒熱等身苦、文、又靈魔等ノアルイハ結縁ノタメ、アルイ

ハ聞法ノタメ、人修練行、智德高名ノ人ニ託スル事コレオホシ、其ノ中ニ、一ノ證據ライハ、三井ノ大阿闍梨所勞トキ、給テ、トフラヒニ、恵心僧都ハタリ給タリケレハ、阿闍梨フシナカラノタマハク、病患術無クシテ、行法モステニ退轉シ候、又カクテ、死ニ候ナハ、一定地獄ヘヲチ候ナムスト、カナシクコソ候ヘト、恵心イハク、サレハ地獄トイフトコロノ候カト、阿闍梨サテサハ候ソカシト、恵心ハ無ノ義ヲタテ、阿闍梨ハ地獄有ノ義ヲタテ、ハテニハ病床ニオキ居テ、高聲ニ難詰會釋ノアヒタ、ヤウヤク兩三時ニ及ニ、天井ニ聲アリテ云ク、アナ貴ト、今ハマカリ候ナム、カ、ル貴キ事ヤ承リ候トテ、マイリテ候シホトニ、サセルコトモ候ハテ、イマ、テ候ヒツルコソ、オソレ存シ候ヘト云々、則チ阿闍梨ノ心地サハヤカニナリ給ヌ、人コレヲアヤシミ申シケレハ、恵心イハク、推スルニ昔智行アリテ、貴カリケルタレソヤノ人ノ魔道ニヲチタルカ、法門ヲキテ異執ヲトラカサムカ爲ニ、覺徳モト

、テ尋ネイリテ、ウカ、ウトコロニ、イマノ義ヲ聞テ
隨喜シテサルナルヘシト云々、カレヲモチ、コレヲオ
モフニ、ソノ義タカフヘカラス、聞ム人ウタカハサレ、
雅成親王念佛ノアヒタノ用心、ナラヒニ日々ノ所作ニ、
不淨ヲハ、カルヘシヤ、イナカノコトイカヤウニカ存
ス申トオホセラレタル請文ニイハク、御念佛之間、御用
心者、一切功德善根之中、念佛最上ニ候、十惡五逆罪
障ト云ヘトモ、全、不爲其障、一稱一念力、決定、可令
往生之由、眞實堅固御信受之可候也、聊、猶預之義、努
力、不可候、或憚身懈怠、不淨、或恐心散亂妄念、
於往生極樂成、不定之想、極、僻事ニ候、可背佛意ニ候
也、恐惶謹言、

十二月十九日

法印聖覺御文

追言上

御念佛事、日々御所作、更不可彼憚不淨候、念佛本
意、只常念爲要候、不簡行住坐臥時處諸緣候也、
但毎月一日夜殊御精進潔齋、御念事可候也、其外日

々、御所作、只御手水計、可候也、以此旨、可全披露
給、重恐惶謹言、

又製作ノ唯信抄イハク、往生極樂ノ別因ヲマウケムト
スルニ、一切ノ行ミナタヤスカラス、孝養父母ヲトラ
ムトスレハ、不孝ノ者ハ生ルヘカラス、讀誦大乘ヲト
ラムトスレハ、文句ヲシラサル物ハソミカタシ、布
施持戒ヲ因トサタメムトスレハ、慳貪破戒ノトモカラ
ハモレナムトス、忍辱精進ヲ業トセムトスレハ、瞋恚
懈怠ノタクヒハステラレヌヘシ、餘ノ一切ノ行、又如
此、コレニヨリテ、一切善惡ノ凡夫ヒトシク生レ、□
願ハシメムカタメニ、只阿彌陀ノ三字ノ名號ヲ唱ヘム
ヲ、往生極樂ノ別因トセムト、五劫ノ間深クコノコト
ヲ思惟シオハリテ、第十七ニ、諸佛ニ我名ヲ稱揚セラ
レムトイフ願ヲ發シ給ヘリ、コノ願フカクコレヲコ、
ロフヘシ、名號ヲモテアハネク衆生ヲ引導セムトヲホ
シメスユヘニ、カツ、名號ヲホメラレムトチカヒ給
ヘルナリ、シカラス佛ノ御心ニ、名譽ネカフヘカラス、

諸佛ニホメラレテナムノ要カアラム、如來尊號甚分明、十方世間布流行、但有稱名皆得往、觀音勢至自來迎ト、コノコ、ロカ、サテ次ニ、第十八ニ念佛往生ノ願ヲ發シテ、念佛ノモノヲ導引セムトノタマヘリ、マコトニツラノコレヲオモフニ、コノ願甚深ナリ、名號ハハツカニ三字ナレハ、槃ツク特カトモカラナリトモ、タモチヤスク、コレヲ唱ニ行住坐臥ユエラハス、時處諸緣ヲキラハス、在家出家若男若女老少善惡人ヲモハカス、ナニ人カコレニモレム、彼佛因中立弘誓、聞名念佛我惣來迎、不簡貧窮將富貴、不簡下智與高才、不簡多聞持淨戒、不簡破戒罪根深、但使廻心多念佛、能令瓦礫變成金、コノコ、ロカ、是ヲ念佛往生トス、次ニ本願ノ文ニイハク、乃至十念、若不生者、不取正覺ト、今コノ十念トイフニツキテ、ヒト説ヲナンテイハク、法花一念隨喜トイウハ、非權非實ノ理ニ達スルナリ、今十念トイヘルモ、ナニユヘカ、十返ノ名號ナリト心エムト、コノ疑ヲ釋セハ、觀無量壽經下品下生ノ人ノ相ヲ

トクニ曰ク、五逆十惡ヲツクリ、諸不善ヲ具セル者、臨終ノ時ニ至テ、善知識ノス、メニヨリテ、ワツカニ十返ノ名號ヲ唱テ、即淨土ニ生ストイヘリ、コレサラニシツカニ觀シ、深ク念スルニアラス、タ、口ニマカセテ、名號ヲ稱スルナリ、汝若不能念者トイヘリ、コレ深クヲモハサル旨ヲアラハスナリ、應稱無量壽佛ト説ケリ、タ、アサク佛ノ名ヲ唱ヘシトス、ムルナリ、具足十念、稱南無量壽佛、稱名故於念々中、除八十億劫生死之罪トイヘリ、十念トイヘルハ、只稱名ノ十返ナリ、本願ノ文コレニナスラヘテ可知、善導和尚ハ、深クコノ旨ヲサトリテ、本願ノ文ヲノへ給フニハ若我成佛、十方衆生、稱我名號、下至十聲、若不生者、不取正覺ト云ヘリ、十聲ト云ヘルハ、口稱ノ義ヲアラハサムトナリ、詮ヲヌキテコレヲノス、殘ル所ハ自ラヒラケ、

第八毗沙門堂法印明禪

仁治三年ミツノヘトラ五月二日入滅、時年七十七、

法印ハ、參議藤原成賴卿ノ子、叡山東塔ノニシタニノ
林泉坊ノ住侶ナリ、顯宗ノ師ハ智海法印、密宗ノ師仙
雲法印ナリ、ヨオモヘラク、佛家瑚璉、釋門領袖ナリ
トオモヘリ、ハヤク菩薩ヲモトメテ、ツイニモテ籠居、
信空上人服膺シテ、淨土ノ法門ヲ談ス 最初ニ選擇集ヲ
披テ、問答決疑
ス、其義ミナ信順シテ、歸伏尤モ甚シ、歸伏ノ旨サキニ
ノスルトコロニ
但州ノ御文ニ見タリ、永ク本宗ノ執心ヲステ、無心ノ稱名ヲ行
シ、七萬返ヲモテ、毎日ノ所作トス、雅成親王ノ御尋
ニヨリテ、念佛ノ肝要ノ文ヲ注進セラル、狀ニ曰ク、
稱名念佛ノ肝要ノ文、少々注進上候、可令申給 云々、
抑明禪應勅喚而年久、誤雖備、四宗之證義、遁公御、而日
淺、專未詳九品之淨業、自行念佛、用心尚迷、況注進
之條、旁憚多候哉、仍亘録本文、聊述其義、赴許候、
恐惶謹言、

十二月十八日

法印明禪請文

注進セラル、稱名念佛ノ肝要ノ文ト云者、七件如左、
六時禮讚、善導云、如文殊般若云、明一行三昧、唯勸

獨處空閑、捨諸亂意、係心一佛、不觀相貌、專稱名字、
即於念中、得見彼阿彌陀佛、及一切佛等、問曰、何故不
令作觀、直遣專稱名字者何意也、答曰、乃由衆生障
重、境細心麁、アツキレシク識礙神飛、觀難成就也、是以大聖悲憐、
直勸專稱名字、正由稱名易、ヤスキニ故相續即生、文、

文ノコ、ロハ、文殊問經ニ、不觀相貌、專稱名號ト
テ、佛ノ相好等ヲ觀スル事ヲハラシヘスシテ、名號
ヲス、メタルヲ、衆生ノサハリヲモキユヘニ、觀法
成シカタケレハ、佛アハレミテ、只名號ヲ稱セヨト
、キ給ソト釋スルナリ、

阿彌陀經ノ略記ニ、惠心ノ云、言聞阿彌陀佛、執持名
號者、觀彼無量光明等義、稱名心念多、今觀勝因、故
如是說、非全遮彼但信稱念、文、

小阿彌陀經ノ執持名號ノ文ヲ釋ストシテ、佛、光明等、
觀、シテ名號、稱心、念スル様ヲイヒテ、コレハスケレタル
行ヲス、ムルユヘナリ、只信シテ名號稱スルヲキラウ
ニハアラス、イヘハ觀法モナキ稱念モ往生ノ因ニハ成、

許也、

往生要集下、惠心云、卅八願中於念佛門、別發一願云、乃至十念、若不生者、不取正覺、文、

阿彌陀四十八願ノ中、第十八ノ願、稱名ニカフラシメタル故ニ、コノ願ヲ信シテ念佛ヲスヘキナリ、

西方要決、慈恩云、諸佛願行、成此果名、但能念號、具包衆德、故成大善、文、名號ノ功德コノ文ニキコエタリ、

西方觀經疏、善導第一云、今此觀經中、一聲稱佛、即有十願十行具足、云何具足、言南無者即是歸命、亦是發願廻向之義、言阿彌陀佛者、即是其行、以斯義故、得往生、文、

南無者、歸命度我ノ二義アリ、度我トイフハ引接ニオハシマセトイフ故、發願廻向ノ心ナリ、阿彌陀ノ三字ヲ唱ハ、佛功德ヲ口ニ稱スレハ、行ニテアル故、十念ノ稱名ニ、十願十行アリトイフナリ、願行備ハリテ往生ヲトクルナリ、

往生要集下云、問一切善業、各有利益、各得往生、何故唯勸念佛一門、答今勸念佛、非是遮餘種々妙行、只是男女貴賤、不簡行住坐臥、不論時處諸緣、修之不難、乃至臨終願求往生、得其便宜、不如念佛、文、

諸行中ニ念佛ノ修シヤスキヤウ、コノ文ニミエタリ、臨終ニ往生ヲ願タヨリ有ト云事モ主要ナリ、又經論常說修行ノヤウヲス、ムルニハ、臥ヲハユルサス、今臥ヲモキラハス、サレハ身口ノ不淨ヲモユルスヘントコロヘラレタリ、不論時處トイフハ、不淨ノ時モ、不淨ノ處モ簡ウマシトキコエタルカ、

四分律行事抄終南山道宣云、若□中國本傳云、祇洹西北角日光沒處爲無常院、若有病者安置在中、若有尿屎、隨有除之、亦無有罪、傳云、原佛垂忍土、爲接群生、意在拔除煩惱、不惟糞除爲要、如諸天見人間臭穢、猶人之見屏廁臭氣、難言尙不以惡、恒來衛護、何況佛德而有愛憎、但有歸投者、無不拔濟、或人師引此傳云、坐前有便利、世尊不以爲惡之、

無常院、便利不淨、病人念佛力、淨土往生、不淨ノ時
モ稱名ハ、カラサルカ、カレハ臨終ノ行ナレトモ、不
淨往生ヲサヘハ、臨終トモニユルスヘカラス、又一卷
撰集ノ要文アリ、淺略稱名藏ト號ス、名詮自性ノ謂、
無觀ノ義アラハナリ、シケキヲソレテノセス、已上
諸徳無觀稱名義、粗隨見、及部類誌、

方今末學ノ異義ヲタ、ムカ爲ニ、先^(哲)鼻ノ微言ヲアツム、
是則彌陀本願極致、淨土眞宗ノ精要ナリ、觀願當求往
生者、コノ多分一同ノ化導ヲ信シテ、カノ少分異義ノ
勸進ニシタカフコトナカレ、ナニヲモテノ故ニ、外書
曰、占從二人言、文、疑問トオモフ、問フトキハ、三
人ヲモテ定トス、三人コトハルトトキハ、必二人カ言
フニシタカフ、是多分ニシタカフ心ナリ、多分ニシタ
カヒヌレハ、多分ノアヤマチナキカユヘニ、世間如此、
出世又可然、一種ノ法ニ於テ、異義マチノナリトモ、
多分ノ義ニシタカハ、自行化他サタメテアヤマチナ
カルヘシ、タ、シ多少ノ從不ライフ事ハ、等同ノモノ

ニオヒテ論ス、勝劣ノモノニハ論セス、是ハ普通道理
ナリ、イマハシハラク多少トイフトイヘトモ、ソレ實
キニハ、等同ノ類ニアラス、多ハ勝、少ハ劣ナリ、シ
カレハ勝少トイヒ、多少トイヒ、アニカタク信不ヲチ
キラムヤ、イフコ、ロハ、空上人如來ノ使トシテ利見
シテ、惣シテ諸宗通達シ、別シテハ淨土ニ證ヲエテ、
無觀稱名ノ義ヲヒロメテ、愚痴暗鈍ノ類ヲミチヒキ、
ナラヒニ時ノ明匠又コレニシタカヒテ、異口同音ニコ
ノ義ヲノヘ給フ、顯宗密宗諸宗ノ一宗ヲモ學セス、儒
道二教ノ一教ヲモ窮サルトモカラアリテ、恐情見ノ異
義ヲタテ、上人已下ノ多分ノ義ヲ非ス、謂無觀ノ同
ノ義ハ、勝智多分ノ化導ナリ、情見ノ異義ハ、劣惠少
分ノ勸進ナリ、勝劣二類ニシテ、雲泥萬里ナレハ、多
ヲ信セヨ、少ニシタカヒソトイフニモ不及トナリ、コ
、ロアラムヒト、タレカハキマヘサラム、尙書曰、人
貴舊、器貴新、文、コノ言深クオモフヘシ、愚ナリト
イフトモ、舊ヲハナヲ貴ヘシ、イハムヤ智アラムニオ

ヒテヲヤ、智アリトイフトモ、新ヲハシハラク次ニスヘシ、况ヤ愚ナラムニヲイテヲヤ、重テ求往生者ニ白ス、若一、若二三等ノアリテ、タトヒ通ヲ現シ、光放トモ、數人ノ無觀稱名ノ義ヲ破シテ、ハツラハシキ異義ヲタテ、愚者ヲマトハサムヲハ、信受スル事ナカレ、又阿難入滅ノ悲ヒ、身ニアタリテ切ナリ、聞カム物ハ、分別シテ今邪正ヲワキマヘヨ、問曰、阿難入滅ノ事、ソノユヘヲ聞カムトオモフ、答曰、依律傳等云、一ノ比丘有テ、竹林ノ中ニシテ、法句ノ偈ヲ誦云ク、若人壽百歲、不見水白鶴、不如一日生得見水白鶴ト、時ニ阿難聞キヲハリテ、比丘ニ告テ云ク、汝カ誦スルハ佛語ニハアラス、若シ人壽百歲、不了於生滅、不如一日生、得了於生滅コレコノ佛偈ヨ、カクノコトク誦スヘシト、ソノ時ニ、カノ比丘、阿難ノ教フル偈ヲモテ、己カ師ニカタル、師云、阿難老朽テ、智惠衰劣ニシテ、言多錯認、不可信^{ニシヤクキ}矣、汝只我教ヘシ偈ヲ誦セヨト、比丘是ニ隨フ、阿難後ノ時ニ聞ケハ、比丘

又サキノ邪偈ヲ誦ス、阿難ソノ心ヲ問フ、比丘答曰ク、尊者、我師ノ云ク、阿難老朽テ言虛妄多云々、依之、阿難聞テ悲泣シテ云、嗟、世尊ハヤク滅シ、迦葉尋テ滅ス、邪見熾盛ニ、不善長シテ、如來ヲ誹謗シ、正教ヲ斷絶ス、我レ世ニモチキラル、コトナン、生テ邪教ヲキ、惡行ヲミムニ、豈ニソノフヘケンヤトイヒテ、即入滅スト云、夫阿難ハ多聞第一ニシテ、佛ニ仕フル事廿五年、聞シ所ノ八萬法藏、ミナ誦シテハスレス、佛ト迦葉トヲノソヒテハ、是ヲ大法得トス、然ラ邪見ノ一類アリテ、阿難ヲ非シ、自義ヲ是ス、古今異ナリトイヘトモ、邪正ノ旨一ツ也、イハユル昔ハ即天竺ニ一類アリテ、如來已下ノ正偈ヲ非シテ、自カ邪偈ヲ是ス、コレヲ信スルモノアリ、今ハ又日域ニ一類有テ、上人已下ノ正義ヲ非シテ、自カ邪義ヲ是ス、コレヲ信スルモノアリ、昔ヲ聞テ、今ヲオモフニ、悲嘆モマコトニ深シ、邪正モワキマエツヘシ、識アラムモノ、ナムトマトハムヤ、問曰ク、夫智惠ハ、諸佛ノ母、萬行

ノ根本也、是以六度ノ中ニハ、般若ヲ第一トス、ステニ往生ヲネカヒ、佛身ヲ期ス、佛ハ即コレ智恵ノ究竟セル名ナリ、若シ其名ヲモトメハ、嗜テモカツク解ヲ發シテ、タヘムニシタカヒテ、彌陀ノ功德ノ極樂ノ依正ヲ觀セシムヘシ、何ソヒトニ智恵ヲ撥無シテ、只無觀ノ稱名ヲノミス、ムルヤ、コレ大ニ佛法ニソムケリ、イカム、答曰ク、佛法ニオヒテ、智恵ヲ最勝トストイフ事、不論處也、今一代ヲハカツニ二種アリ、イハク、正道ト淨土ト也、カノ聖道門ハ智恵ヲキハメ、生死ヲハナレ、此淨土門ハ愚痴ニ還テ極樂ニムマル、二門オナシク一佛所說ナリトイヘトモ、廢立參差トシテ、天地懸隔、是則大聖ノ善巧、利生ノ方便也、常途ノ教相ヲ以テ、カタク難スヘカラス、

問曰ク、コノ義サキノ難ヲ遮セス、ナムカユヘソ、智恵ヲ廢シテ、テ、無觀ノ義ヲ立耶、答曰、阿彌陀如來法藏比丘ノ昔シ、成就衆生ノ行ヲタテ給ヒシ時、惣シテハ罪障深重ノ類ヒ、別シテハ濁世愚鈍ノ族、生死ノ

盡期无ラム事ヲカナシムテ、其ヲ救ハムカ爲ニ、觀念思惟、布施持戒等ノハツラハシキ諸行ヲサシヨキテ、五劫ノ案ニツカレテ、稱名ノ願ヲオコシ給ヘリ、コレヲ超世ノ誓願ト名ケ、是ヲ不共ノ利生トス、深ク其願ヲ信シテ名號ヲ稱念スルハ、愚癡ヲ不論、持犯ヲエラハス、十八即十生、百即百生ル、コノ故ニ釋尊ノ付屬、諸佛ノ證誠、只名號ニカキリテ、觀佛ニハ不通、方ヲ指シ、相ヲ立テ、深理ヲ明ス事無シ、無觀ノ義文理必然也、信行ノ外ニハ義ナキヲ義トス、但無觀ノ稱名トイヘハトテ、惠解有ラム人ノ彌陀ノ内證ノ外用等ノ功德、極樂ノ地下地上等ノ莊嚴ヲ觀ヲハ遮セス、今論スルトコロハ、義道ヲ旨トシテ、但信稱念ノ行者ヲ下ヲ痛ヲモテノ故ナリ、又淨土ノ門ハ、愚癡ニ還テイヘハトテ、念佛ノ衆生ヲナカク愚癡ノ人ナリトオモフ事ナカレ、故イカン、愚癡相ヲ表タツトイヘトモ、智恵ノ躰、其裏ニ有カ故ニ、シハラクコレ表裏ノカハリメナリ、定執スヘカラス、

問曰、淨土門ハ愚癡ニ還トイフ心イカン、答曰ク、モト聖道ノ諸宗ヲ學セル碩德、後ニ淨土門ニ入テ、明ニ宗ノ意ヲウルニ、本願ノ奥旨、往生正業ハ口稱念佛ナリトミツメツル上ニハ、自宗ノ觀佛三昧ナラ廢ス、況ヤ他宗ノ深觀ヲヤ、唯稱名ノ外ハ、全ク他事ヲハスル、其體惘然トシテシル事アタハサル物ニナリ、カルカ故ニ、愚癡ニ還ルトイウ、上ニアクル所ノ衆所智識則其人ナリ、

問曰、智惠ノ體其ノ裏ニ有トイヘル心イカム、答曰、原夫、彌陀則受用智惠眞身、名號又五智所成、惣體也、若人有信、稱念スレハ念佛ニ八十億劫ノ罪懃ヲ滅シ、聲々ニ無上功德ノ大利ヲ得、此ノ故ニ可知、念佛ノ衆生ハ一世ニスミヤカニ、相好ノ業因ヲ植ヘ、現身ニ福智ノ資糧ヲ蓄フ、表愚癡暗鈍、凡夫ニニタリトイヘトモ、裏ハ六度萬行ヲ修スル菩薩ト同シ、若然ラスハ、イカテカ形チヤフレ、命チ盡キテ、有漏ノ穢國ヲイテ、無爲ノ報土ニマイリ、忽凡夫ノ性ヲステ、永ク法性ノ

身ヲ證セムヤ、定メテ知ヌ受用智惠ノ佛ヲ仰キ、五智所成ノ名ヲ信シテ、如此ノ勝益ヲウル物ハ、實ニ是智度純熟ノ菩薩ナリ、何ムソ愚癡暗鈍ノ凡夫ト云ハム、是ヲ智體在裏トイフモ、義シツカニヲモフヘシ、問曰、智者愚者持戒破戒等ノ、モロ／＼ノ人有、同ク名號ヲ唱ヘムニ、行者ノ善惡ニヨリテ、功德ニ淺深アリヤ、答曰ク、全クナシ、何ヲモテカ知事ヲ得トナレハ、彌陀ノ本誓ハ、萬機ヲ名號ノ一願ニオサメ、千品ヲ口稱ノ十返ニ迎テ、此内ニハ餘事ヲ論セサルカ故ニ、是以法照禪師ノ五會法事讚ニ云ク、彼佛因中立弘誓、聞名一念我惣來迎、不簡貧窮將富貴、不簡下智與高才、不簡破戒罪根深、但使廻心多念佛、能令瓦礫變成金、已上、フカク此旨ヲシリナハ、ナムソウタカハム、空上人ヲ始トシテ、サハヤカニ本願ヲ信スル家、此文ヲ眼目トス、又私ニ案シテ云ク、譬金玉アタヒサタマレルカユヘニ、モツ人品ニヨリテ高下ヲ論セス、日日ノ光ノスメルニ宿トル水ノ淨穢ニシタカヒテ、形ニ差別

無キカコトシ、物ノ至テ精ナルトキハ、器ニシタカヒテ變スル事ナシ、世間ノ淺事スラ、其德如此、況無上功德ノ名號ニ於テヤ、凡ソ其ノ名號ノ功德ハ、言語道斷シ、心行所滅シテ、三賢十聖モ知ル處ニアラス、是唯佛與佛密意也、アニ行者善惡ニヨリテ、功德ノ淺深ヲハキマエムヤ、此猶本宗ノ執心ニカ、ハレテ、無觀稱名ノ義ヲ信セサル疑也、

問曰ク、抑此念佛ノ教ハ、末代惡世ノ已來、日本一洲ハカリニ興行スル哉、爲當天竺震旦諸國、並ニ在世滅後、正像ノ時分ニヲイテ、ヲナシクコレヲ行ストヤセム、又此ノ世間ニカキラス、他方界ヨリモ、往生スルモノアリヤ、答曰、日本一洲ニカキラス、天竺震旦ノ諸國、同クコレヲモチキ、末代惡世ノホカ、在世滅後、正像ノ時分ニサカリニコレヲ行ス、又コノ世間ノミナラス、他方界ヨリモオホク往生ス、今一々ニ證ヲ引テ疑ヲ決セム、一ニ如來在世ニ念佛ヲ行セシ證者、觀無壽經云、五百侍女、發阿耨多羅三藐三菩提心、願

生彼國、世尊悉記皆當往生、寶積經云、七萬諸尺種、人中命終、已得生安樂國、面奉無量壽、已上、五百侍女七萬尺種、同ク佛世ニ生テ、新ニ佛ニアヒタテマツリ、佛タメニ、往生ノ記ヲサツケ給フ、定テ知ヌ、受記ノ後、命終ノサキ、往生ノ行ヲ修シケムトイフコトヲ、又五百ト、七萬トノ眷屬等、同クシルヘシ、此外彼等ヲ見聞シテ、極樂ヲネカヒ、念佛ヲ行スルモノ、又オホカリケム、是則如來在世ノ念佛修行ノ證誠也、
二ニ、天竺ニ、正法ノ時、念佛ヲ行セシ、證者、入楞伽經ニ云、如來滅度後、於南天國中、有大德比丘、名龍樹菩薩、能破有無見、爲人說我乘大乘無上法、證得歡喜地、往生安樂國、已上、龍樹如來滅後五百三十年ニ出世ス、アルカイハク、七百年ト、住壽三百餘歲、所度衆生無數ナリ、設ヒ機ニ隨ヒテ說法ストイフトモ、アニオホク極樂ヲス、メサラムヤ、又滅後九百年ニ、天親菩薩出世シテ、造論義解ノヒマニ、往生人ヲシルシ給ニ、中天竺ニ、ヒトヘニ彌陀ノ名號ヲ唱テ、極樂

ニ往生セル男女、王氏七千五十九人、其中ニ、日々ニ一萬遍ノ念佛ヲ行シテ往生セルモノ、一千九百十人、餘行不同ナリ、因ハ不同ナリ、或ハ一生ノ間、念佛百萬反ヲ行シ、或ハ一生ノ間、五戒十善ヲタモチテ、極樂ニ廻向等セリ、七千五十九人中ニ、現身往生ノ人十三人、ミナコレ小ヲカストシテ念佛ヲ修セシ人也、西天竺ニ、一向ニ阿彌陀佛ノ名號ヲ稱シテ往生セル人、三萬五千九百人、此中ニ毎月十五日ニ因果ヲ信シテ、極樂ヲ願テ往生セル人、七百人、毎日酉時、日想觀ニ住シテ、阿彌陀佛ヲ念シタテマツリテ往生セル人、百五十人、但シ三萬五千九百人カ中ニ、現身往生ノ人、百八十人、多クハ是彌陀ノ像ヲモト、リノ中ニ安置セル輩也、凡天竺ハ大國ナルカ故ニ、五天竺マテヒロクハシルシエス、ワツカニ中天西天ノ二天竺ヲシルスニ、四萬二千九百五十九人ナリ、五天皆求メハ其數ハイクハクト云事ヲシリカタシ、コレ又天竺ニ正法ノ時ノ念佛ヲ行セシ明證ナリ、

三ニ、天竺ニ像法ノ時、念佛ヲ行セシ證者、如來滅後、一千六百五十餘歲ニ、唐洛陽ノ惠日法師、如來ノ遺跡ヲオカママムカタメニ、則天皇皇后御宇大足中ニ、船ヲ東南ノ海上ウカヘテ、崑崙、佛耆、師子等ノ諸國ヲスキテ、ツイニ天竺ニイタリテ、知識ヲトフラフ事、一十三年、法訓ヲウケテ、日々ニムナシクハタル事ナシ、深ク闊浮ヲイトイテ、アマネク天竺ノ三藏ニ問テ曰ク、イツレノ國、何レノ方ニカ、樂アリテ苦ナキ、何レノ法、何ノ行カ、速ニ佛ヲ見奉ト、三藏皆淨土ヲホメテ云ク、教主ハ慈悲深ク、願ヒロシ、生ムト願フモノハ、トケストイフコトナシト、法師コレヲキ、テ、喜羅無極ハ健駄羅國ニ至ルニヲヨヒテ、其城ノ東北ニ大山アリ、山ニ觀音ノ像イマス、祈禱ヲ專スレハ、身ヲ現シテ説法シ給フトイフ事ヲキ、テ、法師七日食ヲタツ事ヲチカヒテ、祈ルニ七日ノ滿ニ至テ、夜イマタナカハナラサルニ、觀音空中ニ一丈餘ナル紫金ノ相ヲ現シテ、寶花ニ坐シテ、右ノ手ヲモテ、法師ノ頂ヲ摩テ、ノタ

マハク、汝法ヲ傳テ人ヲ利セムト思ヒ、又彌陀佛ノ國ニ生レムト思ハ、汝只思ヲカケヨ、何レカ願ノコトクナラサラム、汝マサニシルヘシ、淨土ノ法門ハ、諸行ニ勝過セリト説キオハリテ無見事ニ知識ノ答、觀音ノ説、一同ナルカ故ニ、本懷既ニトケテ、震旦還、西邁ヨリ東歸ニ至ルマテニ、惣シテ廿一年、七十餘國ヲヘテ、開元七年ニ長安ニ達シテ、佛ノ眞容梵筈ヲ玄宗皇帝ニタテマツル、帝其德ヲ貴ヒテ、慈悲三藏ト號、(案)今安スルニ、諸國ノ三藏皆讚シ、大山ノ觀音同ク教ヘ給ヘリ、天竺ニ像法ノ時、念佛ヲ行スト云事、的據如此、疑慮永除クヘシ、

問曰ク、天竺ニ、在世正像アマネク念佛ヲ行ストイフ事、其證實ニシカリ、末法如何、答曰、月支日本境トラク相隔テ、末法ノ行事暗ニモテ難決シ、シカリトイヘトモ、今一義ニ付テ、天竺國ノ遺法興滅ノ相ヲ推セハ、玄奘三藏修行ノ時、靈鷲山ノ說法ノ砌ハ虎狼ノスミカトナリ、祇園寺ノ佛閣ノ臺ハ、荆棘ノミシケレ

リ、シカノミナラス、商那和須カ九條ノ袈裟スコシキ變懷シ、(變)金剛座ノ南隅ノ觀音没シ給フ事、胸ニスキタリ、シカルヲ玄奘三藏還來ヨリ已來、イマニ六百餘歲也、定テ知ヌ、今ハ袈裟モ、悉クニ變懷シ、觀音モ皆滅没シ給ヌラム、若然ハ、佛法ノ滅盡シタカヒテ推スヘシ、但當來之世、經道滅盡、我以慈悲哀愍、特留此經、止住百歲ハ、釋尊ノ金言ナリ、娑婆世界ノ中、何ノ處カ、此利益ニモレム、萬年ノ後、猶ヲシカリ、況ヤ萬年ノ内ニオヒテヲヤ、餘教ハタトヒ滅ストイフトモ、念佛ノ一法ハ、イマニ猶サカリナラム、

四ニ震旦ニアマネク念佛ヲ行セシ證者、釋尊入寢ノ後、一千十六年ヲヘテ、後漢ノ明帝ノ永平十年ニ、教法始テハタル、イハユル攝摩騰、竺法蘭ノ二僧、白馬ニ經ヲノセテ、帝ニ朝見シ、釋迦ノ像、並梵本ノ經ヲタテマツルコレナリ、依テ始メテ白馬寺ヲ立ツ、勅有テ像ヲ南宮ノ清涼臺ニ置ク、則命シテ四十二章經ヲ翻譯シテ、蘭臺ノ石室ニオサム、是則漢國ノ三寶ノハジメナ

リ、タ、シ四十二章經ハ、小乘ナレハ、淨土ノ事ヲ明サス、同キ世ニ、安世高無量壽經ヲ譯シ、支婁讖平等覺經ヲ譯セシヨリ、人皆彌陀ノ本願ヲシリ、世コトコトク西方淨土ヲ願フ、下テ晋朝ニイタリテ、廬山ノ惠遠禪師、外ノ六經ニ通シ、内ノ三藏ニ明ナリトイヘトモ、西方ノ教ヲ以テ、コトニ樞要トシテ、則崑下ニ淨土觀堂ヲ造テ、朝夕ニ禮念ス、トキノ高僧名士、皆モチテ師トス、彭城劉遵民、豫章雷次宗、廬門周續之、新蔡畢穎之、南陽宗炳等、並ニ世ヲステ、榮ヲハスレテ、法師ニシタカヒテ遊止ス、法師遺民ヨリシモツカタ僧俗一百廿三人ト、精舍ノ無量壽ノ像ノマヘニテ、誓ヲ發シテ關ヲタテ、香花ヲ供養モテ、共ニ安養ニ登ラムト期ス、法師居ヲ廬山ニトテ、後卅餘年、影ヤマヲイテス、跡俗ニイラス、晋ノ義熙十二年八月六日入滅、時ニ年八十三ナリ、又朝ノ同ク山ノ惠永、僧濟、嘉祥寺ノ惠虔、長安ノ僧叡、宋江陵曇鑒、同キ交趾曇加曆、靈遠寺ノ法琳、同高座寺惠進、梁正覺寺ノ法悅、

同南潤寺ノ惠超、陳南岳思禪師、魏玄中寺曇鸞、コレハコレ一時ノ明匠、諸衆ノ導師也、皆西方ヲモテ所期トス、コノ外、高僧傳、ナラヒニ諸ノ往生傳等ニノスルトコロノ明德高僧、且千ナリ、アケツクスヘカラス、又隋朝ノ智者大師、一切經十五遍披讀シテノタマハク、諸經論ニ、處々ニ唯勸衆生、偏阿彌陀佛、令求西方極樂世界、無量壽經、觀經、往生論等、數十餘部ノ經論文、懇勸指授勸生西方ニ是以偏念也、已上、又摩訶止觀ニ、四種三昧ノ中ニ、第一常坐三昧ノ身ノ開遮ニ、隨一佛方面、端坐正向ト、居説キ給ヘルヲ、妙樂釋シテノタマハク、隨一佛方面等者、隨向之方、必須正西居、障起時念佛、便故經雖不局、全向西方、障起既令專稱一佛、諸教所讚、多在彌陀、故以西方而爲一唯、已上、天台ハ、タ、一佛トイヒテ、ナニ佛トモノタマハヌヲ、妙樂ハ、一代諸教ニ、オホク彌陀ヲホメタレハ、コノ一佛トイヘルハ、サタメテコレ彌陀ナルヘシト得心タマヘルナリ、唐ノ代ニイタリテハ、道綽善導ハ、モハ

ラ淨土ヲヒロメ給シカハ、イフニオヨハス、又白樂天文珠(珠)ノ化身トソ、代宗ノ時、大曆六年正月ニ、鄭州ノ新鄭縣ノ東郭ノ宅ニムマレテ、武宗ノ時、會昌六年六月ニ、東都履道里ノ私宅ニオハル、忽シテ八代ノ御門ニアヒタテマツリ、トシヲウケタルコト七十五歳、文ヲノフルコト、前後七十句、合シテ三千七百廿五首、先時モタクヒスクナク、後代モナムソアラム、六十九ノ春風、痺ノヤマヒニヲカサレテ、俸錢三萬ヲステ、工人杜宗ニ命シテ、阿彌陀無量壽ノ二經ニヨリテ、タカサ九尺、ヒロサ一丈二尺ナル極樂ノ曼陀羅ヲカキテ、記ヲ製、諦觀此娑婆世界、微塵衆生、無賢愚、無貴賤、無幻□、有悲心、後佛者、舉手合掌、必先禱西方、有怖厄苦惱者、開心發聲、必先念阿彌陀佛、又錠金合土刻石織文、乃至印水取砂、童子戲者、莫不率以阿彌陀爲上首、不知其然、而由是、而觀是、彼如來有大誓願於此衆生、此衆生有大因緣、於彼國土明矣、不然南東北方、過現來佛多矣、何獨如是哉、已上、莫不率以阿

彌陀爲上首、詞信トラムモ、イヨ／＼隨喜スヘシ、五ニ、コノ世界ニカキラス、他方界ヨリモ、オホク往生スル證者、無量壽經下云、彼佛國佛告彌勒菩薩白佛言、世尊於此世界中、有幾所不退菩薩、生彼國、佛告彌勒、於此世界中、六十七億不退菩薩、諸小行菩薩不可稱計、皆當往生、不但我利諸菩薩等、往生他方佛土、遠照佛國百八十億菩薩、寶藏佛國九十億菩薩、無量音佛國二百二十億菩薩、甘露味佛國二百五十億菩薩、龍勝佛國十四億菩薩、勝力佛國萬四千菩薩、師子佛國五百億菩薩、離垢光佛國八十億菩薩、德首佛國六十億菩薩、妙德山佛國六十億菩薩、王佛國十億菩薩、無上花佛國無數不可稱計、菩薩無畏佛國七百九十億大菩薩衆、諸小菩薩及比丘等、不可稱計、皆往生、彌勒不但此十四佛國中、諸菩薩等、當往生、十方世界無量佛國、其往生者亦復如是、甚多無數、我但說十方諸佛名號、及菩薩比丘生彼國者、晝夜一劫、尙未能竟、我今爲汝略說之耳、善導曰、莊嚴無有盡十方生者、亦無窮惠心曰

或見衆生如駛雨シツク從十方世界生、或見聖衆如恒沙、從無

數佛土來、曠劫クワツクヨリコノカタツネニ没シ、ツネニ流轉

シテ、出離ノ緣ナキ身、シラスイカナル宿善アテカ、

イマコノ要法ニアヘル、コレ權身ノ極ナリ、發心以後、

誓コノ生ヲオフルマテニ、退轉有ル事ナクシテ、タ、

淨土ヲモテ期トセム、一心ノ眞實、三寶照覽シタマヘシタマヘ、

見ン人コ、ロヲオナシクセハコレハカヨキトモナリ、

明義進集卷第三

(別筆三行)
古人云

世ノウサニカエタル山ノスマイラルトワヌソ人ノナサ
ケナリケル

于時弘安六年五月廿二日於

泉州山直郷多治米村安樂寺之砌、爲佛法興隆、

書寫畢

願以書寫功德力

廻向二親及法界

(別筆五字)
所迎法師之

共生西方極樂界

頓證菩提利群生

僧惠鏡之

知恩講私記

先三禮

次表白

敬白無量壽佛觀音勢至念佛通諸…聖靈等而言西方極樂教者五濁惡世之明眼…也南無彌陀行者衆生直往之要路也爰先師…上人弘以此教勸以此行…道俗悉歸如草靡…風信之仰之感應亦新此化不限在世…其益…彌盛…滅後…恩高…於山…德深…於海萬劫億劫…謝…巨報不…如恒唱…佛號順…彼本懷…今讚…五…德…欲…勵…四輩…往生正業只在…此事…誓畢…一生…誓…勿…退轉…矣…

第一讚…諸宗通達德…者俗…姓漆間…氏美作州…人也…生年三五春始藝三四明山…同年仲冬登…壇授戒習…學…法華宗…一歲…月雖不…幾…具達…文…一理…殆…拉…宿老…十八歲之秋適…名…栖…黑谷…爾…降…一…

知恩講私記

切經律論鑽仰忘眠自他宗章疏卷舒無…此外和漢兩朝傳記古今諸德祕書何不一携…何…不…浮…心…乎訪…六…宗洪才…面…談…義理探諸…家…與…旨…一…蒙…許可…舉…世稱…智…惠…第一…宜哉誠哉…就中天台圓頓菩薩大乘戒、鉢戒儀相承在…一身…天皇以下海內貴賤爲傳戒師…崇重…異…他……凡於顯密行業…修…練盡力…非…名…非…利唯爲…無…上道…也然則本國明師還成…弟子…黑谷…尊師押爲…軌範…與福寺…者德稱…佛…陀…展…供養…東大寺長…一老爲…和上…受…圓戒…智解拔…群…尤足…敬…重…夫雖…明…一…代教法…限…歸…彌陀本願…憐…濁…世機…爲…三度…愚…一…惡…也若有…自…立我慢人…毀…滅諸教得道…惑…亂…一宗…正行…既背…先師誠敢不可依…用…顯分…立行…以…之…爲…要…謹守…遺…訓…勿…拘…偏見…矣頌曰…

一切如來設方便 亦同今日釋迦尊…隨喜說法皆蒙益
各得悟解入眞門…

南無尊重讚嘆先師聖靈…

第二讚本願興一行德者西方教文諸宗同…既其中天台
 花嚴三論法相皆作章疏雖解…經文各會自宗暫隱
 願意是即權化善巧…知時方便而未學膚受起
 我生慢自是非…他罪報難遁者歎龍樹智論曰自
 法愛染…故毀譽他人法雖持戒行人未脫地
 獄苦此…誠甚重可恐々爰漢家曇鸞道綽善導…懷
 感本朝空也惠心永觀珍海專歸彌陀一偏…勸念佛雖
 然學者泥聖道淨土之難易…行人迷自力之是非
 先師摧骨肝一尋往生…要惠心之祕懷善導為規模
 是以上人自述曰…善導是彌陀化身也可謂此疏彌
 陀直說既云…欲寫者一如經法上此言誠乎披
 閱茲典粗識素意立舍餘行茲歸念佛…問
 津者示以西方通津尋行者詢以念佛佛一行
 …信之者多不信者少云々今見世間此事實然…
 計知非直一人也因茲或云彌陀化身或云勢至…垂
 跡或云道綽來現或云善導再誕皆是夢中…得告眼前
 見證一伏以彌陀如來勢至菩薩一而…不二道綽禪師善

導和尚一不盍是鑿機…知時以智救人一也
 當知善導和尚證定疏正是…淨土宗之濫觴源空上人
 選擇集專為他力門…之指南各一心合掌讚興
 宗之德矣頌曰…

普願有緣同行者 專心直入不須疑…一到彌陀安養國
 元來是我法王家…

南無尊重讚嘆先師聖靈…

第三讚專修正行德者念佛行人雖多…專修專稱甚
 稀或自力為心空疲業行…或我慢為先恣輕諸教
 邪魔得便寧…非此故乎求者千萬得無一二職
 而因斯…爰先師上人捨聖道門入淨土門出難行
 …道趣易行道改自力心歸他力願六時禮讚…
 多年積功別時念佛幾許累德時々欣…求百千
 廻日々稱名七萬遍願力不思議故初…常見寶樹寶
 宮殿佛力不思議故後親拜…化佛化菩薩閻夜雖無
 燭光一明照如晝見…室內外似向明鏡口稱之方
 現身得證等導…和尚同感禪師寧非一向稱名功

乎寔是…專修念佛德也。行順三本願。勤稱佛意。以…
之爲驗。以之爲證。彌堅信心。勿緩敬心矣。頌曰
…觀經彌陀經等說。卽是頓教菩薩藏。一日七日。專稱佛命。
斷須臾生安樂…

南無尊重讚嘆先師聖靈…

第四讚決定往生德。者廣考舊傳。多載瑞相。然先
師上人種靈異。連々奇瑞。人備口實。世皆所知也。
未點幕所。兩三人夢。相當彼地。天上童子。行道蓮花。
開敷三四年。來耳目蒙昧。而近大漸期。聞音見色。忽
…以分明。人間云。今度往生極樂。決定歟。答云。彼土我
本國定可還。往觀音勢至等聖衆。來現在眼前。前之由度
々示之。聞紫雲現。便語云。我往生者。爲諸衆生也。亦
臨其期。三日三夜。或一時。或半時。高聲念佛。聞者皆驚。
廿四日酉。冠以稱名。迫躄。無間無餘。助音人々…
雖及窮屈。暮齡病惱。身勇猛。不絕聲。未曾有
事也。明日往生之由。依夢想告。驚來。逢終焉者。五六許
輩也。臨終時。唱四句文。光明遍照十方世界。念佛衆生攝

知恩講私記

取不捨…是也。有雲客。七八年前夢。上人臨終。可誦
…此文。往日之夢。與今符。合誰不歸信乎。慈覺大
師九條袈裟。頭北面西。如眠取滅音聲。止後猶
動唇舌。十餘遍許。也面色殊鮮。形似咬。于時
建曆二年正月二十五日午。正中也。春秋滿八十一。同釋尊
去世。几瑞異連綿。不遑羅縷。各擬無感情。可
望一佛土緣矣。頌曰…
一々光明相續照。照覽念佛往生人。欲比十方諸佛國。
極樂安身實是精…

南無尊重讚嘆先師聖靈…

第五讚滅後利物德。者命盡魂去。空留名。字。爲自
爲他。有何益哉。然先師上人。就淨土宗義。示凡夫
直往之經路。顯選擇本願。爲念佛行者之龜鏡。餘
恩當沒。後而彌盛。遺德齊。在世而無變。朝野
遠近同望。寶利之月。貴踐男女共欣。檀林之風。所以
…或乘紫雲。或坐蓮臺。或聞異香。或見光明。或拜
化佛。或交聖衆。長出娑婆。忽移淨土。視聽所觸。滿

目滿_レ耳酌_ニ流_ニ尋_ニ源_ニ偏_ニ…先師恩_ノ德也然則詣_ニ廟堂_ニ
祈往_ニ生禮眞_ノ影_ニ…戀_ニ禪容_ニ者引_ニ友成群_ニ夜以續_ニ晝_ニ
就中年々…孟春廿五之候月々下旬第五之天連_ニ袖_ニ接_ニ
肩_ニ…不_ニ異_ニ盛_ニ市_ニ明_ニ知時_ニ機相_ニ應_ニ之遺誠勝利…廣大_ニ
之所致也四十遠皆若_レ斯況門弟受_レ訓…乎如父母恩_ノ勿_レ
忘_レ先_ノ師德_ノ矣頌白…

何期今日至寶國 實是娑婆本師力…

若非本師知識勸 彌陀淨土云何入…

南無尊重讚嘆先師聖靈…

六種 回向 如常…

安貞二年八月十二日以上蓮房本…

書寫了

信阿彌陀佛

圓光大師略傳

洛東華頂山大谷寺吉水知恩教院開山鼻祖

圓光大師略傳

大師諱源空號法然。姓漆氏。作州久米郡稻岡人。父時國。本姓源氏。仁明皇帝之裔。母秦氏。嘗愛無嗣。禱于佛神。一夕夢吞削髮刀。有身。自爾心柔善。體無憊絕。酒肉歸三寶。於崇德天皇御宇長承癸丑二年四月七日午時誕。時紫雲覆屋。奇香滿室。又白旛兩首自天而降。懸於庭前。掠樹鈴聲鳴。空光彩奪目。因呼爲兩旛掠。至今猶多異。師爲質頭圩。而稜眼黃而光。自稚齡動輒西向欽敬。又自稱名勢至。故號爲勢至丸。聰慧超倫。有老成風。九歲父被寇害。師以小弓矢射寇。因又以小矢兒呼之。是年投本州菩提寺觀覺。受學。慧敏利。有一聞千悟識。覺悟其

器。送至台山源光之所。途中偶逢法性寺關白忠通。公。公停車致敬。從者訝之。公曰。小童目光射人。知必非凡流也。既登山源光曰。此良驥也。豈朽索所不能羈哉。乃俾謁台宗哲匠皇圓于功德院。圓大喜曰。吾昨夜夢滿月入室。豈非先兆歟。遂納爲弟子。削髮受戒。時師年方志學矣。未及千日。通受台教。晨夕熏練。究其壺奧。圓以台門棟梁期之。而師不念榮名。固心出離。十八歲遁蹟黑谷。師事睿空。稟圓頓大戒。嗣其正統。又傳瑜伽祕法。每好學。不倦。八宗典籍。迎刃而解。欲質自所蘊。嘗與睿空論圓戒體。又謁藏俊。談唯識。謁寬雅。談三論。謁慶雅。談華嚴。四師咸嘆曰。妙解天發。臨於師承。還呈二字牒。執弟子之禮。或附以祕典。或每年贈供。又從中川實範。受祕密灌頂。範深欽其德。於鑑真和尚相承戒作授受之儀。以師禮待之。師嘗曰。我於教外。心要有所自得。而恨無明師可取決耳。嘗在黑谷讀華嚴。有小青蛇盤經案下。門人法蓮見而畏之。

隨_レ道隨_レ來其夕夢_二大龍_一、人語曰我是華嚴護神也、幸勿_レ復_レ畏_レ也修_二法華三昧_一、則感_レ普賢菩薩乘_二白象_一來證_上、與_二容空及西仙_一同入_二此三昧_一之時亦山王大權現_レ形而護衛。又每_レ入_二密觀_一有感_二蓮華羯磨寶珠等之瑞_一、師嘗自_レ曰我讀_レ書_三過義_一、趣自_レ彰_レ不用_レ勞_二思_一、故諸宗經論不_レ從_レ他而問_レ皆自得_レ旨、師五讀_二大藏_一益增_二神智_一不_レ唯精_二內典_一旁及_二諸子百家_一之書、博學強記獨_レ步當代、故時人以_二智慧第一_一稱之。而師志猶未_レ安獨於_二善導觀經疏_一尤所_レ信傾_二故_一、更閱_二之三_一過一日忽然悟_二彌陀超世願意_一、甚歡猶_レ如闍夜逢_二大明燈_一、立_二棄_レ所習聖道_一宗念佛往生_二以為_レ出離通津_一。一夕嘗於_二定中_一感_レ善導大師來授_二淨教祕訣_一為_レ之證明_上。由_レ是用_レ意益固。承安五年師四十三歲出_二黑谷_一居_二洛東吉水_一、創開_二淨土宗_一為_二第一祖_一、盛弘_二專修念佛_一及說_二圓頓菩薩大戒_一、遐邇_二四輩感服歸依_一者猶_レ如百川之朝_二大海_一也。當代諸宗匠聞_レ師所立_二皆頗識_レ之、天台座主顯真為_二僧都_一一時大會_二衆_一於大原龍禪寺、請

師論_レ義無_レ慮_二三百人實龍象蹴踏_一。其絕出_レ者永辨智一海靜、嚴明_レ遍貞_レ慶證_レ眞湛數等也。師與_レ衆往_レ復經_二一晝夜_一雖_レ問難鋒_レ起_二而以_レ無礙辨_一、一一折_レ之、於是諸師皆信伏、而顯真感_レ激之深不_レ自知_二淚零_一、手執_二香爐_一行道念佛、諸師應和聲震_二山林_一自_レ是顯真建_レ常行會_二與_レ衆念佛行道親感_レ多門天王現身擁護_一。青蓮、翠圓妙香、良快安居、聖覺高野、明_レ遍等雖_レ各首_二其宗_一深歸_二師德_一、毘_レ贊法化_二、如_レ鎮西、聖光長樂、隆寬竹谷、乘願、嵯峨、湛_レ空、白川、信_レ空、醍醐、俊_レ乘等_二者亦皆縮林翹楚也_一。咸更_レ衣扶_レ師各化_二一方_一、非_レ師德卓_レ於當世_一宗義超_レ絕_二於先代_一則安能若_レ斯哉。聖光學_二台山證眞_一擅_二化_一西海、偶_レ至_レ都聞_レ師之化盛_二以為_レ其所_一立義寧、有_レ過_二吾所解_一耶。洎_レ往聞_二念佛三重高譚_一、始服_レ師德_二且知_レ聖道之外異有_二淨土之學_一、親_レ炙_二座下_一八年盡究_二祕願_一、師喜_レ得人竭_レ誠付_レ與_二盟以證_レ之、所以世推稱_二之吉水正統_一、至_レ綿綿_二續_一流於今日_一者由_レ光公_一也。嘗高倉天皇聞_レ師道名_二特加_レ崇尚_一、詔

入禁闕受圓頓大戒、至於妃嬪公卿皆飲戒香、自慈覺大師創授圓戒於清和天皇、而後三百有餘年無復繼之者。師爲九代冢嗣、重有此盛事、自是名賢四飛、當時道俗莫不從師受戒、因稱圓戒中興之師。後白河太上法皇亦受圓戒、且屢召問法、奏對稱旨、故淳歸念佛熏練最深、嘗勅設如法經會於河東仙洞、法皇親與山門寺門諸領袖同修之、擢師爲法事之首領、師力辭之、聖旨益堅、不得已從之、對鳳辰坐第一座。蓋德重而位歸之也。又嘗有旨選兩門諸師輪講、往生要集、師亦預焉。談柄一麾、語音和雅、法皇爲之感泣、勅圖師肖像、藏于蓮華王院、天眷優渥人皆以爲榮。又南都東大寺將有事於起廢、法皇遣尙書右大亟行隆命、師司幹緣之事、師固辭更勅選門人中稱其任者、因舉重源應之。逮源入宋、師告之曰、宋國必有墨鸞乃至少康五祖肖像、汝當傳來焉。源既入國、果得五祖同幃、益知師內鑑巨測、後源請師于東大寺、供五祖像、講

淨土三經、時南都諸宗匠從師、師文化者衆矣。後鳥羽太上皇詔受圓戒、上西太后請師說戒、者一七日、有一蛇蟠門屏上、作聽法勢、至散月、自斃頭裂、衆見其神髣髴、似天似人、飛騰沖霄、修明太后宜秋大后亦皆從師受戒、至於公卿百官無不磬折傾誠、受戒念佛。若大炊左府經宗公華山、左府兼雅公野宮、左府公繼公大宮、內府實宗公等、未暇悉舉、又以武勇有聲于世者、或從而出家、或受化、往一生、不知其幾矣。藤相國兼實公夙因所致尤篤于師、嘗延之月輪殿、咨決淨業。師既出至殿前橋上、相國遂下而拜於地、落涕不能仰、良久、乃謂左右曰、上人頭上現金色圓光、足踏寶蓮、離地而行、若等見之乎。自是號爲頭光橋、相國以爲生身佛、加尊崇益篤。又請述選擇集、至今宗門用爲祕要。嘗南北之衆屢阻、專修而君臣護法堅執不允。建永元年之冬、有官女歸門人安樂、出家受戒者、上皇怒召樂譴之、且歸罪專修、時樂有高聲誦

文以忤^レ旨^上十皇甚怒令^レ刑^レ之、二年春二月竄^ニ師讚州、諸弟子告^レ師曰、雖^ニ映^出三熏^膏而譖^ニ愬^所起^元因^ニ專^修、請^レ姑^止之^レ以免^ニ其^厄也。師確^乎不^レ變^且曰我不^レ因^ニ遷^謫焉^得三化^及三海^裔、此亦朝^ニ恩^也。遂^行凡^所至^處莫^不皆^稱其^化、^レ何^上皇感^ニ異^夢、因^レ相國賴^實公奏^レ許^ニ師還^冬十二月蒙^レ詔赦^而還、但以^レ未^許輒^入都^僑居^攝之勝尾寺、經^四歲、建曆元年之夏上^皇幸^ニ石清水^一時有^ニ神託^之可^ニ甚^慎、藤光親奏^以佛^法親^妖且^乞令^ニ師入^レ都、秋七月上^皇又^夢詣^ニ蓮華王院^一有^ニ神僧^奏曰、空公德等^賢聖^益普^海內^一又^非爲^ニ故^法、皇及高倉先皇^之戒師^乎。君竄^ニ大權^一咎^同五^逆、苦報^不懼^乎。覺^而駭^之即^勅藤光親^令師入^レ洛、同年冬十一月二十日還^ニ洛^一東華頂^大谷^一緇^白觀^集宗^風益^震、至^三明年正月二日^一師稍減^レ食^而耳^目明^利勝^ニ於^平昔^一。人皆^異之^自是高^聲念佛^呼吸^相繼、雖^ニ睡^時唇^舌猶^動、弟子問^云師往^一生^必乎、師曰我素^在極樂

寧^不歸^去乎。諸弟子設^ニ彌陀像^一而乞^三瞻視^一、師以^レ手指^レ空曰更有^ニ佛現^眞身^一、若^等無^見乎。我十餘年來^累視^ニ佛菩薩^眞身^及淨^土莊嚴^而絕^不語^レ人、今已臨^レ末^故爲^ニ若^等告^レ之^耳、二十三日門^人勢觀^請述^法要^一垂^レ於^來葉^一、師手^書遺^誓一篇^卑之^世、所謂^一一枚^起請^文也。有^貴婦人^乘車^而來^與師^叙話^一久之。及^其歸^勢觀^從後^而視^不知^レ所^レ之^怪以^問、師曰此^是韋^提希^夫人、今在^ニ賀茂側^一。二十五日早^一刻高^聲唱^佛號^一敢^不少^衰、至^三午時^一著^僧伽梨^頭北面^西、誦^三光明遍照偈^一怡^然而^寂。世^一詩八十僧臘六十六。寂^{之前}三日紫雲^變覆^于房上^一奇^瑞尤^多。不^三盡^記焉^今知^恩院^此其^遺蹟^一。師尋^常課^佛名^六一萬、每月^修別^時念佛^不嘗^怠違^一而猶^能孳^孳爲^レ人^演說^一、逮^老增^至三^七萬^一高^聲相^續不^舍晝^夜、有^人問^法則^但低^稱以^示有^聞耳^一。終^無三^爲答^也。其^勇猛^精進^若此^嘗發^得念^佛三^味屢^感勝^相、西方^三聖^及寶^樹寶^地寶^樓等^莫不^隨意^現前^一。手^自

記之沈於祕篋。或夜分見聖教兩眼放光不用燈燭，又一夕念佛，身光灼燦，充塞于房，門人法運湛空等親見之。師暗洩本地密因，隨機不同。但爲勢至應迹，其證尤多。嘗於靈山寺，現勢至身，又門人勝法圖師像，請贊爲書，勢至圓偈與之。在讚州生福寺，時手刻勢至像，作一偈密藏焉。有法然本地身大勢至菩薩之句。又門人直聖嘗詣熊野山，偶嬰疾，聞師選譎，意欲迅歸而禱之。夢大權現告曰：汝命將不久，不宜歸去，法然上人爲勢至菩薩應身，汝勿慮也。夫如此之事與爲兒時自稱勢至符契。師晚年法久弊起，因著教誡文七條，普制門人，又在勝尾，日有賈徒，勃與邪義，僭稱師承，惑亂京夷，因著誓誡一章，痛責其邪畫，師生平所著和字漢字之文有許多卷，皆見行于世。

又「相記」滅後遺德，園城長吏公胤始深嫉師，著「淨土決疑三卷」，破「選擇集」贈之師所，師纔見，輒辨其非，胤聞而媿密火之。師滅後門弟等爲師追修齋七法會，

時胤來請爲其唱導師，人皆怪之，胤登高座對衆，曰：弟子嘗亟決宗要於上人，足以稱門弟，雖燒書謝妄，破之過，而謗罪恐深，披心懺悔，聖靈昭監，涕淚甚下，一衆無不爲之感泣。不梅，尾明惠亦甚嫉師，著「摧邪輪及莊嚴記」，破「選擇集」，遣弟等競詰難之，後管宰相爲長調，惠問之，惠曰：子嘗妄破「選擇」，後知其非，故甚悔焉。又禪林寺靜通欲破「選擇」及「先詳閱」之，始知末法機宜偏在念佛，遂詣師廟，懺謝謗罪，且曰：始從今日，以上人爲師，念佛爲行，還著「續選擇」，翼贊師義。又畏沙門堂法一印明禪亦嫉師弘化，終不聞提誨，滅後遺弟信空附「選擇集」，令見禪見之改悔，因著「書勸人」，其略曰：始讀「選擇」，一過而無辨，是非，再讀之以爲義，有偏執，三之稍覺，其有深旨，洎數閱之大生信根，蓋古今諸師弘念佛者多，而爲人甚信甚謗者，獨歸空公，其故何也？惟依以一向專念爲宗也。不立斯宗，何信何謗，已越常人之義，甚信也，宜

矣。又逆常人之耳。甚謗也。宜矣。諸師未嘗有唱此義者。以故若其爲失其實。甚。若其爲得其亦大。然從師之化。已得往生者。廣聞四遠。其爲得也驗矣。公胤靜遍明禪。皆自行化他。以專修爲要。臨終現瑞。已得西邁。又嘉祿三年夏六月。台徒定照者。嫉妬特甚。作彈選擇。破師義。遣弟隆寬著願選擇救之。其言甚激。照大怒。令山徒蜂起。將毀師廟。辱其屍。平時氏馳兵禦之。其夜遣弟相議。始開三石龕。奇香芬馥。面容怡然。示寂。以降已經二十有六年。全身儼然。可驗爲得道之聖也。緇白兵士千有餘人。衛護遺骸。夜中移之西郊。明年正月二十五日。茶毘毘西山粟生野。時異香熏發。紫雲垂于松樹。因傳號紫雲松。建堂於茲。長行念佛。今光明寺是其遺跡也。

時昔聖覺隆寬勢觀等。諸弟子各爲師作傳錄。自所視聽。師滅後九十餘年。台山功德院法印舜昌和尚蒙。後伏見太上皇勅。搜駁諸傳。集成一部。以上進慎請天

裁。上皇喜甚。勅附以畫圖。加旃。伏見法皇及太上皇親御宸翰。書其傳文。尊圓親王及公卿善翰。亦書之。分爲四十八卷。是世之所稱勅集御傳也。自諸師傳以來。未有如斯盛者。爲聖君所追慕。若此。因勅補舜昌於知恩院別當。又賜繪詞傳。藏之干寺。以爲宗門萬代龜鑑。其傳本見存本山。大師生平道跡。滅後遺德詳載其中。茲不可略。略紀其大槩耳。又經二百八十有餘年。後柏原天皇御宇。勅賜額開山堂。諡光照大士。示寂以降。至今四百八十有六年。因大護法征夷大將軍奏之。丹輝。茲年元祿丁丑之春正月十有八日。賜勅使於本山鼻祖影堂。諡圓光大師。旌其德功。佛日重輝。祖風增熾。四衆歡呼。聲震山谷。華夷接響。咸唱萬歲。伏願。叡筭與日月俱懸。寶祚綿昌。台齡與天地齊固。武運長久不圖。遭斯盛際。實千載一時也。因不耐感激。粗錄大師化儀之顛末。以廣之門葉云爾。

元祿丁丑十年正月二十五日

本山知恩教院四十二世白譽秀道謹誌

推薦のお言葉

東京大学名誉教授
学士院会員文学博士

辻 善 之 助

井川定慶君の編著「法然上人伝全集」がいよ／＼完成して出版の期まさに近きにあらんとす。学界教界の慶事といはねばならぬ。君が編輯の手ぎわに至つては、知恩院史の著よく之を証明する。殊に近頃新発見の資料は、永享の古写鈔を始め其他諸本餘す所なく之を収録し更に各伝について精密な解説研究を添へてあり実に全集の名にふさはしいものである。敢て江湖に推奨する所以である。

京都大学教授
文学博士 塚 本 善 隆

畏友井川君は法然上人の信仰にいきる法然上人の研究者である。少くとも私の知る限りに於て、君ほど上人伝のすみ／＼まで頭にたたきこんで上人と共に生きつゞけて来ている人はない。三十年近くも昔、京都大学の学生時代に君は既に一かどの法然学者であり、而かも研究目標をこゝにおいて、「法然」とさへ聞けばどこへでも飛んで行つて片言隻句の資料をも捜る法然マニアとして私共の間に別格の存在をなしていた。川

崎家所蔵の法然伝を探ぐり出し、これを調べる機会を得た時の君の喜びようと熱心さ、私もそのそば杖をくつて神戸の川崎家で有り難い眼福を恵まれ乍ら調査を手伝つたことを思ひ出す。此の久しの法然学者が、八百年昔の法然上人を今日に再生せしめずにはおかぬとの熱誠から、刊行する「法然上人伝全集」、これこそ私共が心から瞻仰する学友の尊い記念塔であり、必ずや無数の学徒や求道者が限りなく恩恵をうける泉となるに相違ない。尙ほ編者の簡明な解説と多年の研究成果も併せて世に出づることであつて、此の万人に提供せられた「全集」によつて、更にまた各方面からの新しい法然研究が進められるであらうことに、私は二重の喜びを感じるものである。

京都大学教授 小葉田 淳
文学博士

井川定慶師は三十年来法然上人伝の研究に全力を傾注されて来たといつてよい。四十八巻伝をはじめ各種の上人伝を網羅して餘すところなく、その解説は最も信頼すべきものと考へる。私も早く一本を座右に備えるため上梓の日を鶴首して待つてゐるものである。

大本山増上寺法主 椎尾 辨 匡
文学博士

戦災以来典籍欠乏勝ちの折、祖伝宗史に御精通の井川定慶君によりこの運びを見ることは大方の至幸と申すべくひろく購読再研されます様お勧め申上げます。

真宗高田派本山
専修寺法主
常盤井堯祺

こちらの宝庫から先年「法然上人伝法絵流通下」が発見された時にも井川定慶氏より明快な論文を「唯信」誌に頂いたことがある。此の度び法然上人のあらゆる伝記を一本にまとめて夫々に解説を付して公表せられると聞く、大いに期待して止みませぬ。

中外日報社主
真溪涙骨

法然上人伝全集、集解に当られるを聞き先ず「最適」を感ず。入念、上梓なるの日を期待します。

国立東京博物館
文学博士
石田茂作

浄土宗の家に生れ、私の祖母も両親もその熱心な信者であつた關係上、子供の頃から毎年の御忌会には必ずつれて行かれ、そこで法然上人御伝について幾度か聞かされた。当時幼心に聞いた断片的な御伝が何に基いたものであるかは知るよしも無いが、其の後法然上人には勅修四十八巻伝を初め諸種の御伝があると聞き、それらと比較対照して見たいと思つた事も無いではなかつた。然し私にはそれをする根気も暇もなかつた。今度畏友井川定慶師による法然上人伝全集の刊行を見るに至つた事は、師の永年に亘る不撓の精神と不断の努力の賜であつて、私自身の喜びは云うまでもないが、それは又宗を越えたこの不世出の大宗教家を広

く紹介する意味において、汎人類の福音とも云うべきである。

大阪市立大学教授 望月信成
美術館長

今度井川定慶氏が法然上人の伝記を悉く集めて上梓せられると聞き、誠に慶事と云はなければならぬ。日本の宗教史、文化史、美術史上に於ける法然上人伝の持つ役割は極めて重要である。特に私の研究分野の一である絵巻物の中で法然上人を取扱った絵伝が圧倒的に多種類である。そこで是等を集大成されるならば吾人の研究にどれほど利便であらうか。

井川氏は多年、上人伝と取組んで検索を襲ねて、遂に其の成果を得て今般の美挙となつた。その中には最近発見された新資料も収録されてをり、洵に上人伝全集としての完璧である。加之、出版事情の必ずしもよろしくない今日、よくも此程の豪華版を公刊せられるのは、稲葉健次氏の浄財喜捨もさることながら、満腔の敬意を表さざるを得ない。宗教家、浄教篤信家、文化研究家は勿論、何人も一本を備へられることを希望してやまない。

仏教大学々長 高島寛我

多年法然上人伝を研究せられたる著者が今回諸縁具足して広く上人伝を網羅し且つその研究を加へて公刊せらる。これに依りて教学界の裨益を受くるところ甚大なるを信じます。

西山大学々長 森 英 純

近く法然上人の七百五十回忌を迎へるに丁り祖伝研究の権威井川定慶先生により上人伝全集の出版ありと聞く。洵に時と人とを得たる企てと景仰する。

大正大学教授 石 井 教 道
文学博士

聖者の思想信仰を知るには先づその正伝を確める必要がある。然るに元祖法然上人ほど伝記の多いのは恐らく他に類例がなからう。今回幸ひにして井川君によつてあらゆる種類の伝記が一本にまとまるらしいが、今後の宗学研究に多大な便宜を得ることであらう。

竜谷大学名誉教授 禿 氏 祐 祥
文学博士

我国の絵画史上に於ては絵巻物が重要な位地を占めて居り、而して高僧大徳の伝記で絵巻物になつて居るものも少くないが、その中では法然上人伝の絵巻は勝れた名作と多種多様のあることで群を抜いて居る。処がこの度び法然上人の伝記として遺存するあらゆるものを取りまとめ一本とし刊行されると聞き実に喜ばしい。編者井川定慶君は多年に亘り上人伝の研究を續けて居られるから吾人の期待は多きく、また広く世に歓迎される事を確信する。

大谷 大学 教授
文 学 博 士
三 品 彰 英

今から二十数年も以前のこと、私が京大史学科の学生の頃、先益の井川定慶氏と研究室で顔を合わせる機会が多かったが、その時から私はこの先輩に法然上人伝研究の権威者として敬意を表していた。爾来今日まで研究誌上や研究会の席上で氏の同テーマに関する見解を聞くこと一再でなかつた。そうした長年月に亘る研究の内の一成果として今度法然上人伝全集が同氏によつて集解されるに至つたことは同慶に堪えない。学界における誰よりもこの事業には適任者であり、井川氏の法然上人伝ならば最高のものであることは自他ともに許すところであろう。日本文化に関心を有するものは、仏教者と否とに拘らず法然上人に思いを致すべきであり、こゝにこの全集の占める文化的意義は大きい。私は儀礼的な推薦文ではなく、この出版を慶賀するとともに、宗教界学界をはじめ広く読書人に本書を推し度い。

自 跋

浄土宗の寺庭に生れ育つた私は幼い時から法然上人の恩沢を身心に浴してゐる。史蹟と伝承に富む大和の郷土は自づと私をして歴史に感興を深からしめたであらう。畝傍中学校、仏教専門学校を経て京都大学文学部史学科で国史を専攻し、三浦周行、喜田貞吉、西田直二郎の諸先生の御指導を受けつゝ日本浄土教史に研究題目を求めて進んだ。業を卒へた翌秋から京都大学嘱託として近衛公爵家寄託文書を整理することになつたが、九万何千点の中から永享九年古写の法然上人伝や浄土宗五重血脈、当麻曼陀羅縁起、其他今までに知られてゐない新史料の幾多を見出したけれども、三浦先生との口約で其の発表を差控へて来た。

其の頃、知恩院山内信重院を会場として浄土宗義研究会が殆んど毎月開催され、当時の若輩私も時折研究を発表する機会に恵まれてゐたが、会の長老伊藤祐晃師は法然上人伝に関する従来の定説を破つた論考を屢発言せられた。私は其の議に賛同もしたが時にはまた反駁を加へてお互に激励し啓蒙しあつたものである。

大正十三年の十一月の例会の時であつたらうか、先輩江藤澂英師が一本の絵巻を持つて出席せられた。外題は無く内題に「法然聖人絵」、奥書に「黒谷上人 釈弘願」と認めてゐる。糊離れが甚しくて充分開いて見られなかつたが、ちらと見るところ今までに見聞せぬ記事があることに私は気付き、江藤師の厚意に甘へ

て一夜拝借することにした。華頂繼志学寮に戻つて一巻の詞書全部を書写し絵は概略心覚えに見写したが、実に珍らしい。安楽房を日本第一の美僧と言ひ、女犯らしいところまで描写してゐる。かゝる記述は浄土宗全書にも、真宗の典籍にもないのみならず、全体として新奇の絵伝であることを確認した。東の窓から曙光がさして来たが眠くは無かつた。翌日も翌々日も内容を吟味し他伝と比較し同異点を図表にもつくり、其の上で一文をまとめ三浦先生に報告したところ大へんおほめに預り「それは新史料であるから早速学界に発表せよ」との仰せを蒙つた。是れが法然上人伝研究に熱心になる動機であつた。

此の「法然聖人絵」は其後谷川茂次郎氏の篤志により知恩院の所蔵に帰し国宝に指定されたけれども、惜しいかな残欠本である。此の種一連の絵伝がどこかに伝世してゐるであらうと其の詮索を怠らなかつた。そして偶ま藤懸静也博士（國華）や沢村専太郎先生（長春閣鑑賞）の「法然上人伝攷」に誤謬ある点を指摘することにまつた。餘り熱心に法然伝を探してゐることが内藤湖南博士の耳に入り、神戸川崎武之助氏の「法然上人絵伝」三巻を特に拝覽するの御照会を得たが、それが探し求めてゐた「法然聖人絵」（弘願本）の初めの三巻であることをつきとめ「朝日新聞」に法然上人伝専門家の発見と大きく報道されてから一層私自ら上人伝研究と資料の蒐集に邁進する決意を固めしめし、また其後二、三の上人伝を発見することを得たのである。

而して昭和六年六月から知恩院史を編纂する主任の席につき、翌七年四月には法然上人降誕八百年記念法

要が浄土宗各本山で厳修せられる記念事業の随一として恩賜京都博物館に於て「法然上人の肖像画と絵伝の特別展」が開催企画されるや、私は東奔西走して此の機会に当時知られている繪べての絵伝を一室に蒐集することに成功し、当局よりは感謝もせられたが自分としても亦実物に親しく接する此上なき好機であつた。

尙ほ望月信亨博士の「醍醐本法然上人伝」と黒板勝美博士の「明義進行集」との発表は法然上人伝研究に一段の助成となつたことも特記せなければならぬ。

かくて昨秋、突然従弟の稲葉健次君が訪ね来り一別以来の懐旧談から転じて私の古い著書を此の際再版印行せよと勧めるのであつた。私は一往お断りしたが同君は更に勧めてくれる。そこで私は言つた。折角出版費を援助してくれるならば私が三十年來手塩にかけて集めもし、研鑽も重ねている法然上人伝の全集出版をお願いしたい。而かも近く上人の七百五十年の大遠忌を迎えるに丁り末徒として敢行すべき一業である由を付言した。

稲葉君は生後一年半にして母ち多（私の叔母）に死別して其の面影をさえ追憶出来ないのである。年少の頃より繊維業界に奮闘し努力して今や大阪船場に於て確乎たる地位を築くに至つたが、見知らぬ母が一入甚わしく、健生院心誓貞操智慧大姉追善菩提の爲めにとて浄財を出して完成させようと確答してくれたのである。私はほんとうに嬉しかつた。或は感泣していたかも知れぬ。

そこで印刷出版の事務に堪能なる綜芸舎齋田嘉一郎君の斡旋を得て予算は立つた。私は原稿の整理にとり

かゝり、稻葉君は早速巨万の出資をしてくれて印刷行程は進捗した。然し古典の活字組版は予想外に時日を要し、予定の七月末限校了、八月製本が気にかゝつたので、私は急ぎ旧知の天理時報社長岡島善次先生に縫り、柳瀬課長の同意を得て本伝第三集二百余頁の組版をお引き上げ頂き大いに救われたわけで、深く感謝している。

本書の発行企画なるや中外日報は厚意ある記事を掲げて陰に陽に助成して頂いた。また塚本善隆、禿氏祐祥両博士は慈愛の籠る助言を与えられ、辻善之助、椎尾弁匡、小葉田淳、三品彰英、真溪淚骨、高昌寛我、森英純、石田茂作、望月信成、常盤井堯祺、石井教道の諸先生は過分の推奨と激励の辞を寄せらる。

而して恩師元京都大学総長羽田亨博士は題簽、知恩院門主岸信宏殿下は題字、西田直二郎博士は序文をものせられた。堂本印象画伯は装画を快諾せられ急に渡欧の旅に上られたが御心にかげられバリから「上人の一枚起請文御執筆」画稿を航空便にて届けられ、装面に姿せられた。共に深く感謝の意を表したい。

また同学田村円澄君が史料抄録に尽力下さつたことを深く感謝したい。

終に一言お理り申上げたい。本書は最初三篇に分ち、前篇本伝——これに第一集勅伝、第二集伝法絵、第三集雜と抄を収め、中篇解説に於て各伝の解明と論考とを尽し、後篇には法然上人行実を年代順に出拠を明示して事項を列ねた年表と、総索引とを付して千頁の予定であつた。処が前篇本伝のみで千頁に垂んとするに至つたために中、後の二篇は引き続き別刊することにした。御諒察を乞ふ。再版、三版の際に或は合本とな

るであらう。

尙ほ知恩院当局が終始厚意を示されたこと、法然上人伝所蔵の各位が、本文収録並に写真の掲出を御承諾下されたことは感謝に堪えないし、本書出版予報に依じて早速予約納金下さったことも忘れることの出来ぬ御芳志である。誌して甚深の敬意を表する。

昭和二十七年孟蘭盆の日 泉陽綾井郷城蹟山尊称精舎に於て

知恩院長老司教講師 井 川 定 慶 謹誌

あとがき

去る昭和二十六年晩夏に故稻葉健次君の篤志に感動させられ、其れまでに蒐集していた元祖法然上人の新舊諸傳と史料拔萃とを整理して『法然上人傳全集』を出版することを決意し、翌年初秋に刊行してよりはや十五年を閱みしました。其の間に元祖法然上人七百五十年遠忌大法要が祖山知恩院に於て奉修され、「和順」の大師號が加謚されました。丁度その昭和三十六年三月に豫ねて約束していた上人諸傳の解明（本傳全集の中篇）と、上人に關する年表、本全集の索引、上人關係の國寶と重要文化財目錄（本傳全集の後篇）との二篇を一冊にまとめ『法然上人繪傳の研究』と題して別に上梓し七百五十年大法要中の知恩院本堂安置の祖師御影前に新刷本を獻上することを得ました。

折りしも舊學位令の廢止直前に際し、恩師京大名譽教授西田直二先生から懇切なお勧めがありましたので仰せに隨つて京都大學へ前記の『法然上人繪傳の研究』を學位請求の主論文として（副論文に此の『法然上人傳全集』と他四篇を）提出しましたところ、文學部赤松俊秀、長尾雅人の兩教授の審査を経て翌三十七年三月三十一日付、京都大學より文學博士を授與されました。

偕て本傳全集初版は過去十五年の間に福井康順博士の御厚意により早稻田大學大學院、また大正大學

及び佛教大學等に於て教科參考として採用され、宗の内外よりも要望されて遂に品切れとなりましたが今尚ほ諸方より所要照會をうけています。巷間傳ふるところ古書即賣會で、随分高價で取引されているといふことです。高價は私の素意ではない。なるべく安直に祖傳を普及させたいのが最初からの念願でもありますので今回も篤志御出資を仰いで茲に再版することにいたしました。

ところで初版の口繪に掲出しました原色並に單色の銅版は既に腐蝕して使用に堪えなくなりましたことは誠に遺憾の極みですが詮方なく省略し、其の代りに出版後に京都東寺寶善提院で榎田良洪博士が新しく發見された『知恩講私記』を同學三田全信君の御厚意によつて寫本を手に入れたものと、初版に加え得なかつた『明義進行集』、そして『圓光大師略傳』を増補して聊か責めを果たすことにしました。

最近大阪市立博物館の所藏になつた『法然上人繪卷』（假題）に見る簡略な説明書は祖傳詞書としては不充分で京都知恩院所藏の『七幅繪傳』、新潟市及び岡崎市周邊の二、三眞宗寺院で發見されている諸傳の「札銘」と關係があるようですが本集におさめることを割愛し、是等一連の諸傳に就ての同異對比の検討は別の機會に譲ることにいたしました。

本全集再版に際し、堺商工會議所會頭吉田久博氏（先代定七―誠心院現譽惠順禪定門、生母滿田あい―淨池院蓮譽妙薰大姉、次女文子―香譽良文女孩的の追善）、堺市島野工業KK社長島野尙三氏（亡父庄三郎―天光院雄譽自尊長暉居士の追善）、堺市南清水町山内一夫氏（亡妻やすの―眞光院至譽誠心安清

禪定尼追善)、西宮市中坊升氏(瑞龍院德譽大安壽正居士、光台院蓮譽妙華常壽大姉兩親追善)、泉大津市の元市長納谷長三郎氏(最乗院勝譽勇進法道居士―父上三十三回忌、成就院神譽妙通智光大姉―母上七回忌追善)、大阪市曲川醬油KK社長堀久之助氏(慈現院積尼智蓮―亡妻追善)、泉大津市安樂寺の常住隆寛師(先住常住孝詮上人莊嚴淨土)、泉佐野市上善寺谷章運師(先住谷性運上人莊嚴淨土)、畏友鎌倉大佛の佐藤密雄博士、東大阪市枚岡重願寺の山口眞誠師より多額の淨財を寄せられ、また上宮學園長小林大巖先生、東山學園長藤原弘道先生よりは激勵と御支援を給い、専称寺総代世話人達の御賛助等各位の御厚意を衷心より感謝いたします。而して是等の善意によつて購置下さる方の御負擔を幾分なりと軽く出來ましたことを自ら悦ぶ次第であります。

昭和四十二年孟蘭盆聖日 華頂會下

知恩院宿老 正僧正司教已講 文學博士 井川定慶 謹誌

昭和二十七年九月一日 印刷
昭和二十七年九月十日 初版發行
昭和四十二年九月一日 增補再版

編集兼 井 川 定 慶
發行人

京都市下京區西洞院通七條南

印刷者 內外印刷株式會社

代表者 坂 本 起 一

不 許
複 製

頒布所

大阪府濱寺局區高石市饒園二丁目 專稱寺內

法然上人傳全集刊行會

電話界 01 一八九〇番
振替大阪三六二八二番

法然上人繪傳の研究

文學博士 井川 定慶 著

菊版三〇〇頁 定價 千圓 送料 百十圓

法然上人傳全集の續篇で、先づ解明篇では第一章別傳、部分傳、日記類と年代記、第二章傳法繪、第三章弘願本、第四章古德傳、第五章勅傳、第六章掛幅裝、第七章除録と分けて詳細に論考し、後篇に法然上人傳年表、傳全集の索引、上人關係の國寶・重要文化財目録をおさむ。

この一冊さえあれば法然上人傳が容易に知得出来る便利な書物である。昭和三十六年三月京都大學へ學位請求した主論文で、翌春文學部教授會を通過した著述である。

大阪府濱寺局高石市綾園二 專稱寺内

法然上人傳全集刊行會

電話堺 〇一八九〇番
振替大阪三六二八二番